鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　22

平成17年度発掘調査報告

（第２分冊）

極楽寺旧境内遺跡
西ノ台遺跡
公方屋敷跡
光明寺旧境内遺跡
若宮大路周辺遺跡群
浄妙寺旧境内遺跡
若宮大路周辺遺跡群
下馬周辺遺跡
若宮大路周辺遺跡群
米町遺跡

平成18年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　22

平成17年度発掘調査報告

（第２分冊）

極楽寺旧境内遺跡
西ノ台遺跡
公方屋敷跡
光明寺旧境内遺跡
若宮大路周辺遺跡群
浄妙寺旧境内遺跡
若宮大路周辺遺跡群
下馬周辺遺跡
若宮大路周辺遺跡群
米町遺跡

平成18年３月

鎌倉市教育委員会

公方屋敷跡

永福寺跡

ごあいさつ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和59年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ6割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成11年度及び平成14・15年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅等の建設に伴う発掘調査の記録として15ヶ所の調査成果を掲載しています。特に今小路西遺跡（地点⑤）では木組みの護岸施設をもつ池跡や掘立柱建物跡が良好な状態で発見されたばかりでなく、奈良・平安時代にまでさかのぼる溝跡や土壙が発見され、この地域一帯における中世以前の様相を窺い知ることができ、大きな成果をあげることができました。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申しあげます。

平成18年３月31日
鎌倉市教育委員会

例　言

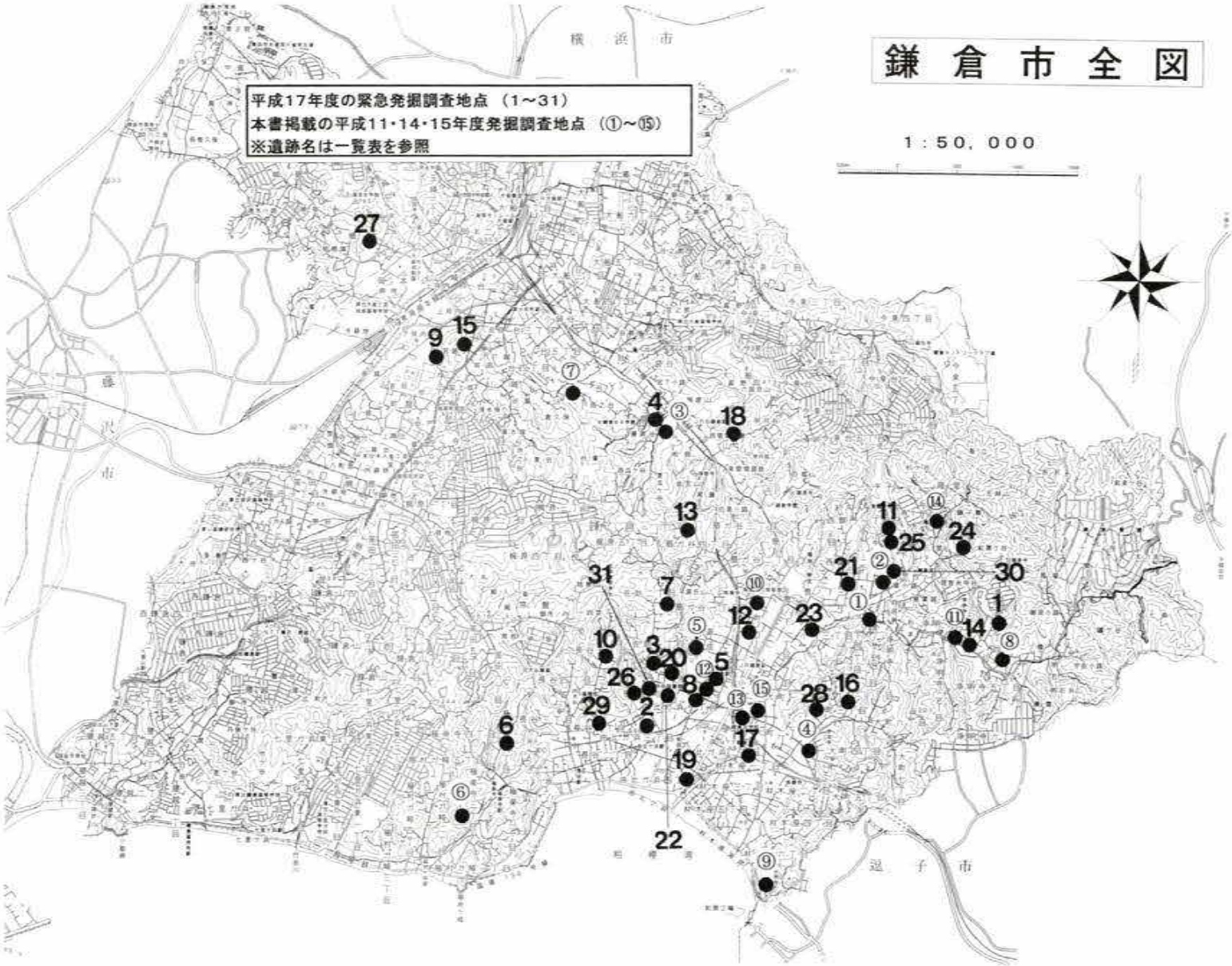
1　本書は平成17年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（第１分冊及び第２分冊）である。

2　本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び目次のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。


鎌倉市全図
1：50，000
平成17年度の緊急発掘調査地点（1～31）
本書掲載の平成11・14・15年度発掘調査地点（①～⑮）
※遺跡名は一覧表を参照
横浜市
藤沢市
逗子市

極楽寺旧境内遺跡（No.291）

極楽寺三丁目358番外地点

例　言

1. 本報文は、極楽寺旧境内遺跡（No.291）の所在する遺跡内、極楽寺三丁目358番外地点における個人専用住宅（地下室）建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成14年12月2日～平成15年2月6日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査体制は、以下の通りである。
   調査担当者：原　廣志
   調　査　員：太田美智子、須佐仁和、早坂伸市、久保田裕美、中川建二、本城　裕
   調査補助員：栂岡渓音、宇都洋平（鶴見大学生）
   調査協力者：荻野　勲・佐藤美隆・中路正弘(社)鎌倉市シルバー人材センター
   協力機関名：(社)鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所、東国歴史考古学研究所
4. 本報の執筆は、第2章を宇都、第1・3章を原がそれぞれ分担執筆し、第4章については調査員協議のもと原が稿を草した。挿図作成は太田・久保田が行い、法量表作成を宇都が行なった。
5. 本報掲載の写真は、全景・個別遺構を久保田、出土遺物を須佐(仁)が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は、以下の通りである。
   ・図版縮尺　全測図：1／100
   　　遺構図：1／40
   　　遺物図：1／3
   ・遺構図版　遺構のレベルは海抜標高の数値を示している。
   ・遺物図版　-·-·-は釉薬の範囲を示す。黒塗りは燈明皿に付着した油煙煤を表現している。
8. 現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご援助を賜った。記して感謝の意を表します（敬称略、五十音順）。
   秋山哲雄、大三輪龍彦、岡　陽一郎、小野正敏、河野眞知郎、菊川　泉、小林康幸、斎藤慎一、佐藤仁彦、汐見一夫、宗臺秀明、宗臺富貴子、田代郁夫、玉林美男、塚本和弘、継　実、手塚直樹、福田　誠、松尾宣方、馬渕和雄

目　次

本文目次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境
1.遺跡の概要 ……5
2.調査地周辺の調査事例 ……7

第２章　調査の概要
1.調査の経緯と経過 ……9
2.測量軸の設定 ……11
3.層序と生活面 ……11

第３章　検出遺構と出土遺物
1.第1面の遺構・遺物 ……14
2.第2・3面の遺構・遺物 ……17
3.第4面の遺構・遺物 ……19
4.第5面の遺構・遺物 ……21
5.第6面とトレンチの遺構・遺物 ……22

第４章　ま と め ……30

挿図目次

図1　調査地点と周辺遺跡 ……6
図2　グリット設定・配置図 ……10
図3　調査区北壁・南堆積土層図 ……12
図4　第1面全測図 ……14
図5　第1面土壙1～4 ……15
図6　第1面土壙2～4・遺構外出土遺物 ……15
図7　第2面全測図 ……16
図8　第3面全測図 ……17
図9　第2・3面出土遺物 ……18
図10　第4面全測図 ……19
図11　第4面上・砂鉄層中出土遺物 ……20
図12　第5面全測図 ……21
図13　第5面溝1 ……22
図14　第5面溝1・面上出土遺物 ……23
図15　第6面全測図 ……24
図16　第6面土壙1 ……24
図17　第6面溝1・2 ……25
図18　第6面土壙・ピット・その他出土遺物 ……26
図19　第6面溝1出土遺物 ……27
図20　第6面溝2出土遺物 ……28
図21　各トレンチ全測図（岩盤） ……29

出土遺物法量表

表1.出土遺物法量表（1）……31
表2.出土遺物法量表（2）……32
表3.出土遺物法量表（3）……33

写真図版

図版1－ a.第1面全景（西から）　b.第2面全景（西から）　c.第2面全景（南から）……34
図版2－ a.第3面全景（南から）　b.第3面斜面検出状況（東から）　c.第4面全景（南から）
d.第4面斜面検出状況（東から）　e.第4面斜面検出状況（北から）……35
図版3－ a.第5面全景（北から）　b.第5面遺物出土状況（常滑鳶口壺・かわらけ）
c.第5面溝1 ……36
図版4－ a.第6面上全景（北から）　b.第6面上溝1　c.第6面鉄分溜り（東から）
d.土壙1遺物出土状況 ……37
図版5－ a.第6面下全景（南から）　b.第6面溝1（北から）　c.第6面溝1（南から）
d.第6面下北トレンチ（岩盤確認状況）　e.第6面上南トレンチ（岩盤確認状況）
f.調査区北壁土層堆積 ……38
図版6－ a.第1面土壙2　b.第1面下～第2面・第2面下～第3面　c.第3面下～第4面
d.第4面砂鉄層中 ……39
図版7－ a.第5面溝1　b.第4面下～第5面　c.第6面溝1　d.第6面溝2
e.第6面土壙・ピット・第5面下～第6面……40

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の概要

極楽寺旧境内遺跡（No.291）は、江ノ島電鉄極楽寺駅から南西方向に300m程のところで月影ケ谷に位置しており（図1)、地番は鎌倉市極楽寺三丁目358番外である。

極楽寺旧境内遺跡の名称の由来となった極楽寺は霊鷲山感応院極楽寺と号し、真言律宗西大寺末にあたる。『極楽寺縁起』には、正元元年（1259）に北条重時が良観房忍性にそれまで一老僧により営まれていた極楽寺という小寺を律院とするために相応しい場所について諮ったところ当時地獄谷現在地一帯に大伽藍を建立したと伝えている。しかしながら、発願者の重時は弘長元年（1261）に没してしまったためにその子の長時・業時らが重時の意志を継ぎ完成させたと云う。実際に寺容が整ったのは泉ヶ谷（現在の扇ヶ谷）の多宝寺から忍性が極楽寺に入寺した文永4年（1267）以降と考えられる。極楽寺伽藍の隆盛を伝えるものとして、室町時代に作成されたものという『極楽寺境内絵図』があり(鎌倉国宝館1968)、そこには金堂・講堂・塔・方丈などの主要伽藍の他に四十九の支院の存在が知られる。この絵図によれば、今回の調査地点の位置する月影ヶ谷には、前方に法蔵院・無常院・薬湯寮がみられ、谷戸の最奥部には月影地蔵四王院が描かれている。さらに調査地の谷戸内には冷泉為相の母、阿佛尼（？～1283年）が京都から領地相続争いの問題で訴訟のために鎌倉へ来訪した折りに一時、住んでいたことでも知られる。『十六夜日記』には「浦ちかき山もとにて風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすごくて、浪のおと、松の風たえず」と書き留めている。また極楽寺は幕府との関係も深く和賀江島（飯島津）や前浜の管理・管轄しており、関料を徴収するなどして莫大な利益を得ていた。

極楽寺は建治元年（1175）三月二十三日に火災が起き、堂宇ことごとく焼亡したが、忍性が旧観に復したという。旧境内中心部にあたる稲村ヶ崎小学校の調査地点(大三輪・玉林・木村1980)では、新旧二種に大別される多量の瓦類を出土したが旧相の一群には二次焼成を受けたものが多く含まれ、この時の火災を物語る資料と考えられている。その後、正和元年（1315）には十三重塔、元亨元年（1321）に金堂がそれぞれ建てられた。元弘三年（1333）の建武中興に際して後醍醐天皇の勅願寺となり、寺領安堵を受けている。室町時代となってからも代々の鎌倉御所の外護を受け、鎌倉有数の大寺院としての地位を保っていたが、応永三十二年（1425）と元亀三年（1572）の二度にわたる火災や、永亨年（1472）に起きた震災により伽藍が相次いで損失し、その後の復興もままならず衰退の一途をたどつたようである。寛政十年（1572）沢庵宗彭が極楽寺を訪れた際には「壁はおち、堂のいらかやふれ、むな木たをみ…」という状態の荒れ果て疲弊した様子が伝えられている。また大正十二年（1923）の関東大震災では山門大破、本堂半壊、客殿・庫裏・方丈など全壊している。現在、堂宇こそ少ないながら盛時を伝える文化財の数は多く残されている。

ところで、鎌倉は三方を山に囲まれた要害の地であり、鎌倉と他地域との往来は鎌倉七口と言われる切通により結ばれている。本地区はその一つである極楽寺切通しが位置しており、北条重時の山荘が所在したことが知られる。執権北条氏における鎌倉の防衛策は、七口切通し付近に外部から敵進入を防ぐために北条一門の別邸を配するものであった。すなわち、常盤には北条政村・義政の別業、大仏坂の大仏氏の屋敷、山ノ内荘の北条泰時邸、六浦荘の金沢氏の別邸、名越の名越氏別業の屋敷などがそれにあたる。さらに極楽寺周辺には、「一升桝」や「五合桝」などの軍事的な施設を思わす遺構が残されており（鈴木・桝渕・松尾ほか2001、13地点：福田・原ほか2003)、新田義貞の鎌倉攻めにおいて稲村ヶ崎・極楽寺周辺の攻防は『太平記』であまりにも有名である。

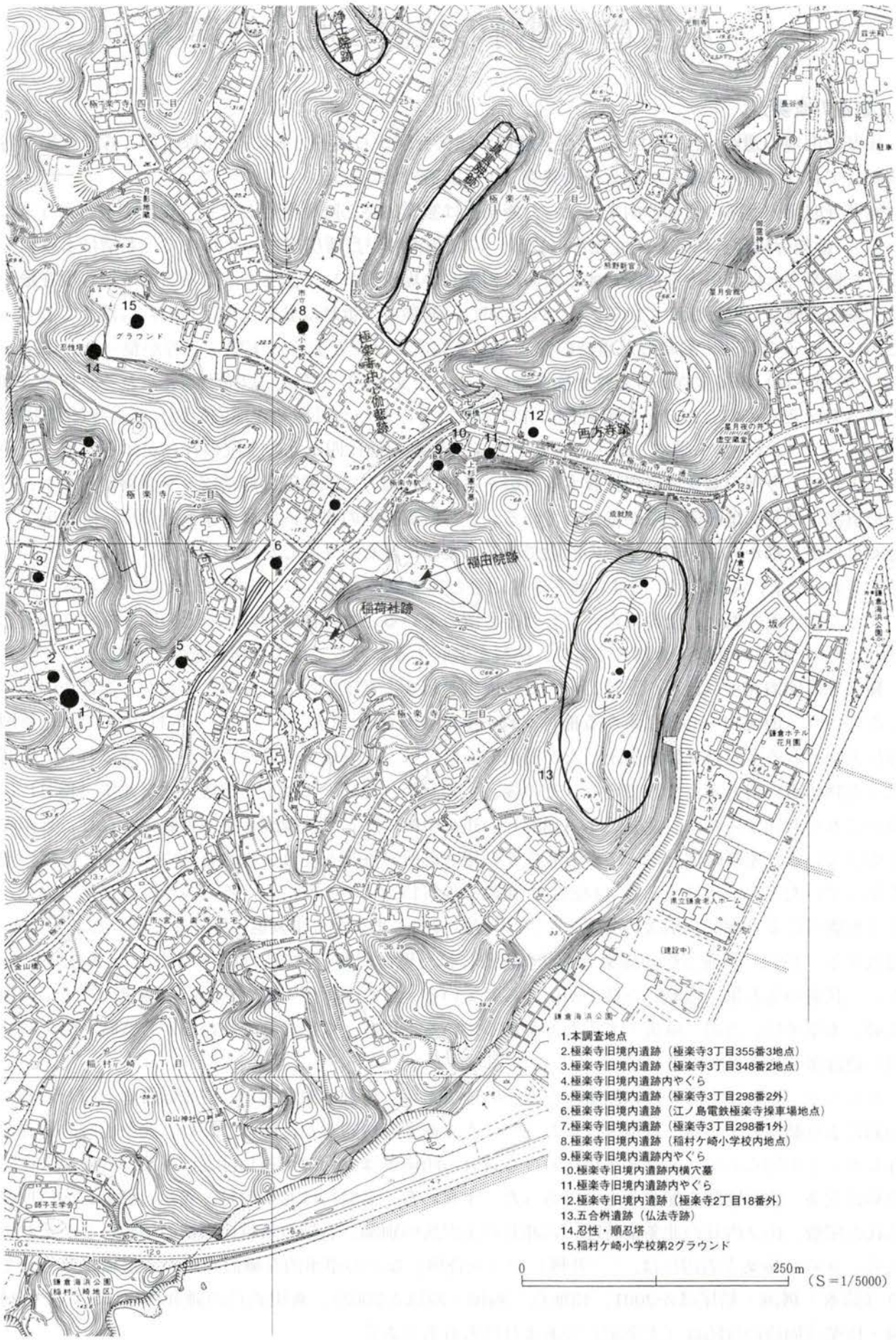


図1　調査地点と周辺遺跡

2. 調査地周辺の発掘調査事例

調査地点周辺の発掘調査は、現在までのところ14地点で実施されており（図1－2～15）、特に14地点の忍性塔と順忍塔の両五輪塔が有名である。後者は過去に北条重時墓または忍公塔と伝えられてきたが、昭和36年の集中豪雨時の崖崩れにより倒壊し、その復旧工事の際に発見された金銅製骨蔵器の銘文の検討や、その後の発掘調査によって極楽寺三代長老順忍の墓塔と判明した。順忍塔の南側に建つ大五輪塔は昭和51年に実施された解体修理工事の時に金銅製骨蔵器が出土し、寺伝のとおりこの墓塔が「忍性塔」であることが判明している。古くは昭和25年頃、稲村ヶ崎小学校の第2グラウンド造成工事で破壊された納骨堂跡からは、分骨に用いたと思われる瀬戸灰釉の小型仏華瓶・壷などの遺物が出土している（15地点）。さらに昭和52～54年の同小学校の改築に伴う発掘調査では、方丈華厳院跡を思わす凝灰岩切石（鎌倉石）による壇正積基壇や礎石建物などが発見され、伽藍の中心部にあたる地域で盛時の極楽寺解明に重要な手がかりが得られている（8地点：大三輪・玉林・木村1980）。ところで筆者は、先述したこれら極楽寺に関連した重要な出土遺物や文献資料を平成14年に鎌倉国宝館で開催された特別展『極楽寺忍性ゆかりの遺宝－奈良から鎌倉への軌跡－』において実見する機会に恵まれた（極楽寺と関係の深い金沢北条氏の称名寺については同年、県立金沢文庫『称名寺の石塔－中世律宗と石塔－』企画展開催）。

本調査地点の所在する月影ヶ谷では、谷の開口部付近も含くめて4箇所で調査が実施されている（2～5）。谷戸奥に位置した4地点は、赤星直忠氏が『鎌倉市史考古編』に「月影ヶ谷やぐら」として掲載されたものであり（赤星1959）、その後に2基のやぐらが調査されている（継1992）。3地点では極楽寺が盛隆した時期にあたる13世紀後葉から14世紀前半頃の礎石建物や掘立柱建物が確認され、また本地点の北隣に位置した2地点では13世紀後半から14世紀後半代にかけての土丹敷き地業面による連続した平場が検出され、本地点とほぼ同時期の長期にわたって造成が繰り返し行なわれていたことが判明している（田代1997）。5地点では13世紀末から14前半代にかけての溝や土壙などが発見され、さらに中世遺構の覆土・整地層や中世以前の堆積土中からは8世紀後半から9世紀後半を主体する土師器や須恵器が多量に出土しており、注目される（田代・継1997）。6・7地点では13世紀後葉から14世紀中葉の遺構が検出され、さらに両地点で多量に出土した瓦類の主な時期は13世紀前半（13世紀前葉の可能性もある）に遡る資料でり、忍性入寺以前の極楽寺の様子や、この場の様相を探る手がかりになりそうである（斎木・原1998、田代・宗臺・原1999）。

【引用・参考文献】

赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』　吉川弘文館

大三輪龍彦・玉林美男・木村美代治　1980「極楽寺旧境内遺跡」同遺跡発掘調査団・鎌倉市教育委員会

木村吉行・鈴木庸一郎　2000「極楽寺やぐら群（平成11年度　鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査）」『かながわ考古学財団調査報告』93

鎌倉国宝館　2002『極楽寺忍性ゆかりの遺宝－奈良から鎌倉への軌跡－』特別展図録

斎木秀雄・原　廣志ほか　1998「極楽寺旧境内遺跡－江ノ島電鉄株式会社極楽寺地区改良計画に伴う発掘調査報告書－」極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団

斎藤彦司・道津綾乃　2002『称名寺の石塔－中世律宗と石塔－』企画展図録 神奈川県立金沢文庫

鈴木庸一郎・桝渕規彰・松尾宣方・岩田直樹　2001「『古都鎌倉』を取り巻く山稜部の調査」神奈川県教育委員会・鎌倉市教育委員会・(財)かながわ考古財団

田代郁夫・宗臺秀明・原　廣志　1999「極楽寺旧境内中心伽藍跡群(極楽寺三丁目298番1外)発掘調査報告書」極楽寺中心伽藍跡群発掘調査団・東国歴史考古学研究所

継　実　1992「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書』同遺跡発掘調査団
継　実　1995「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査　ー鎌倉・六浦所在の「やぐら」群ー』東国歴史考古学研究所
継　実　1996a「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査ー鎌倉所在の「やぐら」群ー』東国歴史考古学研究所
継　実　1996b「極楽寺旧境内遺跡内やぐら」『中世石窟遺構の調査ー鎌倉所在の「やぐら」群ー』東国歴史考古学研究所
継　実　1998「極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目 348番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14 鎌倉市教育委員会
田代郁夫・継　実　1997「極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目 320番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会
田代郁夫　1997「極楽寺旧境内遺跡（No.291）極楽寺三丁目 355番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13 鎌倉市教育委員会
長谷川厚・大塚健一　1999「極楽寺やぐら群（No.128）」『かながわ考古学財団調査報告』72
福田　誠・原　廣志　2003「五合桝遺跡（仏法寺跡）発掘調査報告書」　鎌倉市教育委員会
貫　達人・川副武胤　1959『鎌倉市史　社寺編』　吉川弘文館
貫　達人・川副武胤　1980『鎌倉廃寺事典』　有隣堂
松尾宣方　1983「極楽寺旧境内北やぐら」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』　鎌倉市教育委員会
三浦勝男　1968『鎌倉の古絵図』　鎌倉国宝館図録第15集
三山　進　1966『極楽寺』　中央公論美術出版

第２章　調査の概要

1. 調査の経緯と経過

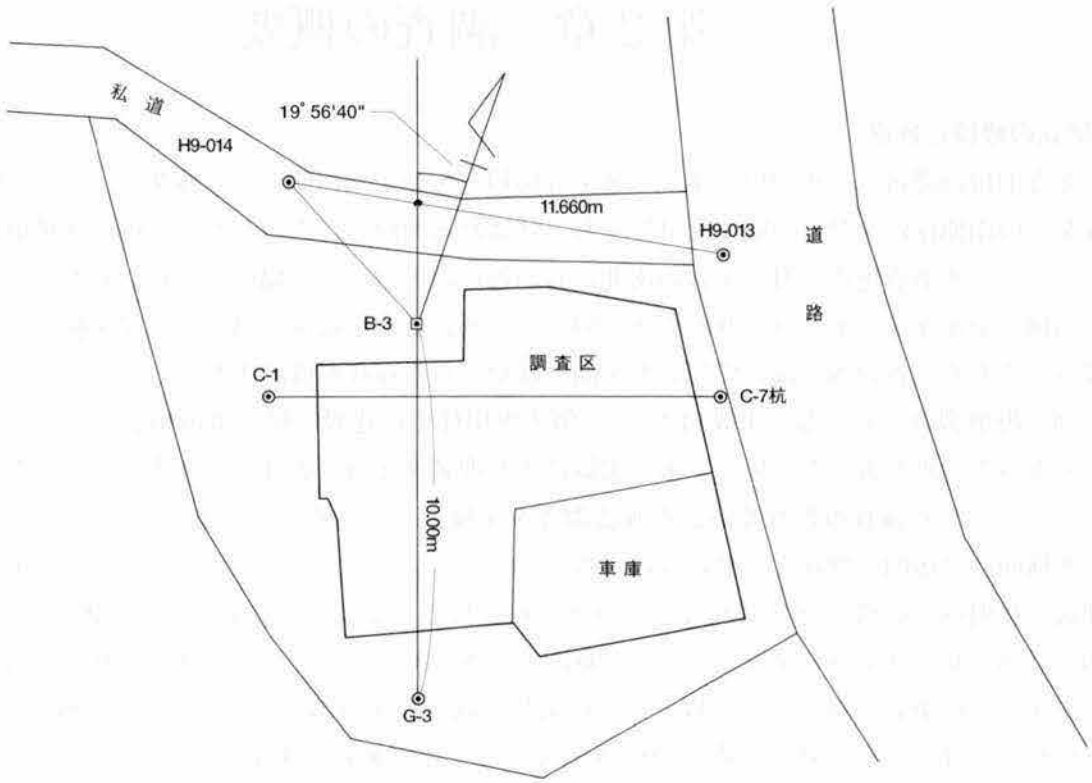
極楽寺旧境内遺跡は、市内中心部から極楽寺切通しを越えた西側となる極楽寺三丁目に所在し、現在の極楽寺の南側丘陵をひとつ隔てた月影ヶ谷と呼ばれる南向きに開口した谷戸内の沖積地上の一角に位置している。本調査地点は月影ヶ谷の南北に長い谷戸の入口に近い場所で谷奥に向かって走る道路に接した西側の山裾部分にあたり、西から東に向かって延びる支尾根を人為的に切岸を施して造成された平場部分にあたる。谷戸内周縁の切岸した崖面にはやぐらの存在が確認されている。

今回の現地調査に先立ち、平成14年9月に個人専用住宅の建設に係る事前相談があり、地下室の築造にともなった計画があったため、工事の実施により埋蔵文化財に影響を及ぼすおそれのあることが予想された。このため鎌倉市教育委員会が確認調査を実施したところ、現地表下45cm以下に中世遺物包含層と遺構面の具体的な埋蔵文化財の存在することが明らかにった。これにより当該建設工事の実施による埋蔵文化財への影響は避けられないものと判断された。このため事業者との協議を行なったところ、当初の計画に基づき工事を実施したいとの意向が示されたので、文化財保護法に基づく届出手続きを行い、施工者との調査実施による工程・方法の調整協議及び発掘調査の準備が整った後、平成14年12月2日から約二ヶ月の予定で調査面積54.49㎡を対象として発掘調査を開始する運びとなった。

現地調査はまず表土を重機による掘削除去したのち、人力により掘り下げで調査を実施した。その結果、山裾の丘陵斜面を人為的に掘削したうえで谷戸の内側（東側）に向かって埋め立てを行なうかたちで平場を徐々に拡大していった様子を看守することができた。平場の造成は鎌倉時代後期から比較的短期間のうちに地業を繰り返し行なわれたことが土層断面の観察により確認された。現地調査はほぼ予定日数のとおり、年を越した平成15年2月6日までの間に必要な記録保存を行ない無事終了した。その間の調査経過については、調査日誌の抜粋を記すことにする。

【日　誌　抄】

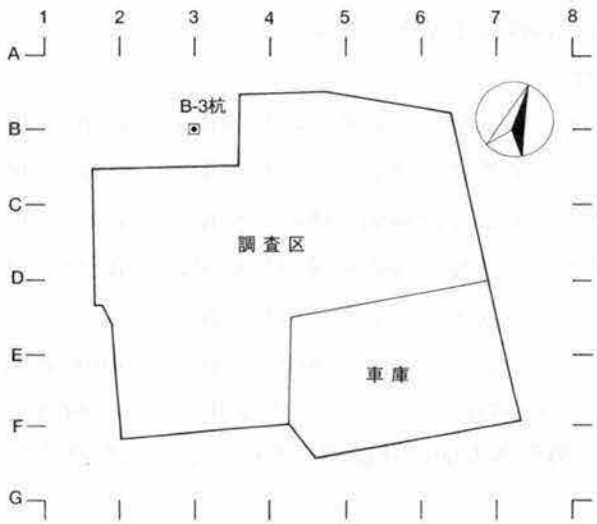
12月2日　調査開始。調査区を設定し、重機による表土掘削。機材搬入してテント設営。
5日　調査開始。鎌倉市4級都市基準点を基に測量用のグリット設定と水準点からレベル原点を調査区内へ移動。
13日　第1面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第1面全測図作成。
17日　第2面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第2面全測図作成。
19日　第3面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第3面全測図作成。
25日　第4面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第4面全測図作成。
1月9日　第5面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第5面全測図作成。
18日　第6面の調査終了。全景及び個別遺構の写真撮影。第6面全測図作成。
2月3日　岩盤確認トレンチの調査終了。トレンチ写真撮影。全測図及び調査区壁の土層堆積図作成。
6日　現地調査終了。関係各方面に発掘調査を終了した旨を連絡して機材撤収。



▲ グリッド設定図(1/100)

〔国土座標値〕

H9-013(4級)	X:-77137.142	B-3杭	X:-77141.519
	Y:-27684.103		Y:-27691.233
H9-014(4級)	X:-77139.118	C-1杭	X:-77150.045
	Y:-27695.590		Y:-27688.360



▲ グリッド配置図(1/100)

図2　グリット設定・配置図

2. 測量軸の設定

調査にあたってのグリット設定は、まず調査地の東側を南北に走る市道と北側の私道の路上にそれぞれ鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級都市基準点のH9-013とH9-014を確認することができた。この両基準点延長線上の国土座標から敷地外の路上に便宜上任意の測量点を設け、そこから南側方向へ調査区にほぼ平行するようにな位置でB－3杭を基準杭として、南北軸線上（3ライン）でB－3杭から10m南の地点にG－3杭を設定した。さらにB－3杭から西へ4m、南に2mの位置にC－1杭を設置し、図2上段ように東西軸と南北軸をそれぞれ2m方眼によるグリット設定を行なった。グリットは東西軸線にアルファベットの名称を付し、南北軸には算用数字をそれぞれ付してグリット設定を行なった。各グリットの名称は北西角の軸交点により呼称される。なお測量に用いたグリットは敷地の範囲や測量の際の利便性を優先させたため国土座標には一致していない。

以下、今回調査で使用した国土座標の鎌倉市4級都市基準点（H9-013・H9-014）と、グリット杭のB－3の国土座標の数値を記すことにする。

〔座標系AREA 9〕

H9-013　X－77137.142：Y－27684.103　　B－3杭　X－77141.519：Y－27691.233

H9-014　X－77139.118：Y－27695.590　　C－1杭　X－77150.045：Y－27688.360

図中の方位はすべて真北を採用し、グリット方眼の南北軸線は真北よりやや西に振れている。南北軸と真北との偏差及び調査地点の経緯は次のとおりである。

南北軸線　N－19°　56′　19″　－E

調査地点　北緯35°　18′　13″　：　東経 139°　31′　44″

水準原点の移動については、調査地南西側の山裾に設置されていた国土地理院多角水準点の標高を調査地内のB－3杭上に仮水準点として移動した。従って、文章中及び挿図に使用記載された数値はすべてこれを基準にした海抜標高を示している。

水準点　海抜標高：30.080m

B－3杭　海抜標高：21.248m

3. 層序と生活面

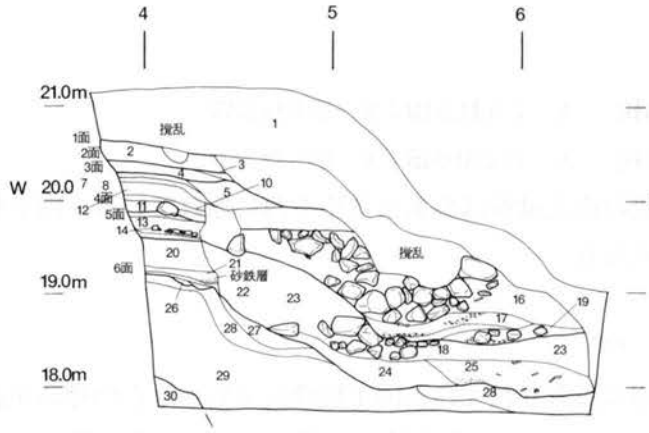
調査地点における現地表は、海抜標高が21.2m前後に位置した平坦な宅地となっている。調査で確認された堆積土層は概ね15層に区分されたが、その中で少なくとも6時期以上の生活面が検出されている。堆積土層の状況は、図3の調査区北壁・南壁土層堆積に示したとおりである。表土（第1層）は攪乱堆積土も含て厚さ40～70cm程であったが、調査区全体の範囲で近・現代に掘られたゴミ穴や植木伐根の際にできた攪乱が認められ、深いところでは現地表下1.2mまで及んでいた。

表土を除去すると、調査区南西隅では山裾の岩盤を削平した平坦な面が僅かに確認された。この岩盤面が落ち込んで行く切れ目のところからは厚さ約20cm程の大小土丹塊や1～2cmの土丹角・かわらけ片を多く混入して突き固めた堅牢な灰茶褐色弱粘質土の地業層（第2層）が認められた。この層と岩盤削平面の上面が第1面であり、海抜標高は 20.50m前後を計る。先述したように攪乱壙が調査区内に拡がり、生活面は良好な状況ではなかったが土壙・柱穴などの遺構を確認することができた。

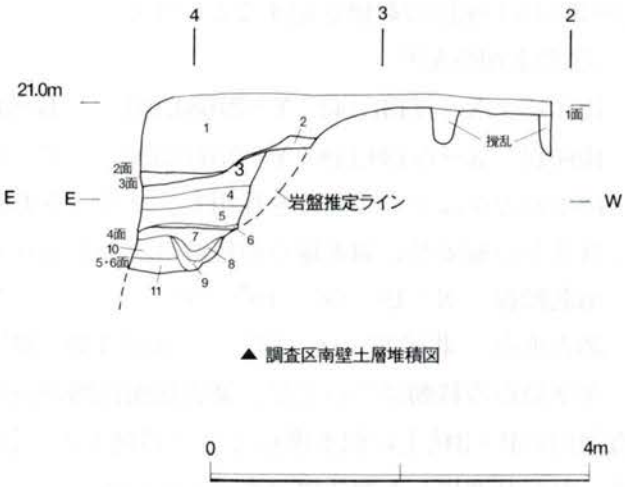
第1面を構築する地業層を除去すると、殆んど間層を挟まずに第4層の灰茶褐色砂質土を基盤とした生活面が検出された。この面は調査区中央で小土丹塊を敷きつめた範囲が認められ、また西側域からは厚さ10cm前後の灰茶色粘質土（関東ローム層に類似したもの）を貼り付けた地業層（第3層）がみられた。さらに北東隅からは岩盤を荒く削平したものが確認された。従って、両層を一連の地業層による生活面

と認識して第2面の調査を実施したが、主だった遺構を検出することはできなかった。この面は海抜標高は 20.40m前後で北東域は南西域に比べて少し高めの整地を施している。

次に第2面を構築土していた第3・4層を掘り下げたところ、調査区のほぼ全面から灰茶褐色粘質土の大小土丹塊を突き固めた第5層の土丹版築による地業面と、南西域を中心に混入物の少ない硬化した褐色粘質土が表出した。これらの層の上面が第3面であり、海抜標高は 20.15m前後である。調査区東側は攪乱が深く入り込で削平を受けており、また西側は第2面を検出した時点で建築予定の掘削深度まで達していた為、調査は実施していない。



▲ 調査区北壁土層堆積図



▲ 調査区南壁土層堆積図

〔調査区北壁土層注記〕

① 表土
② 灰茶褐色土　φ5～10cm大の土丹地業土。しまり強く混入物微か。
③ 灰茶色粘質土　関東ローム層に近いもの。
④ 灰茶褐色土　φ2～10cm大の土丹版築土。
⑤ 灰茶褐色土　拳～人頭大の土丹版築土。固く締り硬化する。
⑥ 灰茶褐色土　拳大の土丹版築土。
⑦ 褐色粘質土　かわらけ、土丹、炭化物含む。粘性が強く締りあり。
⑧ 褐色粘質土　土丹粒を少量含む。混入物微量。
⑨ 灰褐色砂質土　均質な砂が固く締る。
⑩ 灰褐色弱砂質土　2～5cm大の小土丹が主。混入物少なく、固く締まる。
⑪ 褐色粘質土　締り強い。
⑫ 褐色砂質土　褐色の強い砂質土。土丹粒、かわらけ少量混入。ややしまる
⑬ 灰褐色砂質土　細粒～小土丹の版築土。
⑭ 褐色砂質土　固くしまった砂質土。
⑮ 灰黄褐色砂質土　Pit覆土。土丹粒、かわらけ片が多量に混入。
⑯ 灰褐色土　灰茶の粘質土を主に、大土丹、小土丹、細粒土丹で地業した土
⑰ 灰茶褐色砂質土　砂層と礫層が互層になり、鉄分のサビが強い。
玉砂利や遺物を多く含み、流水の痕跡がある。
⑱ 暗褐色粘質土　粗砂やや多い。
⑲ 茶褐色砂　23層の平場に溜まった土。水が流れた痕跡。
⑳ 灰褐色粘質土　小土丹に細粒土丹を詰め、固くしまった版築土。
㉑ 灰黄褐色砂 細粒土丹が混じる。一部で砂鉄の層が見られる。しまりなし。
㉒ 灰褐色弱砂質土 砂鉄、褐鉄が多い。粘性ややあり。しまりなし。
㉓ 暗褐色粘質土 褐鉄分、かわらけ粒、炭化物を少量含む。しまり強い。
㉔ 灰茶褐色砂質土 細かい破砕土丹が固くしまる。かわらけ片少量包含。
㉕ 灰茶褐色砂質土 24とよく似る。水が流れた痕跡あり。遺物・玉砂利多い。
㉖ 赤褐色砂層 粗砂ややあり。
㉗ 灰褐色弱砂質土 砂鉄、褐鉄多く、所々に土丹礫混入。炭化物微かに混入。
粘性あり。しまりなし。
㉘ 赤褐色砂質土 粘性弱い。しまり強い。鉄分のためか固化している。
㉙ 赤褐色弱砂質土 しまりなし。粘性わずかにあり。
㉚ 岩盤（中世地山）

〔調査区南壁土層注記〕

① 表土
② 灰褐色土 細かい土丹粒混じる。砂鉄混じる。
③ 灰褐色砂質土 細かい土丹粒混じる。砂鉄混じる。②より砂多い。
④ 暗灰褐色砂質土 ③より土丹粒少なく、砂鉄層有。
⑤ 淡灰褐色土 細かい土丹を固めた地業層。間に砂入る。
⑥ 暗灰色砂層 粗砂と砂鉄が多い。
⑦ 淡灰褐色土 土丹地業層。⑤より土丹しまり良く、砂はほとんど入らない。
⑧ 黒灰色砂層 砂鉄がたまった層
⑨ 土丹ガラ層 間に砂入る。⑧の砂染みる。淡灰褐色土丹ガラ層。
⑩ 淡灰褐色土層 細かい土丹と砂が混じった層。
⑪ 茶褐色粘質層 細かい土丹混じる。しまり有。

図3　調査区北壁・南壁堆積土層図

第3面構築土の第5～8層を掘り下げると、その下から遺物を含まない厚さ約10cmの灰～褐色砂（北壁第9層、南壁第5層）が堆積し、また第10・11層も間層を挟まず締まりある整地が連続して認められた。これらの土層を除去して表出したのが第4面である。面上の南域では薄く山砂が敷かれていたが東側は攪乱の影響を受けているものの大小土丹塊を蜜に混入した地業状況（第16層）が確認された。土層観察によると、第16層は東へ向かって厚い堆積を示しており、傾斜地を造成して平地を拡張したことが解かる。この面は西から東へ緩やかな傾斜をもち海抜標高は 19.95～80mである。

第5面は灰褐色粘質土の土丹版築による地業層（第20層）と、鉄分の多い暗褐色粘質土（第23層）からなり、東側に向かって急な傾斜をもつ造成である。斜面下は砂利・砂・水磨した礫が互層状に堆積しており、流水を思わす痕跡がみられた。海抜標高は斜面の上側で 19.50m、下側で 18.40mを計る。第6面も同じように急な傾斜をもつ造成が施されており、傾斜面の下からは溝・土壙・ピットなどの遺構が検出された。第27～29層は中世遺物を含まない地山層である。この面の海抜標高は斜面の上側で 19.20m、下側で 18.00m前後を計る。第6面の調査終了後に岩盤面及び岩盤の落込みを確認する目的で調査区の北壁際（北トレンチ）と南側（南トレンチ、車庫の攪乱側）、さらに西壁側の一部（西トレンチ）にトレンチを設定し掘り下げを行なった。北・南トレンチでは自然地形の岩盤落込みが確認され、西トレンチでは岩盤の落ち込みに沿って溝が検出されている。

以上のように調査地及び周辺は、西側山裾を削平しながら東側に雛段状の平場を形成したものである。平場は薄い地業層が互層状を呈しており、比較的短期間に幾度も整地を繰り返した様相が窺え、東側は現在の道路に向かって急な傾斜をもつ造成を行なっていた。

第３章　検出遺構と出土遺物

1. 第1面の遺構・遺物

調査地は現在の月影ヶ谷の入り口から谷奥に向かって走る市道の西側に接した位置にあたる。この谷戸を地勢的にみると、道路西側域の現況は比高差のある斜面地を水平に盛土して造成を行なっており、支谷奥に向かって雛段状の平場を形成した上に住宅が建ち並んでいる。さらに調査地点背後の山裾は急傾斜崩落対策工事が実施されて4m近い崩落防止の為に擁壁が造られている。第1面の調査において南西隅付近で確認された岩盤削平面は山裾の擁壁側に向かって拡がりを見せており、少なくとも中世前期の段階には現在の地形に近い状況に切岸を行なっていた様子が推測され、周辺の住宅が建つ雛段状平場の地形も、その頃の谷戸開発により造成されたものと判断される。

この面では土壙4基、柱穴2口などの遺構が確認され、遺物にはかわらけ、舶載磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、鉄製品などが出土している。

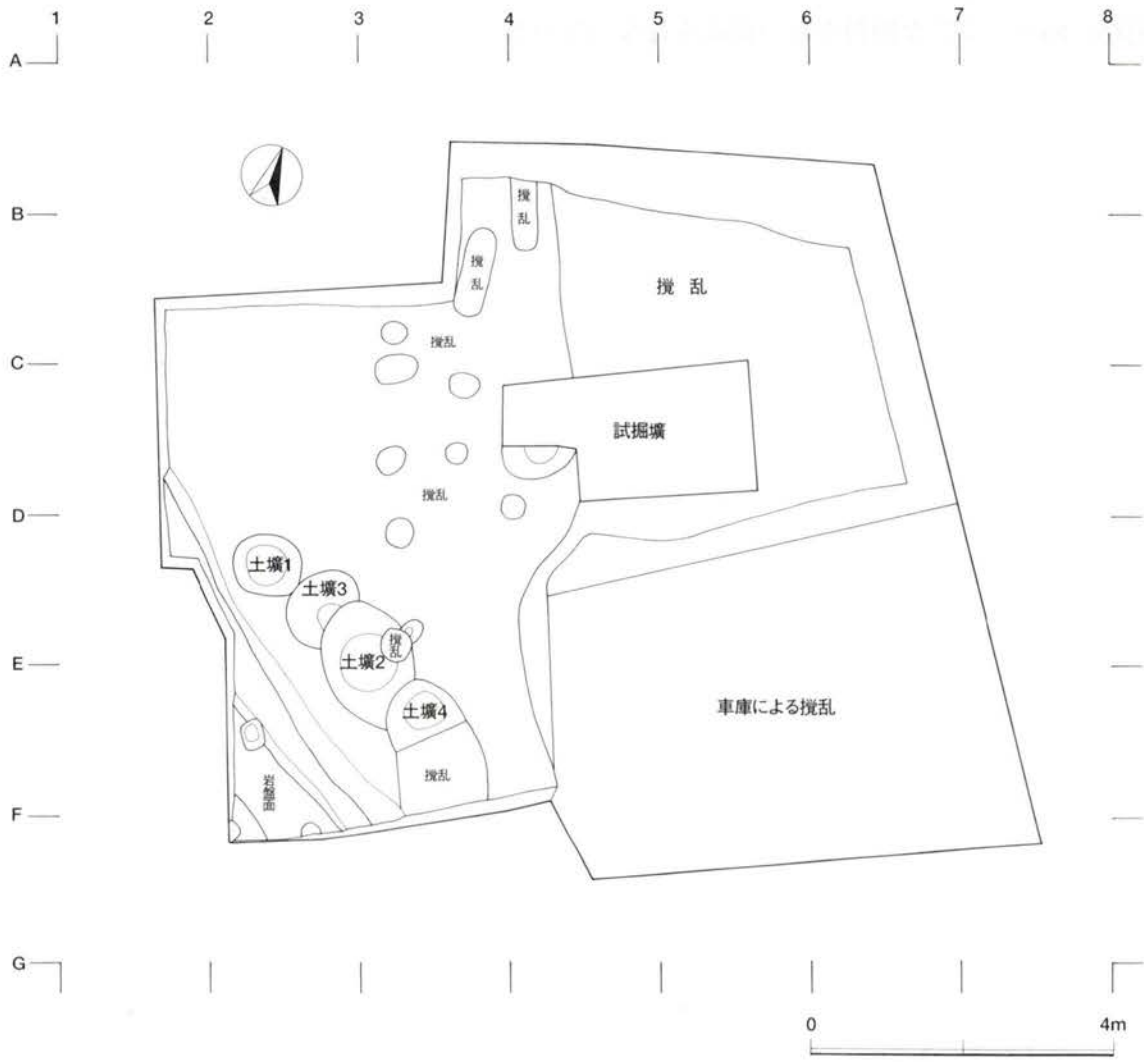


図4　第1面全測図

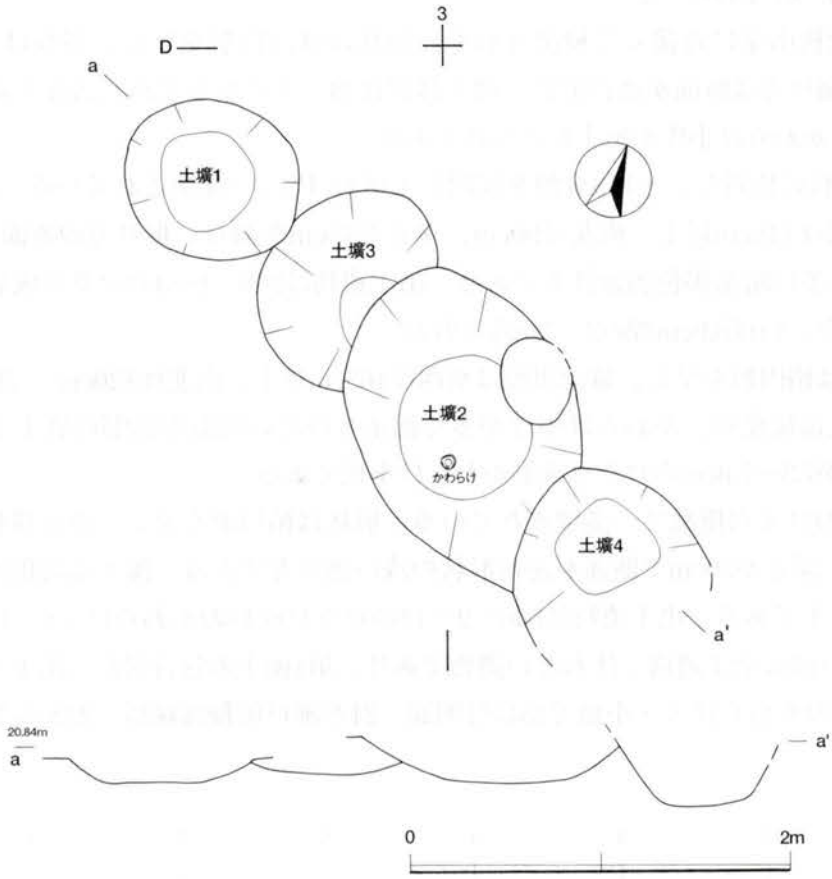


図5　第1面　土壙1～4

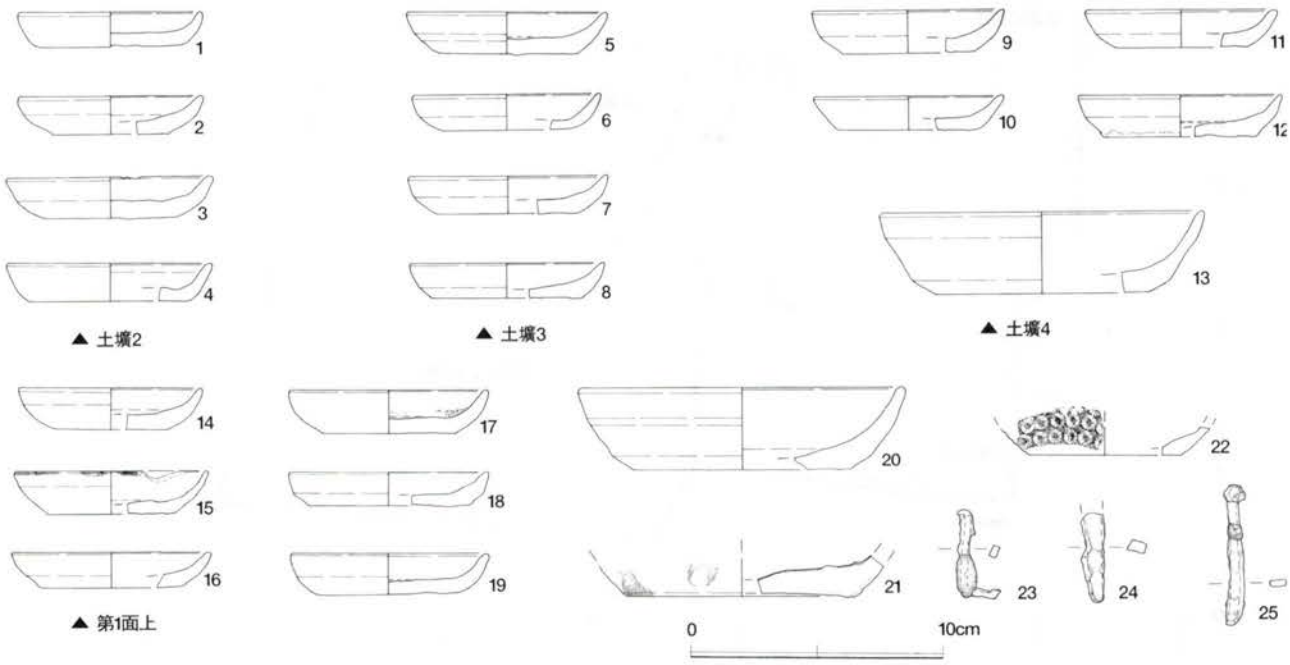


図6　第1面土壙2～4、遺構外出土遺物

a. 土　壙（図4～6、図版1・2）

土壙1：D－2杭南東に近接して検出された。形状はほぼ円形を呈し、規模は径90cm前後、深さは38cmを測る。掘り方は断面が逆台形状、覆土は炭化物、土丹粒を多めに含んだ締まりのない茶褐色弱砂質土、遺物はかわらけ小片が出土しただけである。

土壙2：E－3杭に位置し、土壙3東側を掘削し土壙4とP8に一部壊されている。形状は楕円形を呈し、確認規模は東西径115cm以上、南北径90cm、深さが45cmを測り、掘り方の断面は逆台形状を呈する。覆土は炭化物が多い暗茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図6－1～4のロクロ成形かわらけ小皿で口径が7.2cmの1・2と、口径8.0cm程の3・4がみられた。

土壙3：形状は楕円形を呈し、確認規模は東西径165cm以上、南北径120cm 、深さが20cmの浅い掘り方である。覆土は炭化物、かわらけ小片が多く締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図6－5～8は口径が7.3～7.8cmのロクロ成形かわらけ小皿である。

土壙4：近代のゴミ穴攪乱で一部壊されている。形状は楕円形を呈し、確認規模は南北径105cm、東西径80cm以上、深さが30cmで断面が逆台形状の浅い掘り方である。覆土は炭化物の多い締まりのない暗茶褐色弱砂質土である。出土遺物は図6－9～13のロクロ成形のかわらけで9～12の小皿と13の大皿がある。図6－14～25は全て遺構に伴わない遺物であり、第1面上の包含層から出土したものである。14～20がロクロ成形のかわらけ大・小皿で15は灯明皿、21が瀬戸灰釉折縁皿、22が瓦質香炉、23～25が鉄釘である。

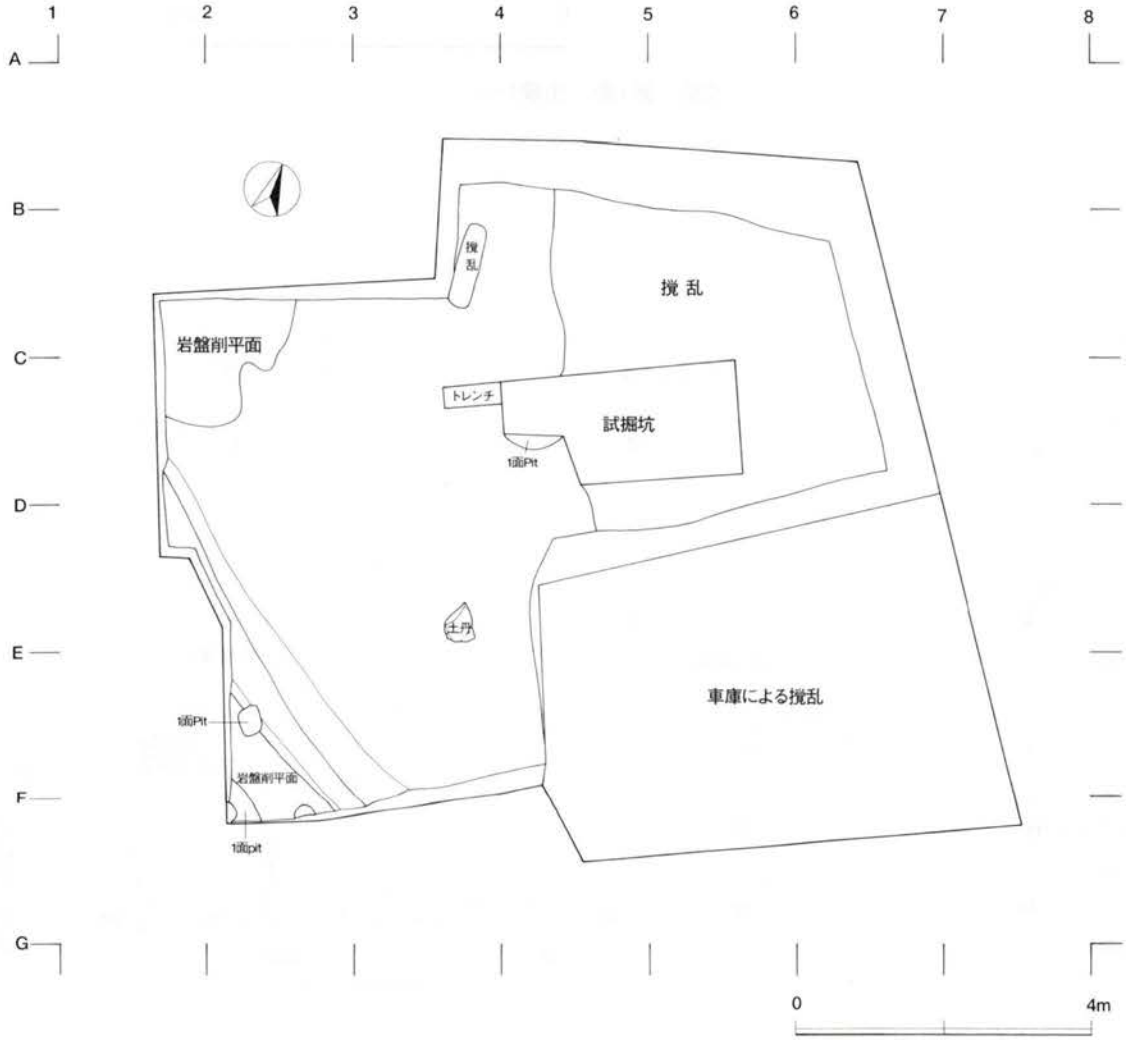


図7　第2面全測図

2. 第2・3面の遺構・遺物

a. 第2面の遺構と遺物（図7・9、図版3・6）

この生活面は調査区南（車庫部分）側半分がほとんど攪乱を受けて削平されていた。調査区西側半分では中央付近に一定の範囲に小土丹塊を敷きつめたものが確認され、その東側域からは関東ローム層に類似した粘質土を貼り付けた地業層で整地されていた。さらに北西隅から岩盤を荒く削平した面も確認されたが、主だった遺構を検出することはできなかった。

図9－1～18は第1面下～第2面上から出土した遺物である。1～16はロクロ成形のかわらけ大・小皿で5・6・14が灯明皿である。1～12の小皿は口径6.7～8.2cm、13～16の大皿は口径12.1～12.7cmを計る、17が常滑甕片であるが、肩部に長方形の外枠中に銭形の文様を有した叩き目が施されたものである。18は極楽寺旧境内（8地点：稲村ヶ崎小学校用地）の発掘調査において出土瓦の主体を成した同類のもの、表面黒色で粗胎の男瓦（丸瓦）である。

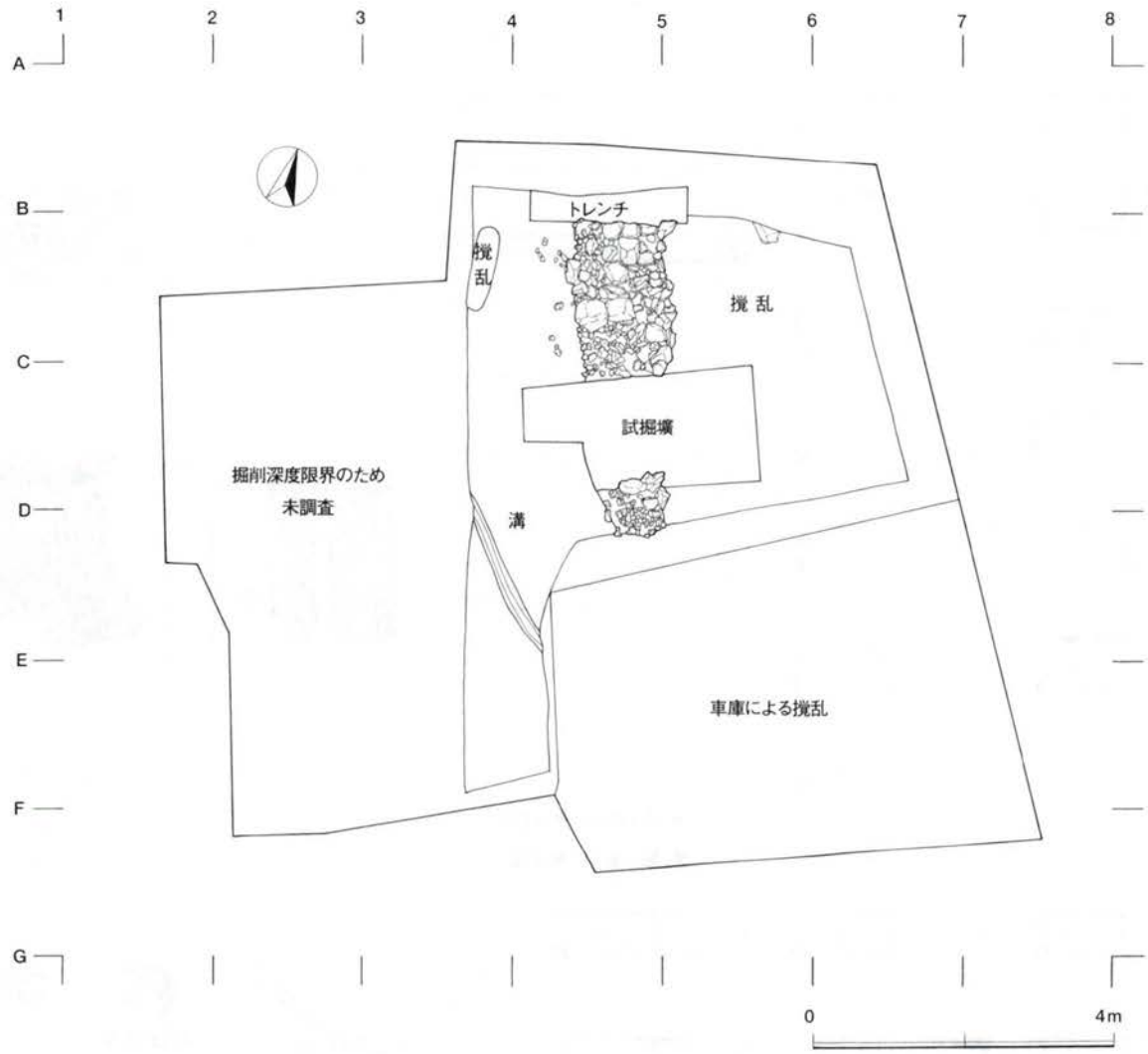


図8　第3面全測図

b. 第3面の遺構と遺物（図8・9、図版2・6）

第3面は、第2面と同様に調査区東側は攪乱が深く入り込み掘削を受けており、また4ライン付近の西側は第2面の検出時点で建築予定の掘削深度に達していたので一部を除き、調査は実施していない。この生活面は第2面の整地土を除去したところ、調査区ほぼ全面で小土丹塊を突き固めて版築した地業面、東辺域だけは土丹版築の地業ではなく鉄分の多い硬化した粘質土の拡がりが認められた。さらに東側の攪乱までの間の斜面は土留用に土丹塊を貼り付けて構築していた。第1面の調査区南西域において確認した岩盤削平面の東際に沿って溝を検出した。

検出された遺構は調査区外に延びる溝2条だけである。溝1は西端のDライン付近から東端のEライン付近までの範囲であり、確認された規模は長さ約 2.5m、幅30～40cm、深さ20cm程の浅い溝である。図示可能な遺物は出土していない。溝2（図21を参照）は西端がDライン付近からFライン付近までの範囲である。調査区内で確認できた規模は長さ約6m、幅110～140cm、深さ30～40cm程を計り、溝底は西から東に向かって緩やかな傾斜を示していた。遺物はロクロ成形かわらけ小片が出土したに過ぎない。

図9－19～25は第2面下～第3面上からの出土遺物である。19～24はロクロ成形のかわらけ小皿で22・24は灯明皿、17が龍泉窯系青磁の無文碗、26が北宋銭の「至道元宝」(初鋳造995年）である。27は表面に打撃痕のあるチャート質の石片で火打石と思われる。

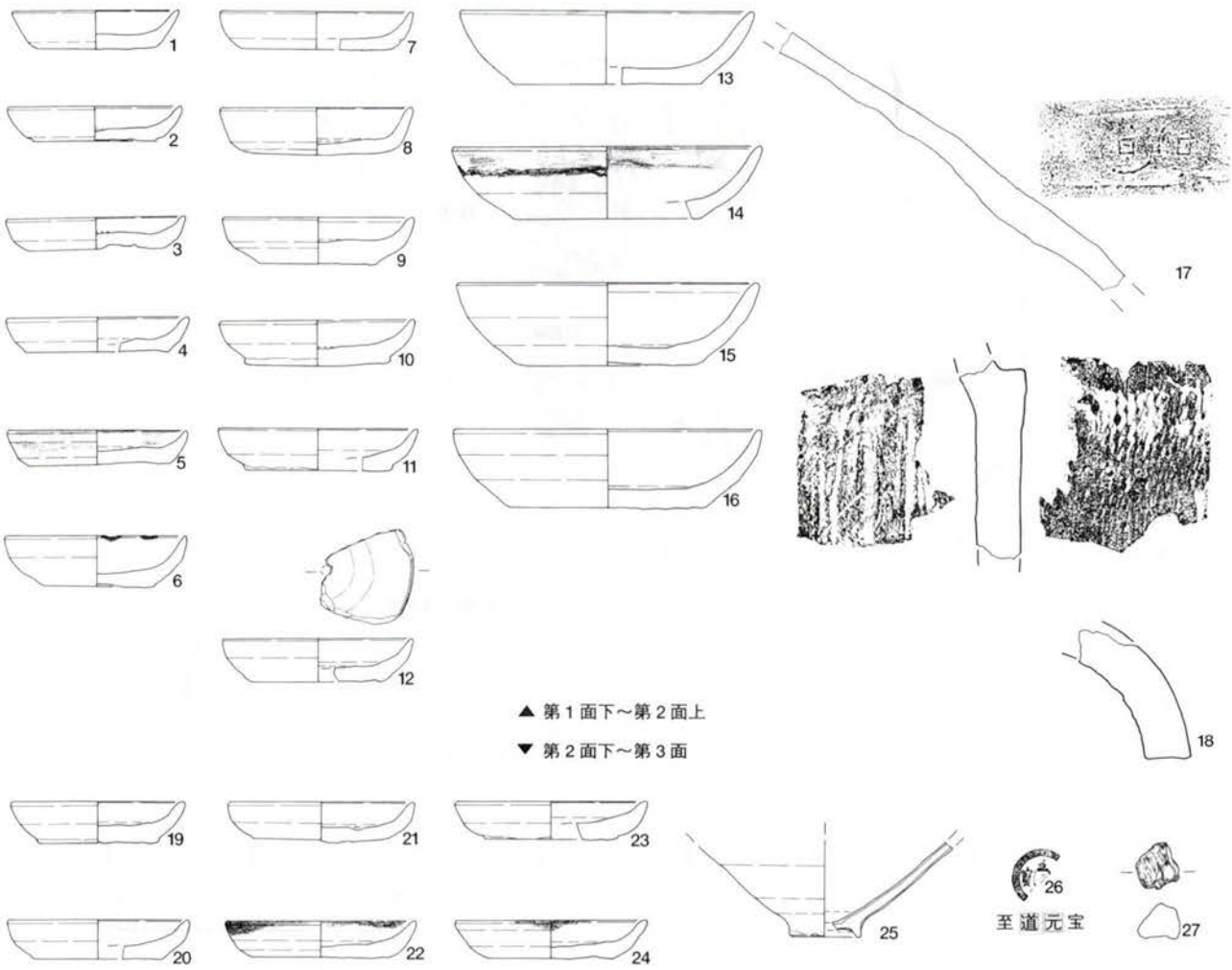


図9　第2・3面出土遺物

3. 第4面の遺構・遺物（図10・11、図版3・6）

第3面を構成する整地層を除去して表出したのが、面上に砂鉄を多く含む山砂が敷かれた第4面である。この面も調査区東側は攪乱の影響を受けているが、西側の平坦部から東側の斜面地は大小土丹塊を密に混入した地業層で土層観察によると、この層は東に向かって厚く堆積した状況が認められ、傾斜地を造成して平坦地を拡張した様子が窺え、第3面と同様に傾斜面は大小土丹塊を貼り付けて土留を施している。なお、面上の砂層中や傾斜面から少量の遺物が発見されたが主だった遺構は確認されていない。

出土遺物は図11に示したように1～24が第3面下～砂鉄層上までのものと、第4面上に堆積していた砂鉄層中の25～35に大別される。1～17はロクロ成形のかわらけで1は口径5cm以下の小型品、2～7が口径7.6～8.4cmの小皿、8～11が口径10.4～11.4cmの中皿、12～17が大皿、18は白かわらけ、19・20が瀬戸の折縁深皿と小壺、21が研磨痕のある常滑甕片、22・23が極楽寺出土の女瓦（平瓦）と同類のもの、24が北宋銭の「祥符元宝」(初鋳造1008年）である。砂鉄層中の遺物は、25・26がかわらけ大小皿、27が龍泉窯系の青磁蓮弁文碗、28が白磁口兀皿、29が北部系山茶碗、30が砥石、31～33が鉄釘、34が北宋銭の「皇宋通宝」(初鋳造1039年)、35が須恵器甕片である。

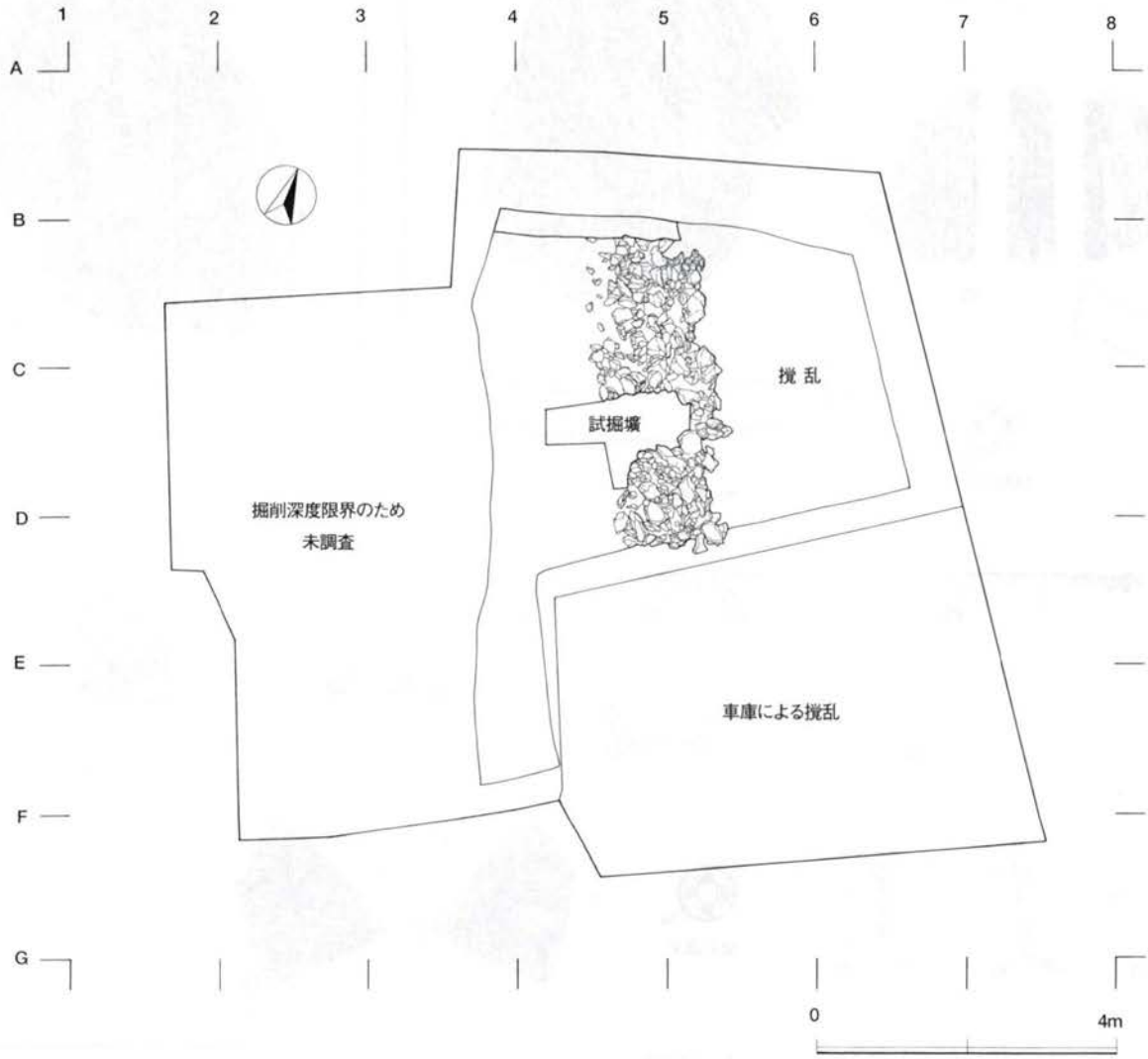


図10　第4面全測図

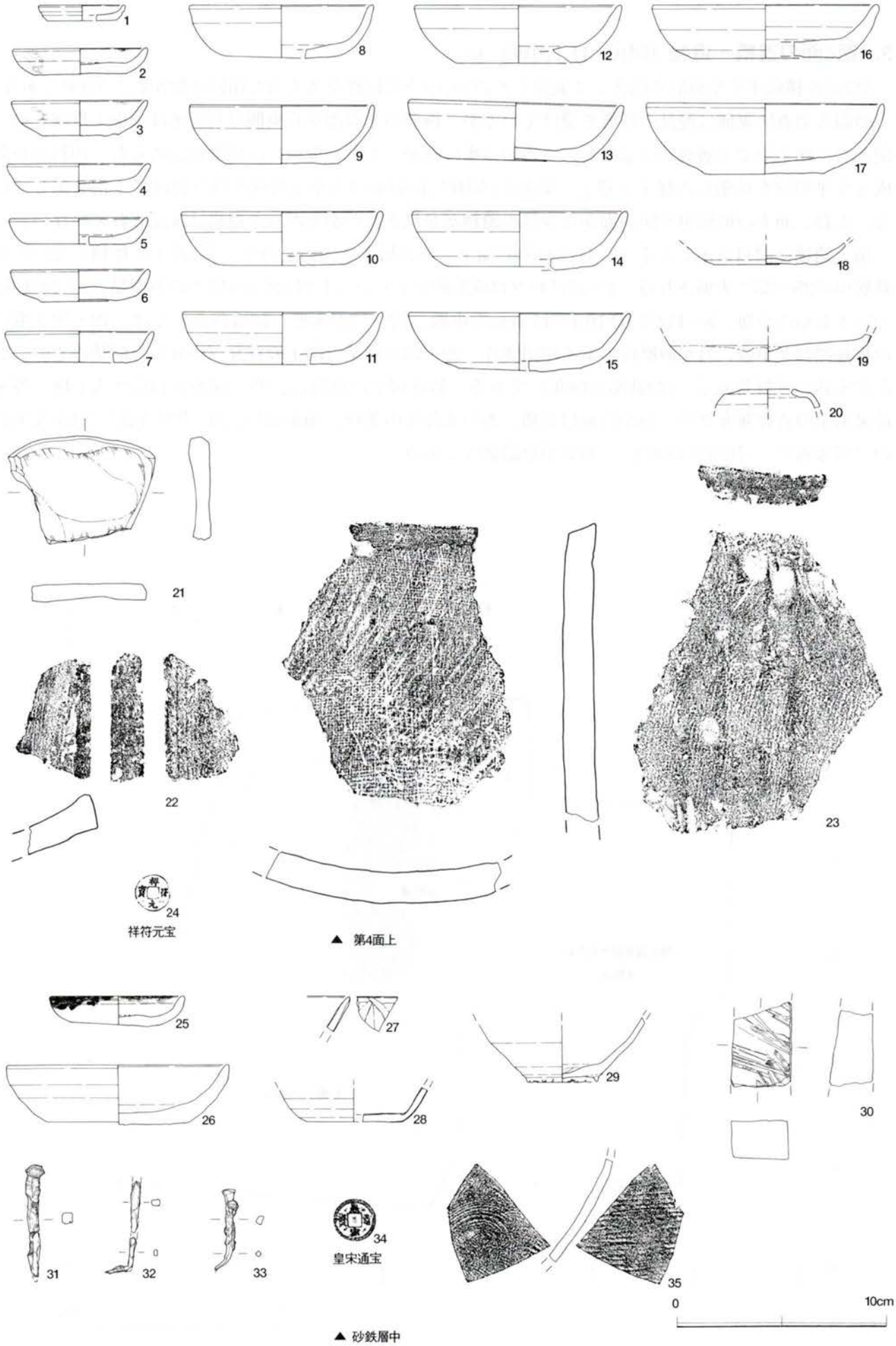


図11　第4面上・砂鉄層中出土遺物

4. 第5面の遺構・遺物（図12～14、図版4・7）

この面の西端は東に向かって落ちていく岩盤が確認され、その前面は土丹小塊を多く混入した灰褐色粘質土の地業層と、鉄分を多い暗褐色粘質土の硬化面から構成されており、さらに東側へ向かって急傾斜な造成が行なわれている。斜面下は砂利や粗砂、水磨した土丹小塊が互層状に堆積しており、溝状の流水を思わす様子が想像された。これが溝1である。

溝1（図13）は南北に延びる溝状遺構であるが、南側の車庫建設の際に基礎部分の掘削による破壊と、東側一部を近代のゴミ穴撹乱により壊されていた。確認された規模は長さ4.4m以上、幅2.6m前後、深さ30～40cmである。覆土は互層状に砂利・粗砂・水磨礫と鉄錆分からなる灰茶褐色砂質土でかわらけをはじめ比較的多くの遺物が出土している。

溝に伴って出土した遺物は、図14－1～20である。1～15はロクロ成形のかわらけであり、1～10が口径7.0～8.2cmの小皿、11・12が口径約11cmの中皿、13～15が口径12.1～12.7cmの大皿、16が白磁口兀皿、17が青白磁合子蓋、18が常滑捏鉢Ⅰ類、19が北宋銭の「政和通宝」(初鋳造1111年)、20が須恵器坏である。

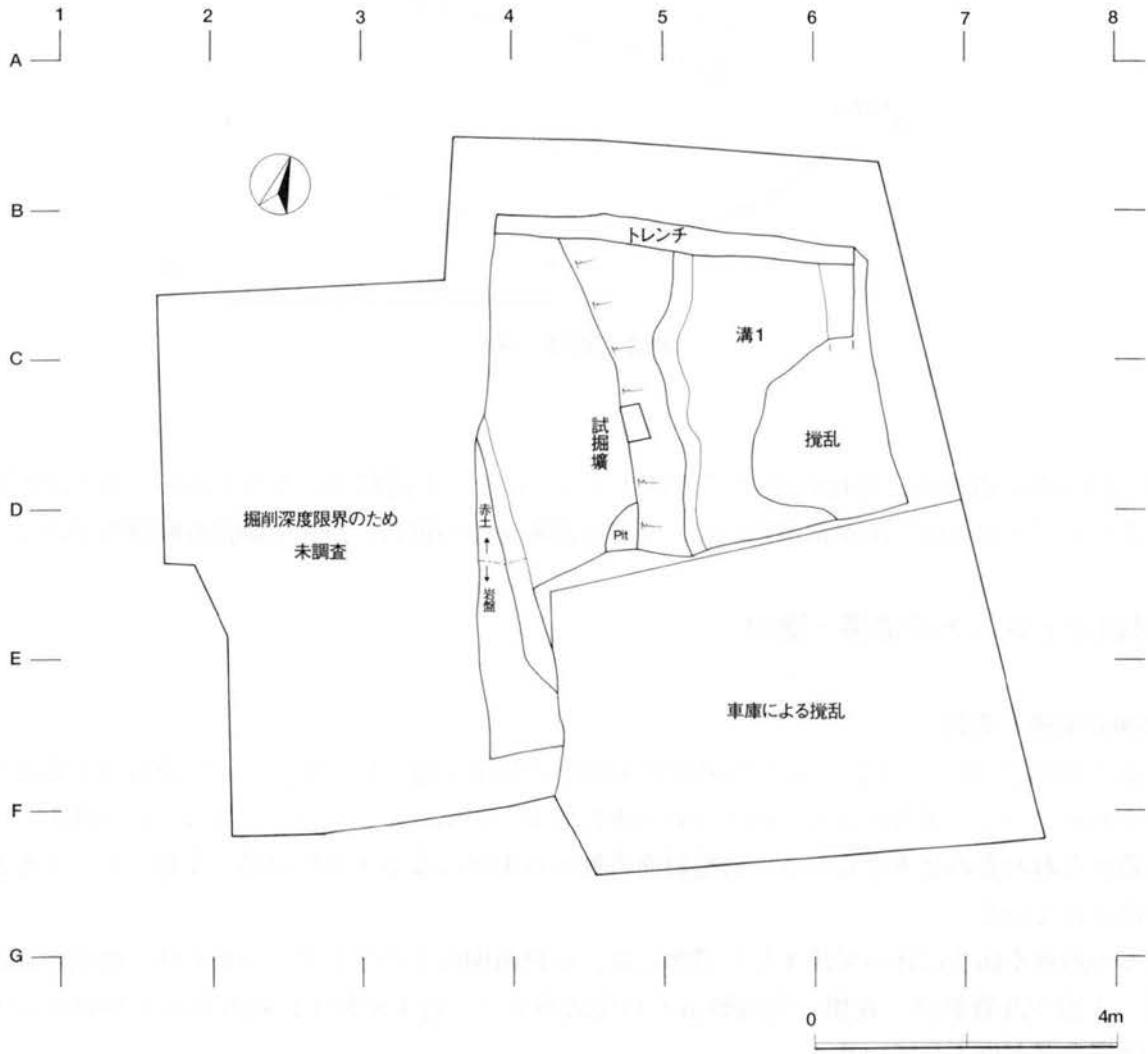


図12　第5面全測図

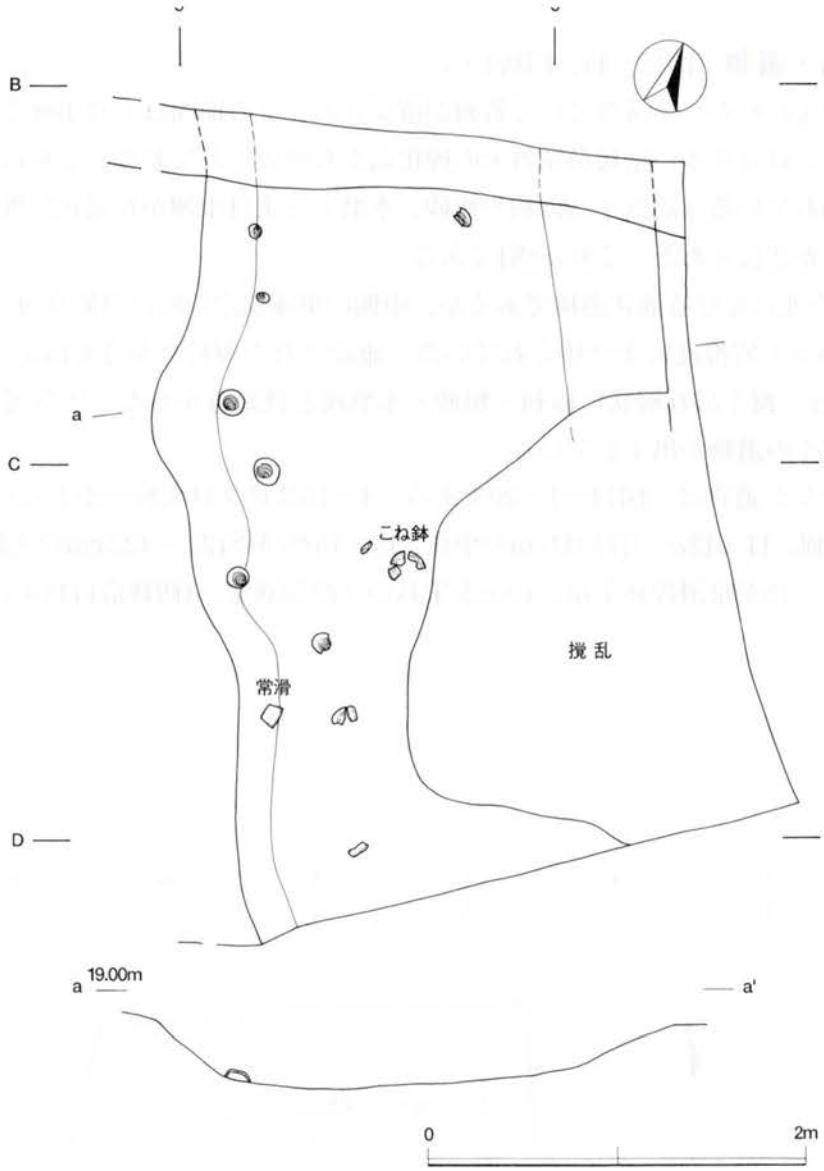


図13　第5面　溝1

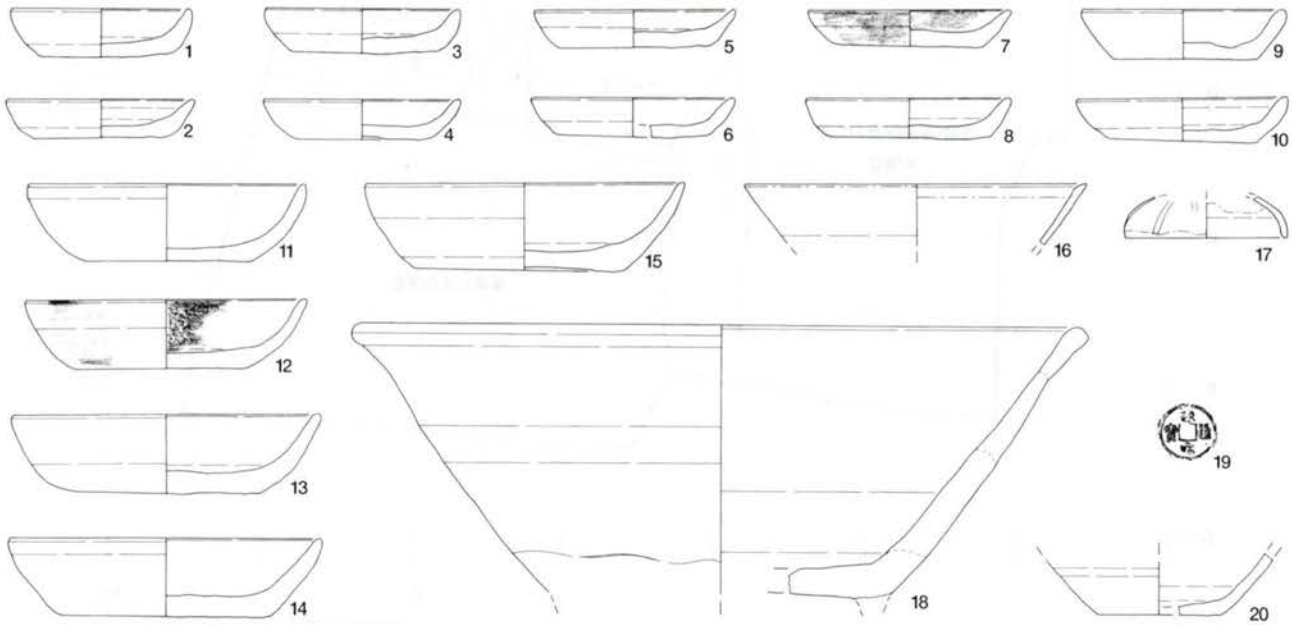
図14－21～32の遺物は、第4面下からこの面上までに出土した遺構外のものである。21～29がロクロ成形のかわらけ大中小皿、30が常滑鳶口壺、31が京都鳴滝産の砥石、32が土師器長胴甕片である。

5. 第6面とトレンチの遺構・遺物

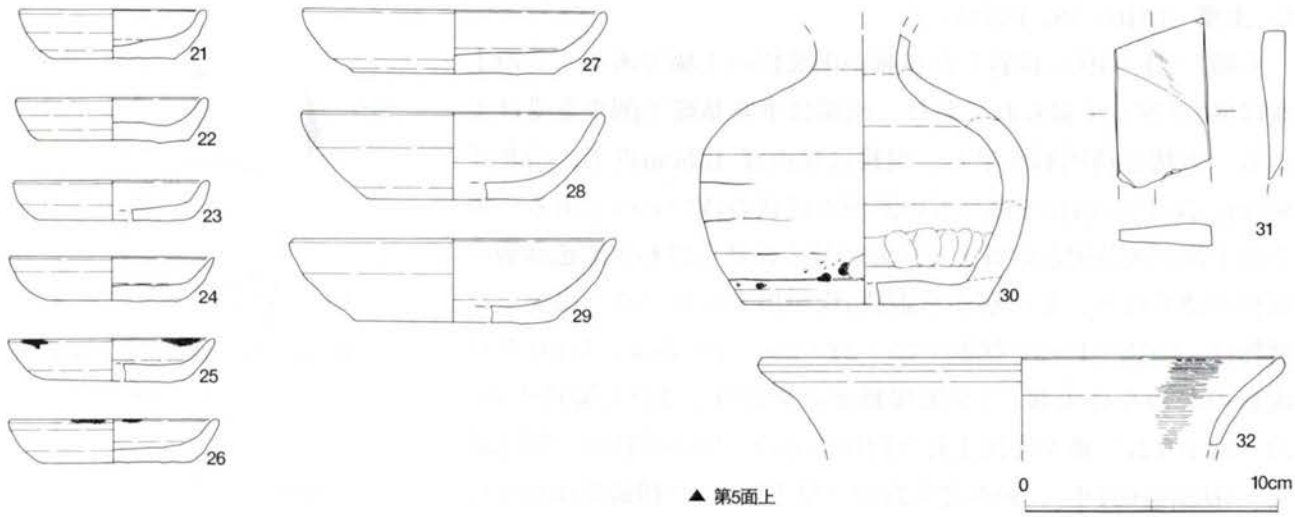
a. 第6面の遺構と遺物

この面も第5面と同じように大小土丹塊を突き固めて整地が施され、傾斜をもつ地形になるように造成が行なわれている。調査区西端で検出された東に向かって落ちる急傾斜の岩盤は、自然地形でなく人為的に造成されたものと考えられる。岩盤斜面の裾から平坦になる下面には溝・土壙・ピットなどの遺構が検出されている。

それらの遺構や面上に伴って出土した遺物には、中世前期のものとして、かわらけ・舶載陶磁器・国産陶器・土器や瓦質製品・瓦類・金属製品・石製品があり、客土や覆土に紛れ込んだ中世以前の須恵器・土師器などが出土している。



▲ 溝 1



▲ 第5面上

図14　第5面溝1・面上出土遺物

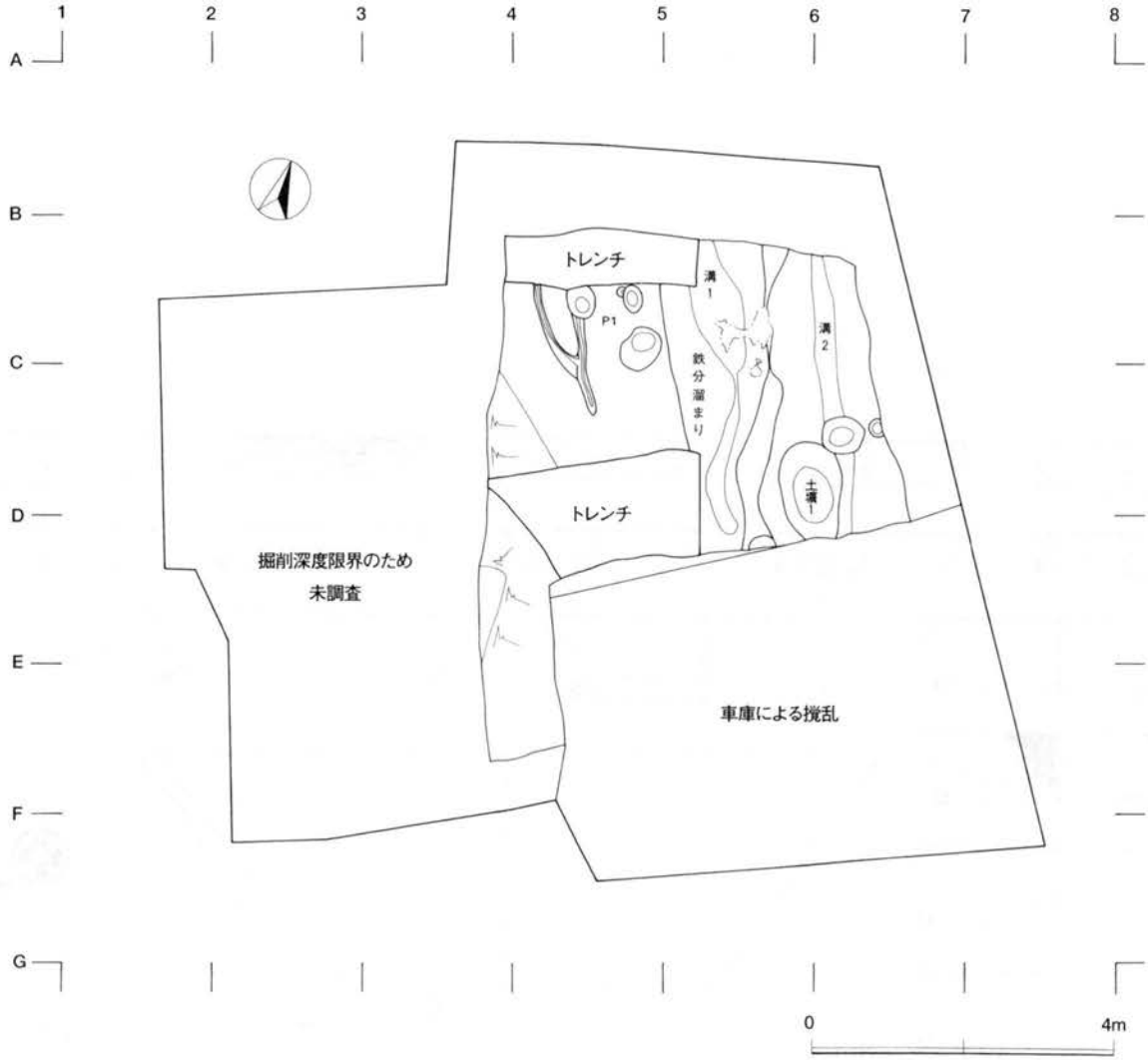


図15　第6面全測図

1. 土壙（図16・18、図版4・7）

土壙1：D－6杭に位置した長軸が南北位の土壙である。この土壙は溝2を壊して掘られており、南端は車庫基礎で削平を受けている。形状は楕円形を呈し、規模は東西径 135cm以上、南北径80cm、深さ20cm程で掘り方の断面が皿状の浅いものである。覆土は上部が灰茶褐色砂質土で底面に薄く砂鉄を思わす黒色砂層の堆積が認められ、その層から銅銭4枚が出土している。出土した遺物は、図18－1～3と図20－23・24・29～32である。1はロクロ成形のかわらけ大皿、2が黒褐釉壺の胴部片、3が土器質火鉢、23・24が女瓦で極楽寺出土瓦と同類のもの、29が唐代の「開元通宝」(初鋳造621年)、30が北宋銭の「皇宋通宝」(初鋳造1039年)、31・32が北宋銭の「元祐通宝」(初鋳造1086年)である。

土壙2：C－5杭に近接した位置で溝1を壊して掘られている。形状は楕円形を呈し、規模は南北径65cm、東西径50cm、深さ20cmと浅く断面が皿状を呈した掘り方をもち、覆土は粗い砂を含む灰茶褐色砂質土である。

出土遺物は、図18－4のロクロ成形のかわらけ小皿である。

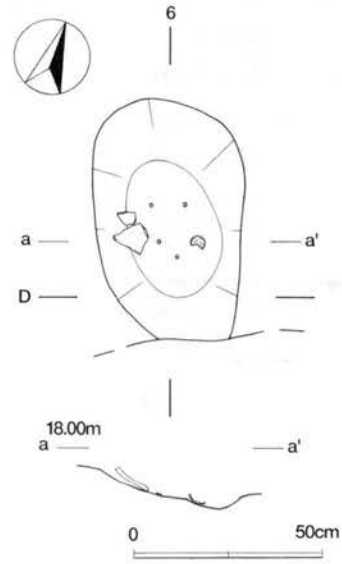


図16　第6面　土壙1

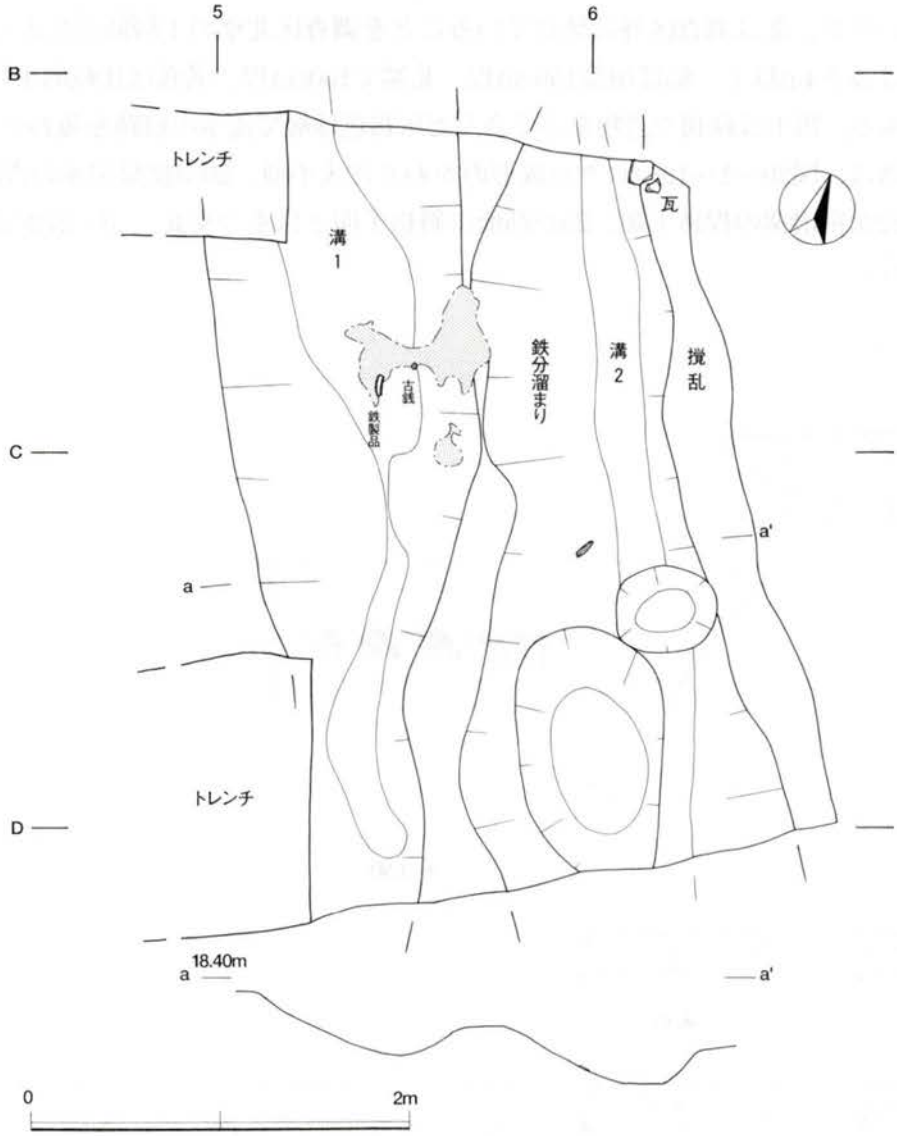


図17　第6面　溝1・2

2. 溝（図17・19・20、図版4・7）

溝1：調査区東側の5ライン沿いに確認された南北に延びる流路を思わす溝状遺構である。東側の掘り込み肩は溝2の掘り方と接して重複関係にあり、本溝が新しい。南側は車庫基礎の撹乱で壊されていたが、北は調査区外に延びていることを調査区北壁土層断面の堆積によって確認している。確認した規模は長さ4m以上、幅は一定ではなく南端で80cm、北端で130cm程、底面は平坦でなく比高差があるので深さが15～35cmと一定していない。覆土は砂利・粗砂を多く含んだ灰茶褐色砂層で流水の痕跡を窺わせる。

出土した遺物は、図19－1～3のロクロ成形のかわらけ大小皿、4が龍泉窯系の青磁無文皿、5が白磁の口兀皿、6が常滑窯の捏鉢Ⅱ類、7が中央の窪んだ分銅型をした擦石と思われるもの、8・9が鉄製品で皿状のものと釘、10が凸面に斜格子叩き目もつ女瓦、11が銅製品で掛金具的なものか、12～14は北宋銭であり、12が「景徳元宝」(初鋳造1004年)、13が「嘉祐元宝」(初鋳造1056年)、14が「元祐通宝」(初鋳造1086年)、15が土師器甕の胴部片である。

溝2：溝1と同じく流水の痕跡を残しており、浅い流路のような溝状遺構である。南側は車庫基礎の攪乱で壊されていたが、北は調査区外に延びていることを調査区北壁の土層断面によって確認している。確認した規模は長さ4m以上、幅は南端150cm程、北端で100cm程、溝底は比較的平坦で深さ20cm前後の浅いものである。覆土は砂利や遺物を多く含んだ灰褐色砂層で流水の痕跡を窺わせる。

出土した遺物は、図20－1～19のロクロ成形のかわらけ大小皿、20が龍泉窯系の青磁無文碗、21が青磁蓮弁文碗、22が常滑窯の捏鉢Ⅰ類、25が凸面に斜格子叩き目もつ女瓦、26・27が京都鳴滝産の砥石、28が鉄釘である。

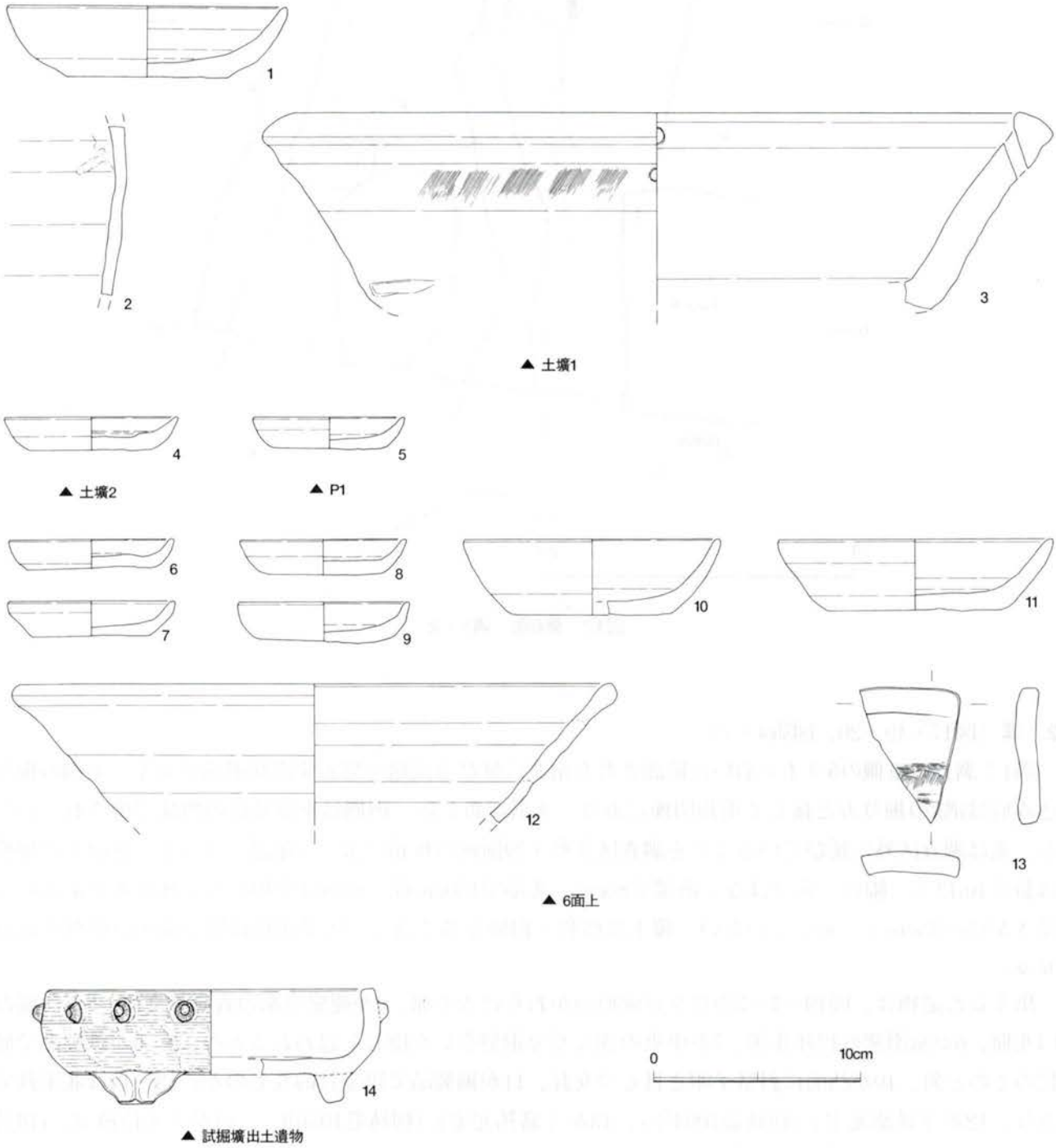


図18 第6面　土壙・ピット・その他出土遺物

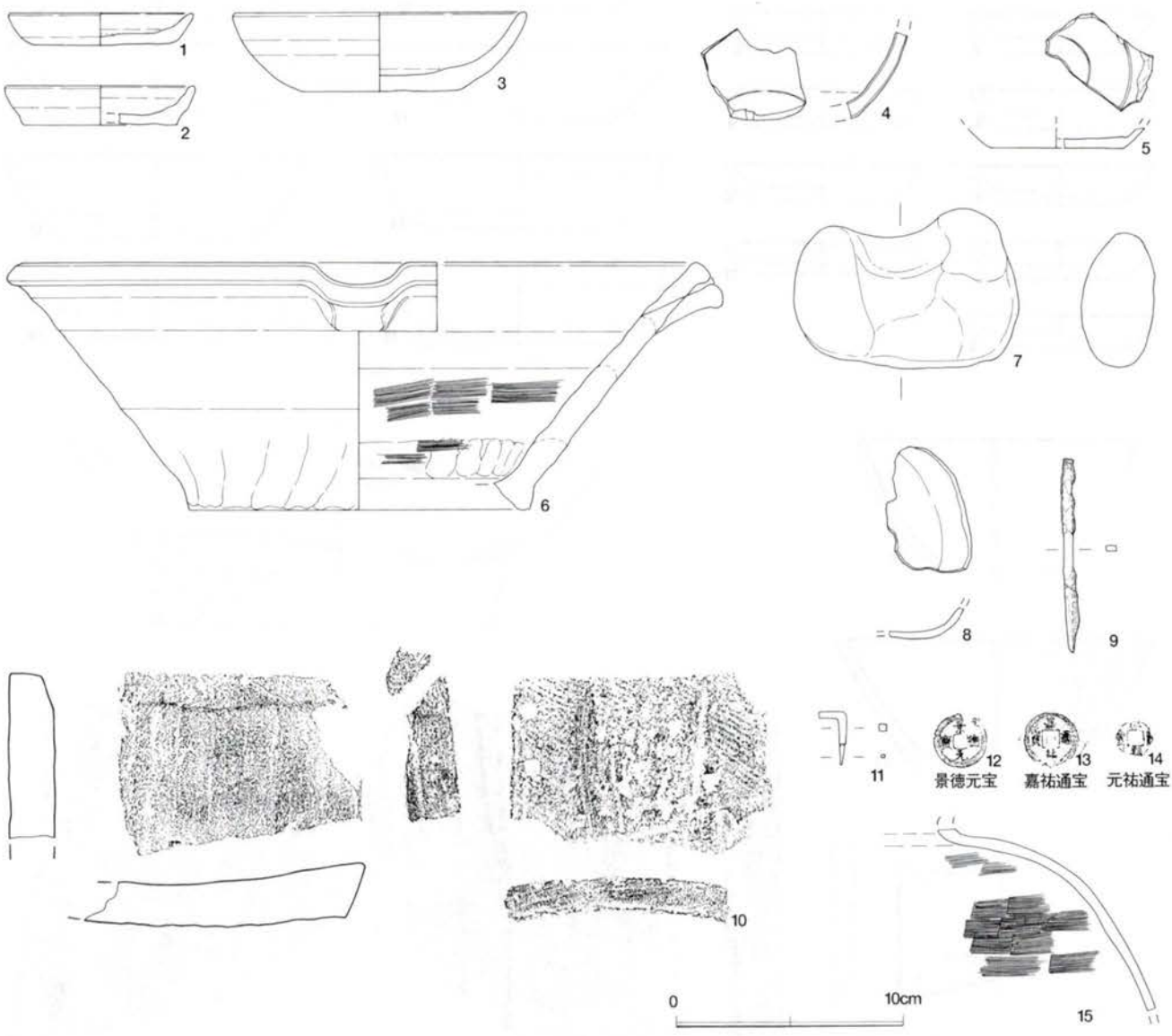


図19　第6面　溝1出土遺物

この他の遺構として4・5ラインの間で二股に別れた幅の狭い溝状遺構が認められ、また掘り方の浅いピット5口を検出していが遺構の性格は不明である。出土遺物としてはピット1から図18－5のロクロ成形のかわらけ小皿がある。

図18－6～13の遺物は、第5面下から第6面上までの構成土層中から出土した遺構外のものである。6～11がロクロ成形のかわらけであるが、小皿は口径7.9～8.2cmで器高が2cm以下の比較的低いもの、12が常滑窯の捏鉢Ⅰ類、13が常滑窯甕の小片で両面と割口断面に研磨痕が認めれる。

また図18－14は瓦質香炉である。この遺物は鎌倉市教育委員会が本調査前に実施した試掘調査において出土したものである。瓦質香炉は口径15.6cm、底径13.8cm、器高 5.6cmを計り、砂目底の外底部に逆台形状の脚を貼り付けた三足香炉である。胎土は灰白色を呈し、黒色砂粒を含むが比較的良質なもので、焼成も良好である。器表は口唇部から体部外面と、脚部外面も良く磨かれて光沢をもつ灰黒色であり、内面は横位ナデで成形している。外面の口縁部下には径1cm程の珠文を貼付けている。

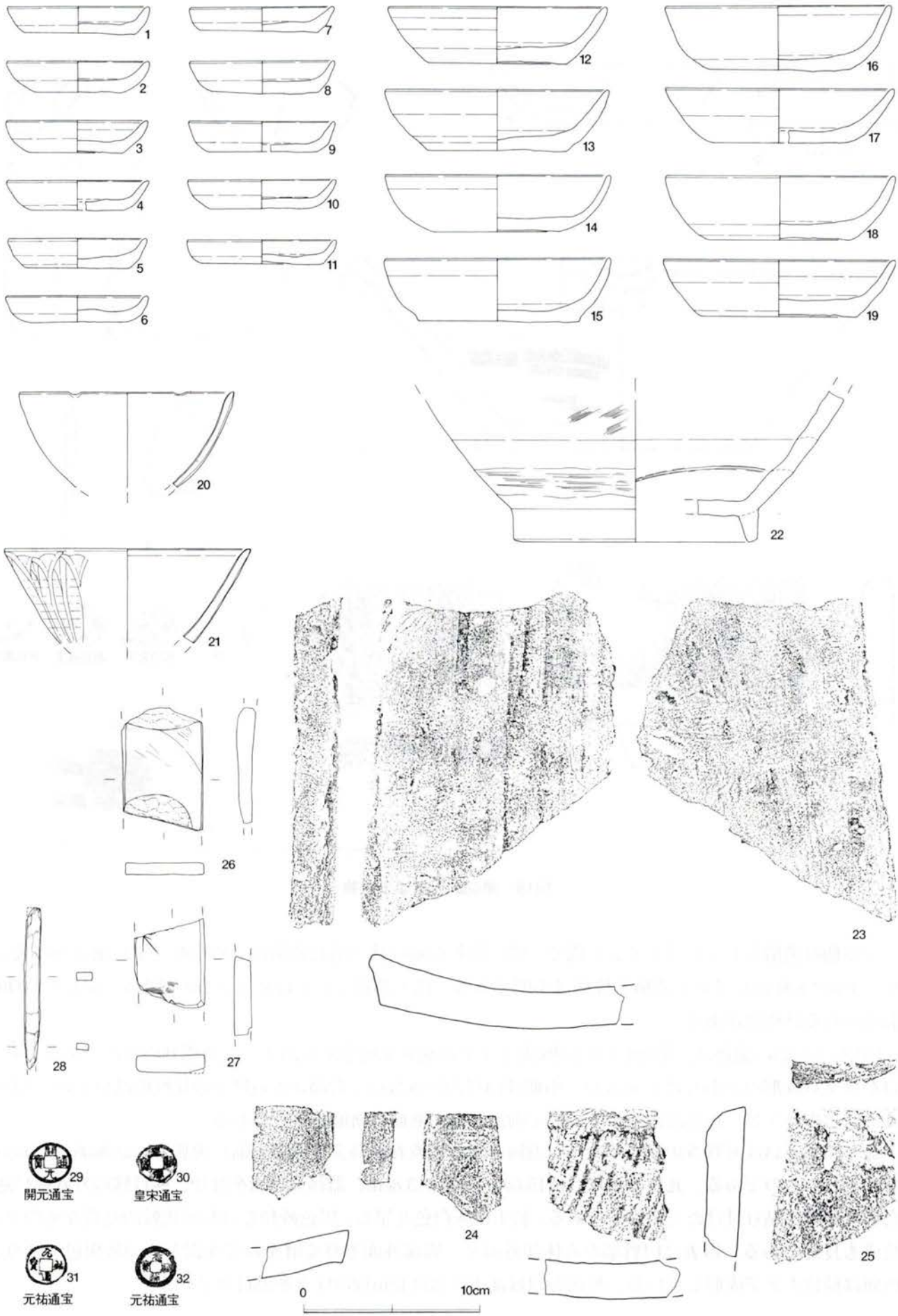


図20　第6面　溝2出土遺物

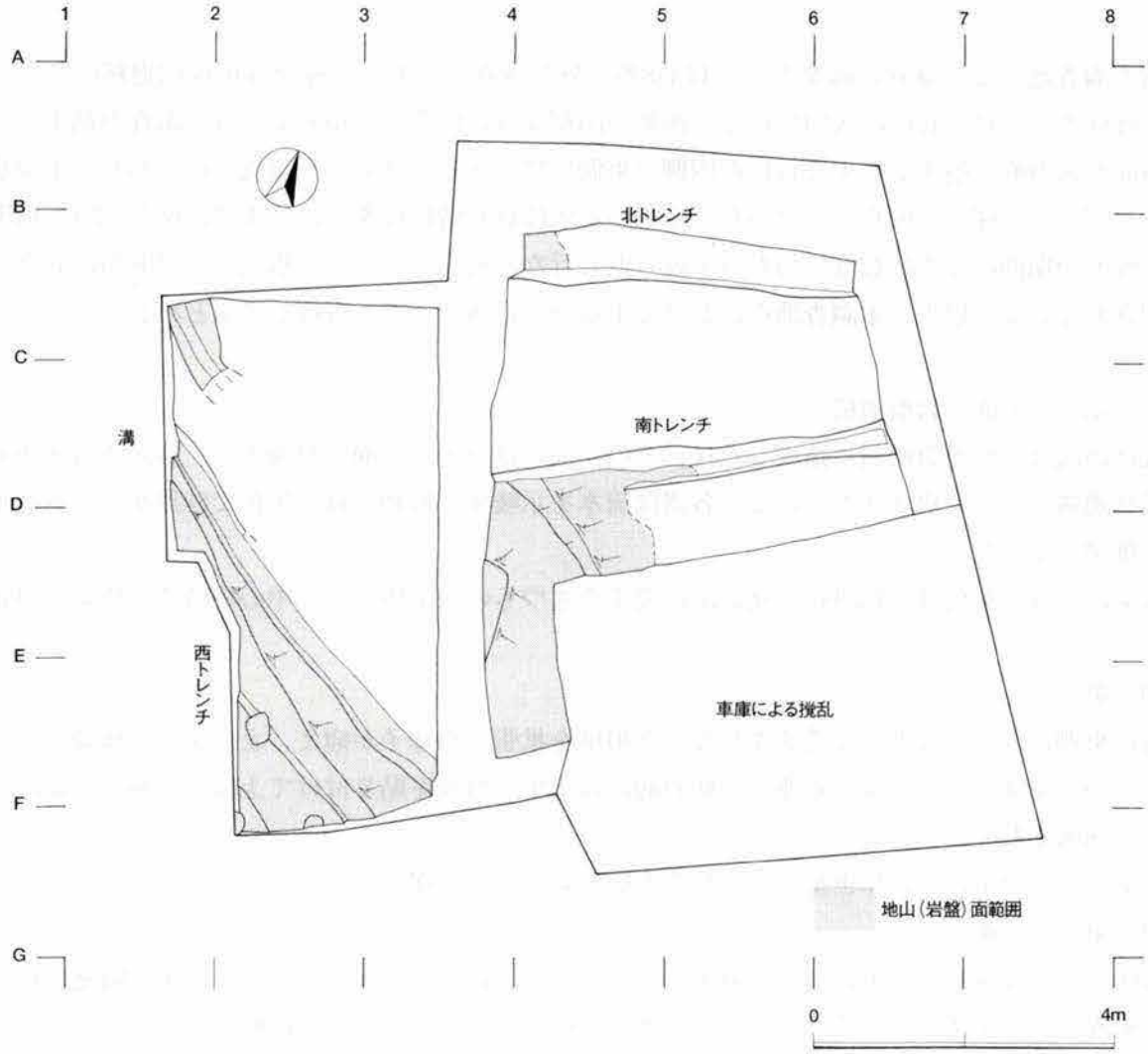


図21 各トレンチ全測図（岩盤）

b. 第6面下のトレンチ調査

第6面の調査終了後に岩盤面及び岩盤の落ち込みを確認する目的で調査区北壁際（北トレンチ）と南壁際（南トレンチ）にそれぞれ建築予定の掘削深度までトレンチを入れて確認を行なった。さらに上段部の調査区で西端にあたり第1面検出で確認した岩盤削平面の東肩に沿う形で（西トレンチ）トレンチを設定して掘り下げを行なった。

南トレンチでは大半を車庫基礎の撹乱に占められていたが、トレンチ北壁際を掘り下げたところ西側には関東ローム層に類似した赤褐色粘質土の厚い堆積が認められ、それを除去すると第6面で検出した岩盤落ち込みの続きを確認することができた。また北トレンチでも西端から岩盤斜面の一部が認められ、両トレンチとも岩盤はさらに落ち込んで行く様子が窺える。

西トレンチでは第3面の検出遺構で述べたように岩盤削平面際に沿って南北に走る溝が確認されている。

第4章　まとめ

今回の調査地点は、鎌倉市極楽寺三丁目358番５外に所在しており、極楽寺旧境内遺跡の一角で月影ヶ谷と呼称される長い谷戸の入口に近く、西側の山裾部分に位置した場所あでる。調査の結果、丘陵の山裾斜面を人為的に削平した上で谷戸の内側（東側）に向かって埋立てた造成が行なわれ、平場を徐々に拡大していった様子が明らかとなった。平場の造成は鎌倉時代後期にはじまり、南北朝時代前期頃までの比較的短期間のうちに数度にわたって繰り返し行なわれたことが各遺構面と土層断面の観察によって確認されている。以下、本調査地点における生活面と遺構の変遷を概観してまとめとしたい。

Ⅰ期＝第５・６面と岩盤遺構

調査区西端は岩盤を急傾斜に造成した後、その前面に狭い平坦な面が整地され、斜面下は東西方向の浅い溝状遺構によって構成されている。各溝は流水を示唆する砂利・砂（黒色で砂鉄か）・水磨礫が互層状に堆積していた。

搬入品からみた年代は、13世紀中葉以降の要素をもつものが主体でり、中心の時期は概ね13世紀後葉と捉えたい。

Ⅱ期＝第３・４面

調査区東側に向かって埋立て造成を行ない平坦地を拡張した様子が窺え、また上段で確認した岩盤削平面際に沿って溝、さらに現市道側への傾斜面には大小土丹塊を貼り付けて土留めを施した雛段状の整地により構成されている。

搬入品からみた年代は、13世紀後～末葉を中心としたものと捉えたい。

Ⅲ期＝第１・２面

調査区東半分は後世の削平によって破壊されていたが、岩盤削平面とそれに続く土丹版築の地業が施により構成される生活面である。第１面の土壙は土層断面からそれらが連続的に掘られていたことが観察された。

搬入品からみた年代は、13世紀末葉～14世紀前半までの様相を示している。

なお、本調査地点の北側に位置し、東側道路に面した図１－２地点（極楽寺三丁目 355番３）の調査においても類似した土層堆積が観察された。調査結果では、13世紀後半から14世紀後半にわたり、丘陵の山裾斜面を人為的に削平した上で谷戸の内側（東側）に向かって埋立てた造成が行なわれ、平場を徐々に拡大していった様子が明らかとなっている。

以上のように、本地点における谷戸開発は遅くとも鎌倉時代後期から開始され、南北朝時代前期頃まで山裾や斜面を掘削して雛段状の平場造成して居住空間を形成していたものと考えられる。さらに古代遺構の検出は認められなかったものの、造成客土となる整地層に混じり土師器や須恵器の小片が出土している。本遺跡内の中世以前遺物が出土した調査地点をみると、図１－５地点（極楽寺三丁目298番２外）からは８世紀後半から９世紀後半を主体する相模型坏や盤状坏の土師器と、須恵器坏などの中世遺物を凌駕する量の遺物が発見されている。鎌倉市内ではこうした谷戸内や丘陵斜面に集落が発見されることが多く、谷戸内にも沖積地を生産基盤とした当時人々の生活の存在が予想される。

表1　法量表（1）

図	番号種類	法量（a:口径　b:底径　c:器高）	遺構・その他
6-1	かわらけ	a:7.2cm　b:5.9cm　c:1.4cm	1面　土壙2
6-2	かわらけ	a:7.2cm　b:4.6cm　c:1.5cm	〃　〃
6-3	かわらけ	a:8.1cm　b:5.3cm　c:1.2cm	〃　〃
6-4	かわらけ	a:7.9cm　b:6.3cm　c:1.5cm	〃　〃
6-5	かわらけ	a:7.8cm　b:5.5cm　c:1.6cm	1面　土壙3
6-6	かわらけ	a:7.3cm　b:5.0cm　c:1.4cm	〃　〃
6-7	かわらけ	a:7.7cm　b:5.8cm　c:1.5cm	〃　〃
6-8	かわらけ	a:7.6cm　b:6.0cm　c:1.4cm	〃　〃
6-9	かわらけ	a:7.5cm　b:5.2cm　c:1.7cm	1面　土壙4
6-10	かわらけ	a:7.4cm　b:5.7cm　c:1.3cm	〃　〃
6-11	かわらけ	a:7.4cm　b:5.3cm　c:1.5cm	〃　〃
6-12	かわらけ	a:8.0cm　b:6.1cm　c:1.5cm	〃　〃
6-13	かわらけ	a:12.8cm　b:8.6cm　c:3.3cm	〃　〃
6-14	かわらけ	a:7.4cm　b:4.7cm　c:1.6cm	第1面上
6-15	かわらけ	a:7.8cm　b:5.4cm　c:1.7cm	〃
6-16	かわらけ	a:7.8cm　b:5.7cm　c:1.4cm	〃
6-17	かわらけ	a:7.8cm　b:5.4cm　c:1.7cm	〃
6-18	かわらけ	a:7.9cm　b:6.5cm　c:1.4cm	〃
6-19	かわらけ	a:7.8cm　b:5.6cm　c:1.7cm	〃
6-20	かわらけ	a:12.6cm　b:8.1cm　c:3.3cm	〃
6-21	瀬戸　折縁深皿	b:9.5cm	〃
6-22	瓦質香炉	b:7.1cm	〃
6-23	鉄製品　釘	残存長:4.6cm	〃
6-24	鉄製品　釘	残存長:3.7cm	〃
6-25	鉄製品　釘	残存長:5.7cm	〃
9-1	かわらけ	a:6.7cm　b:5.1cm　c:1.6cm	第2面上
9-2	かわらけ	a:7.2cm　b:5.1cm　c:1.4cm	〃
9-3	かわらけ	a:7.3cm　b:5.7cm　c:1.3cm	〃
9-4	かわらけ	a:7.4cm　b:5.9cm　c:1.5cm	〃
9-5	かわらけ	a:7.4cm　b:5.8cm　c:1.3cm	〃
9-6	かわらけ	a:7.5cm　b:4.6cm　c:2.1cm	〃
9-7	かわらけ	a:7.9cm　b:6.3cm　c:1.6cm	〃
9-8	かわらけ	a:7.9cm　b:6.4cm　c:1.9cm	〃
9-9	かわらけ	a:7.9cm　b:4.8cm　c:2.0cm	〃
9-10	かわらけ	a:7.9cm　b:6.1cm　c:1.9cm	〃
9-11	かわらけ	a:8.2cm　b:6.1cm　c:1.7cm	〃
9-12	かわらけ	a:7.8cm　b:5.3cm　c:1.8cm	〃
9-13	かわらけ	a:12.0cm　b:7.8cm　c:3.1cm	〃
9-14	かわらけ	a:12.7cm　b:7.7cm　c:3.0cm	〃
9-15	かわらけ	a:12.4cm　b:7.8cm　c:3.5cm	〃
9-16	かわらけ	a:12.6cm　b:8.1cm　c:3.3cm	〃
9-17	常滑　甕	胴部片	〃

図	番号種類	法量（a:口径　b:底径　c:器高）	遺構・その他
9-18	男瓦	厚:1.8cm	第2面上
9-19	かわらけ	a:7.1cm　b:5.0cm　c:1.7cm	第3面上
9-20	かわらけ	a:7.5cm　b:5.4cm　c:1.6cm	〃
9-21	かわらけ	a:7.5cm　b:5.6cm　c:1.5cm	〃
9-22	かわらけ	a:7.7cm　b:5.7cm　c:1.5cm	〃
9-23	かわらけ	a:7.9cm　b:5.4cm　c:1.6cm	〃
9-24	かわらけ	a:7.9cm　b:5.2cm　c:1.6cm	〃
9-25	青磁　無文碗	高台径:3.0cm	〃
9-26	銅銭	至道元宝	〃
9-27	石製品　火打石	長:1.9cm　幅:1.7cm　厚:1.4cm	〃
11-1	かわらけ	a:4.8cm　b:4.0cm　c:0.9cm	第4面上
11-2	かわらけ	a:7.7cm　b:5.4cm　c:1.5cm	〃
11-3	かわらけ	a:7.6cm　b:4.5cm　c:2.0cm	〃
11-4	かわらけ	a:8.2cm　b:6.0cm　c:1.6cm	〃
11-5	かわらけ	a:7.7cm　b:6.1cm　c:1.5cm	〃
11-6	かわらけ	a:7.8cm　b:4.5cm　c:1.8cm	〃
11-7	かわらけ	a:8.4cm　b:6.5cm　c:1.8cm	〃
11-8	かわらけ	a:10.4cm　b:6.5cm　c:3.0cm	〃
11-9	かわらけ	a:10.5cm　b:6.4cm　c:3.3cm	〃
1110	かわらけ	a:11.4cm　b:7.4cm　c:3.1cm	〃
11-11	かわらけ	a:11.4cm　b:6.5cm　c:3.0cm	〃
11-12	かわらけ	a:11.7cm　b:7.2cm　c:3.3cm	〃
11-13	かわらけ	a:12.2cm　b:8.0cm　c:3.3cm	〃
11-14	かわらけ	a:12.2cm　b:8.7cm　c:3.2cm	〃
11-15	かわらけ	a:12.7cm　b:7.1cm　c:3.3cm	〃
11-16	かわらけ	a:13.0cm　b:8.6cm　c:3.1cm	〃
11-17	かわらけ	a:13.6cm　b:7.0cm　c:4.0cm	〃
11-18	白かわらけ	底部片	〃
11-19	瀬戸　折縁深皿	b:9.6cm	〃
11-20	瀬戸　無頸小壺	a:3.0cm	〃
11-21	常滑片転用	縦:5.9cm　横:6.6cm　厚:0.9cm	〃
11-22	女瓦	厚:1.6cm	〃
11-23	女瓦	厚:1.7cm	〃
11-24	銅銭	祥符元宝	〃
11-25	かわらけ	a:7.6cm　b:5.1cm　c:1.6cm	4面砂鉄層中
11-26	かわらけ	a:12.7cm　b:8.2cm　c:3.3cm	〃
11-27	青磁　蓮弁文碗	口縁部片	〃
11-28	白磁　口兀皿	b:5.6cm	〃
11-29	山茶碗	高台径:4.1cm	〃
11-30	石製品　砥石	残存長:4.8cm	〃
11-31	鉄製品　釘	残存長:6.6cm	〃
11-32	鉄製品　釘	残存長:6.3cm	〃

表2　法量表（2）

図	番号種類	法量（a:口径　b:底径　c:器高）	遺構・その他
11-33	鉄製品　釘	残存長:5.0cm	4面砂鉄層中
11-34	銅銭	皇宋通宝	〃
11-35	須恵器　大甕	胴部片	〃
14-1	かわらけ	a:7.0cm　b:5.0cm　c:1.9cm	5面　溝1
14-2	かわらけ	a:7.4cm　b:5.2cm　c:1.6cm	〃　〃
14-3	かわらけ	a:7.6cm　b:5.9cm　c:1.8cm	〃　〃
14-4	かわらけ	a:7.7cm　b:5.3cm　c:1.6cm	〃　〃
14-5	かわらけ	a:7.9cm　b:5.8cm　c:1.5cm	〃　〃
14-6	かわらけ	a:7.9cm　b:6.0cm　c:1.6cm	〃　〃
14-7	かわらけ	a:8.0cm　b:5.6cm　c:1.4cm	〃　〃
14-8	かわらけ	a:7.9cm　b:6.5cm　c:1.6cm	〃　〃
14-9	かわらけ	a:7.9cm　b:5.7cm　c:2.0cm	〃　〃
14-10	かわらけ	a:8.2cm　b:6.0cm　c:1.7cm	〃　〃
14-11	かわらけ	a:11.0cm　b:6.5cm　c:3.0cm	〃　〃
14-12	かわらけ	a:11.1cm　b:6.7cm　c:2.7cm	〃　〃
14-13	かわらけ	a:12.1cm　b:7.3cm　c:3.2cm	〃　〃
14-14	かわらけ	a:12.3cm　b:8.4cm　c:3.1cm	〃　〃
14-15	かわらけ	a:12.6cm　b:8.5cm　c:3.4cm	〃　〃
14-16	白磁　口兀碗	a:13.5cm	〃　〃
14-17	青白磁　合子蓋	a:6.4cm	〃　〃
14-18	常滑　捏鉢Ⅰ類	a:28.6cm	〃　〃
14-19	銅銭	政和通宝	〃　〃
14-20	須恵器　杯	b:4.8cm	〃　〃
14-21	かわらけ	a:7.2cm　b:5.0cm　c:2.0cm	第5面上
14-22	かわらけ	a:7.5cm　b:6.0cm　c:1.7cm	〃
14-23	かわらけ	a:7.6cm　b:6.0cm　c:1.6cm	〃
14-24	かわらけ	a:8.0cm　b:5.2cm　c:1.8cm	〃
14-25	かわらけ	a:8.0cm　b:5.7cm　c:1.6cm	〃
14-26	かわらけ	a:8.2cm　b:6.0cm　c:1.7cm	〃
14-27	かわらけ	a:11.9cm　b:8.0cm　c:2.5cm	〃
14-28	かわらけ	a:11.8cm　b:6.8cm　c:3.4cm	〃
14-29	かわらけ	a:12.8cm　b:7.9cm　c:3.3cm	〃
14-30	常滑　鳶口壺	b:9.6cm	〃
14-31	石製品　砥石	残存長:5.6cm	〃
14-32	土師器　長胴甕	a:20.7cm	〃
18-1	かわらけ	a:13.4cm　b:7.8cm　c:3.4cm	6面　土壙1
18-2	褐釉　壺	胴部片	〃　〃
18-3	土器質火鉢	a:35.0cm	〃　〃
18-4	かわらけ	a:8.3cm　b:5.7cm　c:1.6cm	6面　土壙2
18-5	かわらけ	a:7.2cm　b:5.4cm　c:1.5cm	6面　ピット1
18-6	かわらけ	a:7.9cm　b:6.2cm　c:1.4cm	第6面上
18-7	かわらけ	a:7.9cm　b:5.7cm　c:1.7cm	〃

図	番号種類	法量（a:口径　b:底径　c:器高）	遺構・その他
18-8	かわらけ	a:8.0cm　b:5.6cm　c:1.7cm	第6面上
18-9	かわらけ	a:8.2cm　b:6.3cm　c:1.9cm	〃
18-10	かわらけ	a:12.3cm　b:7.5cm　c:3.6cm	〃
18-11	かわらけ	a:13.2cm　b:8.3cm　c:3.4cm	〃
18-12	常滑　捏鉢Ⅰ類	a:28.8cm	〃
18-13	転用常滑片	縦:6.6cm　幅:4.8cm　厚:1.0cm	〃
18-14	瓦器質香炉	a:15.6cm　b:13.8cm　c:5.6cm	試掘壙
19-1	かわらけ	a:8.1cm　b:6.1cm　c:1.4cm	6面　溝1
19-2	かわらけ	a:8.2cm　b:6.8cm　c:1.7cm	〃　〃
19-3	かわらけ	a:12.8cm　b:7.0cm　c:3.5cm	〃　〃
19-4	青磁　無文皿	体部片	〃　〃
19-5	白磁　口兀皿	b:5.8cm	〃　〃
19-6	常滑　捏鉢Ⅱ類	a:30.0cm　b:15.0cm　c:11.0cm	〃　〃
19-7	石製品　擦石	長:10.0cm　幅:5.9cm　厚:3.2cm	〃　〃
19-8	鉄製品　皿	体部片	〃　〃
19-9	鉄製品　釘	残存長:8.7cm	〃　〃
19-10	女瓦	厚:1.9cm	〃　〃
19-11	銅製品　掛金具	長:2.4cm　幅:0.3cm　厚:0.3cm	〃　〃
19-12	銅銭	景徳元宝	〃　〃
19-13	銅銭	嘉祐通宝	〃　〃
19-14	銅銭	元祐通宝	〃　〃
19-15	土師器　甕	肩部～胴部	〃　〃
20-1	かわらけ	a:8.0cm　b:6.2cm　c:1.5cm	6面　溝2
20-2	かわらけ	a:8.0cm　b:5.2cm　c:1.8cm	〃　〃
20-3	かわらけ	a:8.0cm　b:5.2cm　c:1.8cm	〃　〃
20-4	かわらけ	a:8.0cm　b:5.1cm　c:1.8cm	〃　〃
20-5	かわらけ	a:7.8cm　b:5.9cm　c:1.7cm	〃　〃
20-6	かわらけ	a:8.0cm　b:5.1cm　c:1.5cm	〃　〃
20-7	かわらけ	a:8.2cm　b:6.8cm　c:1.4cm	〃　〃
20-8	かわらけ	a:8.2cm　b:6.2cm　c:1.8cm	〃　〃
20-9	かわらけ	a:8.2cm　b:6.3cm　c:1.7cm	〃　〃
20-10	かわらけ	a:8.4cm　b:5.8cm　c:1.7cm	〃　〃
20-11	かわらけ	a:8.4cm　b:6.9cm　c:1.4cm	〃　〃
20-12	かわらけ	a:12.3cm　b:7.9cm　c:3.2cm	〃　〃
20-13	かわらけ	a:12.6cm　b:7.8cm　c:3.4cm	〃　〃
20-14	かわらけ	a:12.8cm　b:7.0cm　c:3.3cm	〃　〃
20-15	かわらけ	a:12.8cm　b:9.2cm　c:3.6cm	〃　〃
20-16	かわらけ	a:12.8cm　b:8.0cm　c:3.7cm	〃　〃
20-17	かわらけ	a:13.0cm　b:7.4cm　c:3.0cm	〃　〃
20-18	かわらけ	a:13.0cm　b:8.0cm　c:3.7cm	〃　〃
20-19	かわらけ	a:13.1cm　b:8.9cm　c:3.2cm	〃　〃
20-20	青磁　無文碗	a:12.2cm	〃　〃

表3　法量表（3）

図	番号種類	法量（a:口径　b:底径　c:器高）	遺構・その他
20-21	青磁　蓮弁文碗	a:14.0cm	6面　溝2
20-22	常滑　捏鉢Ⅰ類	高台径:14.0cm	〃　〃
20-23	女瓦	厚:2.4cm	〃　〃
20-24	女瓦	厚:1.7cm	〃　〃
20-25	女瓦	厚:2.0cm	〃　〃
20-26	石製品　砥石	残存長:6.5cm	〃　〃
20-27	石製品　砥石	残存長:4.5cm	〃　〃
20-28	鉄製品　釘	残存長:9.2cm	〃　〃
20-29	銅銭	開元通宝	〃　〃
20-30	銅銭	皇宋通宝	〃　〃
20-31	銅銭	元祐通宝	〃　〃
20-32	銅銭	元祐通宝	〃　〃

図版 1

▲　a．第1面全景（西から）

▲　b．第2面全景（西から）

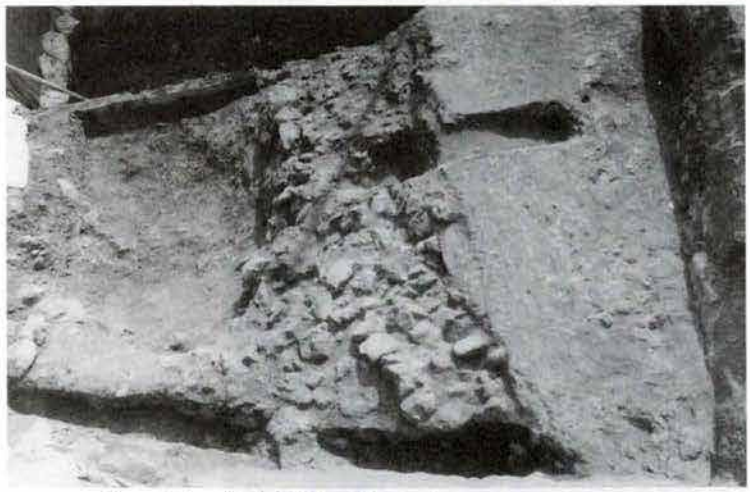
▲　c．第2面全景（南から）

▲ a. 第3面全景（南から）

▲ b. 第3面斜面検出状況（東から）
土丹塊の貼り付けにより土溜めの擁護を施す（写真b·d·e）

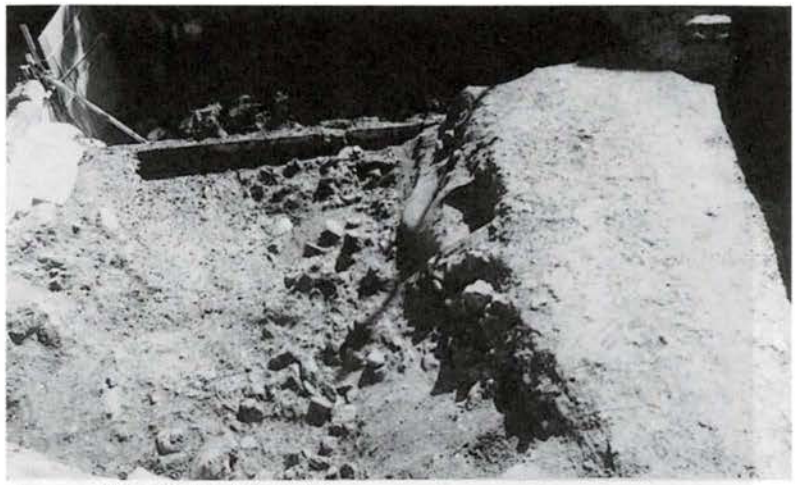
▲ d. 第4面斜面検出状況（東から）

▲ c. 第4面全景（南から）



▲ e. 第4面斜面検出状況（北から）

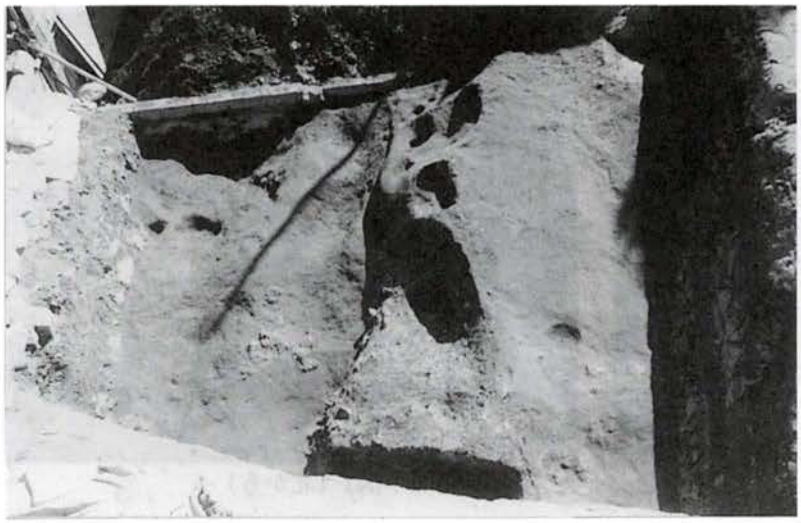
図版 3



▲ a. 第5面全景（北から）

▲ b. 第5面上の遺物出土状況（常滑鳶口壺・かわらけ）

◀ c. 第5面溝1（北から）



▲ a. 第6面上全景（北から）

▲ b. 第6面上　溝1（南から）

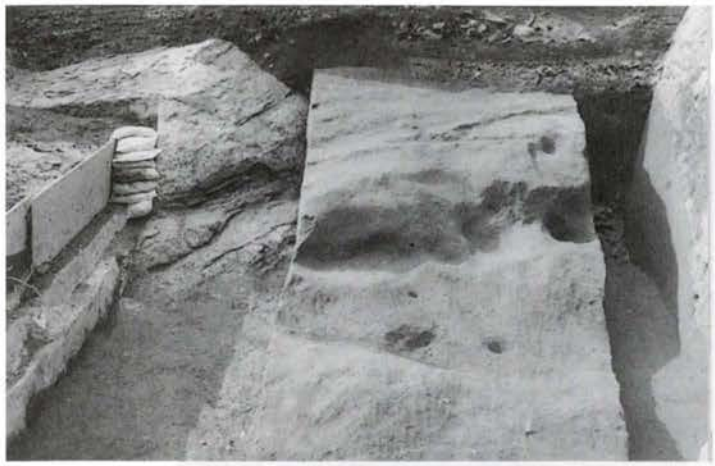
▲ c. 第6面上 鉄分溜まり（東から）

▲ d. 第6面 土壙1遺物出土状況

図版 5

▲ a. 第6面下全景（南から）

▲ b. 第6面下溝1（北から）

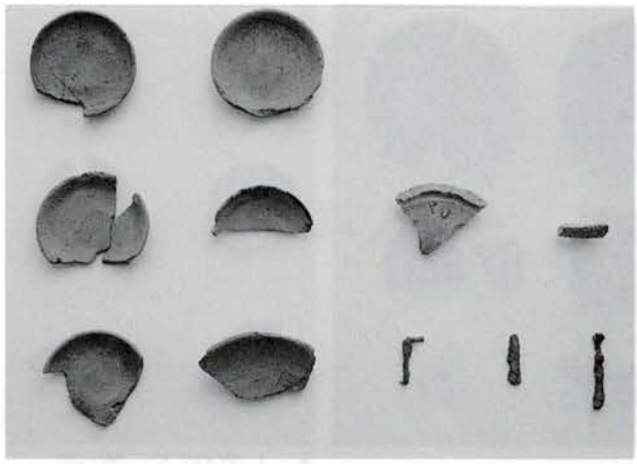


▲ d. 第6面下北トレンチ（岩盤確認状況）

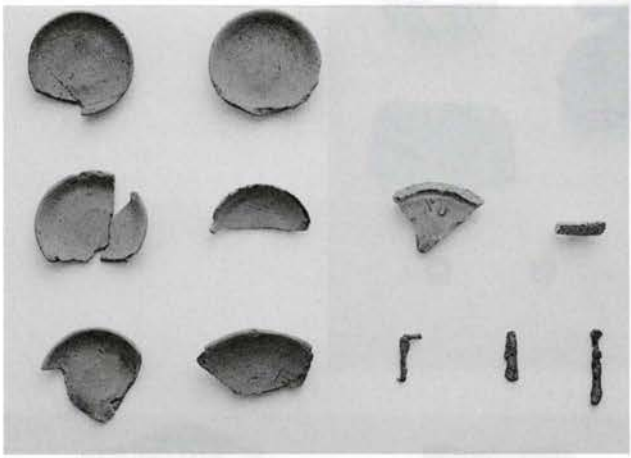
▶ c. 第6面下溝1（南から）

◀ e. 第6面下南トレンチ（岩盤確認状況）

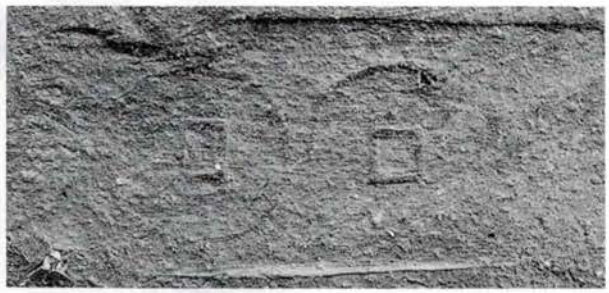
▲ f. 調査区北壁土層堆積



▲ a.第1面　土壙2

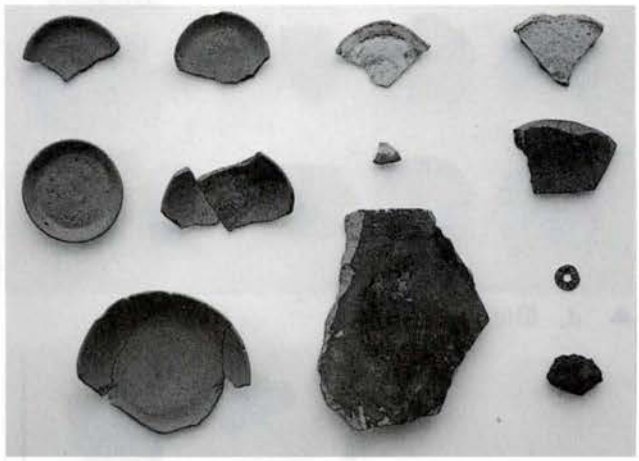


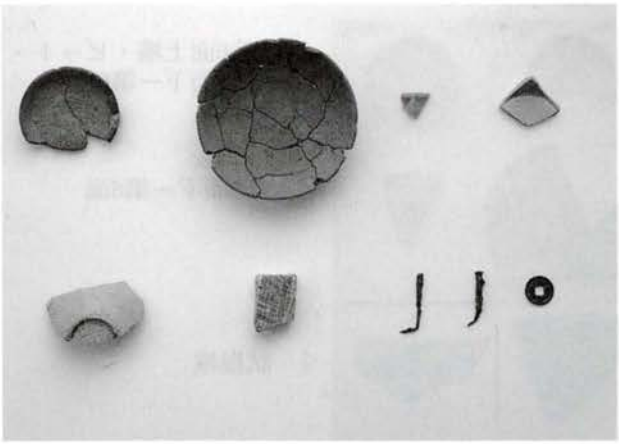
▲ b. 第1面下～第2面・第2面下～第3面



▲ 常滑寶　銭方叩き目

c. 第3面下～第4面 ▶

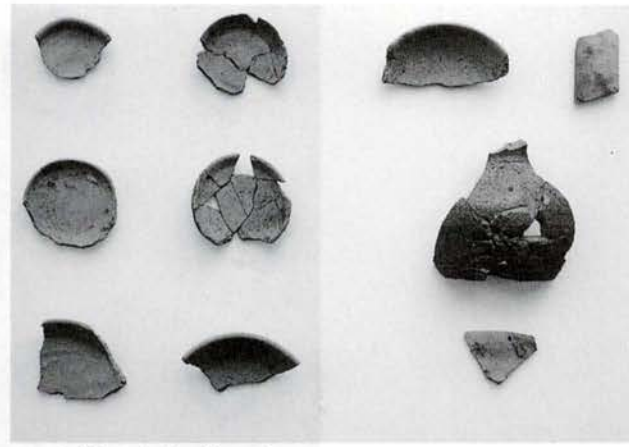




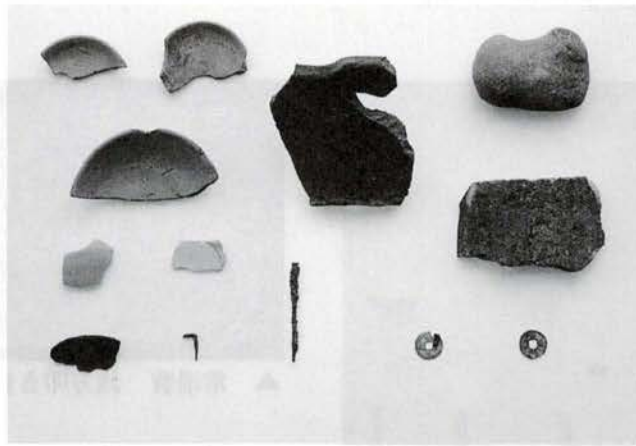
◀ d.第4面　砂鉄層中

図版 7

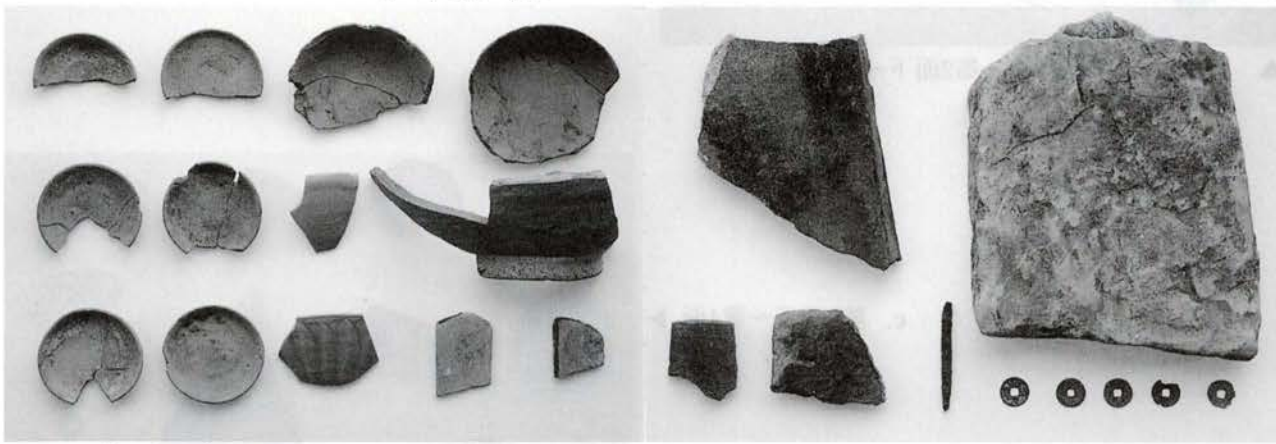
▲ a.第5面　溝1



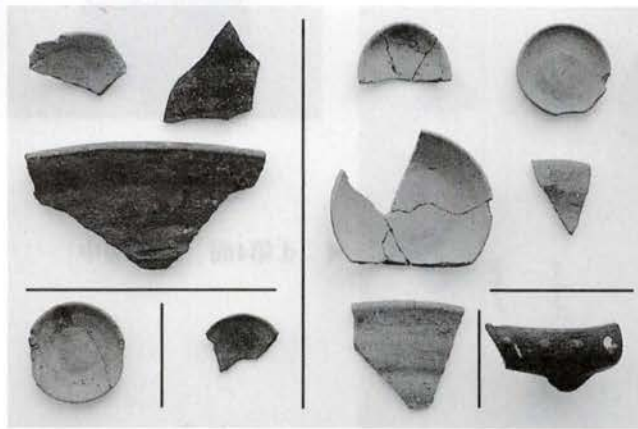
▲ b.第4面下～第5面



▲ c. 第6面　溝1



▲ d. 第6面　溝2



▷土壙1

▷土壙2・P1

◀ e. 第6面土壙・ピット・第5面下～第6面

◁ 第5面下～第6面

◁ 試掘壙

西ノ台遺跡（No.378）

台字西ノ台1595番ほか地点

例　言

1. 本報は台字西ノ台1595番ほかにおける個人専用住宅建設にともなう埋蔵文化財緊急発掘調査の報告である。
2. 調査期間　　平成15年4月11日～同年4月22日
   調査面積　　35.15㎡
3. 本地点の整理上の略称は「D1595」である。
4. 調査体制
   担　当　者　　馬淵和雄
   調　査　員　　鍛治屋勝二
   調査補助員　　沖元道・吉田智哉
   作　業　員　　牛嶋道夫・大戸迫猛・山本記康（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
5. 本報作成分担
   図版作成　　鍛治屋
   原稿執筆　　馬淵・鍛治屋

目　　次

本　文　目　次

第1章　調査の概略

1. 調査地点の位置と環境……43
2. 調査経過……43
3. 調査方法……43

第2章　調査結果

1. 基盤層面……43
2. 深掘り部分……45

第3章　まとめ……45

挿　図　目　次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡……44
図2　周辺地形と方眼設定図……46
図3　遺構全図……47
図4　深掘り……48

図　版　目　次

図版1-1　調査地点遠景（西から）……49
図版1-2　全景（北から）……49
図版1-3　全景（南から）……49
図版2-1　土坑2（西から）……50
図版2-2　深掘り状況（北から）……50
図版2-3　北壁断面（中央部分）……50

第1章　調査の概略

1. 調査地点の位置と環境

台山は鶴岡八幡宮から北西に伸びる丘陵である。標高は70mから90mほどで、複雑に入り組んだ大小の支谷が豊かな緑地を形成している。この丘陵の北（東）面には、主尾根と、それに平行する長さ100m前後の支尾根がある。調査地点は舌状に伸びた丘陵の西側斜面中腹に形成された平場に位置する。標高は25m前後で、台山遺跡（鎌倉市№29）に境を接する。現在の地番は台字西ノ台1595番ほか。二つの尾根にはさまれた狭い谷の北側出口近くにあたり、谷を出れば北側にかつて山内荘と呼ばれた北鎌倉から横浜市栄区にかけての平野部が広がる。谷口のすぐ左手、調査地点からは200mほどの場所にもと台村の村社であった神明神社がある。南東250mには地蔵堂があったと伝える場所がある。

台山に縄文時代から近世にかけての遺跡が存在することははやくから知られており、1970年代以後十数次の発掘調査がおこなわれてきた。とくに尾根基部方面（東南方向）400～500mにある台山藤源治遺跡は縄文以降長期にわたる複合遺跡である。また西側主尾根の北端に位置する水道山遺跡でも、弥生時代後期～律令時代にかけて多数の住居址が発見されている。調査地点は二つの濃密な遺跡の間に位置しており、この一帯にも往時人跡がおよんでいたであろうことが想像される。

調査地点のある平坦面は、台山の支尾根西面の頂上から一段下がったところを縦走するようなかたちで南に続く。現在は畑地や住宅地となっているが、本来はどのようなものであったのか知りたいところである。

2. 調査経過

杭打ちをともなう工事が予定されていたため確認調査を実施し、その結果土器細片が出土したので発掘調査を実施した。面積35.15㎡。調査は平成15年4月11日に始まり、同年4月22日に終了した。

3. 調査方法

調査区は細長く、また主軸方位は国土座標系から大きくずれていたので、測量の便宜のため任意の5m方眼を設定した。長軸にA以下のアルファベットを、短軸に算用数字の名称を与えた。座標系との連絡は次のとおり。

交点1－B　X　73 567.400　Y　26 735.850　〔エリア9〕

1軸とY系との偏差　N（Y）－42°19′00″－E

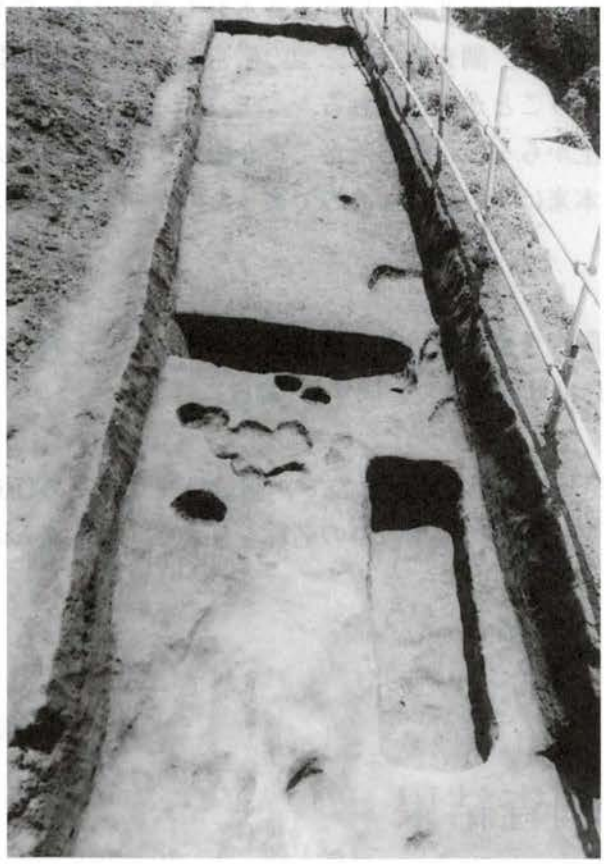
（馬淵）

第2章　調査結果

1. 基盤層面（図3）

本調査区は台山丘陵西麓の段状部に位置しており、現在まで畑地として利用されていた。耕作土は20㎝～1mほどの厚みで堆積していたが、直下に明褐色の岩盤の風化した基盤層があらわれる。生活面と呼べる状況はみあたらなかった。おそらくもともと緩やかな傾斜のあったこの場所を、耕作地にするため基盤層をいくらか削ったのであろう。基盤層は丘陵頂上部（北東）から急傾斜地方向(南西)へと緩やかに下っている。これは現地形の等高線とほぼ符合する。かつての生活面がこの場所に存在していたかどうかは不明だが、基盤層上面から土坑や小穴などがいくつか検出された。

土坑1



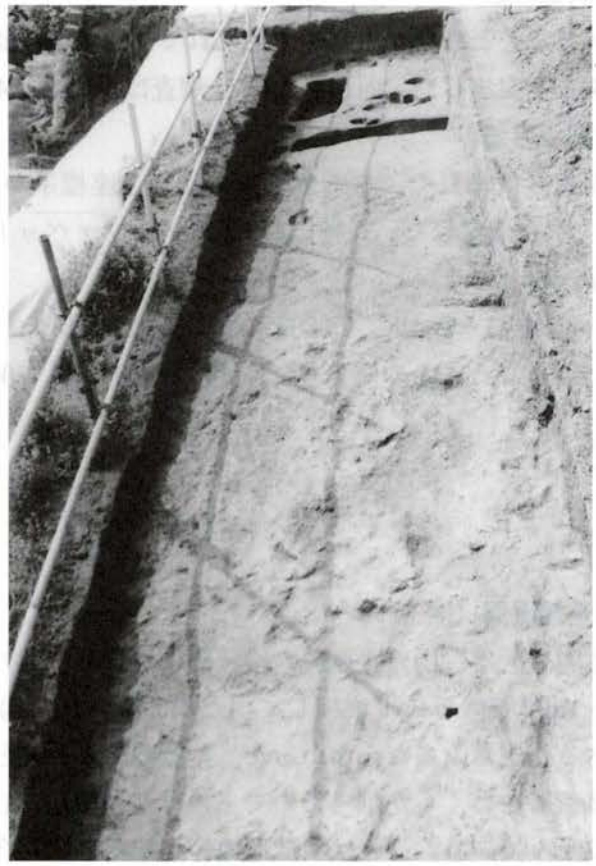


図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

位　置：1－B　　平面形：長方形　　断面形：箱形　　規　模：長辺約214cm×短辺約73cm×深さ約45～58cm（西へむかい15cmほど深く掘り込まれる）　主軸方位：N－43°－W　充塡土：図に表記　出土遺物：土師器皿R種細片（中世,図示不可能）　特記事項：充塡土は土坑2と差異はないので同時期の遺構と判断できる。上記の深さよりも上層から掘り込まれた可能性がある。深さからみて近世以後この平坦面が造成されたあとに掘られたものだろう。したがって、畑にともなう、芋などの一時的貯蔵、あるいは培養のための穴であろう。

土坑2

位　置：1・2－A・B　　平面形：長方形　　断面形：箱形　　規　模：長辺196cm以上×短辺約62cm×深さ約78～88cm（北へむかい10cmほど深く掘り込まれる）　主軸方位：N－45.5°－E　充塡土：調査区北壁土層内に表記　出土遺物：土師器皿R種細片（中世,図示不可能）　特記事項：土層観察から第2層以後に掘り込まれた遺構と判断する。これもまた、土坑1と同じく貯蔵、もしくは培養のための穴だろう。

2. 深掘り部分（図4）

先に述べたとおり基盤層とみられる岩盤崩土が調査区全域でひろがっていたが、およそ3軸をはさんで東西の地質に変化がみられたため北壁沿いを長方形状に深掘りし、その堆積状況を観察した。3軸より東側は明灰褐色土が混在した凝灰質砂岩質層(第2層)となる。ざらざら(未凝固)としていて鉄分化が著しく凝灰岩も含まれていた。西側は暗茶色の岩盤崩土（第1層）が堆積していた。層厚は5～40cmである。土層観察から判断すれば、3軸東側の第2～6層に形成された落ち込みに第3・5層の崩土が堆積したと推測できる。第9層は野島層で、第2層と酷似した凝灰岩質を呈する。表面はゴマシオ状の軽石凝灰岩を多く含んでいてやや未凝固である。野島層は大船峯之下北側付近から東方へと分布し、天神山、台山、六国見山周辺、今泉一帯などで露頭している。

（鍛治屋）

第3章　まとめ

この平坦面は、最終的には近世以後に削り出されて現在のかたちになったと推測される。しかし周辺の状況からみて、もともと台山の支尾根西面中段に帯状段部があったことは間違いない。それが何であったのかは今回の調査で明らかにすることができなかったが、近世以降の台山における土地利用の一端が窺えたといえよう。

（馬淵）

図1調査地点名と文献

1.本地点	
2.台山遺跡（No.29）	野本賢二1996「台字西ノ台1627番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13
3.　〃	大上周三1990「台字西ノ台1624番3外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告8
4.　〃	継実2001「台字西ノ台1718番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17
5.　〃	玉林美男ほか1988「台字西ノ台1730番1他」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4
6.　〃	斎木秀雄ほか1985「山ノ内字藤源治874番2」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1
7.　〃	若松美智子ほか1996「台字西ノ台1733番3外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15
8.　〃	若松美智子1998『台山遺跡』台山遺跡埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所
9.　〃	丑野毅1974「台遺跡発掘調査報告」『人文科学科紀要』第59輯　東京大学文化人類学研究室
10.台山藤源治遺跡	手塚直樹ほか1985「台山藤源治遺跡」台山藤源治遺跡発掘調査団
11.〃	大河内勉1996『台山藤源治遺跡―第2次調査報告―』台山藤源治遺跡発掘調査団
12.〃	宗臺秀明1993『台山藤源治遺跡―第3次調査報告―』台山藤源治遺跡発掘調査団
13.西瓜ヶ谷遺跡（No.213）	山ノ内字藤源治928番1ほか　1991調査　未報告
14.　〃	山ノ内字藤源治930番5ほか　2002調査　未報告
15.　〃	山ノ内字東瓜ヶ谷1294番4・5　2002調査　本書掲載
16.円覚寺門前遺跡（No.287）	伊丹まどか2000「山ノ内東瓜ヶ谷1229番1・5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16
17.　〃	継実ほか1998「山ノ内字藤源治951番2」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
18.円覚寺旧境内遺跡（No.434）	菊川英政ほか1998「山ノ内字瑞鹿山509番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
20.長勝寺跡（No.88）	長谷川厚ほか1999『長勝寺跡所在やぐら群』かながわ考古学財団
21.長勝寺跡（No.88）	鈴木庸一郎2000『長勝寺跡所在やぐら群』かながわ考古学財団

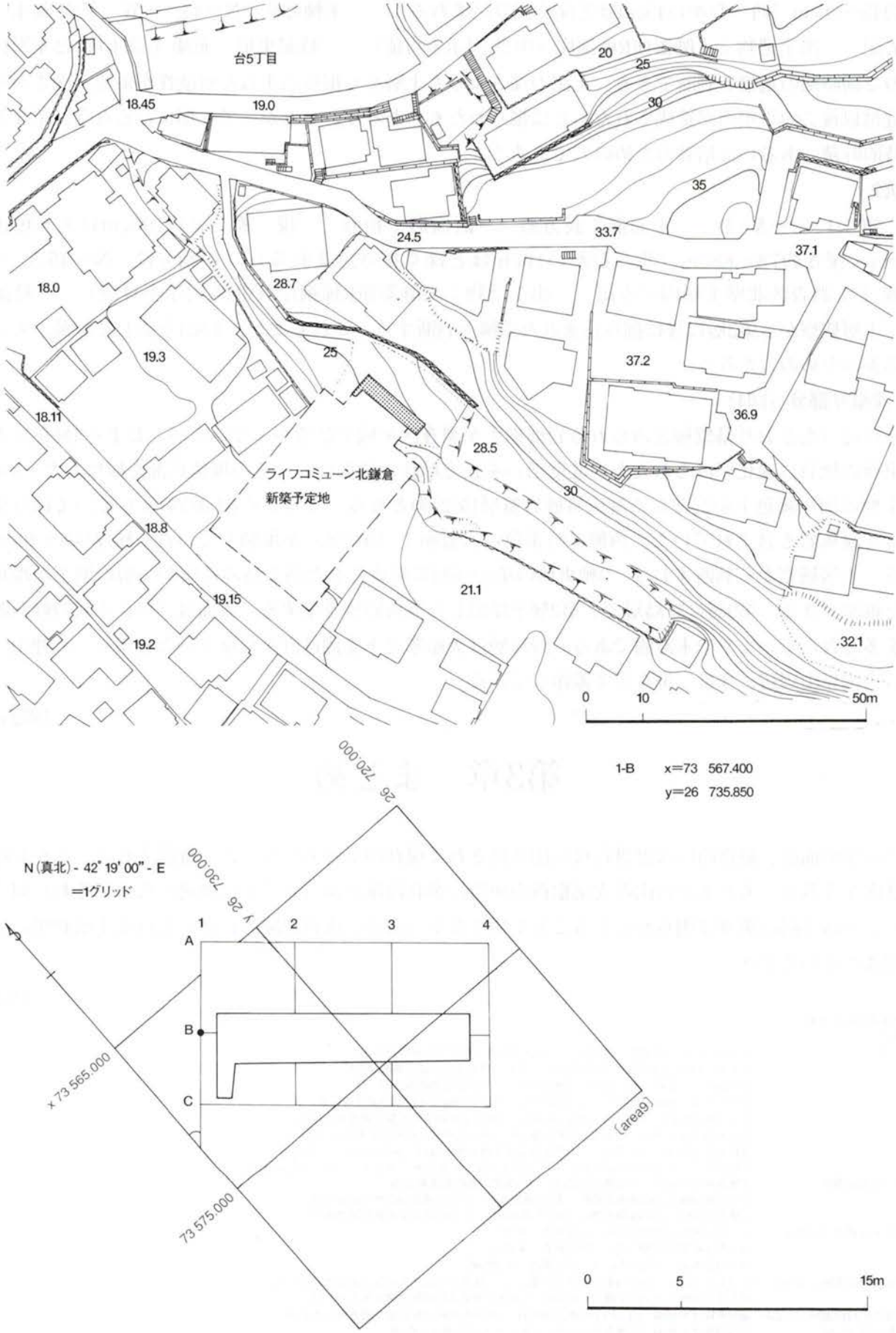


図2　周辺地形と方眼設定図

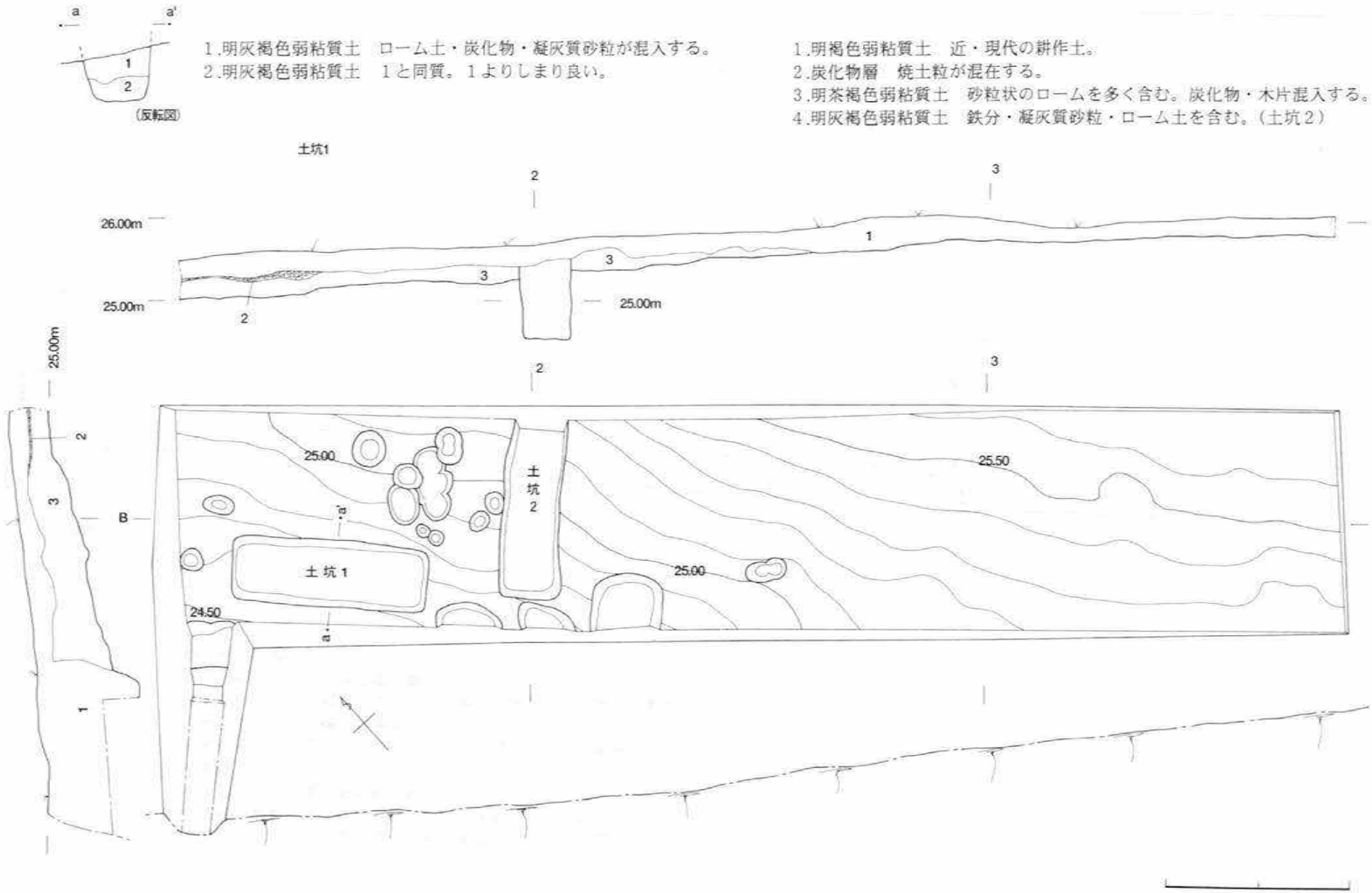

a
a'
1
2
(反転図)
1.明灰褐色弱粘質土　ローム土・炭化物・凝灰質砂粒が混入する。
2.明灰褐色弱粘質土　1と同質。1よりしまり良い。
1.明褐色弱粘質土　近・現代の耕作土。
2.炭化物層　焼土粒が混在する。
3.明茶褐色弱粘質土　砂粒状のロームを多く含む。炭化物・木片混入する。
4.明灰褐色弱粘質土　鉄分・凝灰質砂粒・ローム土を含む。(土坑2)
土坑1
26.00m
25.00m
25.00m
25.00m
25.00
25.50
25.00
24.50
土坑1
土坑2
B

図3　遺構全図

1.暗茶色ローム土　しまり良い。明灰褐色土塊を若干含む。
2.凝灰質砂岩層　褐鉄化がはげしい。明灰褐色土塊が混入する。
3.明灰褐色粘土　凝灰質砂粒・鉄分を多く含む。
4.灰黄色ローム土　硬くしまる。
5.明灰褐色ローム土　硬くしまる。鉄分・凝灰質砂粒・黄色ローム土を含む。
6.白黄色ローム土　硬くしまる。
7.黄灰色ローム土　硬くしまる。第５層との境界周辺に鉄分が集中する。
8.凝灰質砂岩とローム土の混合層
9.凝灰質砂岩層

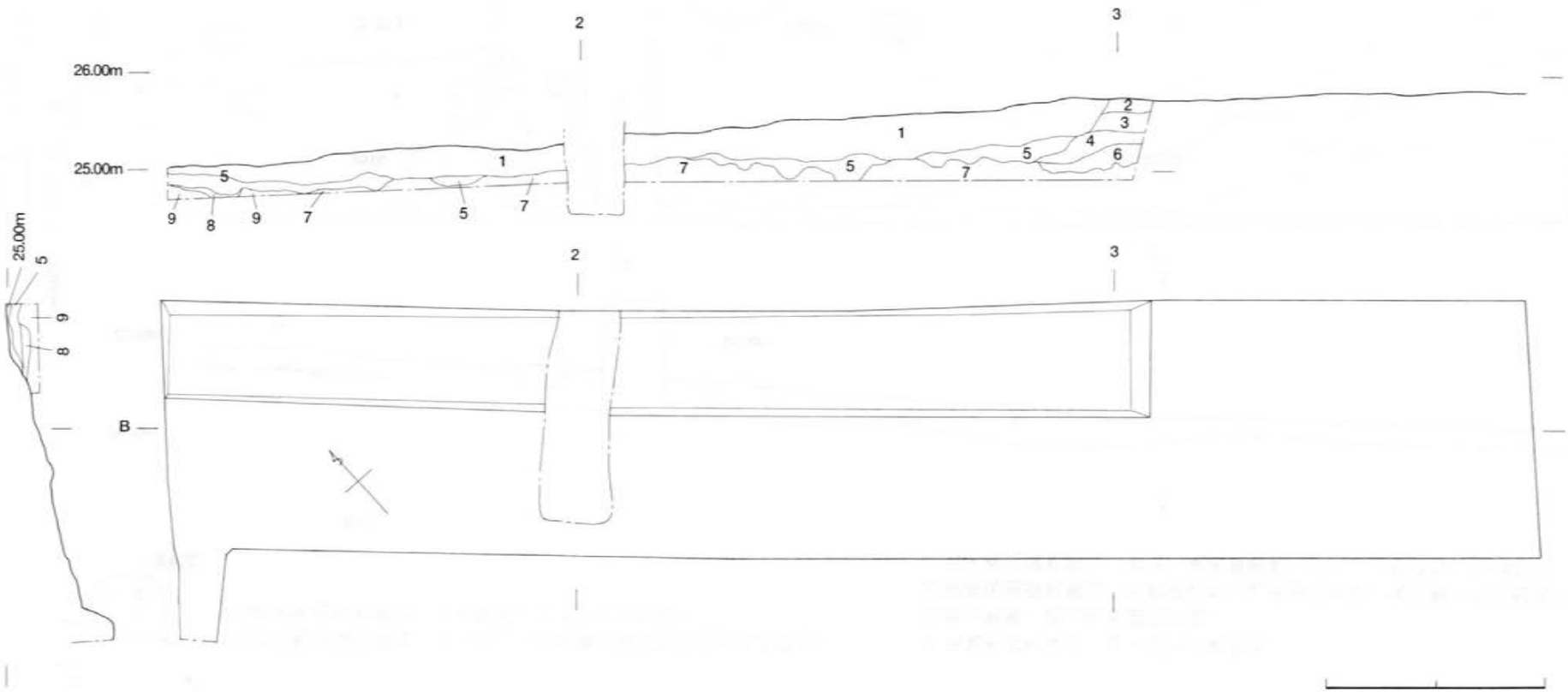
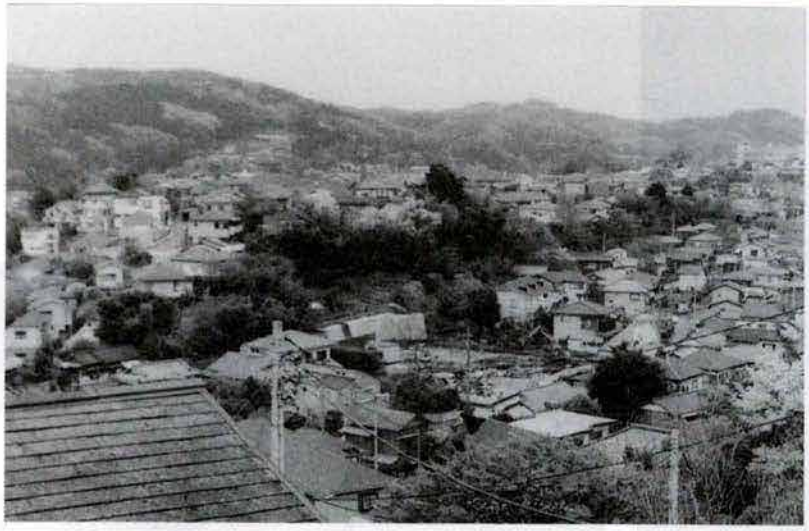
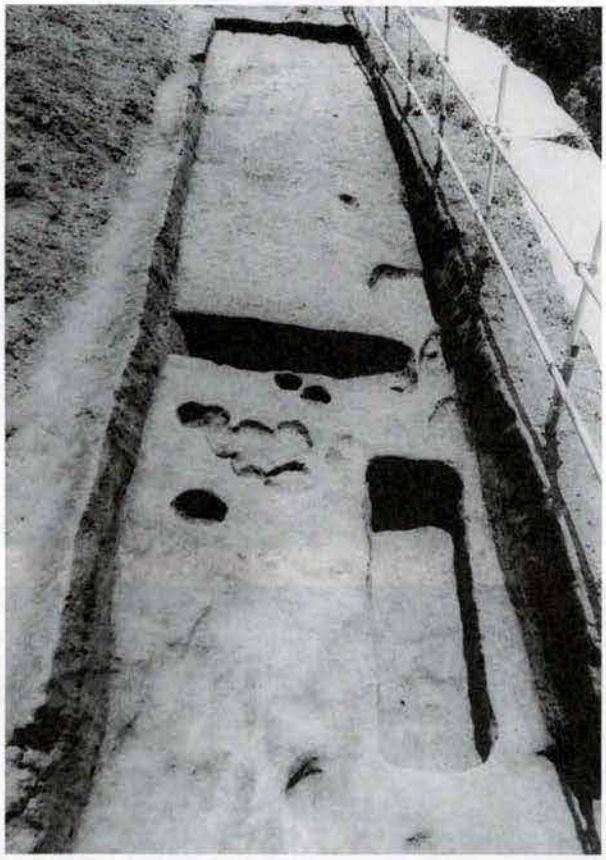


図4　溝掘り

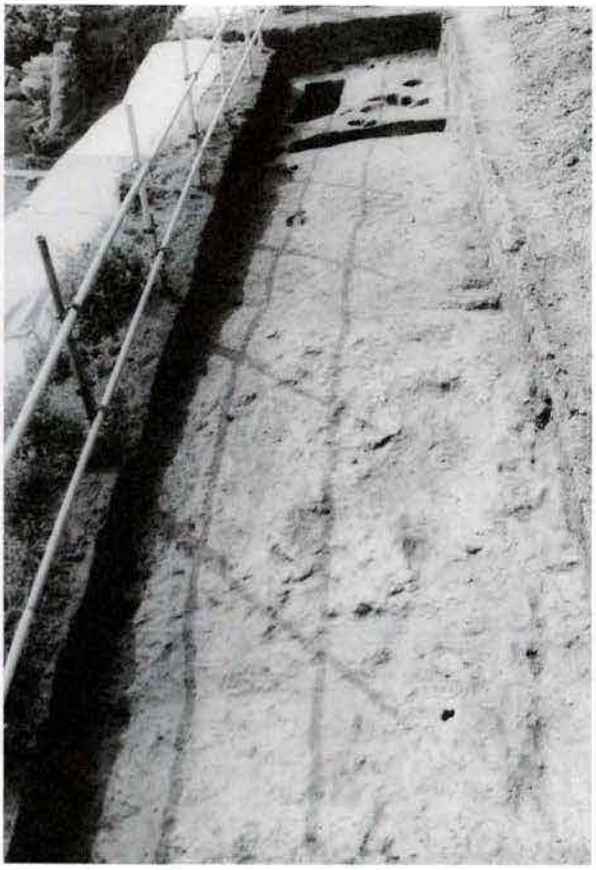


1．調査地点遠景（西から）

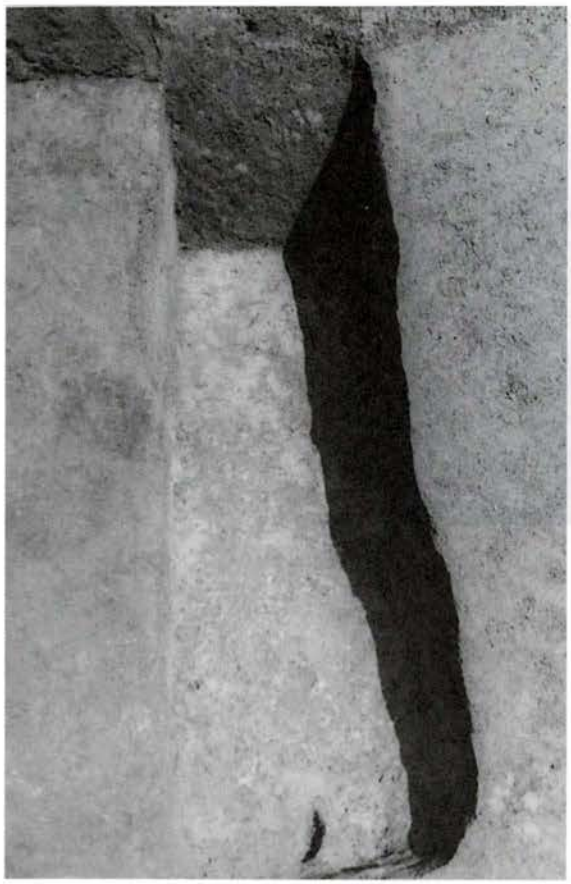


2．全景（北から）

3．全景（南から）

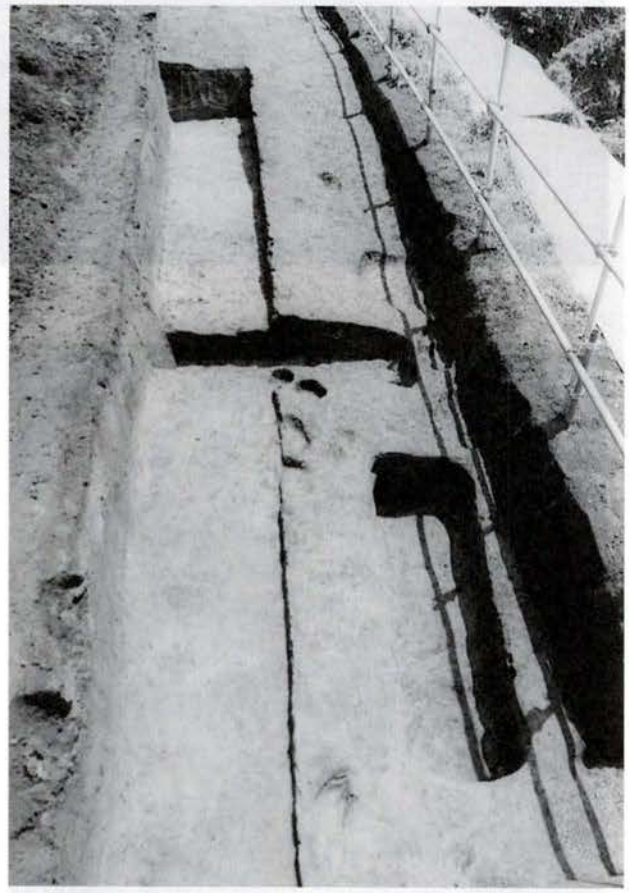


図版 2

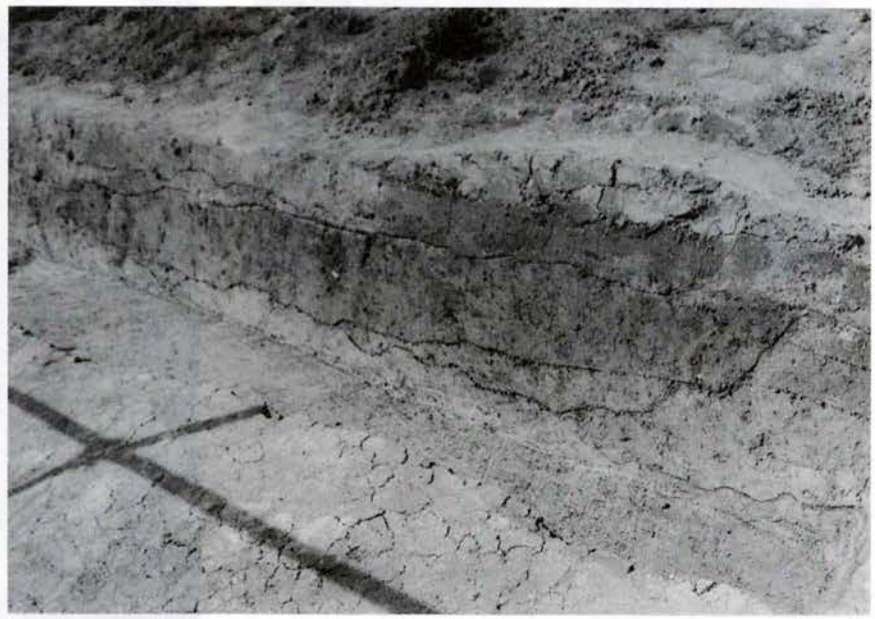


1．土坑２（西から）

2．深掘り状況（北から）



3．北壁断面（中央部分）



公方屋敷跡（No.268）

浄明寺四丁目273番地点

例　言

1．本報は、公方屋敷跡（No.268）内の鎌倉市浄明寺四丁目273番における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は73.13㎡。
2．発掘調査は、平成15年４月30日～同年７月５日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査体制は以下の通りである。
　調査主体 鎌倉市教育委員会
　主任調査員　熊谷満
　調　査　員　押木弘己
　調査補助員　長澤保崇・包國修平・青木岳大・安藤龍馬・岩澤智和
　調査作業員　安斎三男・北島清一・倉澤六郎・杉浦永章・吉本脩三
4．本報作成にあたっての整理参加者、及び分担は以下の通りである。
　整理参加者　齋木秀雄・瀬田哲夫・熊谷満・押木弘己・三ツ橋正夫・鯉渕義紀・伊藤博邦・小野笑美・八木沼ひとみ・森山知加・加藤千尋
　遺物実測　瀬田・三ツ橋・鯉渕・伊藤・小野・八木沼・森山
　図版･表作成　瀬田・熊谷・押木・伊藤・加藤
　写真撮影　瀬田（遺物）・熊谷（遺構）
　原稿執筆　熊谷（第１～３章）・齋木（第３章）
5．本報の凡例は以下の通りである。
　図版縮尺　遺構　1/30（微細図）、1/60（個別図）、1/80（全体図）、1/100（等高線図）
　遺物　1/3
　・遺構図版　水糸高は海抜値を示す。
　・遺物図版　←・・→は使用痕の範囲、－・－は釉薬の範囲を示す。
　黒塗りは油煙・焼け焦げの範囲を示す。
　法量表　()は復元数値、[]は残存数値を示す。表の遺物番号は実測図番号と一致する。
　計測表　[]は残存数値を示す。表の遺構番号は全体図番号と一致する。
　覆土は以下の通り、特徴からタイプ別に分類した。
　A．黒褐色土　炭化物・かわらけ片を多量含む。
　B．暗褐色土　土丹・炭化物・かわらけ片を含み、やや砂性を帯びる。
　C．黒灰色粘質土　炭化物少量含む。粘性強い。
　D．暗灰色粘質土　土丹粒を多く含む。炭化物を少量含む。
　E．暗灰色粘質土　炭化物を少量含む。砂性を帯びる。
　F．暗灰色砂質土　やや粗い砂を主体とする。炭化物を少量含む。
　G．暗褐色粘質土　炭化物を含む。土丹粒を少量含む。
　H．黒褐色粘質土　粘性やや強い。
　I．暗灰色粘質土　締まりなく、粘性強い。
　J．茶褐色粘質土　黒褐色粘質土混入。鎌倉石細粒を含む。締まりなし。
　K．茶褐色粘質土　地山ブロックと暗灰色粘質土が混合した層。
6．本報記載の「鎌倉石」は粗粒凝灰岩、「土丹」は凝灰質シルト岩を示す。ともに鎌倉周辺で産する岩石である。
7．現地調査から本報作成に至るまで、以下の各氏及び機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略・五十音順）
　伊丹まどか・小林康幸・汐見一夫・田畑衣理・玉林美男・福田誠・宮田眞・（社）鎌倉市シルバー人材センター
8．本調査に係わる資料は一括して鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本文目次

第1章　遺跡概観
1. 遺跡の環境と立地 ……55
2. 調査の経過 ……58
3. 測量軸の設定 ……58
4. 堆積土層 ……58

第2章　検出した遺構と遺物 ……59

第3章　まとめ ……93

挿図目次

図1　調査地点位置図 ……55
図2　グリッド配置図 ……56
図3　堆積土層 ……57
図4　1・2面全体図 ……60
図5　1面建物 ……61
図6　1面出土遺物 ……61
図7　2面建物1 ……62
図8　2面建物2 ……63
図9　2面土壙、溝 ……64
図10　2面出土遺物（1） ……65
図11　2面出土遺物（2） ……66
図12　2面出土遺物（3） ……67
図13　2面出土遺物（4） ……68
図14　3・4面全体図 ……69
図15　3面建物1・2 ……70
図16　3・4面遺構 ……71
図17　3面出土遺物 ……72
図18　4面出土遺物 ……73
図19　5・6面全体図 ……74
図20　5面出土遺物 ……75
図21　6面道路、建物 ……75
図22　6面出土遺物（1） ……76
図23　6面出土遺物（2） ……77
図24　7・8面全体図 ……78
図25　7面土壙 ……79
図26　7面出土遺物（1） ……80
図27　7面出土遺物（2） ……81
図28　7面出土遺物（3） ……82
図29　7面出土遺物（4） ……83
図30　8面建物、土壙 ……84
図31　8面出土遺物（1） ……85
図32　8面出土遺物（2） ……86

表目次

表1　遺構計測表（1） ……87
表2　遺構計測表（2） ……88
表3　遺物法量表（1） ……89
表4　遺物法量表（2） ……90
表5　遺物法量表（3） ……91
表6　遺物法量表（4） ……92
表7　遺物構成表 ……95

図 版 目 次

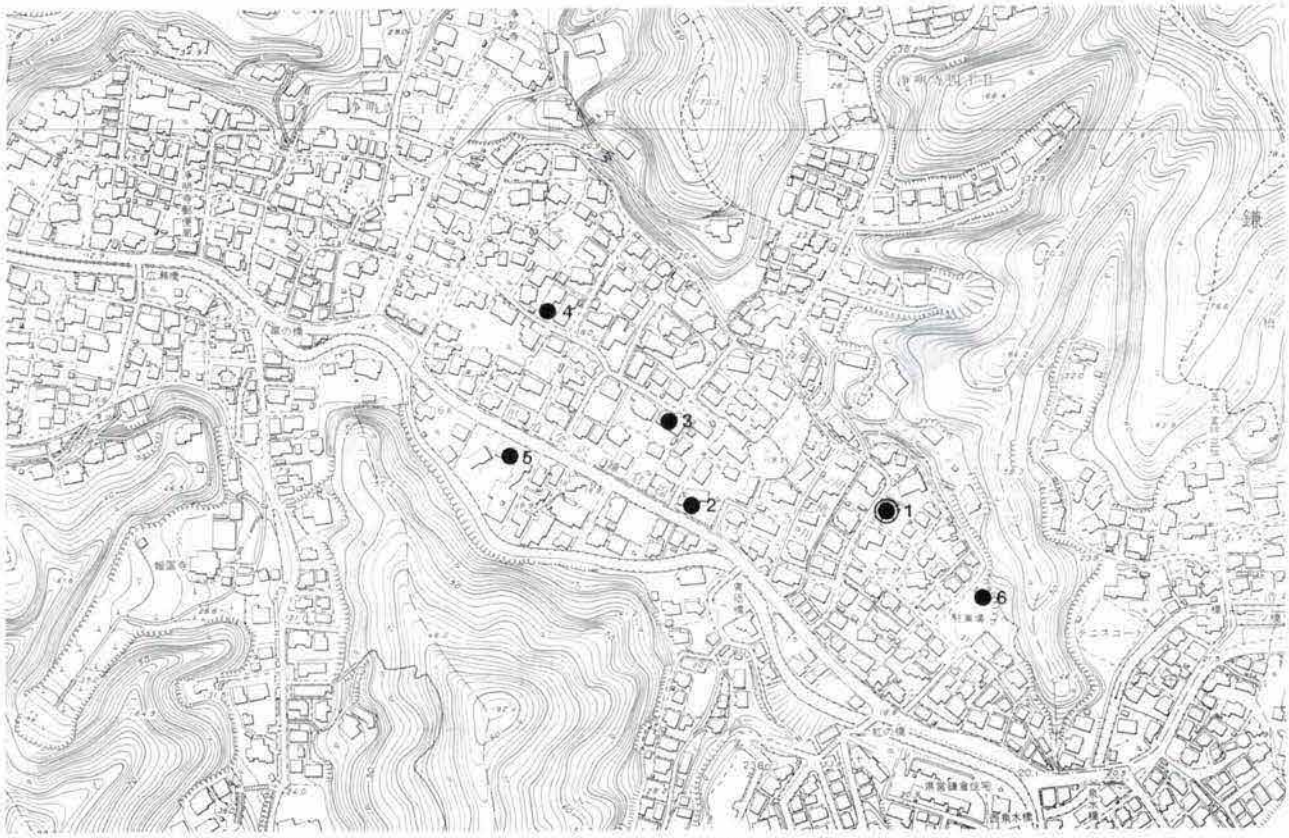
図版1 1. Ⅰ区1面 ……96
2. Ⅱ区2面 ……96
3. Ⅰ区2面 ……96
4. Ⅱ区2面 ……96
5. 柱穴内への包含層流入状況 ……96
6. Ⅰ区2面建物1 ……96
7. Ⅰ区2面建物2 ……96
8. Ⅱ区2面建物1 ……96
図版2 1. Ⅱ区2面建物2 ……97
2. Ⅱ区2面溝1 ……97
3. Ⅰ区3面 ……97
4. Ⅱ区3面 ……97
5. Ⅰ区3面建物1 ……97
6. Ⅱ区3面建物2 ……97
7. Ⅱ区3面溝1、2 ……97
8. Ⅰ区3面溝3 ……97
図版3 1. Ⅰ区4面 ……98
2. Ⅱ区4面 ……98
3. Ⅰ区4面溝1 ……98
4. Ⅱ区4面道路状遺構、柱穴列1 ……98
5. Ⅰ区5面 ……98
6. Ⅱ区5面 ……98
7. Ⅰ区6面 ……98
8. Ⅱ区6面 ……98
図版4 1. Ⅰ区6面道路 ……99
2. Ⅱ区6面道路 ……99
3. Ⅰ区6面道路土留板、杭 ……99
4. Ⅱ区6面柱穴列1 ……99
5. Ⅰ区7面 ……99
6. Ⅱ区7面南側 ……99
7. Ⅱ区7面南側かわらけ出土状況 ……99
8. Ⅰ区7面溝1 ……99
図版5 1. Ⅰ区7面土壙1 ……100
2. Ⅰ区7面炭範囲 ……100
3. Ⅰ区8面 ……100
4. Ⅱ区8面 ……100
5. Ⅰ区8面方形土壙 ……100
6. Ⅰ区8面方形土壙出土木組 ……100
7. Ⅱ区8面建物2 ……100
8. Ⅰ区8面溝1 ……100
図版6 出土遺物 (1) ……101
図版7 出土遺物 (2) ……102
図版8 出土遺物 (3) ……103

第1章　遺跡概観

1. 遺跡の環境と立地

本遺跡地点は鎌倉市浄明寺四丁目273番に所在する。調査地より約30m西には、胡桃ヶ谷の谷戸奥に源をもつ胡桃川が北方より流れ、調査地の約120m南を西流する滑川へ合流する。胡桃ヶ谷には、律宗系の寺院大楽寺があったとされるが、将軍足利義教が鎌倉御所持氏を討った永享の乱（1438）による永安寺炎上の際には、南隣に位置するこの谷も類焼し、大楽寺は焼けて二階堂に移ったという。戦後の高度成長期に行われた大規模な宅地造成により往時の景観は失われているが、東側の山裾にはやぐらが多く見られる。滑川に沿って鎌倉市と横浜市とを結ぶ県道金沢鎌倉線が走っており、この道筋近くを鎌倉時代には朝比奈切通を越え金沢へ至る六浦路があったとされる。六浦路は仁治二年（1241）に開かれた朝比奈切通とともに整備され、この後大倉辻や須地賀江橋に商業地区が出来た頃には朝比奈切通付近にも軒が並び、人の往来で賑わったという。本遺跡地は県道金沢鎌倉線から、青砥橋より約60m東にある胡桃ヶ谷へ至る細街路沿いに位置する。胡桃ヶ谷の開口部東側となり、周辺の地形は滑川へ向かって降る緩斜面となっている。

公方屋敷跡は足利氏邸跡・御所ノ内ともいい、足利尊氏の第四子基氏（1340～67）を初代として氏満・満兼・持氏・成氏の五代にわたり東国を管轄した鎌倉府の首長、鎌倉御所の居したところである。鎌倉御所は鎌倉公方・関東公方・鎌倉殿ともいう。はじめ関東十カ国、伊豆・甲斐・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・上野・下野を管轄しており、元中九年（1392）氏満の時に陸奥・出羽の二国を加え十二カ国を管轄するに至った。この後、成氏が上杉憲実の子関東管領憲忠を殺して幕府に追討され、



1. 本調査地点　2. 公方屋敷跡（浄明寺三丁目151番1外）　3. 公方屋敷跡（浄明寺三丁目143番2）
4. 浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺稲荷小路129番2）　5. 稲荷小路南遺跡　6. 公方屋敷跡内やぐら

図1　調査地点位置図

康正元年（1455）に下総古河へ逃れて古河公方を名のるまで、100余年にわたって関東を掌握していた。現在でも小字として「御所ノ内」が残っており、本調査地はこの小字御所ノ内の範囲内、中央西端辺りに位置している。

当地に鎌倉御所が置かれたのは、この地が鎌倉幕府の頃から代々足利氏の屋敷であったことに起因する。足利氏が鎌倉での拠点をこの地に定めたのは、尊氏の父貞氏（1273～1331）の代である。貞氏は、文治四年（1188）に足利満兼が開創した鎌倉五山第五位となる臨済宗建長寺派浄明寺の中興開基と伝えられ、『相模風土記』は「元弘元年九月五日讃岐守貞氏卒しければ荼毘して当寺（浄明寺）に塔を建つ」と述べる。また、貞氏の父家時の墳墓と伝えられる墓が、浄明寺から滑川を挟んだ向かいの谷に位置する報国寺にあり、この地が足利一族にとって代々縁の深い土地であったことが窺い知れる。

本調査地周辺での調査事例は多くない。同じ公方屋敷跡（神奈川県遺跡台帳No.268）の範囲内では、やぐらの調査を除けばわずかに過去2例の発掘調査を数えるのみである。浄明寺三丁目143番2地点では平成3年（1992）に調査が実施され、3枚の遺構面を検出している。1面では井戸や切石積列、道路など、2面で建物跡や道路、及びそれに伴う側溝など、3面で道路と大溝、そのほか土壙・かわらけ溜りなどを検出している。出土遺物などから、1面が14世紀中葉～15世紀前葉頃、2面が13世紀後葉～14世紀前葉頃、3面が13世紀前葉～中頃の年代が与えられている。浄明寺三丁目151番1外地点は平成6年（1994）に調査が実施され、4枚の遺構面を検出している。1面では9口のピット、2面では溝1条・土壙6基・かわらけ溜まり1基・柱穴20口以上、3A面では土壙1基・柱穴9口、3B面では土壙11基・溝1条・柱穴多数を検出している。3B面において、建物の一部と考えられる柱穴の並びを2列確認している。出土遺物から、1面までが14世紀後葉～15世紀前半頃迄、2面が14世紀前葉～中頃、3A・3B面が13世紀後葉～14世紀初頭の年代が与えられている。いずれの遺跡においても13世紀～15世紀に至る遺構群が検出されており、13世紀後葉～14世紀前葉頃に全盛期を迎えている様子が窺える。

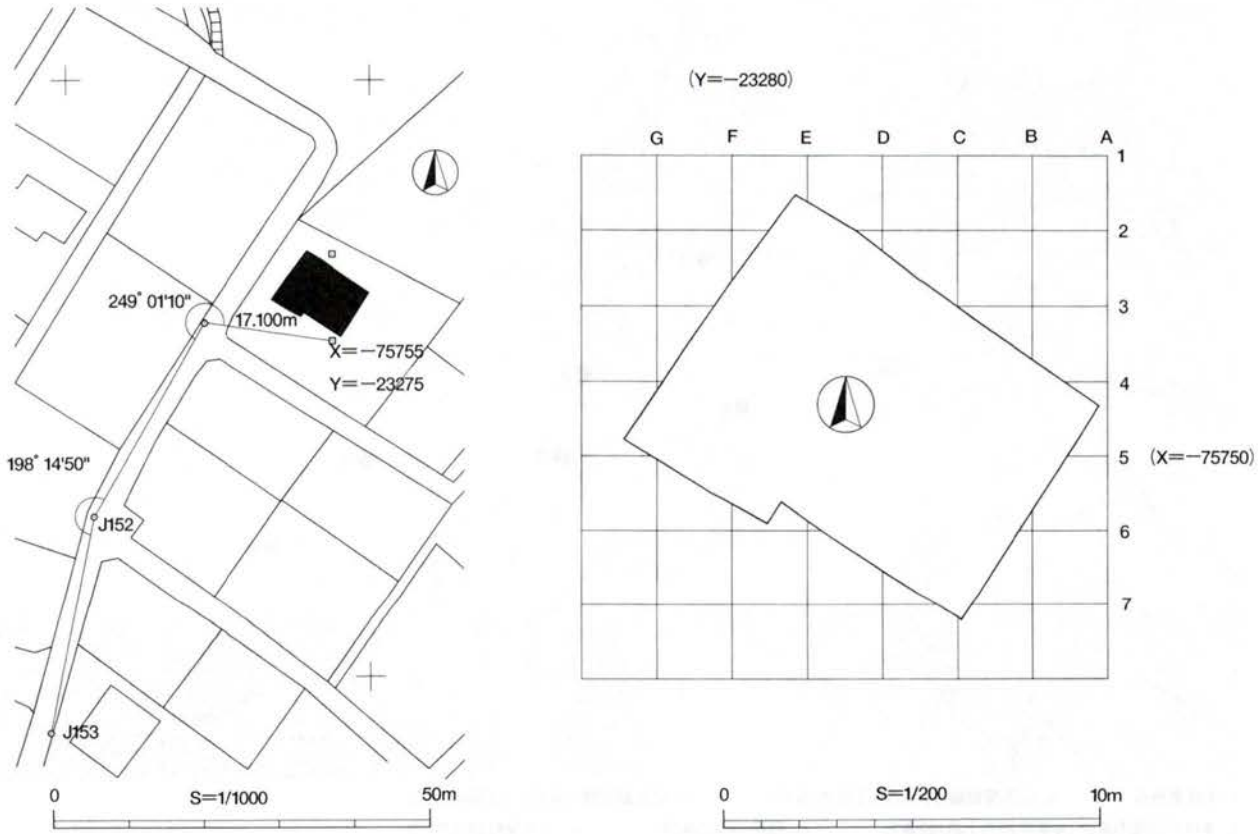
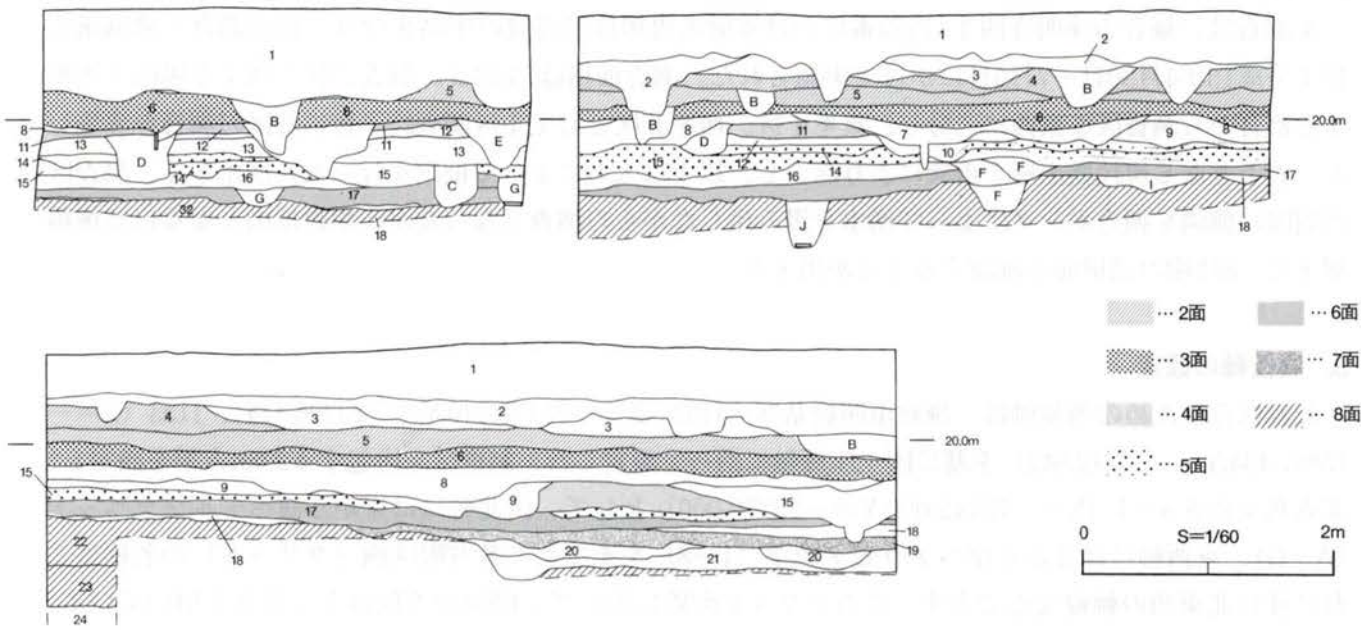


図2　グリッド配置図



1. 表土層	現代撹乱	A. 黒褐色土	炭化物・かわらけ片を多量含む。
2. 黒褐色土	かわらけを大量に含む中世遺物包含層。	B. 暗褐色土	土丹・炭化物・かわらけ片を含み、やや砂性を帯びる。
3. 暗褐色土	土丹・鎌倉石を含む。かわらけ片を含む。	C. 黒灰色粘質土	炭化物少量含む。粘性強い。
4. 暗褐色土	土丹地業層。拳大の土丹を密に含む。	D. 暗灰色粘質土	土丹粒を多く含む。炭化物を少量含む。
5. 茶褐色粘質土	粘土粒を少量含む。締まり有り。	E. 暗灰色粘質土	炭化物を少量含む。砂性を帯びる。
6. 黄褐色砂質土	土丹・鎌倉石細粒を多く含む地業層。堅固に締まる。	F. 暗灰色砂質土	やや粗い砂を主体とする。炭化物を少量含む。
7. 暗灰色粘質土	上位に炭化物を多く含む。締まりやや弱い。	G. 暗褐色粘質土	炭化物を含む。土丹粒を少量含む。
8. 暗灰色粘質土	粘土粒・炭化物を少量含む。締まりやや弱い。	H. 黒褐色粘質土	粘性やや強い。
9. 暗褐色土	粘土粒を少量含む。	I. 暗灰色粘質土	締まりなく、粘性強い。
10. 暗灰色砂質土	粗砂と土丹が混合した層。	J. 茶褐色粘質土	黒褐色粘質土混入。鎌倉石細粒を含む。締まりなし。
11. 暗茶褐色粘質土	粘土粒を含む。炭化物を少量含む。	K. 茶褐色粘質土	地山ブロックと暗灰色粘質土が混合した層。
12. 暗灰色粘質土	粘土粒・炭化物を少量含む。締まりやや弱い。		
13. 暗茶褐色砂質土	炭化物・暗茶褐色粘質土ブロックを少量含む。		
14. 玉石層	玉砂利で構成された層。		
15. 暗茶褐色粘質土	土丹・鎌倉石・粘土ブロックを少量含む。締まり強い。		
16. 暗灰色粘質土	炭化物を部分的に多く含む。締まりやや弱い。		
17. 黄褐色砂質土	鎌倉石細粒を密に含む地業層。暗灰色中砂混入し堅固に締まる。		
18. 黒灰色粘質土	鎌倉石細粒・炭化物を微量含む。締まり有り。		
19. 暗褐色粘質土	土丹・地山ブロックを少量含む。部分的に褐鉄化する。		
20. 暗褐色粘質土	土丹粒・地山ブロックを含む。		
21. 青黒色粘質土	上位が部分的に褐鉄化する。		
22. 茶褐色土	橙白色粒子を含む。強く締まる。地山。		
23. 黄褐色土	橙白色粒子を含む。強く締まる。		
24. 茶褐色土	橙白色粒子を含む。強く締まる。		

図3　堆積土層

【引用・参考文献】
鎌倉市史編纂委員会編（1959）『鎌倉市史　総説編』及び『鎌倉市史　社寺編』　吉川弘文館
白井永二（1976）『鎌倉事典』　東京堂出版
宮田眞（1996）『公方屋敷跡発掘調査報告書　鎌倉市浄明寺三丁目151番1外』　公方屋敷跡発掘調査団
原廣志（1994）「公方屋敷跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10（第1分冊）』　鎌倉市教育委員会

2. 調査の経過

本調査は、鎌倉市浄明寺四丁目273番における個人専用住宅建設の申請を受け、確認調査・諸協議を経て平成15年4月30日～7月5日にかけて実施された。調査面積は73.13㎡。調査に伴う残土を場内で処理する都合から調査区を東西に二分し、東をⅠ区、西をⅡ区としてⅠ区調査終了後にⅡ区の調査を実施した。表土となる現代盛土層を重機により除去し、以下は人力によって掘削を行った。湧水多く、調査区内周囲に側溝を掘りポンプによって湧水を汲み出しながらの調査となったが、中世地山となる自然堆積層まで、8時期の遺構面を確認することが出来た。

3. 測量軸の設定

記録保存のための測量軸は、鎌倉市四級基準点J152（X＝－75778.440,Y＝－23306.414）、J153（X＝－75807.434,Y＝－23312.042）を基に国土座標軸に沿って設定した。調査区を内包する2.0m方眼を設定し、北東角交点をA－1（X＝－75742.000,Y＝－23270.000）として、南北軸には東から西へアルファベット（A～G）、東西軸には北から南へアラビア数字（1～8）を充てた。各方眼区画（グリッド）の名称はこれに従い北東角の軸線交点で表す。このグリッド配置に準じて、図中の方位は全て真北を用いている。また海抜標高値は、鎌倉市三級基準点（No.54109　L＝27.360m）を基に、調査測量杭上にレベル移動を行った。

4. 堆積土層

本調査地点は丘陵中腹において一部平坦となっている部分に位置し、現地表海抜高20.8m前後を測る。表土は30～60㎝程の厚さをもつ現代の盛土層で、これを除去した海抜高20.2～20.5mにおいて第1面が検出される。第1面は中世遺物包含層上面であり、この時代以降の生活面は現代の整地によって既に削平されている。第1面を構成する2・3層は20㎝前後の厚さをもち、大量のかわらけを含む。単純計算でおよそ14㎥となるこの堆積土中から、Ⅰ・Ⅱ区合わせ390㎏近い重量のかわらけが出土しており、人為的に大量のかわらけを混ぜて埋立てた様子が窺える。この2・3層を除去すると海抜高20.1～20.4mにおいて第2面が検出される。締まりのある茶褐色粘質土で構成される生活面で、調査区北側においては拳大の土丹を突き固めた地業層が貼り増しされている。第2面の構成土である5層直下となる海抜高19.9～20.2mにおいて第3面となる。土丹細粒や破砕した鎌倉石を突き固めた地業層で、堅固に締まる生活面である。第3面構成土の6層下は乱れた堆積状況を示しており、締まりの弱い暗灰色粘質土を主体とするこれらの層を挟んで海抜高19.6～20.0mにおいて第4面が検出される。6層下の堆積土の乱れは溝状、あるいは窪地として第4面を侵食しており、何らかの自然災害的な影響による可能性も考えられる。第4面構成土の11層直下となる海抜高19.7m前後において第5面が検出される。締まりの強い暗茶褐色粘質土上に玉石の敷かれた生活面である。第5面構成土の15層下では部分的に締まりの弱い暗灰色粘質土が薄く堆積し、これを除去した海抜高19.4～19.6mにおいて第6面が検出される。破砕した鎌倉石細粒に暗灰色砂を混ぜて突き固めた地業層となり、堅固に締まる生活面である。第6面構成土17層を除去すると、北側では海抜高19.4m前後で中世地山となる茶褐色土が露出し、南側では大量に廃棄されたかわらけを含む層を挟んで、海抜高19.3m程で土丹細粒を突き固めた地業面、あるいは炭化面が部分的に広がる。これが第7面となる生活面である。南側の地業層、及び炭層を除去すると、部分的に薄い黒褐色粘質土を挟んで第8面となる中世地山が海抜高19.1m前後で検出される。

第2章　検出した遺構と遺物

本章では各面の主たる遺構について説明を加える。検出された建物跡各柱間の芯々距離は建物個別図中に示している。また、建物跡各柱穴を含む全ての遺構について規模等の計測値を表1・2に記している。遺物に関しては種別・法量値を表3～6に記しており、遺物に関する情報は図・表を参照されたい。

第1面（図4,6、図版1）

この面で検出した遺構は、掘立柱建物1棟、溝1条である。また、調査区北東、及び南東の一角において、投棄されたものと思われる鎌倉石塊群が検出されているが、この面が現代に削平された遺物包含層であり、これらの石塊群は層中に含まれるものであるため、遺構として意味を為すものではない。

建物1［遺構1～4］（図5,6－1～10）

調査区西側のD－3,E－2～4,F－3グリッドで検出された。確認標高約20.4m。主軸方位N－38°－E。建物規模は東西1間×南北1間で、さらに北・西に延びる可能性がある。

溝1［遺構5］（図4）

調査区西側D・E－3・4,F－3グリッドで検出された。確認標高約20.3m。主軸方位N－50°－W。底面海抜値の比較では調査区西端から遺構東端まで差がなく、平坦となっている。

第2面（図4,10～13,17、図版1,2）

この面で検出した遺構は、礎石建物2棟、土壙3基、溝5条のほか、建物としての並びが捉えられなかったピット33口などである。遺構80は面直上に鎌倉石切石を東西に2つ並べて据えたものである。南端のラインが揃っており、軸方位はN－53°－W。他にこれに繋がる遺構は検出されず、あるいは建物跡に伴うものかもしれないが、どういった用途のものなのか不明である。

建物1［遺構6～23］（図7,12－1～3・10～30,13－12～15）

調査区全面にわたって検出された。確認標高約20.3m。主軸方位N－36°－E。建物規模は東西4間×南北3間で、さらに東西・南北に延びる可能性がある。各柱穴は掘り込みを伴い、礎石が生活面上に露出しないものもある。覆土中には、大量のかわらけを含む上層の包含層が流入しており、礎石直上まで埋め尽くしている。遺構6・15・16・17・18では礎石は検出されなかった。遺構7・8は、貼り増しされた地業面上面から掘り込まれている。また、遺構7・9・19・21・23の礎石上面に、12㎝角の木材が載っていた痕跡が認められる。柱の通りに対して斜めを向いていることから、礎石上に直接柱が建てられたものではなく、礎石上に板が敷かれ、その上に構造物が載っていたものだと考えられる。

建物2［遺構24～36］（図8,13－3～11）

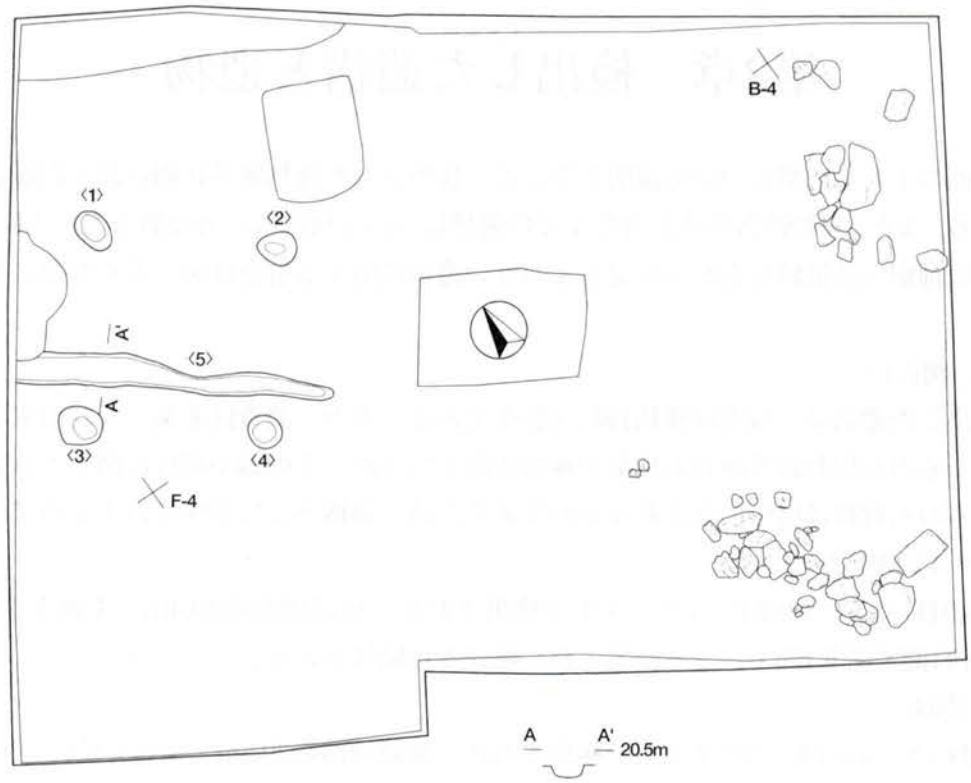
調査区全面にわたって検出された。確認標高約20.2m。主軸方位N－36°－E。建物規模は東西3間×南北3間で、さらに東西・南北に延びる可能性がある。礎石は遺構27・30・33の3口のみ検出している。遺構26・27は、貼り増しされた地業層を除去した後に検出されており、礎石建物1に先行する時期のものであることが判った。

土壙1［遺構70］（図9）

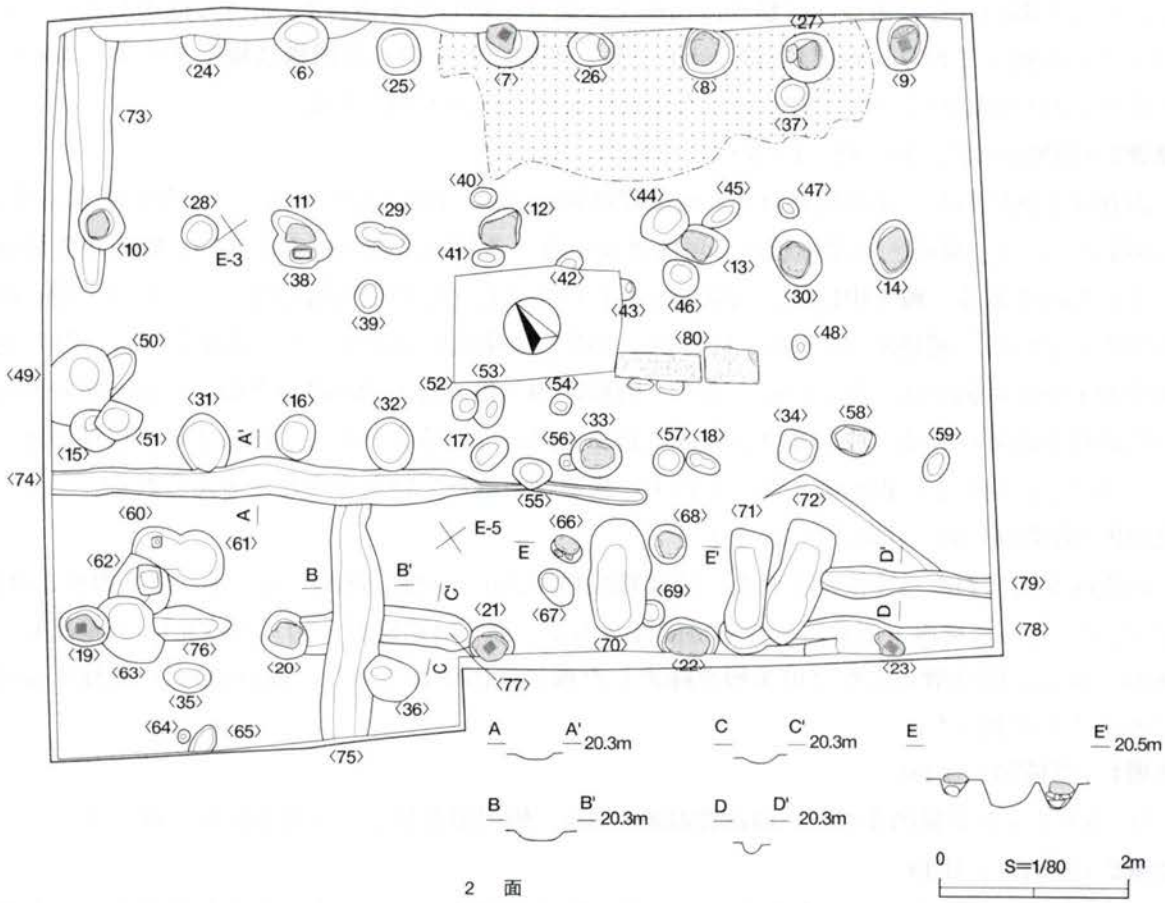
D－5グリッドで検出された。確認標高約20.1m。楕円形を呈し、長軸方位N－36°－E。

土壙2［遺構71］（図9）

C－5・6,D－6グリッドで検出された。確認標高約20.1m。やや歪んだ方形状を呈し、長軸方位N－



1　面



2　面

図4　1、2面全体図

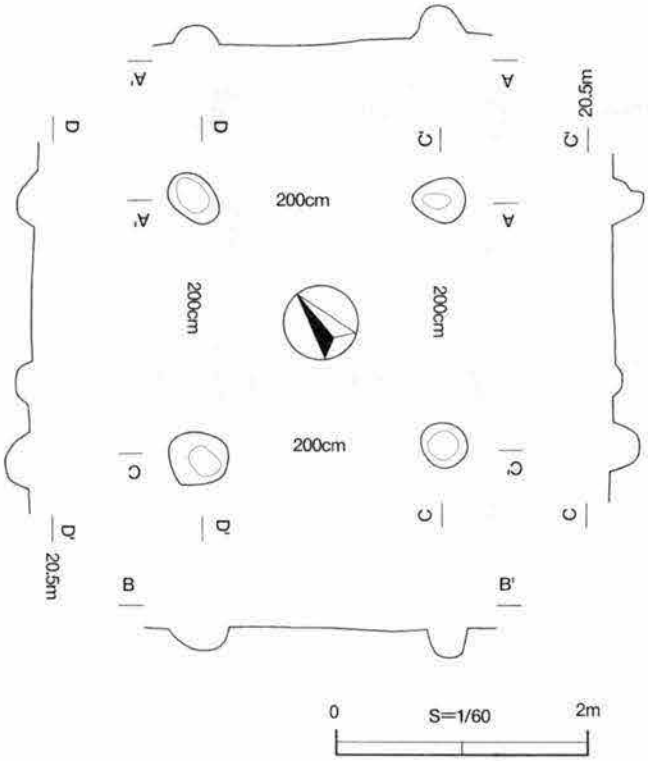


図5　1面　建物1

40°－E。

土壙3［遺構72］（図9,12－31・32）

C－5・6グリッドで検出された。確認標高約20.1m。やや歪んだ方形状を呈し、長軸方位N－56°－E。

溝1［遺構73］（図9,12－33～47）

調査区北西角のD－1,E－1・2グリッドで検出された。確認標高約20.2m。主軸方位N－36°－E。断面は浅いU字形を呈し、覆土中から一括廃棄されたかわらけが出土している。底面海抜値の比較からは調査区北端から遺構南端までほとんど差がなく、平坦な底面を示している。

溝2［遺構74］（図4,13－1・2）

調査区西側中央やや南寄りのD・E－4,D－5,E・F－3グリッドで検出された。確認標高約20.2m。主軸方位N－54°－W。断面は浅いU字形を呈する。底面海抜値の比較では遺構東端から溝3と接する辺りまでが平坦で、そこから調査区西端までに7cm前後降っている。

溝3［遺構75］（図4,13－17～18）

調査区南側中央やや西寄りのE－4,E・F－5グリッドで検出された。確認標高約20.2m。主軸方位N－37°－E。断面は浅いU字形を呈する。底面海抜値の比較では溝2と接する辺りが最も高く、調査区南端まで4cm前後緩やかに降っている。

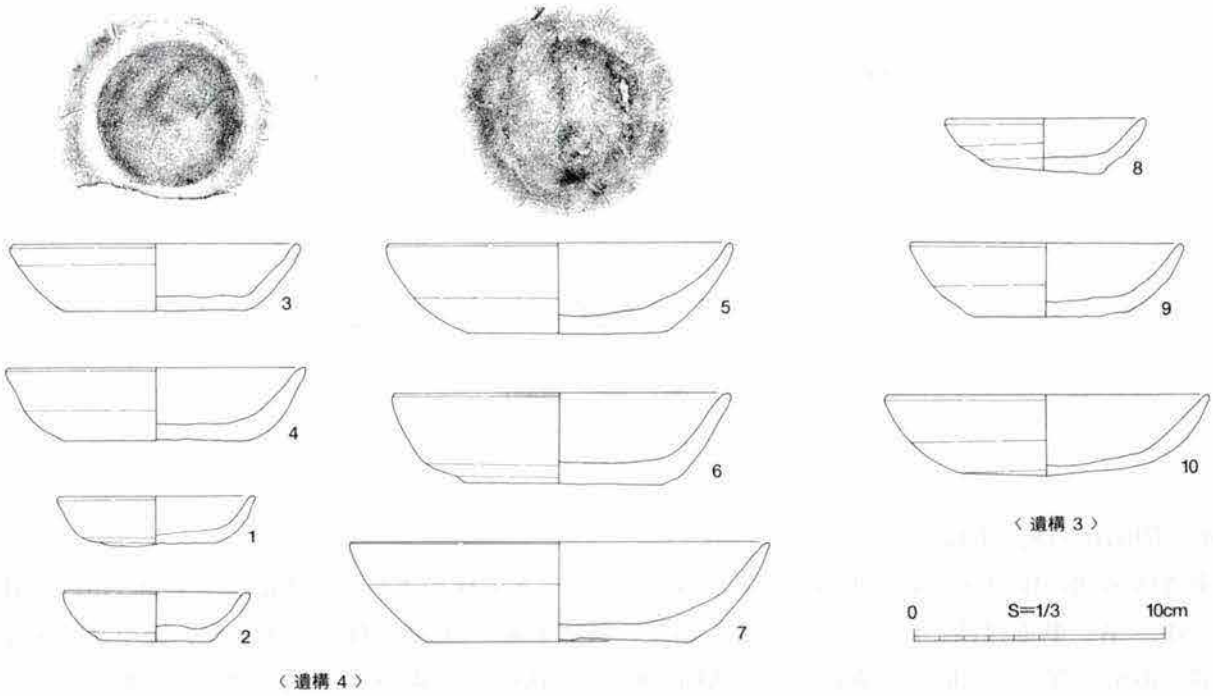


図6　1面出土遺物

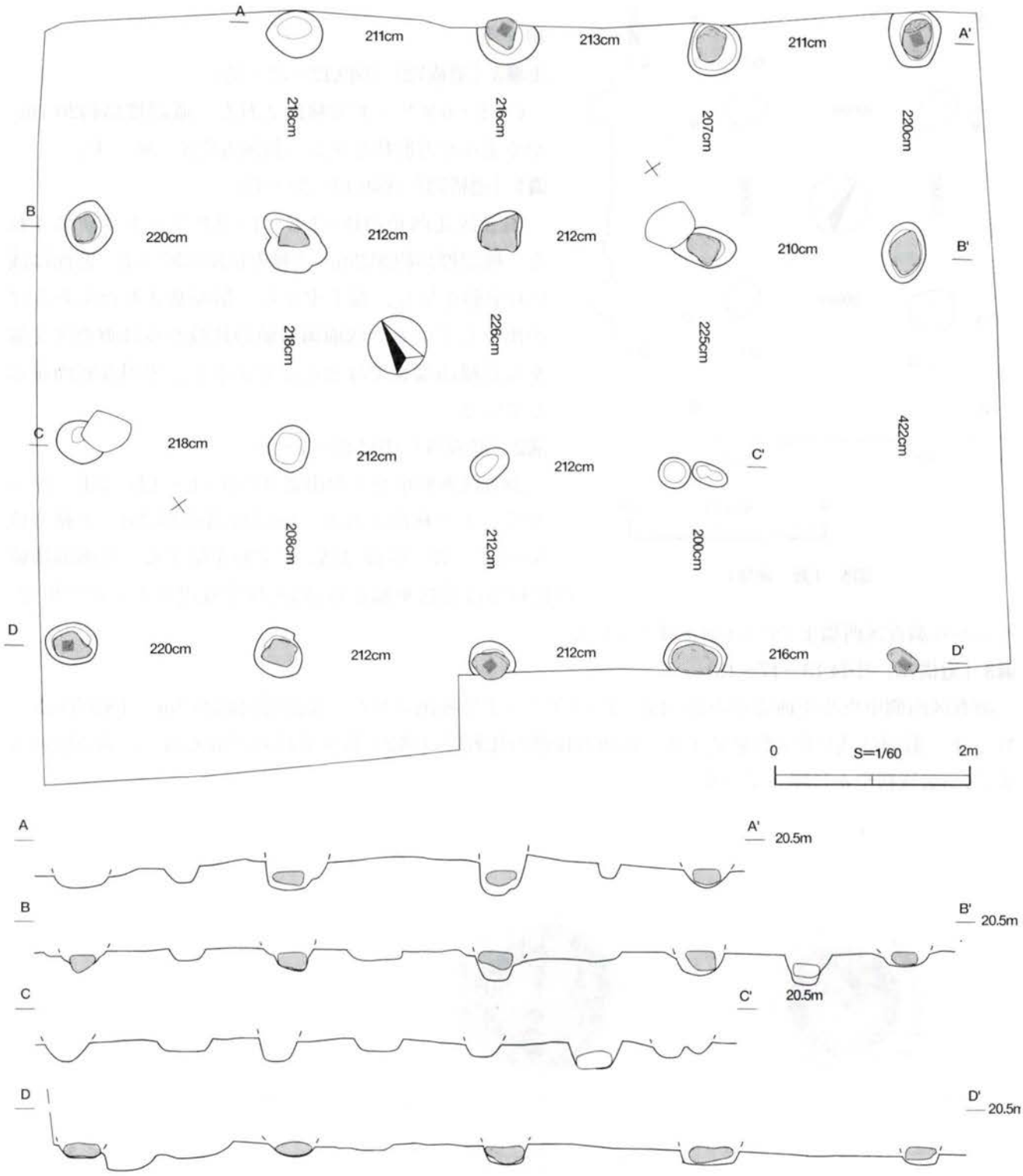


図7　2面　建物1

溝4［遺構76～78］（図4）

調査区南側のB・C－7,C・D－6,E－4・5,F－4グリッドで検出された。確認標高約20.2m。主軸方位N－54°－W。断面は浅いU字形を呈する。細長い溝状土壙が3基並ぶ様相であるが、途中寸断する一連の溝状遺構と捉え、一括して溝4とした。底面海抜値の比較では溝3を切り込む遺構77が最も高く、その東西の遺構76・78は10cm程低い。

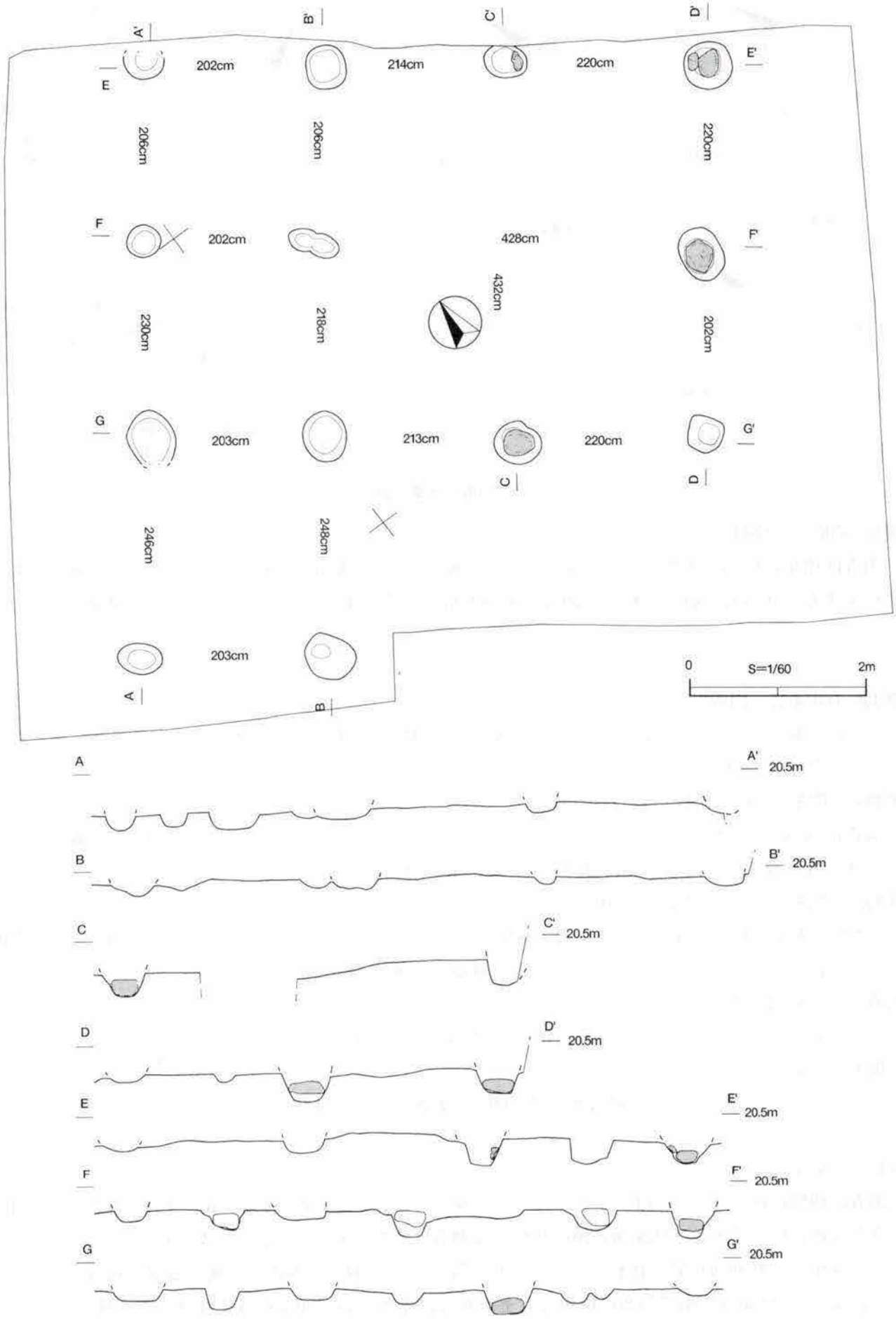

A'
B'
C'
D'
E
E'
F
F'
G
G'
A
B
C
D
202cm
214cm
220cm
206cm
206cm
220cm
202cm
428cm
432cm
230cm
218cm
202cm
203cm
213cm
220cm
246cm
248cm
203cm
0
S=1/60
2m
20.5m

図8　2面　建物2

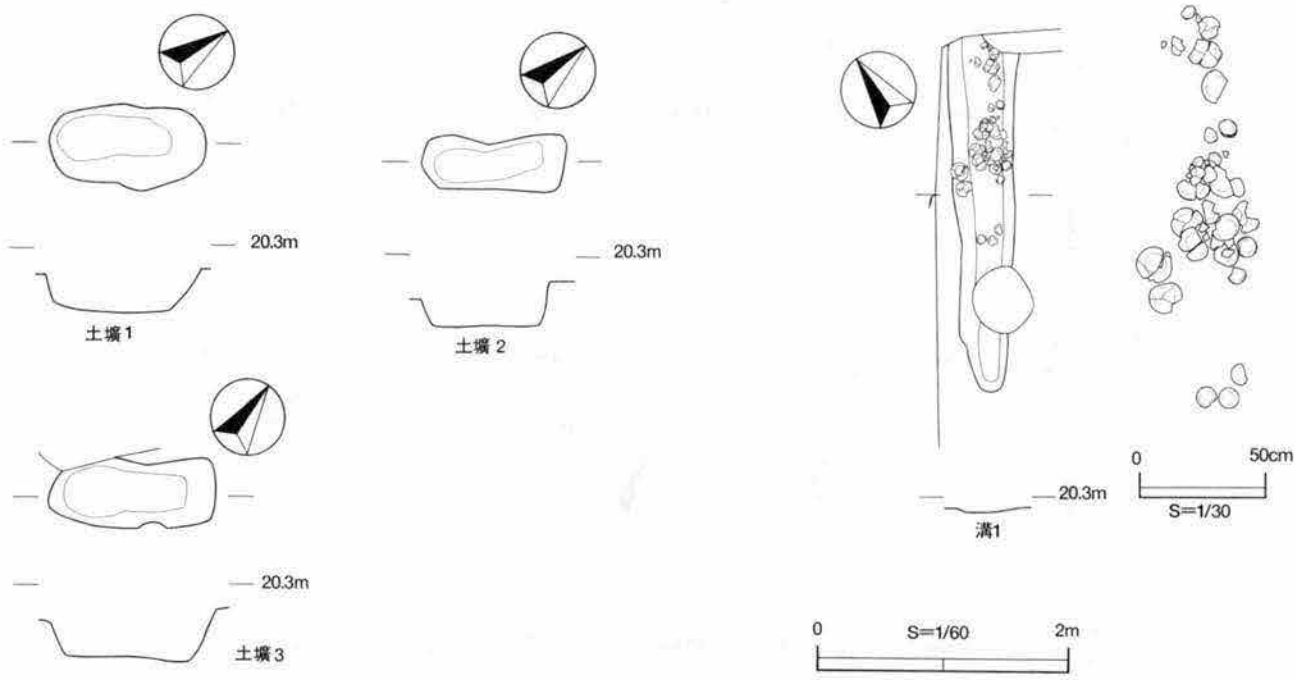


図9 2面　土壙、溝

溝5［遺構79］（図4）

調査区南東のB・C－6グリッドで検出された。確認標高約20.1m。主軸方位N－52°－W。断面はU字形を呈する。底面海抜値の比較では調査区東端が最も高く、土壙3に切られる部分まで10㎝程降っている。

第3面（図14,17、図版2）

この面で検出された遺構は、掘立柱建物2棟、土壙2基、溝3条のほか、建物としての並びが捉えられなかったピット40口などである。

建物1［遺構81～86］（図15,17－11～13）

調査区東側のA－4・5,B－3～6,C－4・5グリッドで検出された。確認標高約20.0m。主軸方位N－38°－E。建物規模は東西1間×南北2間で、さらに東・南北に延びる可能性がある。

建物2［遺構87～92］（図15,17－20）

調査区西側D・E－2～4,F－4グリッドで検出された。確認標高約20.1m。主軸方位N－42°－E。建物規模は東西1間×南北2間で、さらに西・南北に延びる可能性がある。

土壙1［遺構131］（図16）

D－5・6グリッドで検出された。確認標高約19.9m。歪んだ楕円形を呈し、長軸方位N－44°－E。

土壙2［遺構132］（図16）

C－6グリッドで検出された。確認標高約19.9m。調査区外南に延びており、推定平面形は楕円形。長軸方位N－12°－E。

溝1［遺構133］（図16,17－14～19）

調査区西側のD－2,E－2～4,F－3～5グリッドで検出された。確認標高約20.1m。主軸方位N－36°－E。断面形は逆台形を呈する。底面海抜値の比較では調査区北端が最も高く、そこから緩やかに南へ降っていく。途中で、底面海抜値の比較では西から東へ降っている調査区外西から延びる溝と接続しており、この合流点より130㎝程南で急激に収束し、そこから段差がついて20㎝程浅くなり、幅も狭くなってさらに140㎝程南で一時途切れ、近接して再び調査区外南へと延びていく。

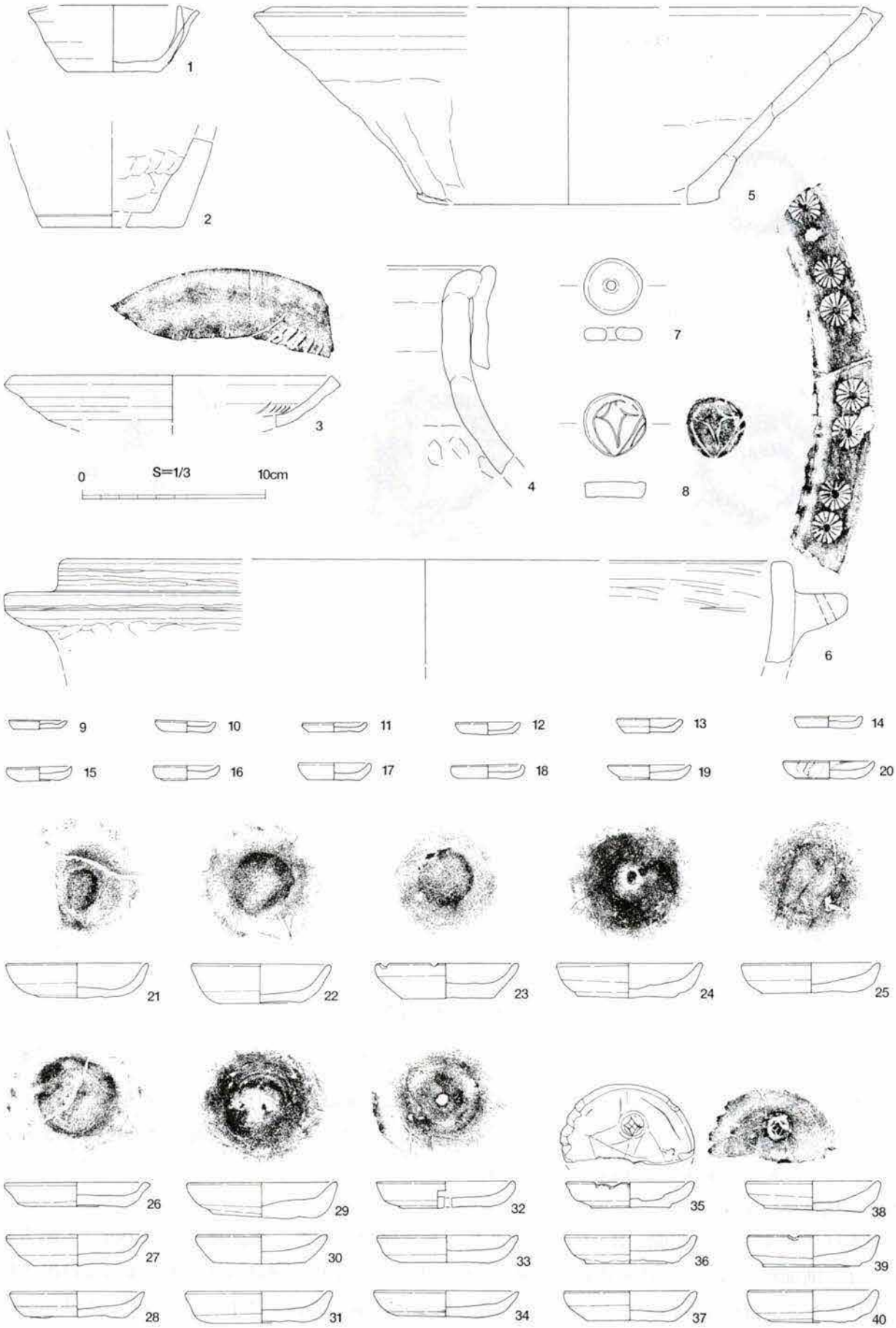

1
2
3
4
5
6
7
8
0
S=1/3
10cm
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40

図10　2面出土遺物（1）

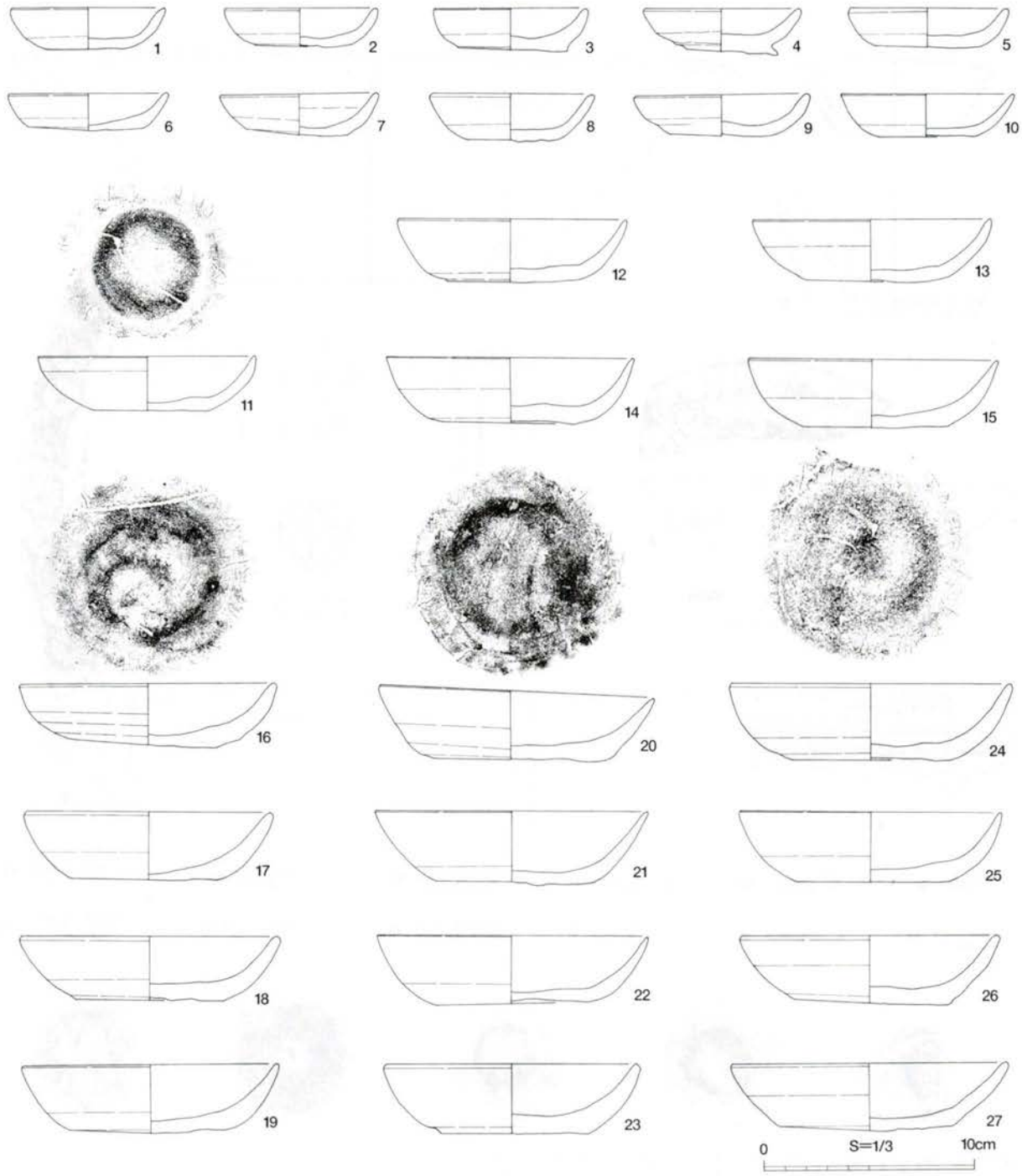


図11　2面出土遺物（2）

溝2［遺構134］（図16）

調査区南西のE－3,F－3・4,G－4グリッドで検出された。確認標高約19.9m。主軸方位N－41°－E。断面形は浅い逆台形を呈する。溝1との切り合い関係はつかめなかった。底面海抜値の比較では遺構北端が最も高く、調査区南端との比高差30cm程で南へと降っていく。

溝3［遺構135］（図14）

調査区中央やや東の北側、B・C－3・4グリッドで検出された。確認標高約20.0m。主軸方位N－63°－E。断面形は浅いU字形を呈する。覆土中から人頭大の土丹・鎌倉石塊がまとまって検出されており、状況からは投げ込みによるものと思われる。底面海抜値の比較では平坦であるが、生活面が南に緩やかに傾斜しているため徐々に比高差がなくなり途中で消えてしまう。

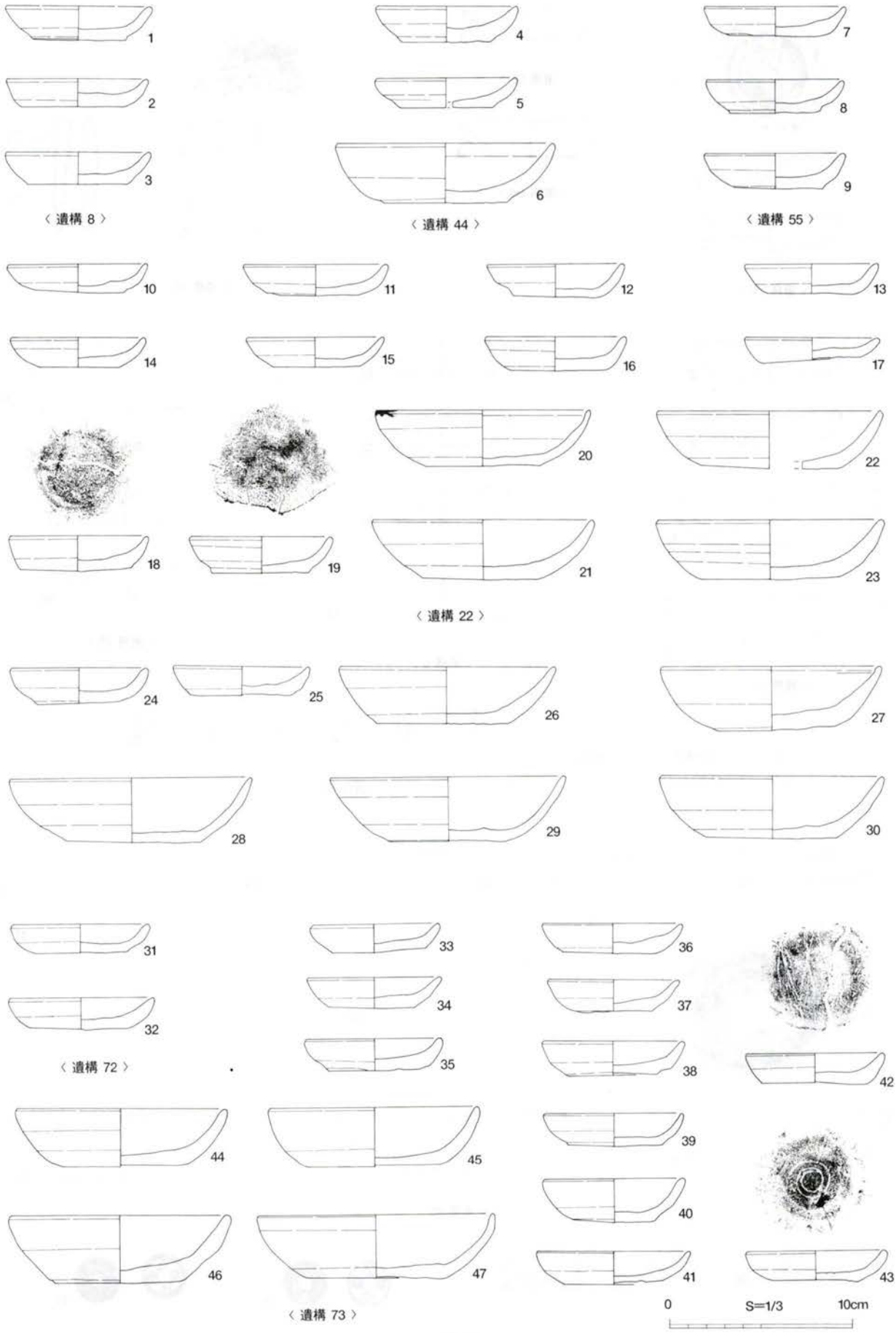


図12　2面出土遺物（3）

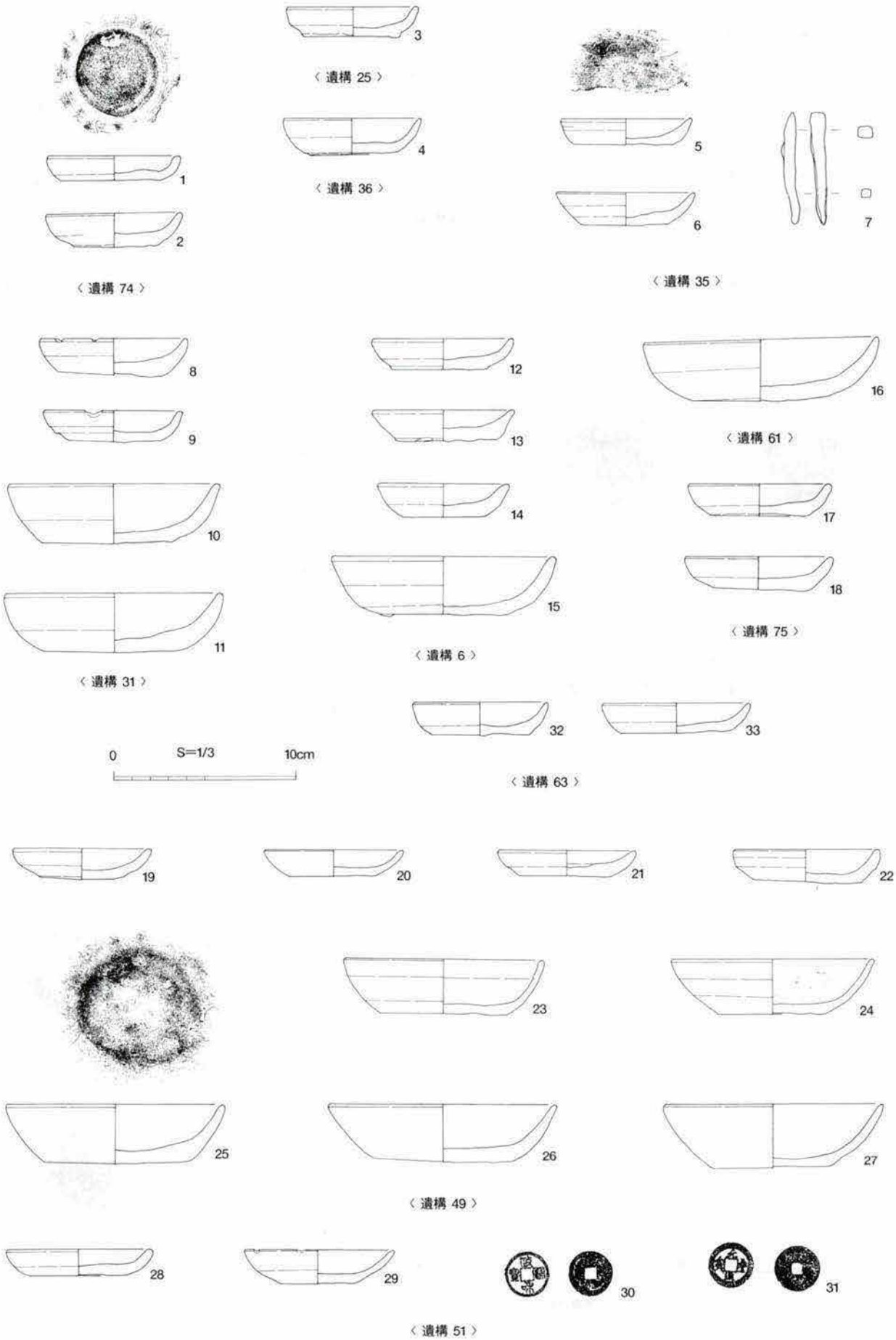
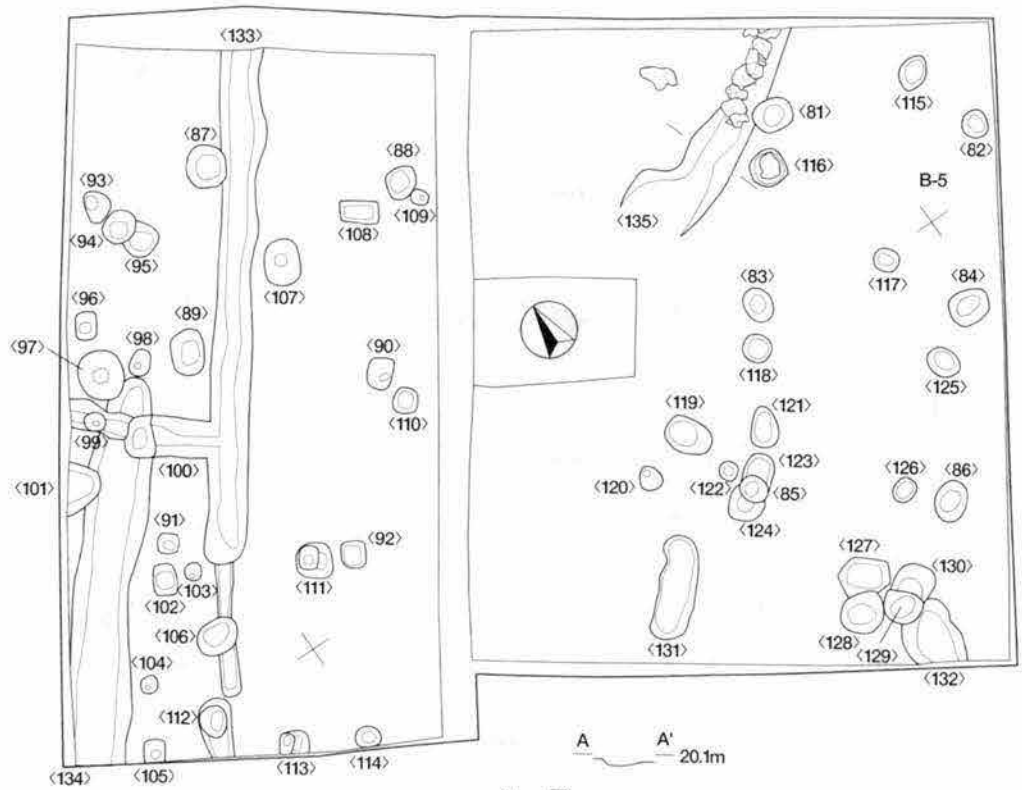
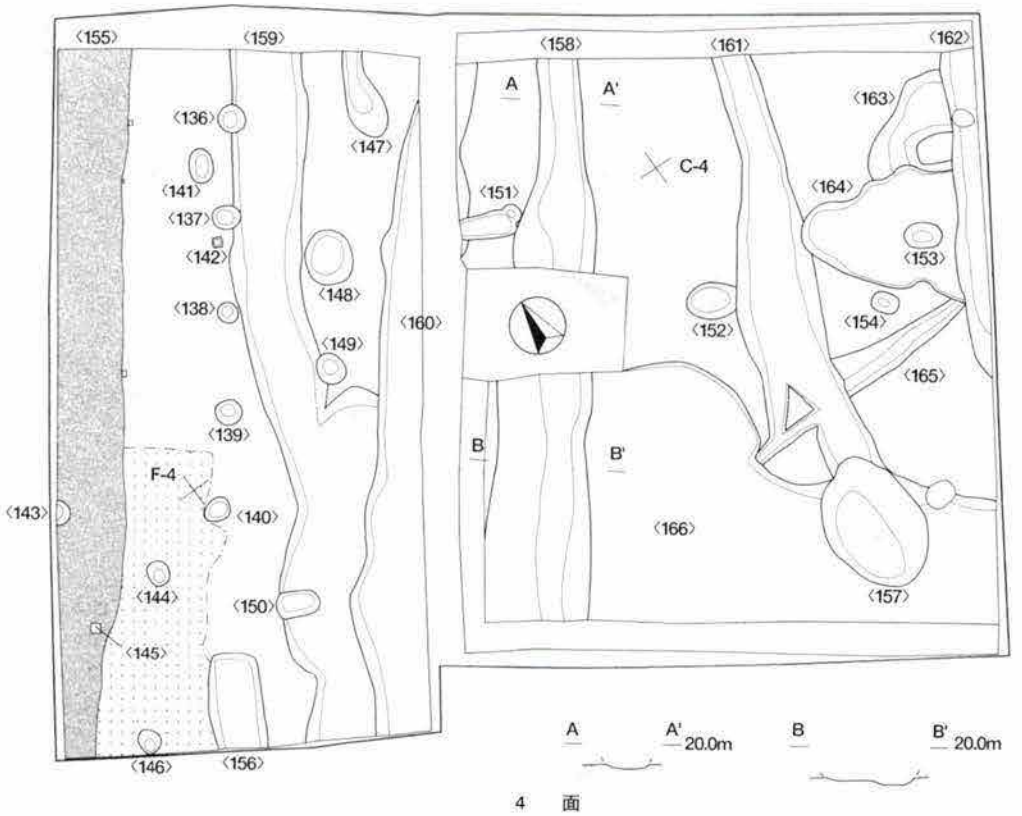

〈遺構 25〉
〈遺構 36〉
〈遺構 74〉
〈遺構 35〉
〈遺構 61〉
〈遺構 31〉
〈遺構 6〉
〈遺構 75〉
〈遺構 63〉
0 S=1/3 10cm
〈遺構 49〉
〈遺構 51〉

図13　2面出土遺物（4）



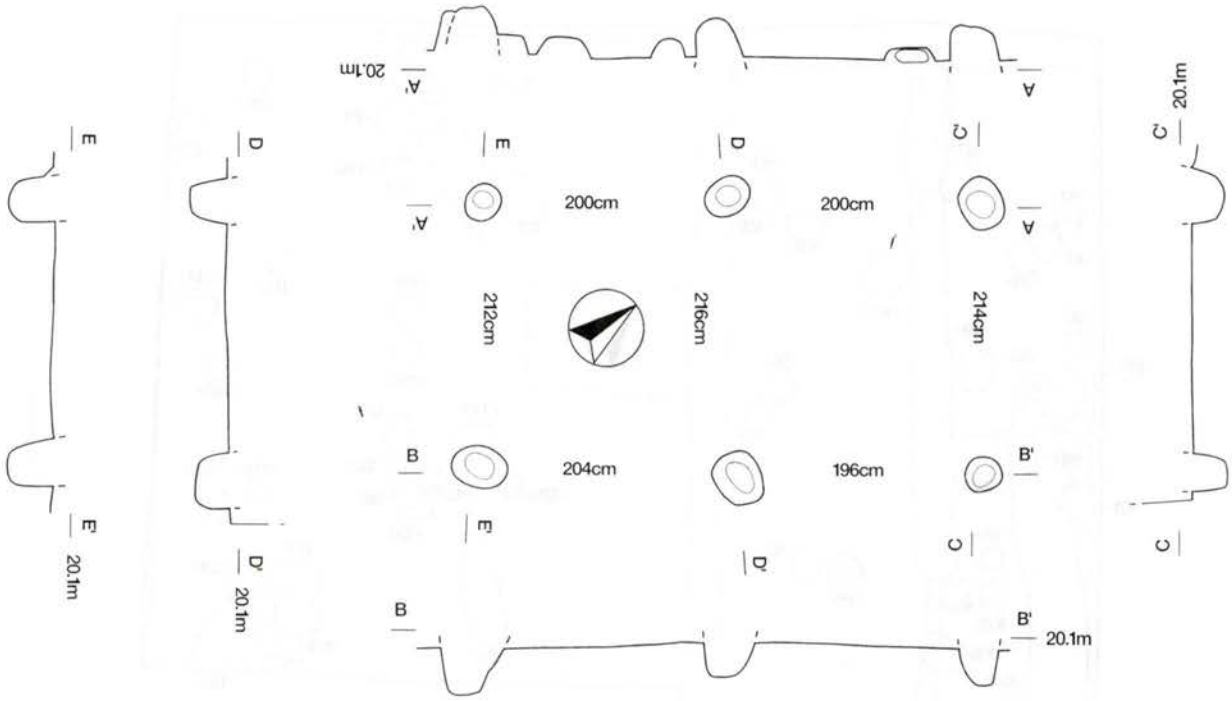
3　面



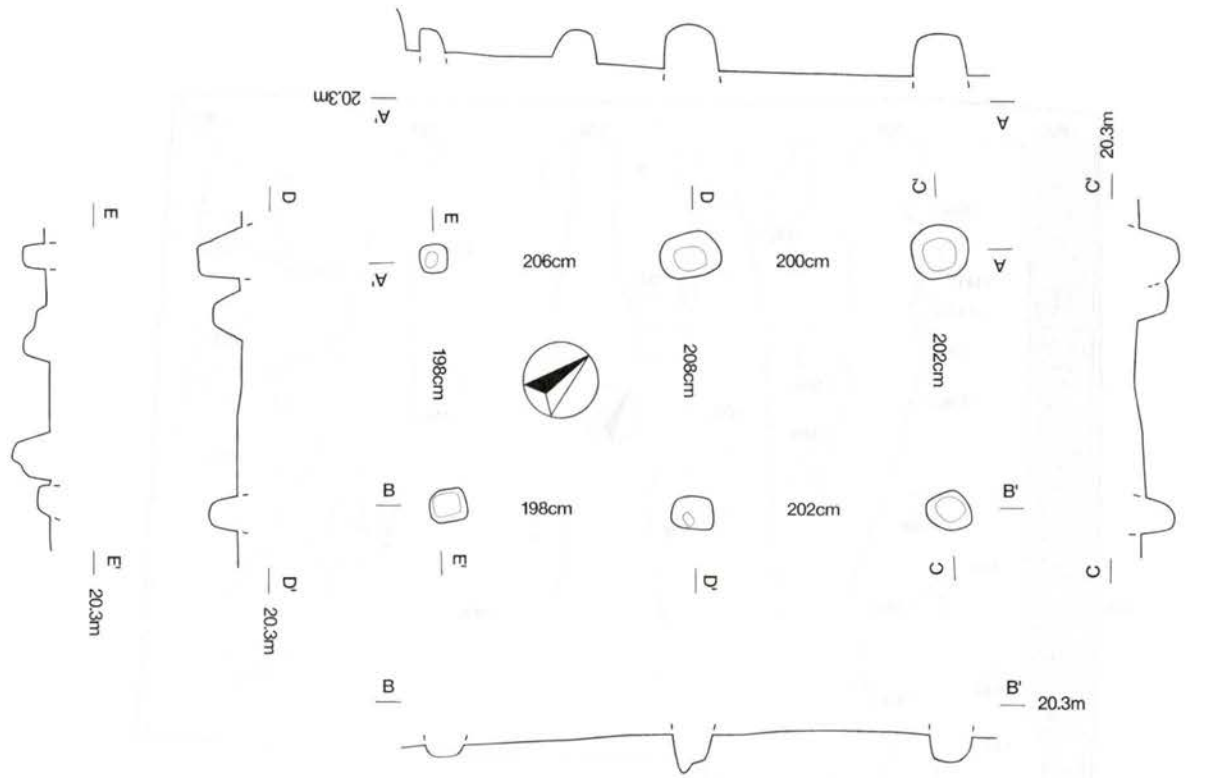
4　面

0　S=1/80　2m

図14　3、4面全体図



建物1



建物2

0 S=1/60 2m

図15 3面建物

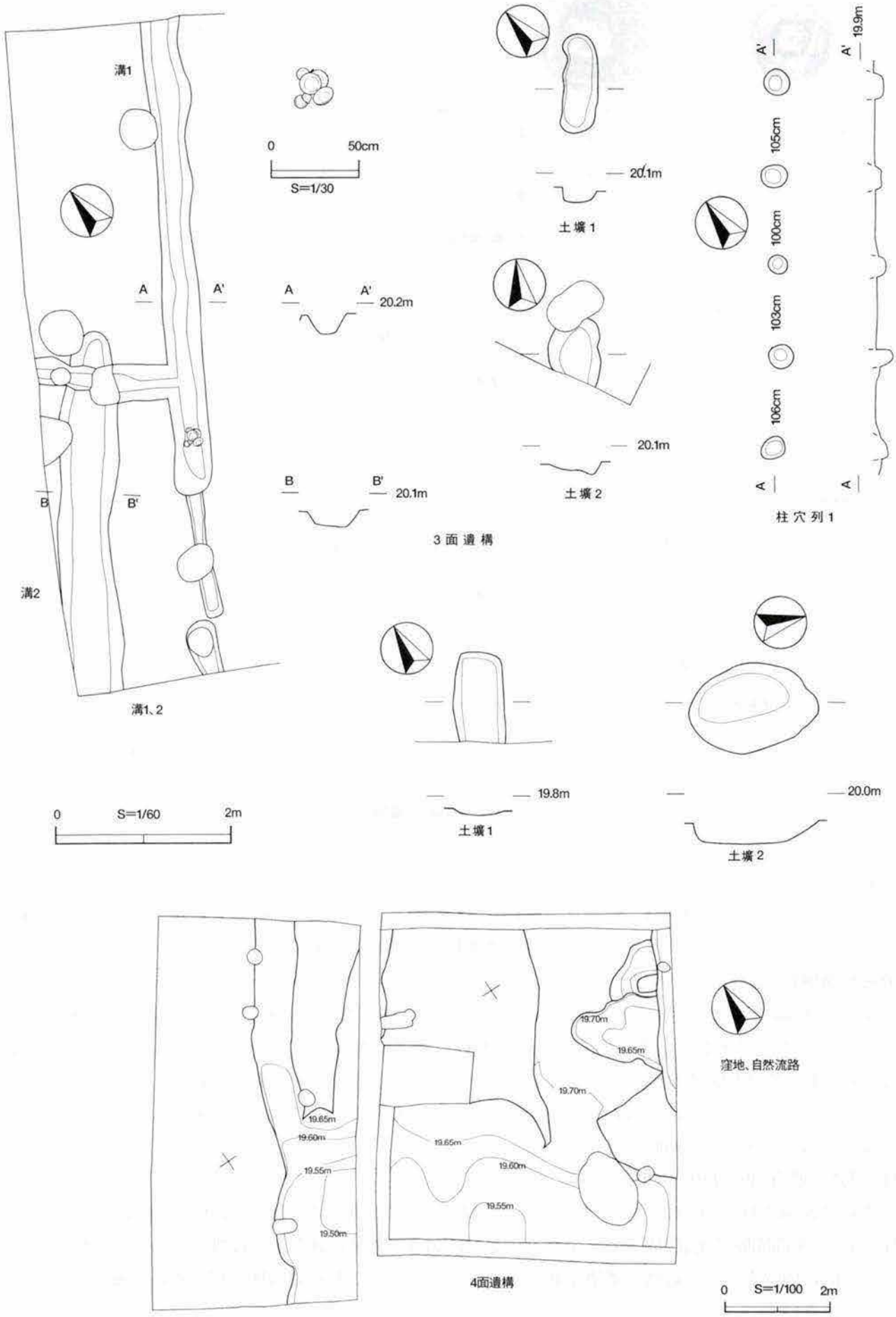

溝1
溝2
A
A'
B
B'
溝1、2
0
S=1/60
2m
0
50cm
S=1/30
A
A'
20.2m
B
B'
20.1m
3面遺構
20.1m
土壙1
20.1m
土壙2
A'
19.9m
105cm
100cm
103cm
106cm
A
柱穴列1
19.8m
土壙1
20.0m
土壙2
19.65m
19.60m
19.55m
19.50m
19.70m
19.65m
19.70m
19.65m
19.60m
19.55m
4面遺構
窪地、自然流路
0
S=1/100
2m

図16　3、4面遺構

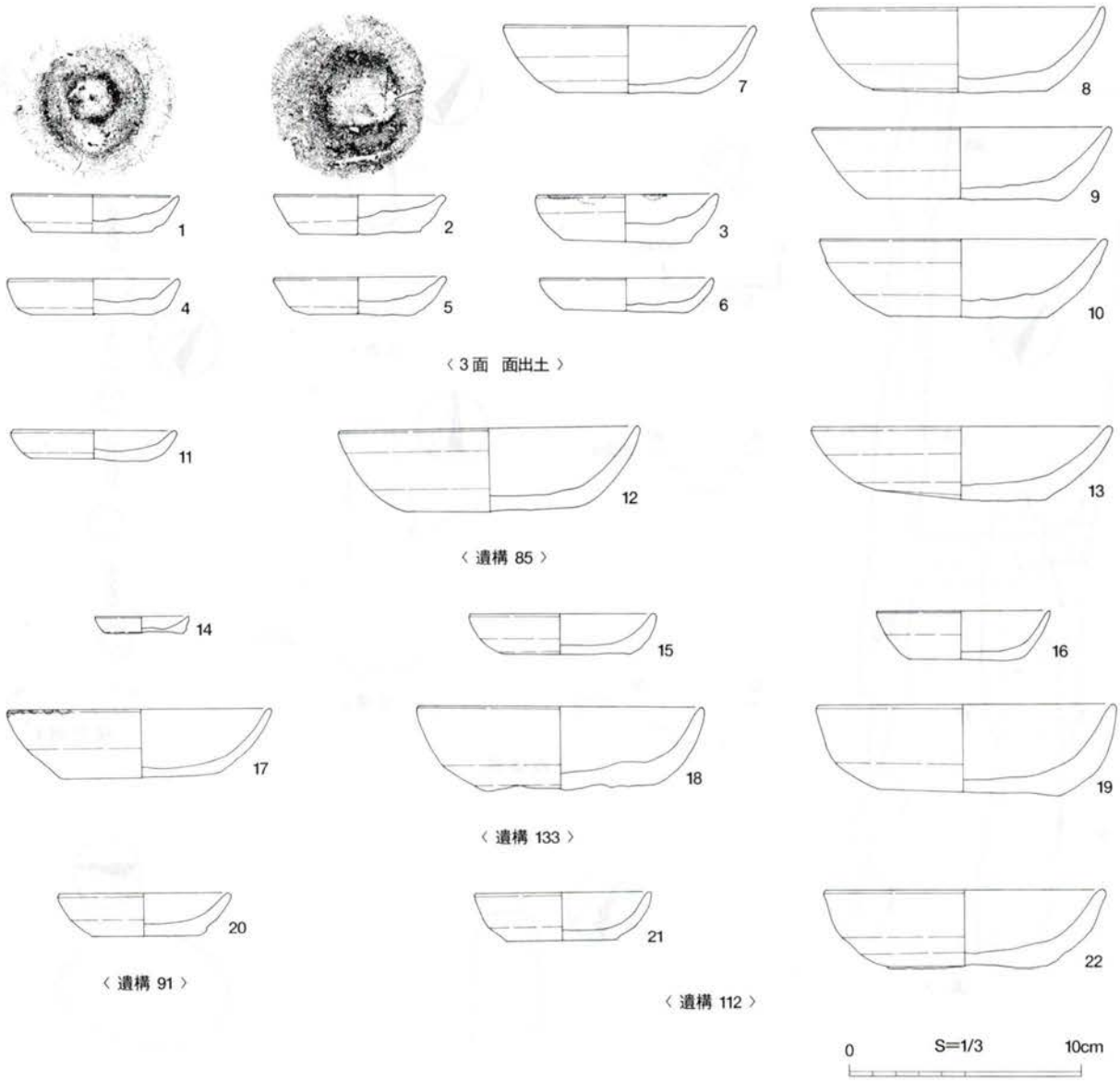


図17　3面出土遺物

第4面（図14,18、図版3）

この面で検出された遺構は、道路状遺構1条、柱穴列1列、溝1条、土壙2基、建物としての並びが捉えられなかったピット12口のほか、自然流路・窪地状の遺構などである。

道路状遺構1［遺構155］（図14）

調査区西端のD－1,E－1～3,F－2～4,G－4グリッドで検出された。確認標高約19.8m。主軸方位N－37°－E。調査区外南北に延びていくものと思われ、幅は調査区外西まで架かるため不明である。路面は土丹細粒を突き固めた地業面となっており、東端部分に土壌化した板材の痕跡らしきものと、その東に接して板材を留めるための杭の痕跡が確認される。これらの痕跡は調査区南側になると、その東に広がる地業面との区別が不明瞭となってしまう。

柱穴列1［遺構136～140］（図16）

調査区西側のD－2,E－2・4,F－4グリッドで検出された。確認標高約19.7m。主軸方位N－37°－E。柱穴5口が半間間隔で南北2間分並んでおり、さらに調査区外北に延びる可能性がある。この柱穴列から西に半間の間隔をおいて道路状遺構が通っていることから、これと同時期の塀あるいは柵のようなものかもしれない。

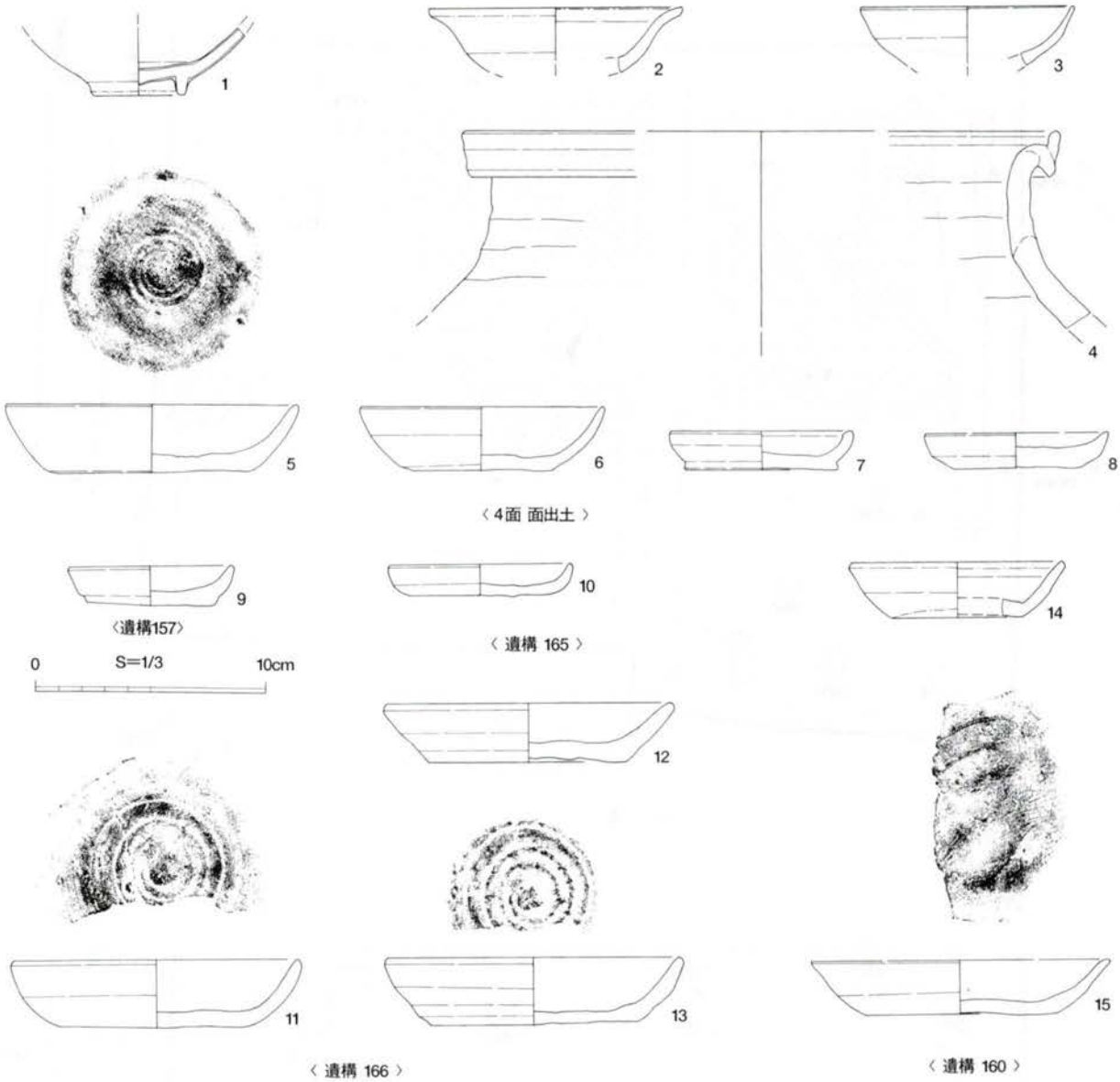


図18　4面出土遺物

溝1［遺構158］（図14）

調査区中央付近のC－3・4,D－4・5グリッドで検出された。確認標高約19.8m。主軸方位N－36°－E。断面形は浅いU字形を呈する。底面海抜値の比較では調査区北端が最も高く、調査区南端との比高差15㎝程で緩やかに南に降る。

土壙1［遺構156］（図16）

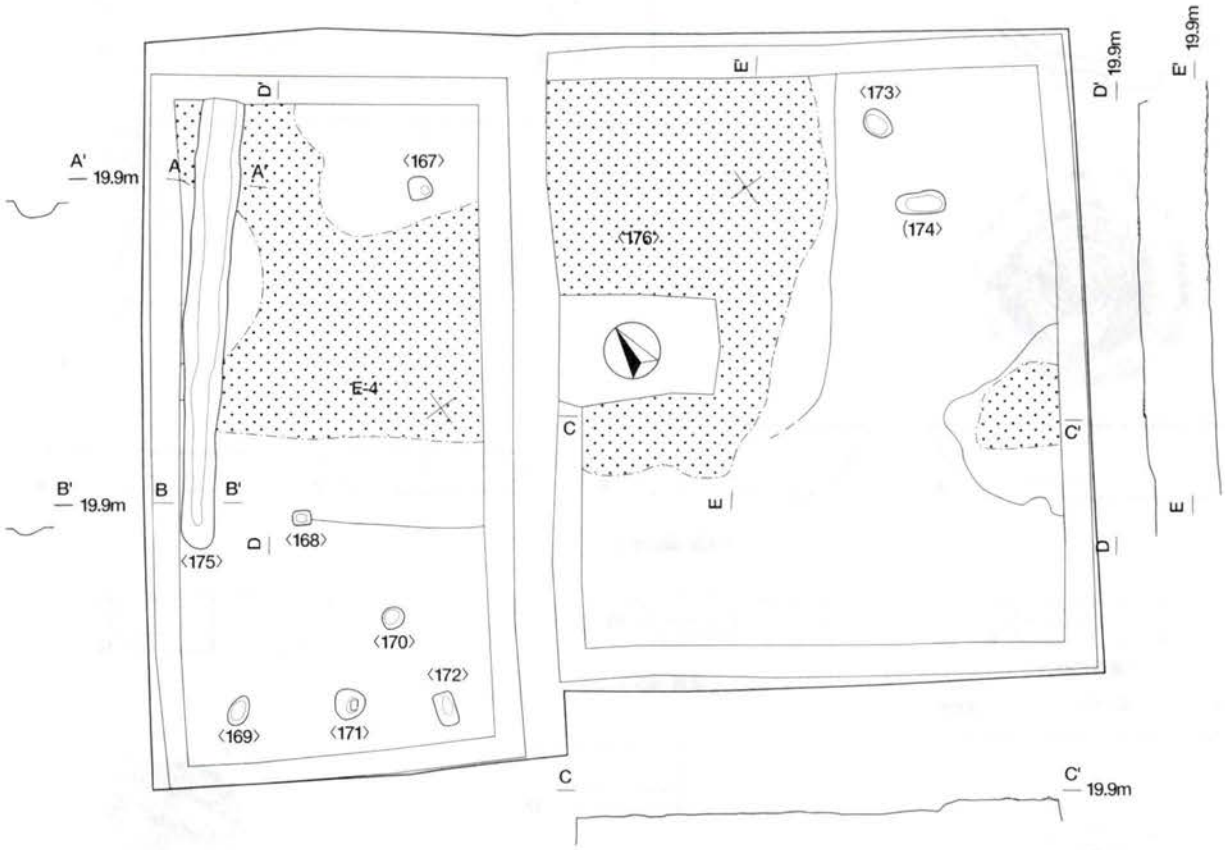
F－4・5グリッドで検出された。確認標高約19.7m。調査区外南へ延びており、推定平面形は長方形。長軸方位N－29°－E。

土壙2［遺構157］（図16,18－9）

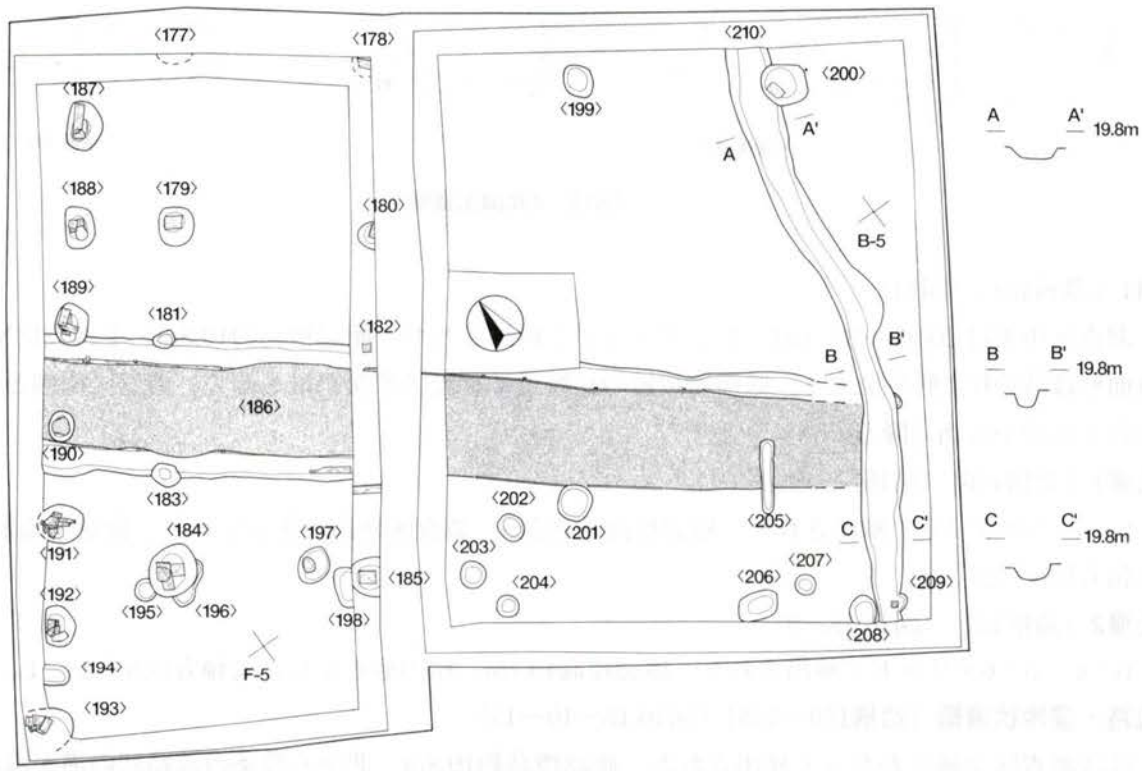
B・C－5・6グリッドで検出された。確認標高19.7m。楕円形を呈し、長軸方位N－2°－E。

流路・窪地状遺構［遺構159～166］（図16,18－10～15）

ほぼ調査区全域にわたって検出された。確認標高約19.8m。北から数条の流路状の溝が流れ、調査区中程から南にかけて広がる窪地へと流れ込んでいる。流路覆土には、粗砂や磨滅したかわらけ微細片を主体とする堆積土が最下層に薄く堆積しており、流れの淀みに溜まった様相を呈している。窪地は調査区中央付近南端で最も標高が低くなる。本址は自然遺構であろうと思われ、その要因として自然災害に



5　面



6　面

0　S=1/80　2m

図19　5、6面全体図

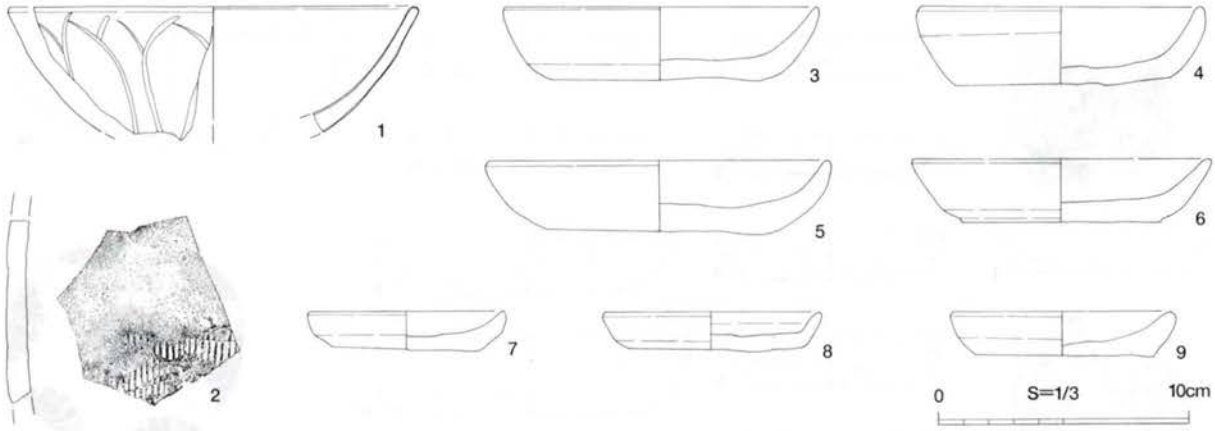


図20　5面出土遺物

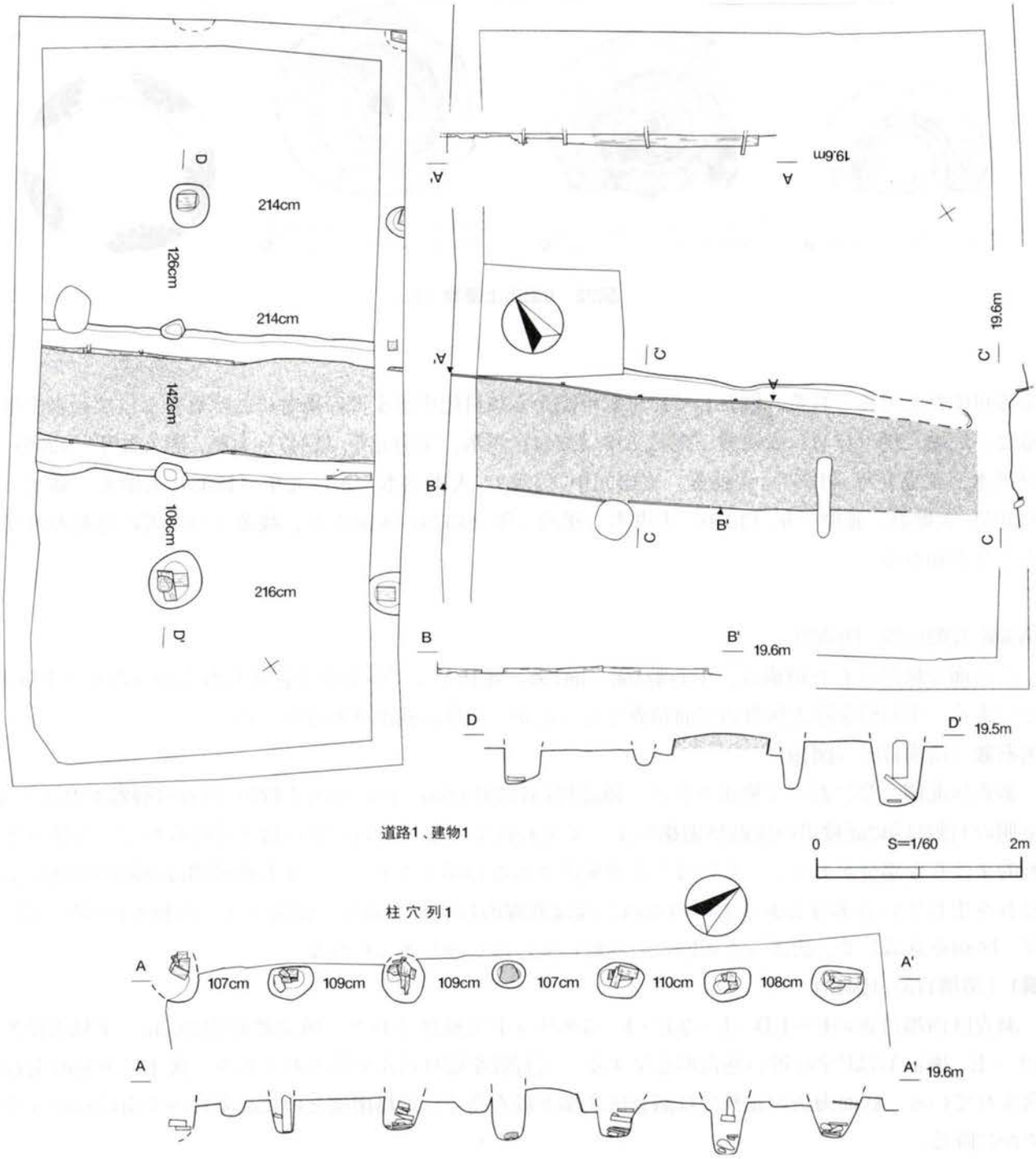


図21　6面道路、建物

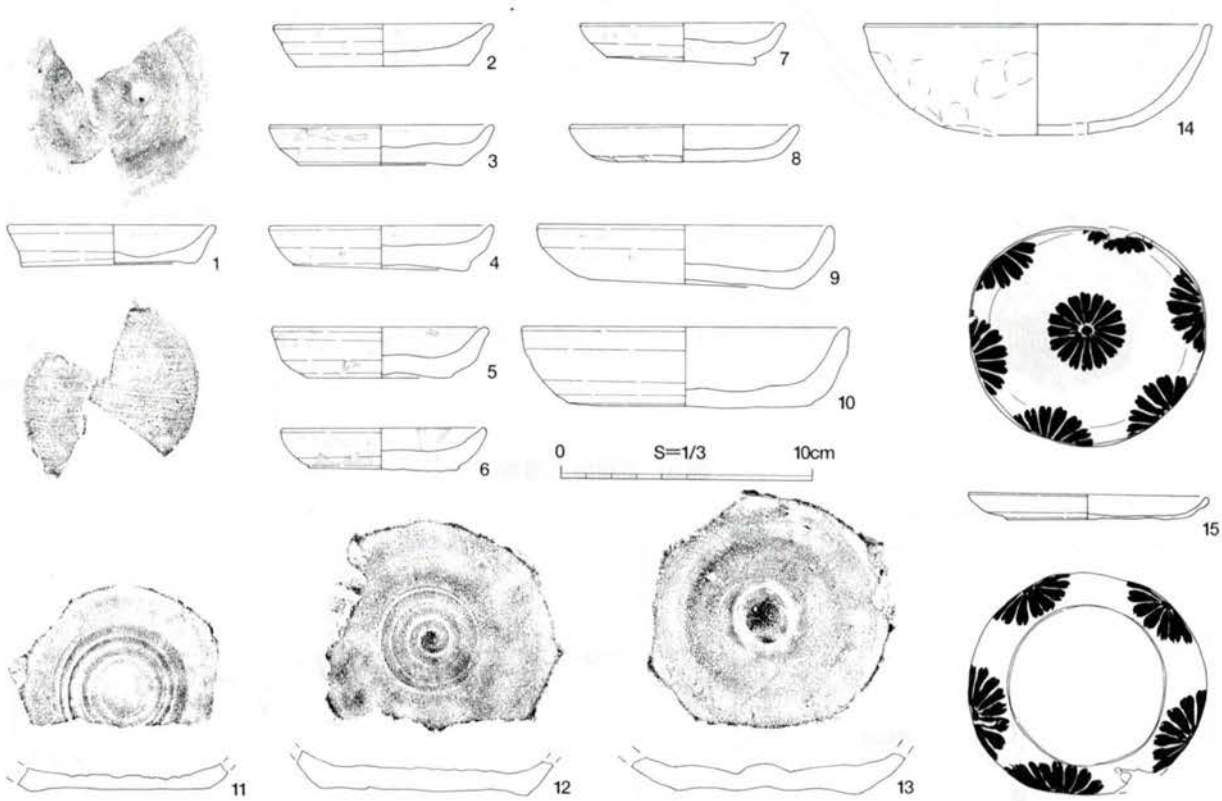


図22　6面出土遺物（1）

よる可能性も考えられる。例として13世紀中頃から14世紀中頃までの鎌倉における主な自然災害を挙げると、仁治二年（1241）大地震、寛元二年（1244）洪水、宝治元年（1247）大風、康元元年（1256）大風洪水、正嘉元年（1257）大地震、文応元年（1260）大風洪水、永仁元年（1293）大地震、嘉元三年（1305）大地震、延慶三年（1310）大洪水、建武二年（1335）大風など、数多くの災害に見舞われていることが知れる。

第5面（図19,20、図版3）

この面で検出された遺構は、玉石敷1面、溝1条、建物としての並びが捉えられなかったピット9口などである。玉石敷を除去後改めて面精査を行ったが、遺構は検出されなかった。

玉石敷［遺構176］（図19）

調査区北側一帯において検出された。確認標高は約19.8m。1㎝～5㎝大程の玉石が1層敷かれている。東側の石敷は第3面検出の流路状遺構によって失われている。玉石が密に敷き詰められている部分と比較的まばらな部分があり、さらにほとんど検出されない部分もあった。玉石敷南端は流路の影響により乱れを生じている部分もあるものの東西にほぼ直線的に切れており、南端ラインの軸方位はN－53°－W。区画を意識して、決まった範囲にのみ敷いていたものと考えられる。

溝1［遺構175］（図19）

調査区西端付近のE－1,D・E－2,E・F－3グリッドで検出された。確認標高約19.7m。主軸方位N－40°－E。断面形はU字に近い逆台形を呈する。玉石敷を切り込んで造られており、覆土に少量の玉石が含まれている。底面海抜の比較では調査区北端が最も高く、遺構南端との比高差15㎝で南に向かって緩やかに降る。

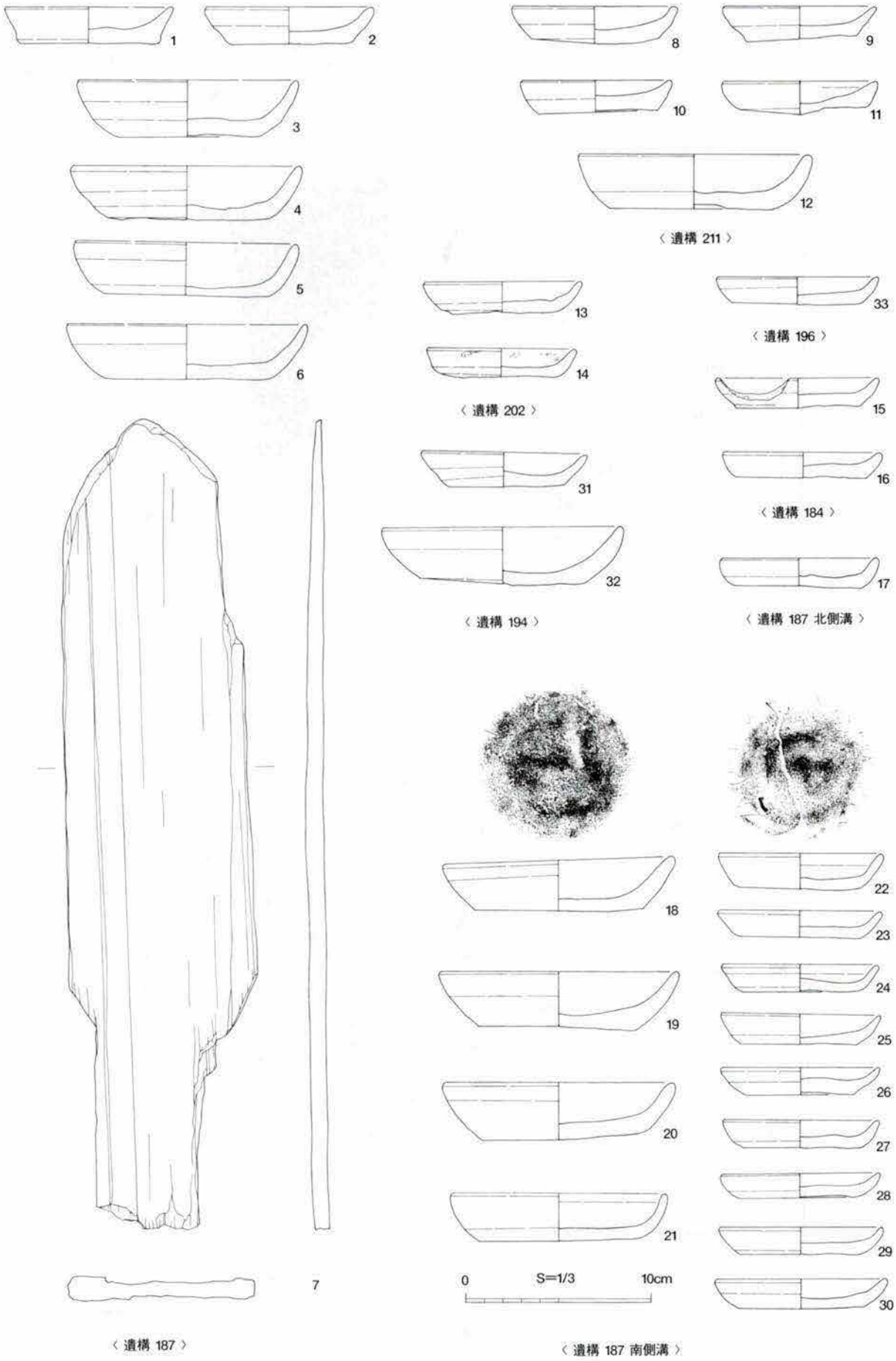
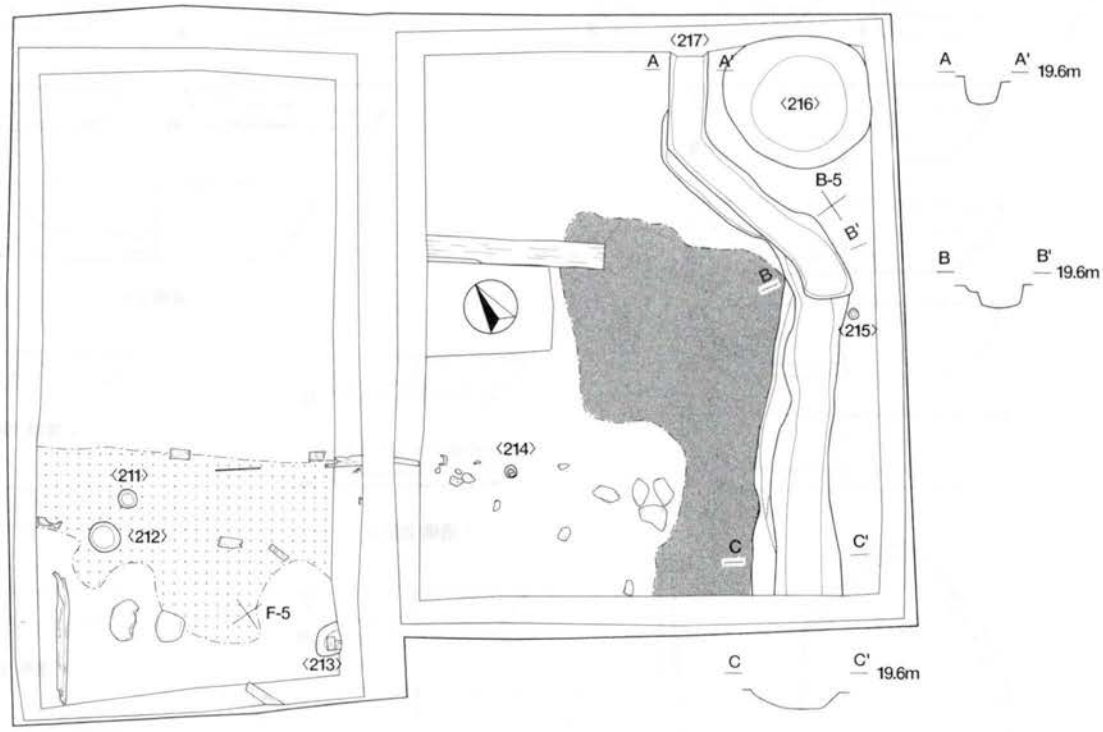
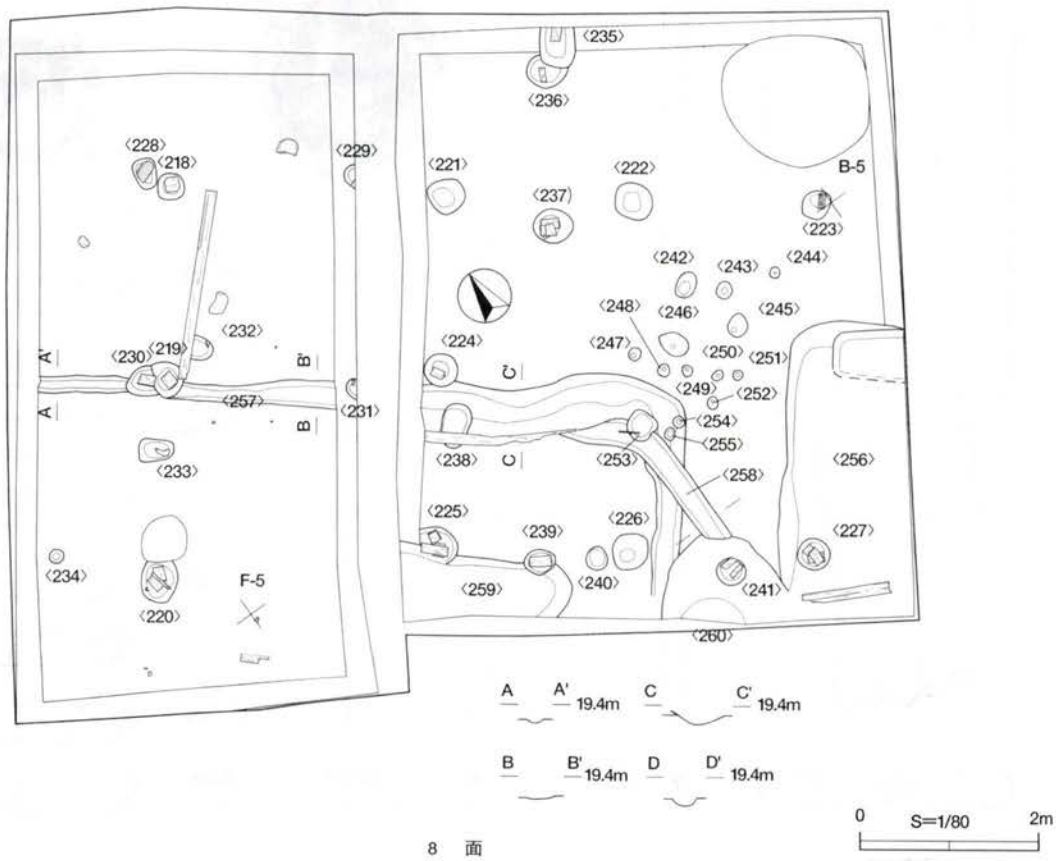

1
2
3
4
5
6
7
〈 遺構 187 〉
8
9
10
11
12
〈 遺構 211 〉
13
14
〈 遺構 202 〉
31
32
〈 遺構 194 〉
33
〈 遺構 196 〉
15
16
〈 遺構 184 〉
17
〈 遺構 187 北側溝 〉
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
0
S=1/3
10cm
〈 遺構 187 南側溝 〉

図23　6面出土遺物（2）



7　面



8　面

図24　7、8面全体図

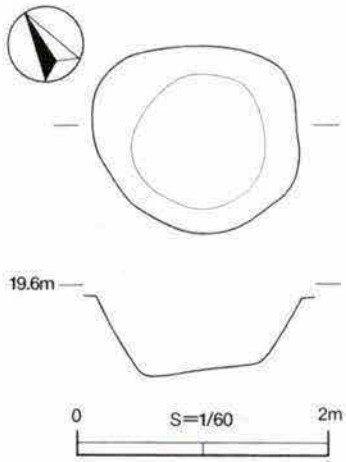


図25　7面土壙1

第6面（図19,22,23、図版3,4）

この面で検出された遺構は、道路1条、掘立柱建物1棟、柱穴列1列、溝1条のほか、建物としての並びが捉えられなかったピット16口などである。

道路1［遺構186］（図21,23－1～7・17～30）

調査区中央、B－5,C－4～6,D－3～5,E－3・4,F－3グリッドで検出された。確認標高約19.5m。主軸方位N－52°－W。道路面は拳大の土丹を突き固めた地業面となっており、両側に浅い側溝を伴う。道路面と側溝底面の比高差約20㎝を測る。道路面と側溝の境には、半ば土壌化しているものの、板材と杭によって土留めが施されていることが確認された。この道路面は調査区東に向かうにつれて生活面との境界が不明瞭となっていく。

建物1［遺構177～185］（図21,23－15・16）

調査区西側のD－3・4,E－2～5,F－4グリッドで検出された。確認標高約19.4m。主軸方位N－37°－E。建物規模は東西1間×南北3間分で、さらに南北に延びる可能性がある。南北柱穴列は、道路を跨ぐ部分のみ2間の間隔の間に4口の柱穴が並ぶ。道路両脇の柱穴2口のみほかの柱穴よりも一回り小さく、礎板を伴わない。道路に伴う築地塀と門跡の可能性が高い。

柱穴列1［遺構187～193］（図21,23－31・32）

調査区西端付近、E－2・3,F－3・4,G－4グリッドで検出された。確認標高約19.4m。主軸方位N－38°－E。半間間隔で3間分7口の柱穴が並び、さらに西・南北に延びる可能性がある。遺構191のみ礎石を伴うが、ほかの柱穴は礎板を伴う。遺構190・191は道路を切り込んで造られている。遺構189・193は柱を伴っており、塀跡かもしれない。

溝1［遺構210］（図19,23－8～12）

調査区東側のA・B－3・4,B－5,B・C－6グリッドで検出された。確認標高約19.6m。主軸方位は調査区北端から南へ約110㎝までN－23°－E、東へ20°振れてN－3°－Eとなり、そこからさらに南へ約110㎝で西へ30°振れてN－33°－Eとなって南へ流れる。断面形はU字に近い逆台形を呈する。道路1と重複関係にあるが、この部分では道路面が不明瞭となってしまい、新旧をつかみきれなかった。

第7面（図24,26～29、図版4,5）

この面で検出された遺構は、溝1条、土壙1基のほか、建物としての並びが捉えられなかったピット5口などである。調査区中央東寄りには炭化面が広がる。炭化物を投棄したものではなく、面自体にも焼けた痕跡が見られることから、あるいは火災等によるものかもしれない。調査区南西では土丹地業面上に板材や大型の鎌倉石が検出されている。建物の存在も考えられるが、調査区内ではそれを明確に示す遺構は見られなかった。

溝1［遺構217］（図24,29－6～25）

調査区東側のB－3～6,C－6グリッドで検出された。確認標高約19.5m。主軸方位は調査区北端から南へ約110㎝までN－36°－E、東へ52°振れてN－16°－Wとなり、そこからさらに南へ約190㎝で再び西へ52°振れてN－36°－Eとなって南へ流れる。断面形は立ち上がりの急な逆台形を呈する。北から2つ目の屈曲点付近までは底面は平坦で、ここで10㎝程の段差がついて一旦浅くなり、南へ向かって緩やかに降

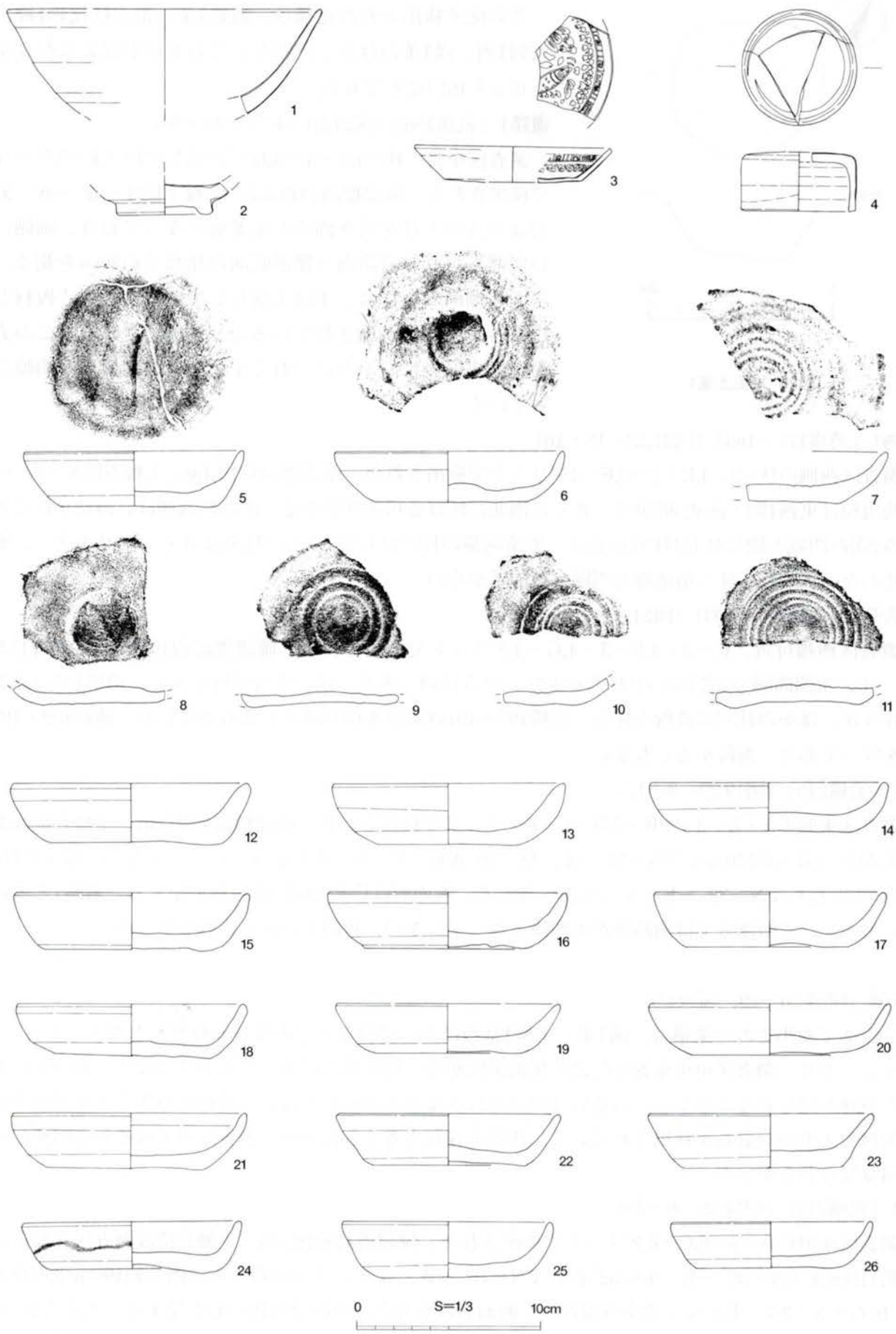

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
0
S=1/3
10cm

図26　7面出土遺物（1）

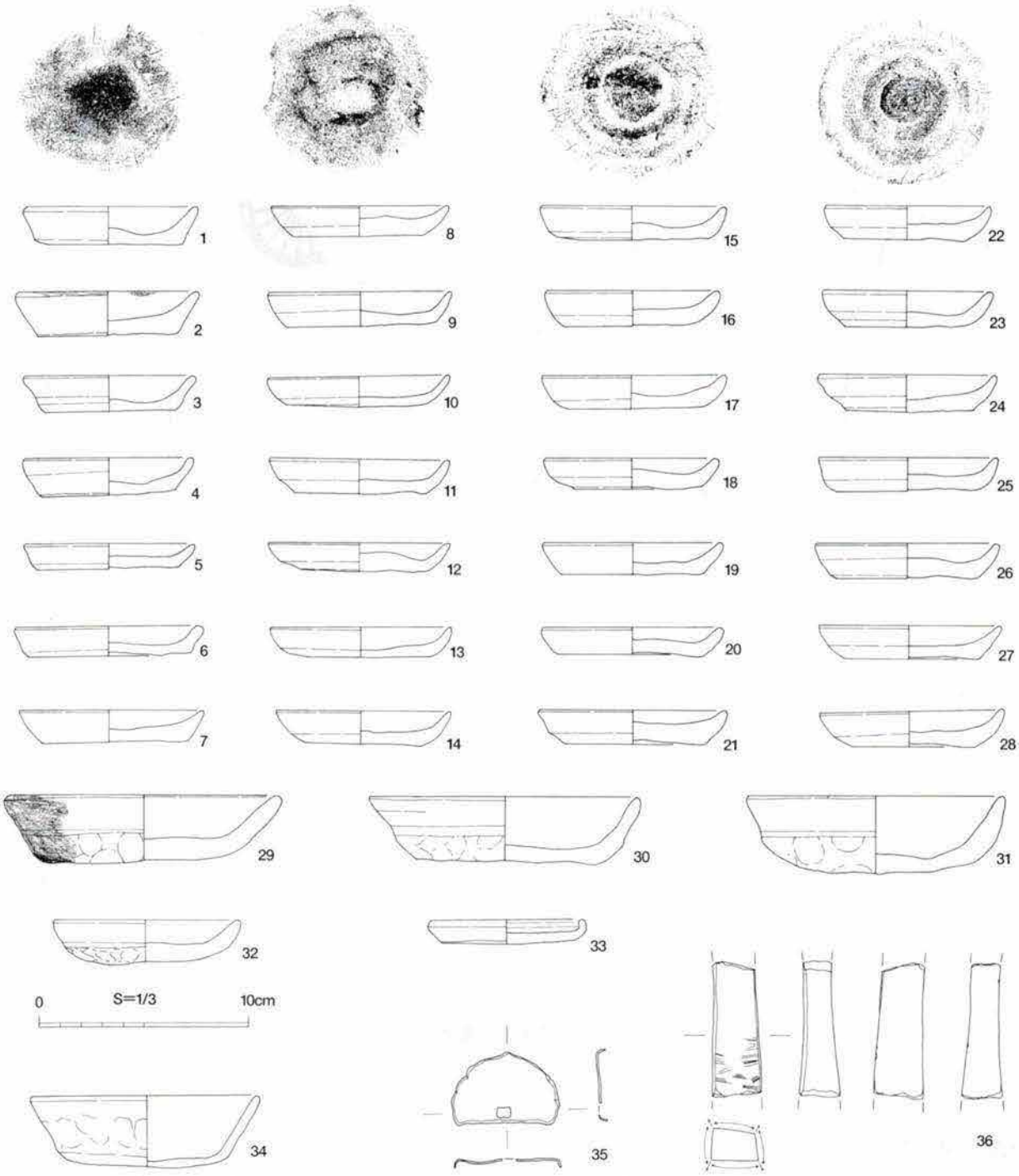


図27　7面出土遺物（2）

っていく。3時期の浚渫を繰り返しており、6面検出の溝1が最終となる3時期目のものである。2時期目の溝は平面的に捉えることが出来ず、開始となる1時期目の本址と同時に掘り上げた。

土壙1［遺構216］（図25）

調査区北東角、A・B－4グリッドで検出された。確認標高約19.5m。円形に近い平面形を呈し、断面形は逆台形となる。井戸の可能性も考えられるもののそれほど深くはなく、水溜のような使い方をしていたのかもしれない。溝はこの土壙を取り巻くように巡っており、同時期に存在していたものと推測される。

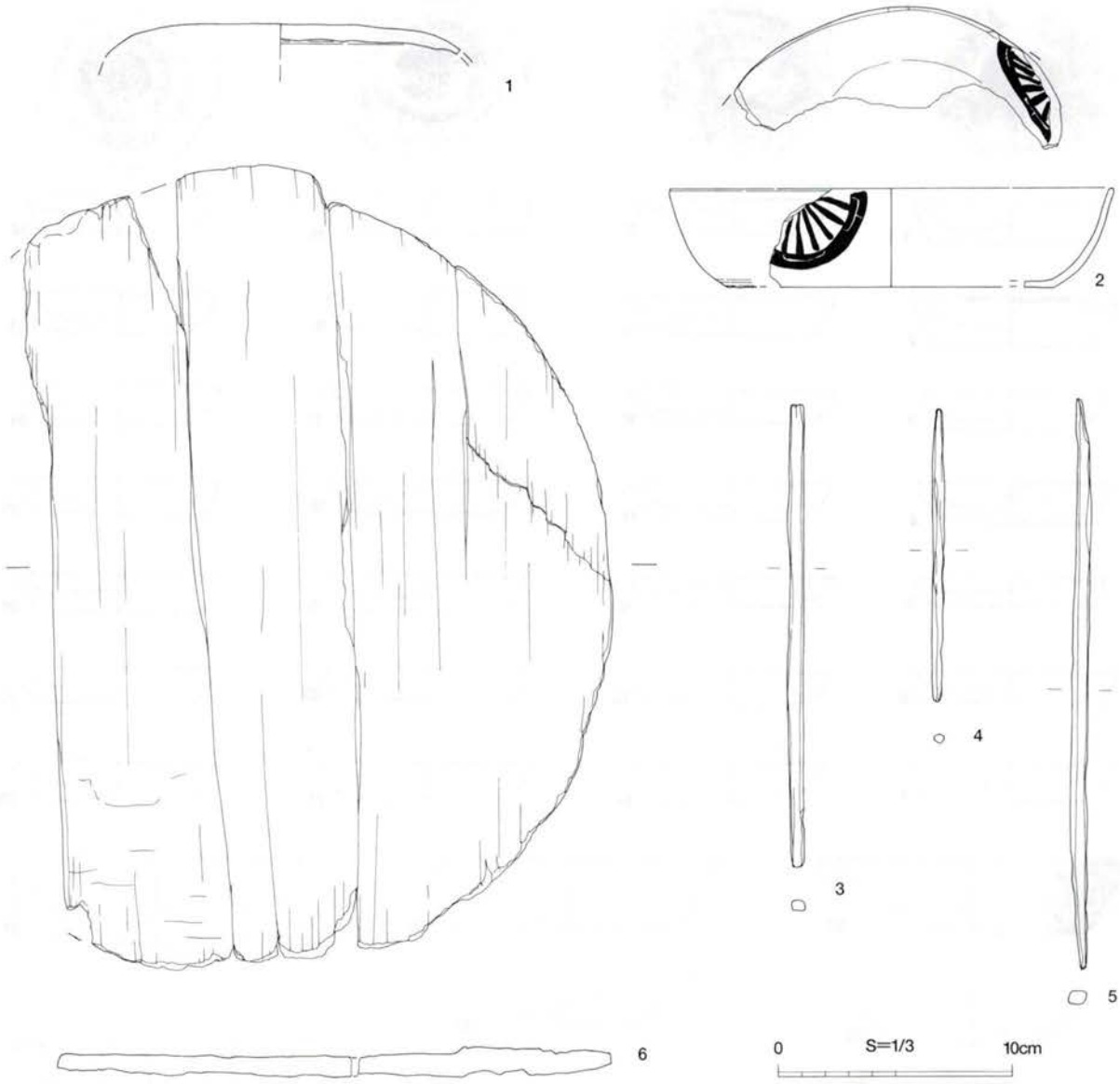


図28　7面出土遺物（3）

第8面（図24,31,32、図版5）

この面で検出された遺構は、掘立柱建物2棟、柱穴列1列、方形土壙1基、溝2条、建物としての並びが捉えられなかったピット24口などである。また、調査区中央南端、調査区東寄り南端に土壙状の窪地が見られる。

建物1［遺構221～227］（図30,32－9）

調査区東半のB－4・5,C－3・5・6,D－4・5グリッドで検出された。確認標高約19.1m。主軸方位N－37°－E。建物規模は東西2間×南北2間で、さらに東・南北に延びる可能性がある。遺構223・224・225・227は礎板を伴う。

建物2［遺構228～231］（図30）

調査区北西付近のD－3・4,E－2・3グリッドで検出された。確認標高約19.3m。主軸方位N－37°－E。建物規模は東西1間×南北1間で、さらに西・北に延びる可能性がある。遺構228は礎石を伴い、ほかは礎板を伴う。

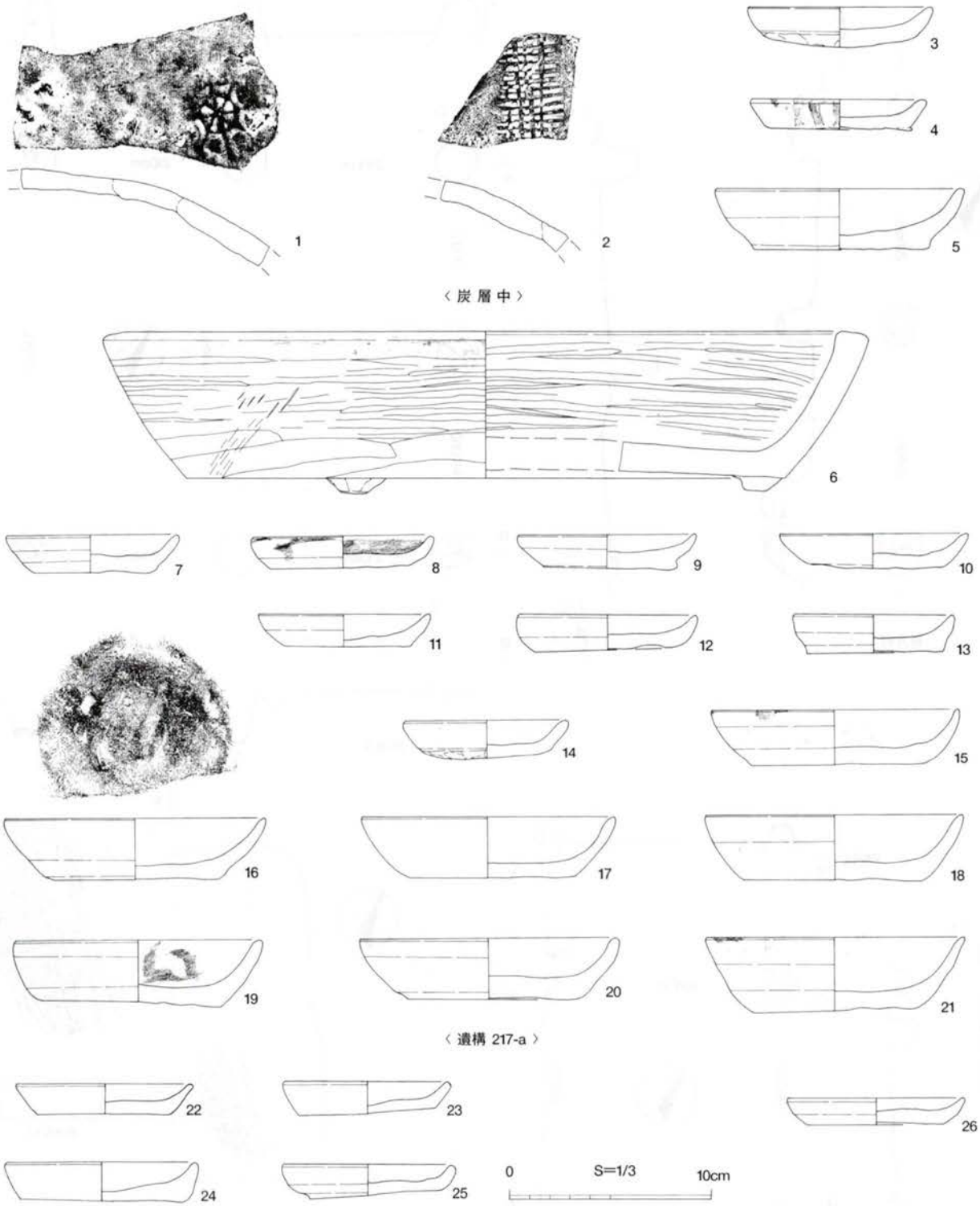


図29　7面出土遺物（4）

柱穴列1［遺構218～220］（図30,32－10）

調査区西側のD－2,E－2・3,F－4グリッドで検出された。確認標高約19.2m。主軸方位N－38°－E。規模は南北2間で、さらに西・南北に延びる可能性がある。柱穴は全て礎板を伴う。調査区外西側に展開する掘立柱建物かもしれない。

方形土壙1［遺構256］（図30,32－4）

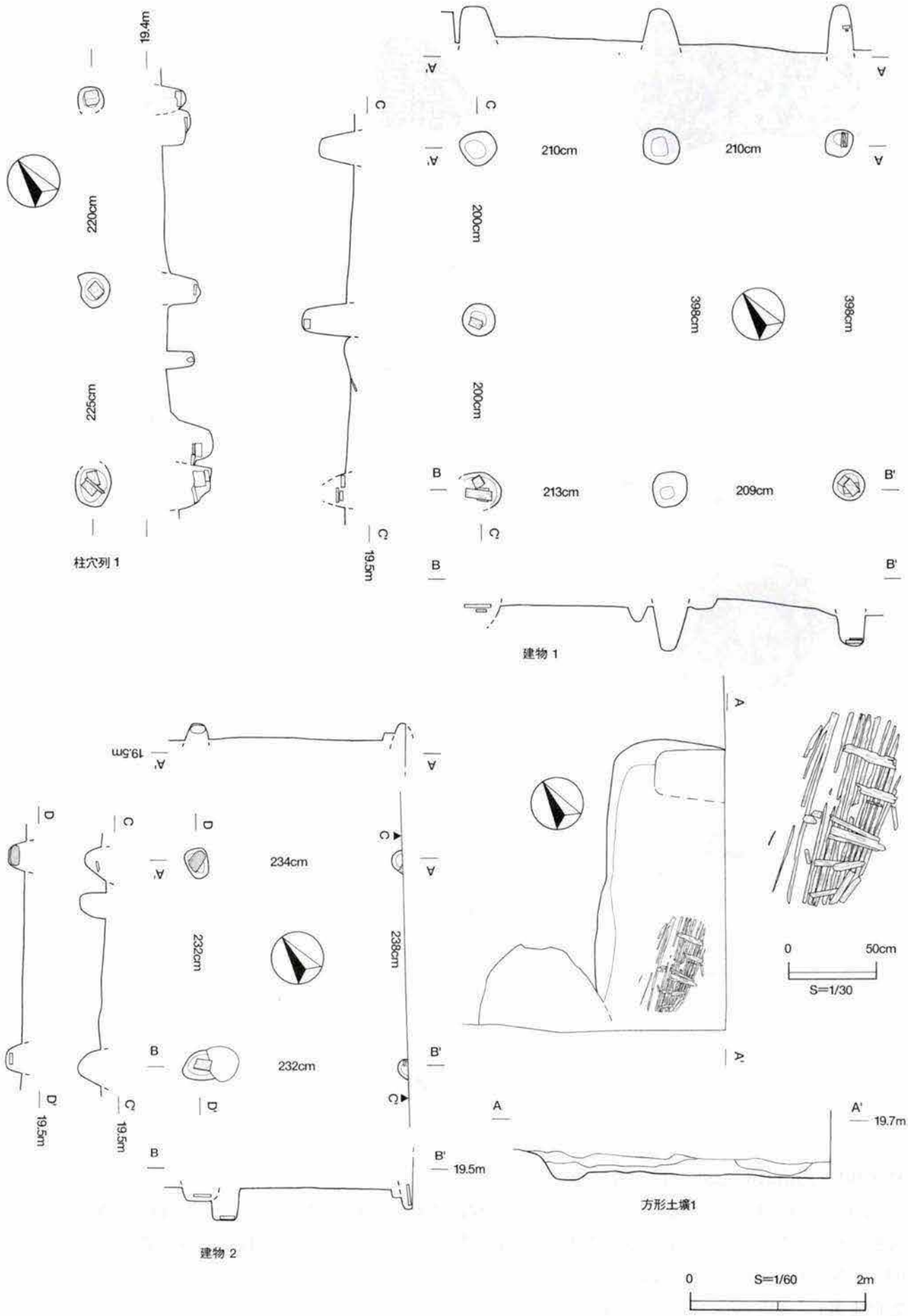

柱穴列 1
19.4m
19.5m
220cm
225cm
建物 1
210cm
210cm
200cm
200cm
398cm
398cm
213cm
209cm
建物 2
19.5m
234cm
232cm
232cm
238cm
19.5m
19.5m
19.5m
方形土壙1
19.7m
0
50cm
S=1/30
0
S=1/60
2m

図30　8面遺構

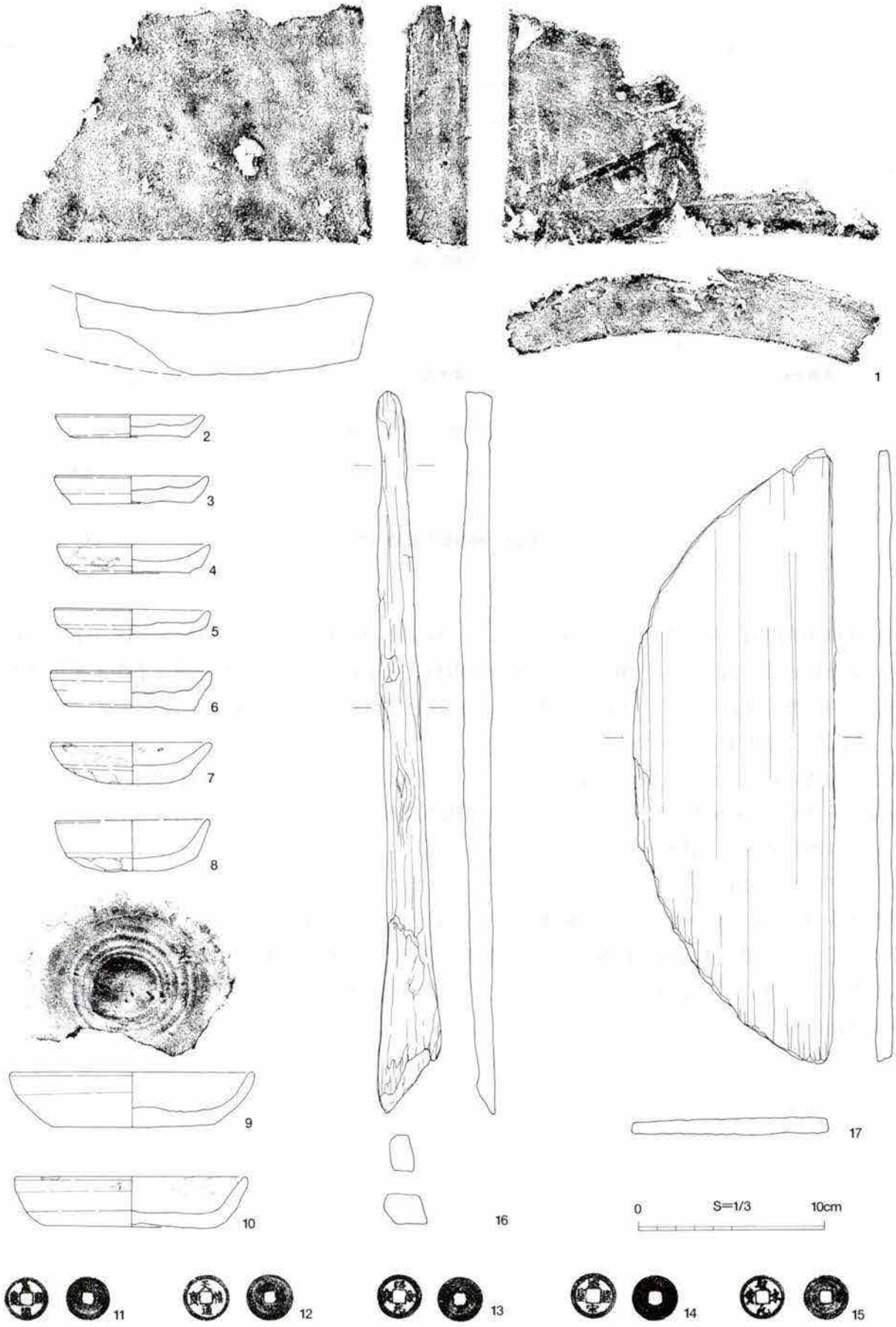


図31　8面出土遺物（1）

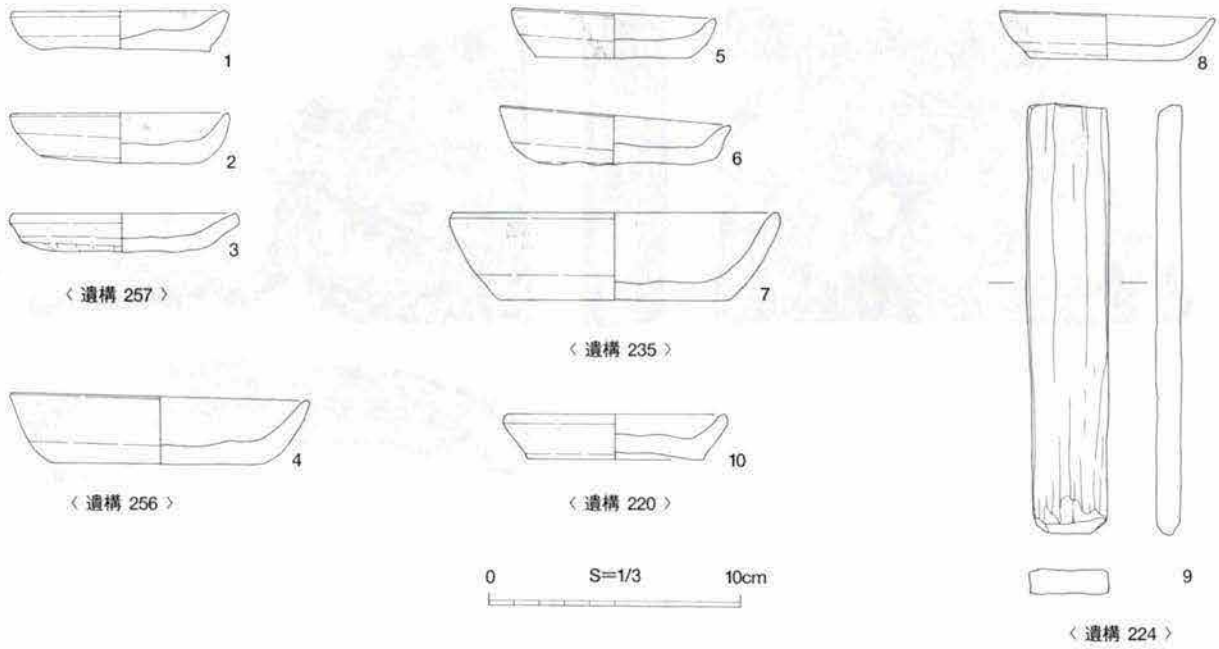


図32　8面出土遺物（2）

調査区南東角のB－5～7グリッドで検出された。確認標高約19.4m。主軸方位N－38°－E。底面は平坦で、北端付近のみ浅く窪む。覆土中から細長い板材を格子状に組み合わせた用途不明木組が出土している。遺存状態は非常に悪く、木組同士を留める釘などは残存していない。

溝1［遺構257］（図24,32－1～3）

調査区中央のC・D－4～6,E－3・4,F－3グリッドで検出された。確認標高約19.3m。主軸方位は調査区西端から東へ約760cmまでN－52°－W、南へ90°振れてN－38°－Eとなる。断面形は浅いU字形を呈する。底面は海抜値からの比較では平坦である。

溝2［遺構258］（図24）

調査区中央南のC－5・6グリッドで検出された。確認標高約19.3m。溝1によって大部分が切り込まれている。こちらの溝が先行する時期のものであり、溝1はこの溝の浚渫時に屈曲する方向を変えたものかもしれない。残存する部分の主軸方位はN－3°－W。断面形はU字形を呈する。底面は海抜値からの比較では南に向かって緩やかに降っている。

No.	検出面	種別	長軸	短軸	深さ	底面海抜	覆土
1	1	PIT	45	33	16	20.23	A
2	1	PIT	42	35	26.5	20.06	A
3	1	PIT	45	40	18.5	20.14	A
4	1	PIT	38	35	23	20.09	A
5	1	溝	[336]	34	14.5	20.19	A
6	2	PIT	59	48	22	20.03	A
7	2	PIT	63	[47]	29	19.99	A
8	2	PIT	54	51	42	19.92	A
9	2	PIT	[59]	53	19	20.01	A
10	2	PIT	53	48	21	20	A
11	2	PIT	74	[30]	22	20.01	B
12	2	PIT	43	41	30	19.88	A
13	2	PIT	[63]	40	24	19.94	A
14	2	PIT	61	45	16	20.04	A
15	2	PIT	[48]	[43]	17	19.96	B
16	2	PIT	48	40	22	19.98	B
17	2	PIT	42	30	11.5	20.02	B
18	2	PIT	38	21	10	20.06	B
19	2	PIT	53	42	14	20	A
20	2	PIT	52	50	22	19.98	A
21	2	PIT	49	[40]	21	19.92	A
22	2	PIT	62	[40]	20	19.93	B
23	2	PIT			19	19.93	B
24	2	PIT	45	[27]	10.5	20.11	B
25	2	PIT	49	45	15	20.08	B
26	2	PIT	49	40	30	19.92	B
27	2	PIT	53	50	28	19.92	B
28	2	PIT	38	36	11.5	20.13	B
29	2	PIT	59	26	9.5	20.12	B
30	2	PIT	63	47	32	19.85	B
31	2	PIT	[63]	52	10.5	20.07	B
32	2	PIT	56	50	10.5	20.09	B
33	2	PIT	55	49	25	19.88	B
34	2	PIT	39	39	7.5	20.08	B
35	2	PIT	50	34	16.5	19.98	B
36	2	PIT	59	47	15.5	20.03	B
37	2	PIT	38	35	17.5	20.11	B
38	2	PIT	[50]	[24]	38	19.87	B
39	2	PIT	35	30	13.5	20.1	B
40	2	PIT	28	21	15	20.04	B
41	2	PIT	34	20	20	19.93	B
42	2	PIT	29	21	12	19.97	B
43	2	PIT	23	[15]	26.5	19.9	A
44	2	PIT	54	40	12.5	20.09	A
45	2	PIT	45	21	4.5	20.14	A
46	2	PIT	43	39	21	19.97	A
47	2	PIT	23	19	7	20.09	B
48	2	PIT	25	19	9.5	20.08	B
49	2	PIT	[91]	[71]	27	19.93	B
50	2	PIT	[50]	[32]	13.5	20.04	B
51	2	PIT	[50]	[39]	26.5	19.93	A
52	2	PIT	34	[25]	21	19.9	B
53	2	PIT	45	30	16	19.97	B
54	2	PIT	22	22	15	20.01	B
55	2	PIT	40	33	19	19.95	B
56	2	PIT	[18]	17	12	20.03	B
57	2	PIT	33	30	11	20.03	B
58	2	PIT	46	32	12	20.06	B
59	2	PIT	38	24	12.5	20.04	B
60	2	PIT	[48]	[41]	34	19.83	B
61	2	PIT	57	[52]	20.5	19.98	A
62	2	PIT	[62]	[53]	57	19.6	B
63	2	PIT	80	[64]	32	19.83	B
64	2	PIT	14	13	11	20.04	A
65	2	PIT	[31]	24	12	20.04	A
66	2	PIT	34	25	25	19.95	B
67	2	PIT	43	26	31.5	19.85	B
68	2	PIT	41	40	29	19.82	B
69	2	PIT	29	[22]	14	19.88	B
70	2	土壙	122	65	38.5	19.77	B
71	2	土壙	113	44	39	19.74	B
72	2	土壙	132	55	42	19.69	B
73	2	溝	[278]	56	5	20.17	A
74	2	溝	185	19	8.5	20.05	B
75	2	溝	[248]	53	11.5	20.06	A
76	2	溝	[94]	37	15	20.02	A
77	2	溝	[150]	42	12	20.08	A
78	2	溝	[292]	22	10	19.92	B
79	2	溝	180	34	19.5	19.82	B
80	2		据石切石寸法　長92×短30×厚23				
			切石寸法　長58×短39×厚22				
81	3	PIT	42	34	27	19.75	B
82	3	PIT	29	26	28	19.72	B
83	3	PIT	38	30	30	19.7	B
84	3	PIT	44	37	27	19.76	B
85	3	PIT	30	28	36	19.61	B
86	3	PIT	45	35	37	19.59	B
87	3	PIT	45	43	34.5	19.77	B
88	3	PIT	39	33	25	19.8	B
89	3	PIT	49	36	36.5	19.72	B
90	3	PIT	33	27	35	19.7	B
91	3	PIT	23	22	18.5	19.76	B
92	3	PIT	29	26	10.5	19.85	B
93	3	PIT	34	25	27	19.82	B
94	3	PIT	39	32	11.5	19.98	B
95	3	PIT	39	[37]	9.5	20	B
96	3	PIT	29	23	23.5	19.8	B
97	3	PIT	54	47	15.5	19.88	B
98	3	PIT	28	22	31.5	19.77	B
99	3	PIT	23	19	10.5	19.84	C
100	3	PIT	[44]	[34]	39.5	19.63	B
101	3	PIT	[56]	[33]	16.5	19.78	B
102	3	PIT	34	26	34	19.59	C
103	3	PIT	19	17	19	19.73	C
104	3	PIT	19	18	19	19.68	C
105	3	PIT	23	[22]	20.5	19.67	B
106	3	PIT	47	35	19.5	19.72	B
107	3	PIT	50	38	23	19.87	B
108	3	PIT	41	23	19	19.89	B
109	3	PIT	19	16	17.5	19.9	B
110	3	PIT	28	26	37	19.78	B
111	3	PIT	37	36	31	19.64	B
112	3	PIT	32	31	26	19.64	B
113	3	PIT	31	[24]	34.5	19.56	B
114	3	PIT	27	23	10	19.79	C
115	3	PIT	39	30	14	19.87	B
116	3	PIT	38	38	8.5	19.96	B
117	3	PIT	27	25	14.5	19.88	B
118	3	PIT	32	29	13	19.89	B
119	3	PIT	50	35	13	19.88	B
120	3	PIT	27	25	21.5	19.8	B
121	3	PIT	44	31	15	19.87	B
122	3	PIT	20	20	10.5	19.89	B
123	3	PIT	[40]	33	18.5	19.85	C
124	3	PIT	42	39	31.5	19.66	C
125	3	PIT	36	27	20	19.84	B
126	3	PIT	27	23	9	19.86	B
127	3	PIT	55	[45]	15	19.77	C
128	3	PIT	50	44	12.5	19.75	C
129	3	PIT	41	35	21	19.67	C
130	3	PIT	34	[31]	14.5	19.78	C
131	3	土壙	112	40	22	19.78	C
132	3	土壙	[75]	59	20	19.72	C
133	3	溝	[540]	49	26	19.71	B

表1　遺構計測表（1）

No.	検出面	種別	長軸	短軸	深さ	底面海抜	覆土
134	3	溝	[500]	66	24	19.62	B
135	3	溝	[244]	80	5.5	19.95	C
136	4	PIT	31	29	13	19.65	D
137	4	PIT	29	26	7	19.62	D
138	4	PIT	22	20	11	19.59	D
139	4	PIT	27	26	17	19.52	D
140	4	PIT	31	24	10.5	19.59	D
141	4	PIT	36	25	10	19.64	D
142	4	PIT	11	11	9.5	19.62	D
143	4	PIT	[28]	[15]	11	19.54	D
144	4	PIT	27	23	14	19.53	D
145	4	柱痕柱痕寸法11×11					
146	4	PIT	27	23	14	19.51	D
147	4	溝状遺構	[94]	40	14	19.67	E
148	4	PIT	57	50	15.5	19.66	E
149	4	PIT	35	30	17	19.61	E
150	4	PIT	46	27	11	19.48	E
151	4	PIT	[58]	29	8	19.69	E
152	4	PIT	[52]	38	6	19.76	E
153	4	PIT	40	27	6.5	19.79	E
154	4	PIT	30	20	7	19.76	E
155	4	道路状遺構	[754]	[76]			
156	4	土壙	[105]	58	11	19.58	E
157	4	土壙	147	106	29	19.43	D
158	4	溝	[596]	113	14.5	19.56	D
159	4	溝	[736]	73	12	19.56	E
160	4	溝	[720]	80	9	19.51	E
161	4	溝	[446]	90	7	19.69	E
162	4	溝	[351]	[38]	17	19.68	E
163	4	窪地	144	[90]	15	19.69	E
164	4	窪地	[172]	[145]	9	19.63	E
165	4	溝	[296]	44	8	19.71	E
166	4	窪地	[544]	[276]	22	19.54	E
167	5	PIT	28	26	15.5	19.51	C
168	5	PIT	20	16	7.5	19.42	C
169	5	PIT	34	20	6.5	19.33	C
170	5	PIT	26	22	6.5	19.39	C
171	5	PIT	33	32	6.5	19.35	C
172	5	PIT	36	22	9	19.32	C
173	5	PIT	33	25	9	19.64	C
174	5	PIT	53	25	12	19.61	C
175	5	溝	[474]	48	18	19.39	D
176	5	玉石敷	[940]	[422]			
177	6	PIT	[39]		[15]		G
178	6	PIT	[24]	[20]	[30]		G
179	6	PIT	49	34	42	18.96	G
180	6	PIT	[29]	[17]	11	19.04	G
181	6	PIT	[24]	[20]	14	19.21	G
182	6	柱 柱寸法9×9cm					
183	6	PIT	33	24	49.5	18.98	G
184	6	PIT	60	51	63	18.8	G
185	6	PIT	[41]	[29]	44.5	18.89	G
186	6	道路	[328]	145	26	19.27	
187	6	PIT	53	36	39	19.04	F
188	6	PIT	45	31	53	18.86	F
189	6	PIT	[46]	35	32	19.05	F
190	6	PIT	33	26	48	19	F
191	6	PIT	[47]	41	32	19.12	F
192	6	PIT	44	33	32	19.1	F
193	6	PIT	[37]	[25]	24	19.13	F
194	6	PIT	[27]	24	15.5	19.26	F
195	6	PIT	25	23	11	19.3	G
196	6	PIT	53	26	15	19.28	G
197	6	PIT	41	33	21	19.25	G

No.	検出面	種別	長軸	短軸	深さ	底面海抜	覆土
198	6	PIT	44	[20]	14.5	19.3	G
199	6	PIT	38	32	14.5	19.37	F
200	6	PIT	50	46	32	19.3	F
201	6	PIT	39	38	14.5	19.36	G
202	6	PIT	30	27	12.5	19.34	G
203	6	PIT	30	28	12	19.32	G
204	6	PIT	25	25	12.5	19.29	G
205	6	溝状土壙	77	15	8.5	19.53	H
206	6	PIT	47	29	15.5	19.42	G
207	6	PIT	23	22	20	19.38	G
208	6	PIT	[30]	28	17.5	19.31	G
209	6	PIT	[20]	[15]	11	19.35	H
210	6	溝	[620]	[50]	28.5	19.36	F
211	7	PIT	21	20	12.5	19.17	I
212	7	PIT	36	33	9.5	19.15	I
213	7	PIT	35	[29]	7	19.16	I
214	7	PIT	13	12	9	19.25	I
215	7	PIT	12	10	11.5	19.35	I
216	7	土壙	172	153	79	18.73	I
217	7	溝	[606]	61	31	19.21	F
218	8	PIT	29	[24]	30	18.94	K
219	8	PIT	41	35	35	18.82	J
220	8	PIT	[46]	41	36	18.67	C
221	8	PIT	43	38	40	18.94	J
222	8	PIT	45	40	41	18.97	J
223	8	PIT	35	30	55	18.91	J
224	8	PIT	38	35	56	18.83	J
225	8	PIT	[43]	38	17	19.05	J
226	8	PIT	40	39	50	18.67	J
227	8	PIT	37	36	35	18.72	J
228	8	PIT	35	26	20	19.06	J
229	8	PIT	[24]	[12]	23	19.06	K
230	8	PIT	[35]	[34]	17	19.03	H
231	8	PIT	[25]	[12]	23	18.93	J
232	8	PIT	26	[24]	5	19.12	H
233	8	PIT	39	27	32.5	18.87	K
234	8	PIT	17	15	7	19.07	H
235	8	PIT	[45]	40	39.5	18.97	J
236	8	PIT	[43]	[26]	9	19.28	J
237	8	PIT	45	37	42	18.92	J
238	8	PIT	49	32	37	18.89	J
239	8	PIT	35	28	11.5	19.08	D
240	8	PIT	27	24	18	19	J
241	8	PIT	33	30	9.5	19.08	D
242	8	PIT	30	22	14.5	19.22	K
243	8	PIT	21	19	18	19.13	K
244	8	PIT	12	11	11	19.23	K
245	8	PIT	27	21	21	19.1	J
246	8	PIT	35	23	23	19.08	I
247	8	PIT	16	14	18	19.08	I
248	8	PIT	14	13	9.5	19.17	I
249	8	PIT	14	11	19.5	19.11	I
250	8	PIT	14	11	20	19.08	I
251	8	PIT	11	10	21	19.07	I
252	8	PIT	14	11	13	19.12	I
253	8	PIT	35	34	38	18.89	H
254	8	PIT	13	12			H
255	8	PIT	14	11			H
256	8	方形土壙	[150]	[138]	17	19.05	K
257	8	溝	[294]	64	14.5	19.18	H
258	8	溝	[190]	30	18.5	19.09	H
259	8	落ち込み	[169]	[65]	15	19.04	H
260	8	土壙	[145]	[96]	39	18.78	H

表2　遺構計測表（2）

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
図6 1面　出土遺物				
1	土器　かわらけ	7.7	5.7	2.1
2	土器　かわらけ	7.2	4.5	2
3	土器　かわらけ	(11.3)	(7.2)	2.8
4	土器　かわらけ	(11.8)	(7.3)	2.9
5	土器　かわらけ	13.6	7.9	3.7
6	土器　かわらけ	13.2	7.9	3.7
7	土器　かわらけ	(16.6)	(10.0)	4.1
8	土器　かわらけ	7.9	4.5	2
9	土器　かわらけ	10.8	5.9	3
10	土器　かわらけ	12.8	6.8	3.2
図10　2面　出土遺物　（1）				
1	古瀬戸　入子	(9.2)	—	—
2	古瀬戸　灰釉壺	—	(7.8)	
3	古瀬戸　灰釉卸皿	17.4		
4	常滑　甕			
5	常滑　片口鉢「類	(34.4)	(16.4)	10.7
6	瓦質　鍔付火鉢	(39.2)		—
7	土製円盤	直径3.2	厚0.7	孔径0.5
8	土製円盤	直径3.4	厚0.9	—
9	土器　かわらけ	3.1	2.6	0.4
10	古瀬戸窯 灰釉卸皿	3.2	2.4	0.6
11	常滑窯 片口鉢「類	3.4	2.7	0.5
12	常滑窯 片口鉢「類	(3.4)	(2.8)	0.7
13	土器質 火鉢	3.5	2.7	0.8
14	土器質 火鉢	(3.6)	(3.2)	0.6
15	土器 かわらけ	(3.5)	(2.2)	0.7
16	土器 かわらけ	3.4	2.5	0.8
17	土器 かわらけ	3.9	2.7	0.9
18	土器 かわらけ	(3.8)	(3.0)	0.7
19	土器 かわらけ	4.4	3.0	0.8
20	土器 かわらけ	4.7	3.6	1.0
21	土器 かわらけ	7.6	4.5	1.9
22	土器 かわらけ	7.4	4.9	2.2
23	土器 かわらけ	7.3	5.3	1.6
24	土器 かわらけ	7.7	5.3	1.9
25	土器 かわらけ	7.3	5.3	1.6
26	土器 かわらけ	7.7	5.5	1.8
27	土器 かわらけ	7.5	5.1	1.8
28	土器 かわらけ	7.2	5.5	1.5
29	土器 かわらけ	8.0	5.0	1.9
30	土器 かわらけ	7.0	4.9	1.6
31	土器 かわらけ	7.7	6.5	1.7
32	土器 かわらけ	7.3	4.9	1.5
33	土器 かわらけ	7.5	5.0	1.6
34	土器 かわらけ	7.8	5.2	1.5
35	土器 かわらけ	(6.8)	(4.2)	1.9
36	土器 かわらけ	7.0	5.0	1.6
37	土器 かわらけ	7.0	4.9	1.7
38	土器 かわらけ	7.0	5.3	1.6
39	土器 かわらけ	6.9	5.3	1.8
40	土器 かわらけ	7.0	4.6	1.8
図11　2面　出土遺物（2）				
1	土器 かわらけ	7.2	4.0	2.0
2	土器 かわらけ	7.0	4.6	1.8
3	土器 かわらけ	7.2	5.2	2.0
4	土器 かわらけ	7.1	4.9	2.2
5	土器 かわらけ	7.3	4.9	1.9
6	土器 かわらけ	7.4	5.5	1.8
7	土器 かわらけ	7.3	4.7	1.9
8	土器 かわらけ	7.6	4.3	2.3
9	土器 かわらけ	7.3	5.3	1.6
10	土器 かわらけ	8.1	4.5	2.1
11	土器 かわらけ	10.2	5.5	2.6
12	土器 かわらけ	10.7	6.4	2.9
13	土器 かわらけ	11.3	7.0	2.9
14	土器 かわらけ	11.7	6.2	3.2
15	土器 かわらけ	11.8	7.0	3.3
16	土器 かわらけ	11.9	6.7	2.9
17	土器 かわらけ	11.5	6.9	3.3
18	土器 かわらけ	12.0	7.0	3.1
19	土器 かわらけ	12.0	7.4	3.3
20	土器 かわらけ	12.9	8.1	3.2
21	土器 かわらけ	13.0	7.5	3.5
22	土器 かわらけ	12.8	7.4	3.2
23	土器 かわらけ	11.9	6.9	3.3
24	土器 かわらけ	13.2	7.2	3.6
25	土器 かわらけ	12.4	7.4	3.4
26	土器 かわらけ	12.1	7.2	3.2
27	土器 かわらけ	13.0	8.2	3.2
図12 2面 出土遺物（3）				
1	土器 かわらけ	8.0	5.0	1.9
2	土器 かわらけ	7.8	5.5	1.5
3	土器 かわらけ	7.7	5.4	1.7
4	土器 かわらけ	7.6	4.8	2.0
5	土器 かわらけ	7.5	4.9	1.6
6	土器 かわらけ	11.8	6.6	3.2
7	土器 かわらけ	7.6	5.4	1.6
8	土器 かわらけ	7.4	5.0	1.8
9	土器 かわらけ	7.6	4.9	1.9
10	土器 かわらけ	7.5	4.9	1.6
11	土器 かわらけ	7.7	4.3	1.8
12	土器 かわらけ	7.3	4.8	1.8
13	土器 かわらけ	7.1	4.9	1.6
14	土器 かわらけ	7.2	4.4	1.6
15	土器 かわらけ	7.3	4.7	1.6
16	土器 かわらけ	7.5	5.2	1.9
17	土器 かわらけ	7.1	5.4	1.5
18	土器 かわらけ	7.3	6.0	1.9
19	土器 かわらけ	7.6	5.3	2.0
20	土器 かわらけ	11.6	6.2	3.1
21	土器 かわらけ	11.9	6.2	3.3
22	土器 かわらけ	12.2	7.4	3.2
23	土器 かわらけ	12.1	7.6	3.2
24	土器 かわらけ	7.3	4.5	1.9
25	土器 かわらけ	7.4	6.4	1.6
26	土器 かわらけ	11.7	7.2	3.1
27	土器 かわらけ	11.8	6.4	3.6
28	土器 かわらけ	13.1	7.3	3.5
29	土器 かわらけ	12.7	6.3	3.5
30	土器 かわらけ	12.0	7.2	3.4
31	土器 かわらけ	7.2	4.8	1.6

表3　遺物法量表（1）

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
32	土器　かわらけ	7.8	5.2	1.7
33	土器　かわらけ	6.7	5.1	1.6
34	土器　かわらけ	7.4	4.7	1.7
35	土器　かわらけ	7.8	5.1	1.7
36	土器　かわらけ	7.3	5.1	1.6
37	土器　かわらけ	7.0	4.2	1.7
38	土器　かわらけ	7.8	4.8	1.9
39	土器　かわらけ	7.4	5.2	1.8
40	土器　かわらけ	7.6	4.5	2.4
41	土器　かわらけ	8.2	5.3	1.8
42	土器　かわらけ	7.3	5.7	1.6
43	土器　かわらけ	7.7	4.9	1.7
44	土器　かわらけ	11.3	7.9	3.2
45	土器　かわらけ	11.8	7.1	3.7
46	土器　かわらけ	11.2	7.2	3.3
47	土器　かわらけ	13.0	7.6	3.5
図13 2面 出土遺物（4）				
1	土器　かわらけ	7.0	5.6	1.4
2	土器　かわらけ	7.3	4.6	2.0
3	土器　かわらけ	7.0	5.1	1.6
4	土器　かわらけ	7.4	4.8	2.1
5	土器　かわらけ	7.0	5.3	1.5
6	土器　かわらけ	7.5	4.7	1.8
7	鉄釘	長[6.2]	幅0.8	厚0.8
8	土器　かわらけ	7.9	5.8	2.1
9	土器　かわらけ	7.3	5.1	1.8
10	土器　かわらけ	11.4	7.2	3.3
11	土器　かわらけ	11.7	7.7	3.3
12	土器　かわらけ	7.8	5.2	1.7
13	土器　かわらけ	7.8	5.5	1.7
14	土器　かわらけ	7.3	4.4	1.8
15	土器　かわらけ	12.0	6.7	3.1
16	土器　かわらけ	12.7	7.7	3.7
17	土器　かわらけ	7.6	5.4	1.8
18	土器　かわらけ	7.9	5.3	1.9
19	土器　かわらけ	7.8	4.6	1.7
20	土器　かわらけ	7.9	4.7	1.5
21	土器　かわらけ	7.6	5.1	1.4
22	土器　かわらけ	8.1	5.1	1.9
23	土器　かわらけ	11.0	7.0	3.0
24	土器　かわらけ	11.2	6.0	3.0
25	土器　かわらけ	11.7	8.0	3.3
26	土器　かわらけ	12.4	7.5	3.2
27	土器　かわらけ	11.8	6.2	3.6
28	土器　かわらけ	7.0	5.2	1.5
29	土器　かわらけ	8.7	4.1	1.9
30	銅線「政和通宝」	直径2.4	—	—
31	銅線「元豊通宝」	直径2.5	—	—
32	土器　かわらけ	7.1	5.4	1.8
33	土器　かわらけ	8.0	6.1	1.6
図17　3面 出土遺物				
1	土器　かわらけ	7.2	5.2	1.6
2	土器　かわらけ	7.2	5.2	1.7
3	土器　かわらけ	7.7	5.5	2.0
4	土器　かわらけ	7.3	5.2	1.6
5	土器　かわらけ	7.5	4.6	1.7

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
6	土器 かわらけ	7.4	5.4	1.5
7	土器 かわらけ	10.7	6.1	2.9
8	土器 かわらけ	12.5	7.5	3.7
9	土器 かわらけ	12.8	8.2	3.1
10	土器 かわらけ	12.3	7.4	3.4
11	土器 かわらけ	6.9	4.9	1.8
12	土器 かわらけ	12.7	7.0	3.6
13	土器 かわらけ	12.7	7.2	3.1
14	土器 かわらけ	4.0	3.3	0.7
15	土器 かわらけ	8.0	5.5	1.8
16	土器 かわらけ	7.5	4.5	2.2
17	土器 かわらけ	11.4	7.0	3.0
18	土器 かわらけ	12.4	7.4	3.5
19	土器 かわらけ	13.0	8.0	3.8
20	土器 かわらけ	7.5	4.7	2.0
21	土器 かわらけ	7.5	4.7	2.2
22	土器 かわらけ	12.2	7.0	3.4
図18 4面 出土遺物				
1	青磁　碗	—	3.9	—
2	白磁　口兀皿	11.0	—	—
3	古瀬戸　入子	(9.2)	—	—
4	常滑　甕	(25.6)	—	—
5	土器 かわらけ	12.5	8.5	3.0
6	土器 かわらけ	10.5	6.0	2.8
7	土器 かわらけ	7.9	6.6	1.7
8	土器 かわらけ	7.8	5.3	1.5
9	土器 かわらけ	7.0	5.5	1.7
10	土器 かわらけ	7.8	6.0	1.3
11	土器 かわらけ	12.2	8.1	3.0
12	土器 かわらけ	12.2	8.6	3.6
13	土器 かわらけ	12.6	9.0	3.0
14	白磁　口兀皿	9.2	5.6	2.4
15	土器 かわらけ	13.0	8.3	2.3
図20 5面 出土遺物				
1	青磁　碗	(16.2)	—	—
2	常滑　甕	—	—	—
3	土器 かわらけ	12.4	8.4	2.9
4	土器 かわらけ	11.2	8.7	3.1
5	土器 かわらけ	13.5	9.0	2.8
6	土器 かわらけ	11.8	8.0	2.5
7	土器 かわらけ	7.7	5.8	1.5
8	土器 かわらけ	8.5	6.9	1.5
9	土器 かわらけ	8.6	7.1	1.8
図22 6面 出土遺物（1）				
1	土器 かわらけ	8.4	6.9	1.8
2	土器 かわらけ	8.8	7.0	1.6
3	土器 かわらけ	9.0	6.5	1.6
4	土器 かわらけ	9.0	7.0	1.9
5	土器 かわらけ	8.7	5.7	2.0
6	土器 かわらけ	8.2	6.0	1.7
7	土器 かわらけ	8.2	5.8	1.6
8	土器 かわらけ	9.0	5.2	1.6
9	土器 かわらけ	11.9	8.0	2.5
10	土器 かわらけ	13.1	9.6	3.1
11	土器 かわらけ	—	7.0	—
12	土器 かわらけ	—	8.2	—

表4　遺物法量表（2）

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
13	土器　かわらけ	—	7.2	—
14	土器　白かわらけ	(13.6)	(7.5)	(4.3)
15	木製品　漆塗絵皿	9.6	6.4	1.0
図23　6面 出土遺物（2）				
1	土器　かわらけ	9.0	7.4	2.0
2	土器　かわらけ	9.0	6.0	2.0
3	土器　かわらけ	12.0	7.6	3.0
4	土器　かわらけ	12.6	8.8	2.9
5	土器　かわらけ	12.0	8.8	2.9
6	土器　かわらけ	13.0	8.8	3.0
7	木製品　櫂状？	長43.4	幅10.1	厚1.3
8	土器　かわらけ	8.7	7.0	2.0
9	土器　かわらけ	8.2	6.0	1.9
10	土器　かわらけ	7.9	6.4	1.8
11	土器　かわらけ	8.1	6.7	1.8
12	土器　かわらけ	12.1	8.7	2.9
13	土器　かわらけ	8.6	6.2	1.8
14	土器　かわらけ	8.0	6.3	1.6
15	土器　かわらけ	8.6	6.7	1.7
16	土器　かわらけ	8.3	7.0	1.4
17	土器　かわらけ	8.8	6.8	1.5
18	土器　かわらけ	12.1	9.0	2.7
19	土器　かわらけ	12.7	8.6	3.0
20	土器　かわらけ	12.2	8.4	3.1
21	土器　かわらけ	11.4	8.2	2.7
22	土器　かわらけ	8.6	6.5	1.9
23	土器　かわらけ	8.6	6.4	1.5
24	土器　かわらけ	8.3	6.2	1.4
25	土器　かわらけ	8.5	6.3	1.7
26	土器　かわらけ	8.4	5.9	1.5
27	土器　かわらけ	8.2	6.5	1.5
28	土器　かわらけ	8.5	6.3	1.3
29	土器　かわらけ	8.7	6.6	1.5
30	土器　かわらけ	9.0	6.9	1.7
図26　7面 出土遺物（1）				
1	青磁　碗	(17.0)	—	—
2	青磁　碗	—	5.0	—
3	青白磁　皿	(10.6)	(7.4)	(1.9)
4	青白磁　蓋	6.2	6.0	3.2
5	土器　かわらけ	11.9	8.4	3.0
6	土器　かわらけ	12.3	8.2	2.8
7	土器　かわらけ	—	—	2.9
8	土器　かわらけ	—	—	—
9	土器　かわらけ	—	—	—
10	土器　かわらけ	—	—	—
11	土器　かわらけ	—	7.0	
12	土器　かわらけ	12.6	8.9	3.2
13	土器　かわらけ	12.4	7.7	3.3
14	土器　かわらけ	(12.6)	(9.0)	2.6
15	土器　かわらけ	12.6	9.1	3.1
16	土器　かわらけ	12.9	8.8	3.1
17	土器　かわらけ	12.2	8.9	3.0
18	土器　かわらけ	12.6	8.4	3.0
19	土器　かわらけ	12.0	8.0	2.7
20	土器　かわらけ	12.8	8.8	2.8
21	土器　かわらけ	12.6	8.5	3.0

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
22	土器　かわらけ	11.8	8.3	2.8
23	土器　かわらけ	12.0	8.6	3.0
24	土器　かわらけ	11.7	8.6	2.5
25	土器　かわらけ	11.3	8.0	3.0
26	土器　かわらけ	10.7	8.0	2.5
図27　7面　出土遺物（2）				
1	土器　かわらけ	8.0	7.1	1.8
2	土器　かわらけ	8.4	6.6	2.1
3	土器　かわらけ	8.0	6.2	1.7
4	土器　かわらけ	7.9	6.4	1.8
5	土器　かわらけ	8.0	6.6	1.2
6	土器　かわらけ	8.7	7.7	1.5
7	土器　かわらけ	8.7	6.9	1.5
8	土器　かわらけ	8.2	6.2	1.4
9	土器　かわらけ	8.5	7.1	1.6
10	土器　かわらけ	8.5	6.7	1.5
11	土器　かわらけ	8.4	6.2	1.6
12	土器　かわらけ	8.6	5.9	1.4
13	土器　かわらけ	8.5	6.6	1.5
14	土器　かわらけ	8.2	5.5	1.6
15	土器　かわらけ	8.1	7.2	1.6
16	土器　かわらけ	8.0	6.1	1.7
17	土器　かわらけ	8.6	6.5	1.7
18	土器　かわらけ	8.1	6.1	1.5
19	土器　かわらけ	8.2	6.8	1.5
20	土器　かわらけ	8.5	6.7	1.3
21	土器　かわらけ	8.7	6.6	1.6
22	土器　かわらけ	7.9	5.7	1.7
23	土器　かわらけ	7.8	6.0	1.7
24	土器　かわらけ	8.3	6.1	1.3
25	土器　かわらけ	8.4	6.6	1.6
26	土器　かわらけ	8.5	6.7	1.7
27	土器　かわらけ	8.7	6.3	1.6
28	土器　かわらけ	8.7	6.0	1.7
29	土器　かわらけ	12.6	7.0	3.1
30	土器　かわらけ	12.6	8.3	3.1
31	土器　かわらけ	12.1	6.0	3.7
32	土器　かわらけ	8.8	4.2	2.0
33	土器　かわらけ	7.1	6.2	1.7
34	土器　白かわらけ	(10.7)	(7.1)	3.5
35	銅製品　長3.4	幅5.1　高0.5	厚0.1	
36	石製品　中砥石	長[6.5]	幅[2.4]	厚[2.0]
図28　7面　出土遺物（3）				
1	木製品　漆塗蓋	—	5.5	—
2	木製品　漆塗絵鉢	(19.6)	(14.0)	4.1
3	木製品　棒状製品	長19.8	幅0.6	厚0.4
4	木製品　箸	長12.5	幅0.4	厚0.4
5	木製品　箸	長24.5	幅0.7	厚0.6
6	曲物底板	直径33.9	—	厚0.9
図29　7面　出土遺物（4）				
1	常滑　甕		—	—
2	常滑　甕	—	—	—
3	土器　かわらけ	9.0	5.5	2.0
4	土器　かわらけ	8.4	7.3	1.5
5	土器　かわらけ	12.0	8.6	3.1
6	瓦質　火鉢	35.6	29.6	8.0

表5　遺物法量表（3）

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
7	土器　かわらけ	8.4	5.7	1.9
8	土器　かわらけ	8.6	6.8	1.6
9	土器　かわらけ	8.8	6.6	1.7
10	土器　かわらけ	9.3	6.5	1.7
11	土器　かわらけ	8.4	6.2	1.6
12	土器　かわらけ	8.6	7.0	1.8
13	土器　かわらけ	7.8	6.8	1.9
14	土器　かわらけ	7.9	4.5	1.9
15	土器　かわらけ	12.4	8.6	2.8
16	土器　かわらけ	12.8	8.0	3.0
17	土器　かわらけ	12.5	8.4	3.0
18	土器　かわらけ	12.8	8.8	3.2
19	土器　かわらけ	12.0	8.8	3.1
20	土器　かわらけ	12.6	8.5	3.0
21	土器　かわらけ	12.8	8.0	3.7
22	土器　かわらけ	8.7	6.5	1.5
23	土器　かわらけ	8.1	6.8	1.8
24	土器　かわらけ	9.3	7.9	1.9
25	土器　かわらけ	8.4	6.6	1.7
26	土器　かわらけ	8.7	6.8	1.3
図31　8面 出土遺物（1）				
1	平瓦	長[12.6]	幅[20.5]	厚3.7
2	土器　かわらけ	7.9	6.2	1.2
3	土器　かわらけ	8.2	6.5	1.5
4	土器　かわらけ	8.3	6.0	1.6
5	土器　かわらけ	8.2	6.2	1.4
6	土器　かわらけ	8.4	6.8	1.9
7	土器　かわらけ	8.7	3.0	2.2
8	土器　かわらけ	8.1	3.0	2.3
9	土器　かわらけ	12.9	8.8	2.9
10	土器　かわらけ	12.6	9.3	2.9
11	銅銭「皇宋通宝」	直径2.3	—	—
12	銅銭「天禧通宝」	直径2.5	—	—
13	銅銭「紹聖元宝」	直径2.4	—	—

No.	種　別	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）
14	銅銭「皇宋通宝」	直径2.5	—	—
15	銅銭「聖宋元宝」	直径2.4	—	—
16	木製品　棒状製品	長[38.6]	幅[3.1]	厚[1.6]
17	木製品　曲物底板	長[33.6]	幅[10.8]	厚[0.9]
図32　8面 出土遺物（2）				
1	平瓦	長[12.6]	幅[20.5]	厚3.7
2	土器　かわらけ	7.9	6.2	1.2
3	土器　かわらけ	8.2	6.5	1.5
4	土器　かわらけ	8.3	6.0	1.6
5	土器　かわらけ	8.2	6.2	1.4
6	土器　かわらけ	8.4	6.8	1.9
7	土器　かわらけ	8.7	3.0	2.2
8	土器　かわらけ	8.1	3.0	2.3
9	土器　かわらけ	12.9	8.8	2.9
10	土器　かわらけ	12.6	9.3	2.9

表6　遺物法量表（4）

第3章　まとめ

1．遺跡の性格と年代

これまでの公方屋敷跡（神奈川県遺跡台帳No.268）範囲における発掘調査では、13世紀後葉～14世紀前葉頃となる建物跡などが検出されており、六浦路にほぼ平行・直交する主軸方位をもつことから、これを軸とした地割が展開することが予想されていた。その後も少なくとも15世紀前葉、つまりは最後の鎌倉御所足利成氏が下総古河へ逃れた康正元年（1455）頃までは遺構群の存在が確認されている。以降のこの地域の様相については近代以降の整地工事に伴う削平などもあり明らかではないが、浄妙寺周辺の遺跡まで概観してみると、15世紀末頃までは生活面の存在が認められるようである。しかしながら現在までのところ、生活の痕跡を表す遺構は検出されておらず、その後低地においては旧水田耕土と考えられる青みを帯びた灰色粘土層に覆われている。

今回の調査で１面から８面までに検出された建物や溝、道路などは、ほぼ同一の軸方位に従って平行・直交して造られており、定められた地割が存在していたものと思われる。これまで周辺の遺跡で発見されている建物群の軸方位ともほぼ平行・直交しており、六浦路を軸にしたこれらの地割に準じていることが推測される。

出土遺物はほとんどがかわらけであり、全体の出土遺物点数からなる構成比で約99.5%を占める。かわらけ以外の出土遺物が極端に少ないため、これらの遺物については可能な限り図示しているが、２面までは現代攪乱に伴う遺物の混入も認められる。15世紀代に比定される図10－４の常滑甕片などがこれに該当する。陶磁器類や、鎌倉市内の発掘調査成果から推測されるかわらけの年代観を考え合わせて本遺跡の出土遺物を観察すると、１面が14世紀代、２～４面が13世紀後葉～14世紀前葉、５・６面が13世紀中頃～後葉、７・８面が13世紀前葉ぐらいの年代が与えられそうである。

２面検出の建物１は、大量のかわらけを含む上層の包含層が柱穴内礎石直上にまで流入している。建物廃絶にあたり上屋構造を全て撤去し、その後は間を置かずに人為的に埋め立てたことが考えられる。建物２は建物１に先行する時期のものであるが、それぞれの建物の出土遺物には明確な時期差は認められず、建物１への建て替えに伴い廃絶されたものと思われる。礎石はわずかに３口の柱穴から検出されたのみであり、建て替えにあたり礎石を抜き取り再利用したものもあるかもしれない。これらの礎石建物は、相応の重量を伴う本格的な上屋構造が載っていたと推測される。足利氏と深い関わりを持つ地域であることから武家屋敷の存在が想起されるが、社寺などの可能性も残されており断定は出来ない。

本遺跡で最も時代の新しい１面でも14世紀代までと考えられることから、検出された遺構群はいわゆる公方屋敷跡を示唆するものではない。しかしながら、２面検出の礎石建物をはじめ、５面検出の玉石敷、６面検出の通路及びそれに伴う門・築地塀跡、７面検出の屈曲する溝とそれに伴う水溜状土壙などといった顕著な遺構群が検出されていることから、この後時代が降って公方屋敷がこの地に置かれることとなるための地域的な基盤は出来ていたのかもしれない。１面以降の生活面が現代の削平によって失われ、鎌倉御所時代の様相が全く判らないことは非常に残念であるが、今後周辺における発掘調査事例が増えればそれも徐々に明らかになっていくであろう。その時に改めてこの遺跡を再評価する機会があることを期待して、まとめと代えたい。

2．出土かわらけの分類と数量

本地点の調査ではかわらけが、特に２面と７面では版築面上に層をなして出土しており、その数は極めて多くと表現できる。出土したかわらけの中には当然のように、実測可能な個体も数多く含まれているが、紙数の都合もあって全てのかわらけを図示する事はできなかった。そのため、接合作業後二分の一以上遺存している個体を抽出し、これらのかわらけに認められる幾つかの器形変化が満遍なく図示できる程度の実測数に限定した。その他のかわらけは4形式に区分して、その大・中・小の口径変化毎に重量を測った。以下、おおまかな４形式と各面の出土状況について触れるが、分類は以前より行っている分類に倣った。（註１）

Ａ類　所謂戦国タイプ。側壁が直線的に外反し口縁部がやや外方に引かれる器形。粉質土では無く焼成は比較的良い。最近15世紀代の年代が考えられている。

Ｂ類　一般的な糸切り整形。当然のように幾つかの器形変化がある。

Ｃ類　薄手作り。「薄手丸深」では無いが、Ｂ類に比べると器肉が薄い良好なつくり。

Ｄ類　手捏ね整形。

面毎の計量値は表７に示した。最も多く出土しているのは２面で、全出土量の55.69％（小数点下３桁を四捨五入、以下同じ）、次いで７面から同じく20.52％が出土し、この２面で80％近くを占めている。また各面における遺構と面の出土比率は１面と８面では遺構の出土量が多いものの、他の面では面の出土が勝っている。特に２面では87.07％、７面では89.37％と圧倒的に面の出土が多い。

類別の出土では、Ａ類は全く出土していない（註２）が、Ｂ類が87.81％、Ｃ類が11.51％、Ｄ類が0.68％出土している（註３）。各類の最大値は、Ｂ類が２面で51.81％、Ｃ類も２面で88.65％、Ｄ類が７面で36.48％が出土している。また、薄手のＣ類は１面から４面までは出土するが４面以下では殆ど出土しない。これとは逆にＤ類は５面以下で出土するが４面以上では殆ど出土しない。以前、北条時房・顕時邸の調査報告書（註４）で触れたが、やはりＣ類とＤ類が同一面や遺構から出土する事は無く、また両類が出土しない面を挿むことも無い。Ｄ類の消滅とＣ類の出現にあまり時間差がないのだろう。

Ａ類が出土していないのは、足利公方屋敷跡の伝承等を考えると、15世紀以降の生活面が近世あるいは近代の耕作地造成などで削平されたか15世紀以降は生活空間では無かったかのいずれかが考えられる。また、Ｄ類も出土量が少なく、薄くて焼成の良い皿は全く含まれていない。本地点での生活は13世紀になってから始まったと考えられるが、出土量からは賑わっていた様相は伺えない。

本地点の調査ではＢ類に含まれる幾つかの特徴的な器形・整形が確認されている。図18－13は内底面に粘土紐を巻いて底部を作ったような渦巻き状の痕跡が、外底面には回転糸切痕が残る。図10－22は内底面外周にナデが巡り、内定中央が円形にやや高く残っている。図10－25は内底面に強く深い指頭ナデが残る。いずれも鎌倉市内ではあまり報告例が無いようだ。

註１　基本的にはＡ類、Ｃ類、Ｄ類の関係を明らかにする為の分類で、多くの器形が含まれるＢ類分析は今後の課題である。

註２　Ａ類破片が１面から36ｇ出土しているが、１面に残存した攪乱土中の混入遺物である可能性が高い。

註３　註１で説明したようにＢ類は区分していないので、出土量は多くなってしまう。

註４　齋木秀雄、瀬田哲夫、伊丹まどか『北條時房・顕時邸跡発掘調査報告書７』

全体構成

	貿易陶磁	国産陶磁	瓦	火鉢	瓦質製品	土製品	かわらけ	金属製品	銭	石製品	骨角製品	木製品	自然遺物	合計
点数(点)	63	89	5	26	1	24	56203	11	14	6	0	15	1	56458
構成比(%)	0.112	0.158	0.009	0.046	0.002	0.043	99.548	0.019	0.025	0.011	0.000	0.027	0.002	100

期別構成（点数）

	貿易陶磁	国産陶磁	瓦	火鉢	瓦質製品	土製品	かわらけ	金属製品	銭	石製品	骨角製品	木製品	自然遺物	合計
1面	0	7	0	0	1	0	3441	0	5	0	0	0	0	3454
2面	4	34	0	21	0	7	35731	8	3	2	0	0	0	35810
3面	5	10	0	1	0	0	1192	2	1	0	0	0	1	1212
4面	24	17	0	0	0	2	1578	0	0	1	0	0	0	1622
5面	6	8	0	0	0	4	1508	0	0	0	0	0	0	1526
6面	8	4	2	1	0	3	3569	0	0	1	0	2	0	3590
7面	13	9	2	3	0	8	8174	1	0	2	0	10	0	8222
8面	3	0	1	0	0	0	1010	0	5	0	0	3	0	1022
合計	63	89	5	26	1	24	56203	11	14	6	0	15	1	56458

かわらけ構成（点数）

	戦国タイプ			薄手丸深タイプ			ロクロタイプ			手づくねタイプ		コースター	合計
	大	中	小	大	中	小	大	中	小	大	小		
1面	1	0	0	544	6	81	2157	8	634	10	1	0	3442
2面	0	0	0	7194	66	627	21227	5	6600	0	0	12	35731
3面	0	0	0	166	16	14	698	0	296	0	0	1	1191
4面	0	0	0	36	2	11	1151	0	376	1	0	1	1578
5面	0	0	0	1	0	0	1057	0	418	29	3	0	1508
6面	0	0	0	1	1	1	2424	0	1069	60	13	0	3569
7面	0	0	0	0	0	0	5291	1	2839	34	9	0	8174
8面	0	0	0	0	0	0	707	0	279	19	4	1	1010
合計	1	0	0	7942	91	734	34712	14	12511	153	30	15	56203

かわらけ構成（点数）

	戦国タイプ			薄手丸深タイプ			ロクロタイプ			手づくねタイプ		コースター	合計
	大	中	小	大	中	小	大	中	小	大	小		
1面	36	0	0	5062	345	693	25077	434	5229	248	13		37137
2面	0	0	0	64806	1877	4261	259426	353	56582	0	0		387305
3面	0	0	0	1717	498	126	10397	0	3309	0	0		16047
4面	0	0	0	362	109	89	16191	0	3795	7	0		20553
5面	0	0	0	15	0	0	16893	0	5784	570	51		23313
6面	0	0	0	10	53	4	35063	0	13150	1216	356		49852
7面	0	0	0	0	0	0	97936	97	42954	1429	299		142715
8面	0	0	0	0	0	0	13464	0	4508	370	178		18520
合計	36	0	0	71972	2882	5173	474447	884	135311	3840	897	0	695442

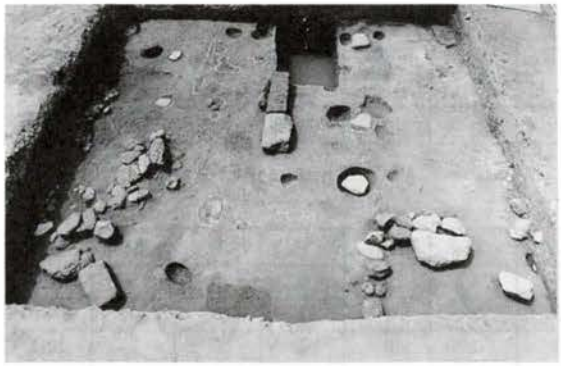
※コースターは個体数が明確なため、重量計測を行わなかった。

木製品面別構成

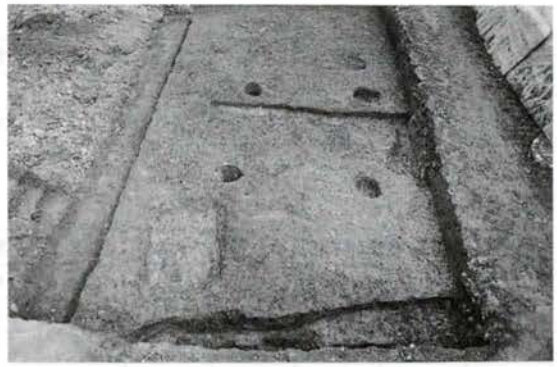
	椀・皿類	食膳具	容器	飾身具	履物	建築部材	調度材	職労具	呪術・遊具	武具	その他	合計
6面	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
7面	5	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	10
8面	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3
合計	6	2	3	0	0	0	0	0	0	0	4	15

表7　遺物構成表

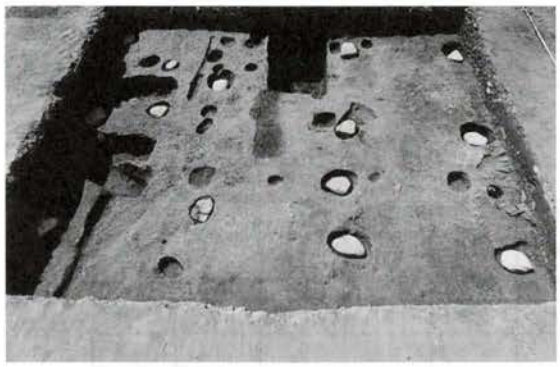
図版 1



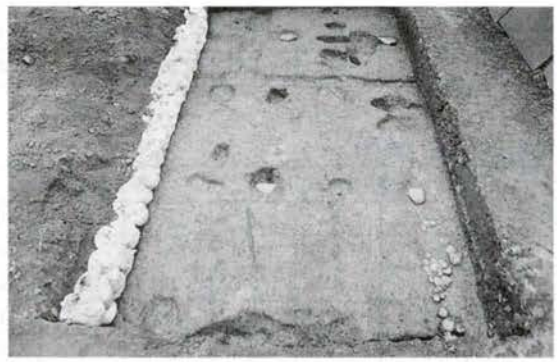
▲1.　Ⅰ区1面（東から）



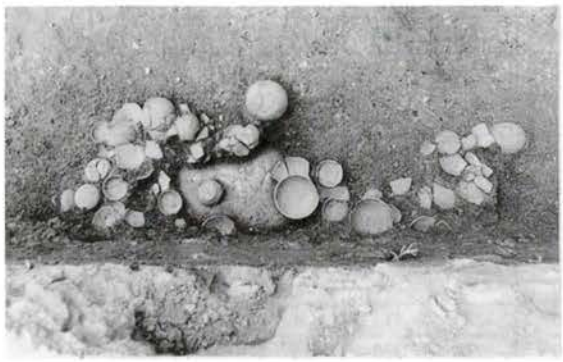
▲2.　Ⅱ区1面（北から）



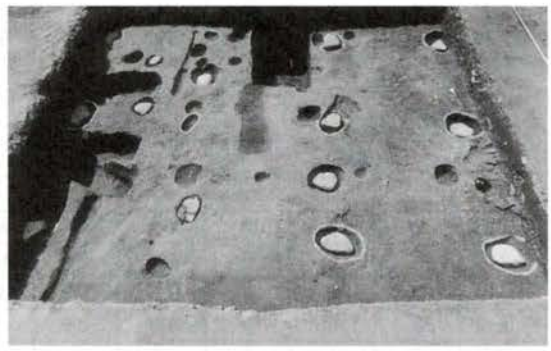
▲3.　Ⅰ区2面（東から）



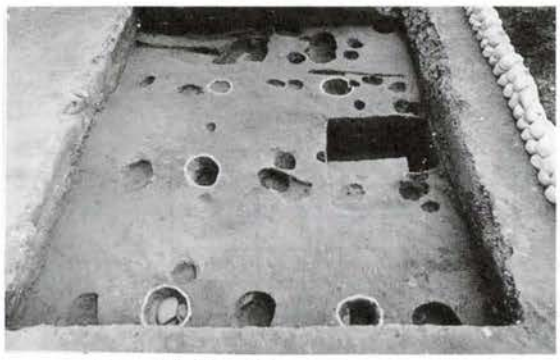
▲4.　Ⅱ区2面（北から）



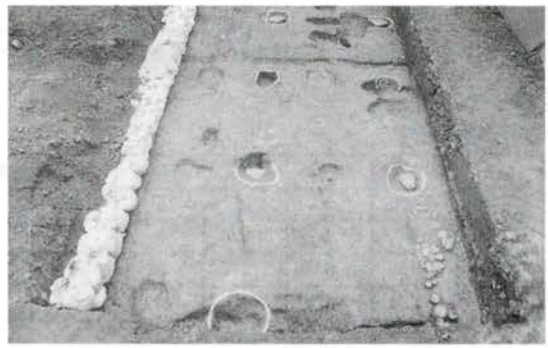
▲5. 柱穴内への包含層流入状況（南から）



▲6.　Ⅰ区2面建物1（東から）

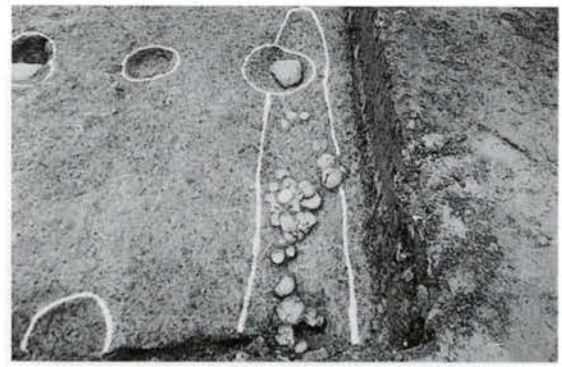


▲7.　Ⅰ区2面建物2（北から）



▲8.　Ⅱ区2面建物1（北から）

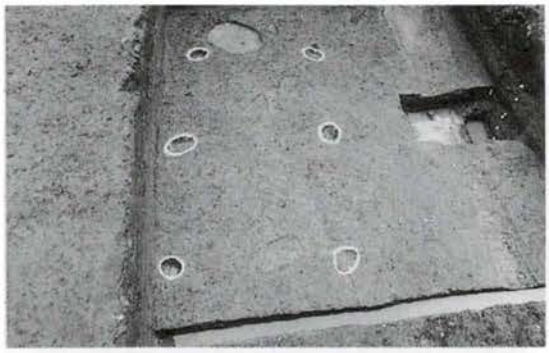
▲1.　II区2面　建物2（北から）



▲2.　II区2面　溝1（北から）

▲3.　I区3面（北から）

▲4.　II区3面（北から）



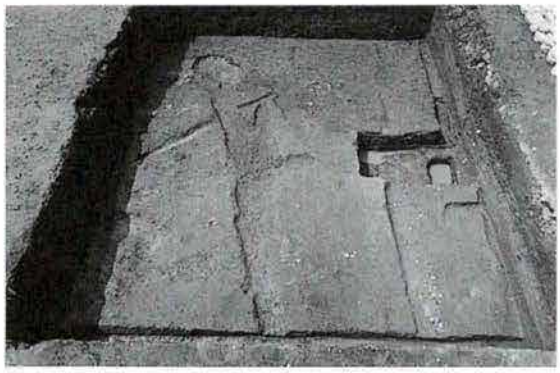
▲5.　I区3面　建物1（北から）

▲6.　II区3面　建物2（北から）

▲7.　II区3面　溝1、2（北から）

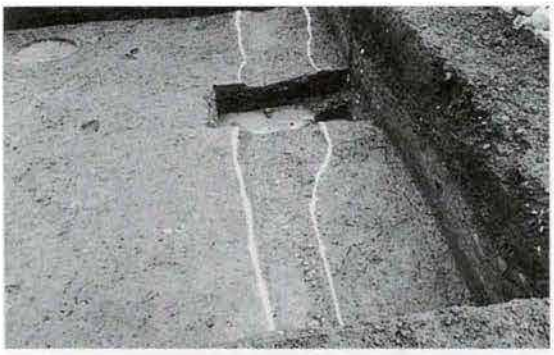
▲8.　I区3面　溝3（南から）

図版 3

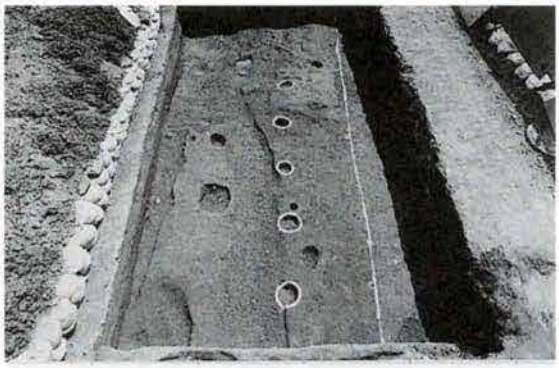


▲1.　I 区4面　（北から）

▲2.　II 区4面　（北から）



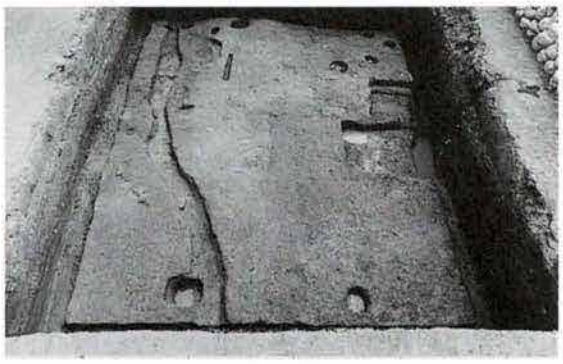
▲3.　I 区4面　溝1（北から）



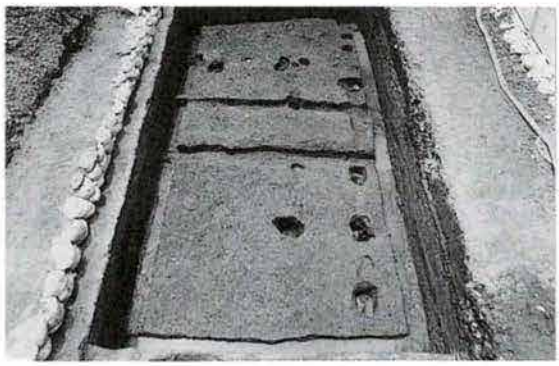
▲4.　II 区4面　道路状遺構、柱穴列1（北から）

▲5.　I 区5面　（北から）

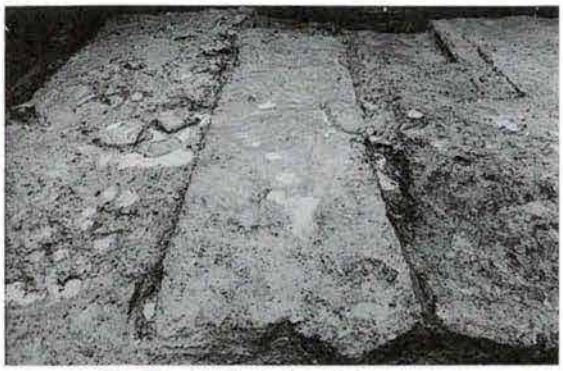
▲6.　II 区5面　（北から）



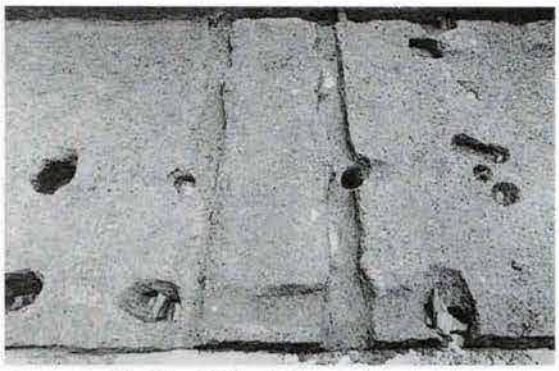
▲7.　I 区6面　（北から）



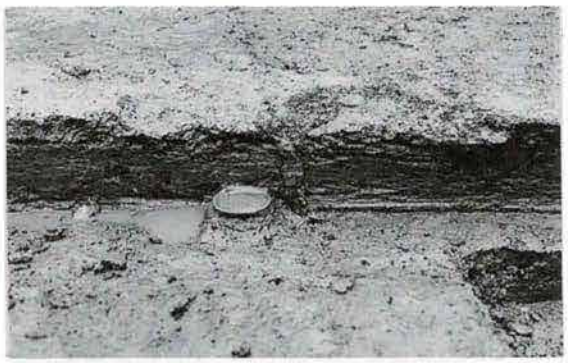
▲8.　II 区6面　（北から）



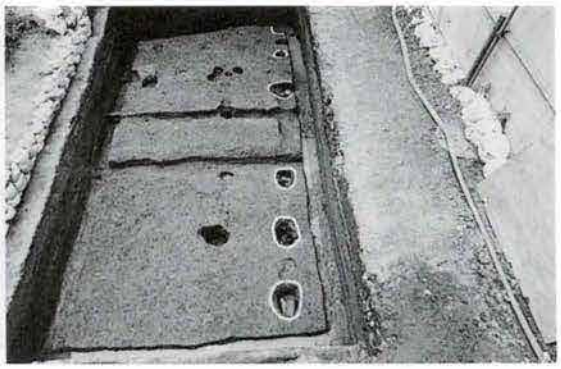
▲1.　I区6面　道路（東から）



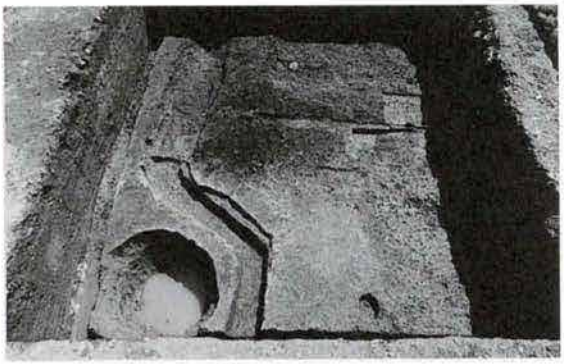
▲2.　II区6面　道路（西から）



▲3.　I区6面　道路土留板、杭（北から）

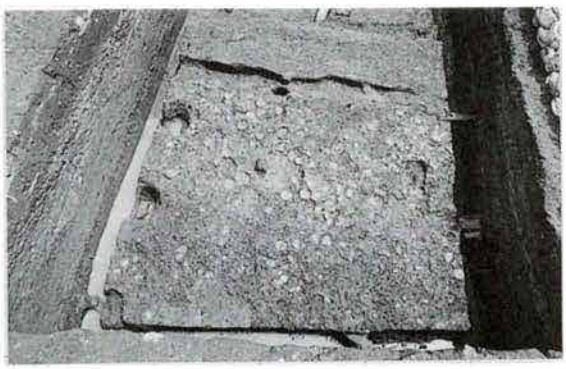


▲4.　II区6面　柱穴列1（北から）



▲5.　I区7面　（北から）

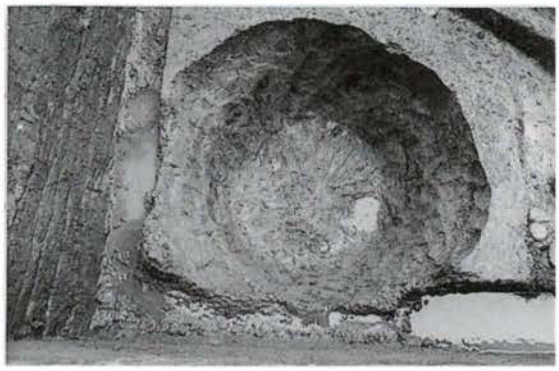
▲6.　II区7面　南側（南から）



▲7.　II区7面南側かわらけ出土状況（南から）

▲8.　I区7面　溝1（北から）

図版 5

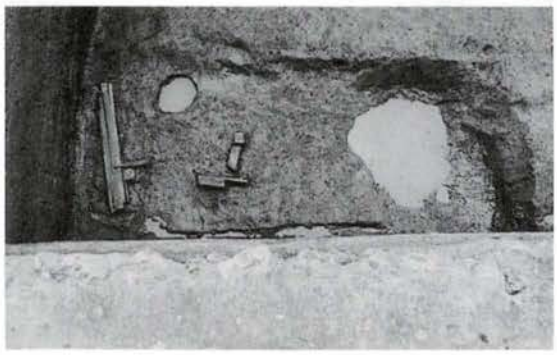


▲1.　I 区7面　土壙 1（北から）

▲2.　I 区7面　炭範囲（東から）

▲3.　I 区8面　（北から）

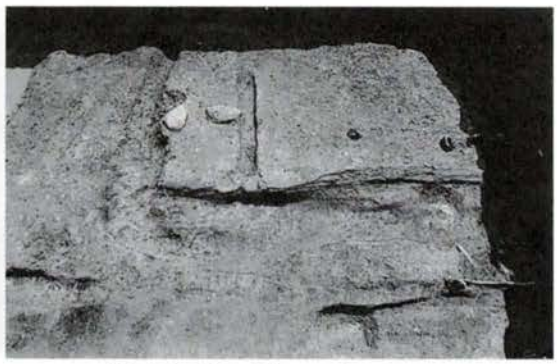
▲4.　II 区8面　（北から）



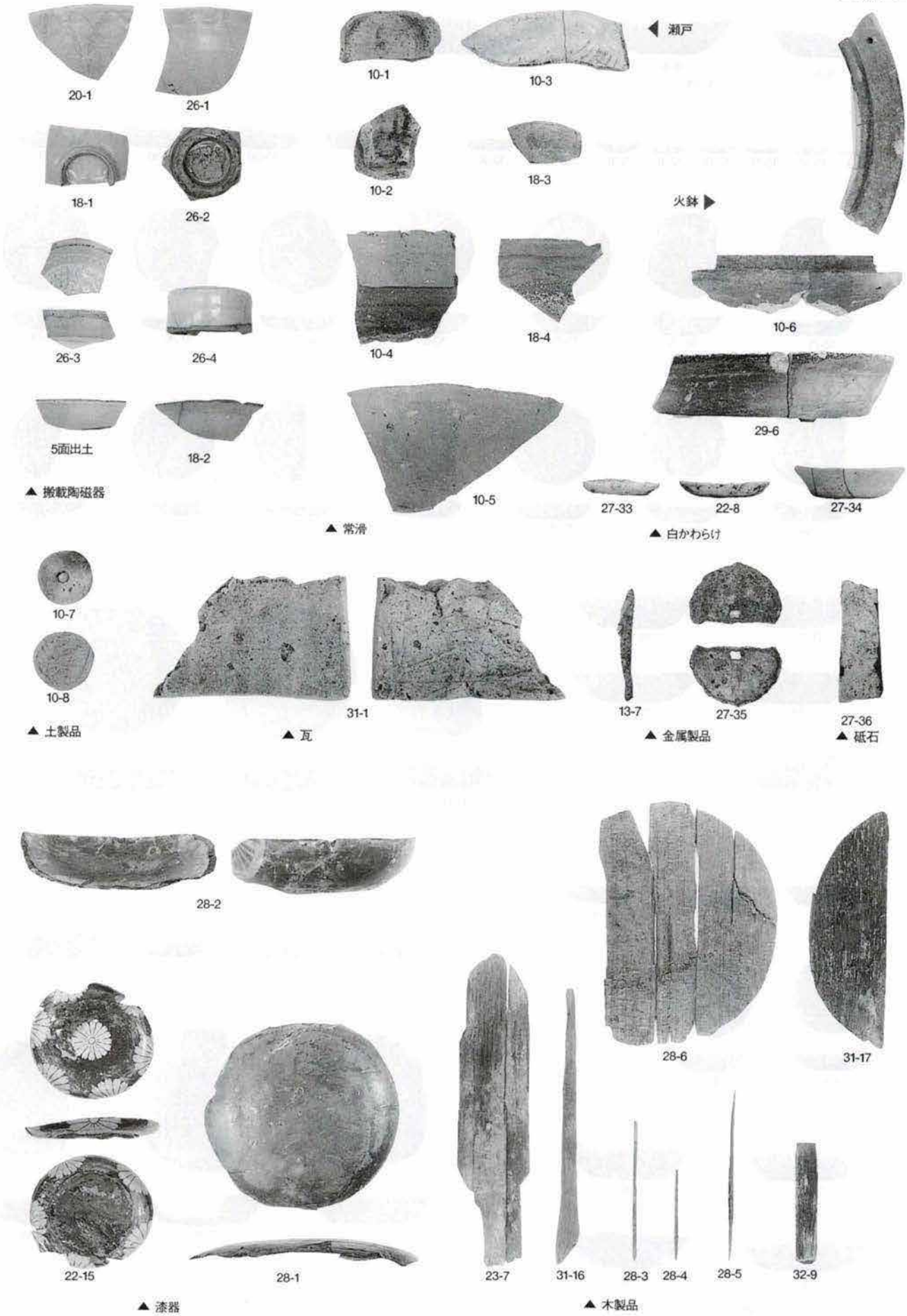
▲5.　I 区8面　方形土壙　（東から）

▲6.　I 区8面方形土壙　出土木組（東から）

▲7.　II 区8面　建物2（北から）

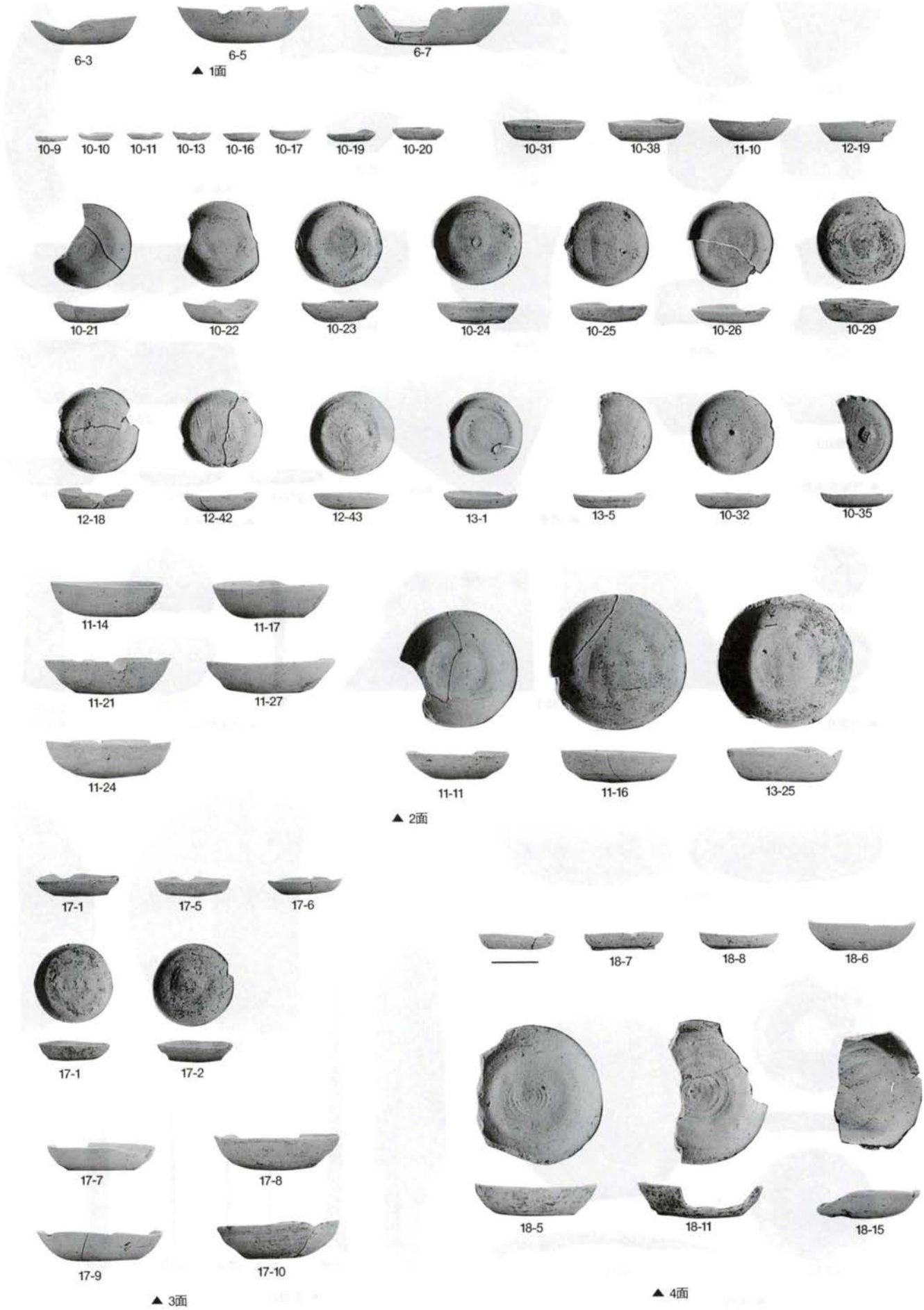


▲8.　I 区8面　溝1（北から）

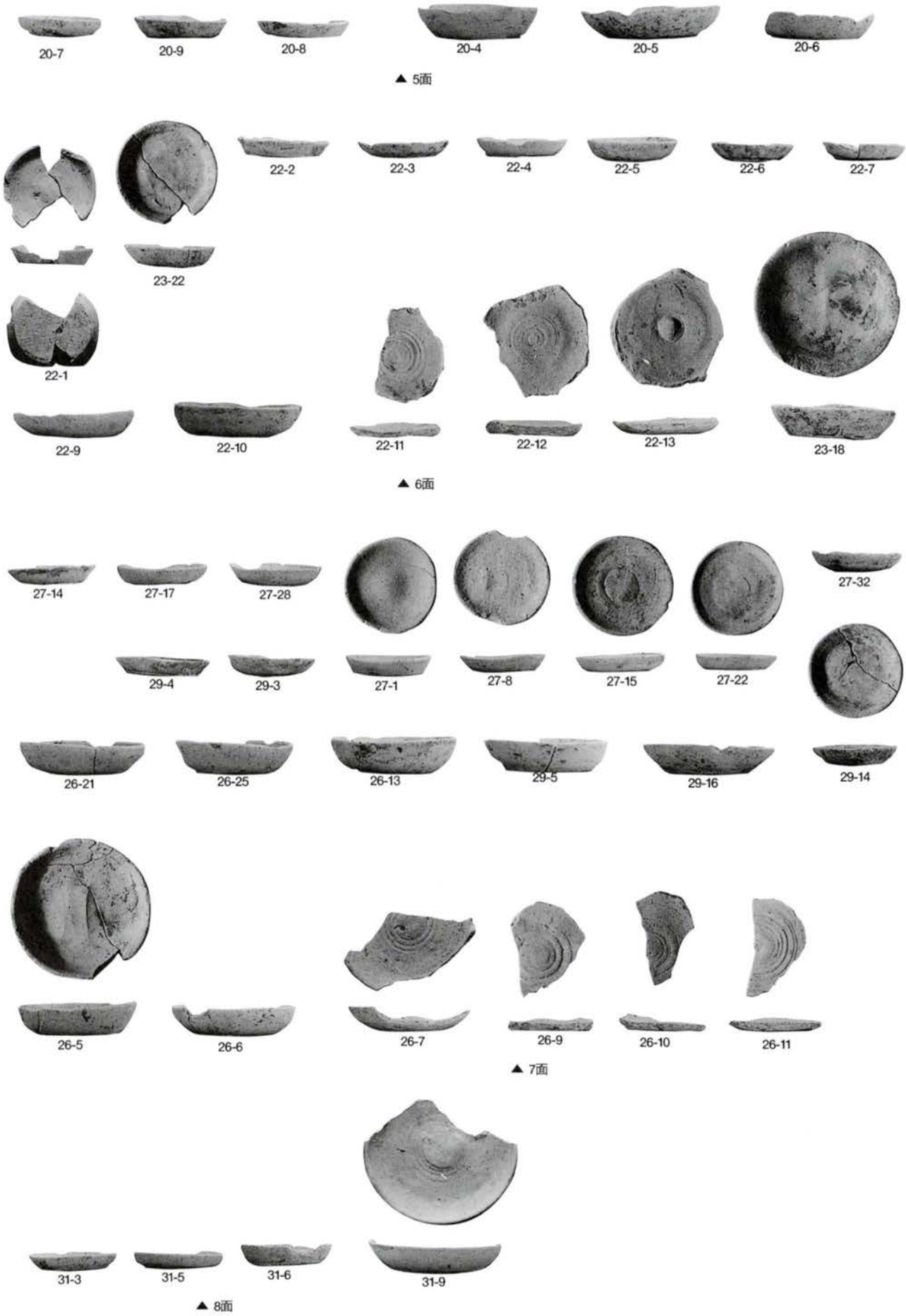

◀ 瀬戸
火鉢 ▶
20-1
26-1
10-1
10-3
18-1
26-2
10-2
18-3
26-3
26-4
10-4
18-4
10-6
5面出土
18-2
29-6
▲ 搬載陶磁器
10-5
27-33
22-8
27-34
▲ 常滑
▲ 白かわらけ
10-7
10-8
31-1
13-7
27-35
27-36
▲ 土製品
▲ 瓦
▲ 金属製品
▲ 砥石
28-2
28-6
31-17
22-15
28-1
23-7
31-16
28-3
28-4
28-5
32-9
▲ 漆器
▲ 木製品

出土遺物（1）

図版 7


6-3
6-5
6-7
▲ 1面
10-9
10-10
10-11
10-13
10-16
10-17
10-19
10-20
10-31
10-38
11-10
12-19
10-21
10-22
10-23
10-24
10-25
10-26
10-29
12-18
12-42
12-43
13-1
13-5
10-32
10-35
11-14
11-17
11-21
11-27
11-24
11-11
11-16
13-25
▲ 2面
17-1
17-5
17-6
17-1
17-2
17-7
17-8
17-9
17-10
▲ 3面
18-7
18-8
18-6
18-5
18-11
18-15
▲ 4面

出土遺物（2）


20-7
20-9
20-8
20-4
20-5
20-6
▲ 5面
22-2
22-3
22-4
22-5
22-6
22-7
23-22
22-1
22-9
22-10
22-11
22-12
22-13
23-18
▲ 6面
27-14
27-17
27-28
27-32
29-4
29-3
27-1
27-8
27-15
27-22
26-21
26-25
26-13
29-5
29-16
29-14
26-5
26-6
26-7
26-9
26-10
26-11
▲ 7面
31-3
31-5
31-6
31-9
▲ 8面

出土遺物（3）

光明寺旧境内遺跡（No.316）

こうみょうじきゅうけいだいいせき

材木座六丁目855番21外地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市材木座六丁目855番21外地点に所在する個人住宅建築に先だち行われた光明寺旧境内遺跡（県遺跡台帳№316）の発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は平成15年5月1日から同年6月30日にかけて、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 本報使用の遺構図及び遺物実測図・観察表は調査員が分担作成した。
4. 本報の執筆分担は以下の通りである。
   第1章 遺跡の位置と歴史的環境　鈴木絵美
   第2章 調査の経過と層序　福田 誠
   第3章 検出した遺構と遺物 福田
   第4章 まとめ　福田
   編集作業は福田が行った。
5. 遺構全景写真・個別遺構写真は福田・鈴木が、出土遺物写真は鈴木・古田土俊一が撮影した。
6. 発掘調査の体制は以下の通りである。
   主任調査員　福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)
   調　査　員　菊川 泉　神山晶子　石元道子　鈴木絵美
   調査補助員　古田土俊一　長友純子（鶴見大学院生）　川村篤史　松澤弘三　野崎美帆（鶴見大学）
   作　業　員　(社)鎌倉市シルバー人材センター
7. 整理の体制は以下の通りである。
   主任調査員　福田 誠(鎌倉市教育委員会嘱託)
   調　査　員　菊川 泉　神山晶子　石元道子　鈴木絵美　古田土俊一
   調査補助員　長友純子（鶴見大学院生）
8. 発掘調査資料（記録図面・写真・出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。

目　　次

本 文 目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 ……108
第2章 調査の経過と層序 ……113
第3章 検出した遺構と遺物 ……113
第4章 まとめ ……153

図1 調査地点位置図 ……112
図2 調査グリッド割付図 ……112
図3 第1面全測図 ……114
図4 第2面全測図 ……115
図5 第3面全測図 ……117
図6 第4面全測図 ……118
図7 試掘時出土の遺物 ……120
図8 試掘時出土の遺物 ……121
図9 試掘時・包含層出土の遺物 ……122
図10 包含層出土の遺物 ……123
図11 包含層出土の遺物 ……124
図12 1面出土の遺物 ……125
図13 1面出土の遺物 ……126
図14 1面遺構出土の遺物 ……126
図15 1面構成土出土の遺物 ……127
図16 1面構成土出土の遺物 ……128
図17 1面構成土出土の遺物 ……129
図18 1面構成土出土の遺物 ……130
図19 2面出土の遺物 ……131
図20 2面溝状遺構出土の遺物 ……132
図21 2面遺構出土の遺物 ……133
図22 2面構成土出土の遺物 ……134
図23 2面構成土出土の遺物 ……135
図24 3面・3面遺構出土の遺物 ……136
図25 3面遺構出土の遺物 ……139
図26 3面構成土出土の遺物 ……137
図27 3面構成土出土の遺物 ……138
図28 4面・4面遺構出土の遺物 ……139
図29 4面構成土出土の遺物 ……140
図30 4面構成土出土の遺物 ……141
図31 光明寺境内絵図と調査地点の変遷 ……154

表1 遺物観察表 ……142
表2 遺物個体数 ……153
図版1 調査地点近景 Ⅰ区1面・Ⅱ区1面 ……156
図版2 Ⅰ区1面・Ⅱ区1面 ……157
図版3 Ⅱ区2面全景・道路状遺構 ……158
図版4 Ⅱ区3面全景・道路状遺構 ……159
図版5 Ⅰ区4面・Ⅱ区4面・5面 ……160
図版6 試掘時出土の遺物 ……161
図版7 試掘時・包含層出土の遺物 ……162
図版8 包含層出土の遺物 ……163
図版9 1面・1面遺構出土の遺物 ……164
図版10 1面遺構・Ⅰ面構成土出土の遺物 ……165
図版11 1面構成土出土の遺物 ……166
図版12 2面・2面遺構出土の遺物 ……167
図版13 2面遺構・2面構成土出土の遺物 ……168
図版14 2面構成土・3面・3面遺構出土の遺物 ……169
図版15 3面・3面遺構出土の遺物 ……170
図版16 3面構成土出土の遺物 ……171
図版17 4面・4面遺構・4面構成土出土の遺物 ……172
図版18 2面溝状遺構・包含層出土の遺物 ……173
図版19 動物遺体等 ……174
図版20 動物遺体等 ……175

第1章　遺跡の位置と歴史的環境

第1節　遺跡の位置と地理的環境

本調査地点は材木座六丁目855番21外地点、（北緯35°17′59″、東経139°33′23″）に所在する。現在の光明寺境内域の南東側にあたり、神奈川県遺跡台帳「光明寺旧境内遺跡」（№316）の一画に含まれる。調査地点南東の海岸線には中世港湾施設「和賀江島」がある。海岸線に平行して逗子へとつながる国道134号線が走り、それを遮る様に調査地点の背後にかかる鎌倉市と逗子市との境を為す丘陵が、逗子市小坪の辺りで落ち込んでくる。この扇山を頂点とする北から南東に伸びる尾根一帯には、鎌倉の南東を固めたと考えられる住吉城址がある（註1）。南西にはその北の尾根の一つである弁ヶ谷から流れてくる豆腐川が、材木座海岸に注いでいる。また海沿いにはいくつかの谷が入り込み、丘を挟んだ西側に正覚寺谷とよばれる谷がある（註2）。調査地点周辺は和賀江島や住吉城跡など、中世全般にわたって交通上・軍事上の要衝であり、近隣の名越に北条氏の館が営まれ続ける（註3）ことなどもその重要性を物語っているといえる。

相模川以東の海岸の地形は約6千年前の縄文海進以降、相模川河口からの東向きの沿岸流によって運ばれた漂砂の堆積により変化を続ける。材木座付近はラグーンと三角州が形成されることによって、次第に古鎌倉湾の埋積が進んだとされる（上本2004）。平安時代の終わりごろから鎌倉時代には材木座の旧ラグーンは低湿地として残るが、1232年和賀江島の構築により、西から東へと流れる沿岸流による砂をせきとめ、さらに急速に堆積したことで埋まっていった（上本前掲・斎藤1999）（註4）。滑川の流路は和賀江島構築以前まで、その河口は現在よりも400～500m東にあったと想定される（阿部1970・斎藤1995・南出2004）（註5）。ただこの変化の著しい浜地での旧河道の復原についての限定は難しいという指摘（上本前掲）もあり、文献・絵画史料、地理的観点などから提示されてきている復原案について、今後の発掘調査の進捗によるその解析が期待される。

第2節　歴史的環境

調査地点のある飯島は前浜の東南隅一帯で、逗子市小坪と鎌倉市側にまたがる。『吾妻鏡』寿永元年条からは源頼朝寵愛の「亀前」が、伏見冠者広綱の「飯島」の家に住んだことがうかがえる。また『吾妻鏡』の他の記述等から、飯島のあたりを前浜に対して「西浜」とも呼んだようで、「飯島」、「西浜」は同一の場所を指すとみられる（『日本歴史地名大系』「飯島」項）。この飯島は、人口港湾地区である和賀江津に対する内湊町もしくは港湾労働者作業居住地域としての性格が指摘されている（伊藤1994）。また飯島と隣り合う小坪は鎌倉から見た四角四境の西端に位置することから、中世鎌倉の周縁部の一つとして認知され、たびたび『吾妻鏡』にも、四角四境祭の舞台として登場する所である（『吾妻鏡』嘉禎元年条など）。

遺跡名となっている光明寺は天照山蓮華院光明寺と号し、浄土宗関東大本山である。江戸時代には家康の定めた浄土宗学問所関東十八壇林の筆頭として栄え、国宝「当麻曼荼羅縁起」（鎌倉時代の作品とされる）所蔵でも有名な寺である。その起源、歴史については未詳な点が多いが、若干ふれておく。起源については諸説ある。正元元年（1260）に下総から鎌倉に入った浄土宗然阿良忠は、住吉谷悟真寺（註6）に居住し、時の執権経時が良忠を崇敬し、佐介谷に蓮華寺を建立した。その後光明寺と改めたとされるが、光明寺という寺名となったのは、確認できる限りでは少なくとも明応四年（1495）までとされ、材木座にいつごろ移ってきたのかについては判然としない。中興開山は八世観誉祐崇（1509年寂）及び30世深誉伝察（1656年寂）とされる。

光明寺には享保五年（1720）・嘉永三年（1850）作成の光明寺境内が描かれた2枚の絵図が残っている。絵図には豆腐川から下馬高札を経て、橋を渡ると門前町の家並みが連なる。総門、山門へと続き、参道の左右に千手院・蓮乗院などの僧坊、祖師堂・祈祷堂などの中心的施設が描かれる。図中央右端には宝夾印塔が立ち並ぶ内藤家の廟所が霊屋門に区画されているのがみえる。これは日向延岡城主内藤家と陸奥湯浅長井領主内藤家の廟所で、現在も調査地点の南東に所在する。市指定文化財に指定されている。内藤家は前述の国宝「当麻曼荼羅縁起」を寄付するなど、光明寺とのゆかりは深い。また絵図の南上には、演誉上人と書かれた霊骨窟や地蔵窟が描かれる。地蔵窟は明治初年までは拝殿があったが、現在は学校・住宅などが建ち、光明寺背後の天照山が切り崩されたため、窟内にあった安山岩製の地蔵菩薩は光明寺境内に移されている。

調査地点南東の和賀江島は、貞永元年（1232）年七月十二日、勧進上人往阿弥陀仏が「為無舟船着岸煩、可築和賀江嶋之由」と北条泰時に願い出て、造られたとされる石積みが現存する。近年の成果により、この石積みは主に、真鶴・根府川の海岸から運ばれた安山岩の玉石で構築されたものであることが分かっている（上本・林2002a・b）。「和賀江」は建長三年（1251）の鎌倉市中の商業地域として認められた7つの地区の一つに含まれているが、文永二年（1265）の認められた商業地域の中には含まれないことから、鎌倉幕府が和賀江における商業権益を放棄したことを意味するとして、鎌倉時代後期から南北朝期にかけて、和賀江島と前浜が、真言律宗寺院極楽寺の全面的支配がおかれていたことと関連付けて考察がされている（馬渕1998）。『金沢文庫古文書』十296項に、

『於鎌倉和賀江万福寺書了、干時貞和三年二月　日浄宏』

とあり、貞和三年（1347）頃「和賀江」には極楽寺末寺と考えられる「万福寺」があったことが知られる（貫・川副1980）。

そして前述した、絵図に描かれる地蔵窟内にあったとされる地蔵菩薩には以下の銘が刻まれる。

『敬白□奉造立地蔵菩薩像一□』発願満福寺住侶教義□勧進聖尚養寺常住西連』

右志趣者結縁衆生安全」　正中二年乙丑九月二十四日仏師沙弥□□』（註7）

とみえ、極楽寺が和賀江島の維持・管理の見返りに、和賀江に関所をおき関米を徴収していたことから、光明寺が移ってくるまでに、この近辺に末寺の「万福寺」が建立され、和賀江の維持・管理の拠点としていたと指摘される（松尾1993）。現在の光明寺の地に、この万福寺が存在したことを示す直接的な史料はないものの、史料から「和賀江」に万福寺があったことは確認できる。和賀江との位置関係からいっても、それが現在の光明寺周辺である可能性は高い。こうした材木座における光明寺の起源とそれ以前の土地の利用については今後さらに解明すべき課題の一つである。

ここで近隣の調査事例をいくつか挙げておく。鎌倉市側最南部の谷戸にある、北区鎌倉学園用地内で調査が行われている。調査では13世紀後半から14世紀代の時期に、山裾に溝と土丹敷で区画された2棟の掘立柱建物を含む屋敷跡が確認されている。出土遺物は緑釉・二彩などの高級品とともに、鞴の羽口・るつぼなどの鋳造関連の遺物や漁業関係の遺物が出土しており、調査例が少ない中で貴重な事例の一つである（斎木・河野他1980）。

また光明寺北側最奥部の谷戸である弁ヶ谷には、新善光寺・崇寿寺・最宝寺（註8）があったことが知られる。新善光寺は現在葉山町にある新善光寺がこの地にあったものとされ、『北条九代記』の仁治元年（1242）六月十五日条が初見である。この寺は北条氏分流名越氏との関連性が指摘される。（高橋1996）。昭和62年に新善光寺跡内やぐらにおいて調査が行われ、やぐら2基、火葬墓、コ字区画遺構とされる遺構などが検出された。調査担当者は新善光寺境内の一画である可能性を指摘し、さらに寺院内でも上層クラスの人物を埋葬した施設と結論付けている（原・福田他1988）（註9）。

また2002年にも新善光寺跡とされる一画で調査が行われている。土丹と鎌倉石の石列を境にした玉砂利面や、永福寺瓦Ⅱ期からⅢ期にあたる瓦溜まりが検出され、新善光寺境内域に含まれる可能性が指摘されている（福田2004）。他に弁ヶ谷では、弁ヶ谷遺跡（材木座四丁目336番7地点）で調査が行われ、13世紀末から15世紀にいたる6面の生活面を検出している（宮田他2001）。

豆腐川を挟んだ西側の材木座町屋遺跡（材木座六丁目760番1他地点）でも調査が行われ、14世紀から15世紀前半代に比定される4枚の生活面が検出された。13世紀代の面が見られなかったことから、海抜2.0mという低地のために豆腐川の氾濫原であった可能性が指摘される（大河内他2001）。また同じ豆腐川西側の材木座町屋遺跡（材木座六丁目674番10・15・8外・9地点）においても2002～2003年に調査が行われている。調査では13世紀前半から15世紀前半頃と想定される1～4期にわたる遺構群が検出されている。（齋木他2005）

逗子市側では、2005年に住吉城址で、丘陵の頂部に近い最上段の郭である「ぼんばたけ」という地名の残る地点で調査が行われている（宮田他2005）。残念ながら城の築造年代などを判断できるような遺物は出土していないが、土塁が検出され、城の具体的様相を探る新資料として注目される。また逗子市も鎌倉との関わりで、やぐらが多く見られる地域であるが、特に鎌倉側である北側に多く分布することが指摘されている（宮坂・鈴木2002）。その分布は扇山の東側から北側の尾根にかけて、光明寺裏山やぐら群や飯島やぐら群など、いくつかずつまとまって点在しているものが何ヶ所か見られる。一部調査が行われている（註10）ものの、原形を留めるものが少なく、構造年代や葬送形態を知り得る例も限られる。そのため、その性格や詳細について窺い知る事は難しいとは思われるが、今後の調査による資料の増加が期待される。

〈註〉

註1.昭和27年の現地踏査により、扇山を主峰とする丘陵全体に城郭構造が確認された。『逗子市史』によると「故城は名越切通を中心とする仁治の築城工事による造成」（別編Ⅱ考古・建築・美術・漁業編p178）と考えられる。永正七年（1510）北条早雲が三浦道寸に対する防御の目的で住吉の古要害を取り立て、城郭としたとされる。この城は一時三浦道寸の手に移るが、永正九年に早雲によって攻め落とされ、以降は城としての機能を失ったものと見られる。中央の「げんじがやと」を城主邸館地とし、これを囲む幾段もの垂直切岸と平場により構成される（『逗子市史』別編Ⅱ）。

註2.その谷戸に所在する正覚寺は住吉山悟真院正覚寺と号し、光明寺の開山良忠が鎌倉に入り、居住した住吉谷の浄土宗悟真寺がその前身とされる。その後しばらく荒廃していたのを、光明寺18世快誉上人が天文十年（1541）に悟真寺を再興し、正覚寺と改めたという。光明寺の末寺である。

註3.『吾妻鏡』建仁三年九月六日条の北条時政の「名越御亭」や、『同』建永元年二月四日条の北条義時の「名越山辺」の「山荘」など北条氏嫡流の屋敷があったことがよく知られる。またその後北条氏分流名越氏の拠点として、名越時章の「名越山庄」があったことなどが窺え（『吾妻鏡』正嘉二年五月五日条など）、鎌倉の東の境界としての軍事的側面、水上交通の要所としての和賀江に近接した地でもあることが、拠点の地に選定された大きな理由の一つと指摘されている（高橋1996）。

註4.材木座周辺だけでなく、中世鎌倉における海岸線の復元については阿部正道氏・松尾宣方氏・馬淵和雄氏・斎藤直子氏らによって研究が進められてきている（阿部1970・松尾1989・馬淵1991・斎藤1999など）。滑川・稲瀬川両河口付近で陸側に大きく湾入していたことや、海岸部に大きな砂丘が形成していたことなどが明らかとなっている。

註5.特に斎藤氏によると、17世紀後半「相州鎌倉之本絵図」に「あらいのえんま」の東側を流れていることから、鎌倉期から17世紀後半まではこの河流をたどると考えられる。また新居閻魔堂の開創の時期については建長年間とされ（貫・川副1980）、少なくとも確実に資料に表れてくる15世紀中頃には、この閻魔堂がたてられた旧地は砂丘として安定していたと推測されている（斎藤1999）。なお、この閻魔堂は宝永元年以降には、現在の山之内小袋谷に円応寺として移転している。

註6.註2参照。

註7.尚養寺、及び西連については不詳であるが、尚養寺は鎌倉近隣の寺院であろうと推測されている（貫・川副1980）

註8.崇寿寺は元亨元年（1321）北条高時開創、開山南山士雲。最宝寺は「高御倉」と呼ばれる地にあったとされる。（貫・川副前掲）この「高御倉」は弁ヶ谷入り口東側の山沿いの地域を呼び、幕府直轄領の倉庫群がこの付近に所在していた可能性が指摘される（「高御倉」『日本歴史地名大系　神奈川県の地名』p284・高橋前掲）。やはりここからも水上交通の要所である和賀江とのかかわりがうかがえる。最宝寺はもとは頼朝が扇ヶ谷に創建したが、建久六年に移転したものと考えられている（貫・川副前掲）。

註9.田代郁夫氏はやぐらを「群」としてとらえ、その構築される「場」について考証されている。その中でこの新善光寺で検出されたコ字区画遺構が二つのやぐらに挟まれた位置にあり、周囲に溝と柵を巡らせたこの遺構が、左右のやぐらを付属するような中心的な施設となることが想定される（田代2004）など、注目すべき遺構である。

註10.「弁ヶ谷東やぐら群」（木村・鈴木2000）、「正覚寺やぐら群」（宮坂・鈴木前掲）などで調査が行われている。

〈引用・参考文献〉

赤星直忠1995「考古編」『逗子市史』別編Ⅱ考古・建築・美術・漁業編,逗子市.

『吾妻鏡』一～五,新人物往来社.

阿部正道1970「中世の政治都市鎌倉」『地形図に歴史を読む第2集』藤岡謙二郎編,大明堂.

上本進二2004「鎌倉の地形発達史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集,国立歴史民俗博物館.

上本進二・林美佐2002a「和賀江島の採石の採集地推定（1）―礫種・礫径分析―」『神奈川災害史研究5』.

上本進二・林美佐2002b「和賀江島の採石の採集地推定（2）―真鶴・根府川海岸の礫種・礫径分析」『神奈川災害史研究6』.

大河内勉他2001「材木座町屋遺跡　材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』（第2分冊）鎌倉市教育委員会.

『金沢文庫古文書』第10集,神奈川県立金沢文庫.

鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館1968『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第15集.

同1969『鎌倉の古絵図Ⅱ』鎌倉国宝館図録第16集.

木村吉行・鈴木庸一郎2000『弁ヶ谷東やぐら群　平成11年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査』財団法人かながわ考古学財団.

齋木秀雄・河野眞知郎他1980『光明寺裏遺跡　鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』.

齋木秀雄他2005「材木座町屋遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』（第1分冊）鎌倉市教育委員会.

斎藤直子1995「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」『中世東国の物流と都市』峰岸純夫・村井章介編,山川出版社.

斎藤直子1999「13～19世紀海岸部における潟湖の変容」『過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史』国立歴史民俗博物館研究報告第81集,国立歴史民俗博物館.

高橋慎一郎1996『中世の都市と武士』吉川弘文館.

田代郁夫2004『中世鎌倉の「やぐら」』発表要旨,財団法人かながわ考古学財団.

伊藤一美1994「鎌倉の内湊町「飯島」と港「和賀江津」―都市鎌倉の湊機能と材木座との若干の関係について」『歴史の中の都市と村落社会』田中喜男編,思文閣出版.

『日本歴史地名大系　神奈川県の地名』平凡社.

貫達人・川副武胤1980『鎌倉廃寺辞典』有隣堂.

貫達人・高柳光寿1959『鎌倉市史』（社寺編）.鎌倉市史編纂委員会.

原廣志・福田誠ほか1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書―中世墓の発掘調査―』新善光寺跡内やぐら調査団.

福田誠2004「新善光寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』（第2分冊）鎌倉市教育委員会.

松尾剛次1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館.

松尾宣方1989「中世の海岸線と浜」『よみがえる中世3武士の都鎌倉』平凡社.

馬淵和雄1991「都市の周縁、または周縁の都市」『青山考古』第9号.

馬渕和雄1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社.

宮坂淳一・鈴木庸一郎2002『正覚寺やぐら群　平成13年度逗子市小坪地区急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査』かながわ考古学　財団調査報告132,財団法人かながわ考古学財団.

宮田眞他2001「弁ヶ谷遺跡材木座四丁目336番7」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』（第1分冊）鎌倉市教育委員会.
宮田眞他2005『住吉城趾発掘調査報告書（逗子市小坪5丁目240他）』株式会社博通
南出眞助2004「鎌倉滑川河道の再検討」『日本歴史における災害と開発Ⅱ』国立歴史民俗博物館研究報告第118集,国立歴史民俗博物館.

図1　調査地点位置図

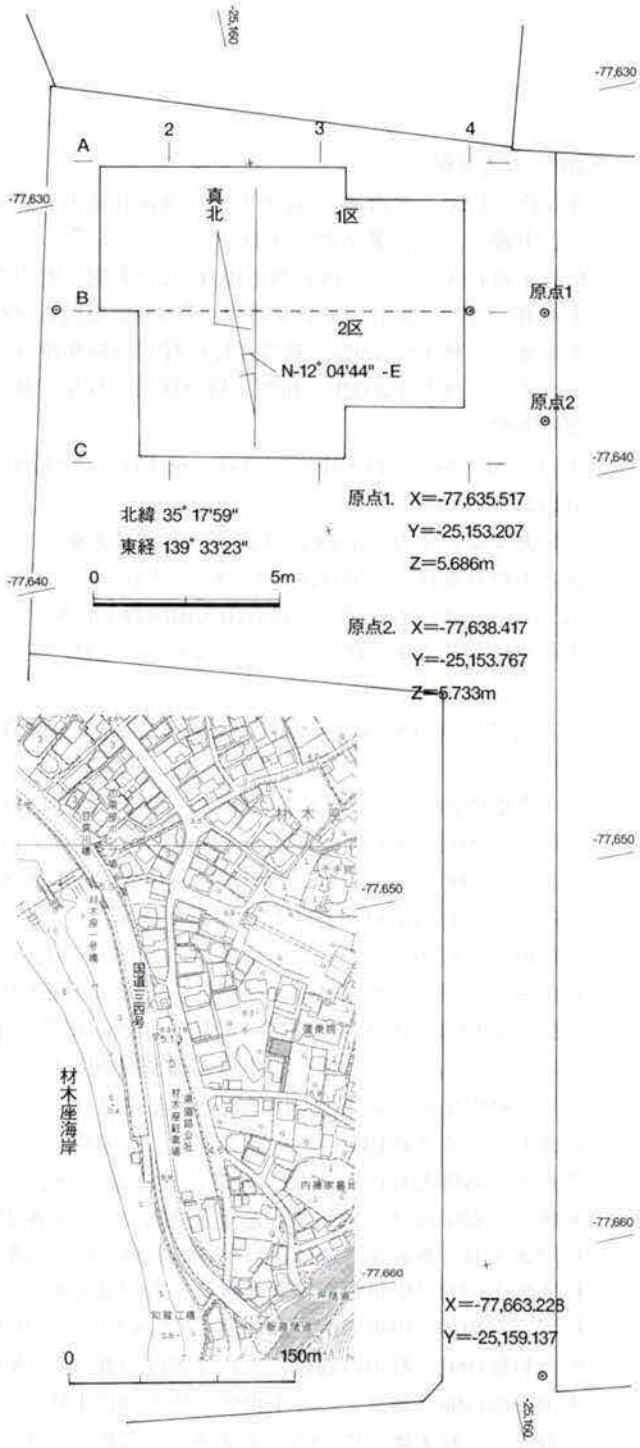


図2　調査グリッド割付図

第2章　調査の経過と層序

第1節　調査の経緯

発掘調査は、平成15年3月13日～同年3月15日に行われた試掘調査の成果を基に計画された。平成15年5月1日に重機による表土掘削及び機材の搬入を行い調査を開始し、同年6月30日まで行った。調査面積は約64.4㎡である。調査に先立って行われた試掘調査結果から、重機で表土を約120㎝掘り下げ第1面を検出した。グリッドは、建築予定住宅の南北軸方向と地形を基準に設定した。グリットは市内4級基準点の内C066(X=-77,575.347 Y=-25,211.429)と、C067(X=-77,565.747 Y=-25,219.451)を基準に、調査基準原点1(X=-77,635.517 Y=-25,153.207 Z=5.686m)、原点2（X=-77,638.415 Y=-25,153.767 Z=5.733m）を設定したもので南北軸線は真北に対して12°04′44″東に振れている。調査中に使用した水準点は鎌倉市三級水準点№53418（L=5.100m）から原点1に移動したもので、原点1の海抜は5.686mである。6月30日に器材の搬出も含め、全ての調査を終了した。

第2節　層序

調査は現地表面から表土を重機で掘削した。表土は約120～130cmの厚さの砂質の盛土で調査地全体が覆われていた。調査は崩れやすい砂質土の安全を考慮して地表から2mまでとし、重機による掘削土および調査中の排土は敷地内に山積みにした。

重機で掘削した表土の下は、淡茶灰色砂質土層と敷き詰められた土丹地業面から成る第1面（-120㎝）が拡がり、第2面（-150㎝）、第3面（-180㎝）、第4面（-200㎝）も暗灰色ないしは灰色砂質土層と敷き詰められた土丹地業面から成ることが確認された。検出した遺構・遺物の詳細は次章に譲る。

第3章　検出した遺構と遺物

排土置き場を確保するために調査地全体を2つに分け北側を1区、南側を2区として調査を行ったが、各面・遺構のつながりが煩雑になることを避けるために一括して報告する。

第1節　第1面の遺構と遺物（図3）

第1面は第Ⅰ層の盛土と部分的に残る第Ⅱ層の下で検出した淡茶灰色砂質土層（第Ⅲ層）を遺構面とする。

(1) 道路遺構

検出した遺構は、道路と考えられる土丹を敷き詰めた面が挙げられる。道路面は厚さ10㎝程の扁平な土丹塊を敷き並べたものである。真北に対して約23°西に傾く約3m幅の道路面が、調査区の南壁からほぼ調査地の中央で行き止まる。この道路面の西辺沿って幅50㎝程の溝が付く。この中央で行き止まった道路面から約1m幅の土丹敷き面が鍵の手に曲がり東方向に延びている。この東に延びる土丹敷き面に沿って土丹列が並ぶことから、この土丹敷き面も道路（路地あるいは通路）と考えられる。道路の北側一帯は道路のある南側と比べると20㎝程低い。道路以外には落ち込みや若干の柱穴が見られる程度である。

(2) 遺物（図10～14、図版9・10）

1面からは瀬戸折縁皿、常滑片口鉢、釘の出土が目立つ。包含層を含めると瀬戸折縁皿は17点出土しいずれも14世紀第1～4四半期のものと考えられる。海に近いせいか土錘も出土している。遺構では落ち込み1からは銭が41枚まとまって出土した。

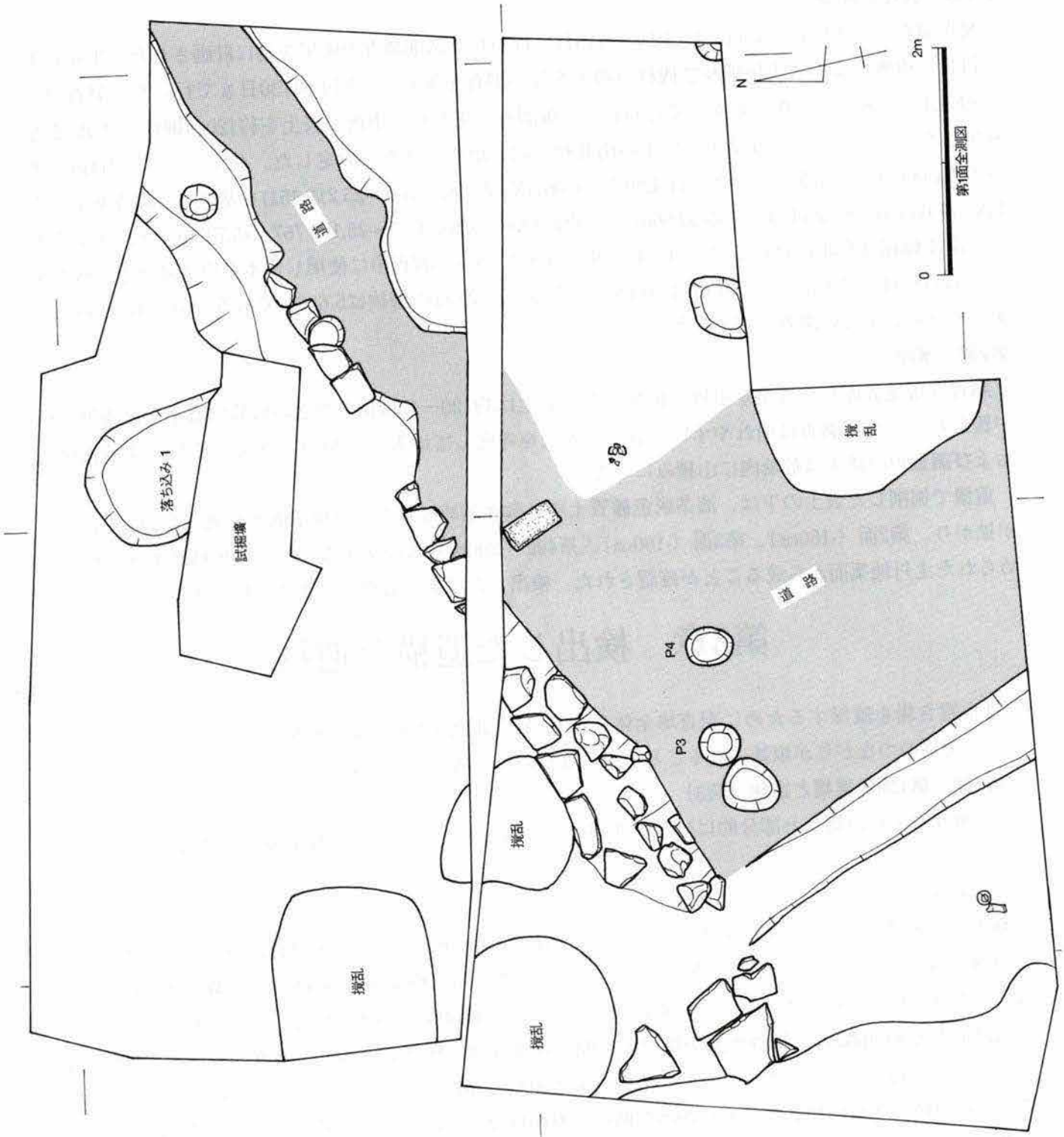


図3　第1面全側図

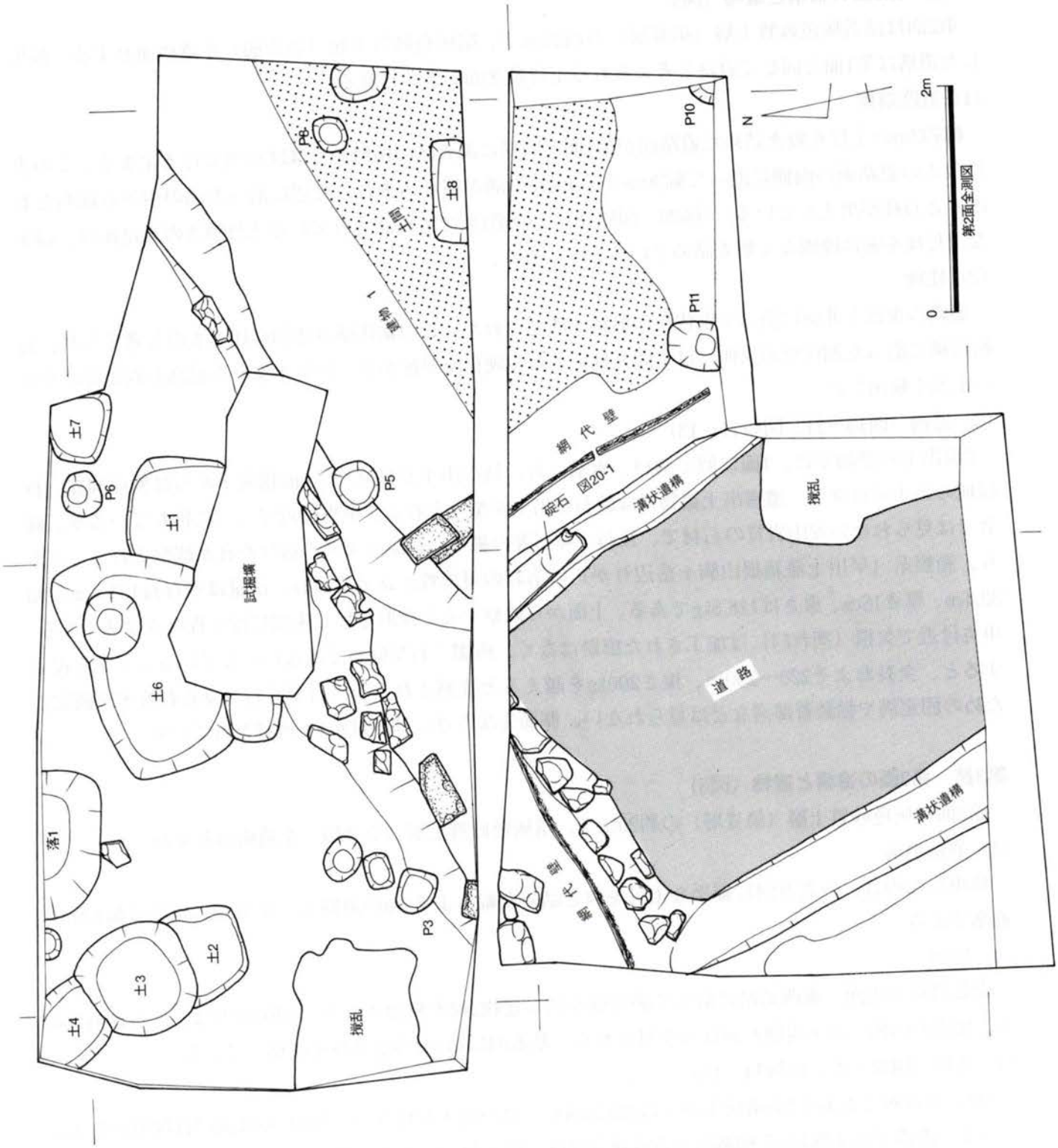

P6
土8
1 砂層
土7
P6
土1
試掘壙
土6
落1
土4
土3
土2
撹乱
P3
P5
P10
P11
N
2m
0
第2面全測図
柵代壁
硬石 図20-1
溝状遺構
撹乱
道路
溝状遺構
柵代壁

図4　第2面全側図

第2節　第2面の遺構と遺物（図4）

第2面は淡茶灰色砂質土層（第Ⅲ層）の約20㎝下、暗灰色砂質土層（第Ⅳ層）を遺構面とする。検出した遺構は第1面と同じく道路と考えられる土丹敷き面が挙げられる。

(1) 道路遺構

幅約3mの土丹を敷き詰めた道路面が第1面と同様に調査区の南壁からほぼ中央で行き止まる。この土丹敷きの道路面の両側に沿って幅30㎝から40cmの溝が掘り込まれ、東辺に沿った溝の中から碇石とおぼしき石柱が出土している。（図20、図版18）この第1面でも確認されている土丹敷きの道路面は、扁平な土丹塊を密に隙間なく敷き詰めているものである。

(2) 建物

道路の東面と北面に沿って網代壁の痕跡が確認された。この網代壁は建物に伴うものと考えられ、道路遺構に沿った網代壁の東側には土間と推定される硬化面が拡がる。行き止まった道路の西側では多くの土壙を検出した。

(3) 遺物（図15～21、図版11～13）

2面出土の遺物では、1面に似て瀬戸、常滑、釘、銭の出土が目立つ。1面構成土からは瀬戸卸皿、折縁皿の出土が目立つ。遺構出土遺物では碇石の出土が挙げられる。中央付近で二つに折れているが、鎌倉では見られない安山岩質の石材で、長石、輝石等の細かい結晶とガスの抜けた孔が観察されることから、箱根系（早川上流箱根山駒ヶ岳辺りか）の溶岩の可能性がある(註11)。法量は残存長131.6㎝、幅32.4㎝、厚さ18㎝、重さは118.8㎏である。上面から観察すると楔形を呈し先端に行く程厚さは薄くなる。中央付近で欠損（割れ口には加工された痕跡はなく、所謂二石型碇石ではない）していることから復元すると、全長およそ220～250㎝、重さ200㎏を越えると推測される。一石型碇石で見られる木部固定のための固定溝や軸装着部溝などは見られない。側面先端寄りには鉄釘が1ヶ所打たれている。

第3節　第3面の遺構と遺物（図5）

第3面は灰色砂質土層（第Ⅶ層）の約20㎝下、暗灰色砂質土層（第Ⅷ層）を遺構面とする。

(1) 道路遺構

検出したのは、南北方向に扁平な土丹を敷き詰めた幅およそ4mの道路と、東方向に延びる幅1.8mの道路である。

(2) 建物

南北道路の東面、東西道路に沿って網代壁を持つ建物2棟が検出された。網代壁のほとんどは痕跡のみ、建物の内側では不規則だが柱穴が見られる。基本的に第4面の地割りを踏襲している。

(3) 遺物（図22～25、図版14・15）

3面の包含層でもある2面構成土からは2面と同じく釘の出土が目立つ。3面からは瀬戸折縁皿が出土している。遺構では土壙1から舶載品の青磁蓮弁文碗、搬入品の白かわらけが出土している。土壙6からは常滑片口鉢、吉備系土器碗、釘、銭が出土している。

第4節　第4面の遺構と遺物（図6）

第4面は暗灰色砂質土層（第Ⅷ層）の約30㎝下で検出された扁平な土丹塊を密に敷き詰めた道路面を遺構面とする。

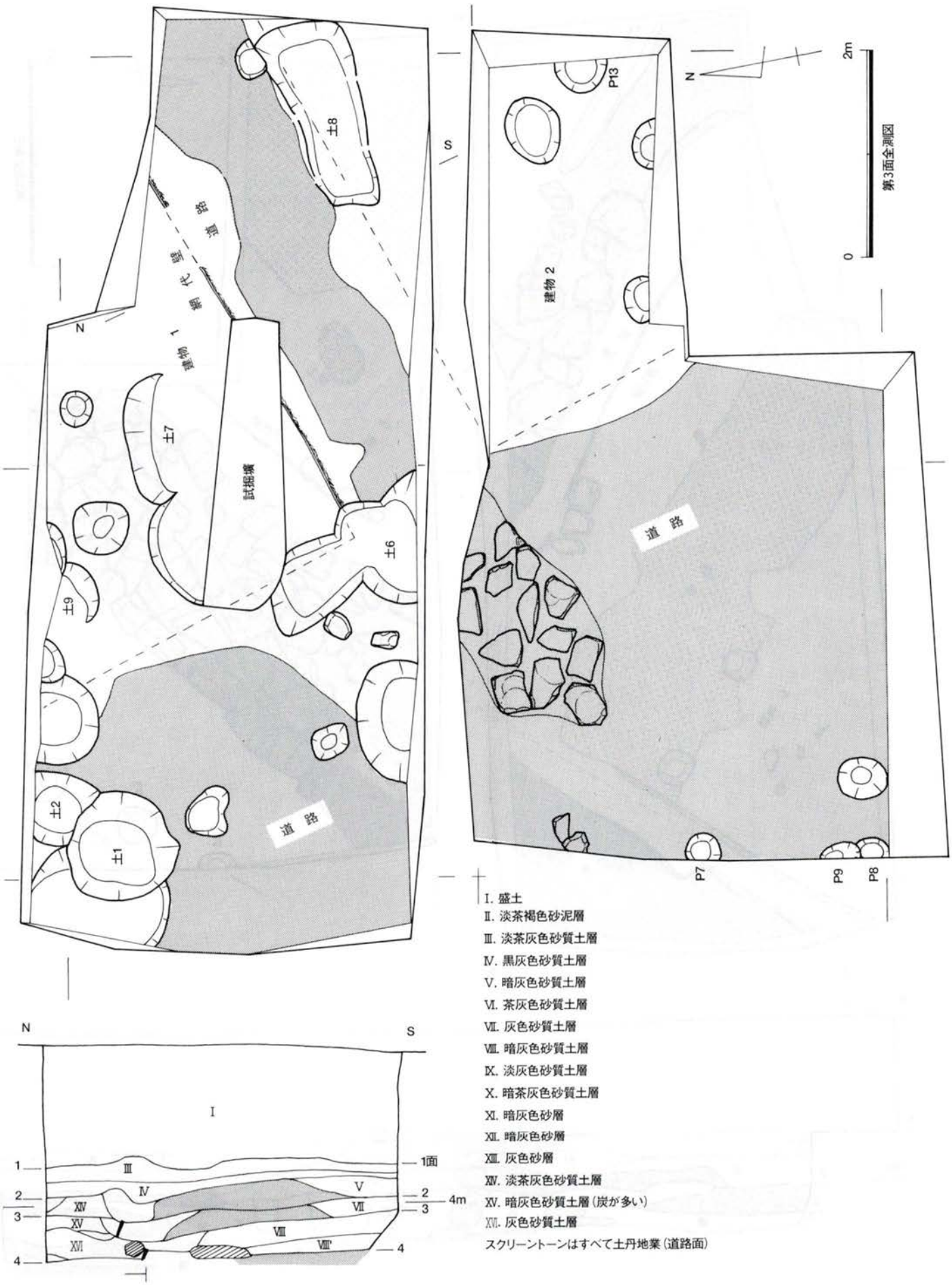

建物1
建物2
道路
試掘壙
土1
土2
土6
土7
土8
土9
P7
P8
P9
P13
N
S
0
2m
第3面全測図
I. 盛土
II. 淡茶褐色砂泥層
III. 淡茶灰色砂質土層
IV. 黒灰色砂質土層
V. 暗灰色砂質土層
VI. 茶灰色砂質土層
VII. 灰色砂質土層
VIII. 暗灰色砂質土層
IX. 淡灰色砂質土層
X. 暗茶灰色砂質土層
XI. 暗灰色砂層
XII. 暗灰色砂層
XIII. 灰色砂層
XIV. 淡茶灰色砂質土層
XV. 暗灰色砂質土層（炭が多い）
XVI. 灰色砂質土層
スクリーントーンはすべて土丹地業（道路面）
1面
4m

図5　第3面全側図

第4面全測図
0
2m
N
E
W
盛土
網代壁
道路
P3
P4
柱穴列
土丹
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
1
2
3
4
4m

図6　第4面全側図

(1) 道路遺構

南北方向に延びる幅約3mの道路と東方向に延びる幅約1.3mの道路を検出した。南北道路、東西道路共に側溝は持たない。東西道路は建物との間、幅が狭いことから道路と云うよりも路地といった方が良いかも知れない。建物に沿って網代壁の掘方のために溝状に窪むが溝ではない。

南北道路の西辺に沿って柱穴列が検出された。道路に平行した柱穴で、90cm（半間）の間隔で並ぶことから道路に沿って建てられた簡単な小屋か、差し掛けの痕跡と考えられる。

(2) 建物

南北道路の東面、東西道路に沿って網代壁を持つ建物2棟を検出した。

a.建物1

南北道路に面し、東西道路の北側で検出した網代壁を持つ建物である。南北道路に約4.5m、東西道路に約6m接するが規模は不明。建物内部で柱穴と幅1.5m程の土間とおぼしき硬化面を検出した。

b.建物2

南北道路に面し、東西道路の南側で検出した網代壁を持つ建物である。南北道路に約2.5m、東西道路に約5.5m面するが規模は確定できない。建物内部で土間とおぼしき硬化面の広がりと、囲炉裏の痕跡と思われる60㎝×40cmの範囲で焼土面を確認した。

(3) 遺物（図26～28、図版16・17）

相変わらず4面の包含層である3面構成土からは、舶載磁器・吉備系土器・釘・常滑片口鉢の出土が目立つ。瀬戸卸皿を見ると、13世紀第2から第3四半期のものが見られるが瀬戸折縁皿の出土はない。網代建物内で吉備系土器・白かわらけ・瓦器質黒縁皿・備前捏鉢が出土している。

第5節　第4面以下の遺構と遺物

第4面下は住宅建設による掘削深度を超えるために、中央セクション部でトレンチ調査を行った。

(1) 道路遺構

4面まで確認されている扁平な土丹を敷き詰めた道路面と同じ構造を持つ道路面が確認された。4面の道路面を取り除くと、約10cmの厚さで灰色砂が敷かれていた。砂を取り除くとやはり扁平な土丹を敷き詰めた道路面が続くことを確認した。更に下に道路面が遺存していると思われるが、砂地の湧水のために以下の調査は断念した。

(2) 遺物（図29・30、図版17）

4面構成土から白磁口兀皿や常滑のⅠ類片口鉢の出土が目立つ。瀬戸の製品が見られなくなる。

註11　放送大学客員教授、松島義章先生の御教授による。

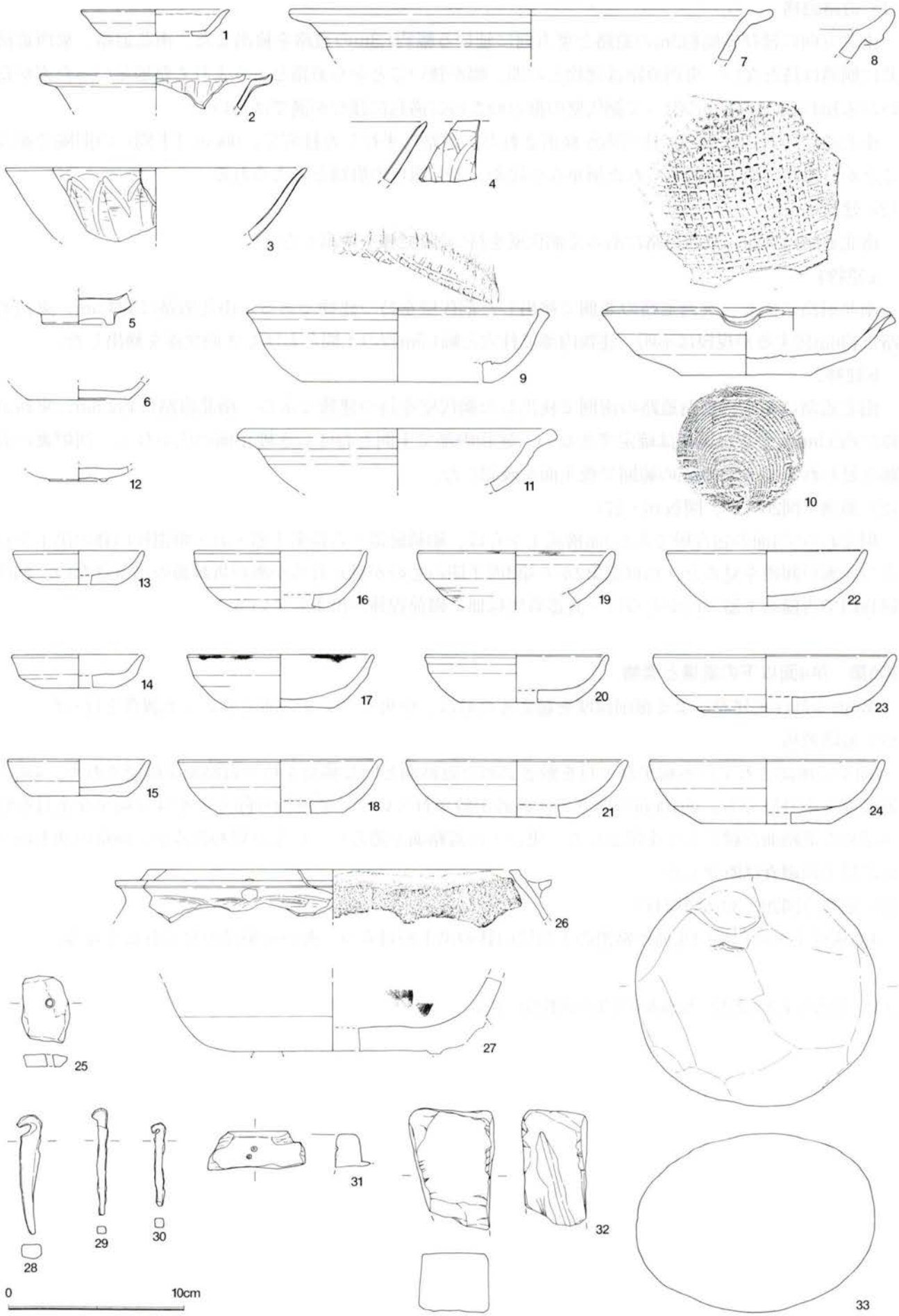

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

図7　試掘時出土の遺物

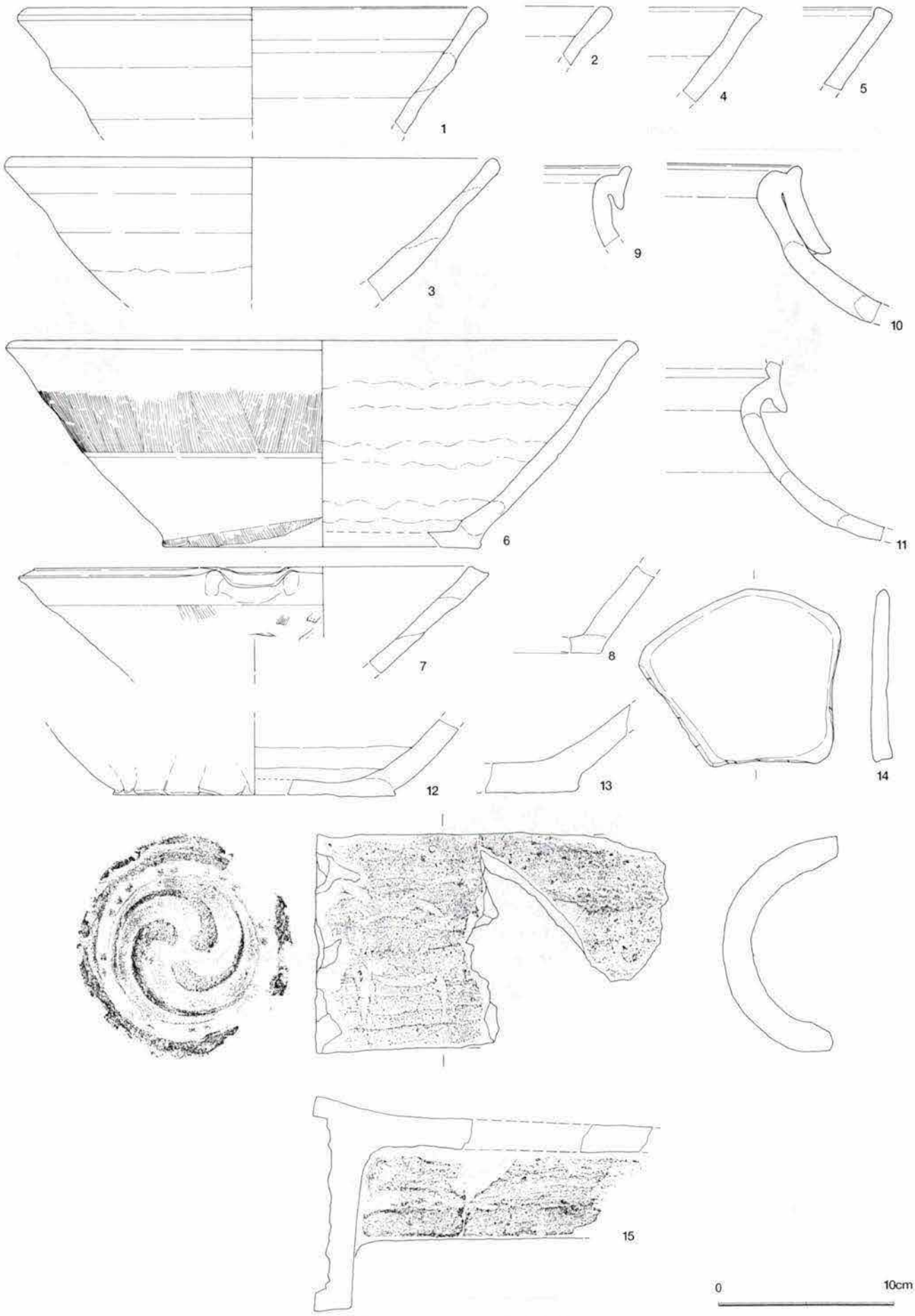


図8　試掘時出土の遺物

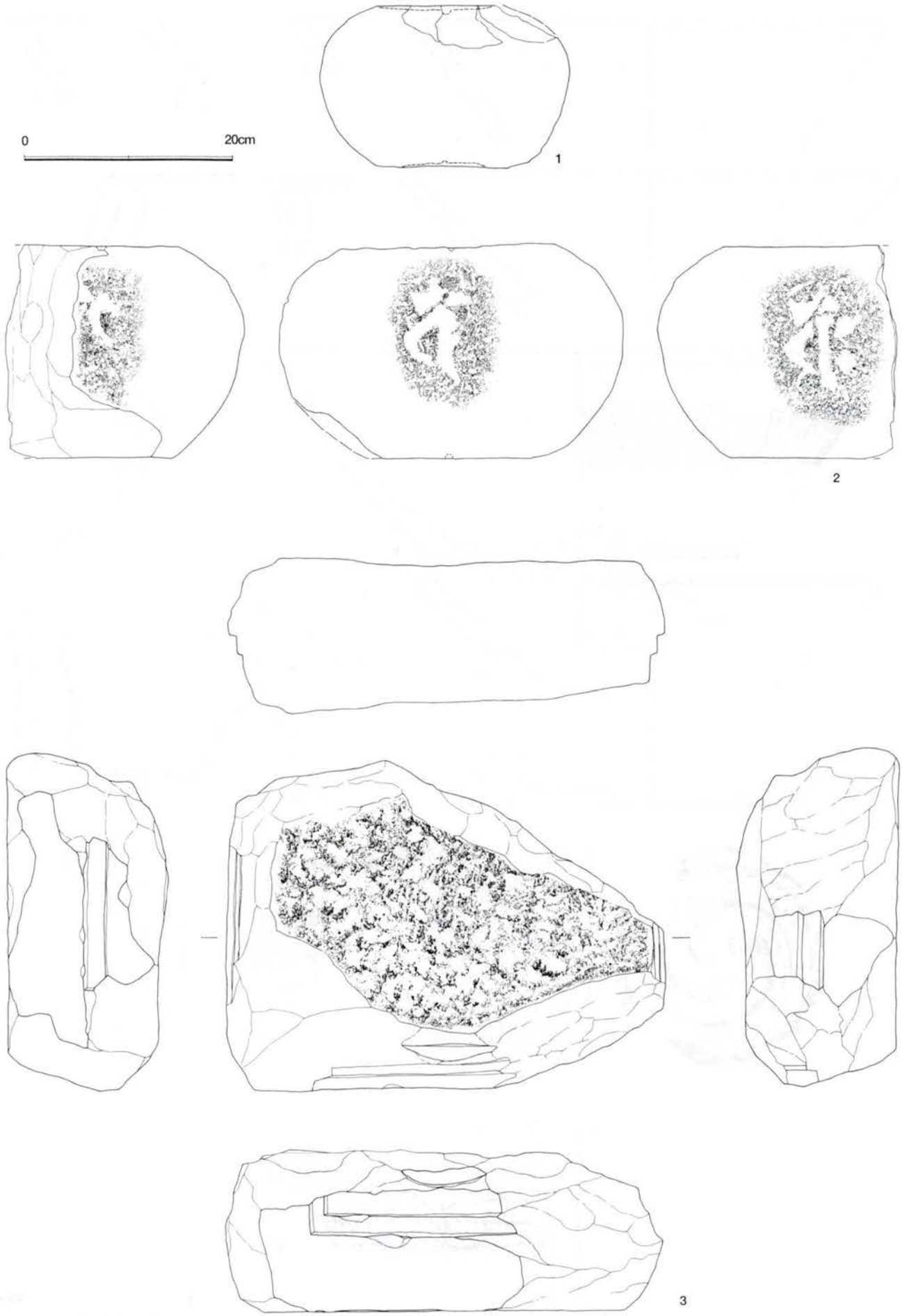


図9 試掘時・包含層出土の遺物

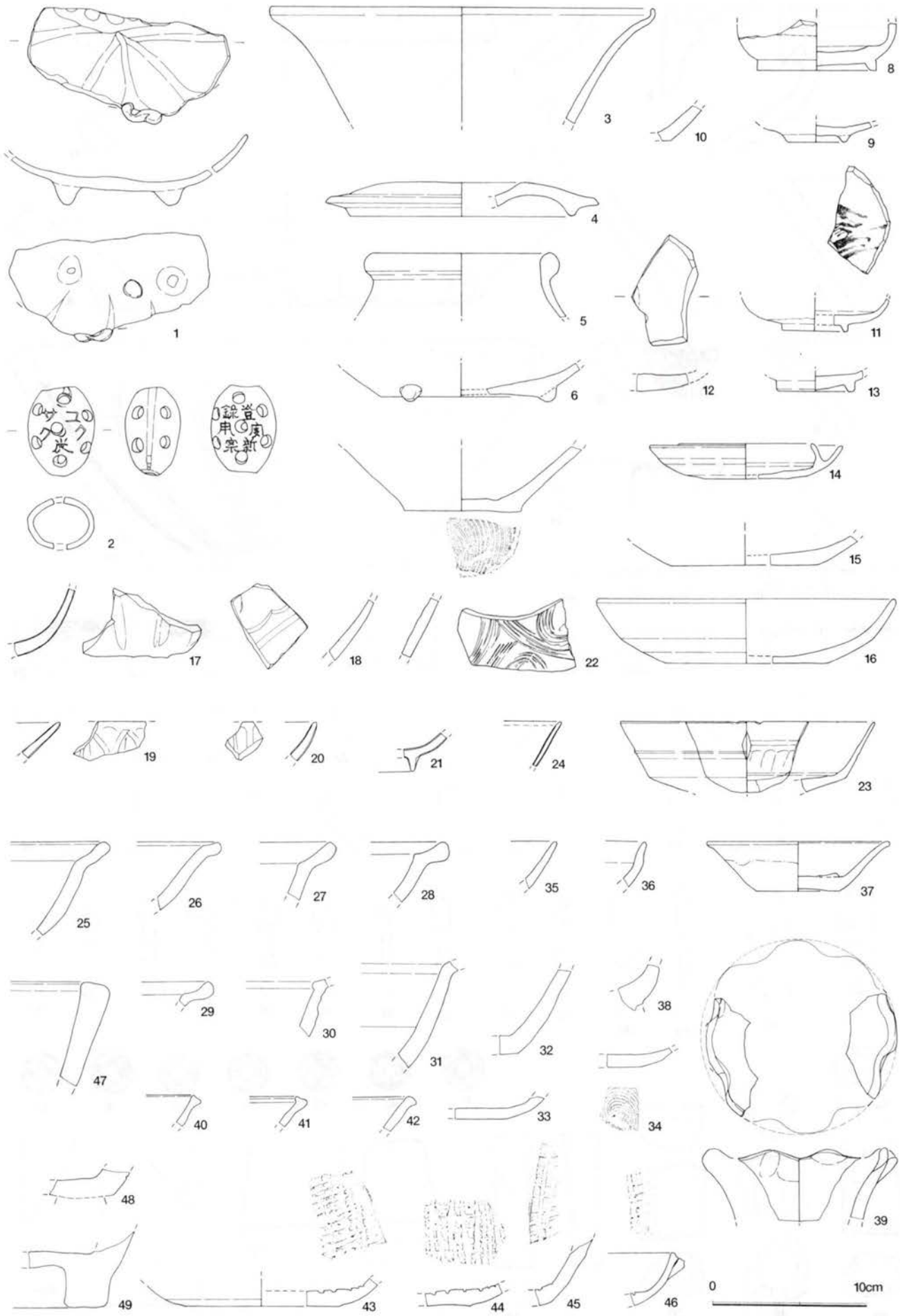


図10　包含層出土の遺物

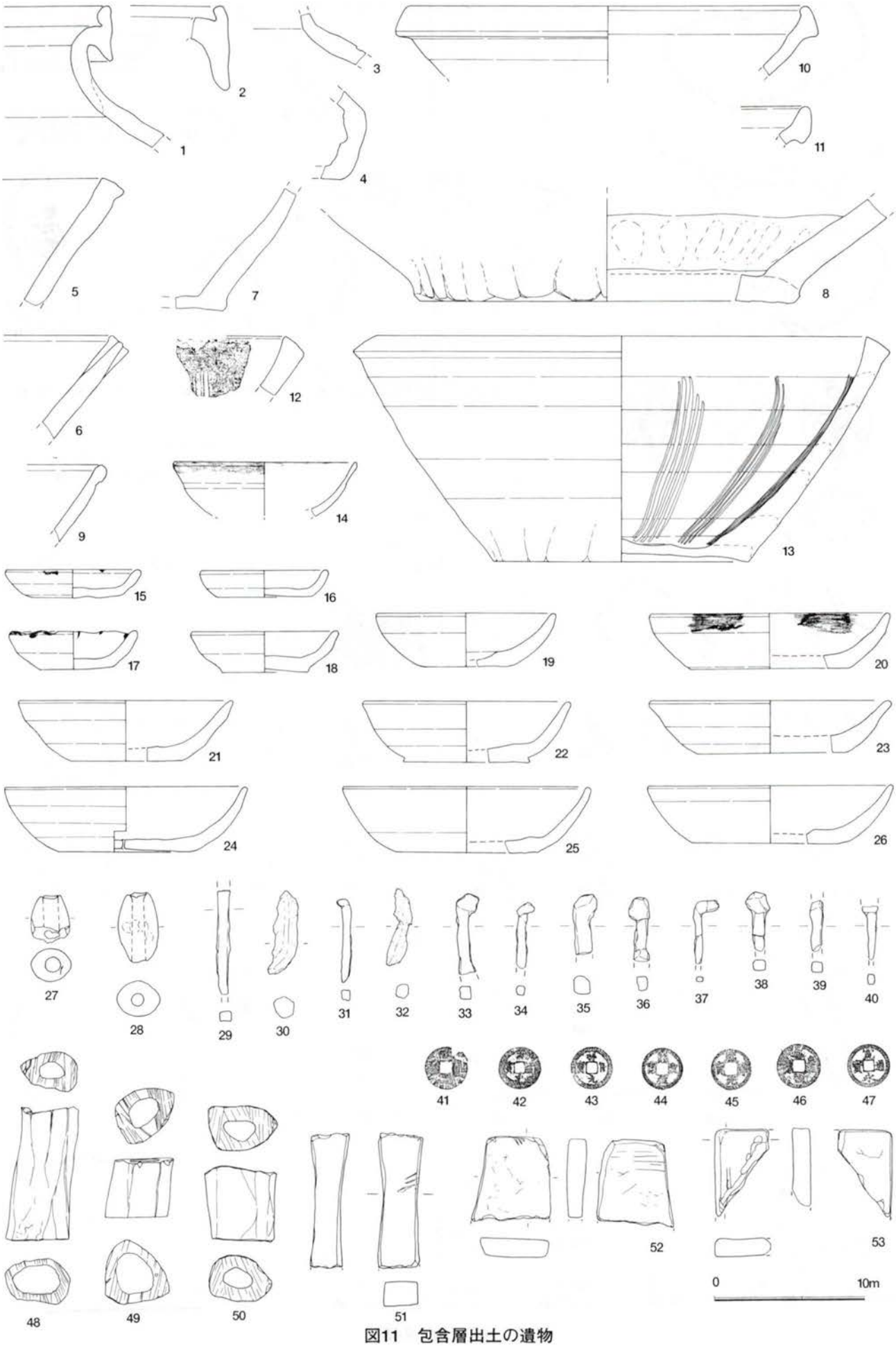


図11　包含層出土の遺物

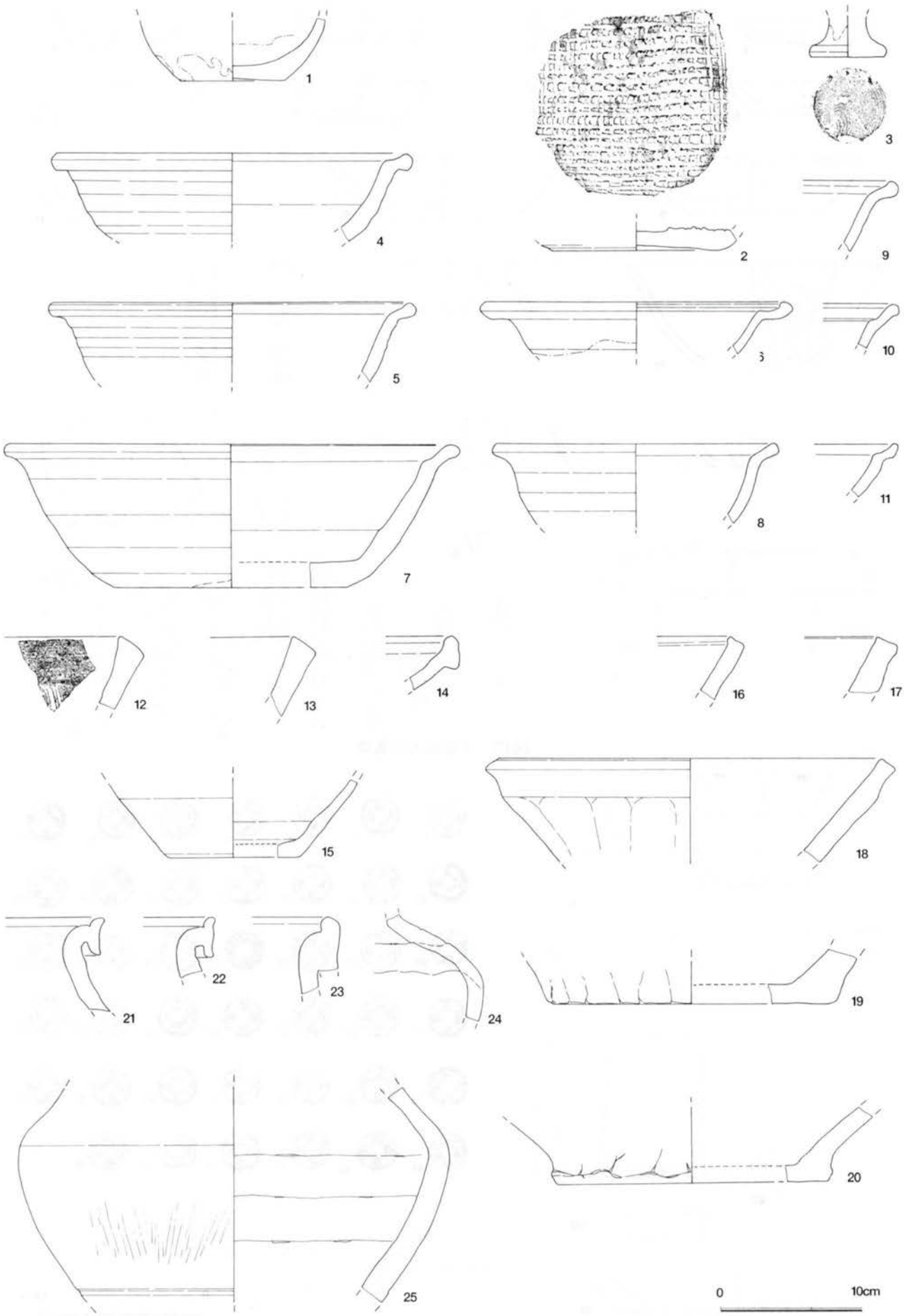


図12　1面出土の遺物

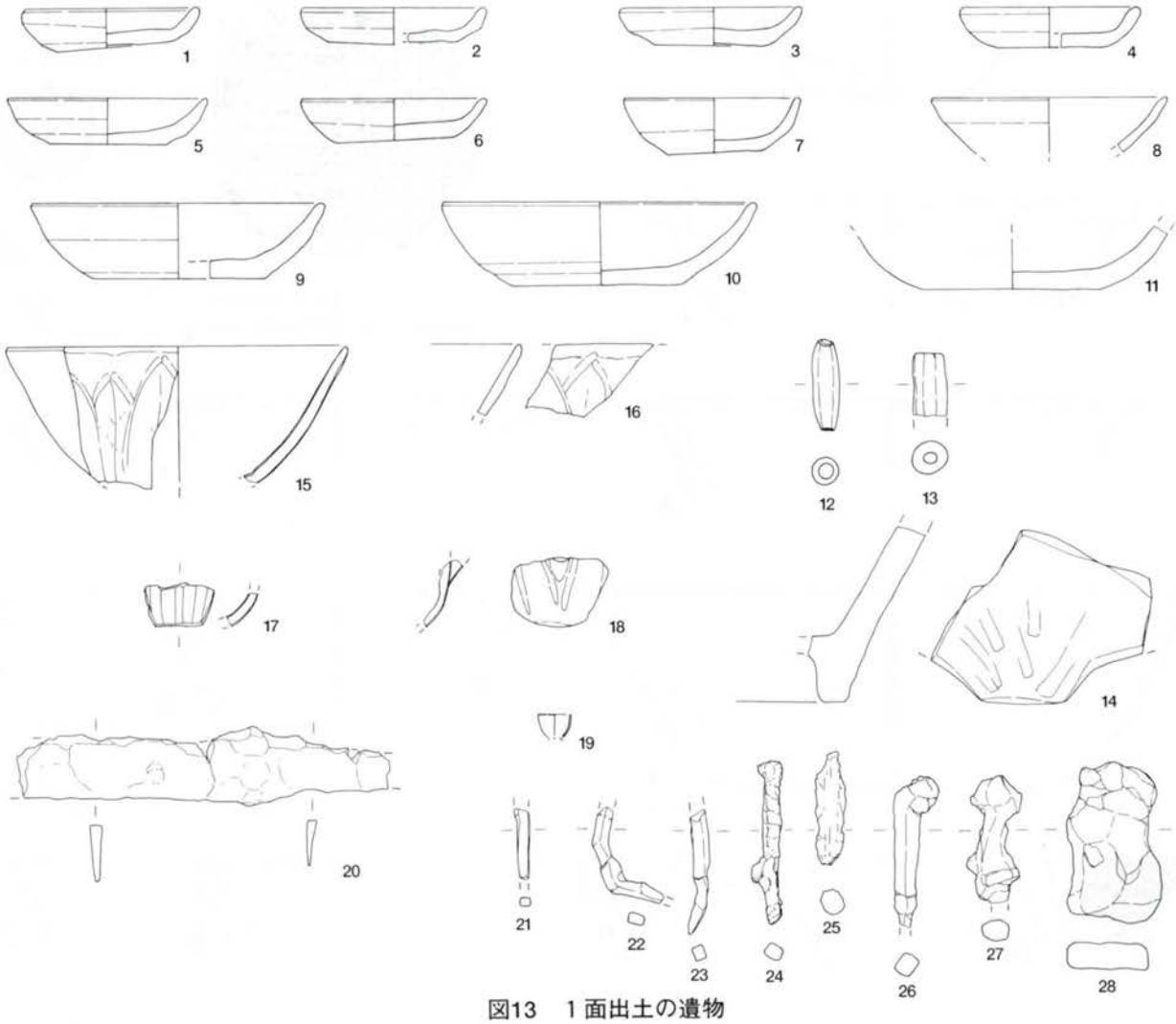


図13　1面出土の遺物

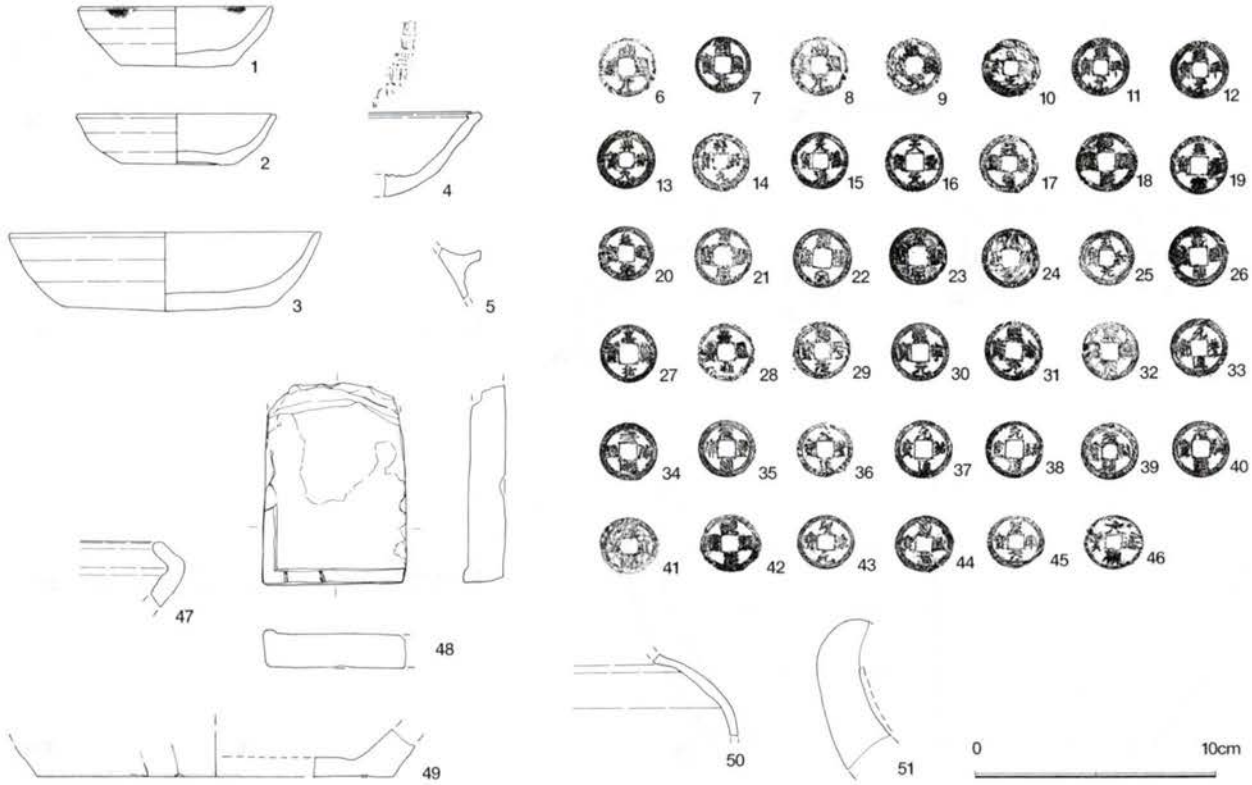


図14　1面遺構出土の遺物

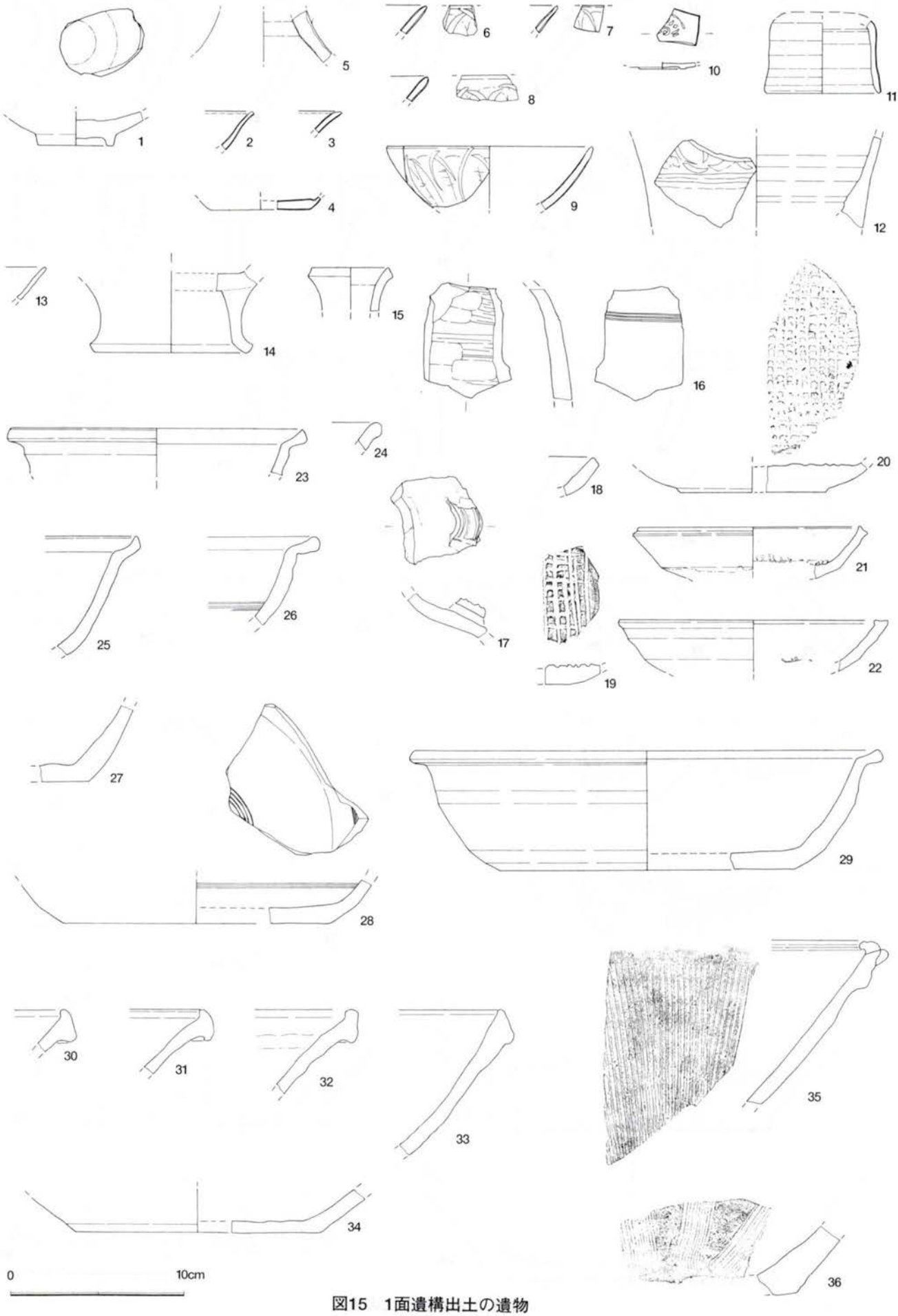


図15　1面遺構出土の遺物

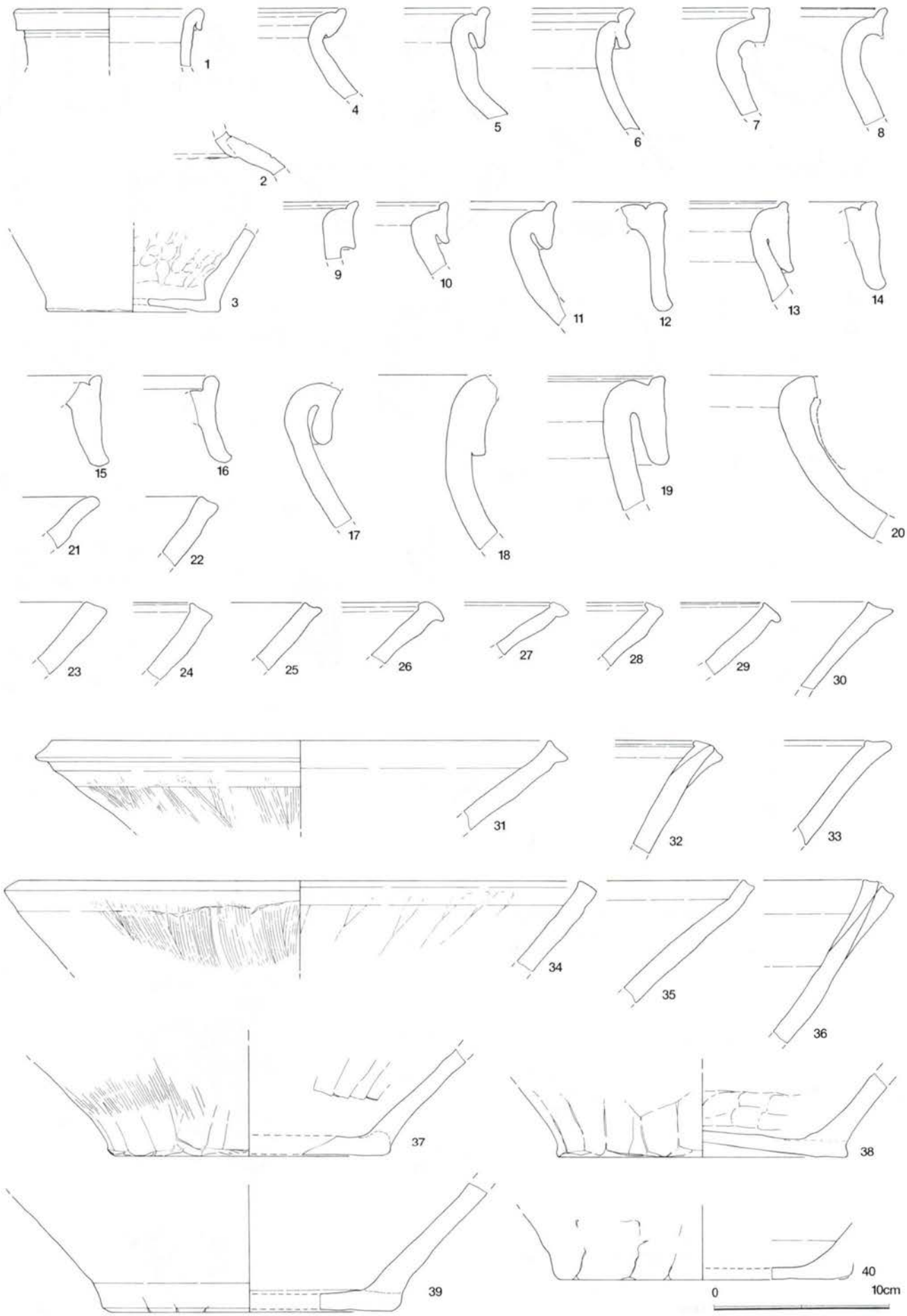


図16　1面遺構出土の遺物

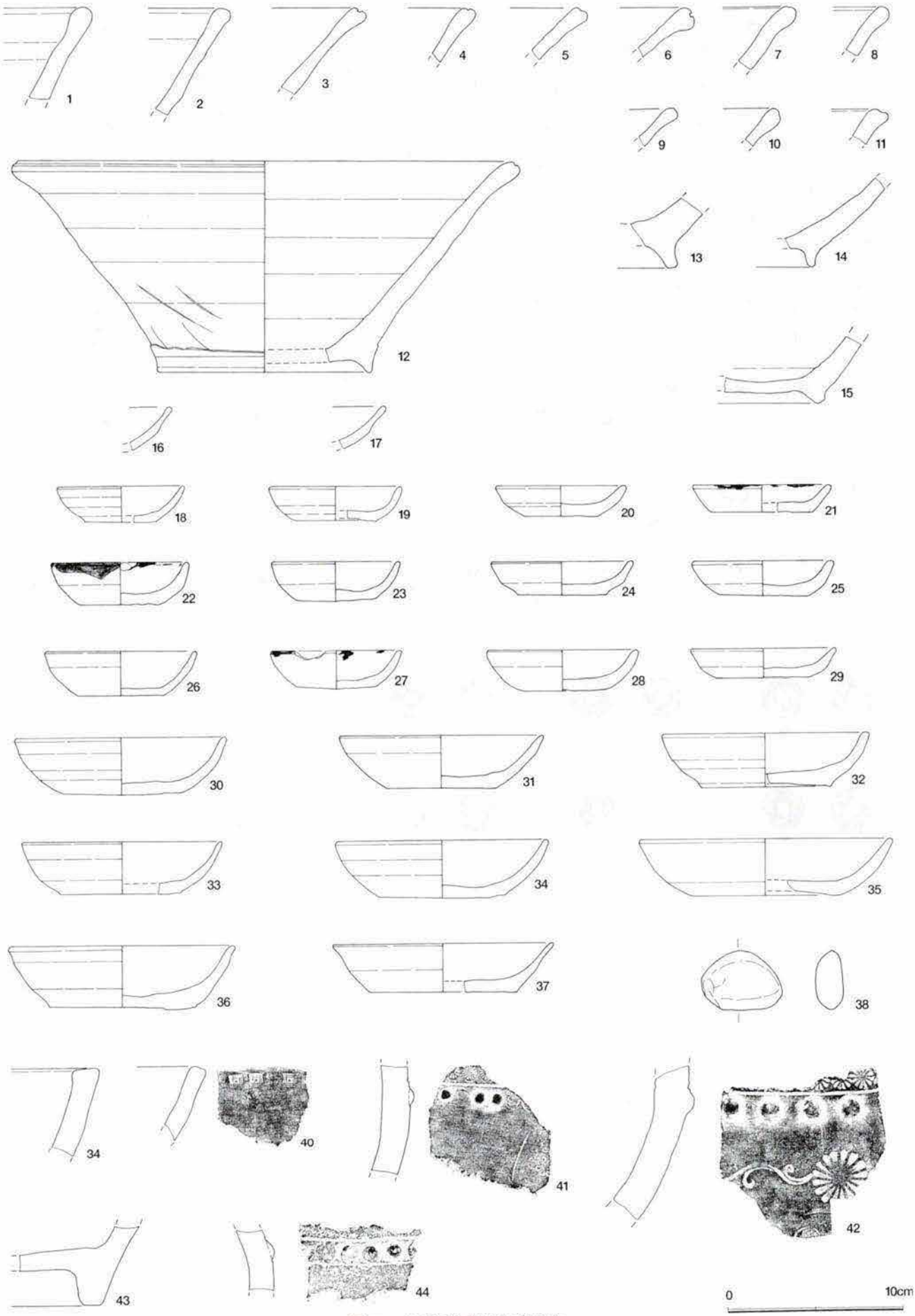


図17　1面構成土出土の遺物

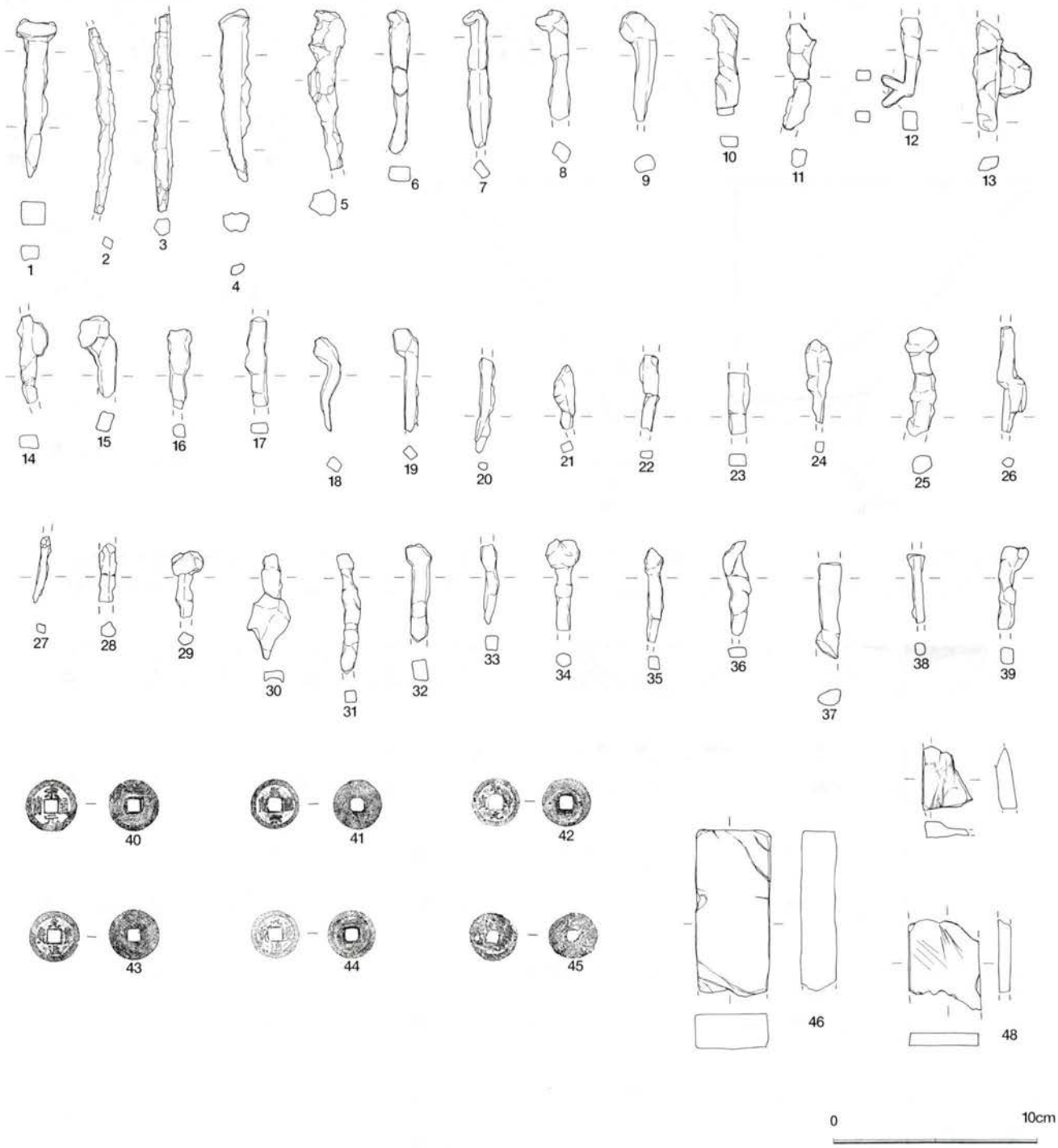


図18　1面構成土出土の遺物

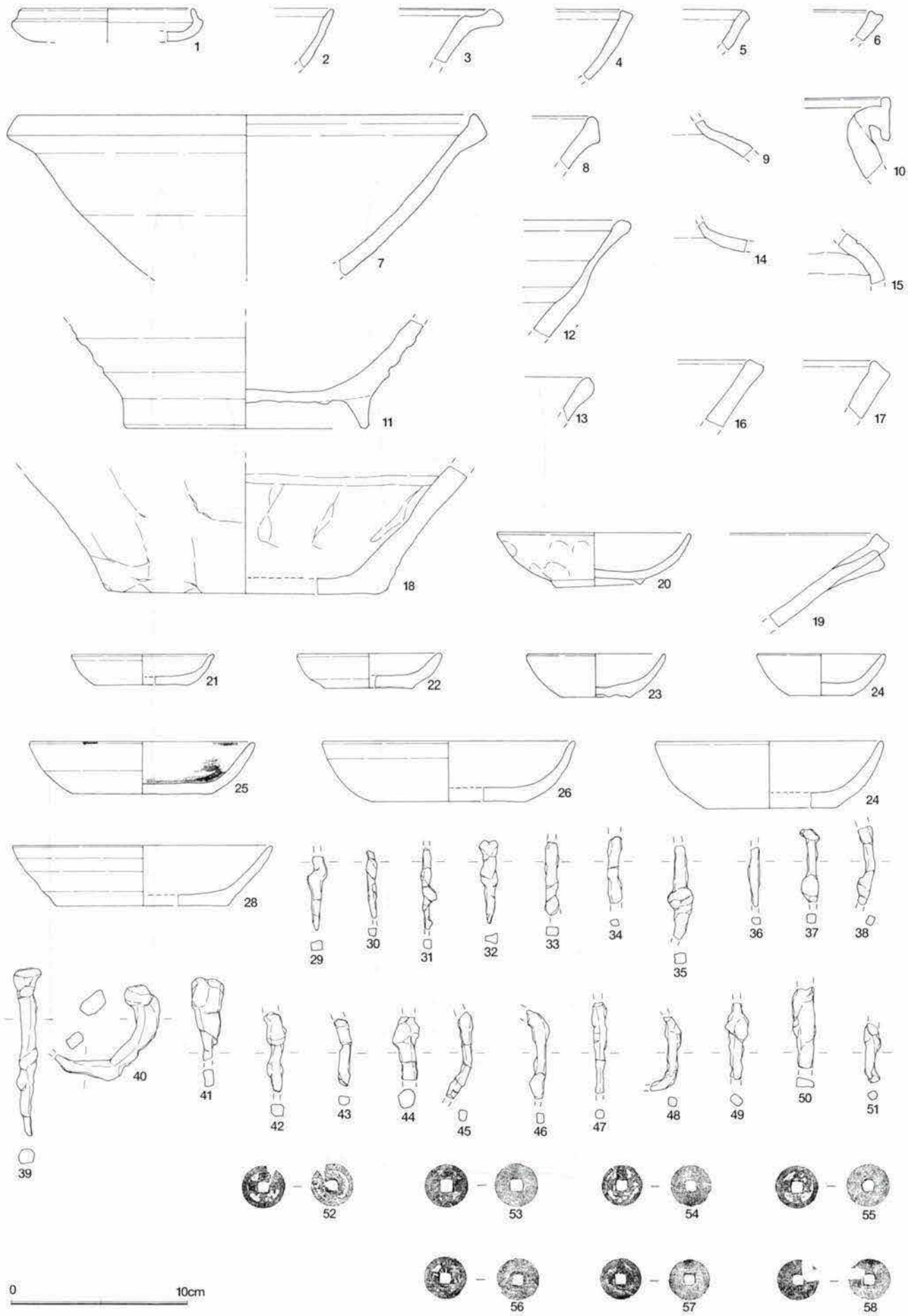

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
24
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
0
10cm

図19　2面出土の遺物

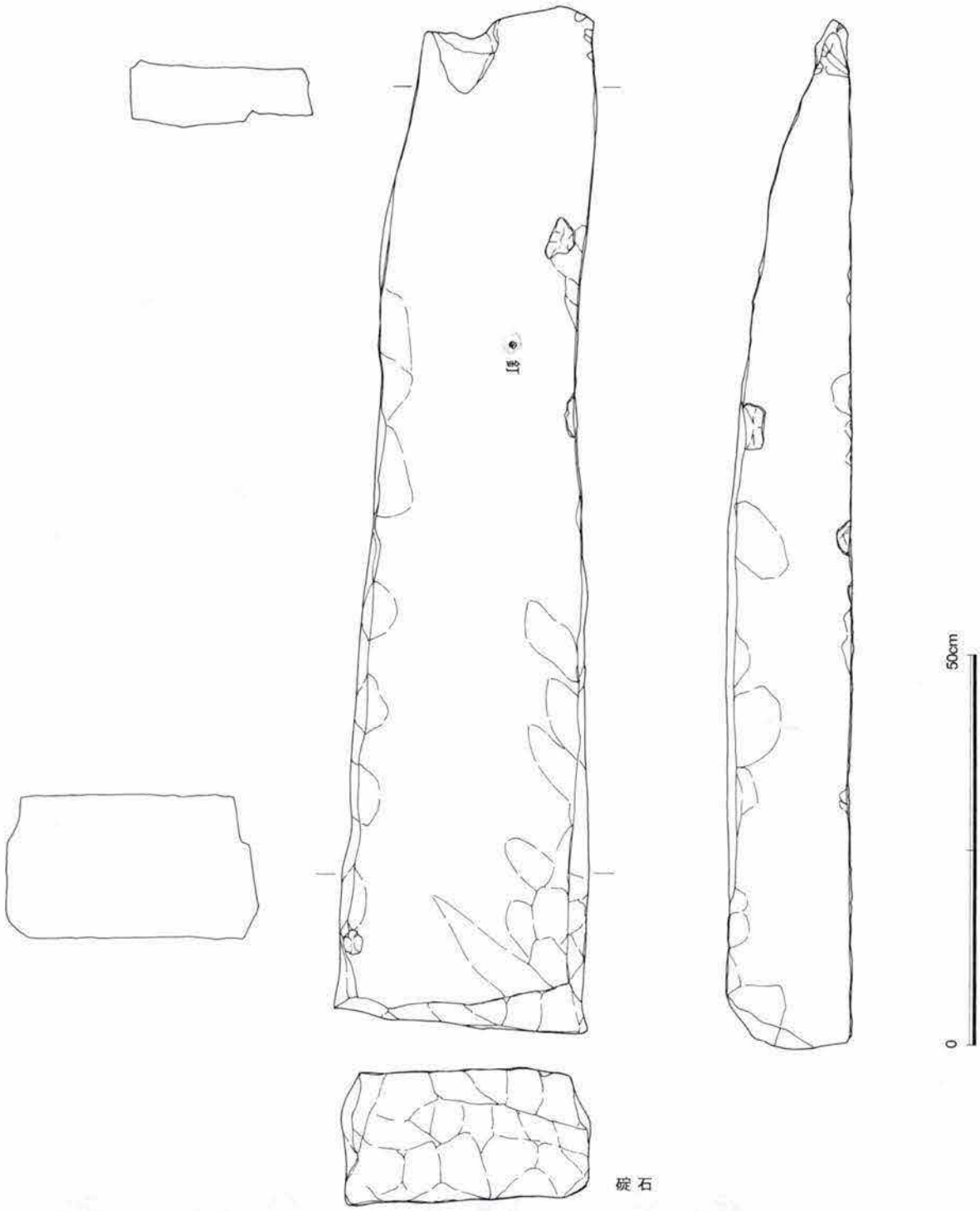


図20　2面溝状遺構出土の遺物

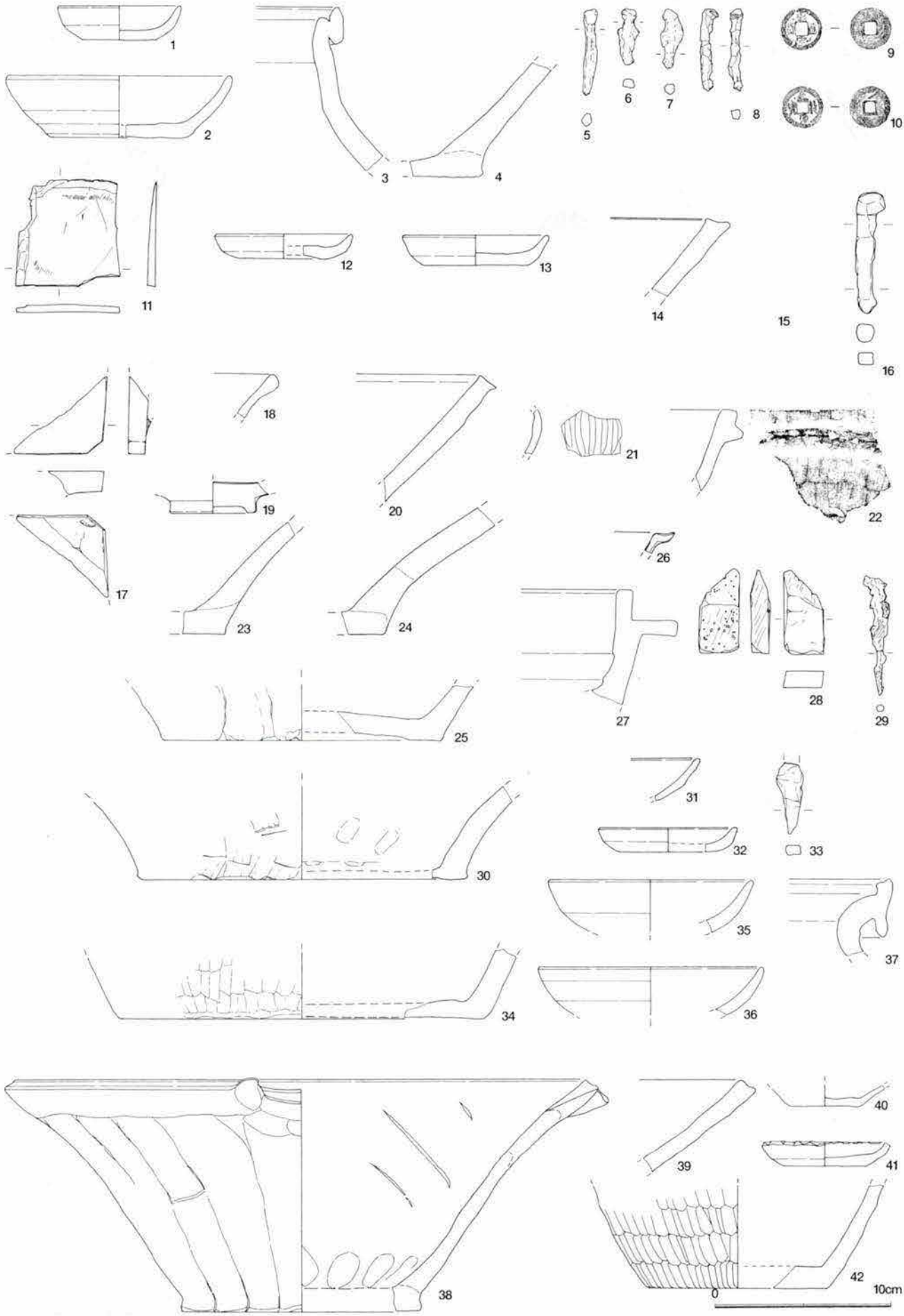


図21　2面遺構出土の遺物

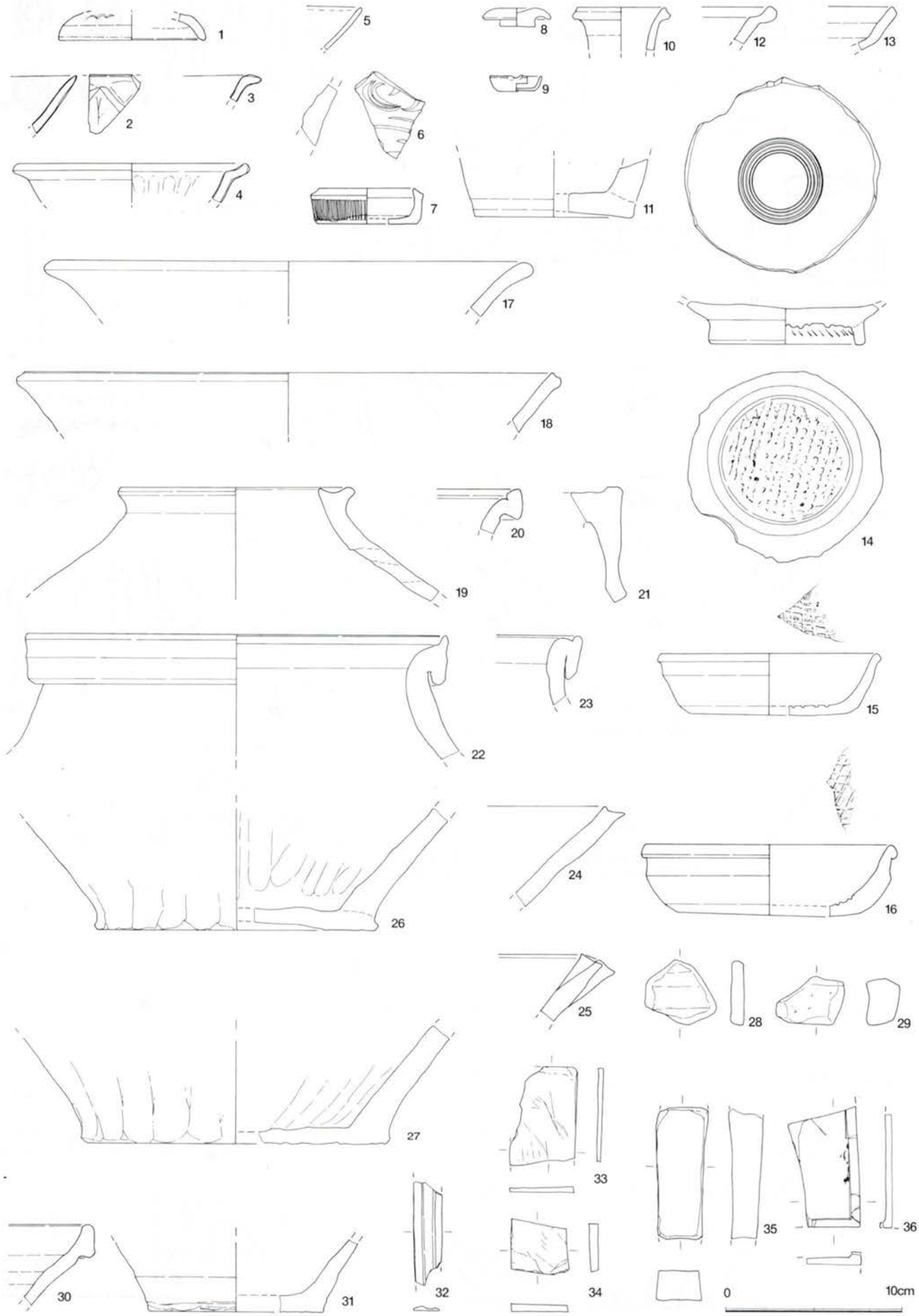


図22　2面構成土出土の遺物

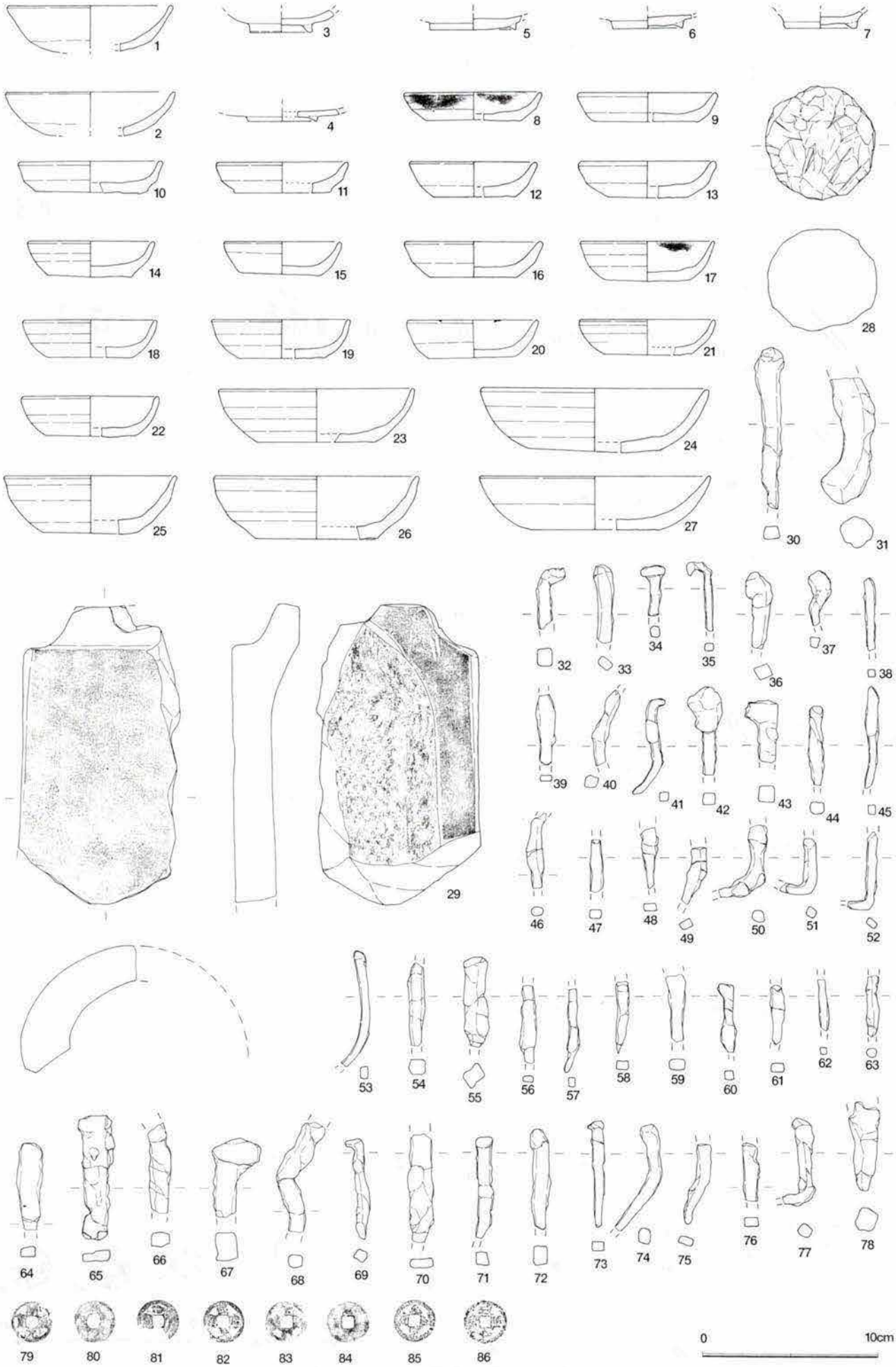


図23　2面構成土出土の遺物

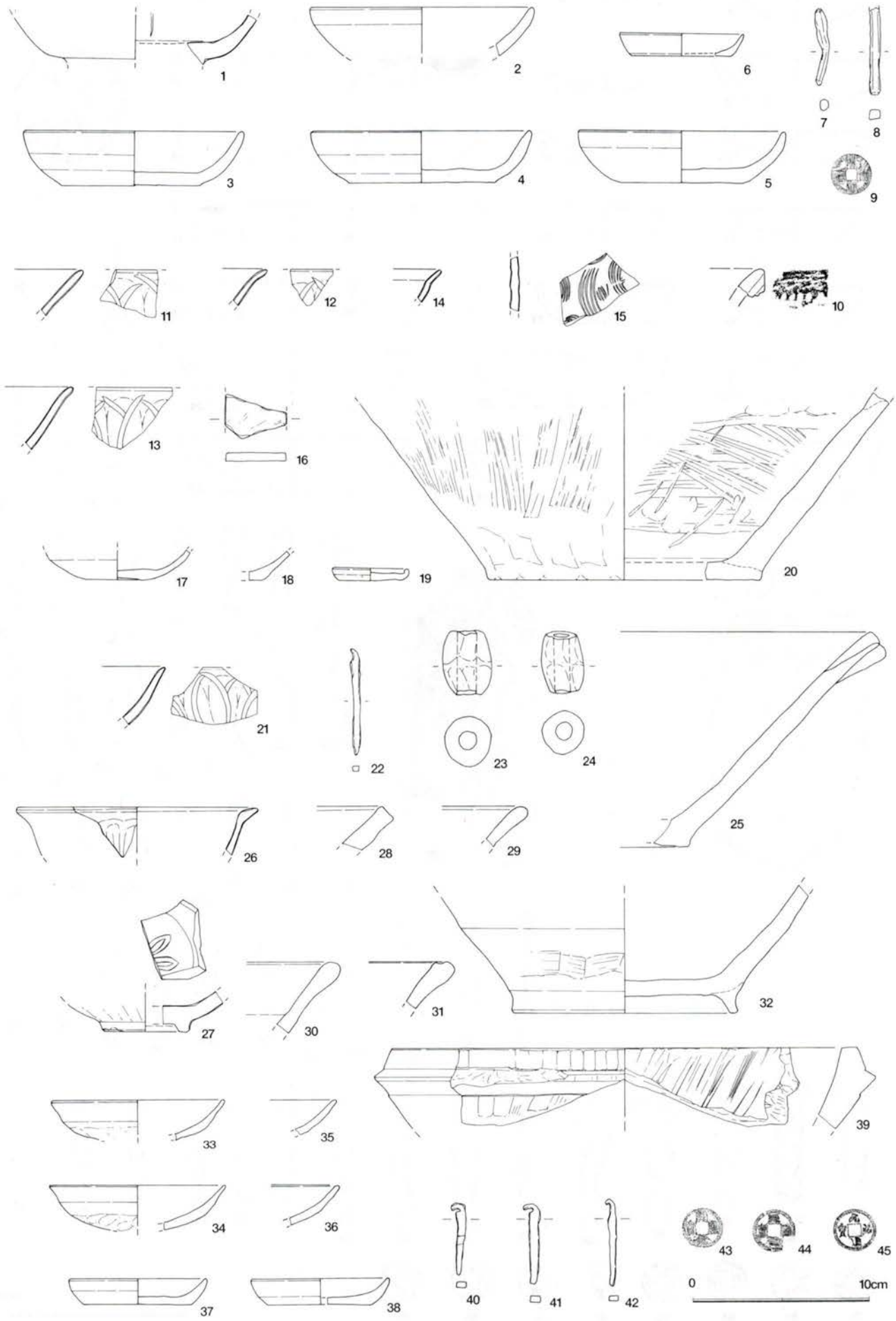


図24　3面・3面構成土出土の遺物

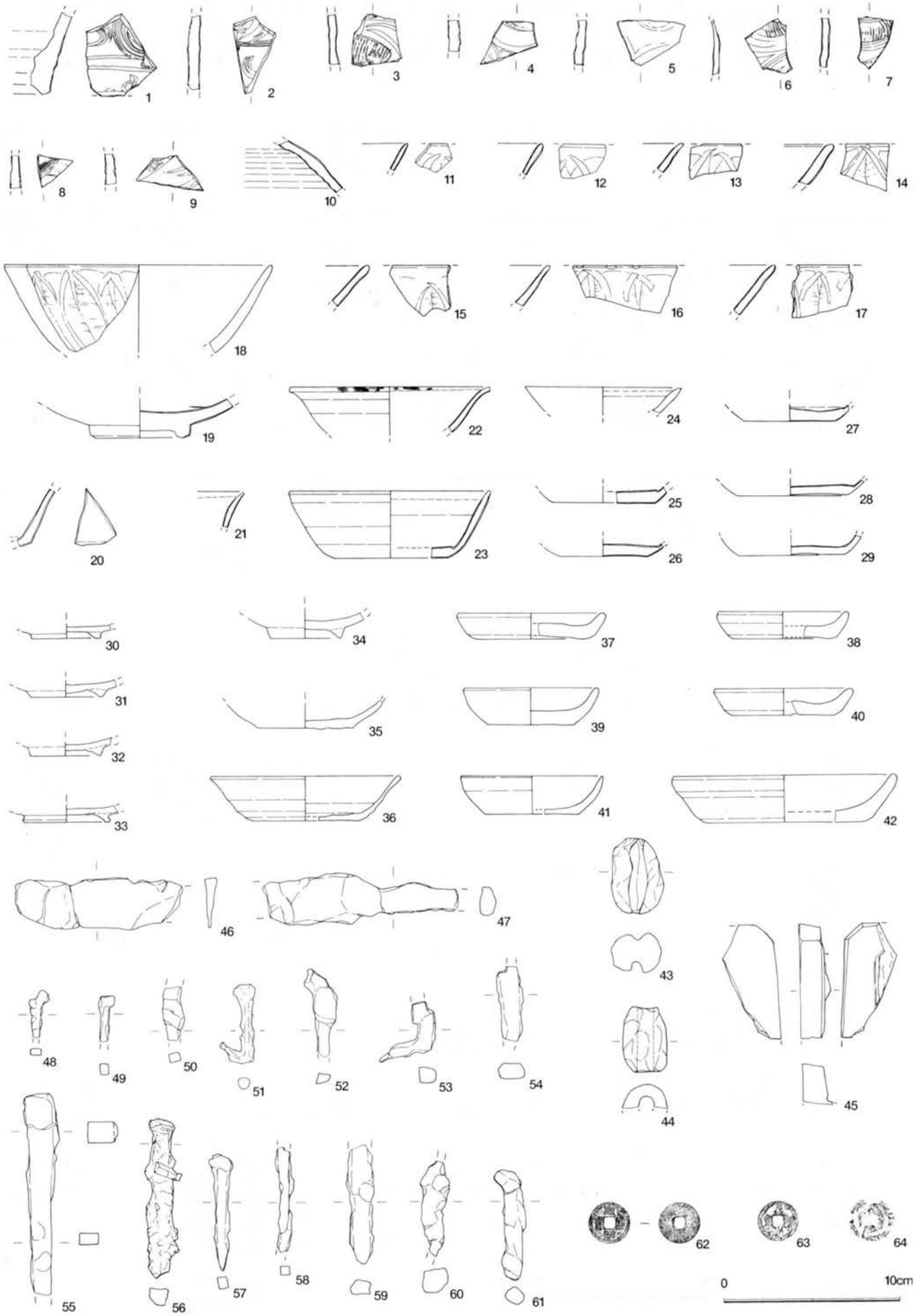


図26　3面構成土出土の遺物

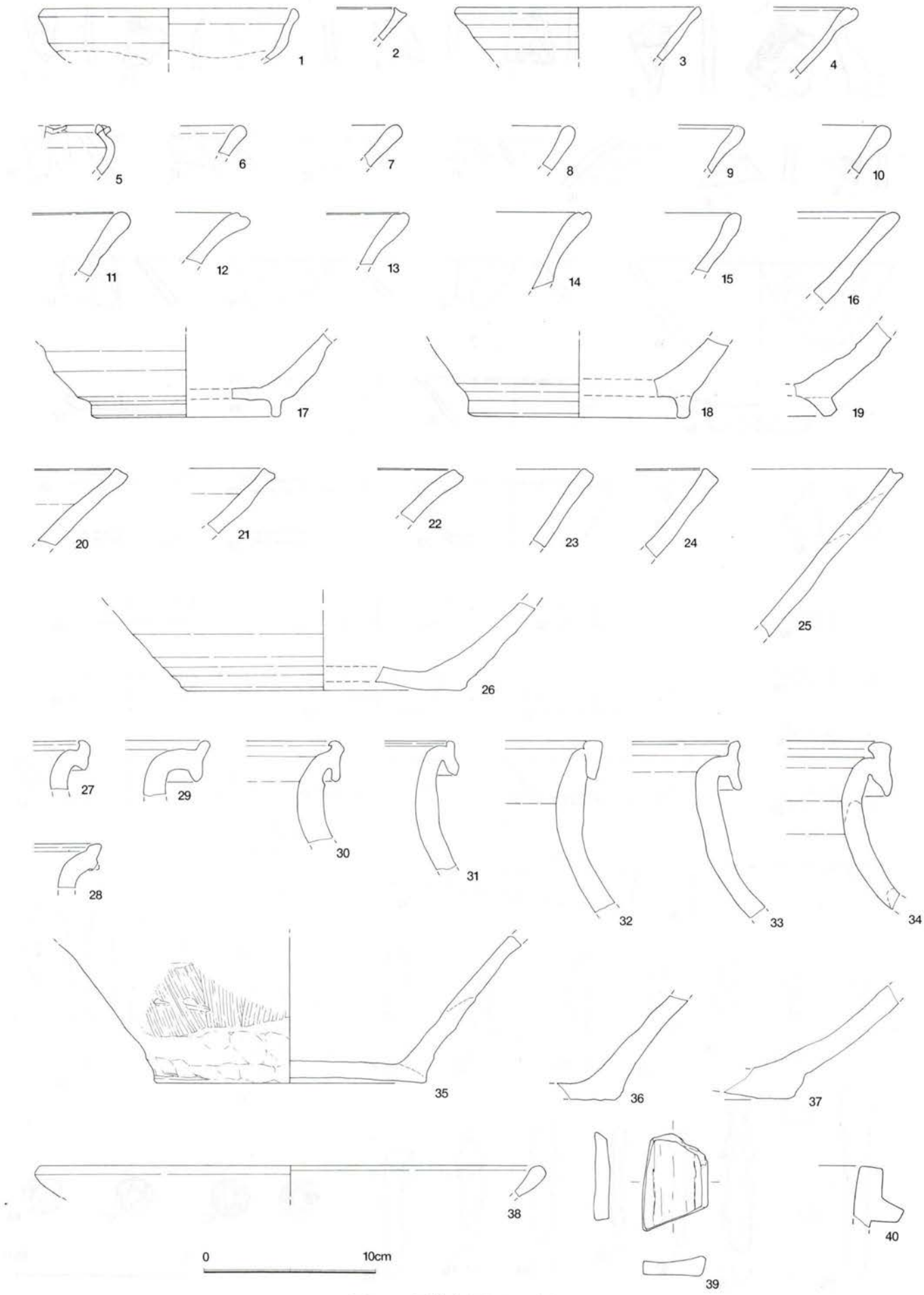


図27　3面構成土出土の遺物

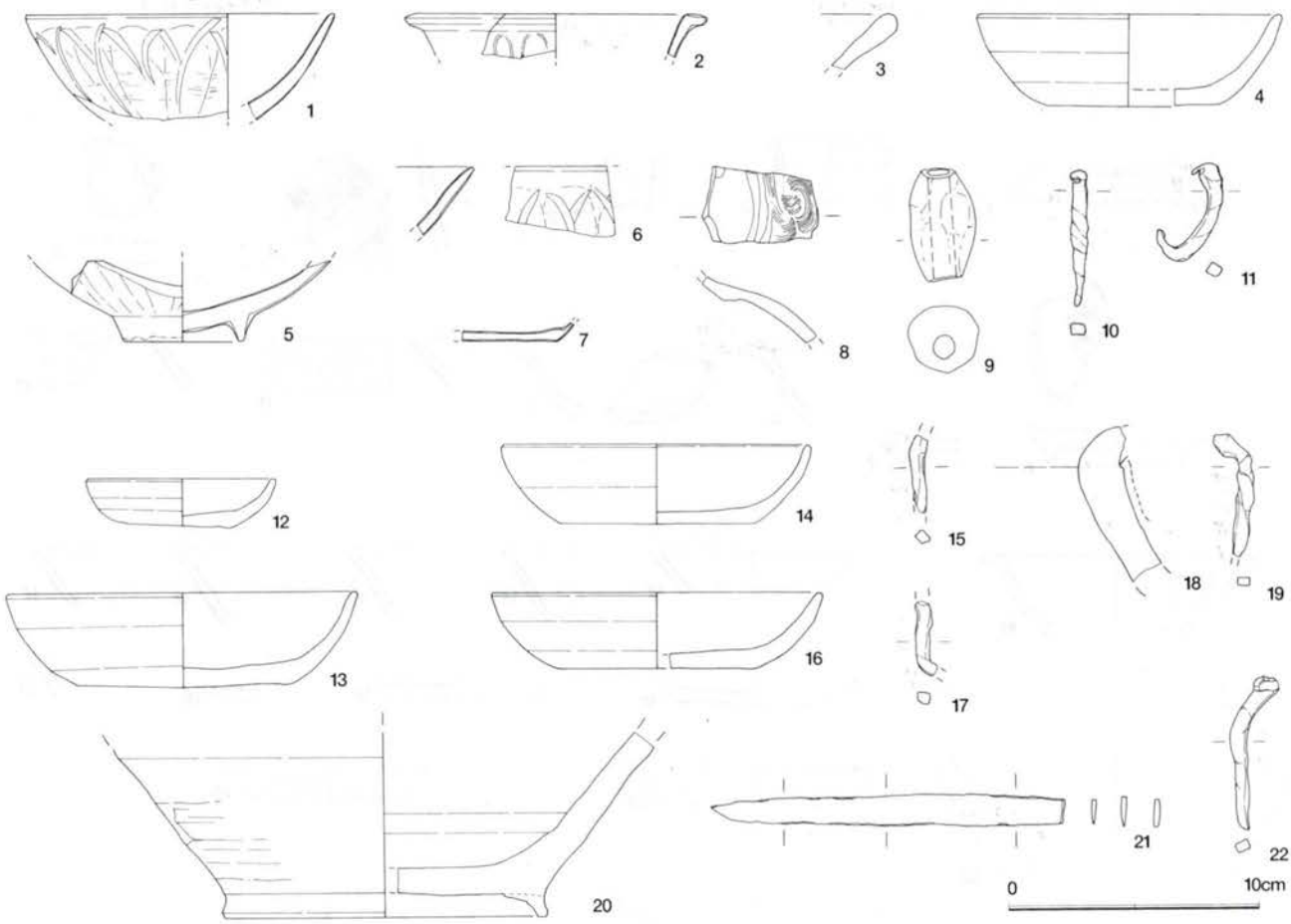


図25　3面遺構出土の遺物

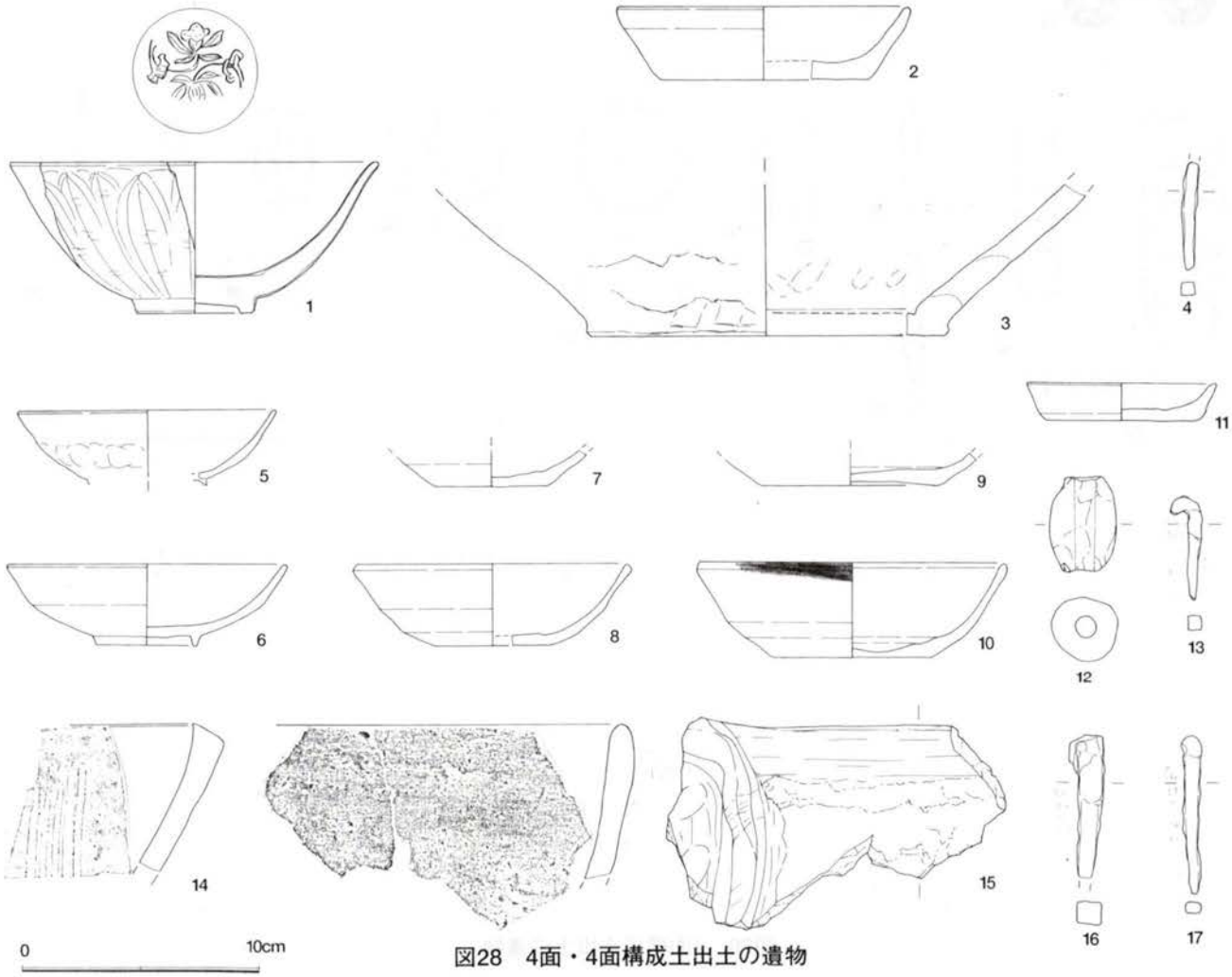


図28　4面・4面構成土出土の遺物

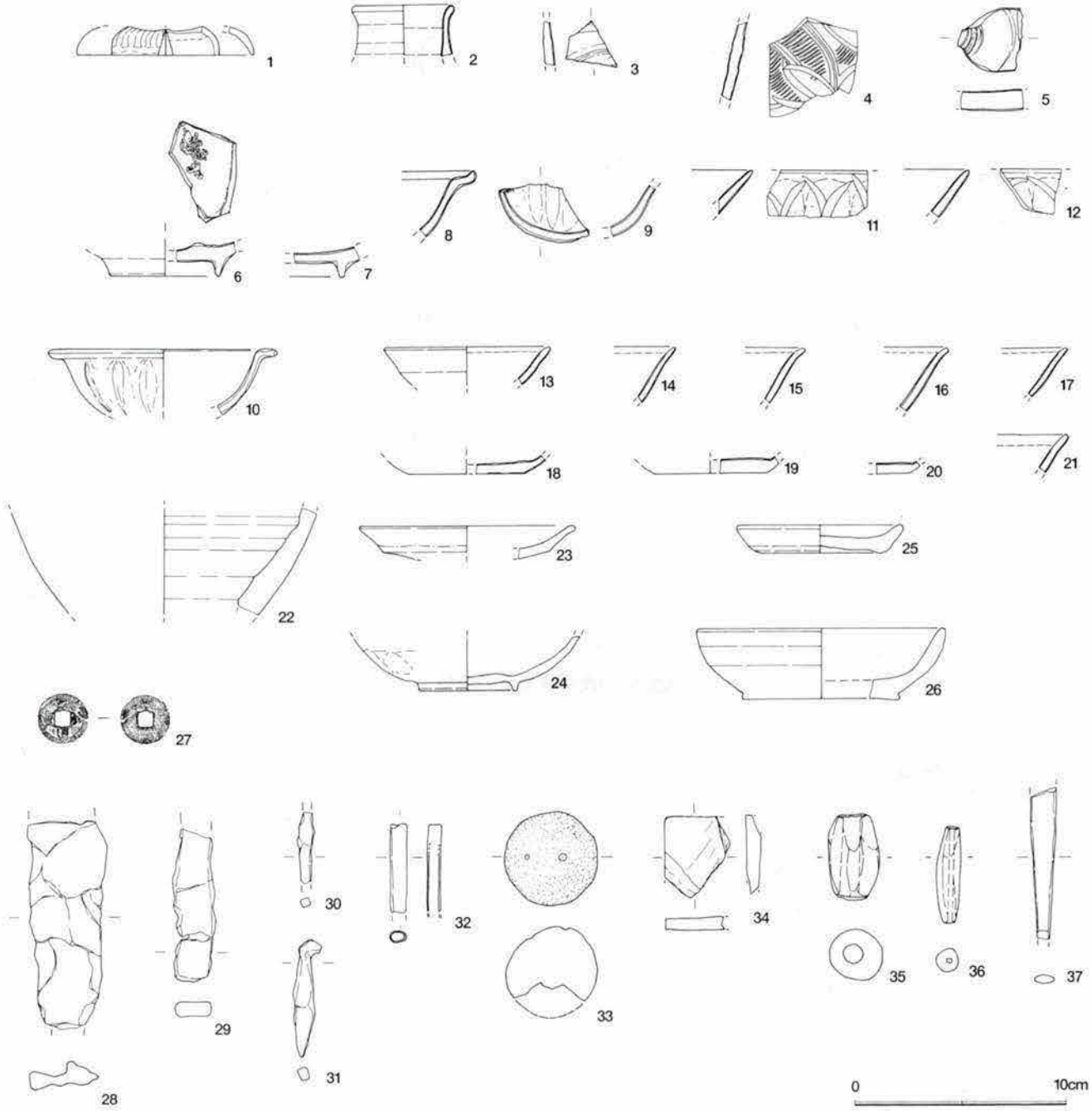


図29　4面構成土出土の遺物

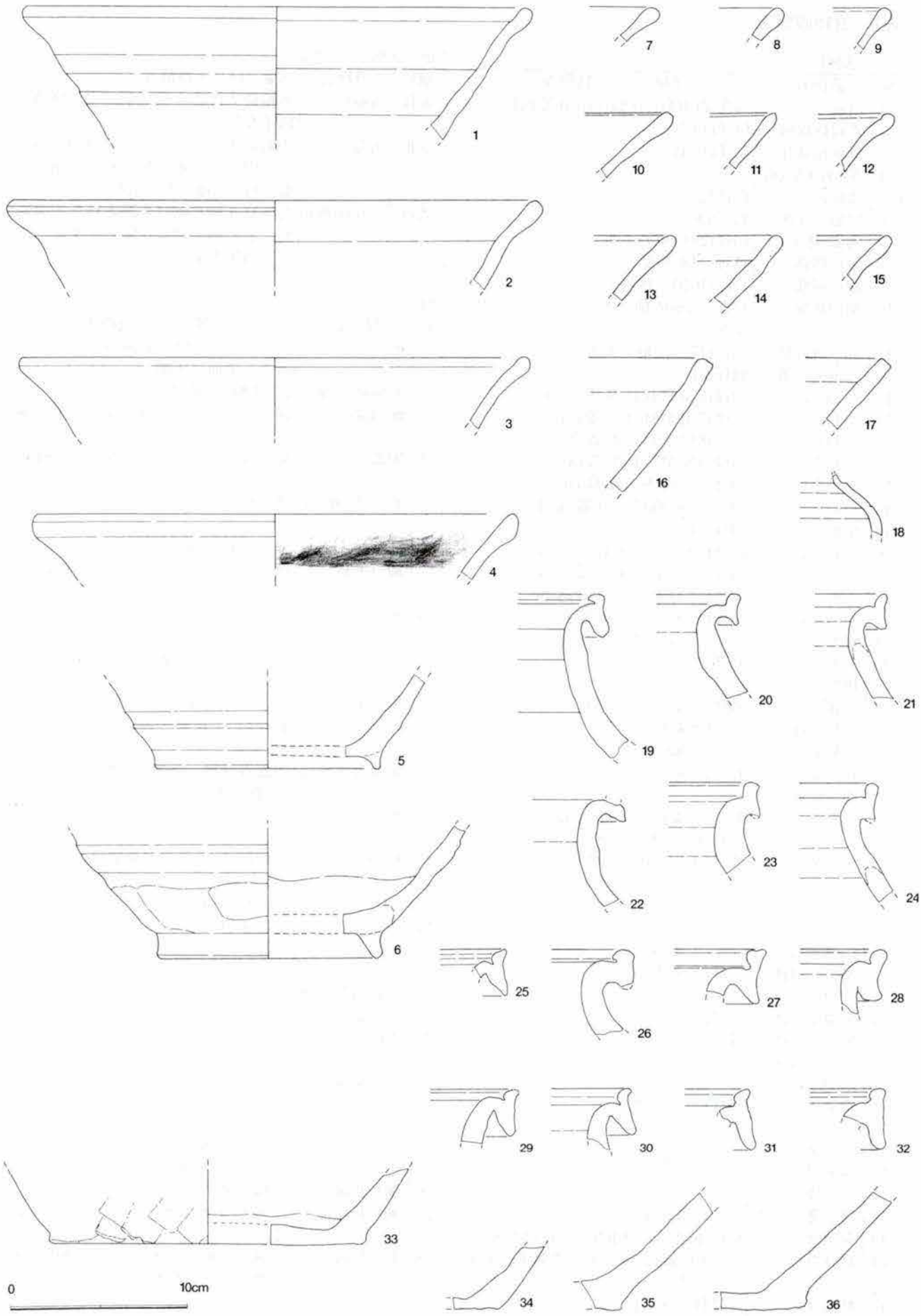


図30　4面構成土出土の遺物

表1　遺物観察表

図7　試掘1

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	白磁	口兀皿口径(8.4) 底径(6.0) 器高1.5
2	青磁折縁皿	口径(13.2)
3	青磁鎬蓮弁	口径(17.4)
4	青磁鎬蓮弁文碗	
5	青磁碗	底径4,2
6	白磁口兀皿	底径5.8
7	陶器(鉢か)	口径(25.0)産地不明。
8	瀬戸擂鉢	鉄釉。18c前葉。
9	瀬戸卸皿	口径(16.3)灰釉ハケヌリ。
10	瀬戸卸皿	口径(15.6)灰釉ハケヌリ・ツケガケ併用か。
11	瀬戸折縁皿	口径(17.5)灰釉ハケヌリ。
12	吉備系土器	底径3.3
13	かわらけ	口径(7.3) 底径(4.3) 器高2.0
14	かわらけ	口径(7.4) 底径(4.1) 器高1.9
15	かわらけ	口径(8.0) 底径(5.4) 器高2.1
16	かわらけ	口径(9.8) 底径(5.3) 器高3.4
17	かわらけ	口径10.5 底径6.1 器高3.0
18	かわらけ	口径(11.6) 底径(7.2) 器高3.1
19	かわらけ	口径(11.2)
20	かわらけ	口径(10.4) 底径(6.4) 器高2.7
21	かわらけ	口径(12.6) 底径(6.8) 器高3.4
22	かわらけ	口径(11.4) 底径(6.6) 器高3.8
23	かわらけ	口径(12.8) 底径(9.0) 器高3.3
24	かわらけ	口径(13.4) 底径(7.4) 器高3.7
25	かわらけ	底部穿孔。
26	伊勢系土鍋	口径(20.2)
27	火鉢か	底径(11.4)かわらけ質。三足付きか。
28	鉄製品(釘)	長さ6.9 幅1.2
29	鉄製品(釘)	長さ6.2 幅0.5
30	鉄製品(釘)	長さ4.9 幅0.5
31	滑石製鍋	
32	砥石	長さ6.9 幅4.0 伊予産中砥。流紋岩質粗粒凝灰岩製 4面使用。
33	土丹製品	直径13.8 厚用途不明。刃物で土丹を削り、球形に作ったもの。

図8　試掘2

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	常滑片口鉢	口径(25.8) Ⅰ類。
2	常滑片口鉢	Ⅰ類。
3	常滑片口鉢	口径(17.6) Ⅰ類。
4	常滑片口鉢	Ⅱ類。
5	常滑片口鉢	Ⅱ類。
6	常滑片口鉢	口径(25.0) Ⅱ類。
7	常滑片口鉢	口径(25.0) Ⅱ類。
8	常滑片口鉢	Ⅱ類。
9	常滑甕	
10	常滑甕	
11	常滑甕	
12	常滑甕片口鉢	Ⅱ類の可能性もある。
13	常滑甕	底径(16.0) 片口鉢Ⅱ類の可能性もある。
14	摺り常滑	長さ10.0幅11.3厚さ0.9 甕胴部片を加工したもの。
15	軒丸瓦	瓦當径12.8 三巴文。

図9　試掘3　石塔類

層位	遺物名	法量(cm)・特徴等
表採	五輪塔	水輪最大径23.8 高さ15.2 安山岩製。種子なし。
試掘	五輪塔	水輪最大径32.8 高さ20.2 安山岩製。発心門(東)の種子及び修行門(南)・涅槃門(北)の種子半分遺存する。
表採	宝筐印塔か	長さ41.5 残存幅31.2 高さ15.3 安山岩製。笠の隅飾突起を除きを平面に削った再加工品か。

図10　包含層

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	瀬戸皿器	高4.1 近現代か。底面1ヶ所にめあとあり。全面に灰釉。
2	簡易炭(土製)	長5.1 幅3.8 厚3.1 近代。
3	瀬戸美濃刷毛目鉢	刷口径(21.9) 残存部は全て灰釉を施す。18c。
4	陶器(蓋)	最大径(15.0) 口径(12.9)器高1.9産地不詳。近世末～近代。
5	瀬戸美濃鉄釉小壺	鉄口径(10.2) 外面のみ施釉。17～18c。
6	鉄釉鉢	底径(9.1) 産地不詳。近世。
7	瀬戸美濃	底径(6.8) 器種不明。外面上方は鉄釉か。近世。
8	瀬戸美濃鉢類鉢	底径6.8 内面・外面上体部に飴釉を施す。18c。
9	陶器(碗)	底径(3.2) 内底面にかさね焼痕あり。灰釉。二次焼成による白濁。近世。
10	瀬戸美濃	片口か、灰釉。18c中葉。
11	京焼風陶器碗型皿	底径(3.7) 灰釉・鉄絵。17世紀末～18c中葉。
12	肥前青緑釉皿	内面青緑釉。外面透明釉。見込み蛇ノ目釉はぎ。17c後半。
13	瀬戸美濃鉄釉碗	鉄底径4.3 残存部は内面のみ施釉。18c。
14	瀬戸美濃灯明下皿	灯口径(11.1)桟径(7.6)底径(4.9) 器高2.0 鉄釉ツケガケ。下体部は拭い取り。18c中葉。
15	かわらけ	底径(8.5) 近世。
16	かわらけ	口径(17.0) 底径(9.2)器高3.7近世。
17	青磁皿	
18	青磁劃花文碗	
19	青磁鎬蓮弁文碗	
20	青磁皿	
21	青磁皿	
22	青白磁梅瓶	
23	青白磁皿	口径(14.6)
24	白磁口兀皿	
25	瀬戸折縁皿残	存部は灰釉ツケガケ(またはナガシガケ)。二次焼成。
26	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリ。
27	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリか。二次焼成を受ける。
28	瀬戸折縁皿	灰釉。施釉方法不明。二次焼成により釉の剥落が顕著。

29	瀬戸折縁皿	
30	瀬戸折縁皿	灰釉。施釉方法不明。
31	瀬戸折縁皿	灰釉ツケガケ(ナガシガケ)。
32	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリか。
33	瀬戸皿	折縁深皿か。灰釉ツケガケ(またはナガシガケ)。
34	瀬戸皿	縁釉小皿か。残存部は内底面灰釉ハケヌリ。
35	瀬戸平碗	灰釉ツケガケか。
36	瀬戸天目碗	鉄釉。
37	瀬戸縁釉	小口径(10.4) 釉ハケヌリ・ツケガケ併用。内底に目痕。
38	瀬戸花瓶	
39	瀬戸花瓶	口径(11.0) Ⅱ類。口縁は平面輪花。灰釉。二次焼成により釉の剥落顕著。
40	瀬戸卸皿	灰釉。施釉方法不明。
41	瀬戸卸皿	灰釉。施釉方法不明。
42	瀬戸卸皿	灰釉。施釉方法不明。
43	瀬戸卸皿	残存部は灰釉ハケヌリか。
44	瀬戸卸皿	灰釉。施釉方法不明。二次焼成を受ける。
45	瀬戸卸皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用か。
46	瀬戸卸皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用か。
47	火鉢	瓦質。
48	火鉢	瓦質。下体部に沈線を設ける。三足取り付き部。
49	火鉢	瓦質。脚部。

図11　包含層

No.	遺物名	法量(cm) ・特徴等
1	常滑甕	
2	常滑甕	
3	常滑壺	
4	常滑壺	
5	常滑片口鉢	
6	常滑片口鉢	
7	常滑甕	
8	常滑甕	
9	常滑片口鉢	
10	魚住捏鉢	口径(22.6)
11	魚住捏鉢	
12	備前擂鉢	
13	備前擂鉢	口径(28.2)
14	瓦器質黒縁皿	口径(10.4)
15	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.8) 器高1.6
16	かわらけ	口径(7.2) 底径5.3 器高1.5
17	かわらけ	口径7.2 底径4.3 器高2.2 口縁煤付着。
18	かわらけ	口径(8.3) 底径(5.0) 器高2.4
19	かわらけ	口径(10.2) 底径(5.6) 器高3.1
20	かわらけ	口径(13.6) 底径(9.1) 器高3.2
21	かわらけ	口径(12.1) 底径(6.4) 器高3.6
22	かわらけ	口径(11.7) 底径(7.3) 器高3.6
23	かわらけ	口径(13.6) 底径(8.5) 器高3.1
24	かわらけ	口径13.7 底に径約0.1の穿孔。
25	かわらけ	口径(14.0) 底径(8.0) 器高3.8
26	かわらけ	口径(14.0) 底径(8.8)器高3.3
27	土錘	残長2.8 幅2.2 孔径0.9 かわらけ質。
28	土錘	長さ4.1 幅2.3 孔径0.7 かわらけ質。
29	鉄製品(釘)	残長5.1 幅0.6
30	鉄製品(釘)	残長4.9 幅1.3
31	鉄製品(釘)	残長4.0 幅0.5
32	鉄製品(釘)	残長4,5 幅0.8
33	鉄製品(釘)	残長4.7 幅0.8
34	鉄製品(釘)	残長3.8 幅0.9
35	鉄製品(釘)	残長3.5 幅1.0
36	鉄製品(釘)	残長3.7 幅0.8
37	鉄製品(釘)	残長3.6 幅0.4
38	鉄製品(釘)	残長3.5 幅1.2
39	鉄製品(釘)	残長3.0 幅0.6
40	鉄製品(釘)	残長3.1 幅0.8
41	銭 開元通宝	外径2.46 方穿径0.70 厚0.13真書。初鋳621年(唐)。
42	銭 至道元宝	外径2.47 方穿径0.56 厚0.13行書。初鋳995年(北宋)。
43	銭 祥府元宝	外径2.47 方穿径0.60 厚0.10真書。初鋳1009年(北宋)。
44	銭 天聖元宝	外径2.41 方穿径0.64 厚0.13篆書。初鋳1023年(北宋)。
45	銭 熙寧元宝	外径2.38 方穿径0.69 厚0.17真書。初鋳1068年(北宋)。
46	銭 元豊通宝	外径2.55 方穿径0.66 厚0.13行書。初鋳1078年(北宋)。
47	銭 寛永通宝	外径2.48 方穿径0.56 厚0.11初鋳1626年(日本)。
48	骨加工品	長さ7.5 幅3.5 厚さ3.4
49	骨加工品	長さ3.5 幅3.5 厚さ3.7
50	骨加工品	長さ4.3 幅4.1 厚さ2.6
51	砥石	長さ8.0 幅2.5 厚さ2.1 中砥。流紋岩質凝灰岩製。4面使用。小口は残らない。
52	砥石	長さ5.6 幅4.5 厚さ1.1 中砥。流紋岩質凝灰岩製。4面使用。片側面は生産時の切り出し痕が残る。小口も研磨。
53	砥石	残長5.1 残存幅3.2 残存厚1.0鳴滝産仕上砥。片側面・小口1面が残る。使用面は被熱によりはぜて欠損。

図12　1面

No.	遺物名	法量(cm) ・特徴等
1	瀬戸	底径(5.8)火入れ・灰落し等か。胎土は灰白色、やや粗い。内面・外面とも鉄釉ナガシガケ。
2	瀬戸卸皿	底径9.6灰釉ツケガケ。内底部摩耗せず。底面4箇所にトチ痕あり。
3	瀬戸花瓶	底径4.2 Ⅰ類。鉄釉。
4	瀬戸折縁皿	口径(20.0) 灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)。
5	瀬戸折縁皿	口径(20.4) 灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)。

6	瀬戸折縁皿	口径(17.6) 灰釉ツケガケ(またはナガシガケ)。外面下体部は釉がかからない。
7	瀬戸折縁皿	口径(25.2) 灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)。
8	瀬戸折縁皿	口径(15.8) 灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)。
9	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用。
10	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用。
11	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用か。
12	備前擂鉢	口縁部片。13と同一個体か。
13	備前擂鉢	
14	魚住捏鉢	
15	魚住捏鉢	
16	常滑片口鉢	Ⅱ類
17	常滑片口鉢	Ⅱ類
18	常滑片口鉢	Ⅱ類
19	常滑片口鉢	Ⅱ類
20	常滑片口甕	片口鉢Ⅱ類の可能性もある。
21	常滑甕	広口壺の可能性もある。22と同一個体か。
22	常滑甕	
23	常滑甕	
24	常滑玉縁口縁壺	肩部に2条の沈線あり。
25	常滑広口壺	

図13　1面

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	かわらけ	口径7.8 底径5.8 器高1.7
2	かわらけ	口径7.4 底径5.4 器高1.5
3	かわらけ	口径7.7 底径5.3 器高1.6
4	かわらけ	口径(7.6) 底径4.7 器高1.3
5	かわらけ	口径8.6 底径5.0 器高2.0
6	かわらけ	口径8.0 底径5.1 器高1.8
7	かわらけ	口径7.6 底径4.2 器高3.4
8	かわらけ	口径(10.2)
9	かわらけ	底径(7.8)
10	かわらけ	口径13.6 底径7.3 器高3.6
11	かわらけ	口径(12.8) 底径(7.4) 器高3.2
12	土錘	長さ4.0 幅1.2 孔径0.6
13	土錘	残長2.8 幅1.5 孔径0.5
14	火鉢	脚部片。瓦質輪花形。
15	青磁蓮弁文碗	口径(14.8) 龍泉窯産。釉調は透明。粗い貫入あり。
16	青磁蓮弁文碗	龍泉窯産。二次焼成を受けたものか。
17	青磁鉢	龍泉窯産。内面蓮弁文。
18	青白磁水注か	景徳鎮窯産。二次焼成を受けたものか。
19	煙管雁首	口径1.5 残孔銅製。
20	鉄製品(刀子)	残長16.6 幅2.5
21	鉄製品(釘)	残長3.0
22	鉄製品(釘)	残長5.7
23	鉄製品(釘)	残長5.5
24	鉄製品(釘)	残長7.2
25	鉄製品(釘)	残長4.9
26	鉄製品(釘)	残長6.6
27	鉄製品(釘)	残長4.5
28	鉄製品	残長7.0 幅3.6

図14　1面遺構

No.	遺構	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	落ち込み1	かわらけ	口径(8.1) 底径(4.8)器高2.4
2	落ち込み1	かわらけ	口径(8.3) 底径(4.7) 器高2.0
3	落ち込み1	かわらけ	口径(13.0) 底径(8.5)器高3.3
4	落ち込み1	瀬戸卸皿	
5	落ち込み1	伊勢系土鍋	
6	落ち込み1	銭 開元通宝	外径2.45 方穿径0.70厚0.12 真書 初鋳621年(唐)。
7	落ち込み1	銭 開元通宝	外径2.40 方穿径0.65厚0.13 真書 初鋳621年(唐)。
8	落ち込み1	銭 開元通宝	外径2.52 方穿径0.62厚0.12 真書 初鋳621年(唐)。
9	落ち込み1	銭 開元通宝	外径2.41 方穿径0.70厚0.15 真書 初鋳621年(唐)。
10	落ち込み1	銭 至道元宝	外径2.46 方穿径0.61厚0.12 行書 初鋳995年(北宋)。
11	落ち込み1	銭 咸平元宝	外径2.50 方穿径0.56厚0.18 真書 初鋳998年(北宋)。
12	落ち込み1	銭 咸平元宝	外径2.49 方穿径0.57厚0.14 真書 初鋳998年(北宋)。
13	落ち込み1	銭 祥符元宝	外径2.48 方穿径0.62厚0.13 真書 初鋳1008年(北宋)。
14	落ち込み1	銭 祥符元宝	外径2.53 方穿径0.55厚0.14 真書 初鋳1008年(北宋)。
15	落ち込み1	銭 天禧通宝	外径2.42 方穿径0.63厚0.12 真書 初鋳1017年(北宋)。
16	落ち込み1	銭 天聖元宝	外径2.51 方穿径0.68厚0.17 真書 初鋳1023年(北宋)。
17	落ち込み1	銭 天聖元宝	外径2.55 方穿径0.60厚0.13 真書 初鋳1023年(北宋)。
18	落ち込み1	銭 明道元宝	外径2.63 方穿径0.75厚0.14 篆書 初鋳1032年(北宋)。
19	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.48 方穿径0.68厚0.13 真書 初鋳1038年(北宋)。
20	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.39 方穿径0.64厚0.12 真書 初鋳1038年(北宋)。

21	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.46 方穿径0.74厚0.11 篆書 初鋳1038年(北宋)。
22	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.50 方穿径0.72厚0.11 篆書 初鋳1038年(北宋)。
23	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.45 方穿径0.72厚0.12 篆書 初鋳1038年(北宋)。
24	落ち込み1	銭 皇宋通宝	外径2.55 方穿径0.67厚0.14 真書 初鋳1038年(北宋)。
25	落ち込み1	銭 至和元宝	外径2.30 方穿径0.64厚0.13 真書 初鋳1045年(北宋)。
26	落ち込み1	銭 嘉祐通宝	外径2.56 方穿径0.71厚0.10 篆書 初鋳1056年(北宋)。
27	落ち込み1	銭 嘉祐通宝	外径2.42 方穿径0.76厚0.13 真書 初鋳1056年(北宋)。
28	落ち込み1	銭 嘉祐通宝	外径2.43 方穿径0.71厚0.14 真書 初鋳1056年(北宋)。
29	落ち込み1	銭 治平元宝	外径2.45 方穿径0.70厚0.14 篆書 初鋳1064年(北宋)。
30	落ち込み1	銭 熙寧元宝	外径2.50 方穿径0.68厚0.12 真書 初鋳1068年(北宋)。
31	落ち込み1	銭 熙寧元宝	外径2.50 方穿径0.72厚0.11 真書 初鋳1068年(北宋)。
32	落ち込み1	銭 熙寧元宝	外径2.51 方穿径0.65厚0.13 篆書 初鋳106年(北宋)。
33	落ち込み1	銭 元豊通宝	外径2.43 方穿径0.66厚0.11 行書 初鋳1078年(北宋)。
34	落ち込み1	銭 元豊通宝	外径2.46 方穿径0.65厚0.15 篆書 初鋳1078年(北宋)。
35	落ち込み1	銭 元豊通宝	外径2.40方穿径0.65厚さ0.16 篆書 初鋳1078年(北宋)。
36	落ち込み1	銭 元豊通宝	外径2.52 方穿径0.68厚0.15 行書 初鋳1078年(北宋)。
37	落ち込み1	銭 元祐通宝	外径2.46 方穿径0.69厚0.13 行書 初鋳1086年(北宋)。
38	落ち込み1	銭 元祐通宝	外径2.43 方穿径0.62厚0.13 行書 初鋳1086年(北宋)。
39	落ち込み1	銭 元祐通宝	外径2.40 方穿径0.65厚0.17 篆書 初鋳1086年(北宋)。
40	落ち込み1	銭 元祐通宝	外径2.47 方穿径0.61厚0.13 篆書 初鋳1086年(北宋)。
41	落ち込み1	銭 元祐通宝	外径2.48 方穿径0.64厚0.13 行書 初鋳1086年(北宋)。
42	落ち込み1	銭 紹聖元宝	外径2.45 方穿径0.65厚0.14 篆書 初鋳1094年(北宋)。
43	落ち込み1	銭 聖宋元宝	外径2.46 方穿径0.58厚0.12 行書 初鋳1101年(北宋)。
44	落ち込み1	銭 聖宋元宝	外径2.41 方穿径0.15厚0.18 篆書 初鋳1101年(北宋)。
45	落ち込み1	銭 聖宋元宝	外径2.47 方穿径0.60厚0.15 篆書 初鋳1101年(北宋)。
46	落ち込み1	銭 大観通宝	外径2.43 方穿径0.62厚0.15 真書 初鋳1107年(北宋)。
47	ピット3	常滑片口碗	
48	ピット3	硯	残長8.0残幅6.0厚1.6
49	ピット3	常滑甕	底径(15.0)
50	ピット4	陶器	
51	ピット4	常滑甕	

図15　1面構成土

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	肥前磁器	底径4.4 染付碗。見込み蛇の目釉はぎ。18c代。
2	白磁口兀皿	
3	白磁口兀皿	
4	白磁口兀皿	底径5.8
5	青磁壺	部片。取手等が取付いていたか淡色。釉層が厚い。外面被熱。
6	青磁鎬蓮弁文碗	
7	青磁鎬蓮弁文碗	
8	青磁鎬蓮弁文碗	
9	青磁鎬蓮弁文碗	口径(12.0)
10	青白磁小皿	底径2.7 外面下体部は露胎。
11	青白磁瓶蓋	口径(6.4) 器高4.5程度 内面露胎。
12	青白磁梅瓶	
13	瀬戸入子	
14	瀬戸花瓶	底径(8.8) Ⅱ類か 灰釉のナガシガケ、熱による剥離が著しい。
15	瀬戸瓶子	口径4.4 灰釉 施釉方法不明。
16	瀬戸壺	体部に3本の条線あり。灰釉ガシガケ ハケヌリも併用か。
17	瀬戸壺	灰釉。耳は型作りのものを貼りつけている。
18	瀬戸卸皿	灰釉。被熱による釉の剥離が見られる。
19	瀬戸卸皿	残存部では釉は殆ど残らない。
20	瀬戸卸皿	底径(8.5) 灰釉ハケヌリ・ツケガケ(ナガシガケ)併用か。
21	瀬戸卸皿	口径(13.2) 灰釉ツケガケ。
22	瀬戸卸皿	口径(15.6)灰釉ハケヌリ。

23	瀬戸折縁Ⅲ	口径(16.8) 灰釉 施釉方法は不明 口縁部の釉の剥離が顕著。
24	瀬戸折縁Ⅲ	灰釉。残存部はツケガケ(またはナガシガケ)か。
25	瀬戸折縁Ⅲ	灰釉。施釉方法不明。
26	瀬戸折縁Ⅲ	灰釉ハケヌリ·ツケガケ(ナガシガケ)併用か。内部に一単位6本の条線あり。
27	瀬戸折縁Ⅲ	灰釉。残存部はハケヌリの痕跡が認められる。
28	瀬戸折縁Ⅲ	灰釉ハケヌリ·ツケガケ(ナガシガケ)併用か。見込み中央と下体部に条線あり。
29	瀬戸折縁Ⅲ	口径(26.7) 灰釉ハケヌリ·ツケガケ(ナガシガケ)併用。
30	魚住鉢	
31	魚住鉢	
32	魚住鉢	
33	魚住鉢	
34	魚住鉢	底径(14.2)内面摩耗顕著。
35	堺擂鉢	卸目は一単位12条 18c前葉。
36	備前擂鉢	卸目は一単位11条。

図16　1面構成土

No.	遺物名	法量（cm）・特徴等
1	常滑玉縁	口径(10.2)
2	常滑壺玉縁	口縁、肩部に条線あり
3	常滑壷	底径(9.8) 玉縁。
4	常滑広口壺か	
5	常滑甕	
6	常滑甕	
7	常滑甕	
8	常滑甕	
9	常滑甕	
10	常滑甕	
11	常滑甕	
12	常滑甕	
13	常滑甕	
14	常滑甕	
15	常滑甕	
16	常滑甕	
17	常滑甕	
18	常滑甕	
19	常滑甕	
20	常滑甕	
21	常滑片口鉢	Ⅱ類。
22	常滑片口鉢	Ⅱ類。
23	常滑片口鉢	Ⅱ類。
24	常滑片口鉢	Ⅱ類。
25	常滑片口鉢	Ⅱ類。
26	常滑片口鉢	Ⅱ類。
27	常滑片口鉢	Ⅱ類。
28	常滑片口鉢	Ⅱ類。
29	常滑片口	口径(28.5) Ⅱ類。
30	常滑片口鉢	Ⅱ類。
31	常滑片口鉢	Ⅱ類。
32	常滑片口	口径(32.2) Ⅱ類。
33	常滑片口鉢	Ⅱ類。
34	常滑片口鉢	Ⅱ類。
35	常滑片口鉢	Ⅱ類。
36	常滑片口鉢	Ⅱ類。
37	常滑片口	底径(15.2) Ⅱ類。
38	常滑甕	底径16.6
39	常滑甕	底径(17.0)
40	常滑甕	底径16.4

図17　1面構成土

No.	遺物名	法量（cm）・特徴等
1	常滑片口鉢	Ⅰ類。
2	常滑片口鉢	Ⅰ類。
3	常滑片口鉢	Ⅰ類。
4	常滑片口鉢	Ⅰ類。
5	常滑片口鉢	Ⅰ類。
6	常滑片口鉢	Ⅰ類。
7	常滑片口鉢	Ⅰ類。
8	常滑片口鉢	Ⅰ類。
9	常滑片口鉢	Ⅰ類。
10	常滑片口鉢	Ⅰ類。
11	常滑片口鉢	Ⅰ類。
12	常滑片口	口径(28.8) Ⅰ類。内底摩耗顕著
13	常滑片口鉢	Ⅰ類。
14	常滑片口鉢	Ⅰ類。
15	常滑片口	底径(12.2) Ⅰ類。
16	吉備系土器	
17	吉備系土器	
18	かわらけ	口径(7.3) 底径(4.2) 器高2.1
19	かわらけ	口径(7.2) 底径(4.6) 器高2.0
20	かわらけ	口径(7.3) 底径4.2 器高1.8
21	かわらけ	口径(7.9) 底径(6.0) 器高1.6
22	かわらけ	口径7.5 底径4.7 器高2.4
23	かわらけ	口径(7.2) 底径4.5 器高2.2
24	かわらけ	口径8.0 底径5.1 器高1.9
25	かわらけ	口径8.0 底径5.0 器高2.0
26	かわらけ	口径(8.6) 底径(5.0) 器高2.5
27	かわらけ	口径7.4 底径4.5 器高2.2
28	かわらけ	口径(8.5) 底径5.0 器高2.4
29	かわらけ	口径(8.2) 底径(5.4) 器高1.7
30	かわらけ	口径(13.2) 底径(7.8) 器高3.2
31	かわらけ	口径(10.6) 底径(6.2) 器高3.0
32	かわらけ	口径(11.6) 底径(7.4) 器高3.1
33	かわらけ	口径(11.3) 底径(6.8) 器高3.0
34	かわらけ	口径12.3 底径7.6 器高3.7
35	かわらけ	口径(14.4) 底径(8.5) 器高3.3
36	かわらけ	口径12.8 底径7.6 器高3.2
37	かわらけ	口径(12.6) 底径(8.4) 器高2.8
38	土製品	長さ4.6 幅3.4 厚1.5 かわらけ質。塊状の製品の表面を擦り加工したもの。
39	火鉢	瓦質。平面輪花形。
40	火鉢	瓦質。外面口縁部付近に一辺約0.8cmの格子文のスタンプを廻らす。香炉か。
41	火鉢	瓦質。外面上部に径約0.8cmの菊花文スタンプを配し、沈線を巡らせる。径約0.8cmの珠文状の突起 を巡らせ、体部中程に花文スタンプを組み合わせて施文する。

42	火鉢	瓦質。体部中央に径約3.3cmの花文スタンプと唐草文スタンプを組み合わせて施文。径約1.5cmの珠文状の突起を配し、沈線の下に径約1.3cmの菊花文スタンを巡らせる。外面全体は丁寧な磨きが施される。
43	火鉢	瓦質。
44	火鉢	瓦質。外面下体部に沈線をその間に径約1.0cmの珠文を巡せる。下には1cm程度の菊花文スタンプが巡る。

図18　1面構成土

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	鉄製品(釘)	残長4.0 幅0.8
2	鉄製品(釘)	
3	鉄製品(釘)	
4	鉄製品(釘)	
5	鉄製品(釘)	残長4.8 幅0.7
6	鉄製品(釘)	長さ7.0 幅1.0
7	鉄製品(釘)	残長6.7 幅0.9
8	鉄製品(釘)	残長5.4 幅0.9
9	鉄製品(釘)	残長5.3 幅1.0
10	鉄製品(釘)	残長4.8 幅1.1
11	鉄製品(釘)	
12	鉄製品	残長4.8 幅0.9 断面四角形の先端が二股に分岐する。
13	鉄製品(釘)	
14	鉄製品(釘)	残長4.3 幅0.9 付着物あり。
15	鉄製品(釘)	
16	鉄製品(釘)	残長3.9 幅1.2
17	鉄製品(釘)	残長4.4 幅1.1
18	鉄製品(釘)	長さ5.0 幅0.9
19	鉄製品(釘)	長さ5.1 幅1.2
20	鉄製品(釘)	
21	鉄製品(釘)	残長3.2 幅1.0
22	鉄製品(釘)	
23	鉄製品(釘)	残長3.0 幅1.0
24	鉄製品(釘)	残長4.1 幅1.2
25	鉄製品(釘)	
26	鉄製品(釘)	残長5.2 幅1.4 釘2本が付着。
27	鉄製品(釘)	
28	鉄製品(釘)	
29	鉄製品(釘)	残長3.3 幅1.6
30	鉄製品(釘)	
31	鉄製品(釘)	残長6.0 幅0.8
32	鉄製品(釘)	残長4.9 幅1.2
33	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.7
34	鉄製品(釘)	残長4.5 幅1.6
35	鉄製品(釘)	残長4.6 幅0.7
36	鉄製品(釘)	残長4.6 幅0.6
37	鉄製品(釘)	残長5.4 幅1.2
38	鉄製品(釘)	
39	鉄製品(釘)	残長4.1 幅1.2
40	銭 宋通元宝	外径2.53 方穿径0.64 厚0.13真書。初鋳960年(北宋)。
41	銭 皇宋通宝	外径2.43 方穿径0.68 厚0.11真書。初鋳1038年(北宋)。
42	銭 聖宋通宝	外径2.42 方穿径0.69 厚0.13行書。初鋳1101年(北宋)。
43	銭 元宝通宝	外径2.52 方穿径0.63 厚0.10行書。初鋳1078年(北宋)。
44	銭 元宝通宝	外径24.0 方穿径0.62 厚0.13行書。初鋳1078年。(北宋)。
45	銭 判読不明	外径2.47 方穿径0.54 厚0.11
46	砥石	残長8.4 幅3.5 厚1.8 鳴滝産仕上砥 頁岩製 1面使用 裏面は未使用 小口が残る 両側面は生産時のノコギリ痕が残る。
47	砥石残	長3.1 幅2.5 厚0.8 鳴滝産仕上砥 頁岩製 2面使用 片面に生産時のノコギリ痕が残る。
48	砥石	残長3.6 幅3.5 厚0.6 鳴滝産仕上砥 頁岩製 2面使用 両側面に生産時のノコギリ痕が残る。

図19　2面

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	青磁合子	口径(9.8)
2	瀬戸平碗	灰釉ツケガケ(またはナガシガケ)。
3	瀬戸折縁皿	灰釉ハケヌリ・ツケガケ(またはナガシガケ)併用。二次焼成により釉は白濁する。
4	瀬戸卸皿	灰釉。二次焼成による剥落が目立ち、施釉方法は不明。
5	瀬戸卸皿	灰釉ハケヌリか。
6	瀬戸卸皿	灰釉。二次焼成を受け、施釉方法は不明。
7	魚住捏鉢	口径(26.0)
8	魚住捏鉢	
9	渥美壺	肩部に二条の沈線あり。
10	常滑甕	
11	常滑片口鉢	底径(13.8) Ⅰ類。
12	常滑片口鉢	Ⅰ類。
13	常滑片口鉢	Ⅰ類。
14	常滑壺	
15	常滑壺	
16	常滑片口鉢	Ⅱ類。
17	常滑片口鉢	Ⅱ類。
18	常滑片口鉢	底径(14.6) Ⅱ類。
19	常滑片口鉢	Ⅱ類。
20	吉備系土器	口径11.0 底径4.9 器高3.1
21	かわらけ	口径(8.2) 底径(5.4) 器高1.8
22	かわらけ	口径(8.2) 底径(5.0) 器高2.0
23	かわらけ	口径(7.8) 底径3.8 器高2.5
24	かわらけ	口径(7.2) 底径(3.6) 器高2.4
25	かわらけ	口径(12.8) 底径(8.0) 器高3.0
26	かわらけ	口径(14.4) 底径(8.8) 器高3.5
27	かわらけ	口径(13.0) 底径(7.4) 器高3.9
28	かわらけ	口径(14.8) 底径(9.9) 器高3.5
29	鉄製品(釘)	残長4.2 幅0.9
30	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.6
31	鉄製品(釘)	残長4.7 幅0.8
32	鉄製品(釘)	長さ4.7 幅1.0
33	鉄製品(釘)	残長4.2 幅0.6
34	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.7

35	鉄製品(釘)	残長5.4 幅1.3
36	鉄製品(釘)	残長3.4 幅0.7
37	鉄製品(釘)	残長4.1 幅1.0
38	鉄製品(釘)	長さ5.0 幅0.8
39	鉄製品(釘)	長さ9.7 幅1.3
40	鉄製品(釘)	残長5.7 幅1.6
41	鉄製品(釘)	残長4.8 幅1.5
42	鉄製品(釘)	残長4.7 幅0.7
43	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.6
44	鉄製品(釘)	残長3.6 幅0.9
45	鉄製品(釘)	残長5.1 幅0.7
46	鉄製品(釘)	残長5.2 幅0.9
47	鉄製品(釘)	残長5.2 幅0.8
48	鉄製品(釘)	残長5.0 幅0.8
49	鉄製品(釘)	残長4.5 幅1.2
50	鉄製品(釘)	残長4.5 幅1.6
51	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.6
52	銭 咸平元宝	外径2.49 方穿径0.63 厚0.12真書。初鋳998年(北宋)。
53	銭 皇宋通宝	外径2.50 方穿径0.71 厚0.10真書。初鋳1038年(北宋)。
54	銭 熙寧元宝	外径2.33 方穿径0.62 厚0.10真書。初鋳1068年(北宋)。
55	銭 元豊通宝	外径2.48 方穿径0.67 厚0.11行書。初鋳1078年(北宋)。
56	銭 元祐通宝	外径2.44 方穿径0.67 厚0.11篆書。初鋳1086年(北宋)。
57	銭 元符通宝	外径2.37 方穿径0.60 厚0.11篆書。初鋳1098年(北宋)。
58	銭 判読不明	外径2.39 方穿径0.63 厚0.11

図20　2面遺構

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	碇石	長さ131.6 幅32.4厚さ18.0 安山岩質(箱根系の溶岩か)。重さ約118.8kg。

図21　2面遺構

No.	遺構	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	ピット11	かわらけ	口径(7.0) 底径4.2 器高1.2
2	ピット11	かわらけ	口径(12.8) 底径(7.8)器高3.6
3	ピット11	常滑甕	
4	ピット11	常滑甕	
5	ピット11	鉄製品(釘)	残長4.9 幅0.6
6	ピット11	鉄製品(釘)	残長3.2 幅1.2
7	ピット3	鉄製品(釘)	残長3.4 幅0.8
8	ピット3	鉄製品(釘)	残長4.6 幅0.7
9	ピット3	銭 皇宋通宝	外径23.9 方穿径7.0 厚0.8 篆書 初鋳1038年(北宋)。
10	ピット3	銭 元符通宝	外径23.6 方穿径6.2 厚1.4 行書 初鋳1098(北宋)。
11	ピット5	硯	残長6.0 残存幅6.0 厚0.4 方硯を砥石に転用したものか。
12	ピット4	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.0)器高1.4
13	土壙3	かわらけ	口径(8.2) 底径6.0 器高1.7
14	土壙3	常滑片口鉢	Ⅱ類。
15	土壙2·3	常滑片口鉢	Ⅱ類。
16	土壙2·3	鉄製品(釘)	長さ6.9 幅1.5
17	土壙8	火鉢か	瓦質。角形か。
18	土壙8	常滑片口鉢	Ⅰ類。
19	土壙8	青磁碗	底径(4.8)
20	ピット10	常滑片口鉢	Ⅱ類。
21	土壙6	青白磁	
22	土壙6	滑石製鍋	
23	落ち込み1	常滑甕	
24	落ち込み1	常滑甕	
25	落ち込み1	常滑片口鉢	底径(16.0) Ⅱ類。
26	落ち込み1	青磁折縁皿	
27	落ち込み1	火鉢	
28	落ち込み1	砥石	長さ4.9 幅2.2 厚さ1.0 2面使用。
29	落ち込み1	鉄製品(釘)	長さ7.0幅0.7
30	土壙4	常滑甕	底径(18.4)
31		吉備系土器	
32	土壙4	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.6) 器高1.4
33	土壙4	鉄製品(釘)	
34	土壙7	滑石製鍋	底径(21.0)
35	土壙7	かわらけ	口径(11.6)
36	土壙7	かわらけ	口径(12.8)
37	土壙7	常滑甕	
38	土壙1	常滑片口鉢	口径(32.5) Ⅱ類。
39	土壙1	常滑片口鉢	Ⅱ類。
40	土壙1	白かわらけ	底径3.9
41	土壙1	かわらけ	口径6.9 底径4.6 器高1.5 口縁を細かく欠いて器高を低くしたもの 加工品。
42	土壙1	滑石製鍋	底径(10.4)

図22　2面構成土

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	青磁合子	口径(8.3)
2	青磁鎬蓮弁文碗	
3	青磁折腰皿	
4	青磁折縁皿	口径(13.0) 内面蓮弁文。
5	白磁口兀皿	
6	青白磁梅瓶	
7	青白磁合子	口径(5.4) 底径(5.6) 器高2.0
8	瀬戸合子(蓋)	最大径4.0底径2.0器高1.0上面に鉄釉。
9	瀬戸入子	口径2.8底径2.0器高0.9片口。
10	瀬戸瓶	口径(5.0) 灰釉。二次焼成による剥離顕著。
11	瀬戸瓶	底径(9.0) 灰釉ハケヌリ。
12	瀬戸折縁皿	灰釉ツケガケかナガシガケ。
13	瀬戸卸皿	灰釉ハケヌリ。
14	瀬戸底卸目皿	底径8.9 灰釉ツケガケ(またはナガシガケ)。
15	瀬戸卸皿	口径(12.6) 底径(9.0) 器高3.5 灰釉ハケヌリか。釉の剥離顕著。

16	瀬戸卸皿	口径(14.4) 底径(10.5) 器高4.1 灰釉ハケヌリ。体面は釉の剥離顕著。
17	常滑片口鉢	口径(26.8) Ⅰ類。
18	常滑片口鉢	口径(30.0) Ⅰ類。
19	常滑甕	口径(13.0)
20	常滑甕	
21	常滑甕	
22	常滑甕	口径(24.0)
23	常滑甕	
24	常滑片口鉢	Ⅱ類。
25	常滑片口鉢	Ⅱ類。
26	常滑甕	底径(16.0) 27と同一個体か。
27	常滑甕	底径(17.1) 26と同一個体か。
28	摺り常滑	長さ3.7 幅4.1 厚さ0.8
29	摺り常滑	長さ2.6 幅3.8 厚さ1.9
30	魚住捏鉢	
31	魚住捏鉢	
32	骨製品(笄)	残長5.8 幅1.6 厚さ0.3
33	砥石	残長5.5 幅3.7 厚さ0.5 鳴滝仕上砥。頁岩製。2面使用。小口 面が残る。両側面切りし痕が残る。
34	砥石	残長2.8 幅3.3 厚さ0.5 鳴滝産仕上砥。頁岩製。2面使用。小口は残らない。両側面切り出し痕が残る。
35	砥石	残長7.6 幅2.9 厚さ2.1 上野産中砥。流紋岩質凝灰岩製。4面使用。小口は残らない。36硯残長7.1 残存幅3.9 残存厚0.4

図23　2面構成土

No.	遺物名	法量(cm) ・特徴等
1	吉備系土器	口径(9.4)
2	吉備系土器	口径(9.6)
3	吉備系土器	底径(3.6)
4	吉備系土器	底径(4.0)
5	吉備系土器	底径(5.0)
6	吉備系土器	底径(4.0)
7	吉備系土器	底径(4.0)
8	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.5) 器高1.6
9	かわらけ	口径(7.8) 底径(6.3) 器高1.7
10	かわらけ	口径(8.0) 底径(6.5) 器高1.8
11	かわらけ	口径(7.4) 底径(5.4) 器高1.8
12	かわらけ	口径(7.2) 底径(4.6) 器高2.0
13	かわらけ	口径(7.6) 底径(4.6) 器高2.1
14	かわらけ	口径7.2 底径4.9 器高2.0
15	かわらけ	口径(6.6) 底径4.6 器高1.9
16	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.0) 器高2.0
17	かわらけ	口径(7.6) 底径4.8 器高2.3
18	かわらけ	口径(7.6) 底径(4.9) 器高2.2
19	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.0) 器高2.3
20	かわらけ	口径7.4 底径5.0 器高2.2
21	かわらけ	口径(7.7) 底径(5.0) 器高2.3
22	かわらけ	口径(7.7) 底径(5.2) 器高2.2
23	かわらけ	口径(11.2) 底径(6.8) 器高3.0
24	かわらけ	口径(12.8) 底径(7.6) 器高3.6
25	かわらけ	口径(11.3) 底径(5.2) 器高3.4
26	かわらけ	口径(11.6) 底径(7.0) 器高3.6
27	かわらけ	口径(13.2) 底径(7.4) 器高3.1
28	土丹加工品	径6.5 刃物で土丹を粗く削り、ほぼ球形に作ったもの。
29	丸瓦	残長17.1筒部厚2.4
30	鉄製品(釘)	残長9.2 幅1.4
31	鉄製品	
32	鉄製品(釘)	残長3.5 幅1.0
33	鉄製品(釘)	残長4.4 幅0.8
34	鉄製品(釘)	残長2.8 幅1.4
35	鉄製品(釘)	残長4.0 幅0.5
36	鉄製品(釘)	残長4.3 幅1.5
37	鉄製品(釘)	残長3.1 幅1.1
38	鉄製品(釘)	残長4.2 幅0.5
39	鉄製品(釘)	残長4.1 幅1.1
40	鉄製品(釘)	残長4.6 幅0.7
41	鉄製品(釘)	残長5.9 幅0.7
42	鉄製品(釘)	残長5.1 幅2.0
43	鉄製品(釘)	残長3.6 幅1.7
44	鉄製品(釘)	残長4.6 幅0.8
45	鉄製品(釘)	残長5.9 幅0.5
46	鉄製品(釘)	残長4.4 幅0.9
47	鉄製品(釘)	残長5.3 幅1.1
48	鉄製品(釘)	残長3.5 幅0.9
49	鉄製品(釘)	残長3.4 幅0.7
50	鉄製品(釘)	残長3.0 幅0.7
51	鉄製品(釘)	残長4.5 幅0.5
52	鉄製品(釘)	残長5.3 幅0.7
53	鉄製品(釘)	残長7.0 幅0.7
54	鉄製品(釘)	残長4.8 幅1.0
55	鉄製品(釘)	残長5.2 幅1.2
56	鉄製品(釘)	残長4.4 幅0.9
57	鉄製品(釘)	残長4.8 幅0.4
58	鉄製品(釘)	残長4.2 幅0.7
59	鉄製品(釘)	残長3.9 幅1.1
60	鉄製品(釘)	残長3.9 幅0.9
61	鉄製品(釘)	残長3.5 幅0.9
62	鉄製品(釘)	残長3.0 幅0.4
63	鉄製品(釘)	残長3.6 幅0.5
64	鉄製品(釘)	残長5.1 幅1.4
65	鉄製品(楔・鏨か)	長さ7.3 幅1.9
66	鉄製品(釘)	残長5.4 幅1.1
67	鉄製品(釘)	残長4.7 幅1.6
68	鉄製品(釘)	残長7.0 幅1.1
69	鉄製品(釘)	長さ5.9 幅0.7
70	鉄製品(楔・鏨か)	残長6.4 幅1.3
71	鉄製品(釘)	残長5.9 幅1.0
72	鉄製品(釘)	残長6.0 幅1.1
73	鉄製品(釘)	長さ6.2 幅0.9
74	鉄製品(釘)	残長6.8 幅7.0
75	鉄製品(釘)	残長4.9 幅0.8
76	鉄製品(釘)	残長7.0 幅0.8
77	鉄製品(釘)	残長4.0 幅0.9
78	鉄製品(釘)	残長5.3 幅1.3
79	銭 開元通宝	外径2.41 方穿径0.68 厚0.13 真書。初鋳621年(唐)。
80	銭 皇宋通宝	外径2.49 方穿径0.74 厚0.09 篆書。初鋳1038年(北宋)。

81	銭 治平元宝	外径2.41 方穿径0.70 厚0.09 真書。初鋳1064年(北宋)。一部欠損。
82	銭 熙寧元宝	外径2.46 方穿径0.72 厚0.12 真書。初鋳1068年(北宋)。
83	銭 熙寧元宝	外径2.40 方穿径0.68 厚0.12 篆書。初鋳1068年(北宋)。
84	銭 元祐通宝	外径2.49 方穿径0.66 厚0.11 篆書。初鋳1086年(北宋)。
85	銭 元祐通宝	外径2.41 方穿径0.67 厚0.14 行書。初鋳1086年(北宋)。
86	銭 政和通宝	外径2.51 方穿径0.61 厚0.20 分階。初鋳1111年(北宋)。

図24　3面·3面遺構

No.	遺構	遺物名	法量（cm）・特徴等
1	3面(網代周)	青磁劃花文碗	
2	3面(網代周)	かわらけ	口径(12.8)
3	3面(網代周)	かわらけ	口径12.4 底径7.8 器高3.2
4	3面(網代周)	かわらけ	口径12.4 底径8.4 器高3.0
5	3面(網代周)	かわらけ	口径(11.8) 底径7.0 器高3.0
6	3面(網代周)	かわらけ	口径(7.2) 底径(5.8) 器高1.3
7	3面(網代周)	鉄製品(釘)	残長4.4幅0.6
8	3面(網代周)	鉄製品(釘)	残長4.9幅0.7
9	3面(網代周)	銭 元祐通宝	外径2.37 方穿径0.63 厚0.10 篆書。初鋳1086年(北宋)。
10	土壙1	弥生式土器(壺)	弥生後期(久ヶ原)。
11	土壙1	青磁蓮弁文碗	
12	土壙1	青磁蓮弁文碗	
13	土壙1	青磁蓮弁文碗	
14	土壙1	青磁鉢	
15	土壙1	青白磁梅瓶	
16	土壙1	砥石	長さ2.5 幅3.0 鳴滝産仕上砥。2面使用。両側面が残る。
17	土壙1	白かわらけ	底径(3.7) 底部糸切り。
18	土壙1	白かわらけ	底部糸切り。
19	土壙1	小型かわらけ	口径4.2 底径3.4 器高0.7
20	土壙1	常滑甕	底径(15.6)
21	土壙3	青磁蓮弁文碗	
22	土壙3	鉄製品(釘)	長さ6.1 幅0.6
23	土壙3	土錘	長さ3.7 幅2.9 孔径1.0
24	土壙3	土錘	長さ3.6 幅2.4 孔径1.0
25	土壙3	常滑片口鉢	器高12.5 Ⅱ類。
26	土壙6	青磁折縁皿	口径(13.6)
27	土壙6	青磁鎬蓮弁	底径(4.8) 内底に印花文。
28	土壙6	常滑片口鉢	Ⅱ類。
29	土壙6	常滑片口鉢	Ⅰ類。
30	土壙6	常滑片口鉢	Ⅰ類。
31	土壙6	常滑片口鉢	Ⅰ類。
32	土壙6	常滑片口鉢	底径12.8 Ⅰ類。
33	土壙6	瓦器質黒縁皿	口径(10.0)
34	土壙6	吉備系土器	口径(10.2)
35	土壙6	吉備系土器	
36	土壙6	吉備系土器	
37	土壙6	かわらけ	口径(7.8) 底径(6.2) 器高1.5
38	土壙6	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.8) 器高1.5
39	土壙6	滑石製鍋	口径(26.8)
40	土壙6	鉄製品(釘)	長さ4.1 幅0.8
41	土壙6	鉄製品(釘)	長さ4.7 幅0.9
42	土壙6	鉄製品(釘)	長さ5.2 幅0.5
43	土壙6	銭 開元通宝	外径2.38 方穿径0.69 厚0.12 真書。初鋳621年(唐)。
44	土壙6	銭天聖元宝	外径2.46 方穿径0.70 厚0.13 篆書。初鋳1023年(北宋)。
45	土壙6	銭 元祐通宝	外径2.52 方穿径0.65 厚0.16 行書。初鋳1086年(北宋)。

図25　3面遺構

No.	遺構	遺物名	法量（cm）・特徴等
1	土壙9	青磁鎬蓮弁	口径(12.4)
2	土壙9	青磁折縁皿	口径(11.1)
3	土壙9	常滑片口鉢	Ⅰ類。
4	土壙9	かわらけ	口径(12.0) 底径(6.6) 器高3.6
5	土壙7	青磁鎬蓮弁	底径4.8
6	土壙7	青磁蓮弁文碗	
7	土壙7	白磁口兀皿	
8	土壙7	青白磁梅瓶	
9	土壙7	土錘	長さ4.5 幅2.8 孔径0.9
10	土壙7	鉄製品(釘)	長さ5.4 幅0.6
11	土壙7	鉄製品(釘)	長さ5.7 幅0.8
12	ピット4	かわらけ	口径7.6 底径4.2 器高1.9
13	ピット4	かわらけ	口径14.0 底径8.3 器高3.8
14	ピット8	かわらけ	口径12.2 底径8.9 器高3.3
15	ピット8	鉄製品(釘)	残長3.1 幅0.5
16	ピット9	かわらけ	口径(13.0) 底径(7.8) 器高3.1
17	ピット9	鉄製品(釘)	残長3.0 幅0.5
18	ピット7	常滑甕	
19	ピット7	鉄製品(釘)	残長5.0 幅0.7
20	ピット13	常滑片口鉢	底径(12.8) Ⅰ類。
21	土壙8	鉄製品(刺刀)	長さ14.2 幅1.3 厚0.2
22	土壙8	鉄製品(釘)	長さ6.6 幅0.8

図26　3面構成土

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	青白磁	
2	青白磁	
3	青白磁	
4	青白磁	

5	青白磁	
6	青白磁	
7	青白磁	
8	青白磁	
9	青白磁	
10	青白磁	
11	青磁鎬蓮弁文碗	
12	青磁鎬蓮弁文碗	
13	青磁鎬蓮弁文碗	
14	青磁鎬蓮弁文碗	
15	青磁鎬蓮弁文碗	
16	青磁鎬蓮弁文碗	
17	青磁鎬蓮弁文碗	
18	青磁鎬蓮弁	口径(15.3)
19	青磁鎬蓮弁	底径5.7
20	青磁折腰皿	
21	白磁口兀皿	
22	白磁口兀皿	口径(11.4)
23	白磁口兀皿	口径11.5 底径6.4 器高3.7
24	白磁口兀皿	口径(9.0)
25	白磁口兀皿	底径(5.9)
26	白磁口兀皿	底径5.0
27	白磁口兀皿	底径5.2
28	白磁口兀皿	底径(6.0)
29	白磁口兀皿	底径(6.0)
30	吉備系土器	底径(4.0)
31	吉備系土器	底径(4.1)
32	吉備系土器	底径(4.0)
33	吉備系土器	底径(4.8)
34	吉備系土器	底径(4.1)
35	白かわらけ	底径5.4
36	白かわらけ	口径(10.8) 底径(6.0) 器高2.6
37	かわらけ	口径(8.3) 底径(6.2) 器高1.5
38	かわらけ	口径(7.3) 底径(5.5) 器高1.6
39	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.0) 器高2.1
40	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.7) 器高1.5
41	かわらけ	口径(8.0) 底径(5.2) 器高2.2
42	かわらけ	口径(12.7) 底径(9.1) 器高2.8
43	土錘	長さ4.8 幅3.0 厚2.2
44	土錘	長さ3.8 幅2.6 孔径0.9
45	火鉢か	瓦質。角形。
46	鉄製品(刀子)	残長9.6 幅2.8
47	鉄製品(刀子)	残長11.2 幅1.6
48	鉄製品(釘)	残長2.8 幅0.6
49	鉄製品(釘)	残長2.7 幅0.6
50	鉄製品(釘)	残長3.0 幅0.8
51	鉄製品(釘)	長さ4.7 幅1.1
52	鉄製品(釘)	残長5.2 幅0.7
53	鉄製品(釘)	残長5.1 幅1.0
54	鉄製品(釘)	残長4.3 幅1.4
55	鉄製品(釘)	残長11.7 幅1.5
56	鉄製品(釘)	残長9.4 幅1.1
57	鉄製品(釘)	残長6.7 幅0.7
58	鉄製品(釘)	残長6.1 幅0.5
59	鉄製品(釘)	残長6.9 幅1.3
60	鉄製品(釘)	残長5.5 幅1.4
61	鉄製品(釘)	残長6.4 幅1.0
62	銭　皇宋通宝	外径2.48 方穿径0.65 厚0.11 真書。初鋳1038年(北宋)。
63	銭 嘉祐元宝か	外径2.36 方穿径0.61 厚0.16 真書。初鋳1056年(北宋)。
64	銭 判読不明	外径2.52 方穿径0.60 厚0.19

図27　3面構成土

No.	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	瀬戸卸皿	口径(14.6)　灰釉ハケヌリ。
2	瀬戸卸皿	灰釉ハケヌリ。
3	山茶碗	口径(14.3)南部系。
4	山茶碗	北部系(東濃型)か。
5	常滑片口鉢	Ⅰ類。
6	常滑片口鉢	Ⅰ類。
7	常滑片口鉢	Ⅰ類。
8	常滑片口鉢	Ⅰ類。
9	常滑片口鉢	Ⅰ類。
10	常滑片口鉢	Ⅰ類。
11	常滑片口鉢	Ⅰ類。
12	常滑片口鉢	Ⅰ類。
13	常滑片口鉢	Ⅰ類。
14	常滑片口鉢	Ⅰ類。
15	常滑片口鉢	Ⅰ類。
16	常滑片口鉢	Ⅰ類。
17	常滑片口鉢	底径(10.8) Ⅰ類。
18	常滑片口鉢	底径(13.0) Ⅰ類。
19	常滑片口鉢	Ⅰ類。
20	常滑片口鉢	Ⅱ類。
21	常滑片口鉢	Ⅱ類。
22	常滑片口鉢	Ⅱ類。
23	常滑片口鉢	Ⅱ類。
24	常滑片口鉢	Ⅱ類。
25	常滑片口鉢	Ⅱ類。
26	常滑片口鉢	底径(16.0) Ⅱ類。
27	常滑甕	
28	常滑甕	
29	常滑甕	
30	常滑甕	
31	常滑甕	
32	常滑甕	
33	常滑甕	
34	常滑甕	
35	常滑甕	底径(16.0)。
36	常滑甕	
37	常滑甕	
38	常滑片口鉢	口径(29.2) Ⅰ類か。焼成が弱く軟質。
39	摺り常滑	長さ3.7幅5片口鉢Ⅱ類口縁部片を加工。
40	滑石製鍋	

図28　4面・4面遺構

No.	遺構	遺物名	法量(cm)・特徴等
1	4面	青磁鎬蓮弁	口径(15.4)内底印花文。
2	4面	かわらけ	口径(12.2) 底径(8.8) 器高3.1
3	4面	常滑片口鉢	底径(15.0) Ⅱ類。
4	4面	鉄製品(釘)	残長4.5 幅0.6
5	網代建物	吉備系土器	口径(10.8)
6	網代建物	吉備系土器	口径(11.6) 底径4.2 器高3.4

7	網代建物	白かわらけ	底径4.6 底部糸切り。
8	網代建物	白かわらけ	口径(11.4) 底部糸切り。煤付着。
9	網代建物	白かわらけ	底径7.4 底部糸切り。
10	網代建物	瓦器質黒縁皿	口径12.8 底径6.6 器高4.0
11	網代建物	かわらけ	口径(7.8) 底径(6.2) 器高1.6
12	網代建物	土錘	長さ4.0 幅2.8 孔径0.8
13	網代建物	鉄製品(釘)	長さ4.3 幅0.6
14	網代建物	備前擂鉢	卸目は5条一単位。
15	網代建物	置き竈か	
16	ピット3	鉄製品(釘)	残長6.0 幅1.0
17	ピット4	鉄製品(釘)	長さ4.3 幅0.6

図29　4面構成土

No.	遺物名	法量(cm) ・特徴等
1	青白磁合子	口径(8.3)
2	青白磁瓶	口径(4.5)
3	青白磁梅瓶	
4	青白磁梅瓶	
5	青磁劃花文皿	
6	青磁双魚文	底径(5.2)
7	青磁皿	
8	青磁折縁皿	
9	青磁皿	
10	青磁折縁皿	
11	青磁鎬蓮弁文碗	
12	青磁鎬蓮弁文碗	
13	白磁口兀皿	口径(7.8)
14	白磁口兀皿	
15	白磁口兀皿	
16	白磁口兀皿	
17	白磁口兀皿	
18	白磁口兀皿	底径(5.5)
19	白磁口兀皿	底径(5.4)
20	白磁口兀皿	
21	白磁口兀皿	
22	白磁壺	
23	鉄釉皿	
24	吉備系土器	
25	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.8) 器高1.4
26	かわらけ	口径(11.8) 底径(7.5) 器高3.4
27	銭 元祐通宝	外径23.9 外径23.9 方穿径7.3厚1.1。行書。初鋳1086年(北宋)。
28	鉄製品	残長9.9 幅3.5 厚1.1
29	鉄製品	残長7.3 幅1.7 厚0.7
30	鉄製品(釘)	残長3.5 幅0.4
31	鉄製品(釘)	長さ5.6 幅1.0
32	銅製品	残長5.3 幅0.8 板を筒状に丸めたもの。
33	石製品	直径4.5 砂質凝灰岩製。ほぼ球形。用途不明。
34	砥石	残長3.9 残存鳴滝産仕上砥。1面使用。裏面は剥離。片側面·片小口が残る。
35	土錘	長さ4.2 幅2.5 口径0.9
36	土錘	長さ4.7 幅1.1 口径0.2
37	骨製品(笄)	残長7.4 幅1.2 厚0.4

図30　4面構成土

No.	遺物名	法量(cm) ・特徴等
1	常滑片口鉢	口径(28.6) Ⅰ類。
2	常滑片口鉢	口径(30.0) Ⅰ類。
3	常滑片口鉢	口径(29.4) Ⅰ類。
4	常滑片口鉢	口径(28.0) Ⅰ類。
5	常滑片口鉢	底径(12.7) Ⅰ類。
6	常滑片口鉢	底径(12.4) Ⅰ類。
7	常滑片口鉢	Ⅰ類。
8	常滑片口鉢	Ⅰ類。
9	常滑片口鉢	Ⅰ類。
10	常滑片口鉢	Ⅰ類。
11	常滑片口鉢	Ⅰ類。
12	常滑片口鉢	Ⅰ類。
13	常滑片口鉢	Ⅰ類。
14	常滑片口鉢	Ⅰ類。
15	常滑片口鉢	Ⅰ類。
16	常滑片口鉢	Ⅱ類。
17	常滑片口鉢	Ⅱ類。
18	常滑小壺	
19	常滑甕	
20	常滑甕	
21	常滑甕	
22	常滑甕	
23	常滑甕	
24	常滑甕	
25	常滑甕	
26	常滑甕	
27	常滑甕	
28	常滑甕	
29	常滑甕	
30	常滑甕	
31	常滑甕	
32	常滑甕	
33	常滑甕	底径(17.8)
34	常滑甕	
35	常滑甕	
36	常滑甕	

第4章　まとめ

調査地点は旧光明寺境内で、蓮乗院の南西角近くに位置している。4面調査して検出した主な遺構は、各面共に網代壁を持つ建物と道路であった。網代壁の建物は南北方向に延びる道路に面するように建てられており、建物と建物の間は東西方向に延びる路地のようなものが想定される。

道路は扁平な土丹を密に敷き詰めたもので、あたかも現代の舗装道路のようであった。この道路が補修を重ね同じ場所で重なって検出されたものである。

遺物では2面溝出土の碇石が挙げられよう。何故、溝の中に据えられていたのかは不明だが、鎌倉において碇石の出土は初めてである。中央付近で半分に折れているが約120kg近い重さ（折れていなければ200kg位か）があり、大型の船が和賀江に入港していたことを示す貴重な遺物である。

更に他の遺物として、鉄製品（主に釘）や銭の他に備前擂鉢、魚住捏鉢、吉備系土器類といった西国瀬戸内の雑器、常滑片口鉢がほぼ同じ傾向で出土している。調査で出土した1面から4面までの主な出土遺物（舶載陶磁器・常滑・瀬戸・渥美・備前擂鉢・吉備系土器・魚住捏鉢・伊勢系土鍋・白かわらけ・瓦器・火鉢・瓦・かわらけ・鉄製品・銭・砥石・硯・土錘）851点の内、舶載陶磁器が190点22.3%、常滑が118点13.8%ついでかわらけが105点12.3%、瀬戸が77点9.0%の出現率で、併せると57.6%を占める。これと比べると吉備系土器24点2.8%、魚住捏鉢26点3.1%と鉄製品174点20.4%、銭78点9.2%と目立ち併せると35.5%にもなる。瀬戸の製品に限って抽出すると、1面2面は卸皿、折縁皿をはじめ瓶子、壺が見られる。3面では減少傾向が見られ、4面ではほとんど瀬戸の製品が見られなくなる。

遺物から見た遺跡の中心年代は13世紀末から14世紀前半である。遺跡から読み取れた道路に面した町屋が建ち並んでいる様相は、想像を逞しくするならば船宿か船に関わる人々の街区のようなものであり、船を介して西国の人々により直接鎌倉に運び込まれたものかもしれない。和賀江島を背景に港町として栄えた町屋の一端を垣間見るようである。

享保五年（1720）の光明寺境内絵図を見ると、18世紀初めには光明寺を中心とした門前町が形成されていたことがわかる。遺跡地は南北に延びる道路と道路に面する民家が軒を連ねていた場所で在ったことが見て取れる。同じく嘉永三年（1850）の光明寺境内絵図を見ると、19世紀中頃にはかつて道路だった場所が細長い松林に変化していた。現在は松林に変わり、細長かった地形の幅はそのままに宅地化さ

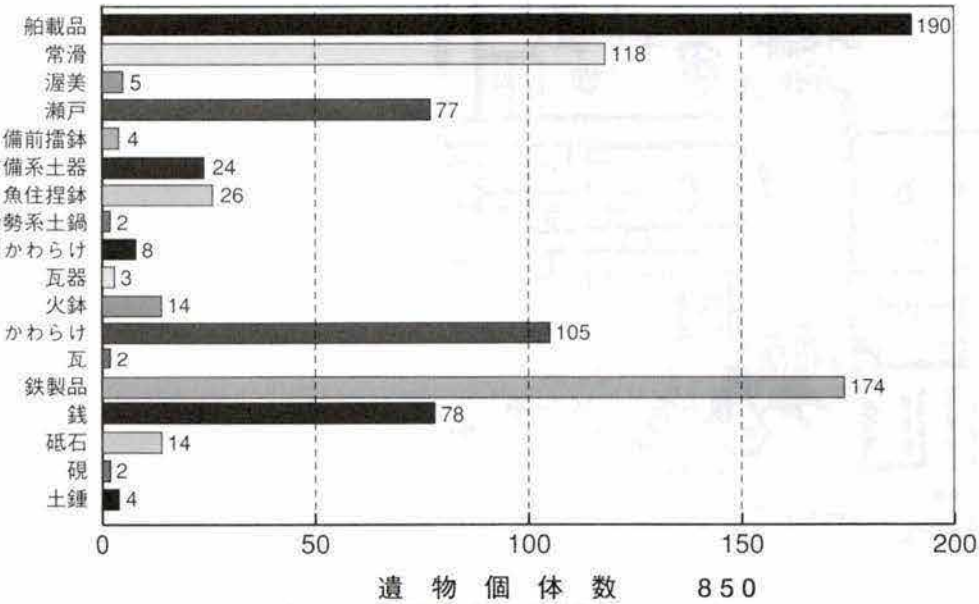
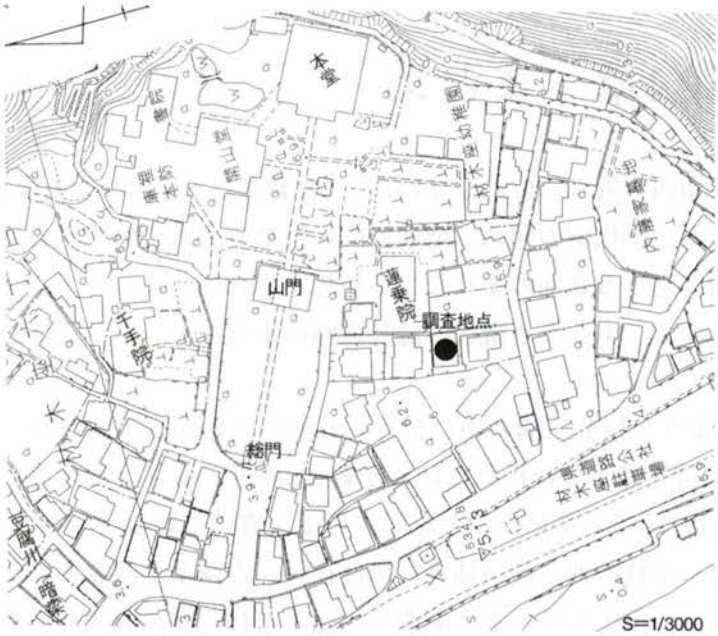
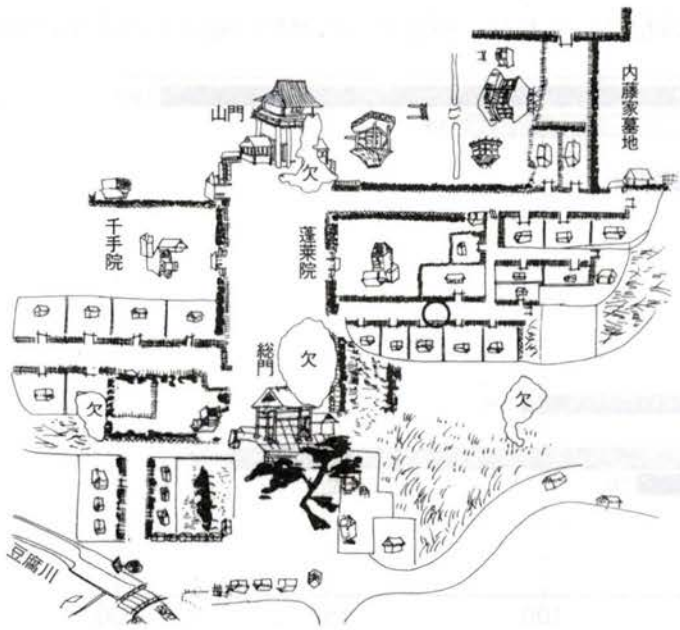


表2　遺物個体数　850



光明寺境内と調査地点（●印）

光明寺境内絵図、嘉永3年（1850）部分写
道路と家屋が建ち並んでいた調査地点（○印）は、道路の痕跡を残す細長い松林となっている。



光明寺境内絵図、享保5年（1720）部分写
調査地点（○印）は、道路と家屋が建ち並んでいる。

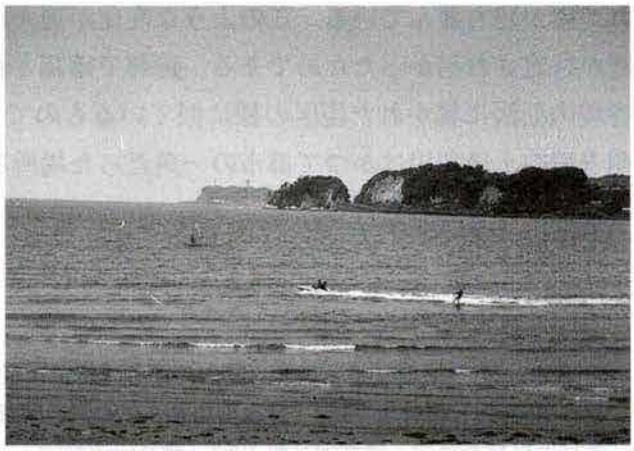
図31　光明寺境内絵図と調査地点の変換

れて家が建ち並んでいる。このような変化が追えたのは、調査地点が蓮乗院のすぐ脇だったことから位置が特定され易かったためである。遺跡で確認された道路と網代壁を持つ建物の様子は享保五年の光明寺境内絵図に描かれた街区の様に似ているものであった。14世紀前半～享保五年までの約400年間、光明寺境内土地利用はかつて都市の一角だった場所と漁村の違いはあるかも知れないが、余り変化がなかったようにも感じられる。

<参考文献>
原 廣志・福田 誠 1988『新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書　中世墓の発掘調査』
福田 誠 2004「新善光寺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』（第2分冊）鎌倉市教育委員会
鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館 1968『鎌倉の古絵図Ⅰ』鎌倉国宝館図録第15集
鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館 1969『鎌倉の古絵図Ⅱ』鎌倉国宝館図録第16集
『弁ヶ谷東やぐら群平成11年度鎌倉市急傾斜地崩壊対策工事に伴う発掘調査』1999 かながわ考古学財団
斎木秀雄・河野眞知郎ほか 1980『光明寺裏遺跡鎌倉市材木座所在北区立鎌倉学園用地内の中世遺跡発掘調査報告書』
藤澤良祐 2002「中世都市鎌倉における小瀬戸と輸入陶磁」『国立歴史民族博物館研究報告』第94集
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺辞典』
貫達人・高柳光寿 1959『鎌倉市史』（社寺編）
永井久美男編1994.10『中性の出土銭』「出土銭の調査と分類」兵庫埋蔵銭調査会

図版 1

1.　調査地点近景（和賀江嶋方面）



2.　調査地点近景（江ノ島方面）

3.　調査地点近景

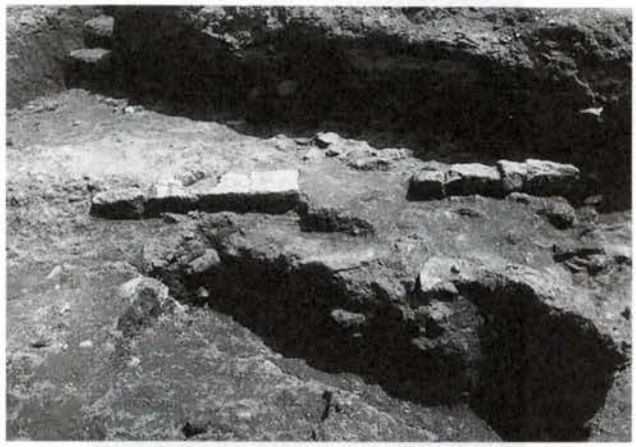
4.　調査地点近景（光明寺方面）

5.　I区1面全景（南から）

6.　II区1面

1.　I区1面全景（北から）

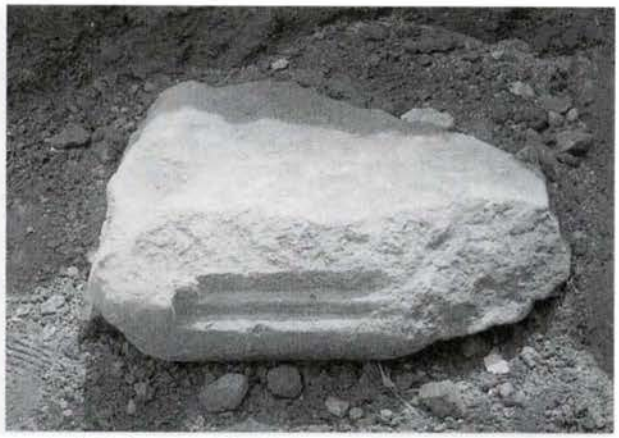
2.　I区1面道路状遺構（北から）



3.　I区1面道路状遺構（東から）

4.　II区1面出土かわらけ

5.　II区1面出吉備系土師器



6.　包含層出土宝篋印塔

図版 3

1.　II区2面全景（北から）

1.　I区2面全景（北から）

3.　I区2面全景（南から）

4.　II区2面道路状遺構（南から）

5.　II区2面溝状遺構出土状況（南から）

6.　I区2面道路上遺構（南から）

1.　II区3面全景（北から）

2.　I区3面全景（北から）

3.　I区3面全景（南から）

4.　I区3面全景（南から）

5.　I区3面網代壁（北から）

6.　I区3面道路（南から）

図版5

1.　I区4面全景（南から）

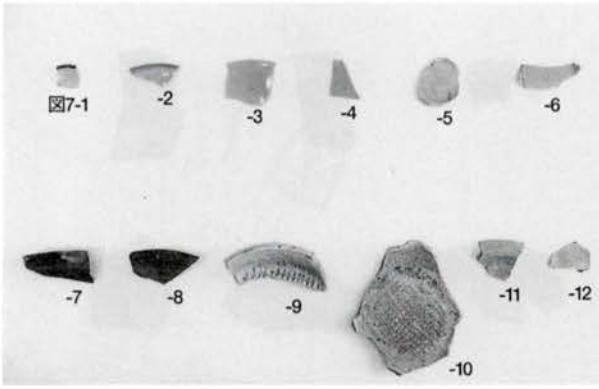
2.　II区4面（南から）

3.　I区4面全景（北から）

4.　II区4面　版板面（東から）

5.　I区4面　網代壁（西から）

6.　II区5面全景（北から）



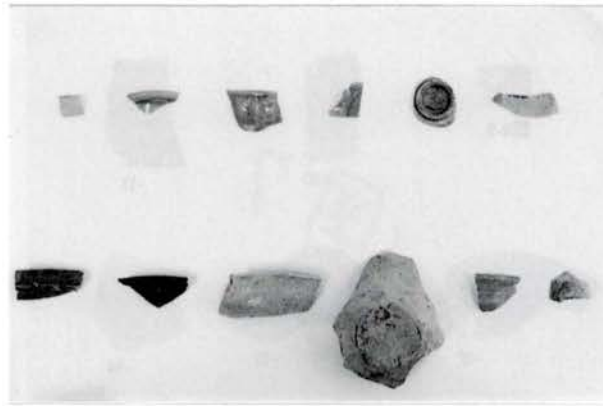
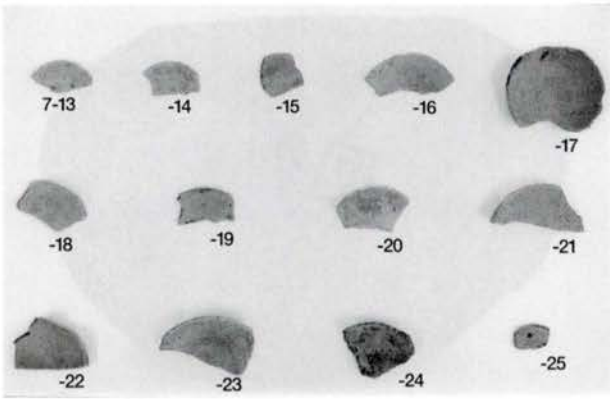


図7　試　掘



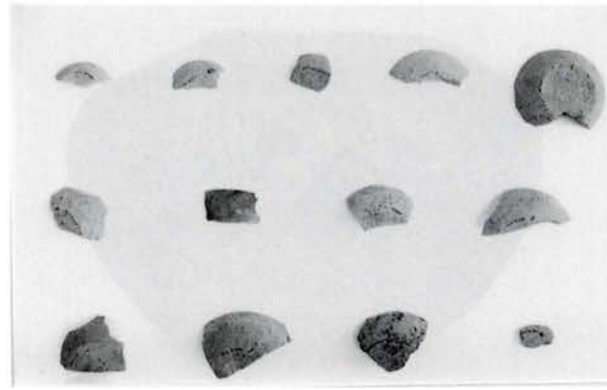
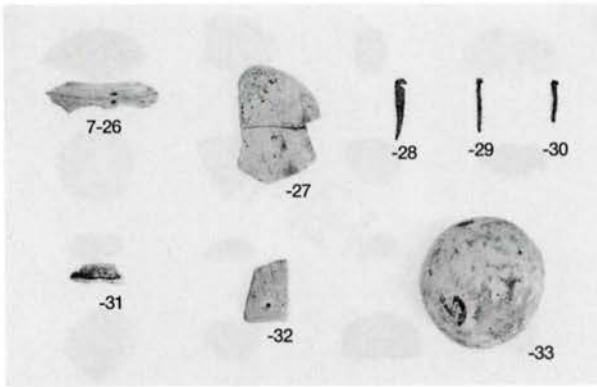


図7　試　掘



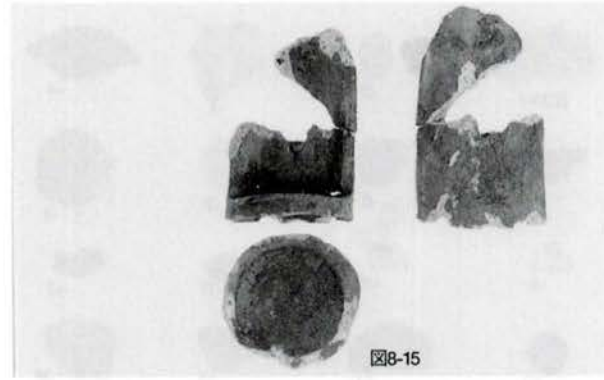
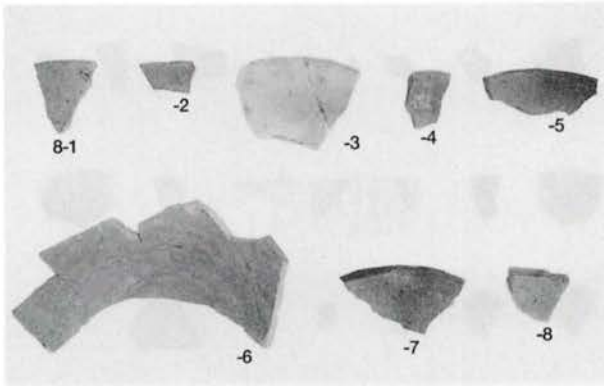


図7　試　掘

図8　試　掘



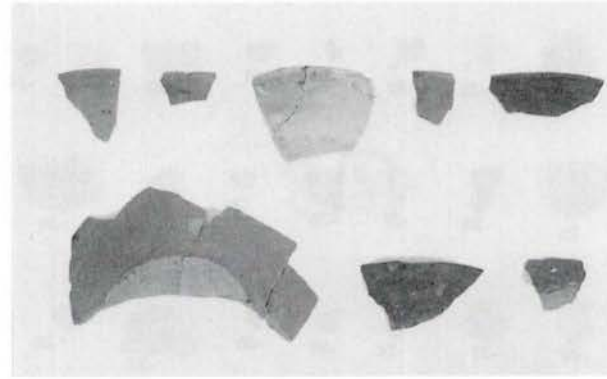
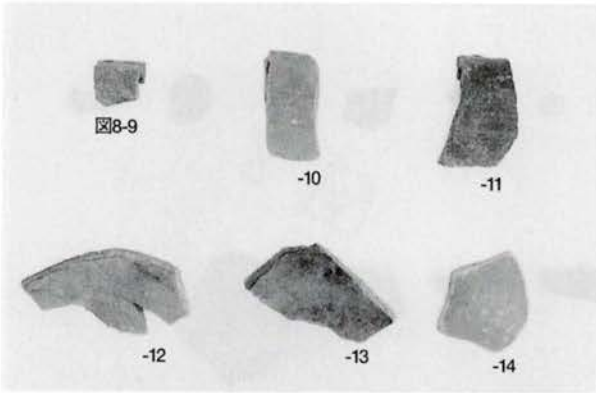


図8　試　掘

図版 7



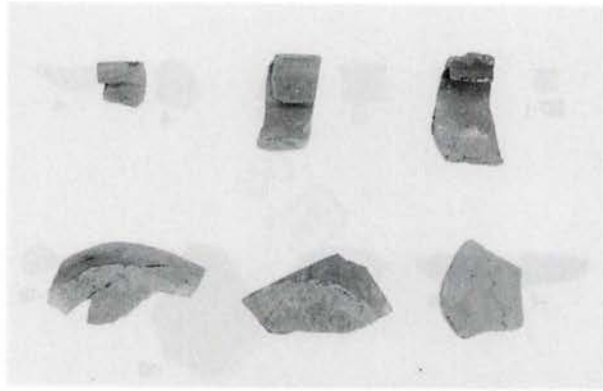
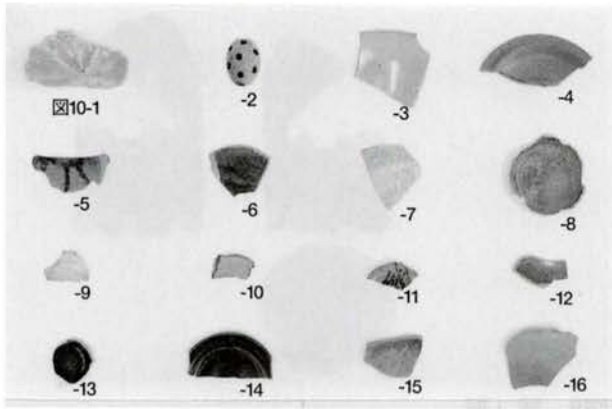


図8　試　掘

図9　試　掘



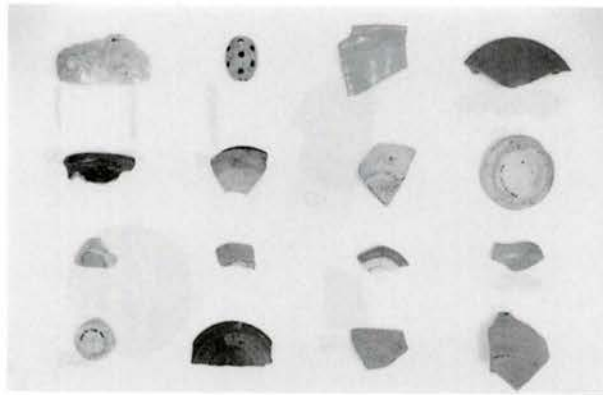
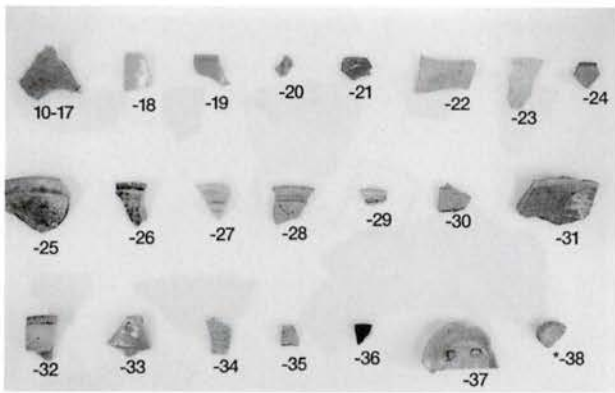


図10　包含層



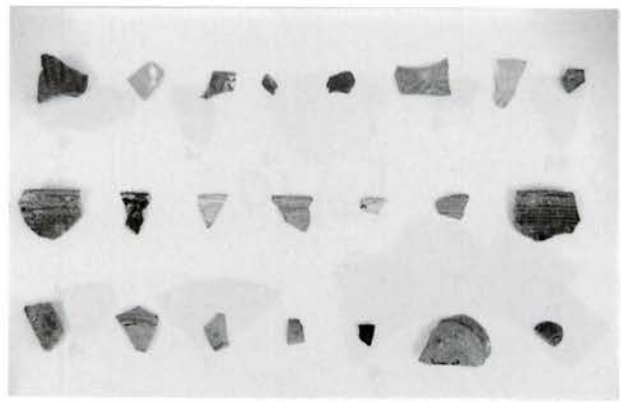
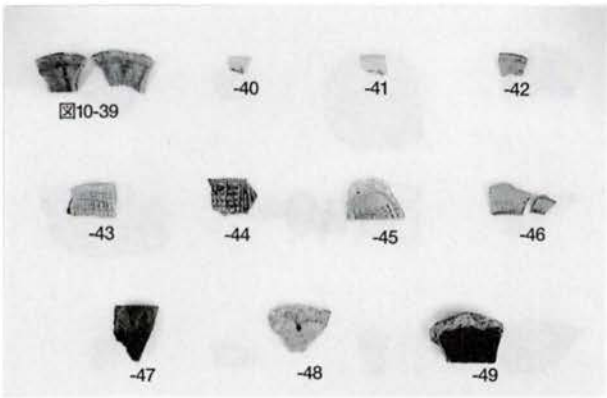


図10　包含層



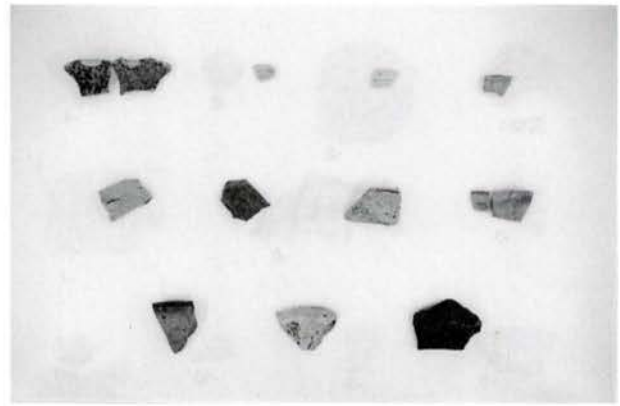


図10　包含層

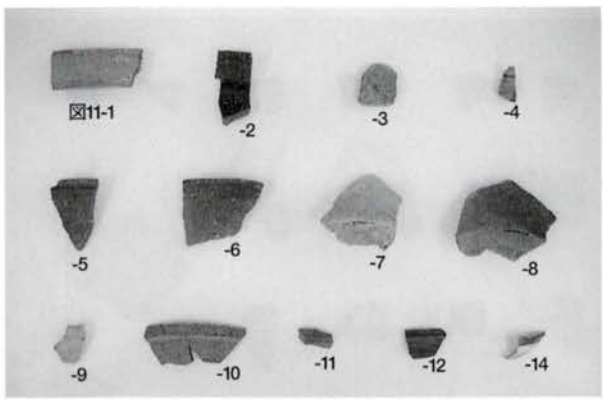


図11　包含層

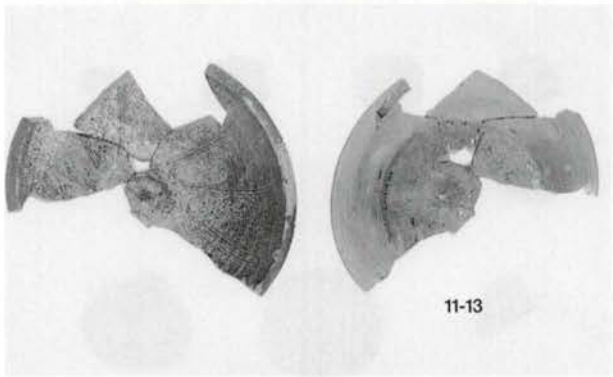


図11　包含層

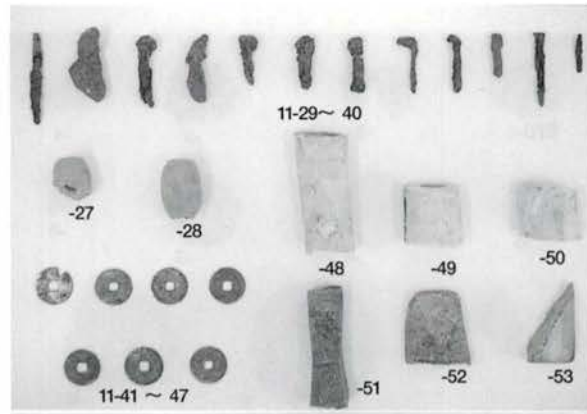


図11　包含層

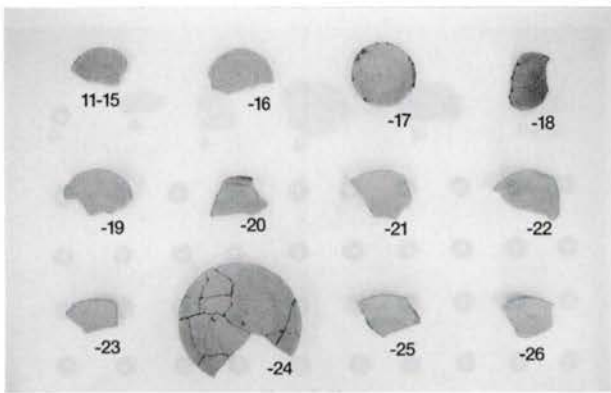
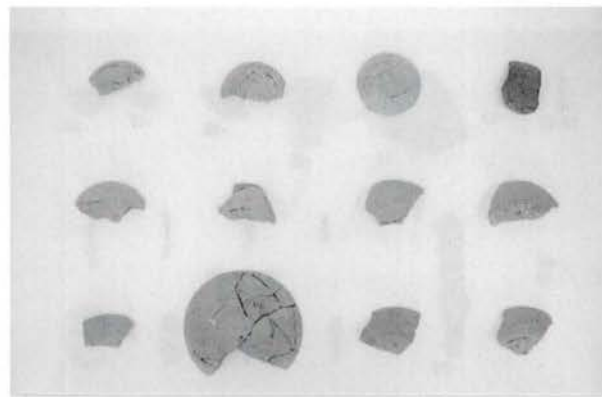
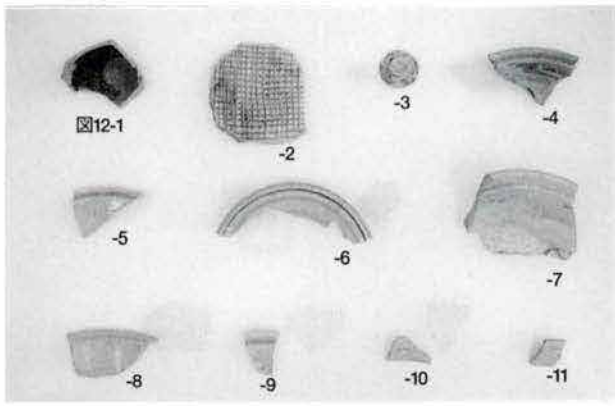


図11　包含層



図版 9



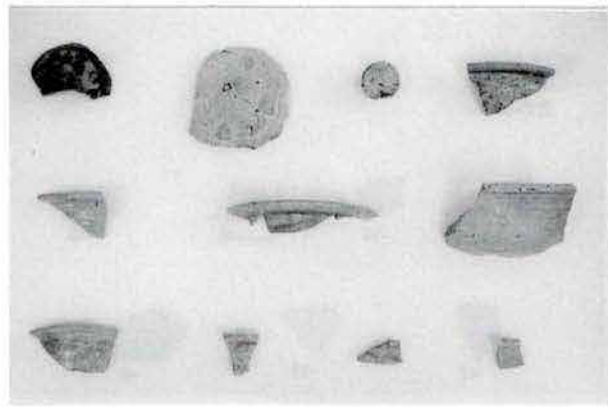
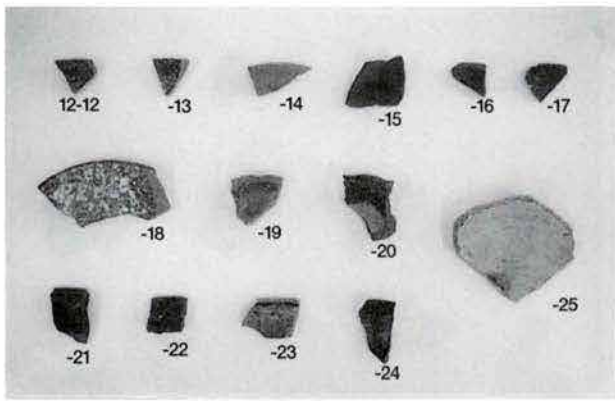


図12　1面



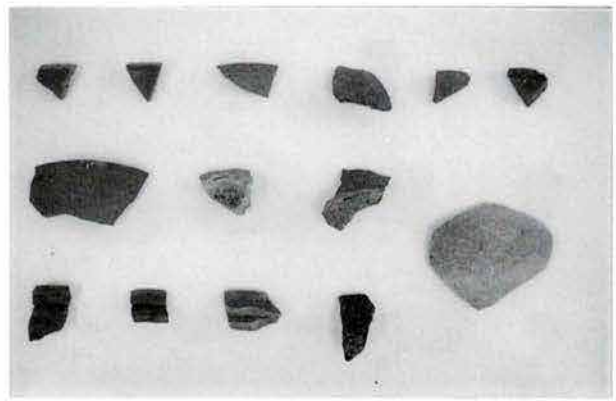
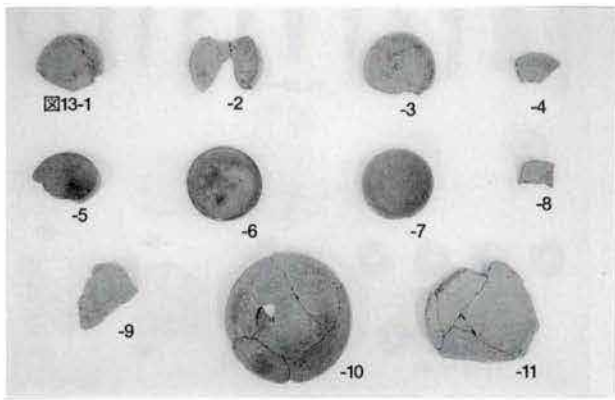


図12　1面



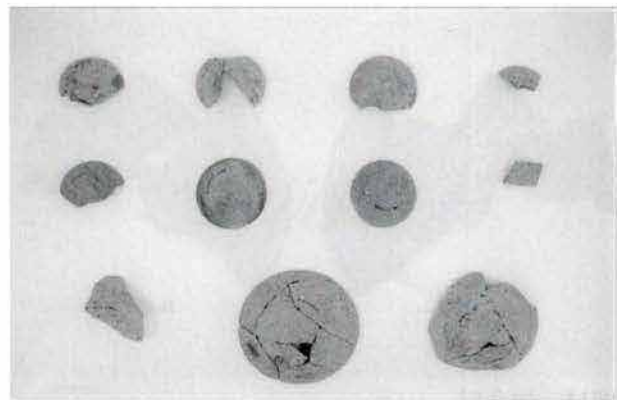


図13　1面

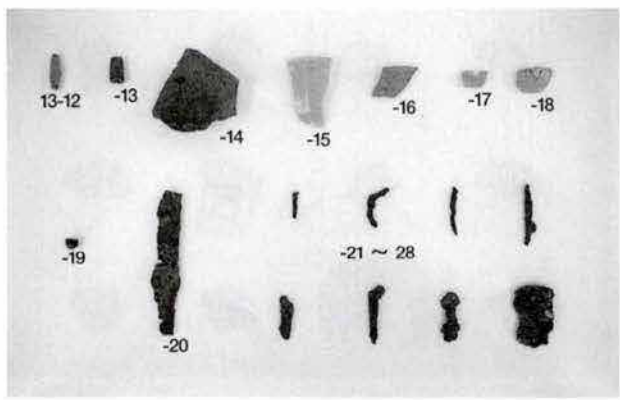


図13　1面

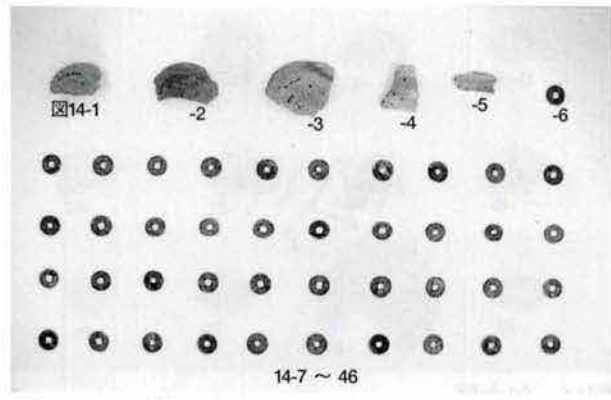


図14　1面遺構　落ち込み　1

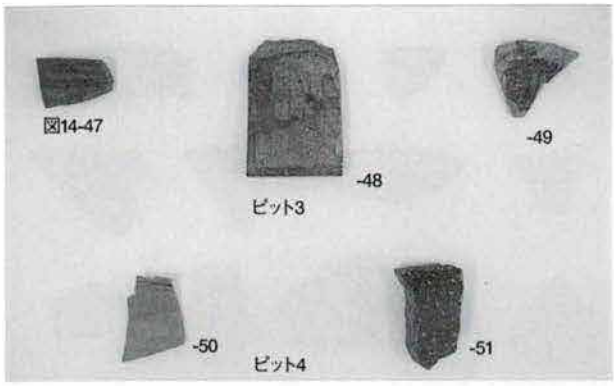
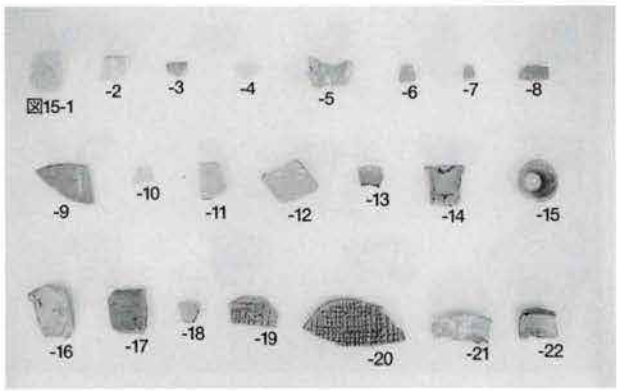


図14　1面遺構



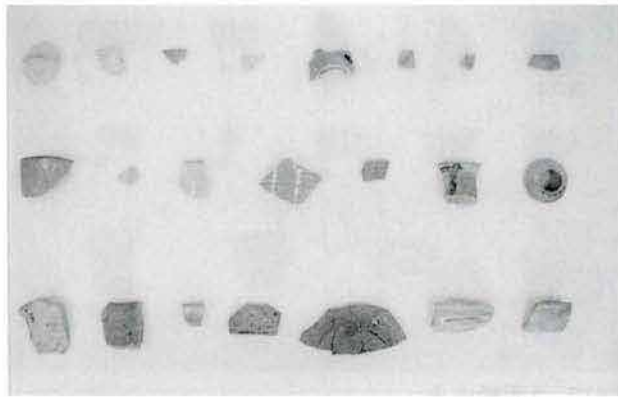
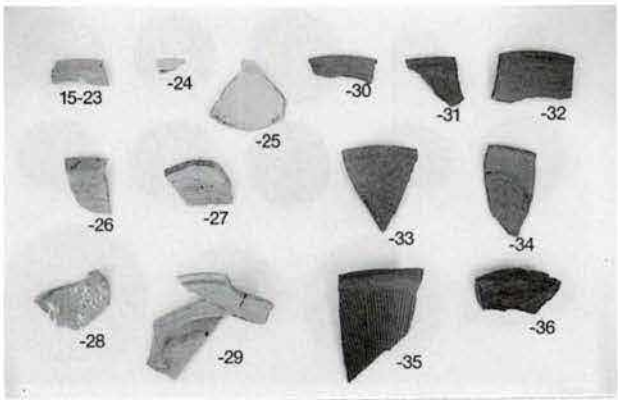


図15　1面構成土



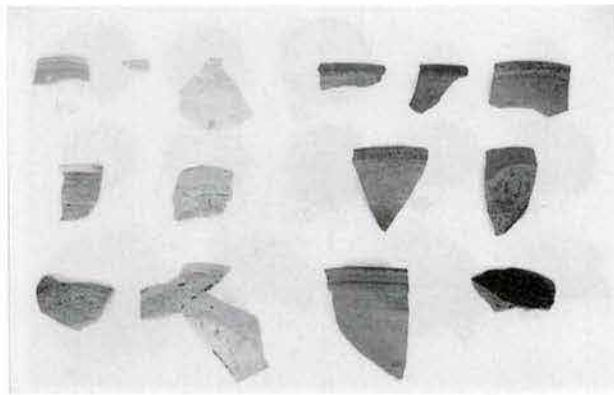
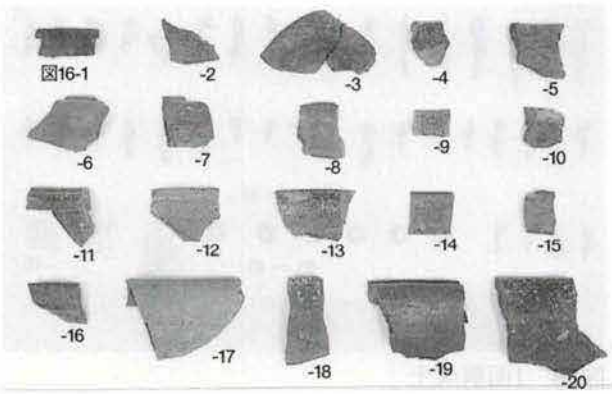


図15　1面構成土



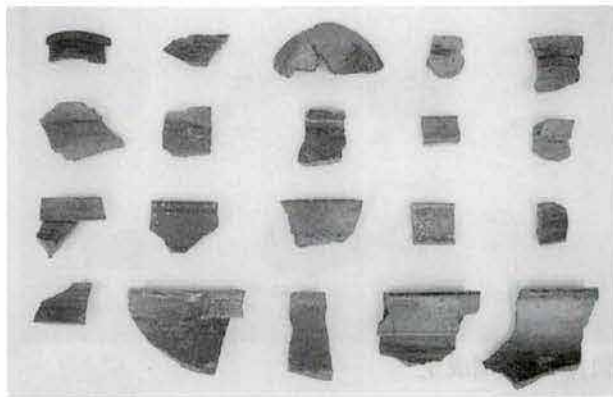
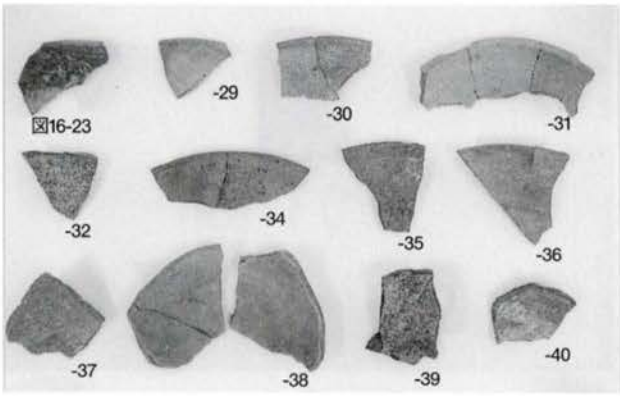


図16　1面構成土

図版11



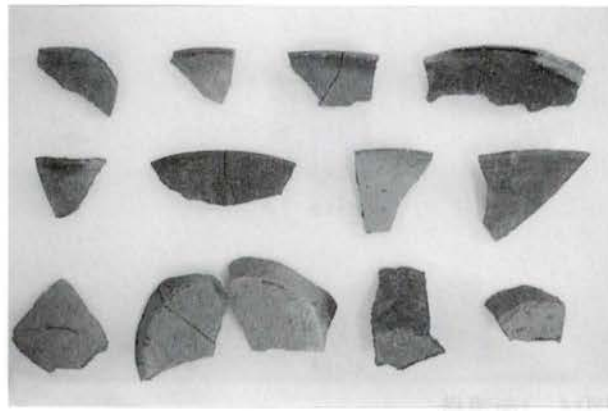
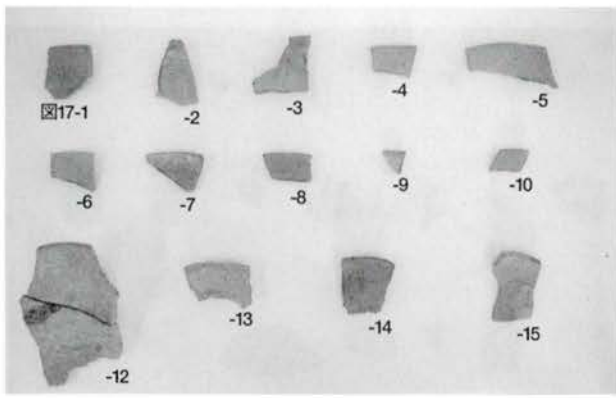


図16　1面構成土



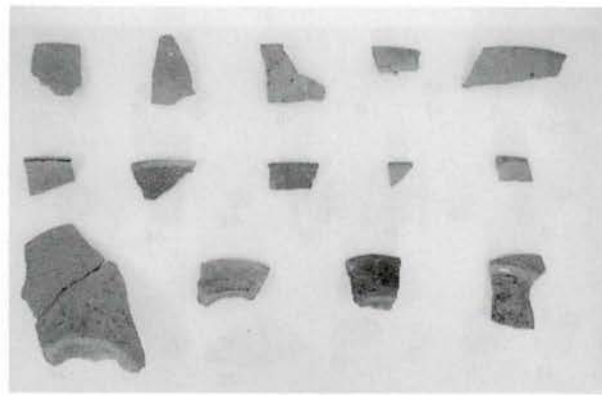
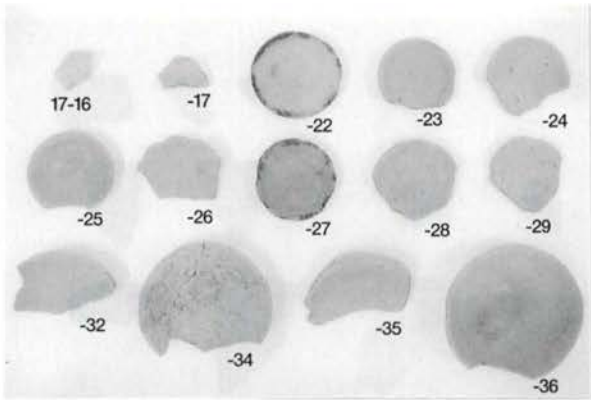


図17　1面構成土



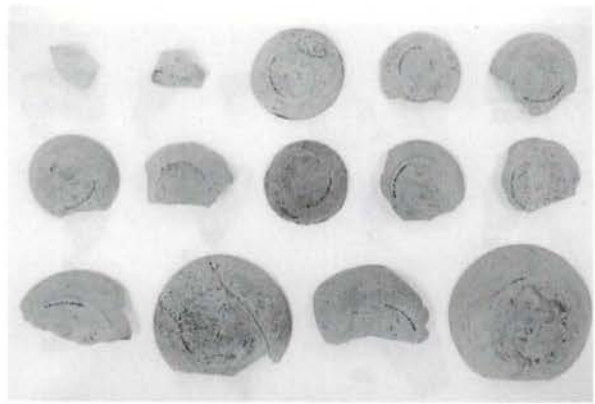


図17　1面構成土

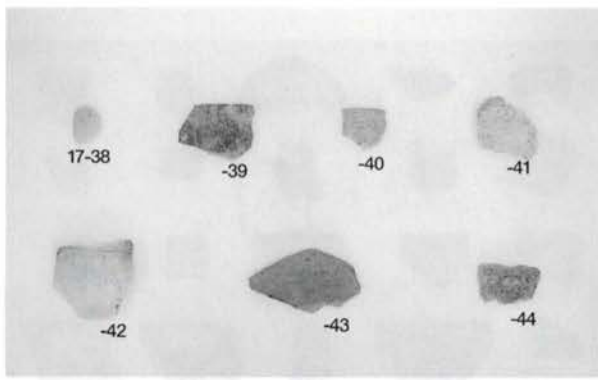


図17　1面構成土

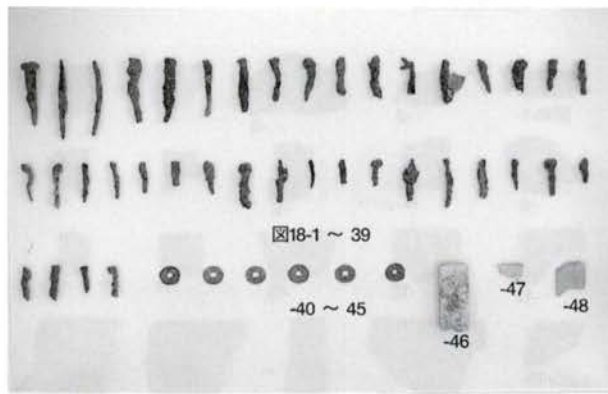
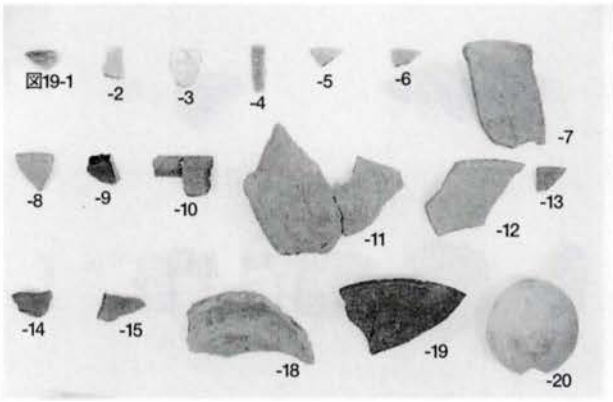


図18　1面構成土



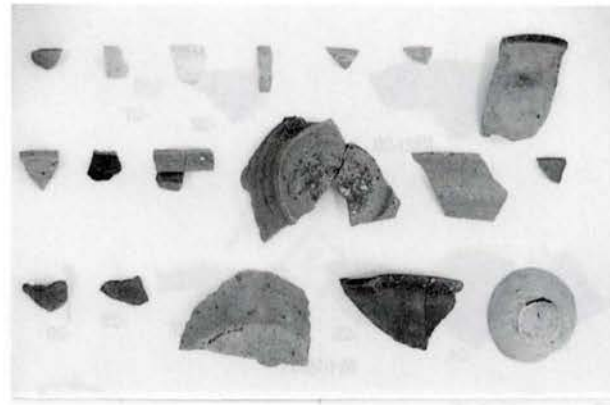
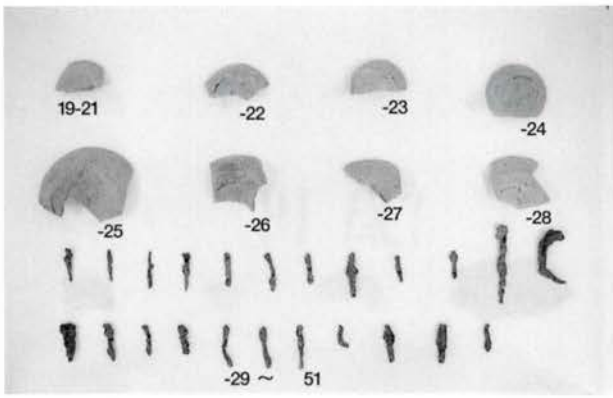


図19　2面



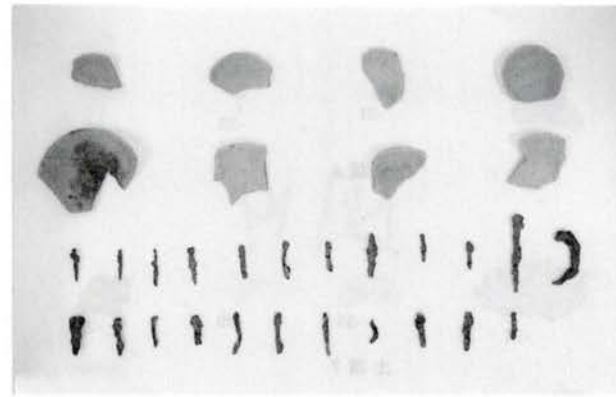
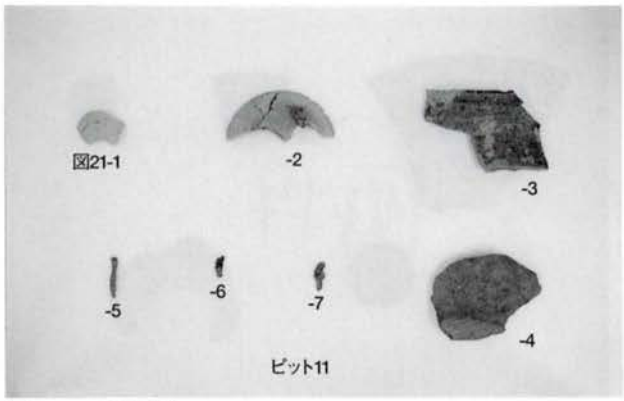


図19　2面



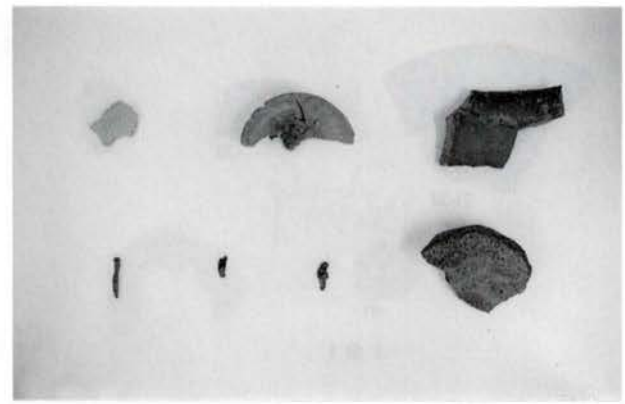
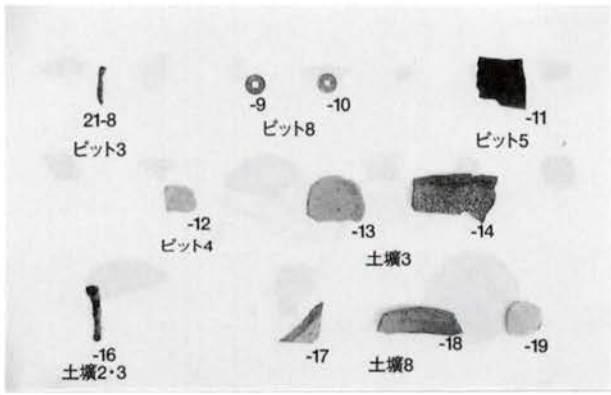


図21　2面遺構



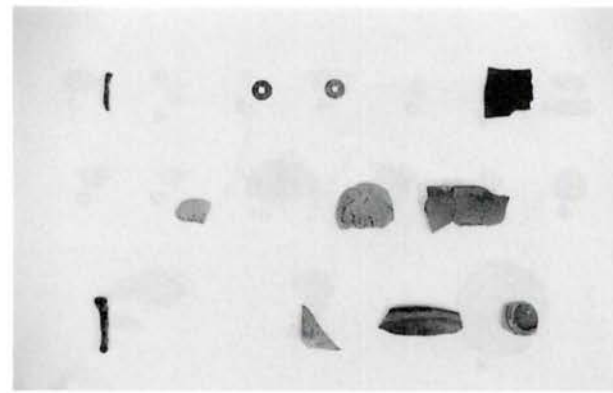
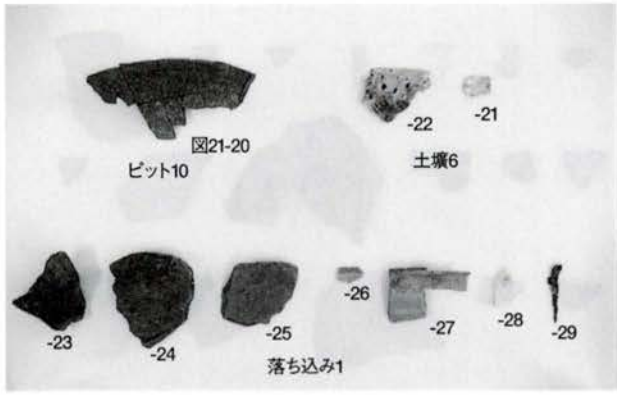


図21　2面遺構

図版13



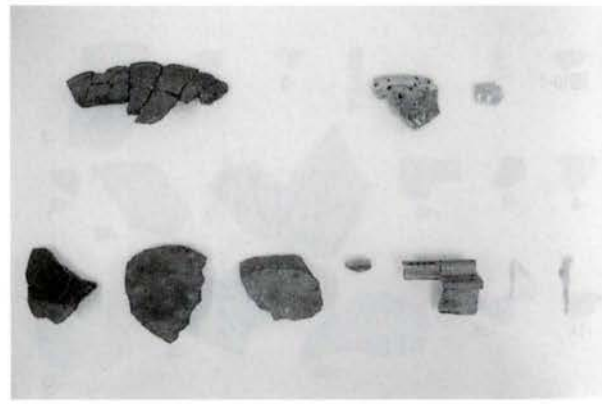
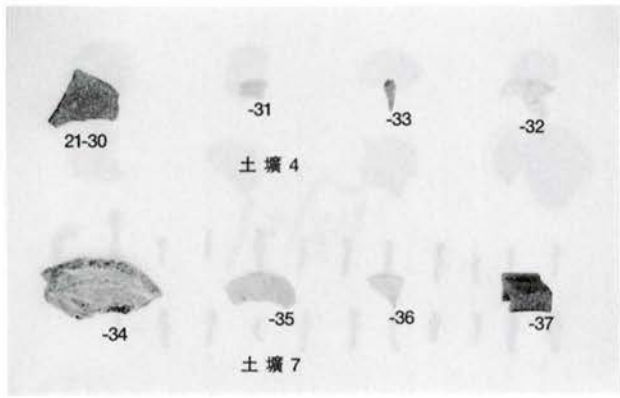


図21　2面遺構



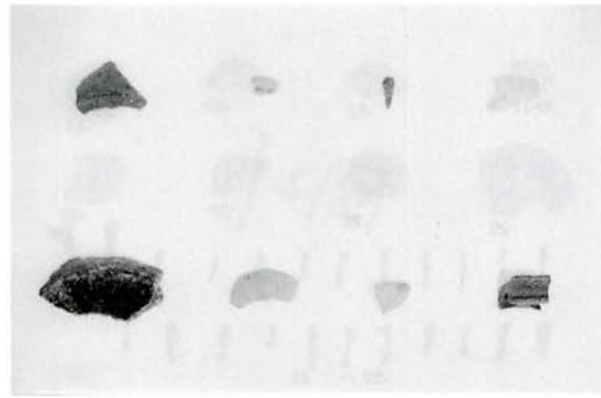


図21　2面遺構

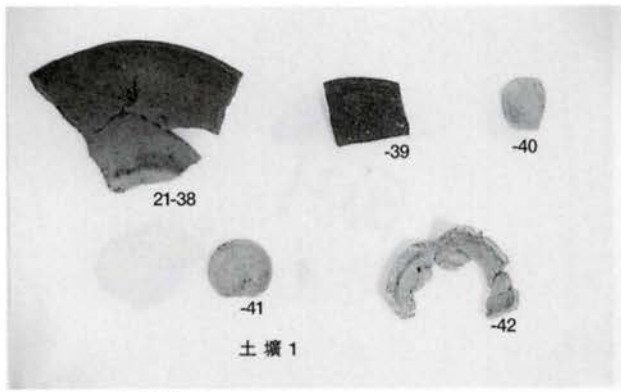
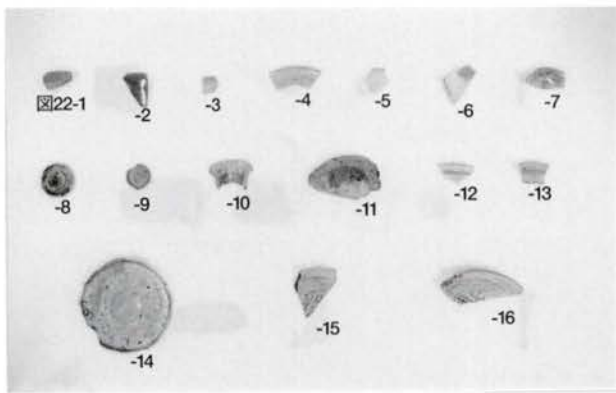


図21　2面遺構



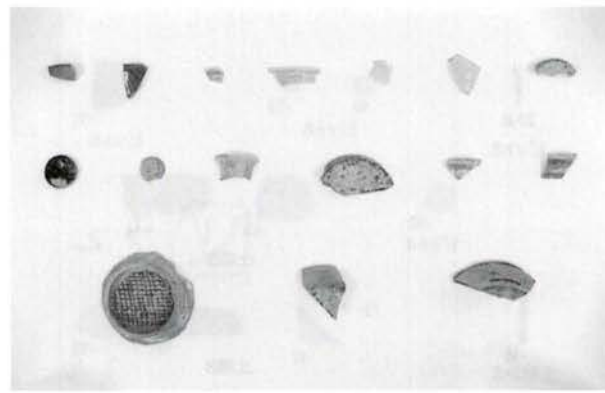
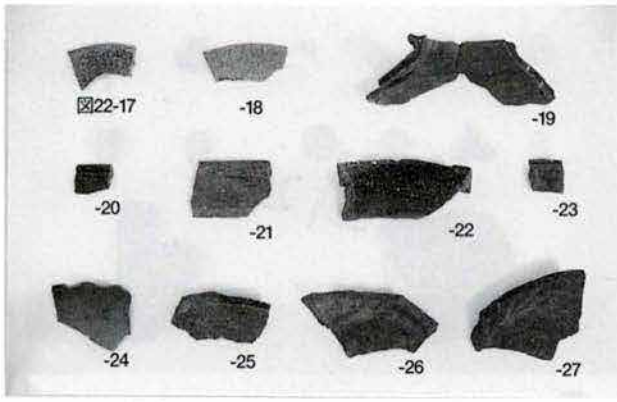


図22　2面遺構



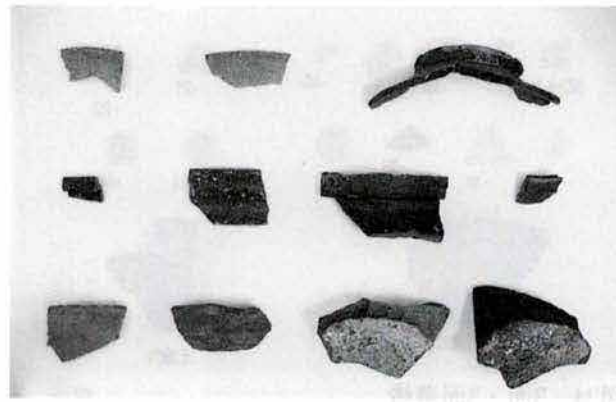


図22　2面構成土

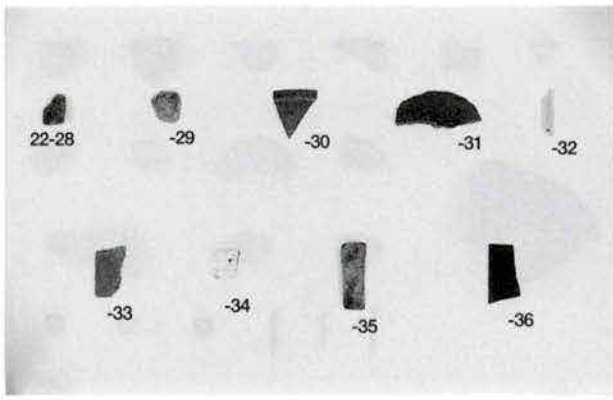


図22　2面構成土

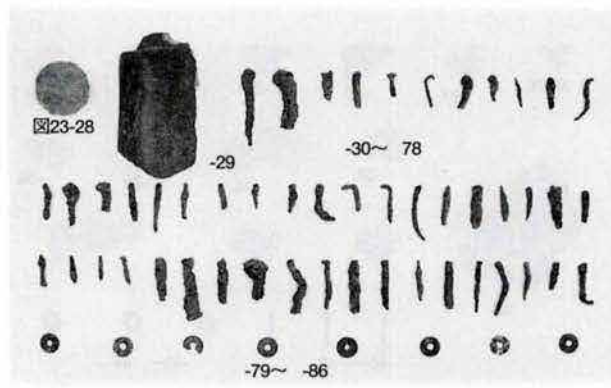


図23　2面構成土

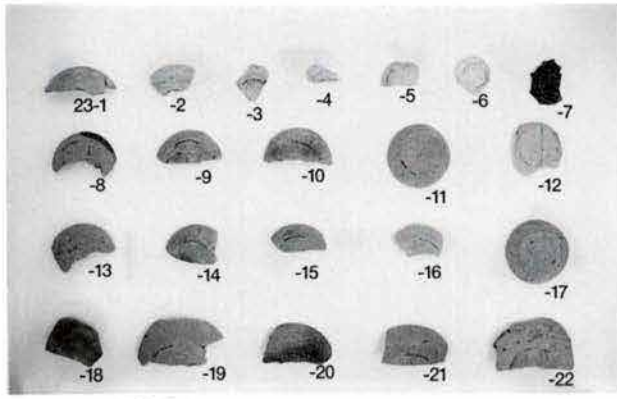
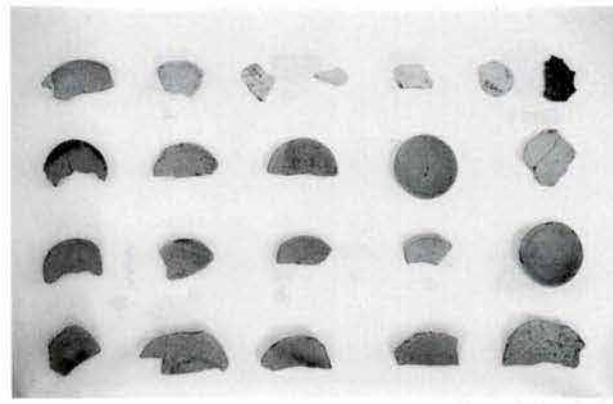


図23　2面構成土



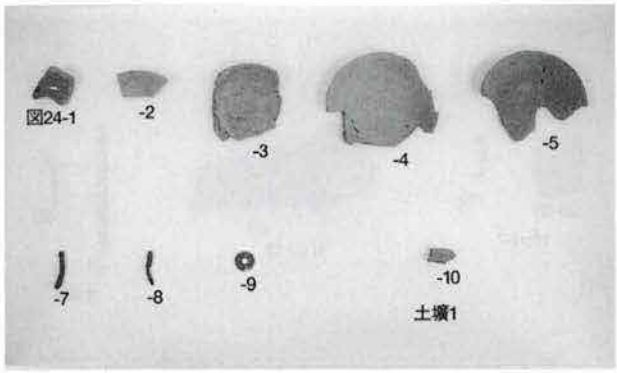
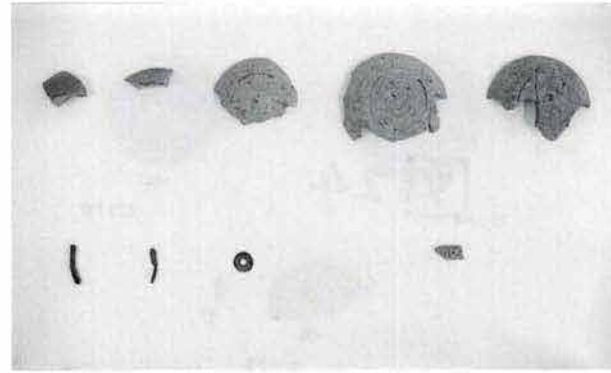
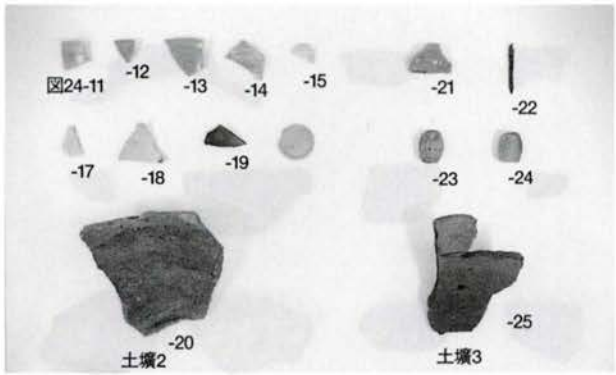


図24　3面・3面構成土



図版15



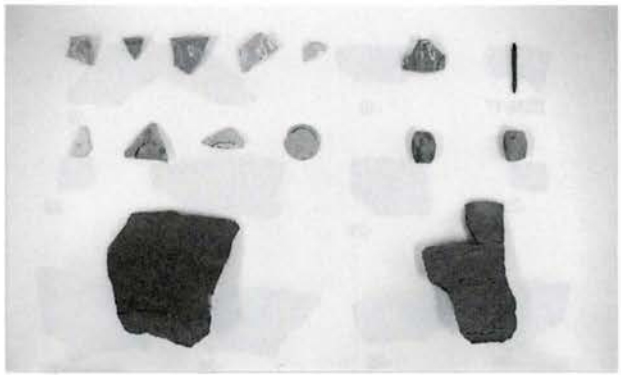
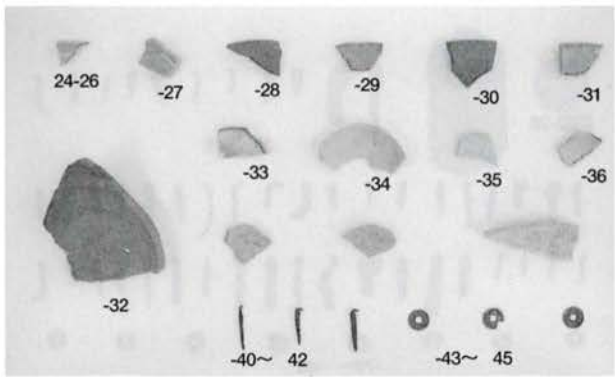


図24　3面・3面遺構



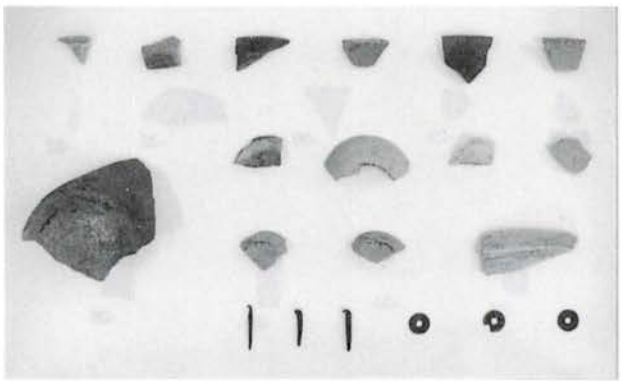
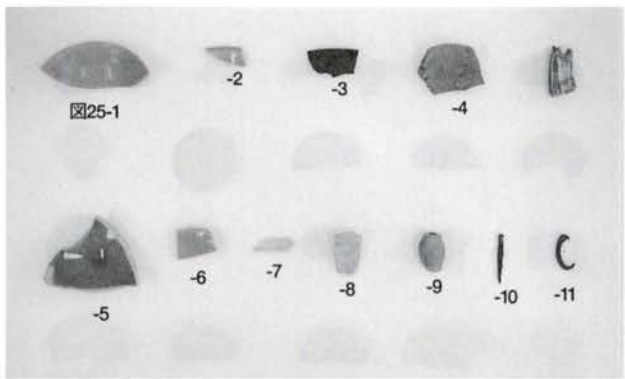


図24　3面・3面遺構



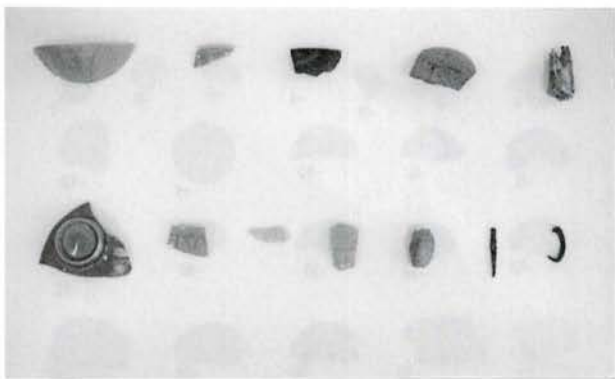


図25　3面遺構

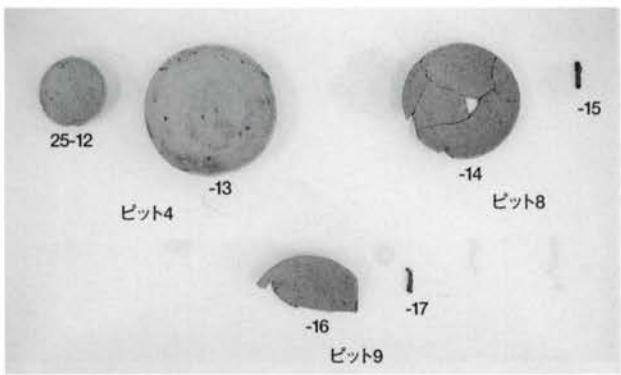


図25　3面遺構

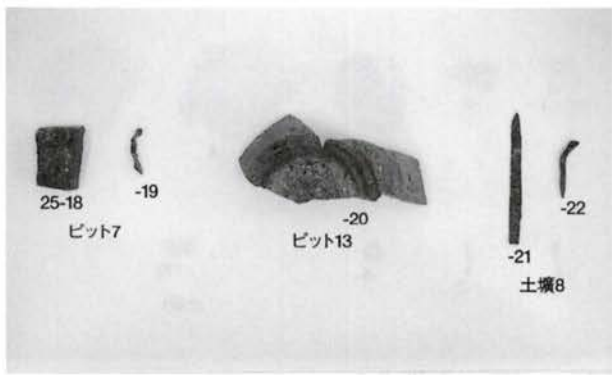
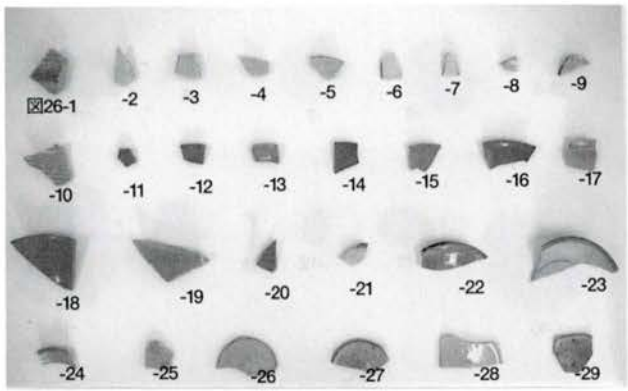


図25　3面遺構



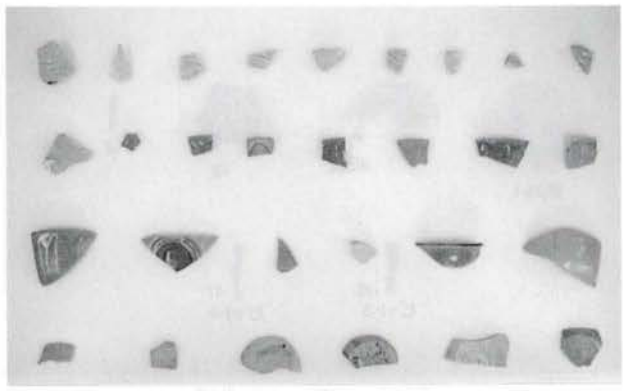
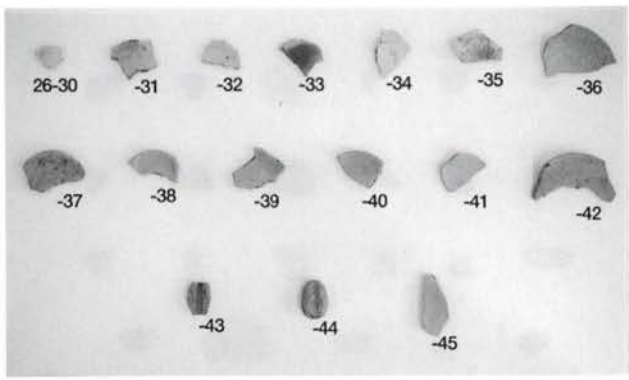


図26　3面構成土



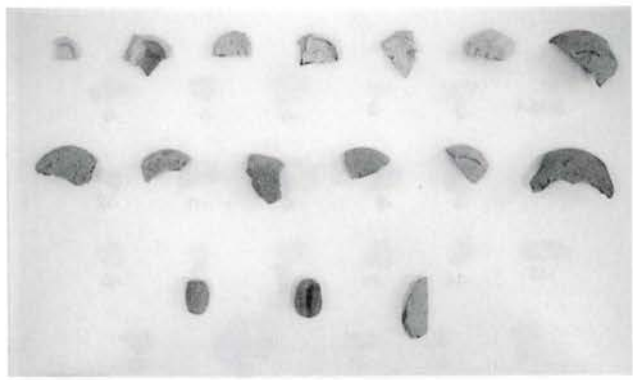


図26　3面構成土

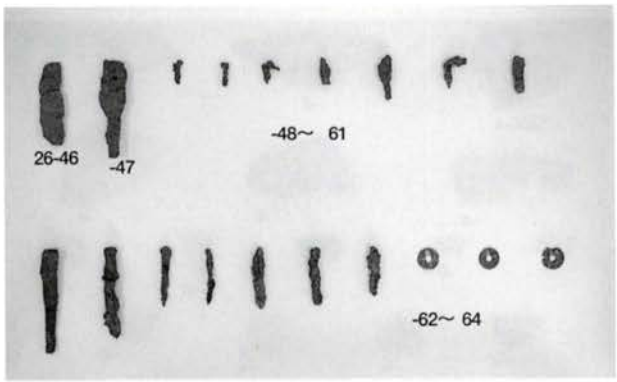


図26　3面構成土

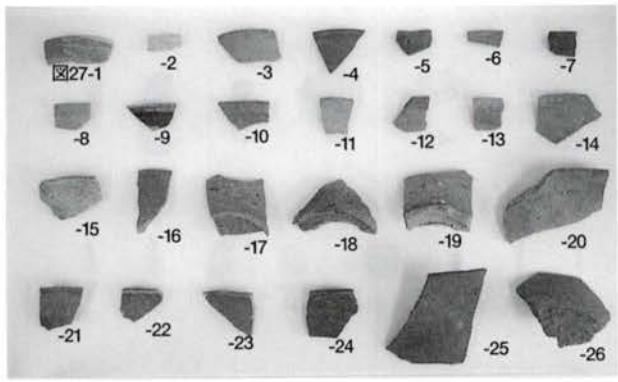


図27　3面構成土

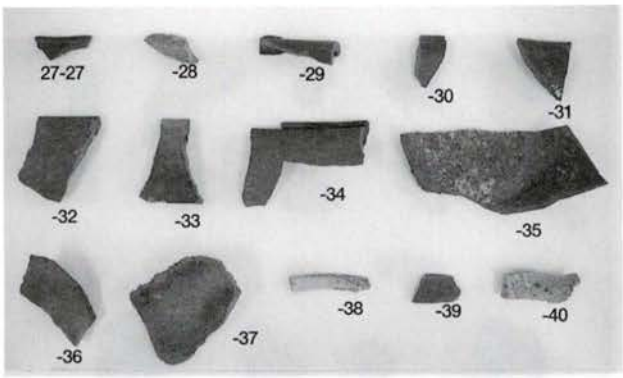
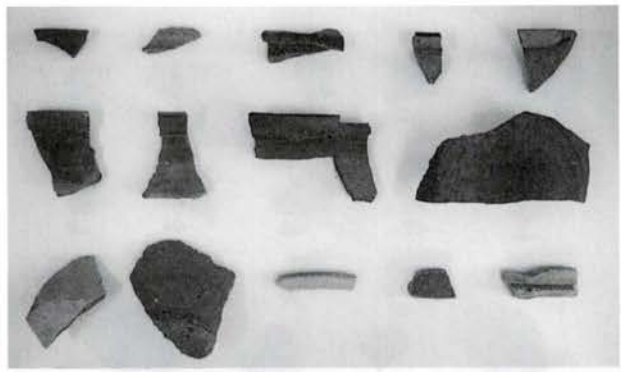


図27　3面構成土



図版17

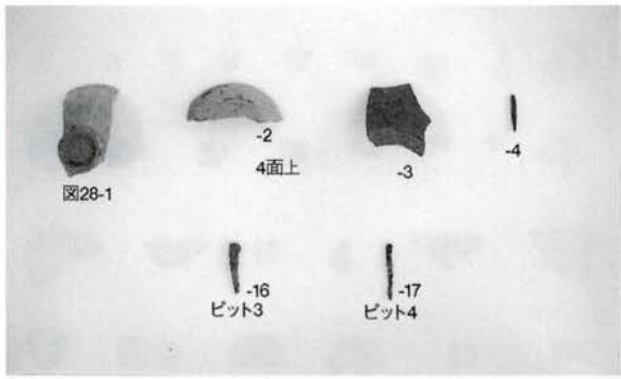


図28　4面・4面遺構

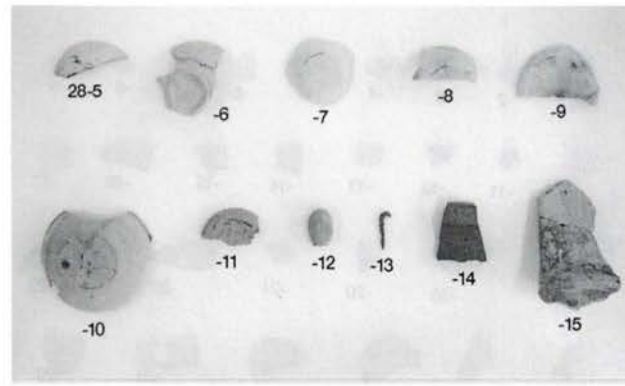


図28　4面・4面遺構

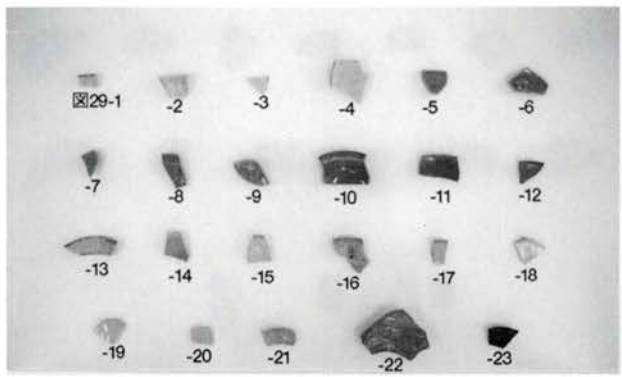
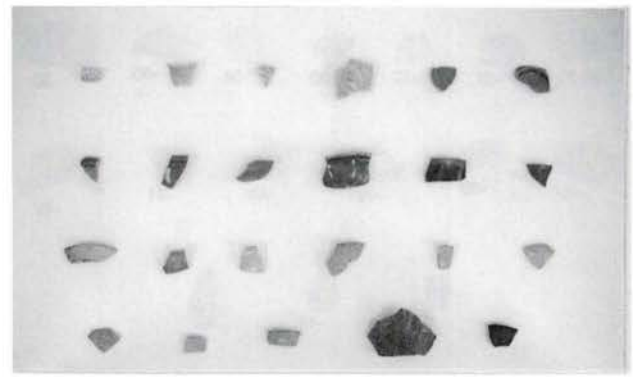


図29　4面　構成土



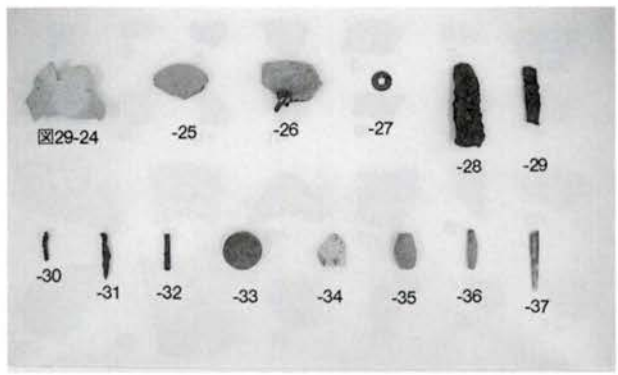


図29　4面　構成土

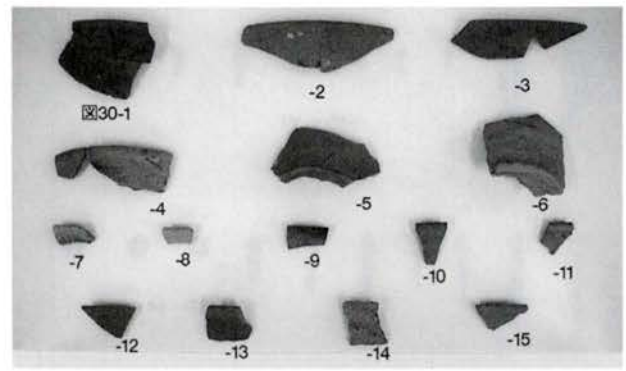


図30　4面構成土

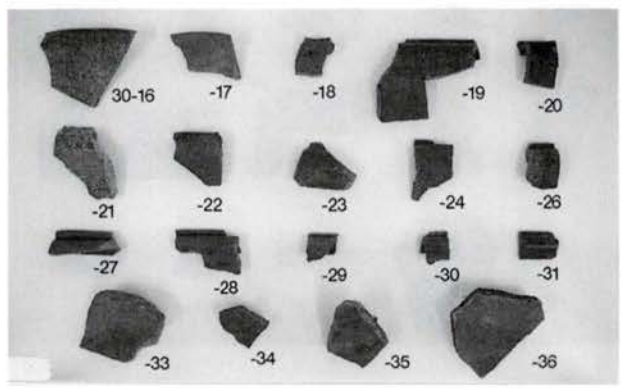
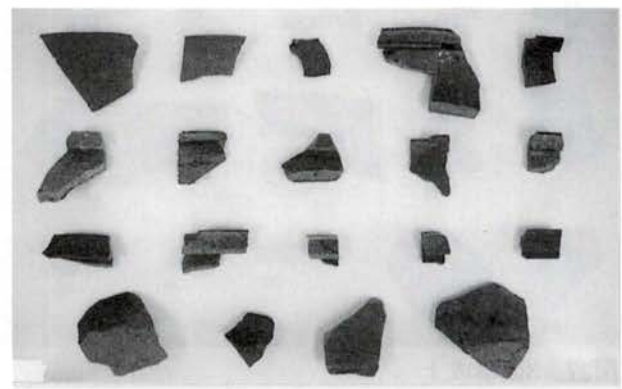


図30　4面構成土



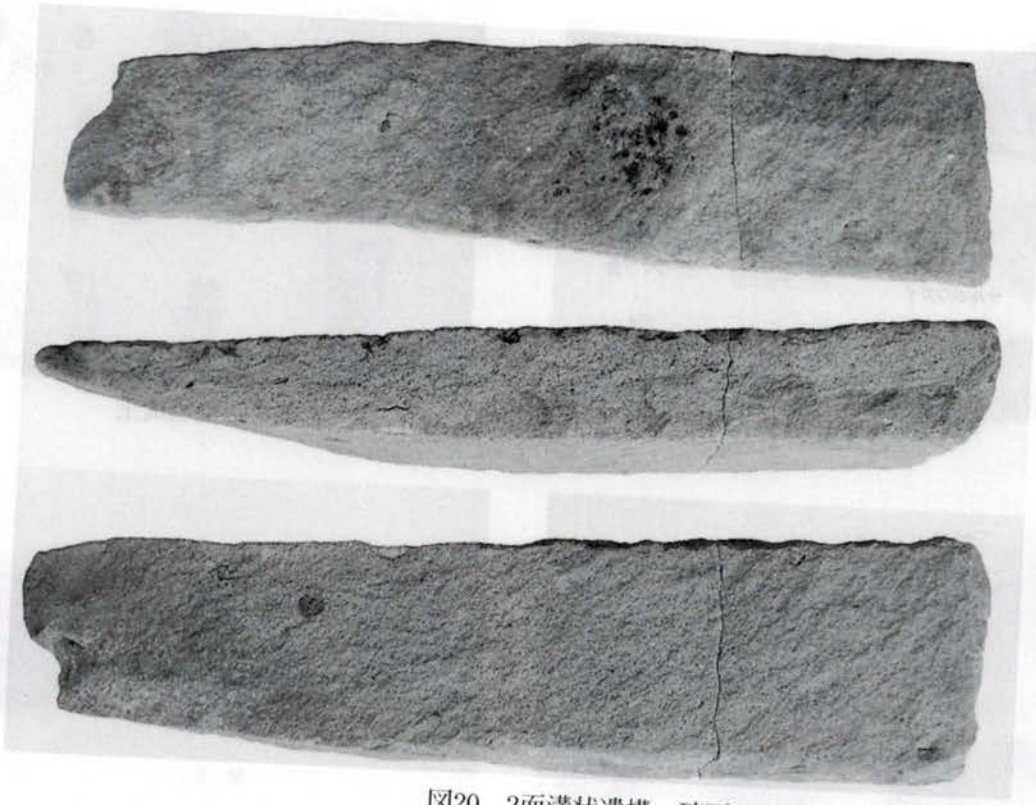
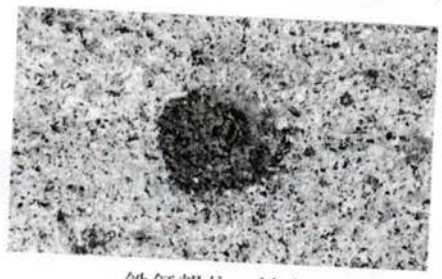


図20　2面溝状遺構　碇石



鉄釘部分　拡大

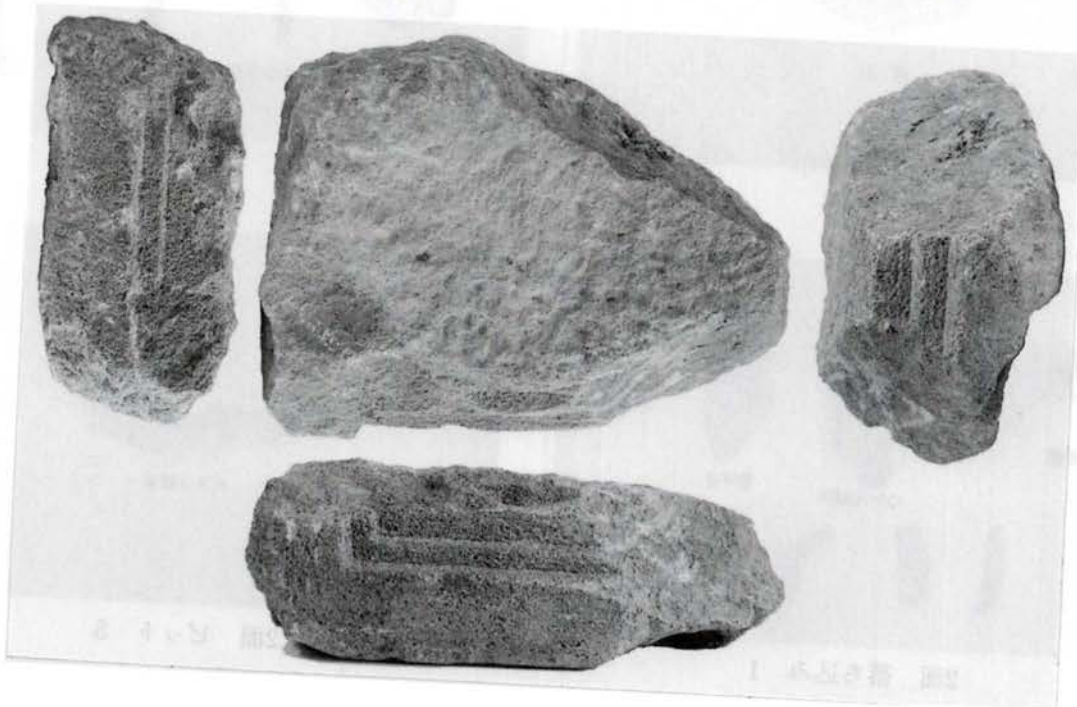
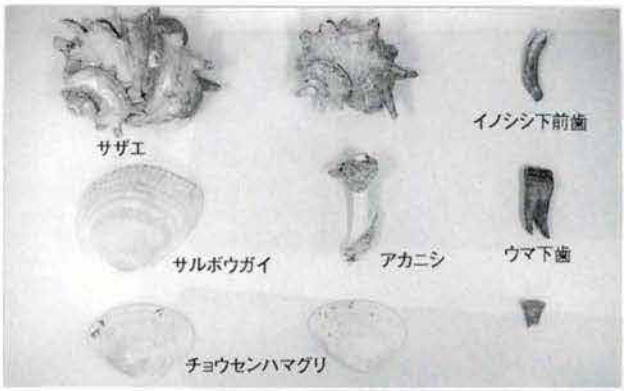
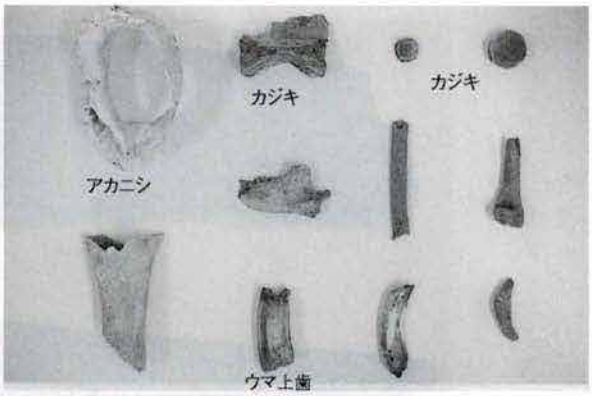


図9　包含層

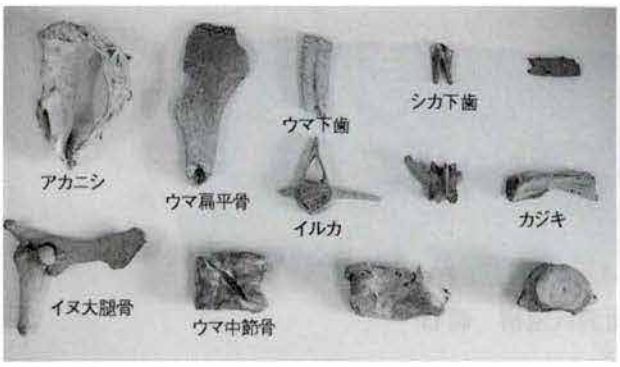
図版19



包含層

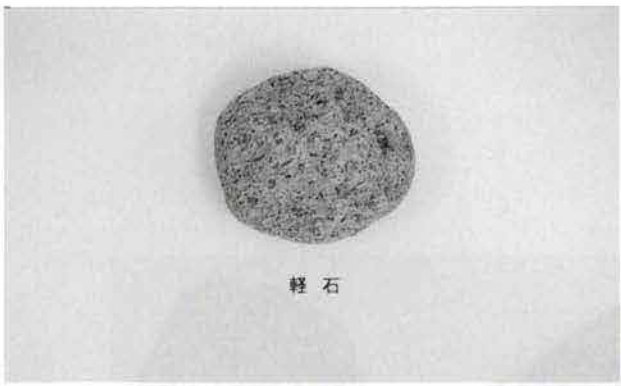


1面構成土

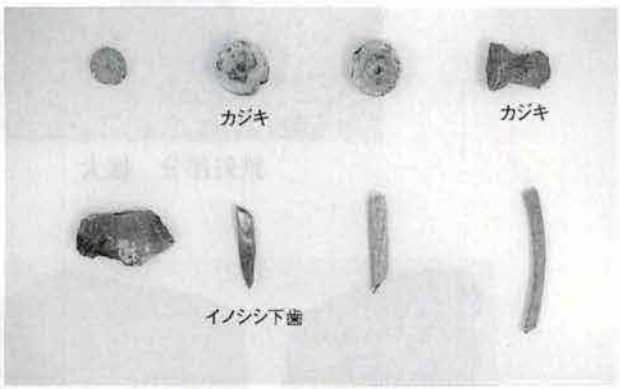


1面構成土

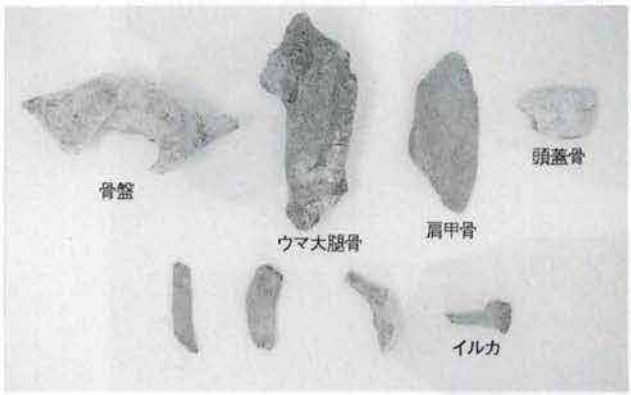
1面構成土



1面構成土

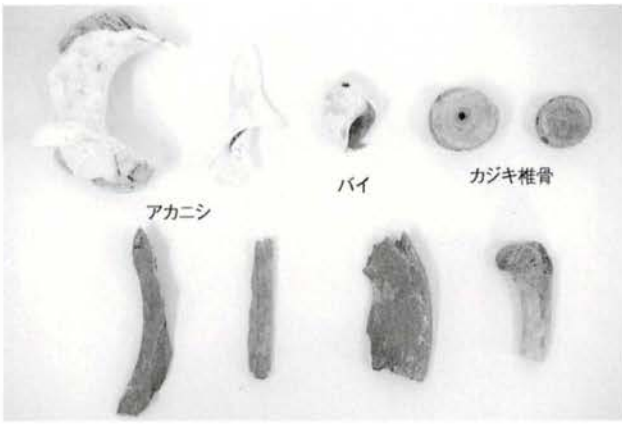


2面

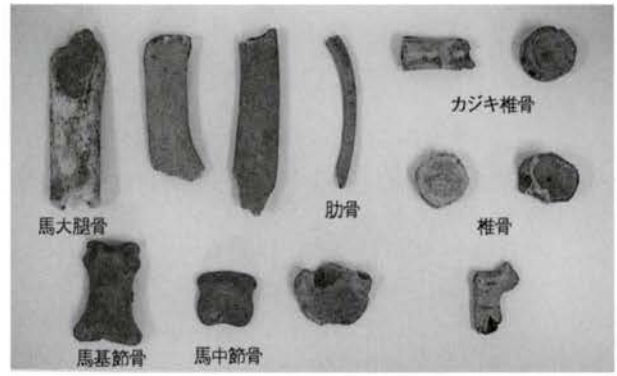


2面　落ち込み　1

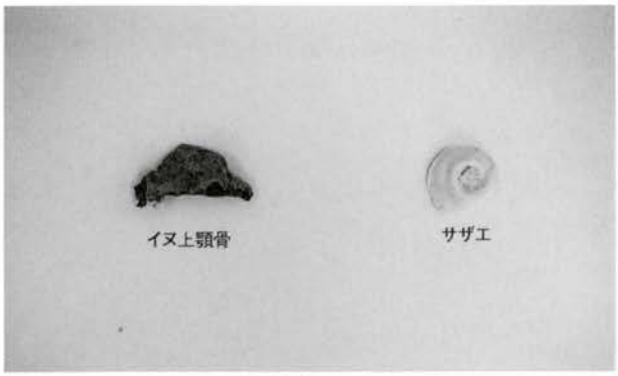
2面　ピット　5



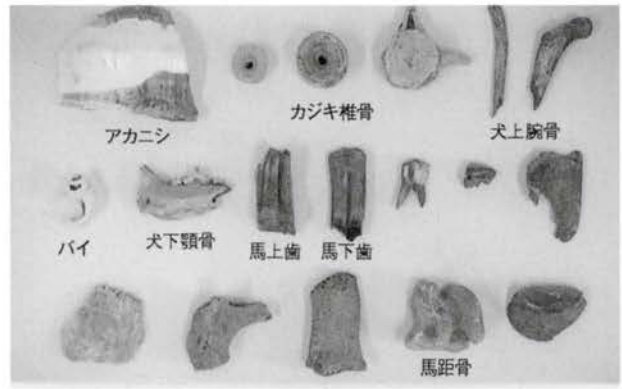
2面



2面構成土

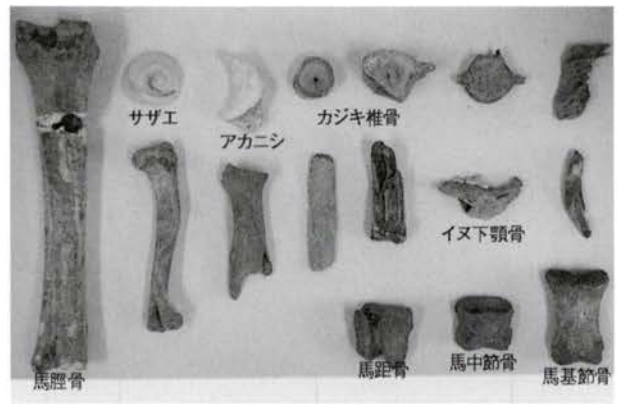


3面ピット9

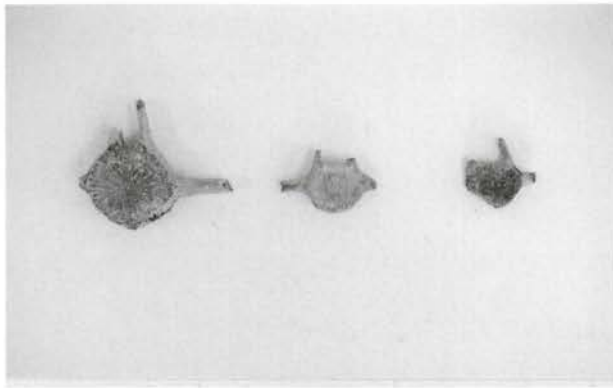


3面構成土

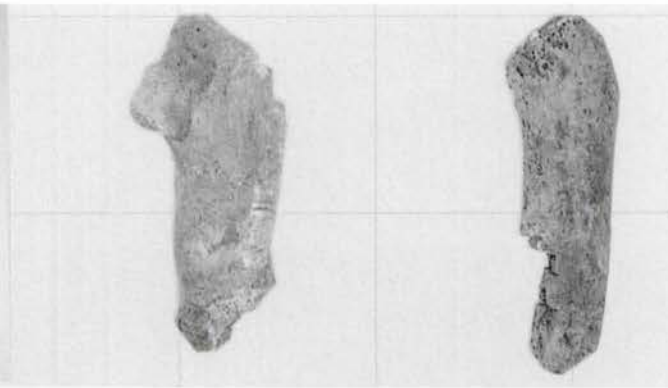
3面構成土



4面構成土



最終トレンチ



2面落ち込み1
馬骨解体痕？

3面構成土出土
馬骨加工痕？

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

雪ノ下一丁目161番33の一部地点

例　言

1. 本報は雪ノ下一丁目161番33の一部における個人専用住宅建設にともなう埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査期間　平成15年5月9日～同年6月11日
3. 調査面積　24㎡
4. 本地点の整理上の略称はY1161とした。
5. 調査体制
   - 担当者　馬淵和雄
   - 調査員　鍛治屋勝二
   - 調査補助員　松原康子・沖元道・吉田智哉
   - 作業員　天野隆男・柴崎英輔・渡辺輝彦（社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
6. 本報作成分担
   - 遺構図版作成　鍛治屋
   - 遺物実測　松原・宇賀神雅子・河内令子・坂倉美恵子・渡辺美佐子
   - 実測図墨入れ　松原・宇賀神・河内・坂倉
   - 挿図版組み　鍛治屋・松原
   - 遺物計量表　沖元
   - 遺物写真撮影　鈴木弘太
   - 写真版組み　鈴木
   - 原稿執筆　馬淵・鍛治屋・鈴木（担当箇所末尾に記名）
   - 編集・総括　馬淵

目　次

本文目次

第1章　調査地点の概観
- 1. 位置と地勢……180
- 2. 歴史的環境……180

第2章　調査の概要
- 1. 調査にいたる経緯……187
- 2. 調査方法……187
- 3. 調査経過……188

第3章　調査の成果
- 第1節　層序……189
- 第2節　発見された遺構と遺物……191
  - 1. 1面……191
  - 2. 2a面……195
  - 3. 2b面……198
  - 4. 3面……202
  - 5. 4面……209
  - 6. 5面……211
  - 7. 6面……212
  - 8. 7面……216
  - 9. 深掘り・採集遺物……218
- 第3節　自然遺物
  - 1. 動物遺存体……229
  - 2. 貝類……230
  - 3. 植物遺存体……232
  - 4. 竪穴遺構2……232

第4章　まとめと考察
- 第1節　遺跡の変遷と時期区分……233
- 第2節　遺構の軸方位と性格……235

挿図目次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ……181
図2　調査地点と周辺の遺跡 ……183
図3　調査地点付近の近世古絵図 ……184
図4　座標図 ……187
図5　土層断面図 ……190
図6　1面遺構全図 ……191
図7　溝1・土坑1・P.1,同出土遺物 ……192
図8　1面出土遺物 ……193
図9　2a面遺構全図,建物1・2,同出土遺物 ……194
図10 溝2・落込み1 ……196
図11 溝2・落込み1出土遺物 ……197
図12 2b面遺構全図・建物3・柱穴列1 ……198
図13 竪穴遺構1・溝3 ……200
図14 竪穴遺構1出土遺物(1) ……201
図15 竪穴遺構1出土遺物(2) ……202
図16 竪穴遺構1出土遺物(3) ……202
図17 竪穴遺構1出土遺物(4) ……203
図18 竪穴遺構1出土遺物(5)・溝3出土遺物 ……204
図19 据甕1,同出土遺物 ……205
図20 3面遺構全図・3面出土遺物 ……206
図21 竪穴遺構2・溝4・溝状遺構1 ……207
図22 竪穴遺構2・溝4出土遺物 ……208
図23 4面遺構全図,4面出土遺物 ……210
図24 落込み2,同出土遺物 ……211
図25 5面遺構全図 ……212
図26 5面出土遺物・p.26,同出土遺物 ……213
図27 6面遺構全図・土坑4,同出土遺物 ……214
図28 溝5,同出土遺物 ……215
図28 溝5,同出土遺物 ……216
図30 深掘り・採集遺物 ……217
図31 出土動物骨 ……229
図32 遺構変遷図 ……234
図33 類似遺構事例 ……240

表目次

表1　出土遺物観察表（1） ……218
表2　出土遺物観察表（2） ……219
表3　出土遺物観察表（3） ……220
表4　出土遺物観察表（4） ……221
表5　出土遺物観察表（5） ……222
表6　出土遺物観察表（6） ……223
表7　出土遺物観察表（7） ……224
表8　出土遺物観察表（8） ……225
表9　出土遺物観察表（9） ……226
表10 出土遺物計量表（1） ……227
表11 出土遺物計量表（2） ……228
表12 完形箸状木製品寸法分布 ……228
表13 貝類遺存体分類表 ……231
表14 植物遺存体分類表 ……232

図版目次

図版1-1　調査地点鳥瞰（上が北） ……244
図版1-2　調査地点近景（南から） ……244
図版1-3　1面全景（南から） ……244
図版1-4　1面全景（北から） ……244
図版1-5　1面土坑1（南から） ……244
図版2-1　2a面全景（南から） ……245
図版2-2　2a面全景（東から） ……245
図版2-3　2a面溝2・落込み1（北から） ……245
図版2-4　2a面溝2東岸砂岩切石（北東から） ……245
図版2-5　2b面全景（東から） ……245
図版2-6　2b面全景（南から） ……245
図版3-1　2b面竪穴遺構1（西から） ……246
図版3-2　2b面竪穴遺構1・溝3（北から） ……246
図版3-3　手前から竪穴遺構1・溝3（東から） ……246
図版3-4　2b面竪穴遺構1南側束材・側板と土師器（北から） …246
図版3-5　2b面据甕1（西から） ……246
図版3-6　2b面溝3（北から） ……246
図版4-1　3面上全景（南から） ……247
図版4-2　3面全景（南から） ……247
図版4-3　3面全景（東から） ……247
図版4-4　3面溝4（北東から） ……247
図版4-5　3面溝4東岸裏込め部（西から） ……247
図版4-6　道路状遺構（東から） ……247
図版4-7　3～4面道路状遺構（東から） ……247
図版4-8　4面道路状遺構（東から） ……247
図版5-1　右：3面竪穴遺構　左：4面（東から） ……248
図版5-2　上：3面竪穴遺構2　下：4面上（南から） 248
図版5-3　6面全景（東から） ……248
図版5-4　6面道路状遺構（東から） ……248
図版5-5　調査区北壁土層断面 ……248
図版5-6　調査区南壁土層断面 ……248
図版5-7　試掘坑（道路状遺構）北壁土層断面 ……248
図版6　1面・2a面溝2・落込み1出土遺物 ……249
図版7　2b面竪穴遺構1出土遺物 ……250
図版8　3面竪穴遺構2・溝4出土遺物 ……251
図版9　4面・5面・6面・深掘り出土遺物・採集遺物 …252

第1章　調査地点の概観

1. 位置と地勢

本調査地点である雪ノ下一丁目161番33は、市の設定した史跡若宮大路を囲む「若宮大路周辺遺跡群(No242)」の北西域に位置する。鶴岡八幡宮西南角から寿福寺にいたる東西道のほぼ半ばに、南にのびる路地がある。この路地を約50m下った道沿いの宅地で、若宮大路から直線距離で西に約225m、扇ヶ谷川が窟堂前で東に蛇行した部分より東に最短約60mのところである。北緯35°19'13.2～13.5"、東経139°33'19.0～19.5"、国土座標はX－75 352.000～－75 359.000、Y－25 266.000～－25 278.000の範囲内にある。

地勢的にみれば市街地一帯は、南の海岸部を除いて、大半が沖積低地となる。現況の海抜高は、若宮大路北端の赤橋付近で10.1m、二の鳥居で5.9m、下馬交差点で3.6m、一の鳥居付近で8mと、北から南へ緩やかに傾斜している。低湿地の旧河川や地下水は、旧国道134号線の南方一帯にひろがる砂丘微高地に行き当たって滑川に合流し、由比ガ浜の海岸へと流れ込む。

調査地点の地表は10.8mで、山裾に近いためか少し高い。発掘調査はそこからさらに最深約8.5mまで掘り下げたが、基盤層(地山)はあらわれなかった。近辺の調査地点でも、図1の地点5(小町一丁目198番6)で約6.3m、地点2(雪ノ下一丁目200番3)で約7.2m、地点3(雪ノ下一丁目210番ほか)で約8.6mまで掘り下げられているが、いずれも基盤層を確認していない。ただし先の地点3での原因者負担分(未報告)のトレンチ調査において、厚く堆積した粘性の強い暗褐色土の下、海抜約5.3m(地表下約5m)で基盤層の灰青色砂層が確認された。しかしそれより約50m南の地点6(小町2丁目39番6)では基盤層が約7.1m、若宮大路沿いの地点56・60(「北条時房・顕時邸跡」雪ノ下一丁目271番4・273番イ)で7.3～7.5m、今小路沿い52地点(「今小路西遺跡」扇ヶ谷一丁目131番1)では約9mの高さで基盤層(青灰色砂層)に達している。つまり本調査地点を含む北西域は、扇ヶ谷川の開析によって窪んだ基盤層の上にできた低湿地帯と推測できる。

2. 歴史的環境

本地点の町名である雪ノ下の由来は、源頼朝が鶴岡別当坊の北向きの山陰に氷室を作り、夏まで雪を保存させようとした（『吾妻鏡』建久二年二月十七日条)、この雪屋の下方の地という意味らしい。鶴岡八幡宮境内とその周辺が雪ノ下村と呼ばれはじめるのが、江戸初期からになる。『扇ヶ谷村絵図』（天保三年－1832）・『英勝寺・鶴岡八幡宮領境界図』（近世末）をみればどちらも窟不動(窟堂)を境にして、東を雪ノ下(または東雪ノ下)村と記している。なお先に挙げた同遺跡3地点(雪ノ下一丁目210番ほか)では、「いわやどう」と書かれた木簡が試掘坑より出土している(年代不明)。

窟堂は、「石屋堂」「岩井堂」などともよばれ、文治四年(1188)に、窟堂の堂守とされる聖阿弥陀仏房が勝長寿院に参詣の帰途、頓死した。その時、八十四歳であったため、窟堂は平安末期にはすでに存在していたというのが通説である。またその西にある寿福寺の地は、かつて頼朝の父・義朝の居館「鎌倉之楯」であったとされる（『吾妻鏡』正治二年閏二月十二日・十三日条)。寿福寺と窟堂を結ぶ東西道は頼朝入府以前からあって、さらに北方の化粧坂を越え、山之内に抜けて武蔵方面に通じていた重要な幹線道路だったといえる。この東西道は武蔵大路、窟小路、窟堂道などと呼ばれており(以後窟小路とよぶ)、鶴岡八幡宮建立以前は、朝比奈峠から入ってくる六浦道から大倉郷を抜ける横大路と、かつては直線上に結ばれていたものと推定できる（馬淵1994)。とすれば、東から入ってきたこの道が真直ぐに向かう先が、義朝邸であったということである。

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

頼朝は、鎌倉に入府した治承四年(1180)の八月十二日、祖先・源頼義が石清水八幡宮よりひそかに勧請した由比若宮八幡宮を、当時小林郷北山と呼ばれていた地の山麓(現・下拝殿付近)に遷座し、二年後の寿永元年(1182)三月十五日には、曲横していた社頭から由比ガ浜にいたる南北道を、直線の参詣道(若宮大路)として造成した。また同年四月二十四日、社前の水田の耕作を止め、新たに池（現「源平池」）をつくったとされる(『吾妻鏡』同日条)。しかし『吾妻鏡』には絃巻田とよばれる三町余の水田に関してのみの記述しかない。また当時の鎌倉は漁師や農夫のほかは住んでいる者が少なかったとある。真偽はともかく、おそらくかつての調査地点を含めた小林郷と呼ばれる一帯には、このような水田が存在していたのだろう。道はその水田地帯を東西に横断するかたちで存在していたのではないか。

『吾妻鏡』によるその後の窟小路を見ると、文治四年(1188)元日、窟堂下の佐野基綱宅が焼け、数十宇の人屋が罹災、頼朝はじめ諸人が八幡宮に集まったとある。佐野基綱は弓馬にすぐれた武将で、火事の翌年、頼朝に近侍して奥州征伐に出陣している。「窟堂下」とはまさしく調査地点付近のことであり、この記述から察すれば、すでに調査地付近は御家人屋敷と民家が建ち並んだ、繁華な地域だと想像できる。また承久二年(1220)一月二十九日、窟堂辺りで出火、進士判官代・工藤右衛門尉らの家が焼け、同年三月九日にも窟堂辺りで民居数十宇が焼失、正嘉二年(1258)一月十七日、安達泰盛宅の出火が北上し、寿福寺を全焼させ窟堂ならびに周辺の民家までも焼失させたとある。

その後永仁四年(1296)四月にも窟堂は出火している(『隋聞私記』)。弘長三年(1263)四月七日には、窟堂近くの地蔵堂に群盗が隠れていたのを、夜行の輩(番兵)が生け捕ったという騒動が起っている。この地蔵堂は松源寺の前身といわれている。松源寺は真言宗、日金山弥勒院松源寺と号し、開山は貞節。『鎌倉志』によれば鉄観音の西、窟堂の山の中壇にあって、本尊は地蔵、運慶の作とあり、源頼朝の勧請と伝える。先の『扇ヶ谷村絵図』には二つの堂と石段、窟小路に通じる参道をもつ松源寺が描かれている。また江戸末期に描かれた『鶴岡八幡宮領并往還谷々小道分間図』には、松源寺だけでなく、現在ある本調査地点東の生活道も描き込まれている。松源寺は八幡宮の社僧とされていたが、この絵図では境域外になっており、後の神仏分離の折、仏教関係の什物の多くを一時松源寺へ移したとされる。その後まもなくして松源寺も廃されたらしい。寺の場所は現在の旧川喜多氏邸（平成6年鎌倉市に寄贈される）内にあり、山腹中壇の御堂跡地らしきものはまだ現存している。

松源寺の西側、窟堂手前にある愛宕社は寛保年中(1741～44)に京都から勧請されたものと『風土記稿』にある。窟小路を東に進むと、八幡宮東南角の県道との合流地点に鉄ノ井(くろがね)がある。いわゆる「鎌倉十井」の一つで、かつて井戸の底から頼朝の守護仏だった鉄製観音像が掘り出されたためにこの名がついたとされる。頼朝の持仏はもと銀製聖観音像で、後に法華堂の本尊となったが、これを模して鋳造されたのが鉄観音像であり、新清水寺(しんせいすいじ)を建立後、これを安置したという。しかし新清水寺の所在が、鉄ノ井の西側か山向こうの清水谷にあったのかはっきりとしない。ただ先に挙げた正嘉二年(1258)の、安達泰盛宅からの出火で「新清水寺」も延焼したとある。その後、観音像が掘り出され、その井戸の近くに堂を建て、像を安置したという(『新編鎌倉志』)。

窟小路に関する記述はまだ数多く残されているが、次に西へ抜け、寿福寺と南北道(今小路と武蔵大路)に目を向けることにする。寿福寺は、先にも少し触れたがかつての義朝邸であり、『吾妻鏡』治承四年(1180)十月七日、頼朝は鎌倉に入った当日、その地を訪れ、居宅を構えようとしたが、すでに岡崎義実が義朝菩提のための草堂を建立しており、また土地も手狭だったので沙汰やみとなった。その後、義実の第二子、土屋次郎義清の所有となった。その土屋義清は建保元年(1213)五月三日の和田合戦の際、同じ三浦一族である和田義盛に加担し、窟小路を通って八幡宮の赤橋辺りで流矢に当り戦死した後、寿

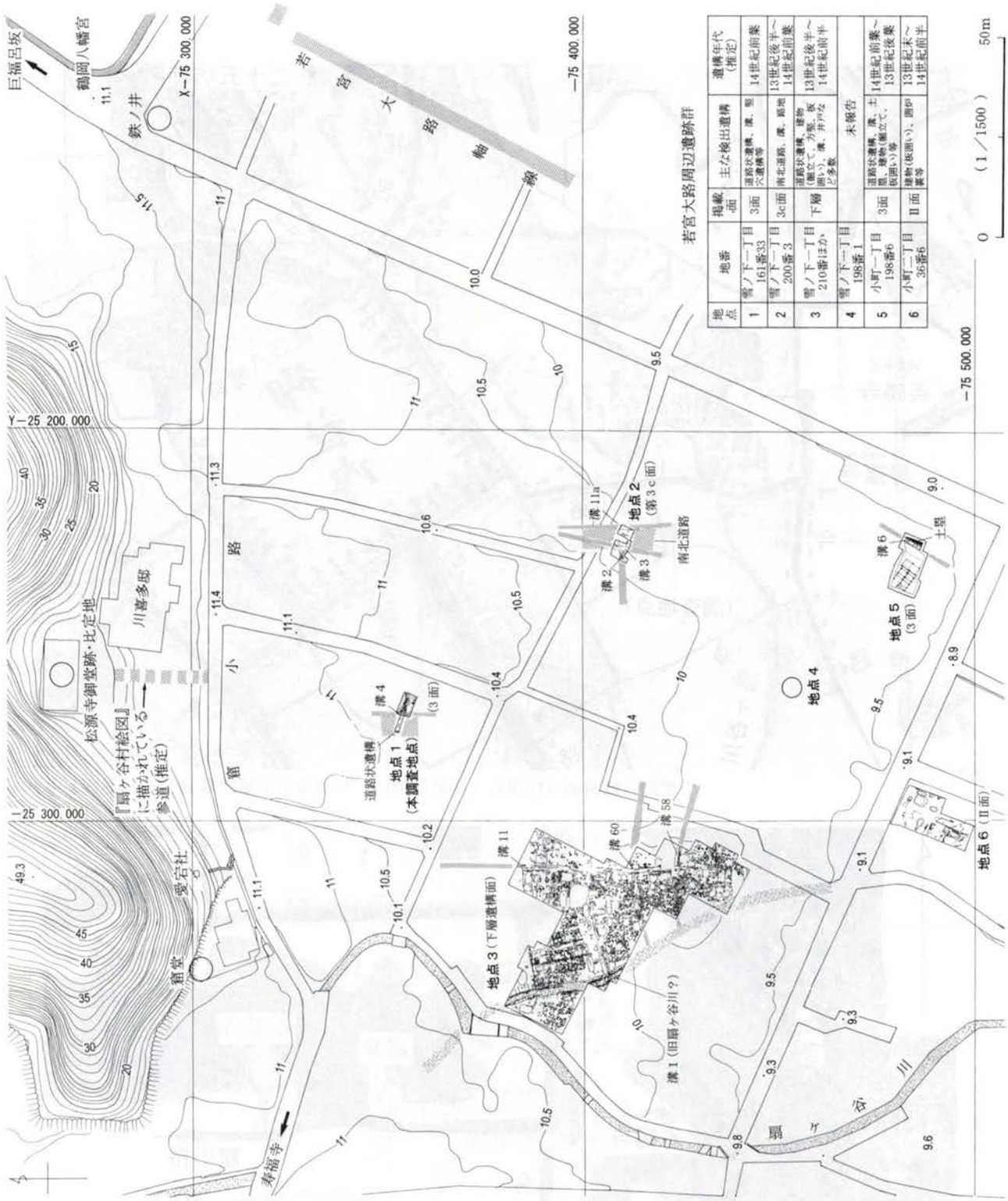
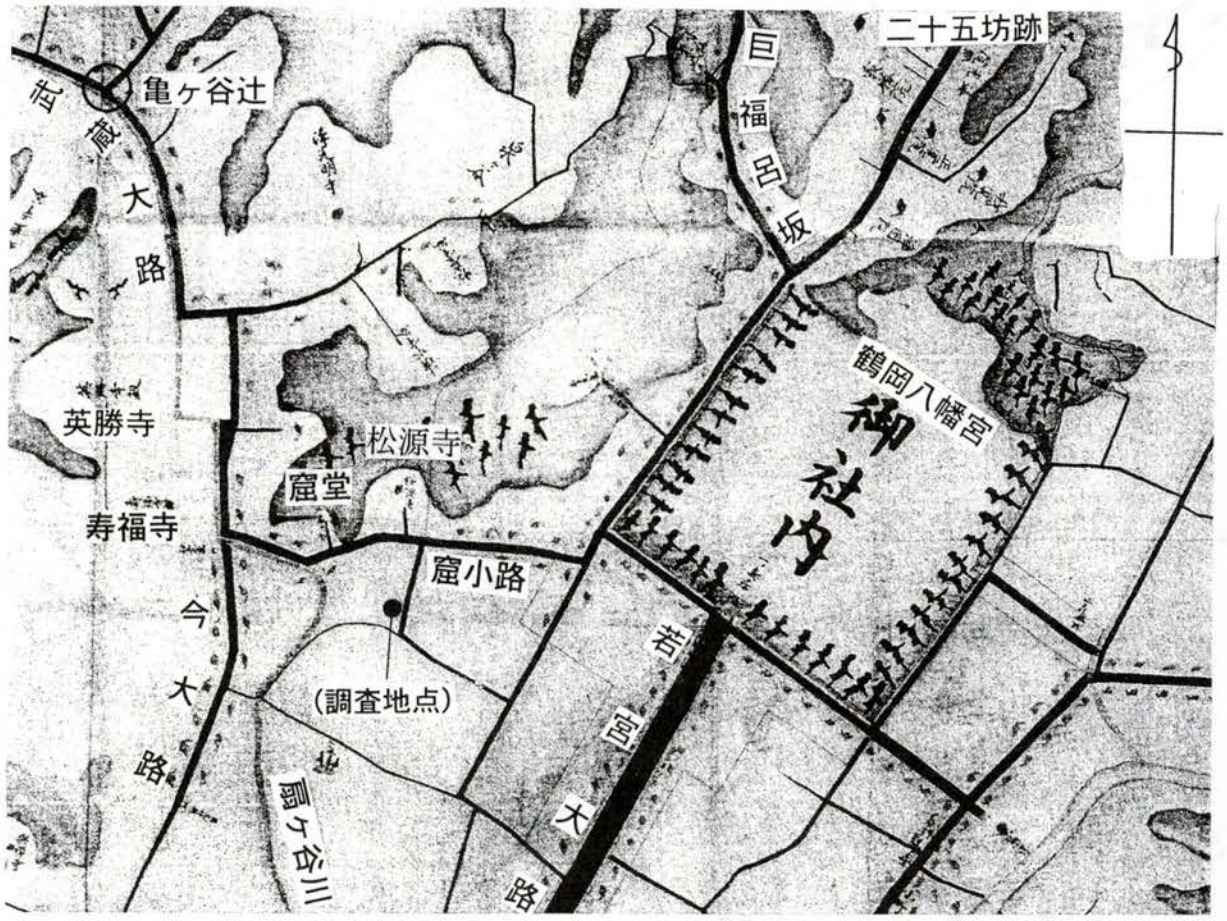


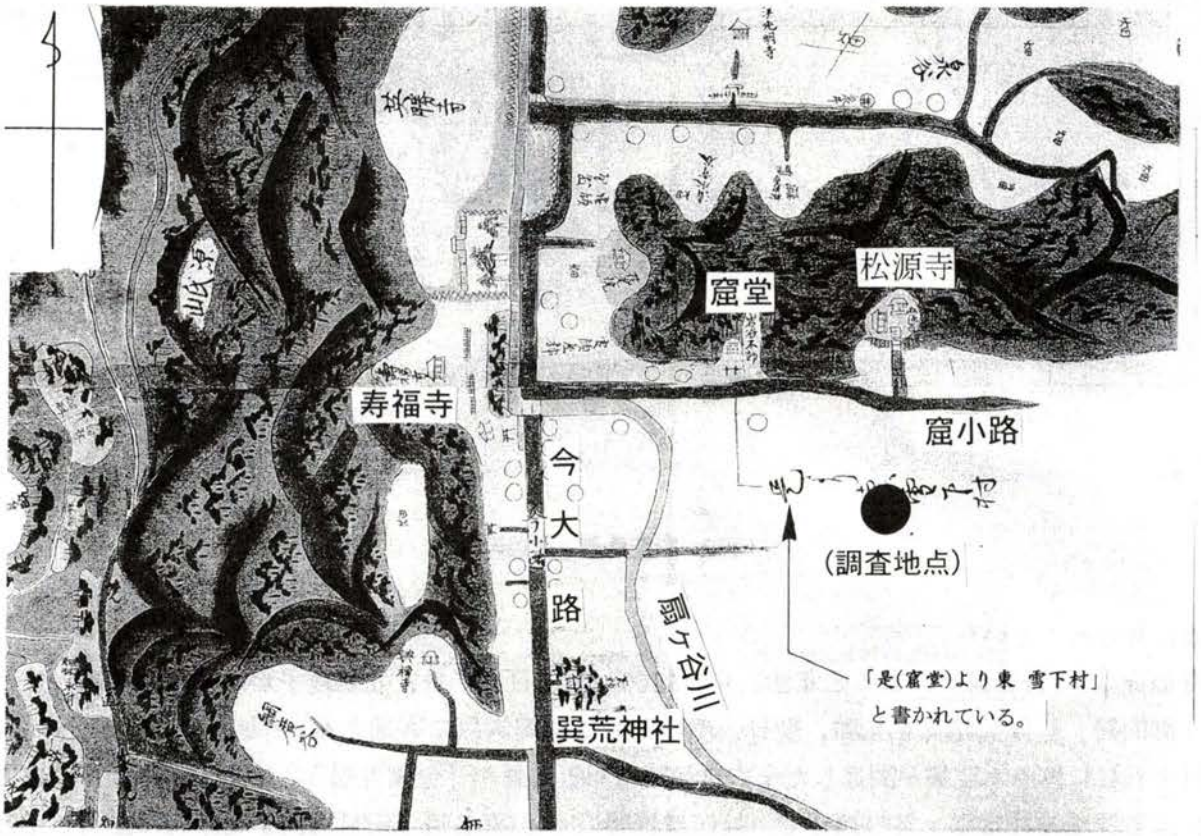
図2　調査地点と周辺の遺跡

福寺に葬られたという。

寿福寺は、『吾妻鏡』によると正治二年（1200）閏二月十二日、北条政子が義朝（「故典厩」）の亀谷の「御旧跡」に伽藍建立を発願、翌日、その伽藍は明庵栄西に寄進され、「寿福寺」と名づけられた。七月十五日に佐々木定綱が調進した十六羅漢図の開眼供養が「金剛寿福寺」で行われている。また今小路にある巽荒神社は扇ヶ谷の鎮守で、社伝は延暦二十年(801)坂上田村麻呂が葛原岡に勧請したと伝える。寿福寺の巽（南東）にあるのでその名がついたという(『新編鎌倉志』)。



「鶴岡八幡宮領并住還谷々小道分間図」(『鎌倉国宝館図録 鎌倉の古絵図』 II)



「扇ヶ谷村絵図」(同上)

図3　調査地点付近の近世古絵図

『快元僧都記』天文八年（1539）十月条に、去月二十八日より「扇谷今小路」の番匠主計助が荒神の宮を修補した、とみえる。これが「今小路」の初見である。『新編鎌倉志』『鎌倉攬勝考』はともに寿福寺から南、巽荒神までを今小路、以南から長谷までを長谷小路としている。それ以前は今大路と呼ばれていたらしい。先に挙げた地点52（扇ヶ谷一丁目131番1）では、鎌倉後期今大路の西側溝とみられる遺構が検出されている。なお長谷小路に関してひとこと添えておくと、その範囲が『新編鎌倉志』のとおりだとすれば、それ以前、鎌倉時代頃の「甘縄」（保の名称であろう）の郷域にほぼ相当することに注意が必要である。

武蔵大路も諸説あるが、古くは『吾妻鏡』養和元年（1181）九月十六日条に、足利俊綱の首を持参してきた桐生六郎が武蔵大路より使者を出すが鎌倉の中に入れず、頼朝は梶原景時をつうじて、ただちに深沢を経由して腰越に向かうよう指示したとある。この武蔵大路は化粧坂上でのできごとだろう。仁治元年（1241）十月二十二日には、群盗が武蔵大路の民居を襲ったので佐々木泰清ら近隣の武士が生け捕り、亀ヶ谷辺りが騒動したとあるが、この記述での武蔵大路は化粧坂の手前（鎌倉側）であり、坂から亀ヶ谷にいたる道をしめしている。

建長三年（1251）十二月三日に、小町屋や売買の設けを限定して許可した7カ所の商業地域に、亀ヶ谷辻、気和飛坂山上とみえる。文永二年（1265）三月五日の再令では二つの名は消え、代わりに武蔵大路下とある。亀ヶ谷辻は亀ヶ谷坂と武蔵大路の合流点で、坂は北条泰時が仁治元年（1240）に、山ノ内道・巨福呂坂を修造させた頃と同じくして整備されたものと推測できる。『鎌倉市史　総説編』ではさらに南下し、寿福寺から窟小路を抜け、八幡宮赤橋までを武蔵大路としている（高柳1959）。他方では現在の今小路の範囲までを武蔵大路に包括する説もあり、いずれにせよ鎌倉北西方面の重要な交通路であったことは疑いない。

最後に本地点の遺跡名である若宮大路だが、大倉幕府の頃は、南御門前を通る横大路(六浦道)・窟小路の軸線が重要視されていた。その後、嘉禄元年(1225)に宇津宮辻子付近に幕府が移転し（「宇津宮辻子幕府」）、それにともなって京都・奈良で施行されてきた都市統治制度である丈尺制と、屋敷単位としての戸主制が採用されていく中、町の主軸線が若宮大路に沿うように変化・発達していったとされる。にもかかわらず、本調査地点や近辺の地点2・3などは若宮大路の影響はほとんどみられない。むしろかつての窟小路(東西道)に軸線を合わせている。地点5では、若宮大路側溝と近似した軸線・構造をした木組みの溝とその東に土塁がともなって検出されている。この溝と若宮大路側溝との距離は約115mである。これらの遺構の相違や軸方位の変化については終章に述べることにする。

その後、江戸時代の調査地点は相模国小坂郡鎌倉雪下村とよばれ、幕府直轄領・鶴岡八幡宮領となった。天保初期の家数百四十五、うち鶴岡社人四十とある。『風土記稿』によれば八幡宮付近の賑やかな町であり、旅館なども営む者も多く、人馬の継立が行われていたそうだが、それは街道沿いに見られる風景で、本地点などの少し奥まった地は、江戸の絵図や明治前期の測量地図、昭和五年の鎌倉町土地事典、いずれを見ても田畑がひろがる農村地帯となり、かつての都市の面影は失われている。

（鍛治屋）

図1 調査地点名

地番の次の人名と西暦は、調査担当者と調査年度を示す。()内は文献。なお文献は第4章末尾に一括した。

若宮大路周辺遺跡群(No.242) 1.調査地点・雪ノ下一丁目161番33　2.雪ノ下一丁目200番3、宗臺・汐見2001 (宗臺ほか2003)　3.雪ノ下一丁目210番ほか、馬淵1988(馬淵1990)　4.雪ノ下一丁目198番1、斎木・菊川2002(未報告)　5.雪ノ下一丁目198番6、菊川1998(菊川ほか2000)　6.小町二丁目39番6ほか、田代1987～88(田代ほか1989)　7.小町二丁目54番3、原・汐見1998(未報告)　8.小町二丁目276番、原1987(未報告)　9.小町二丁目279番2、田代1989(未報告)　10.小町二丁目402番5、手塚・野本1999(野本2000)　11.小町二丁目280番2、田代1989(田代1990)　12.小町二丁目269番6ほか、原1989 (田代ほか1991)　13.小町二丁目281番、宮田1977(松尾1983)　14.小町二丁目28番3・5、原1996～97 (原1998)　15.小町二丁目69番6、原・汐見1989(田代ほか1991)　16.小町二丁目5番8、福田1997(福田ほか1998・菊川ほか1999)　17.小町二丁目279番2、田代1989(未報告)　18.小町二丁目12番10、大河内1991(未報告)　19.小町二丁目12番18、馬淵1987(馬淵1989)　20.小町二丁目4番8、原1990(未報告)　21.小町二丁目4番4、原・汐見1989(未報告)　22.小町二丁目4番6、田代1986(未報告)　23.小町二丁目283番6ほか、宮田1997(宮田ほか1998)　24.小町二丁目4番9、手塚・野本1996～97(未報告)　25.小町二丁目1番14？福田1986(未報告)　26.小町二丁目1番14、福田1986(未報告)　27.小町二丁目1番6、汐見2002　28.小町二丁目63番3、斎木1992(斎木1993)　29.小町248、原1990(未報告)　30.扇ヶ谷一丁目74番9、菊川1993(菊川1994) 31.扇ヶ谷一丁目74番8・10、菊川1988(菊川1990・1999)　32.小町一丁目120番1、手塚1986(手塚ほか1989)　33.小町一丁目116番、馬淵1985(馬淵1986)　34.小町一丁目116番4ほか、手塚1989～90(手塚ほか1999)　35.小町一丁目106番1、手塚1987(手塚ほか1999)　36.小町一丁目66番3・二の鳥居西遺跡、宮田1977(松尾1983)　37.小町一丁目65番10～12、松尾1977(松尾1983)　38.小町一丁目66番5、原1996(未報告)　39.小町一丁目67番2、福田1987(福田1994)　40.小町二丁目65番21、斎木・河野1979～80(斎木1982)　41.小町一丁目75番1、斎木1979(河野1982)　42.小町一丁目・蔵屋敷遺跡、調査会1982(服部ほか1984)　43.御成町123番5、汐見1997 (汐見ほか1999)　44.御成町12番18、服部1984 (服部ほか1986)　45.御成町228番2・130番1、斎木1985 (斎木1987)　46.小町二丁目345番2、馬淵1983(馬淵1985)　47.小町一丁目321番1、宮田1993(宮田1996)　48.小町一丁目322番2、菊川1987(未報告)　49.小町一丁目319番2・藤内定員邸跡、斎木1978ほか(松尾1983)　50.小町一丁目309番5、斎木1982(斎木1983)

華光院跡やぐら群(No.101) 51.扇ヶ谷二丁目191番、汐見2002(汐見ほか2003)

今小路西遺跡(No.201) 52.扇ヶ谷一丁目131番1、馬淵1987(馬淵1989)

北条時房・顕時邸跡(No.278)　53.雪ノ下一丁目265番3、松尾・斎木1988(原ほか1990・宗臺ほか1999)　54.雪ノ下一丁目271番1、原1987(原ほか1989)　55.雪ノ下一丁目271番3、馬淵1998(馬淵2000)　56.雪ノ下一丁目271番4、馬淵1998(馬淵2000)　57.雪ノ下一丁目272番、宗臺1996(宗臺ほか1997・1998)　58.雪ノ下一丁目273番ロ、原1986(原1988)　59.雪ノ下一丁目233番9、馬淵1986(馬淵1987)　60.雪ノ下一丁目273番イ、斎木・瀬田1997(斎木ほか1999・瀬田ほか1999)　61.雪ノ下一丁目274番2、原1986～87(原1988)

北条小町邸跡(泰時・時頼邸)(No.282) 62.雪ノ下一丁目377番6・7、馬淵1994～95(馬淵1996)　63.雪ノ下一丁目374番2、玉林・田代1985(玉林1986)　64.雪ノ下一丁目372番7、馬淵1984(馬淵1985)　65.雪ノ下一丁目371番1、馬淵1984(馬淵1985)　66.雪ノ下一丁目370番1、田代1996 (土屋ほか1998)　67.雪ノ下一丁目369番ほか、瀬田1990 (瀬田1991)　68.雪ノ下一丁目369番1、原1996 (原ほか1998)　69.雪ノ下一丁目419番3、玉林・田代1986(玉林1987)　70.雪ノ下一丁目367番1・368番1、宮田1999～00(諸星ほか2000)　71.雪ノ下一丁目395番、菊川1988(菊川1989)　72.雪ノ下一丁目401番ほか、馬淵2001(馬淵2003)　73.雪ノ下一丁目400番1、馬淵2000(馬淵2002)　74.雪ノ下一丁目432番2、菊川1988(菊川1989)

宇津宮辻子幕府跡(No.239) 75.小町二丁目373番1の一部、原1998(未報告)　76.小町二丁目366番1、手塚1990～91田畑佐和子1991)　77.小町二丁目363番1、原1996 (原廣志ほか1996・小林重子ほか1997)　78.小町二丁目354番2、松尾1977(松尾ほか1983)　79.小町二丁目354番12ほか、田代1991(熊谷ほか1993)　80.小町二丁目354番2、田代1992(継1993)　81.小町二丁目389番1、原・佐藤1994(佐藤ほか1996)

鶴岡八幡宮旧境内遺跡(No.56) 82.雪ノ下四丁目1072番1・銀杏用地、市教委1980(宇田川1980)　83.雪ノ下四丁目1051番1・直会殿、斎木1979(宮田ほか1983)　84.雪ノ下四丁目1051番1・国宝館、斎木1981～82(松尾1985)　85.雪ノ下四丁目1051番1・研修道場、斎木1981～82(斎木1983)　86.雪ノ下二丁目75番16、菊川1995(菊川1996)　87.裏八幡西谷遺跡、服部1980～81(服部1983)　88・89.雪ノ下二丁目16番2、斎木1986(斎木1987)　89.雪ノ下二丁目、斎木1986(斎木1987)

第2章　調査の概要

1. 調査にいたる経緯

個人住宅建設で、鋼管杭打ちをともなう基礎工事であったため確認調査をおこなったところ、中世の遺物とともに砂丘上に遺構面が検出されたので、発掘調査を実施した。

2. 調査方法

調査地点の東沿いにある生活道は幅4m弱で、わずかに屈折しながら北にある窟小路に行き当たる。

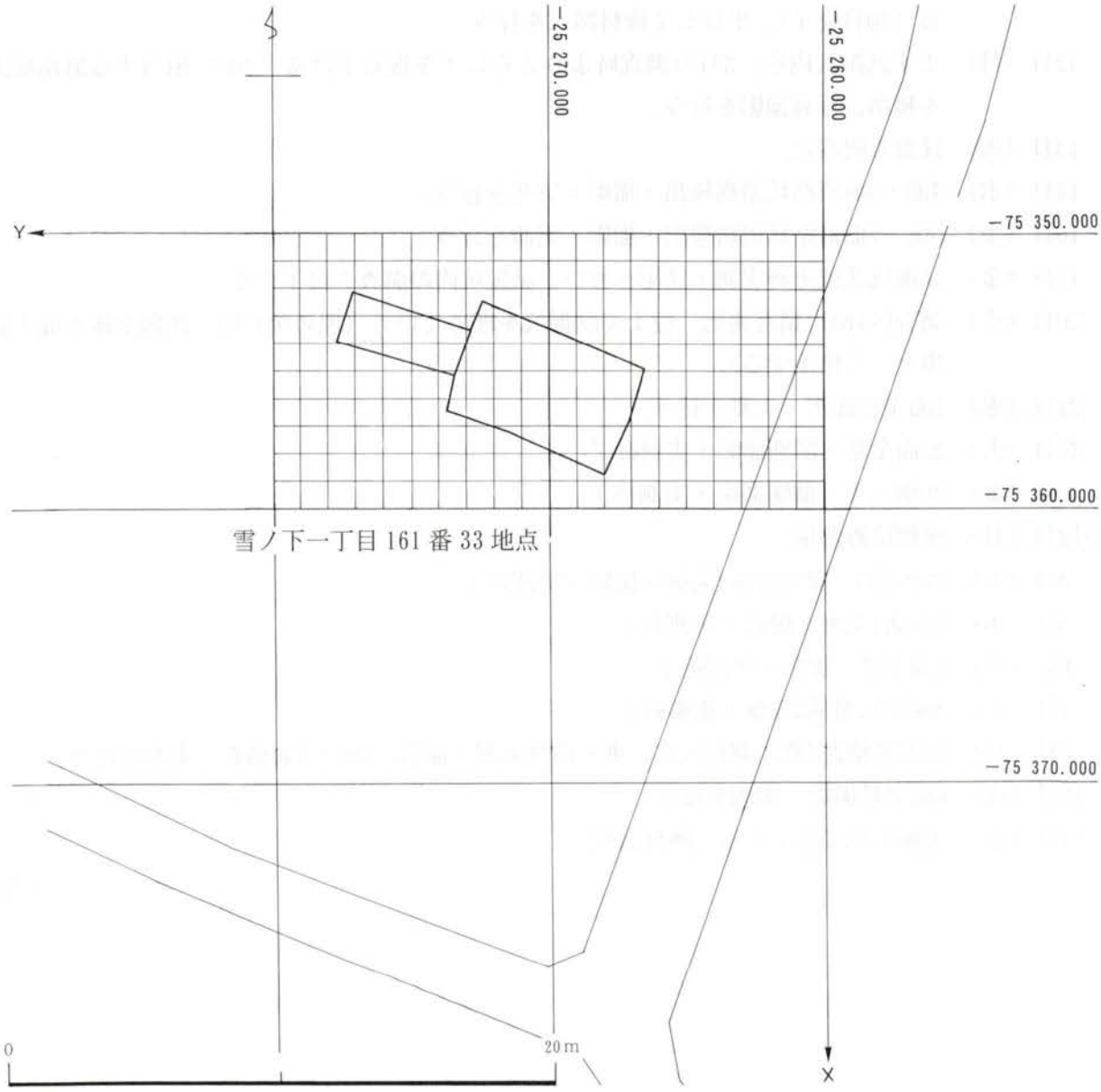


図4　座標図

調査地点前の道路の軸はN－20°－Eで、若宮大路のN－27.5°－Eとは若干のずれがある。住宅はこの生活道に沿って建設されるため、その調査区の形も前面の道路に直交する軸線をもつ、東西にのびた長方形となった。西にのびた狭小の部分は試掘坑になる。現地での調査は、利便性を優先し、調査区に沿った方眼軸を用いて測量した。その後、国土座標の4級点(S104・105)を使用し、その位置を求めた。

本報告書作成段階において、任意の方眼区画から、国土座標の方眼区画X－75 352.000～－75 359.000、Y－25 266.000～－25 278.000枠内に、遺構図を移し変えて掲載した。調査区の緯度経度は、北緯35°19'13.2～13.5"、東経139°33'19.0～19.5"。

3. 調査経過

調査は平成15年5月9日～同年6月11日の期間を要した。先に同年3月10日～11日にかけ確認調査が行われていたので、その部分については地表面より約170cmまで一括で掘り下げ、断面による中世の遺構面を確認後、一旦埋め戻された。その後の主な作業内容は次のとおり。

5月9日（金）　埋め戻された試掘坑を重機で掘り返した後、調査区に移り、表土下約50cmまで掘削する（10日完了）。平行して機材搬入を行う。

12日（月）　まず試掘坑内を、3月の調査時よりさらに下を掘り下げる。3面に相当する道路状遺溝を検出、写真撮影を行う。

13日（火）　任意方眼設定。

14日（水）　4面・5面道路状遺構検出・撮影・実測を行う。

16日（金）　6面・7面道路状遺構検出・撮影・実測を行う。

17日（金）　試掘坑北壁土層実測・注記を行い、試掘坑内の調査を終了する。

20日（火）　調査区1面の精査開始。廃土で試掘坑を埋めていく（埋め戻し後、西側全体を廃土置き場として使用する）。

21日（水）　1面全景撮影・実測を行う。

27日（火）　2a面全景・個別撮影・実測終了。

30日（金）　2b面全景・個別撮影・実測終了。

6月2日（月）　座標位置測量。

3日（火）　2b面溝3・竪穴遺構1完掘・撮影・実測終了。

5日（木）　3面溝4完掘・撮影・実測終了。

6日（金）　3面全景・撮影・実測終了。

7日（土）　3面竪穴遺構2完掘・撮影終了。

9日（月）　竪穴遺構2実測、調査区北・東・南壁実測・撮影、4面・5面精査・実測を行う。

10日（火）　6面全景撮影・実測を行う。

11日（水）　実測すべて終了する。機材撤収。

（馬淵）

第3章　調査の成果

第1節　層序

図5の土層図は、試掘坑内の北壁と調査区内の南壁を並べて図示したものである。調査地点の現地表面の海抜は10.80～90m、その下には近・現代の整地層と近世耕作土がともに70～90cmほど堆積する。中世層はその下、約10.26mからはじまる。調査は深度規制により、約8.80mを限度として行った。当時の生活面が良好に残されていたのは、2面・3面の大型泥岩地行層である。それ以外の面は損壊が激しく、整地痕もわずかしか残されていない。対照的に、試掘坑内は均一な地行面が幾層も積み重ねられていて、生活面に比べ、若干壇状に盛り上った造成がされている。この地行層は、試掘坑の範囲内ではその全体像を把握できなかったが、2・3面の調査区内東域を占める泥岩版築面とは明らかに異質で、「道路状遺構」と考えるのが妥当であろう。一方、試掘坑と本調査区を境にして西側の地行層は途切れ、生活面との間に下層から上層まで継続的に存在する南北の溝が検出された。試掘坑内の地行層が南北の道だとすれば、この溝はその東側溝と認識できよう。

東側には破砕泥岩を丹念に固めた地行面がある。面上にはいくつかの遺構があり、近在でいくつか検出された町屋とおぼしい遺構と共通することから、土間（状遺構）と認識した。

1面　海抜10.02～10.26m。構成土は明黄褐色弱粘質土などの中世包含層となる。上層の耕作土が、かつて畝状に掘り込まれていたらしく、残存する包含層の上面も凸凹していて、生活面とよべるものはすでに残っていない。包含層は粘性の少ないしまりのない土だが、泥岩・炭化物・鉄分・遺物片が多く含まれており、中世期の遺構も検出されたため、便宜上1面とした。

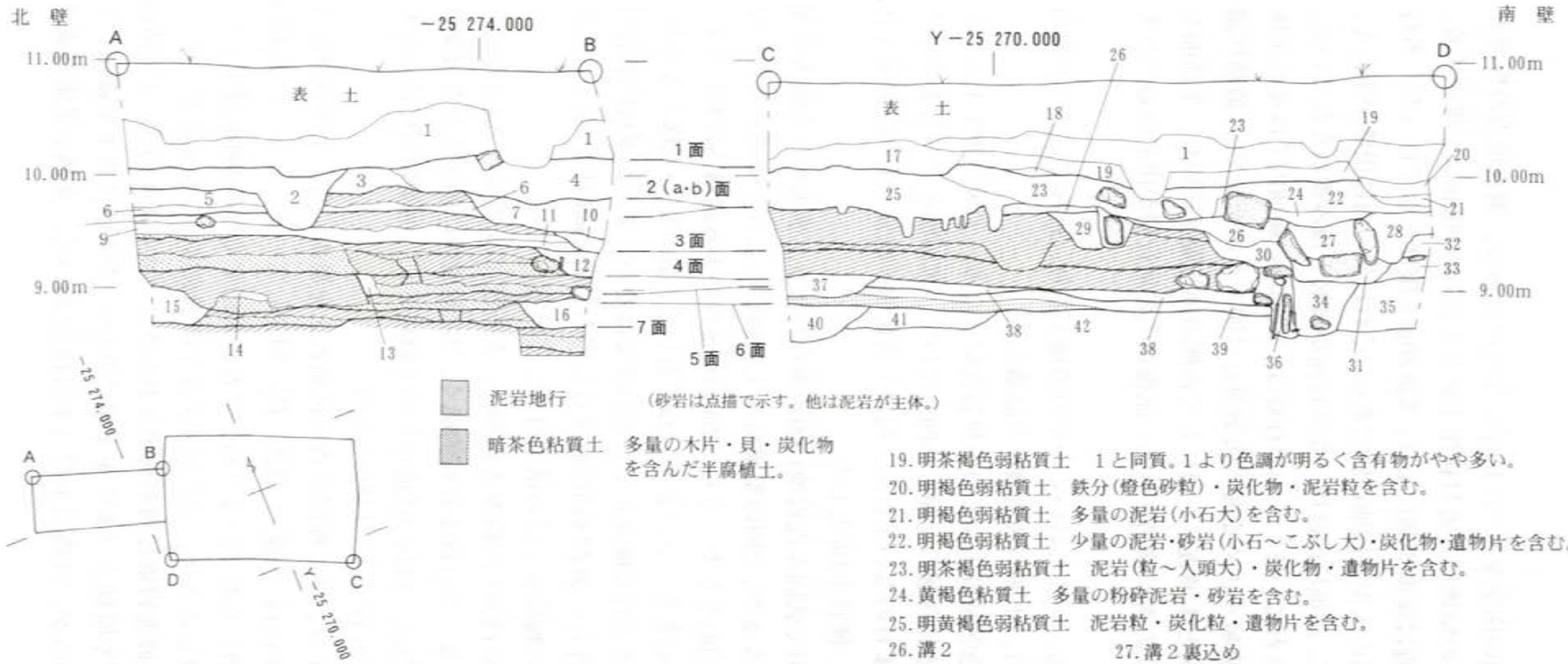
2a・2b面　海抜9.70～9.90m。約9.70mで平坦で強固な泥岩地行面があらわれる。拳大から人頭大の泥岩でつき固めた版築層で、厚さは最大60㎝となるが、2回の整備跡が土層観察によって確認できた。厚さ約40㎝、黄灰色の上部地行層を2面、下部を3面とした。さらに2面の可能性がある遺構内においても、複数の造成痕がみられたため新旧に分けて呈示することにした。2aが新しく、2bが旧い遺構となるが、実際には図面のように明確な関係で遺構が分別されて成立していたわけではない。また試掘坑内調査時の土層観察から、この頃より道路状遺構が存在し、調査区内の側溝らしい南北溝も同時期に始まったものと推測できる。掘立柱建物や竪穴遺構などの軸線も、この溝に符合している。

3面　海抜9.18～9.48m。2面から続く泥岩地行層の下部(厚さ約20㎝、青灰色)にあたる。2面との違いは色調だけでなく、西へ緩やかに傾斜している。地行面が比較的脆く、2面敷設時に削平された可能性がある。主な遺構(道路状遺構・溝・竪穴遺構)は、3面から2面にかけて継続され、地割の変化はみられない。3面と想定した道路状遺構は、生活面より若干高く9.48mとなる。

4面　海抜9.00～9.19m。3面泥岩地行直下より、薄く脆弱な青灰色粘質土を検出した。上部はほとんど3面整地時に消失してしまっており、緩やかに西（道路・側溝）側に傾斜している。しかし、試掘坑内の道路状遺構が9.10～9.19mの高さで積み増しされているため、これに対応する仮の4面を設定した。また3面時に溝や竪穴遺構などが深度規制に達したため、その部分より下の調査はおこなえなかった。

5面　海抜8.90～9.19m。北東部に軟質な破砕泥岩地行層が検出されたが、ほかは4面と同じく生活面が消滅していて、整地前の堆積層である、炭や腐植土（木片を多量に含む）、青灰色粘質土が露頭している。西側の道路状遺構は基壇状になっているが、性格は不明（上層4面において、東側が拡張造成されている）。

6面　海抜8.80～8.90m。5面と同じく、北東部だけに泥岩地行がみつかる。ただし整地状態はさほど



1.明茶褐色粘質土　少量の泥岩(粒～こぶし大)・炭化物・遺物片を含む。
2.明褐色粘質土　少量の泥岩(こぶし大)・炭化物・遺物片を含む。
3.明褐色粘質土　泥岩(小石大)をやや多く含む。
4.明褐色粘質土　多量の鉄分(燈色砂粒)・炭化物・泥岩を含む。
5.明灰褐色弱砂質土　微量の炭化物・泥岩(小石大)を含む。山砂が混入する。
6.明灰褐色弱砂質土　5と同質。凝灰質砂岩を含む。
7.明灰褐色弱粘質土　泥岩・砂岩(小石大)・炭化物・木片・鉄分を含む。〔落ち込み〕
8.明灰褐色弱砂質土　5と同質。多く含む。
9.暗灰褐色砂質土　上層に山砂(緑灰砂)が集中する。砂岩・木片・遺物片・炭化物をやや多く含む。
10.明灰褐色弱粘質土　上層に青灰色海砂・下層に黄茶灰色粘土が堆積する。〔落ち込み〕
11.黄茶褐色粘質土　軟質の泥岩塊を多量に含む。砂岩・炭化物が混入する。
12.暗褐色粘質土　貝・木片・炭化物・砂岩粒を含む。粘性強。
13.灰褐色粘質土　泥岩粒・貝砂粒・炭化物を含む。
14.青灰色弱砂質土　貝・木片・炭化物・泥岩粒を含む。
15.明灰色弱粘質土　少量の泥岩粒・貝・木片を含む。〔落ち込み〕
16.黄茶色粘質土　多量の木片・炭化物を含んだ半腐食土。
17.黄茶褐色弱粘質土　多量の泥岩(小石～半人頭大)を含む。炭化物・遺物片が混入する。
18.暗褐色粘質土
19.明茶褐色弱粘質土　1と同質。1より色調が明るく含有物がやや多い。
20.明褐色弱粘質土　鉄分(燈色砂粒)・炭化物・泥岩粒を含む。
21.明褐色弱粘質土　多量の泥岩(小石大)を含む。
22.明褐色弱粘質土　少量の泥岩・砂岩(小石～こぶし大)・炭化物・遺物片を含む。
23.明茶褐色弱粘質土　泥岩(粒～人頭大)・炭化物・遺物片を含む。
24.黄褐色粘質土　多量の粉砕泥岩・砂岩を含む。
25.明黄褐色弱粘質土　泥岩粒・炭化粒・遺物片を含む。
26.溝2　27.溝2裏込め
28.明褐色弱砂質土　炭化物・泥岩・砂岩(小石大)・鉄分を含む。溝2裏込めの可能性あり。
29.建物3－P.3　30.溝3
31.暗茶褐色粘質土　多量の砂岩・泥岩・木片・貝・遺物片・炭化物を含む。〔砂岩埋土遺構〕
32.明褐色弱砂質土　28と同質だが、含有物が少量。溝3の裏込めの可能性あり。
33.暗褐色粘質土　溝3の裏込めの可能性あり。
34.溝4　35.溝4裏込め　36.溝4裏込め　37.落ち込み2
38.青灰色粘質土　39.青灰色粘質土　40.土坑4　41.
42.青灰色粘質土　直上に粗く薄い(1cm程度)貝砂層が堆積する。

0　2m

図5 土層断面図

良好でなく、損壊したものと判断される。浅い南北溝が検出されたが、以西は上面と同じく緩やかに落ちて貝砂層が溜まった青灰色粘質土がひろがる。ほぼ同じ高さで道路状遺構もある。

7面　海抜約8.70m。調査区内はすでに掘削深度の制限を受けたため、6面で調査は終了とした。試掘坑部分のみ道路状遺構を検出した。

以上で調査は終了したが、7面調査時の排水溝部分の深掘りによって、下約8.47mで道路状遺構と同質の地行層を確認できた。いずれにしても地表から最深約2.5mほど掘り下げたが、基盤層までには至らなかった。

（鍛冶屋）

第2節　発見された遺構と遺物

1.　1面

主な遺構として幅2m弱の東西溝を検出した。溝は調査地点に東面する現在の生活道（江戸末期の『鶴岡八幡宮領并往還谷々小道分間図』には同じ道が描かれている）と直交していて、すでにこの頃には近世の地割の原形が成立していた可能性がある。

1面検出遺構は次の通り（図6）。

東西溝1条・土坑1基・小穴（柱穴様）9口

溝1（図7）

位　置：X－75 353.500～－75 358.000 Y－25 267.500～－25 274.000　**規　模**：上幅180㎝・下幅115㎝×深さ最大34㎝（底面高9.84m）　**断面形**：皿形　**流下方向**：ほぼ平坦　**主軸方位**：N－69°－W

出土遺物 溝1：土師器皿R種（1・2）・円盤型土製品（3）・常滑甕（4・5）・瀬戸折縁深皿（6）・鉄釘（7・8）・砥石（9－中砥）　**出土遺物** 南側小溝内：備前擂鉢（10）・用途不明鉄製品（11）

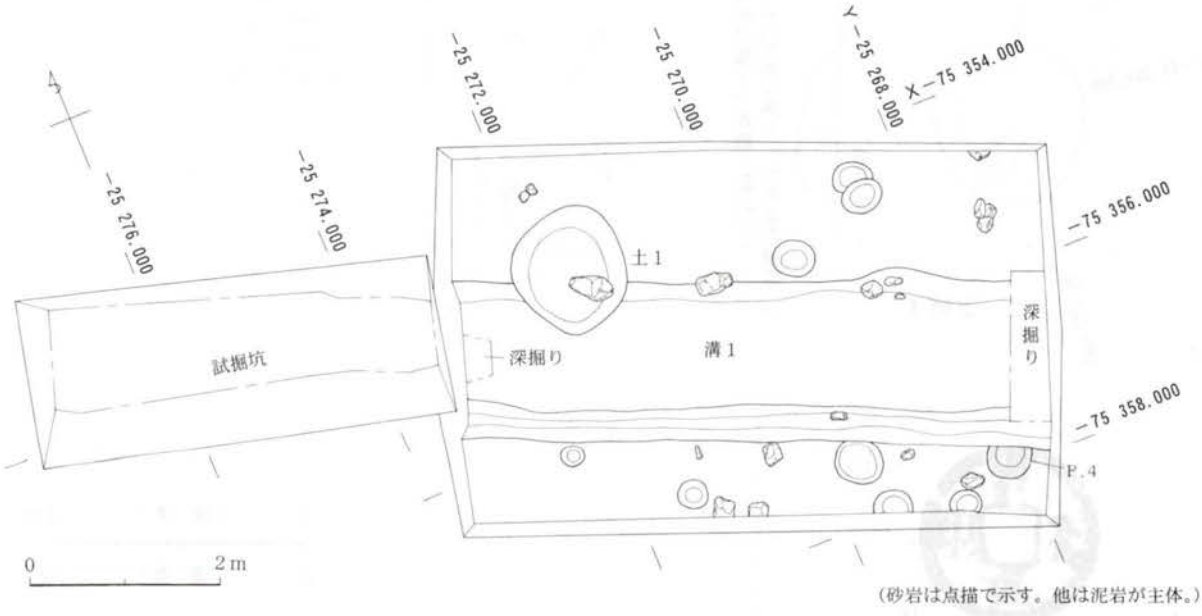


図6　1面遺構全図

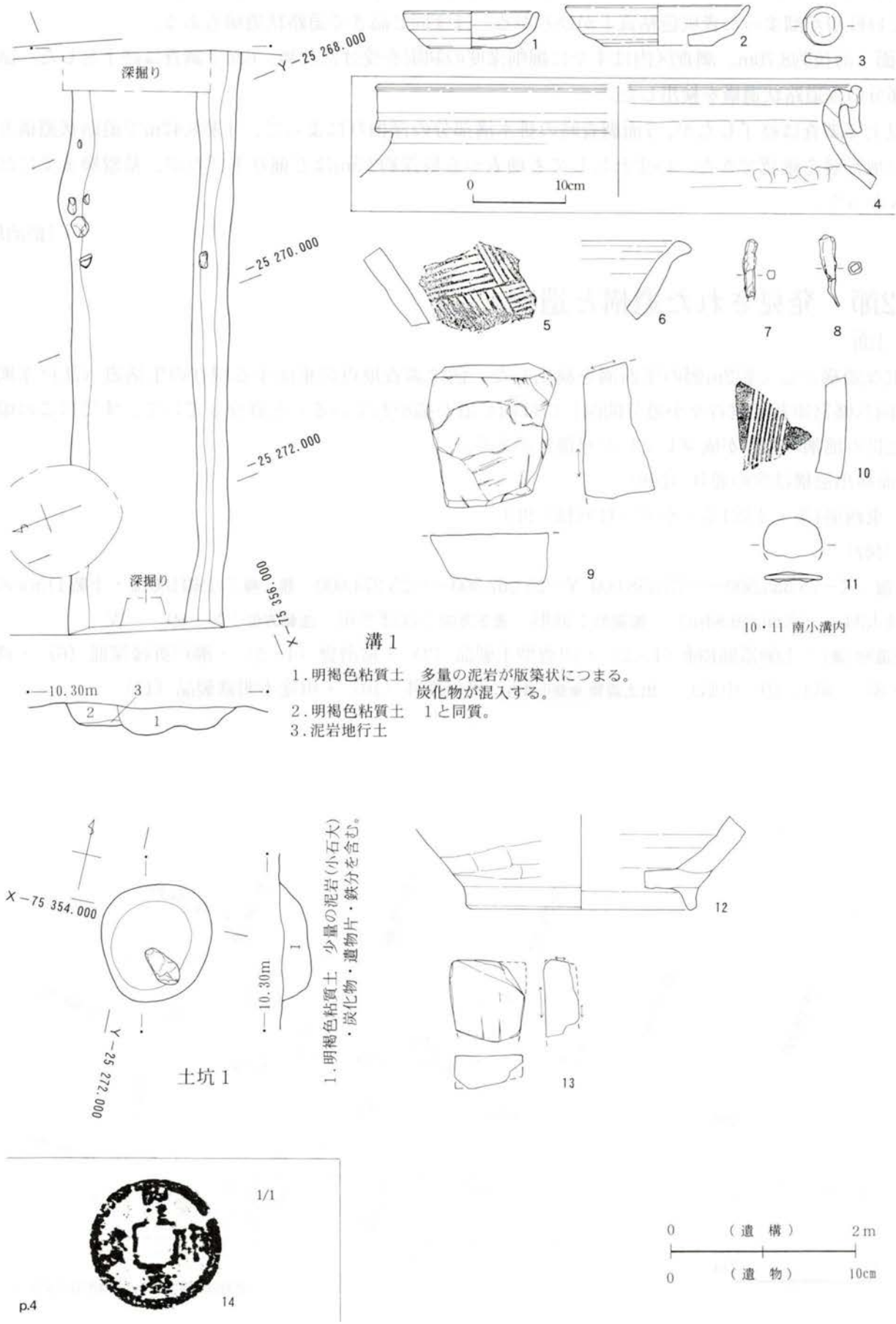


図7　溝1・土坑1・P.1,同出土遺物

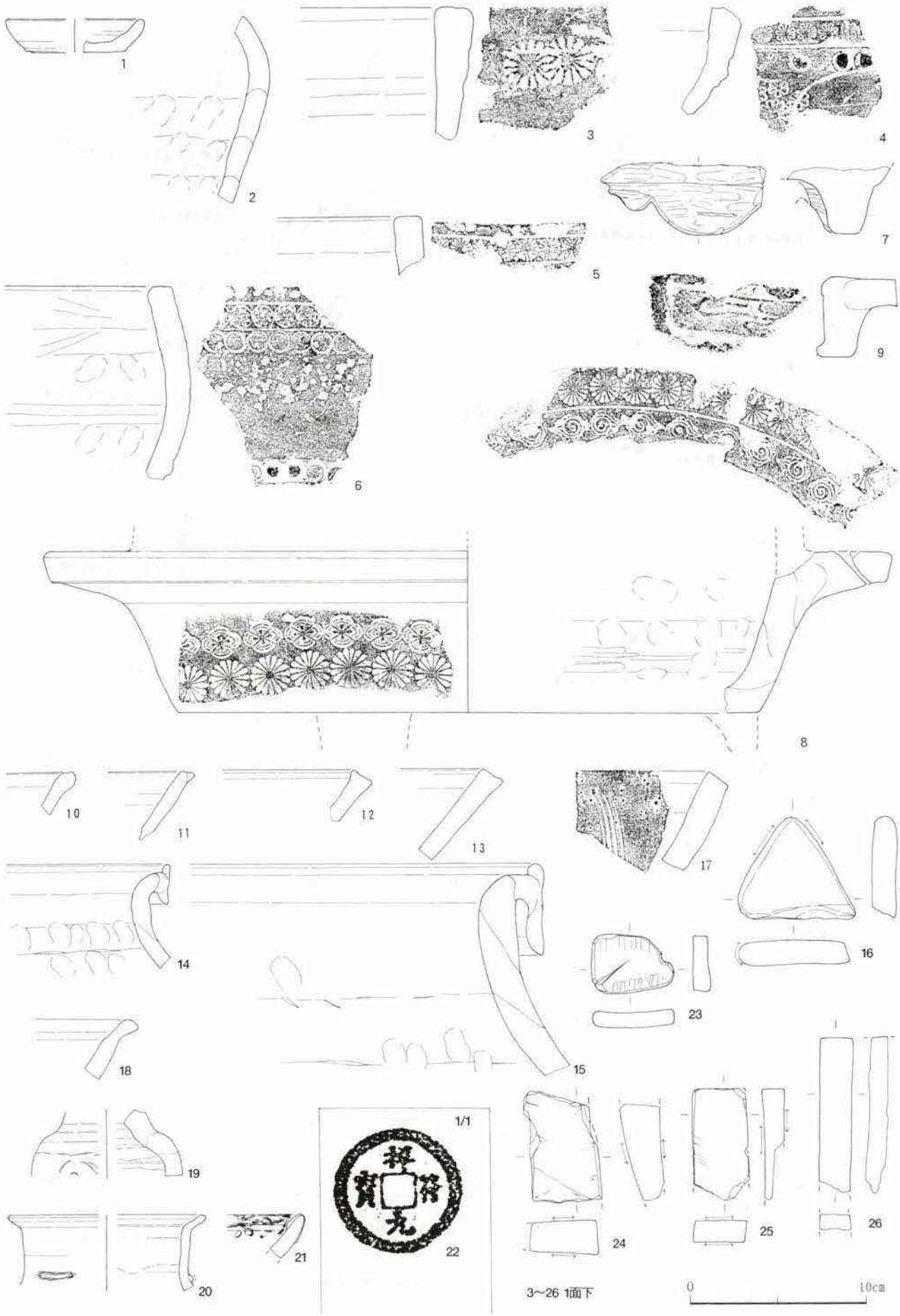
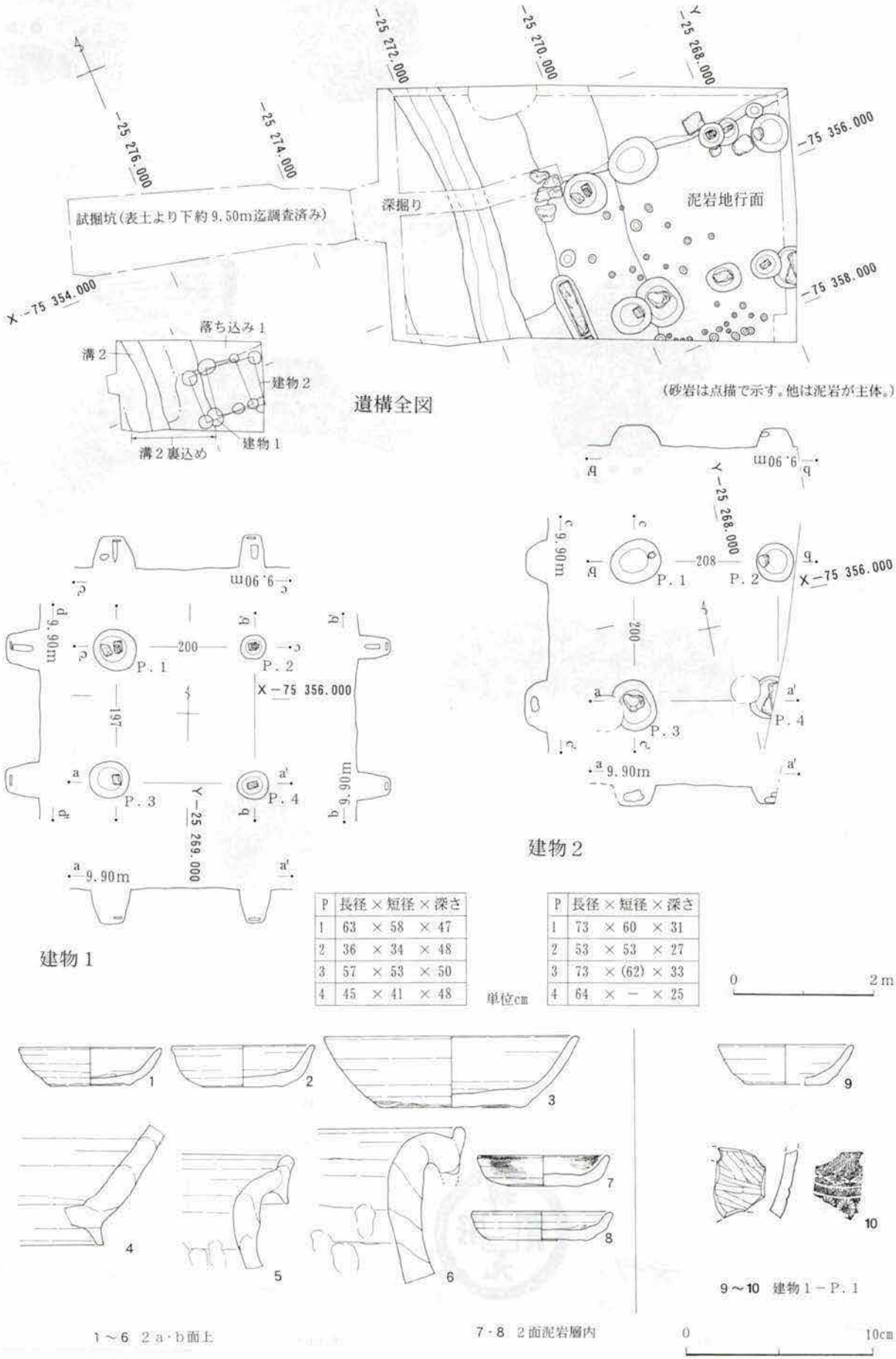

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
1/1
3~26 1面下
0
10cm

図8 1面出土遺物



P	長径 × 短径 × 深さ
1	63 × 58 × 47
2	36 × 34 × 48
3	57 × 53 × 50
4	45 × 41 × 48

P	長径 × 短径 × 深さ
1	73 × 60 × 31
2	53 × 53 × 27
3	73 × (62) × 33
4	64 × − × 25

図9　2a面遺構全図,建物1・2,同出土遺物

特記事項：調査区中央を走る東西溝。充填土は1面と同質の土に多量の泥岩が詰まっていた。底面の南端に沿って、ごく浅い小溝が確認された。出土遺物では、藤澤編年の中期前半とされる瀬戸折縁深鉢が出土しているが、赤羽・中野編年の7型式常滑甕（14世紀前半）や備前擂鉢が最新である。

土坑1（図7）

位　置：X－75 353.500～－75 355.000 Y－25 271.000～－25 272.500　**規　模**：長径126㎝×短径120㎝×深さ31㎝(底面高9.80m)　**平面形**：不整楕円形　**断面形**：皿形　**主軸方位**：不明　**重複関係**：溝1を切る　**出土遺物**：常滑片口鉢Ⅰ類（12）・砥石中砥（13）　**特記事項**：充填土は1面と同質

その他の1面遺構出土遺物（図7）

P.4：聖宋元寶（14）

1面出土遺物（図8）

1面上（直上）：土師器皿R種小型（1）・常滑甕（2）

1面下（構成土中）：瓦器火鉢（3～8）・軒平瓦（9）・常滑片口鉢Ⅰ類（10）・常滑片口鉢Ⅱ類（11～13）・常滑甕（14～15）・磨耗陶片（16）・備前擂鉢（17）・瀬戸折縁深皿（18）・瀬戸花瓶（19）・瀬戸袴腰形香炉（20）・坩堝（21）・祥符元寶（22）・滑石鍋転用品（23）・砥石（24～26）

2．2a面

上層とは大きく異なった軸方位をもつ遺構群が検出された。窟小路にほぼ平行、または直交した軸線にあり、後述の下層3面の地割を継承している。

2a面検出遺構は次の通り（図9）。

道路状遺構（土層観察上での確認のみ）・建物2棟・溝1条・落ち込み1・小穴（柱穴様）11口（建物を含む）・ほか小穴（杭穴様）多数

建物1（図9）

位　置：X－75 355.000～－75 357.500 Y－25 268.500～－25 270.500　**規　模**：東西1間（柱間距離2.00m）×南北1間(柱間距離1.97m)・柱穴底面高9.21m（平均）p.1柱12㎝×8㎝×30㎝以上　p.2柱12㎝×6㎝×22㎝以上　**南北軸方位**：N－1°－W　**重複関係**：建物2・落ち込み1を切る　**出土遺物**（すべてp.1から出土）：土師器皿R種（9）・瓦質製品（10）

特記事項：調査範囲が狭小のため1間×1間のみの検出となったが、南東へ拡がる可能性がある。西の溝(道路側溝)に隣接し、軸線の制約を受けている。

建物2（図9）

位　置：X－75 355.000～－75 358.000 Y－25 267.000～－25 270.000　**規　模**：東西1間（柱間距離2.08m）×南北1間（柱間距離2.00m）・柱穴底面高9.49m（平均）　**南北軸方位**：N－11.5°－E　**重複関係**：落ち込み1を切り、建物1に切られる　**特記事項**：建物1と同様の遺構といえるが、礎板ではなく礎石（泥岩）を用い、軸が10°ほどずれている。

溝2（図10）

位　置：X－75 352.500～－75 357.000 Y－25 271.000～－25 272.500　規　模：上幅50～70㎝・下幅20～33cm×深さ約44㎝（底面高約9.36m）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：平坦　**主軸方位**：N－4°－W　**出土遺物（図11）**：土師器皿R種（1～13）・円盤型土製品（14）・常滑片口鉢Ⅰ類（15）・常滑片口鉢Ⅱ類（16～18）・常滑甕（19・20）・常滑壺（21）・瀬戸入れ子（22）・瀬戸鉢（23）・鉄釘（24）・砥石（25－中砥）・円盤型木製品（26）・漆製品（27）・漆器椀（28）

特記事項：先述のとおり、下層の溝3と同じく道路状遺構にともなう側溝である可能性が高く、とすれば、

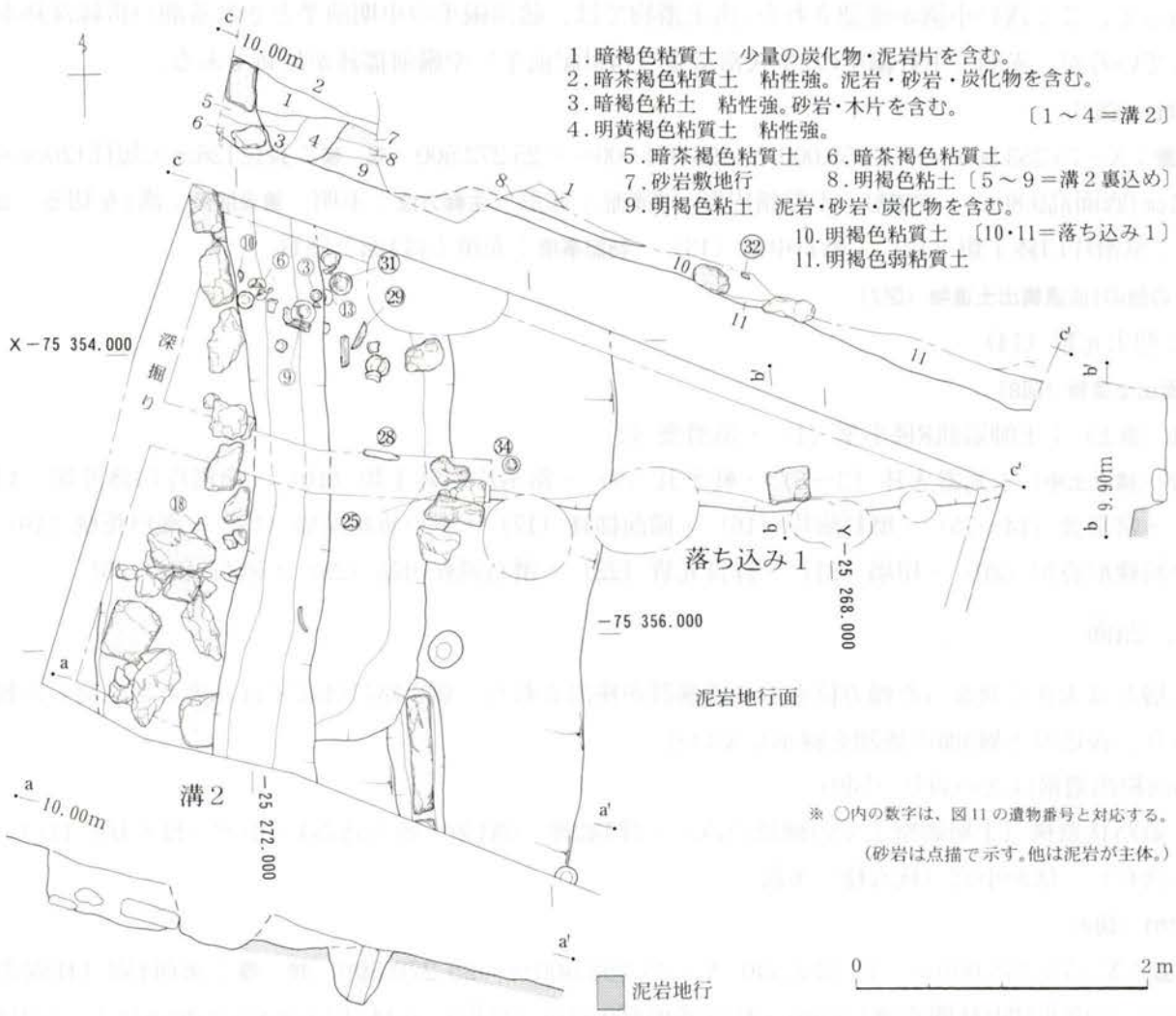


図10　溝2・落込み1

窟小路を主体とした、この区域の地割に沿ったものと想像できる。充填土は水分を多く含んだ暗褐色粘質土である。両側には、裏込め遺構を確認した。その東側には、溝に則して扁平の切石（凝灰質砂岩・長さ95cm以上×幅12cm×高さ39cm）が埋めこまれていたが、用途は不明。西側は、溝を補強するための大小の砂・泥岩が乱雑に埋まっていた。出土遺物は、常滑窯製品では赤羽・中野編年6b～7型式が最新であり、土師器皿R種も鎌倉時代後期から末期に想定されるものが含まれるため、この溝の年代は14世紀前葉と考えられる。

落ち込み1(図10)

位　置：X－75 353.500～－75 356.000　Y－25 266.500～－25 270.500　**規　模**：東西376cm以上×南北138cm以上×深さ24cm以上（底面高約9.50m）　**平面形**：（方形）　**断面形**：箱形　**東西軸方位**：N－88°－W　**重複関係**：建物1・2・溝2に切られる　**出土遺物（図11）**：土師器皿R種（29～31）・土師器皿極小型（32）・箸状木製品（33～35）・円盤型木製品（36）　**特記事項**：調査区北端で検出する。これも溝と同じく、下層からの竪穴遺構1・2を継承した同類の遺構と認識する。出土遺物では、30の土師器皿が若干

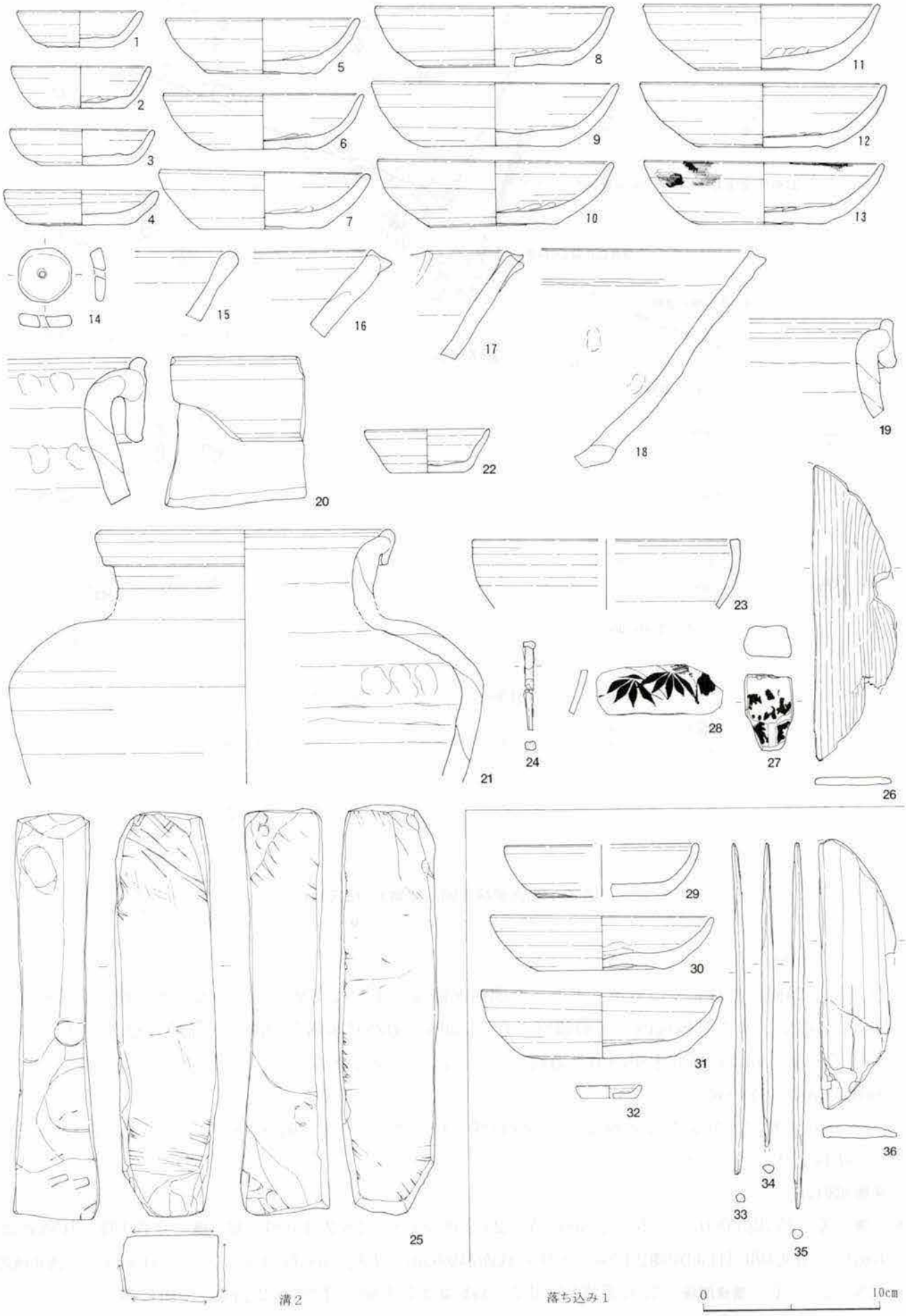
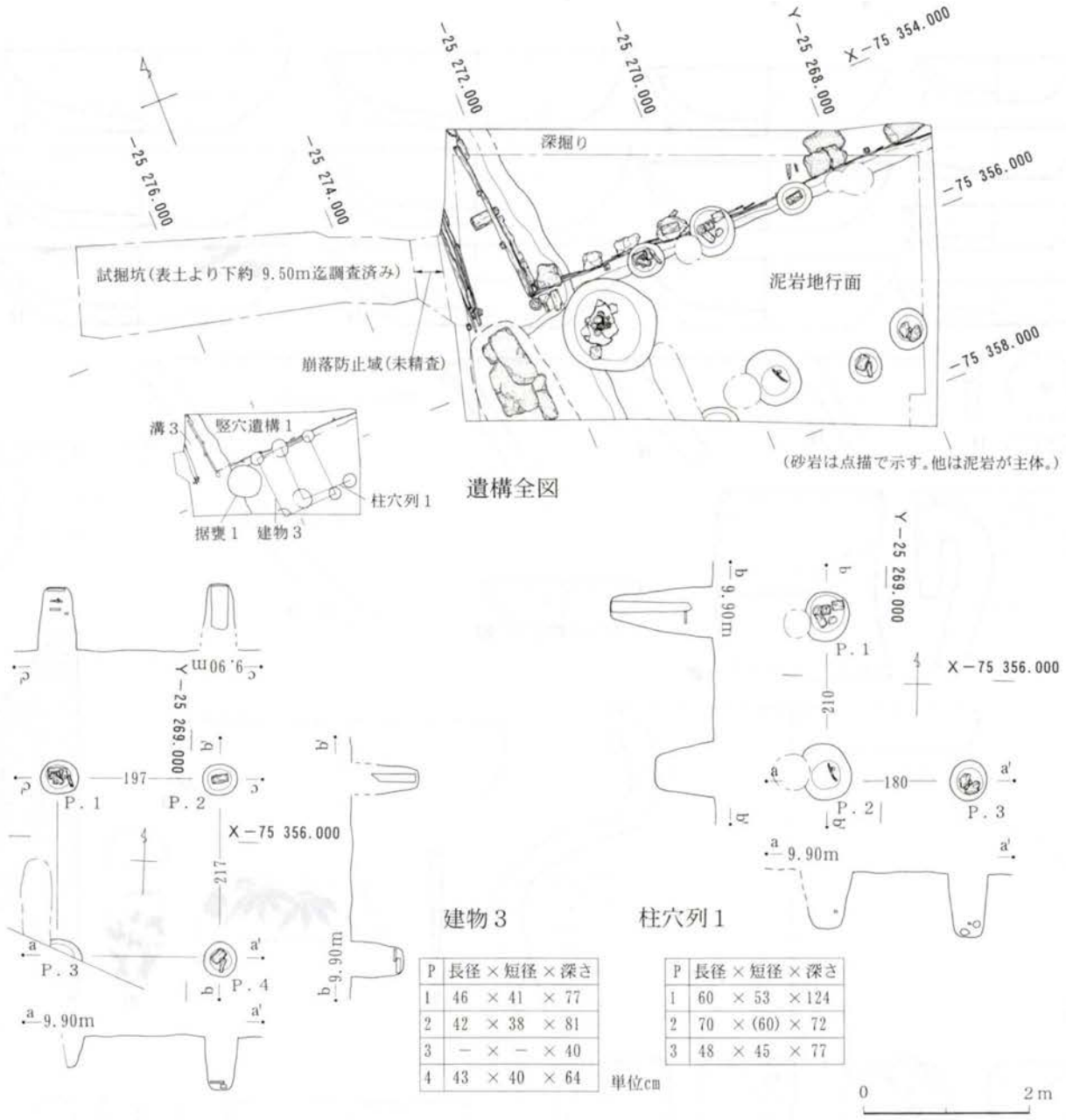


図11　溝2・落込み1出土遺物



P	長径 × 短径 × 深さ
1	46 × 41 × 77
2	42 × 38 × 81
3	− × − × 40
4	43 × 40 × 64

P	長径 × 短径 × 深さ
1	60 × 53 × 124
2	70 × (60) × 72
3	48 × 45 × 77

図12　2b面遺構全図・建物3・柱穴列1

3．　2b面

生活面は2a面と共有しているが、主だった遺構が修復、または改築されているため、便宜上遺構を分類した（図12）。また試掘坑内の土層観察でも、2面時の道路状遺構と判断できる地行層が、2層みつかっている。面上および構成土中の出土遺物については、2a面で概述した。

検出遺構はつぎの通り。

道路状遺構（土層観察での確認）・建物1棟・柱穴列1列・竪穴遺構1・溝1条・土坑1基・小穴7口（建物・柱穴列を含む）

建物3(図12)

位　置：X−75 355.000〜−75 357.500　Y−25 268.500〜−25 271.000　**規　模**：東西1間（柱間距離1.97m）×南北1間（柱間距離2.17m）・柱穴底面高9.05m（平均）p.2柱21cm×10cm×54cm以上　**南北軸方位**：N−2°−E　**重複関係**：竪穴遺構1を切る　**特記事項**：上層の建物1・2と同じく溝に接している。位置的にみても変化がなく、同類の遺構と想定できる。

柱穴列1(図12)

位　置：X－75 355.000～－75 358.000　Y－25 267.500～－25 270.000　**規　模**：東西1間（柱間距離1.80m）×南北1間（柱間距離2.10m）・柱穴底面高8.79m（平均）p.1 柱12cm×12cm×100cm以上　**南北軸方位**：N－1.5°－W　**重複関係**：竪穴遺構1を切る　**特記事項**：建物3と同類の遺構

竪穴遺構1（図14）

位　置：X－75 352.500～－75 355.500　Y－25 266.500～－25 273.000　**規　模**：東西475cm以上×南北214cm以上×深さ最大76cm（底面高8.90m）　**残存部材**：柱（縦横×高さ、cm）6×6×32、12×1.5×39、7×6×88、等　側板(高さ×横×厚み、cm) 11×133×1～2、19×199×2、16×84×2、14×88×2、20×188×2、等　**平面形**：(方形)　**断面形**：箱形　**東西軸方位**：N－89.5°－E　**重複関係**：建物3・柱穴列1・溝3・据甕1に切られる　**出土遺物**（図14～18,1～32は上・下層,33～110が最下層）：土師器皿R種（1～8）・土師器皿極小型（9）・常滑片口鉢Ⅱ類（10・11）・常滑甕（12）・鉄釘（13～15）・鉄火箸（16）・砥石（17－仕上げ砥）・箸状木製品（18～22）・棒状木製品（23・24）・不明木製品（25）・木製組み物部材（26）・部材（27）・漆器椀（28・31）漆器皿（29・30）・木製組み物部材（32）、土師器皿R種（33～54）・白色系土師器皿R種（55・56）・常滑片口鉢Ⅰ類（57）・常滑壺（58）・常滑甕（59・60）磨耗陶片（61）・瀬戸おろし皿（62）・鉄釘（63・64）・刀子（65）・元寶通寶（66）・嘉祐通寶（67）・砥石（68～72－仕上げ砥）・箸状木製品（73～90）・棒状木製品（91～95）・刀形（96）・扇骨（97）・ヘラ状木製品（98～101）・不明木製品（102～104）・折敷（105）・円盤型木製品（106）・漆器椀（107・109・110）・漆器皿（108）

特記事項：町屋などにみられる、半地下式の方形建物と推測する。周囲は板囲いされ、杭や礎石を用いて支えている。また西側は側板を溝3と共有しており、構造上、同時期に構築されたと推測できる。底面の海抜は8.90mで、溝3と同じであり、また建物3・柱穴列1の柱穴の底面高とほぼ一致するのも、偶然ではないだろう。充填土は、木片を多量に含んだ腐植土と青灰色の海砂である。礎石の高さが一定していないのは、何度か作り直したため床面が積み増しされたものとみたい。遺物は大きく上層·下層·最下層に分別した。図13の土層断面図中の土層番号2～4が上·下層、5・6が最下層(底部)に相当する。

出土遺物は、多種多様にある。上層と下層および最下層を概観すると、箸状木製品や砥石、漆器など日常用品と推測されるものが注目される。陶磁器類では、大陸からの輸入磁器類はみられず、瀬戸・常滑窯製品の壺や甕、おろし皿といった日常雑器が多くを占める。竪穴遺構1の上・下層の年代は、より新しい落ち込み1や溝2と類似した様相を示す。最下層出土遺物では、常滑窯製品はいずれも赤羽・中野編年の6b型式以前に含まれ、瀬戸おろし皿も藤澤編年の14世紀初頭～前葉頃に比定されるものである。土師器皿を見ても椀型で器高の高いものが主体をなし、薄手で内湾する鎌倉後期と推測できる器形と、その中型器種が含まれる。やや古い様相を示す遺物も出土しているが、この遺構の年代は、14世紀前葉と推測できる。

溝3（図13）

位　置：X－75 352.500～－75 357.500　Y－25 271.500～－25 273.000　**規　模**：上幅150cm以上（木枠間約65cm）×深さ65cm以上（底面高8.90～9.20m）　**残存部材**（単位cm）：東側束柱（縦横×高さ、単位cm）7.5×4.5×42、4×4.5×87、6×5.5×128、5×3×114、6×4.5×56、15×10×75（丸木）等　同側板（高さ×横×厚み）27×201×2、46×193×2等　西側束柱（縦横×高さ）6×4×85、6×2×103等　西側側板（高さ×横×厚み）12×95×1.5、10×80×2、8×78×2、10×127×2、11×125×1.5、11×100×2等　**断面形**：逆台形（箱形）　**流下方向**：南→北　**主軸方位**：N－3.5°－W

重複関係：据甕1・砂岩埋土遺構に切られる　**出土遺物**（図18）：111～118は上層・下層、119～125は最

図13　竪穴遺構1・溝3

下層、126～131は裏込めから出土した。土師器皿R種（111～113）・瓦器火鉢（114）・常滑片口Ⅰ類（115）・箸状木製品（116～117）・漆器皿（118）、土師器皿R種（119～125）、土師器皿R種（126・127）・瀬戸折縁深皿（128）円盤型木製品（129）・木製部材（130）　特記事項：溝2の直下より検出した、道路側溝の可能性が高い木組みの溝（幅約65㎝）。規格性のない板材を積み上げ、両側から杭で

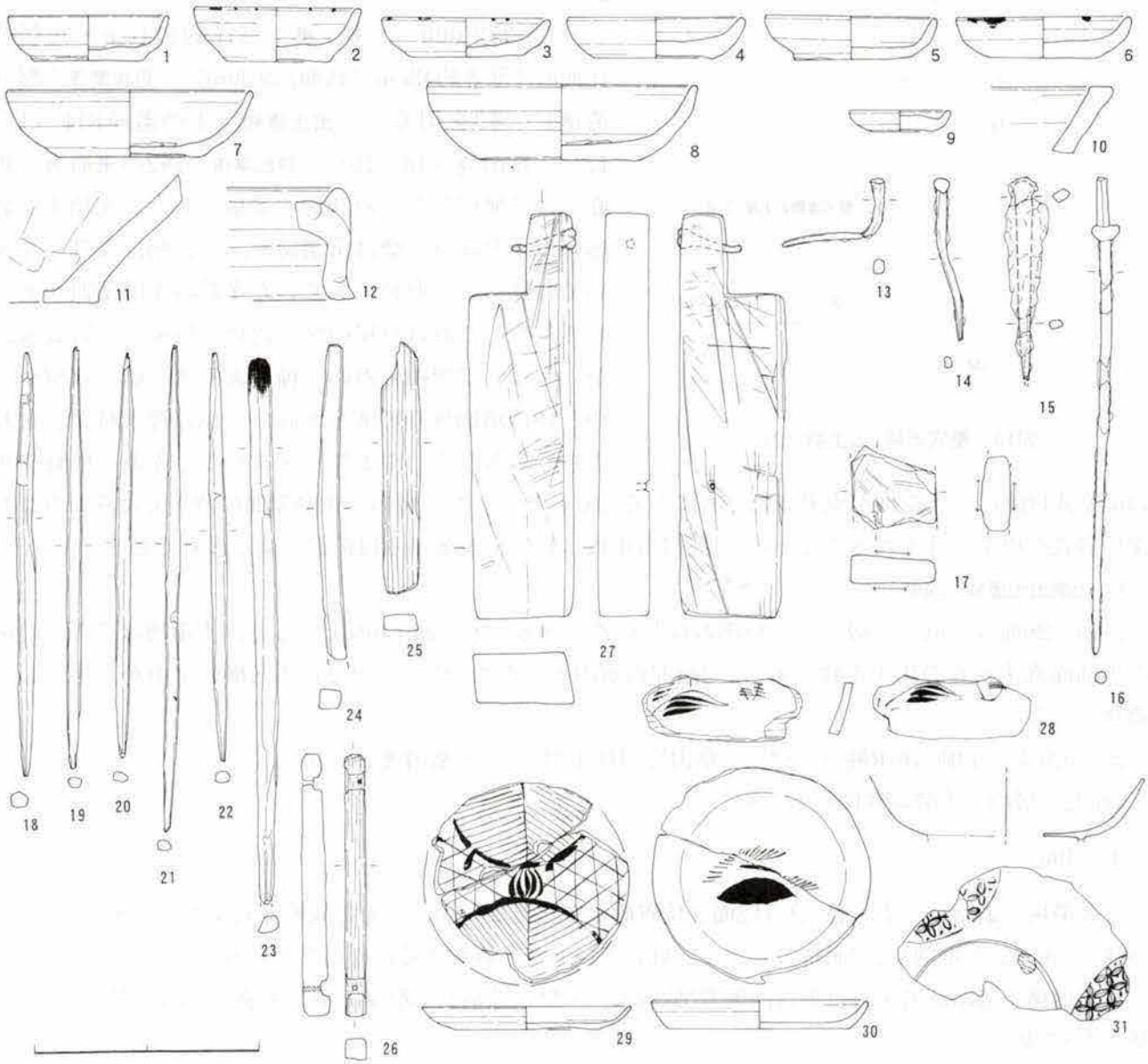


図14　竪穴遺構1出土遺物(1)

固定している。杭は角材や丸太などを使い地面に深く打ち込んでいる。町屋で検出される側溝などとほぼ同じ構造をしている。充填土は図に示した。流路は南から北へと不自然だが、南側は、成形した大型の砂岩が多数埋没した状態で損壊がひどく、不明な点が多い。充填土は繊維質の腐食土。出土遺物はその大部分を土師器皿が占める。土師器皿を見ると、同じような薄手で深い形式のものが上・下層と最下層含まれるため、上層・下層と最下層の年代に顕著な差異を認められない。年代は14世紀初頭以降を想定でき、出土遺物からも竪穴遺構1との同時性と、2a面で検出された溝2への連続性が窺える。裏込め土からの出土遺物も常滑窯製品は赤羽・中野編年の6a～6b型式と考えられ、瀬戸折縁深皿は中Ⅰ期であることから、この遺構の年代は14世紀前葉と考えられる。131の用途不明の木製部材は、管見の限り類例は見あたらない。建物や溝等、構造物の部材と考えられるが部分や用途は不明である。

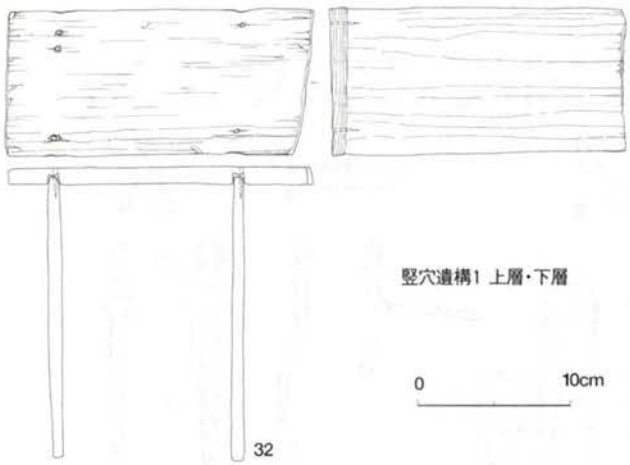


図15　竪穴遺構1出土物（2）

据甕1(図19)

位　置：X－75 355.000～－75 356.500　Y－25 270.500～－25 272.000　**規　模**：長径約111cm×短径約109cm×深さ約43cm（底面高9.20m）　**重複関係**：竪穴遺構1・溝3を切る　**出土遺物**：土師器皿R種（1～17）・常滑甕（18・19）　**特記事項**：溝2の東肩裏込め直下より検出したため2b面の遺構とした。充填土も裏込めの土と同質。甕は常滑窯製品で、胴部より上を欠いており、中に収められていた多数の土師器皿が露呈していた。これは町屋の竪穴建物に付随した貯蔵施設か、もしくは埋納行為の一種であろう。胎土観察から18と19は別個体の可能性が高い。18は埋没時に含まれたものであろう。つまり、少なくとも赤羽・中野編年の6a型式以降にこの据甕が廃棄されたものと考えられる。また、甕内の土師器皿に薄手で丸みを帯びた深い形式の中型が含まれることから、据甕1の年代は13世紀後葉から14世紀前葉と推測できる。

2a・b面出土遺物（図9）

2a面と2b面は、同一の層位で二時期の存在が考えうるため、2a・b面上とした出土遺物はこの二時期の生活面直上からの出土遺物である。2面泥岩層内としたものは、この2a・b面構成土中から出土した遺物である。

2a・b面上：土師器皿R種（1～3）・常滑片口鉢Ⅰ類（4）・常滑甕（5・6）

2面泥岩層内：土師器皿R種（7・8）

4．3面

主要遺構（道路状・溝・竪穴）は2面と位置的な変化はないが、ともに規模がわずかに縮小している。3面時に成立した地割が、2面時に安定し発展していったと解釈するのが自然だろう。

検出遺構：道路状遺構（試掘坑内泥岩地行面）・竪穴遺構1・溝1条・溝状遺構1・土坑1基・ピット3基・小穴2基

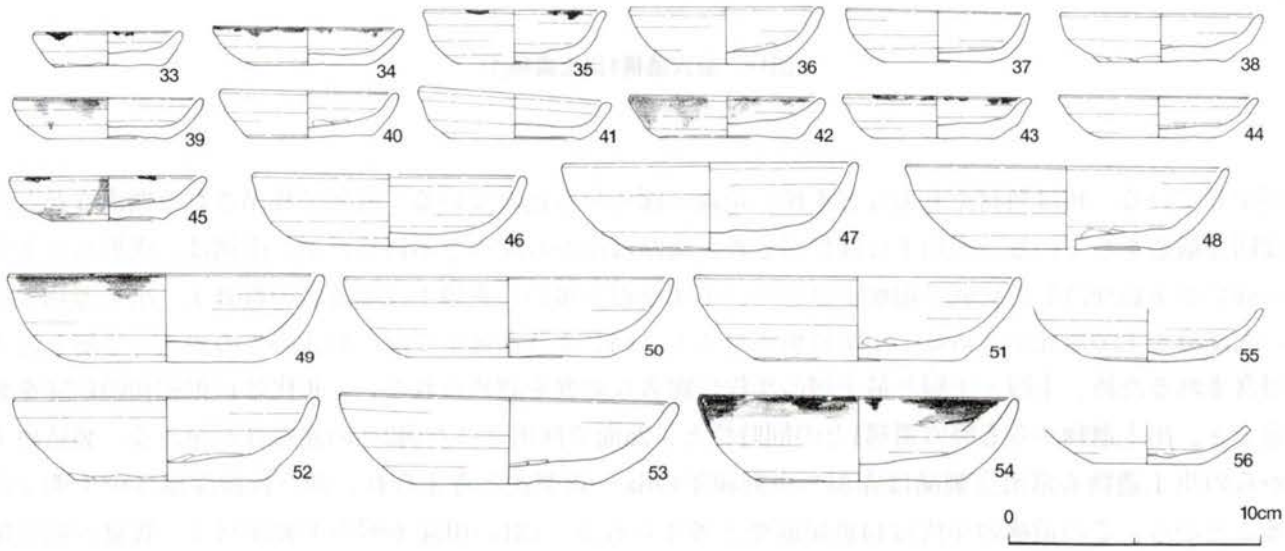


図16　竪穴遺構1出土遺物（3）

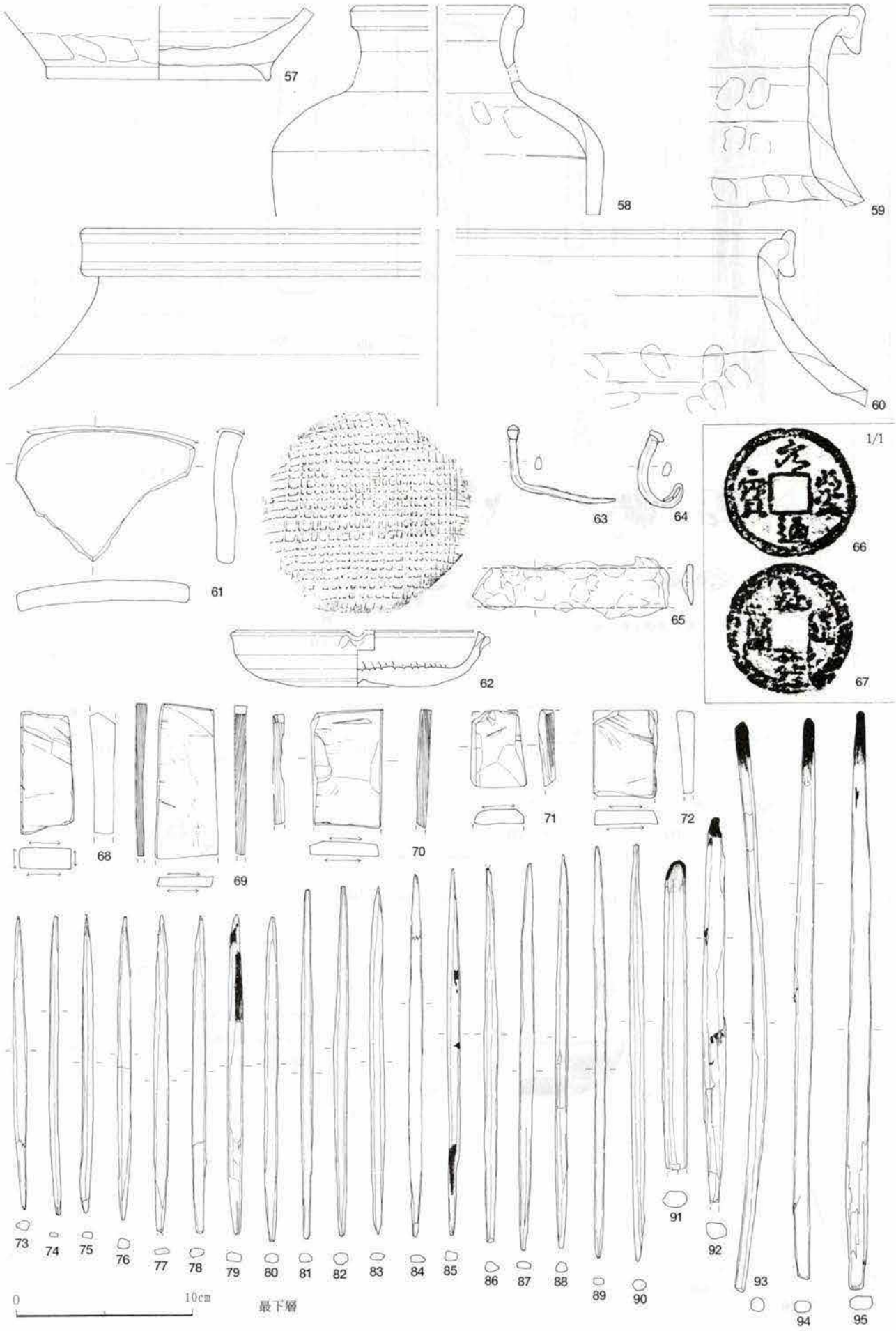


図17　竪穴遺構1出土遺物（4）

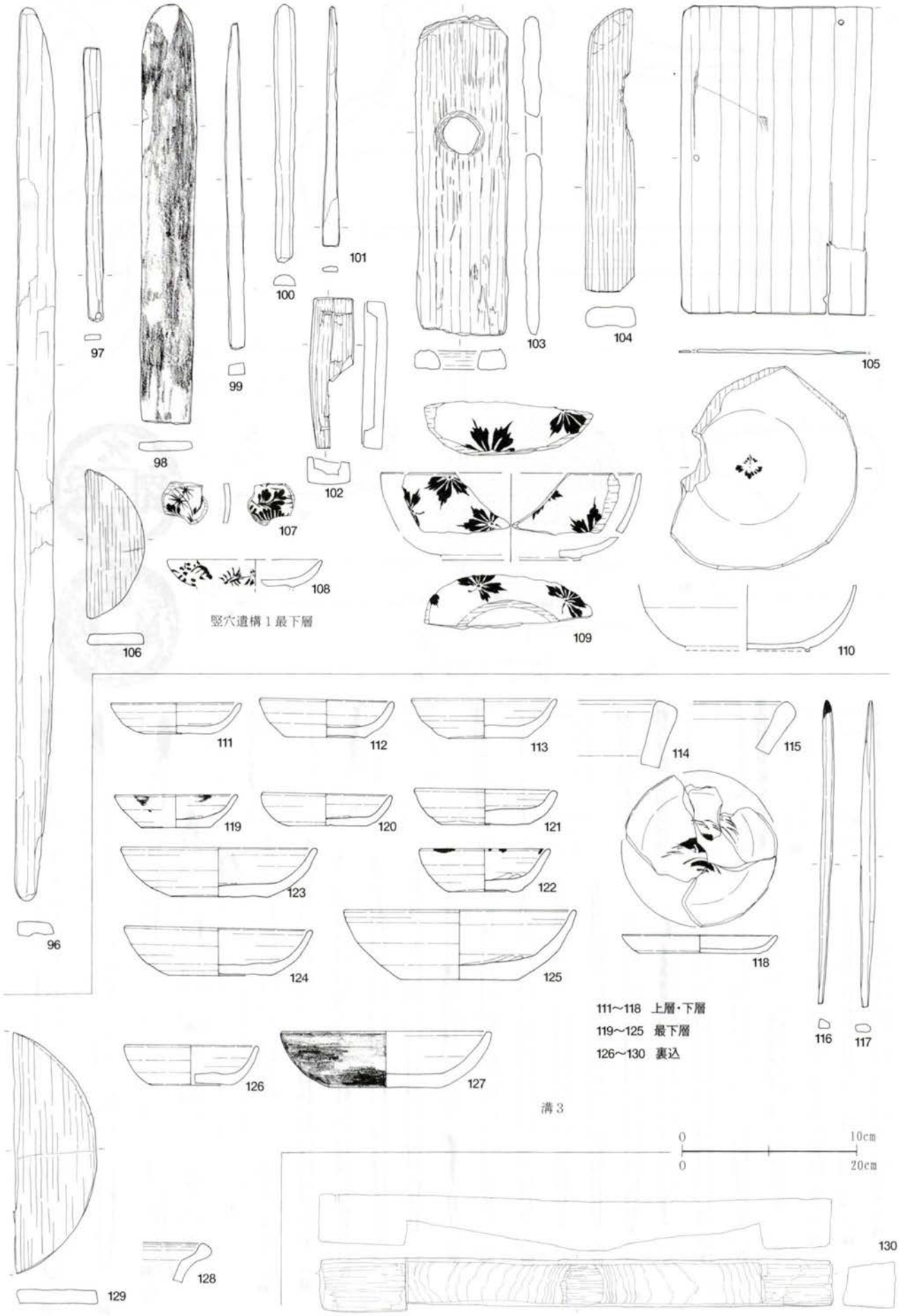


図18 竪穴遺構1出土遺物（5）・溝3出土遺物

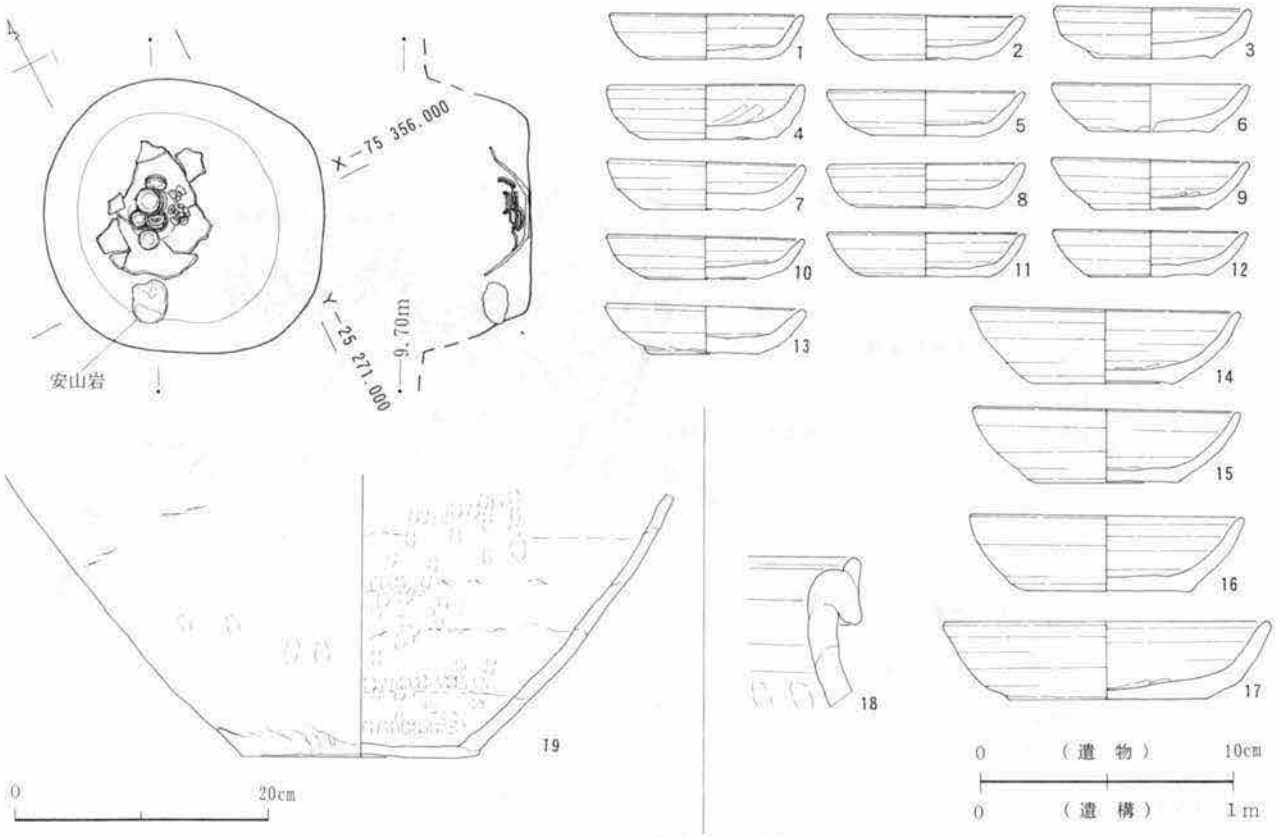


図19 据甕1,同出土遺物

3面出土遺物（図20）

3面直上：土師器皿R種（1）・磨耗陶片（2）・木製工具の柄（3）・木製部材（4）

道路状遺構(図20)

位 置：X−75 352.500〜−75 355.000 Y−25 273.500〜−25 277.500 **規 模**：東西3.5m以上 **路面高**：海抜9.38〜9.46m **主軸方位**：N−3.5° −W **出土遺物**：常滑片口鉢Ⅱ類（5）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（6）・不明木製品（7）・ヘラ状木製品（8・9）・角棒状木製品（10）・箸状木製品（11）

特記事項：面として確認したのがこの高さからになる。第1節で述べたが、ほぼ平坦な地行面(厚さ5〜14cm程度)と、直下には暗茶色の柔弱な腐食土質の層がある。この構造は少なくとも下層の7面(約8.70m)から変わらない。また試掘坑と本調査との境界部分に崩落防止の土嚢を積んだので、東端の溝との接点と面との関係が把握できなかった。道路状の地行面から溝4の比高差は約80cm、3面とはほぼ同じとなる。

竪穴遺構2(図21)

位 置：X−75 352.500〜−75 355.500 Y−25 268.500〜−25 272.500 **規 模**：東西312㎝以上×南北244㎝以上×深さ最大60㎝以上（底面高8.7m） **平面形**：（方形） **断面形**：逆台形 **東西軸方位**：N−87° −E **重複関係**：溝4に切られる **出土遺物（図22）**：土師器皿R種（1）・常滑甕（2・3）・白色系土師器皿T種（4）・瀬戸入れ子（5）・箸状木製品（6）・ヘラ状木製品（7）・木製組み物部材（8〜10） **特記事項**：竪穴遺構1の直下より検出したため、遺構の上部は生活面と同様に、かなり失われている。また安全上の観点から、北壁際は段状部を設けて南に狭めた。構造的には竪穴遺構1と同じく西側の溝4と同時期に造成したと推測する。またその境界部には大型で扁平の、泥岩石列が見つかった。もとは、溝4・南側の裏込め内の砂岩のように挟み込まれて立っていたものが倒れたのか、竪穴の基礎として用いられたものか、詳細は不明である。竪穴内部から検出された部材は、損壊がひどく廃棄

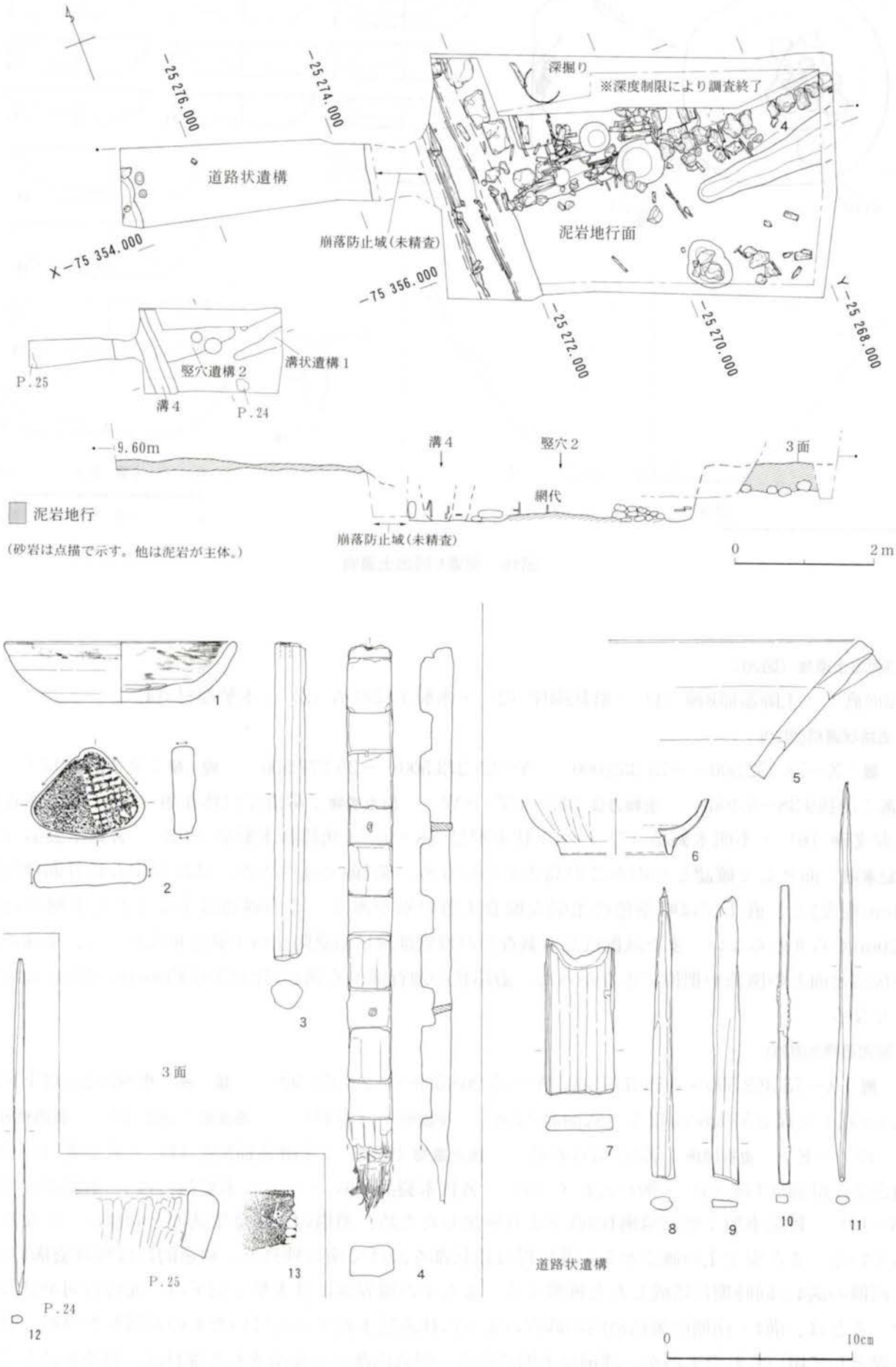


図20　3面遺構全図・3面出土遺物

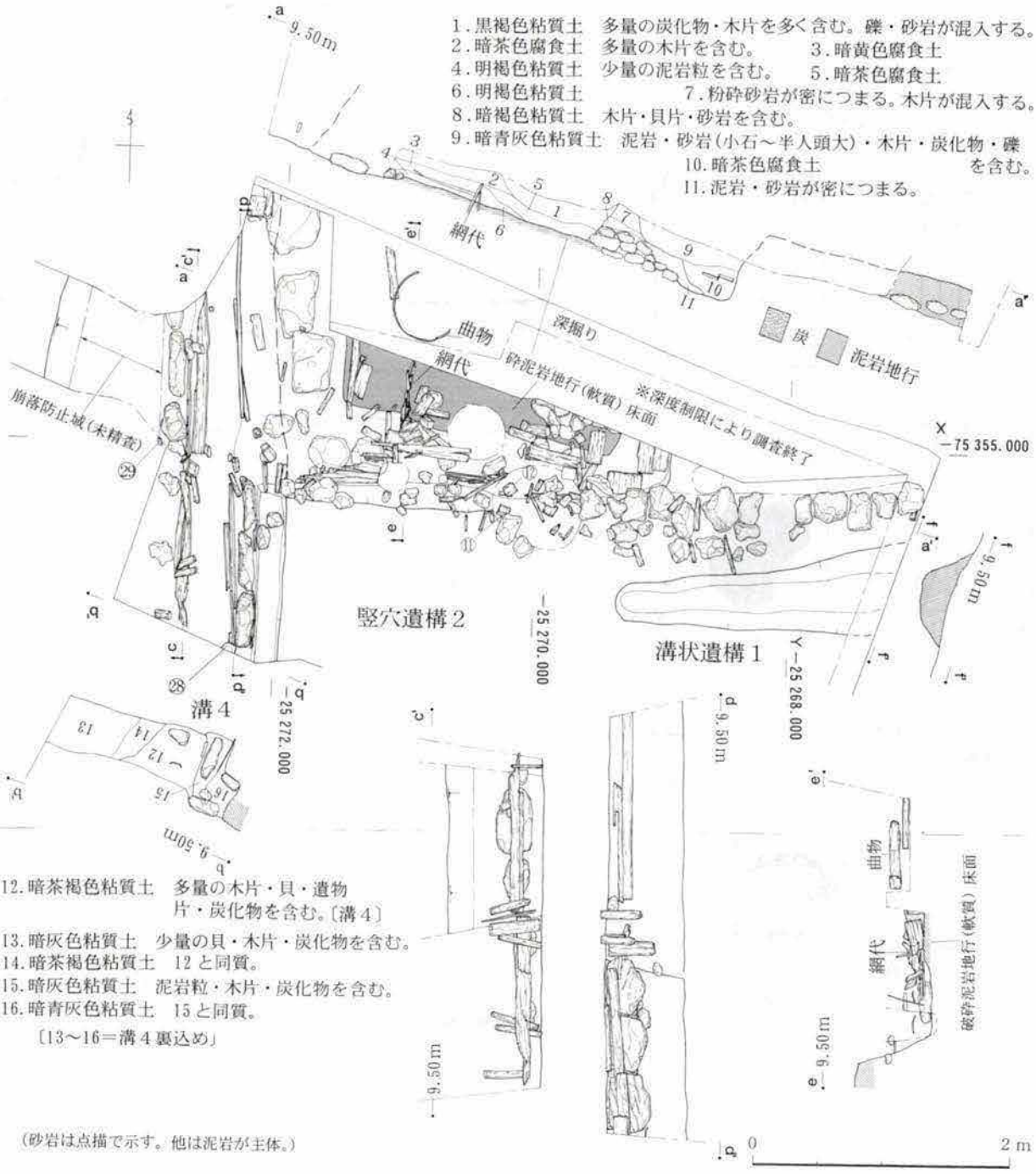


図21　竪穴遺構2・溝4・溝状遺構1

場的な状況にあり、曲物などは竪穴遺構1から掘り込まれた可能性もある。その中で底面周縁部が、僅かに落ち込み、その内側は軟質で薄い破砕泥岩地行を確認した。この状況から、網代より東の泥岩地行上部がかつての建物内の最下面（床面）であったと推測できる。また網代の東にある砂・泥岩の塊は、貼床として積み上げた痕跡かもしれない。上面の竪穴と同じく、西の溝（道路側溝）との構造的な関係で不可解な点が多い。

年代の推定できる出土遺物は少ない。土師器皿を見ると、2a・b面よりも古いものと考えられ、2の常滑甕も赤羽・中野編年の6a型式を呈することから、13世紀第3四半期とも推測できる。しかし、3の常滑甕はこれらより新しく、より上層の2a・b面で推定した年代に類似した年代観が想定される。つまり、竪穴遺構2は14世紀前葉と推測できる。

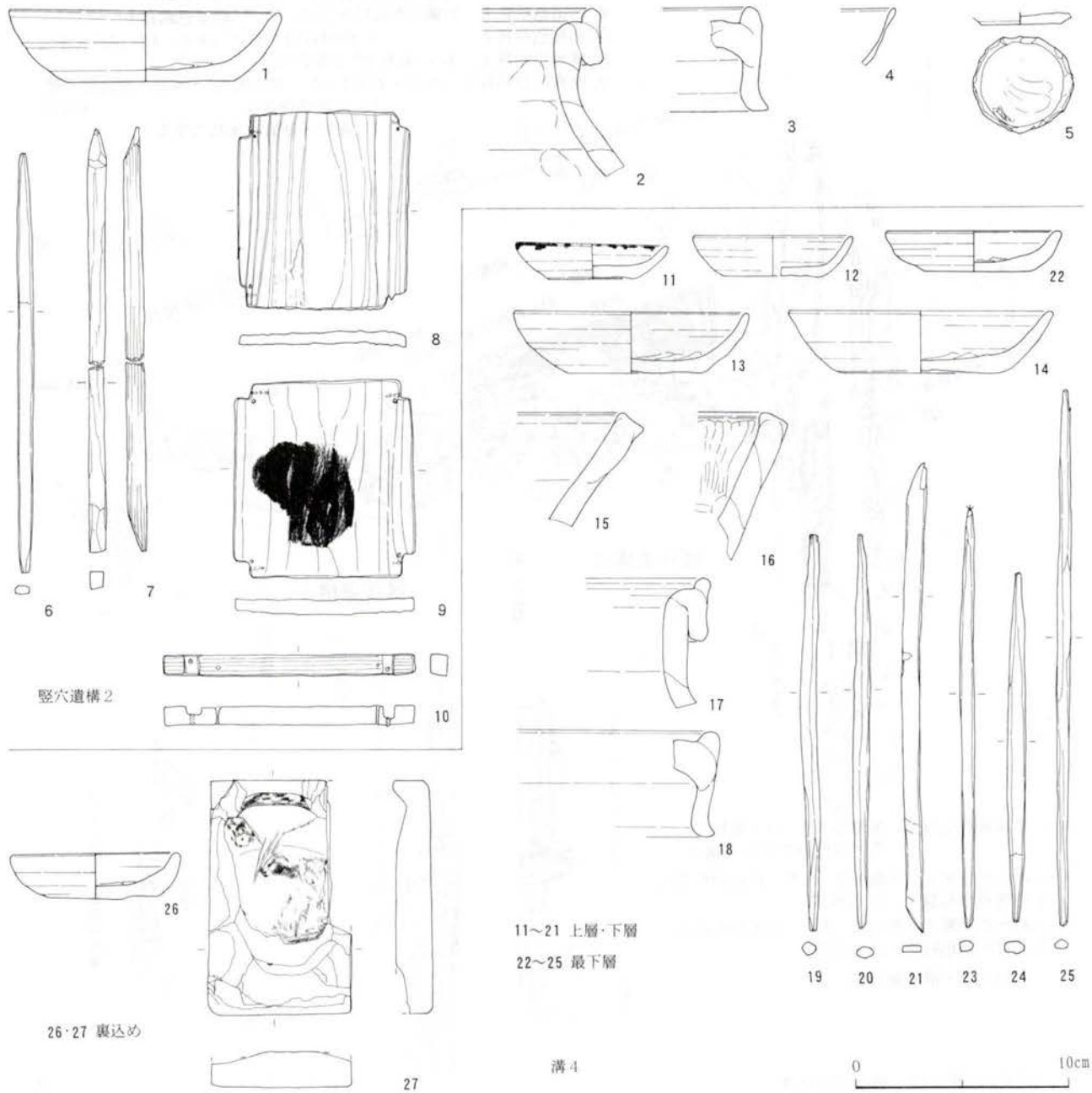


図22　竪穴遺構2・溝4出土遺物

溝4(図21)

位　置：X－75 352.500～－75 357.000　Y－25 271.500～－25 273.500　**規　模**：幅150㎝以上（側板間約40㎝）×深さ最大60㎝（底面高約8.60m）　**残存部材**：東側束材（縦横×高さ、単位㎝）6×5×33、12×2.5×38、4×2.5×27、等　東側側板(高さ×横×厚み)7×146×2、8.5×114×3、5.5×55×0.8、5×36×0.8、8×98×2、等　西側束材(縦横×高さ)2.5×1.5×25、6×2.5×12.5、8×1.5×43、6×2×42、3×1.5×21、6×3×37、4×3×44、6×2.5×39、4×3×38、等　西側側板（高さ×横×厚み）14×117×1、10×86×1.5、12×95×3（片面炭素付着）、13×95×1.5、等　**断面形**：逆台形（箱形）　**流下方向**：ほぼ平坦　**主軸方位**：N－1.5°－W　**出土遺物（図22）**：11～21は上層・下層出土遺物、22～25は最下層出土遺物、26・27は裏込め土からの出土遺物　土師器ⅢR種（11～14）・常滑片口鉢Ⅱ類（15）・瓦器火鉢（16）・常滑甕（17～18）箸状木製品（19～20）ヘラ状木製品（21）、土師器ⅢR種（22）・箸状木製品（23～25）、土師器ⅢR種（26）・硯（27）　**特記事項**：溝3により上部の大半が消失しているが、側板・束柱が多数残存す

る木組みの溝。側板の間隔は約40㎝で、上面の溝3より、25㎝ほど縮小している。また南東側・裏込め内には扁平な砂岩が側板の外壁に沿って立ち並べてあり、さらに砂岩と掘り込みの間には薄い板材が挟み込まれていた。この板材は溝4よりさらに古い溝の名残かもしれない。いずれにしても幅40㎝程度の小規模の溝ながら、しっかりと整備がされている。やはりこれも道路側溝とみるのが順当だろう。充填土は溝3と同じく、腐食土であった。

上・下層と最下層および裏込め土出土の遺物からは、顕著な年代差は見られない。ただし、上・下層の常滑甕（18）は一点のみ突出して新しい年代が推定される。溝4の年代は土師器皿や常滑窯製品から14世紀前葉を想定できる。

溝状遺構1(図21)

位　置：X－75 355.500～－75 356.500　Y－25 267.000～－25 269.500　**規　模**：上幅最大30～68㎝、下幅15～30cm×深さ最大25㎝（底面高9.07m）　**断面形**：逆台形　**流下方向**：ほぼ平坦　**主軸方位**：N－85.5°－E　**特記事項**：充填土は上面の地行土がつまっていた。西側ははっきりとしないまま遺構の形が寸断される。北側の石列も、裏込めなのか竪穴に付随したものか判断がつかない。

その他の遺構出土遺物（図20）

P.24:箸状木製品（12）　P.25:瓦器火鉢（13）

5．4面

標高は約9.10～9.00mで緩やかに東から西へ下っている。面としては脆弱で面土中には貝砂や炭層・多量の木片を含んだ茶褐色粘質土（半ば以上を腐食土が占める）が混入していた。また上面の竪穴遺構2・溝4が深度規制に達したため、遺構検出は行っていない。

検出遺構：道路状遺構・落ち込み1・小穴3基

4面出土遺物（図23）

4面（直上）：土師器皿R種（1）・瀬戸底おろし目皿（2）・瀬戸おろし皿（3）・亀山系陶器甕（4）・砥石（5－中砥・6－仕上げ砥）・円盤型木製品（7）　**特記事項**：瀬戸底おろし目皿（2）は、藤澤編年の前Ⅳ期である。

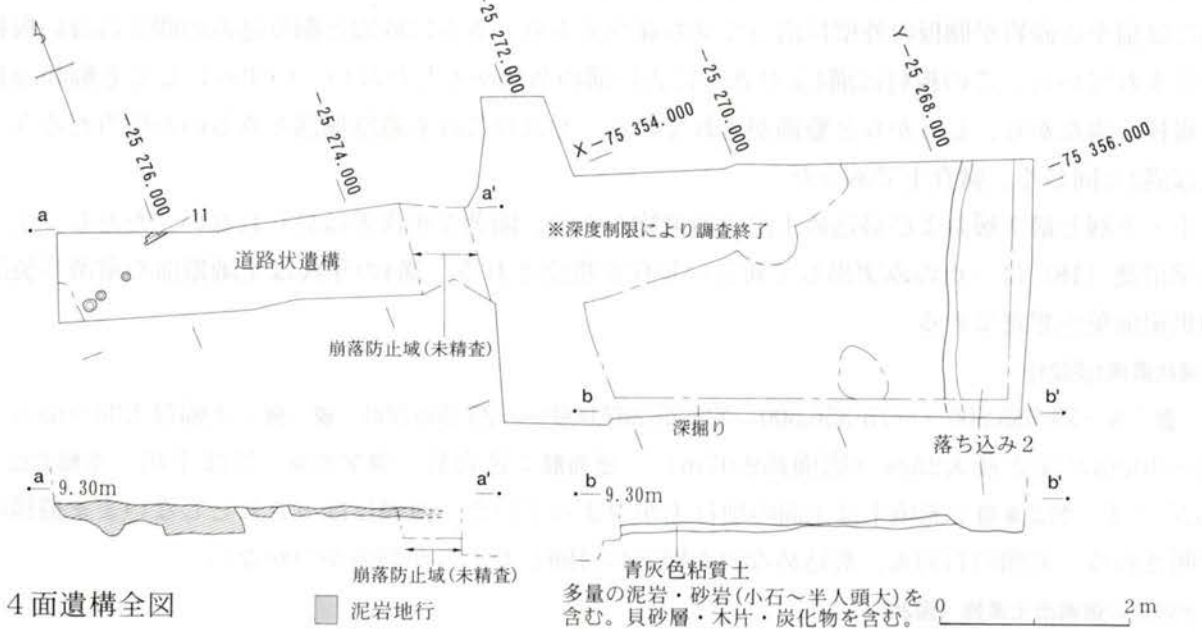
道路状遺構(図23)

位　置：X－75 352.500～－75 355.000　Y－25 273.500～－25 277.500　**規　模**：東西3.9m以上　**路面高**：海抜9.09～9.20m　**主軸方位**：不明　**出土遺物**：瀬戸おろし皿（8）・箸状木製品（9）・ヘラ状木製品（10）・木製部材（11）　**特記事項**：3面の道路状遺構と同じ。地行面の高さから4面に帰属させるのが妥当と考えた。地行面は試掘坑全体で検出された。土層観察では下の地行が基壇状に造成されていて、その後、西側を腐食土の多い層と地行面で平坦に整備・拡幅したものが、当遺構となっている。また3面時には若干縮小されたようだが、断定はできない。

落ち込み2（図24）

位　置：X－75 355.000～－75 358.500　Y－25 267.000～－25 269.000　**規　模**：東西90㎝以上×南北274㎝以上×深さ約14㎝（底面高8.90m）　**平面形**：不明　**断面形**：（皿形）　**主軸方位**：N－24°－E　**出土遺物**：土師器皿R種（1～4）・常滑甕（5・6）・瀬戸おろし皿（7）・漆器椀（8）・円盤型木製品（9）　**特記事項**：充填土は炭化物と木製品、泥岩などを含んだ黒褐色粘質土が埋まる。浅いなだらかな落ち込み。2・3面の遺構群の軸方位とは大きくずれる。

常滑甕は赤羽・中野編年の6a型式（5）と7型式（6）が含まれる。瀬戸おろし皿は藤澤編年の中期前半である。土師器皿は器壁が厚く、ややぼってりとした感がある。土師器皿はやや古い様相を呈すが、



4面遺構全図

泥岩地行

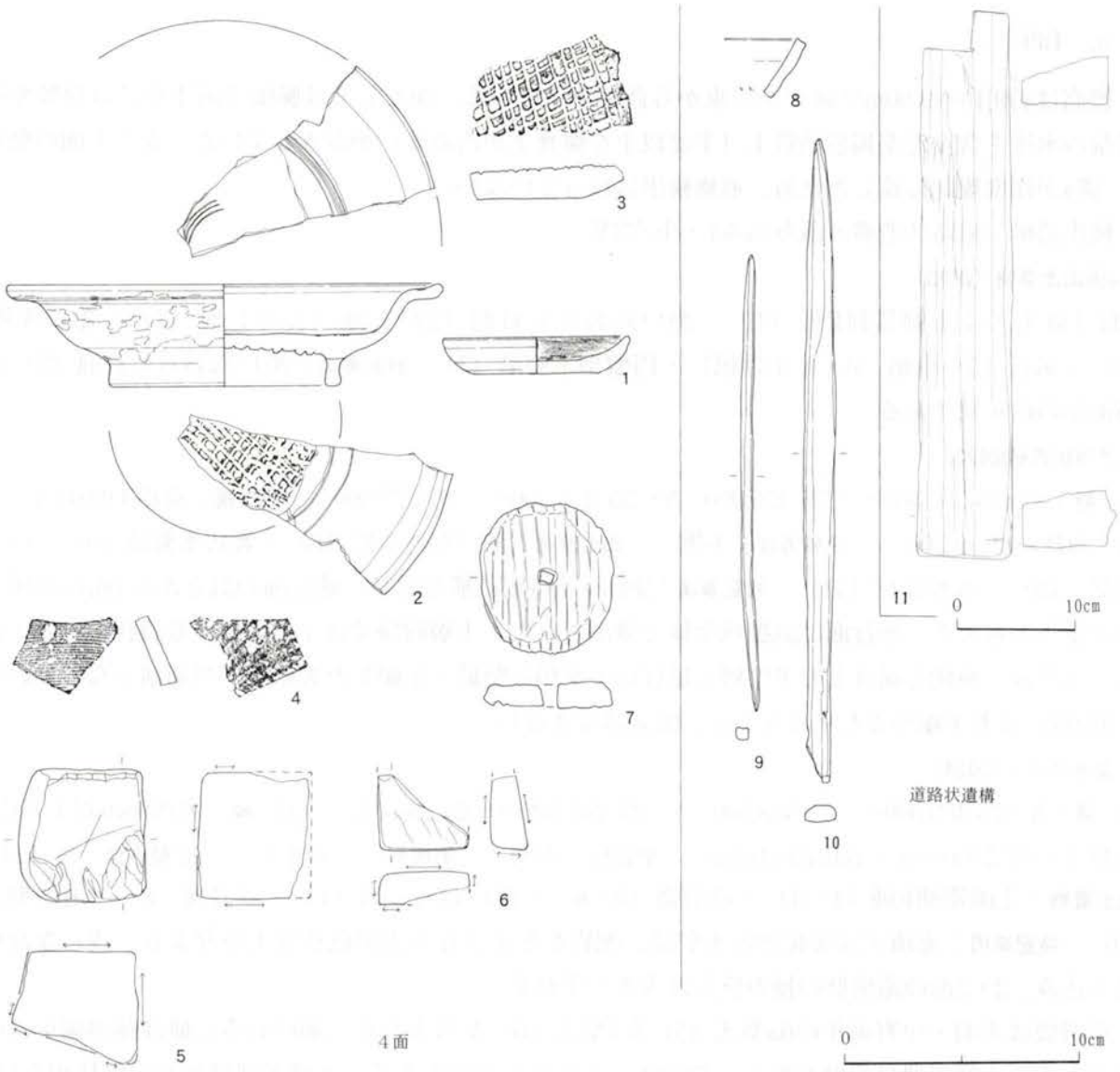


図23　4面遺構全図,4面出土遺物

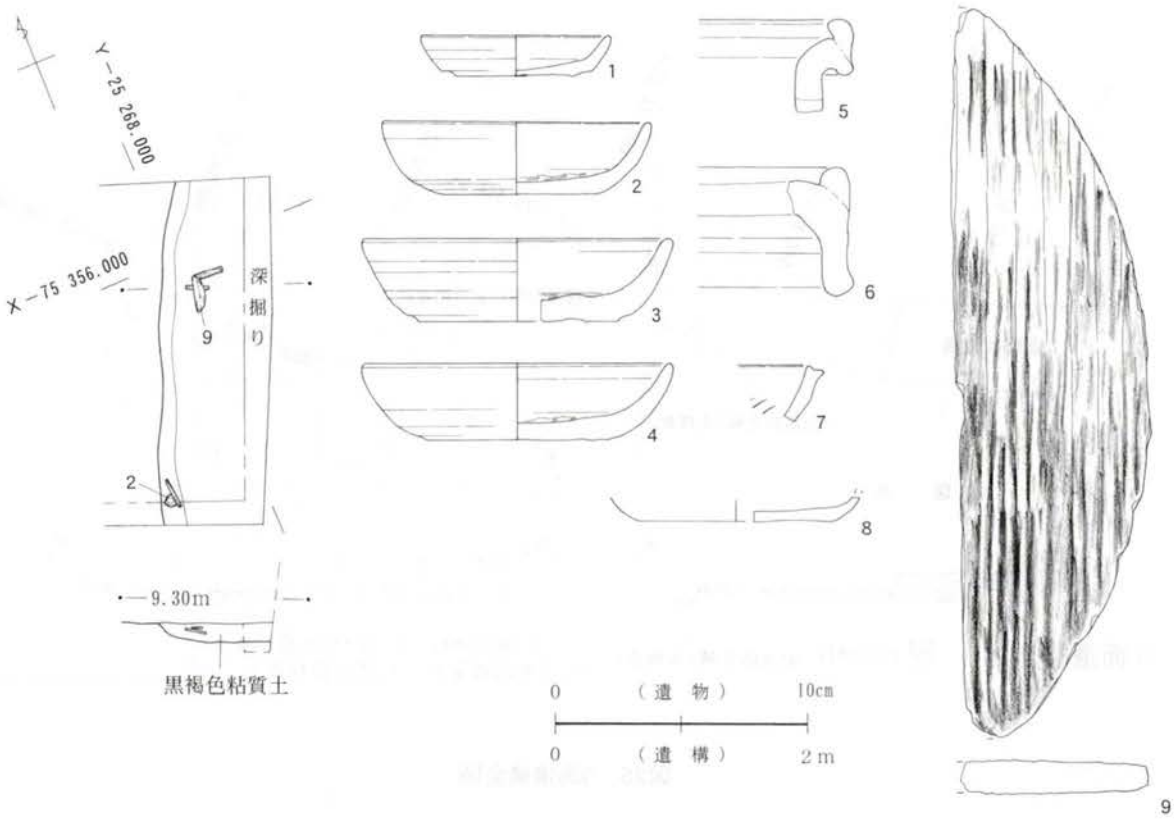


図24　落込み2,同出土遺物

常滑窯製品と瀬戸窯製品ともに13世紀末～14世紀前葉を推測させる様相を呈す。この落ち込み2は3面と時期差を認められないため3面構築の際、もしくはそれよりわずかに早い時期に、埋め戻されたものと考えられる。

6. 5面

図25に示した通り、北東部に軟質な破砕泥岩地行面がわずかに残っている（土層番号1）。標高は約9.00mで、それより南西に向かって緩やかに下るが、青灰色粘質土（土層番号4・4面包含層と同質）・炭層（土層番号2）・茶褐色腐食土（土層番号3）は面が消失したために包含層が露頭したものと判断した。標高は東側が約9.00m（幅2m以上・厚み約8㎝）・西側が9.26m（幅1.9m以上・厚み13～32㎝）で、30㎝弱の高低差がある。

検出遺構：道路状遺構(壇状)・土坑1基・ピット1基

5面出土遺物（図26）

1～10は土層番号1（泥岩地行層）直上出土、11～14は同2・3・4直上出土、15～20は同2（炭層）内出土 **泥岩地行層直上** 土師器皿R種（1）・箸状木製品（2～6）・草履芯（7～9）・漆器碗（10） **土層番号2・3・4直上** 土師器皿R種（11～13）・瀬戸おろし皿（14） **炭層内** 土師器皿R種（15～17）・折敷（18）・漆器皿（19・20）　**特記事項**：5面に帰属する遺物の中で、年代を探る手がかりとなるものは少ない。その中での土師器皿11～13と瀬戸おろし皿14は面直上出土遺物であり、わずかではあるが他より量も多い。これらの土師器皿は、やや器高が低く、器壁が厚い。13世紀後半に位置付けられるものである。なお、瀬戸

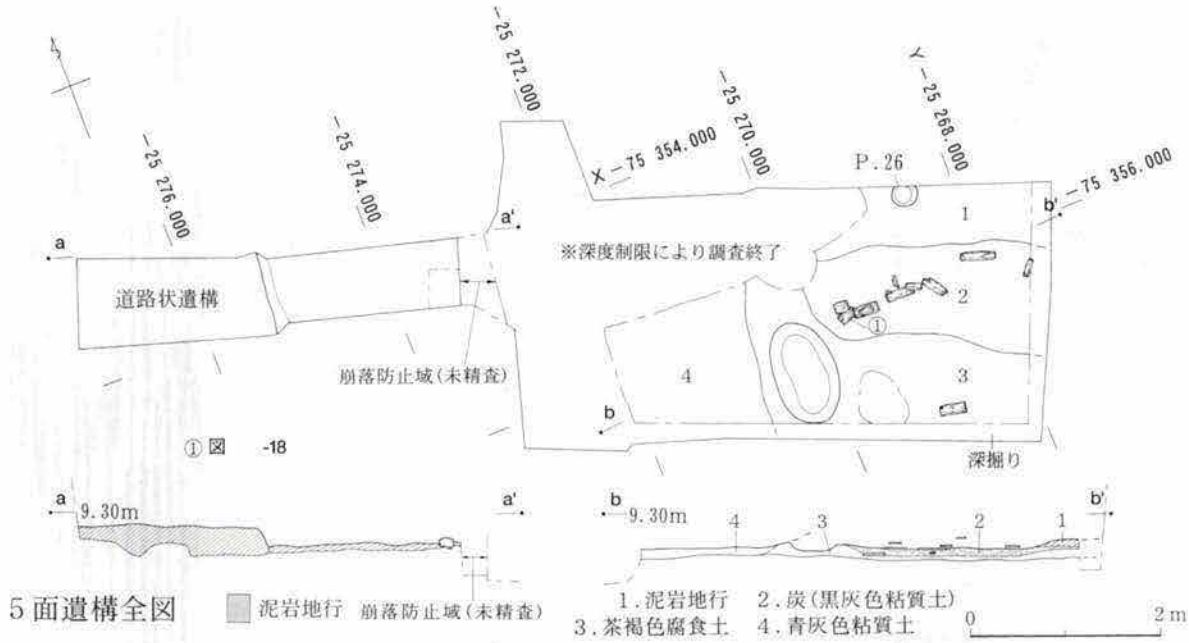


図25 5面遺構全図

おろし皿は、藤澤編年の前期とされるものである。5面の年代は13世紀後半が想定できる。

道路状遺構（図25）

位 置：X−75 352.500〜−75 355.000 Y−25 273.500〜−25 277.500 **規 模**：東西4.1m以上 **路面高**：段上部海抜8.98〜9.20m **主軸方位**：不明 **出土遺物（図26）**：木製刀子柄（21）・ヘラ状木製品（22） **特記事項**：基壇部は4面でも兼用されている。包含層の堆積状況をみても、4面との連続性が窺える。基壇上面と5面・破砕泥岩層との比高差は20cm弱しかなく、下の地行層とはほぼ平坦に繋がる高さにある。

P.26（図26）

位 置：X−75 355.000〜−75 355.500 Y−25 268.000〜−25 269.000 **規 模**：東西径約26cm×深さ約42cm(底面高8.57m) **平面形**：（楕円形） **断面形**：筒形 **出土遺物**：土師器皿R種（23） **特記事項**：土師器皿は、あるいは地鎮・埋納の可能性がある。

7．6面

北東部に約8.90mの高さで泥岩面が残存するが、損壊が激しく、整地面はすでに消失したと推測される。東側に浅い溝5と道路状遺構などを検出したため、6面とした。

検出遺構：道路状遺構・溝1条・落ち込み2・土坑1基・ピット3基

6面出土遺物（図27）

6面直上：土師器皿R種（1〜3）・漆器椀（4・5）、ヘラ状木製品（6）

道路状遺構（図27）

位 置：X−75 352.500〜−75 355.000 Y−25 273.500〜−25 277.500 **規 模**：東西2.6m以上 **路面高**：海抜8.80〜8.90m **主軸方位**：不明 **出土遺物（すべて東側の落ち込みから出土）**：箸状木製品（7〜9） **特記**

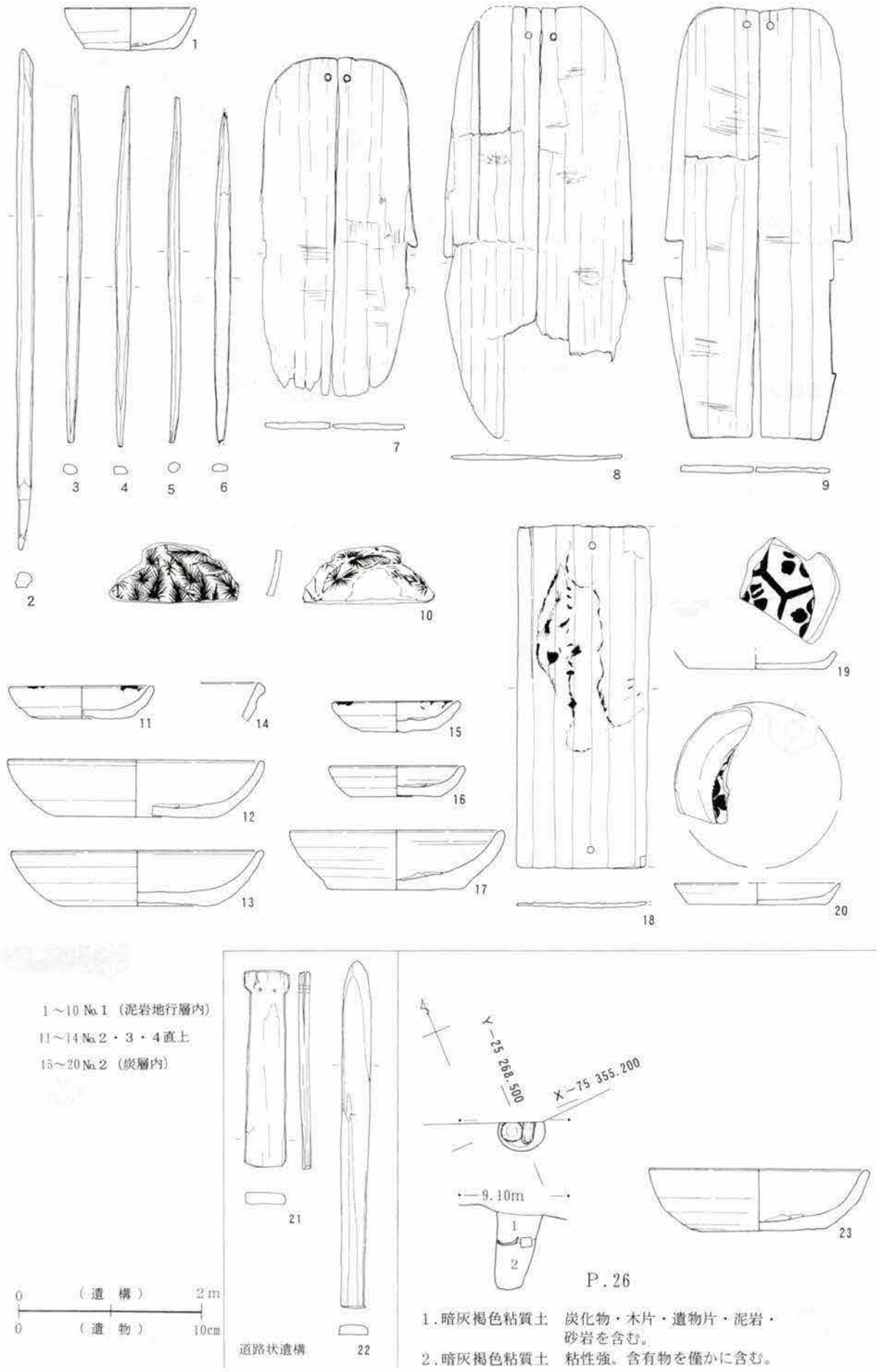


図26　5面出土遺物・p.26,同出土遺物

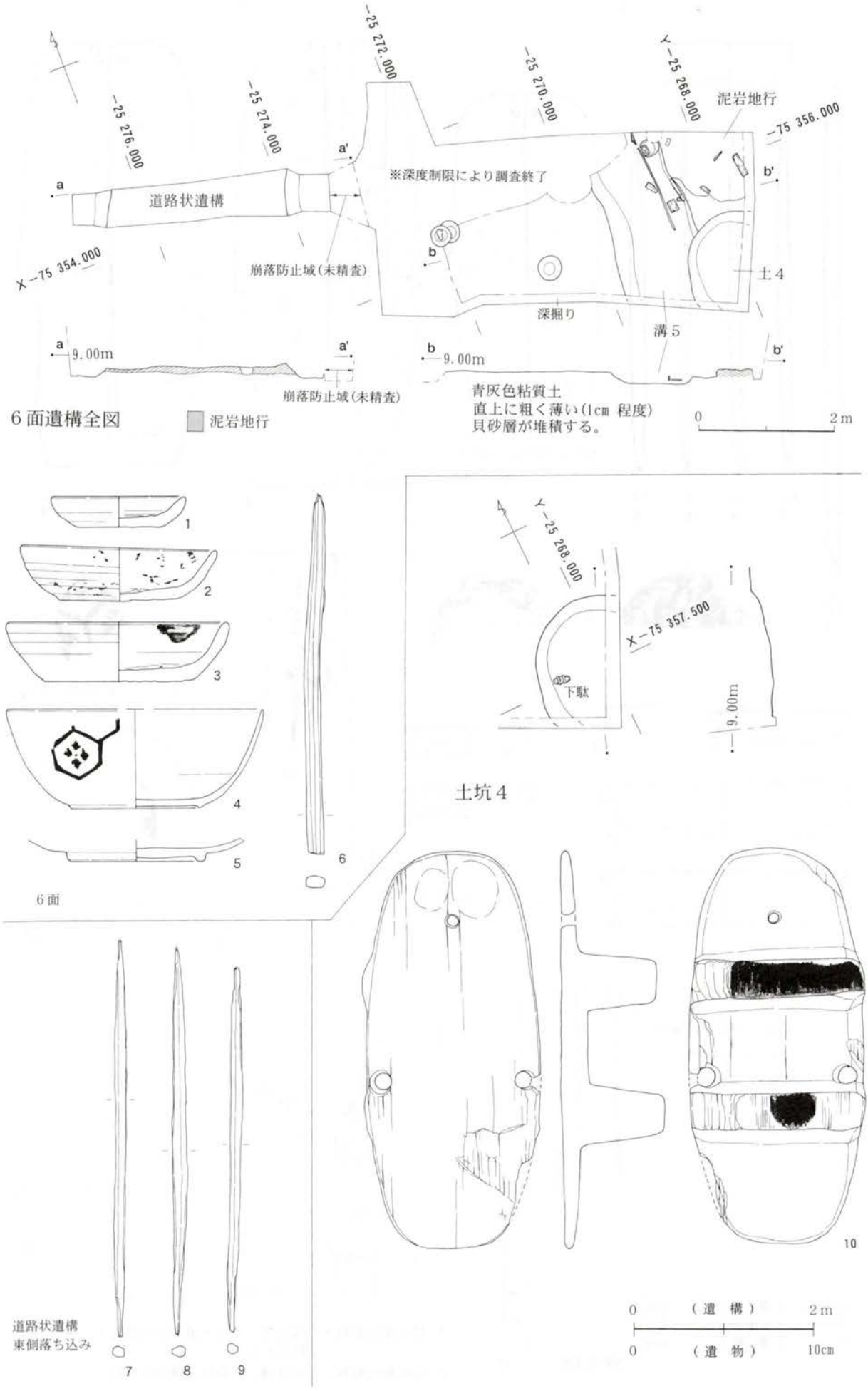


図27　6面遺構全図・土坑4,同出土遺物

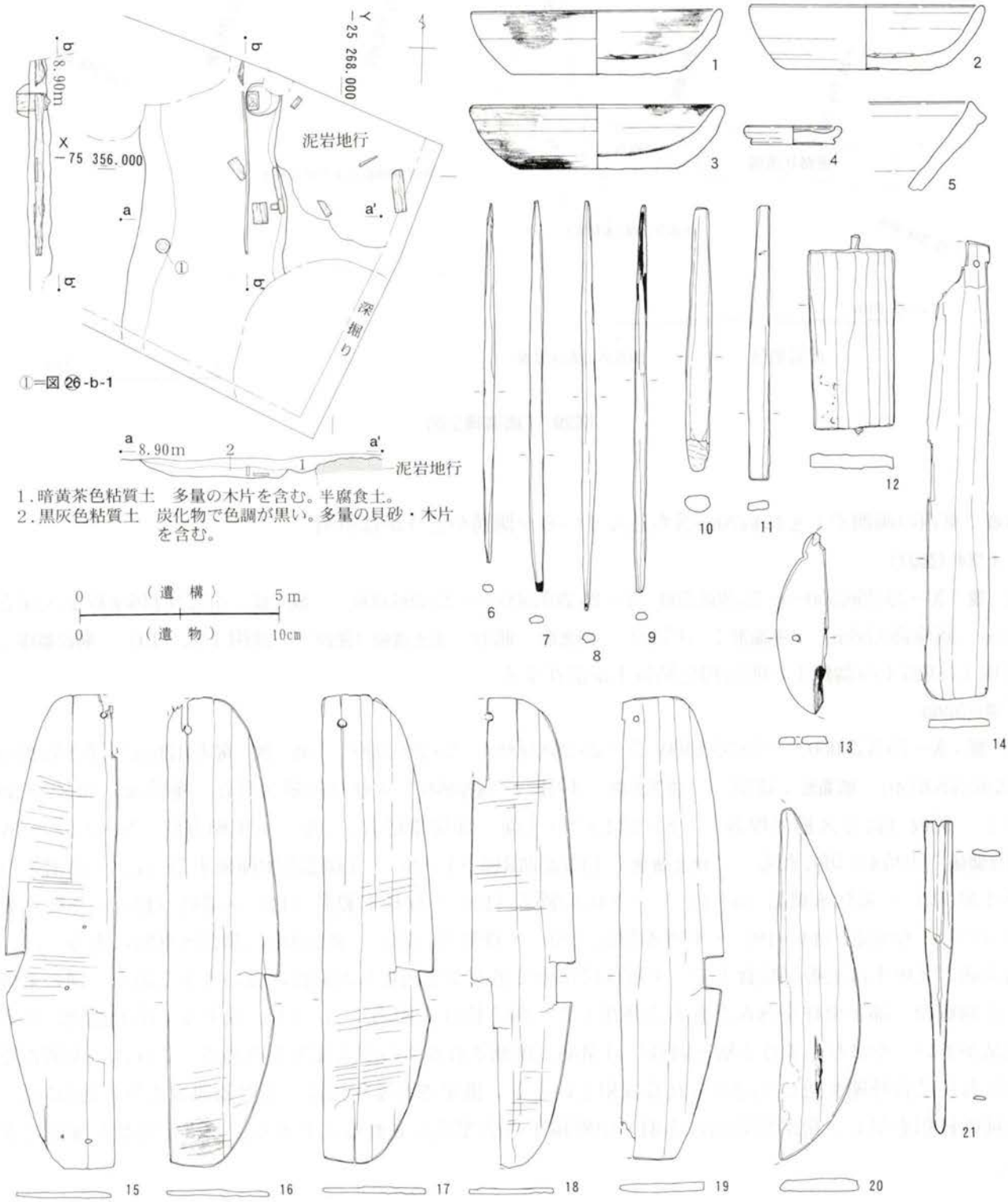

Y
−25 268.000
X
−75 356.000
8.90m
泥岩地行
深掘り
①=図㉖-b-1
a
a'
b
b'
8.90m
2
1
泥岩地行
1.暗黄茶色粘質土　多量の木片を含む。半腐食土。
2.黒灰色粘質土　炭化物で色調が黒い。多量の貝砂・木片を含む。
0
（遺構）
5m
0
（遺物）
10cm

図28　溝5,同出土遺物

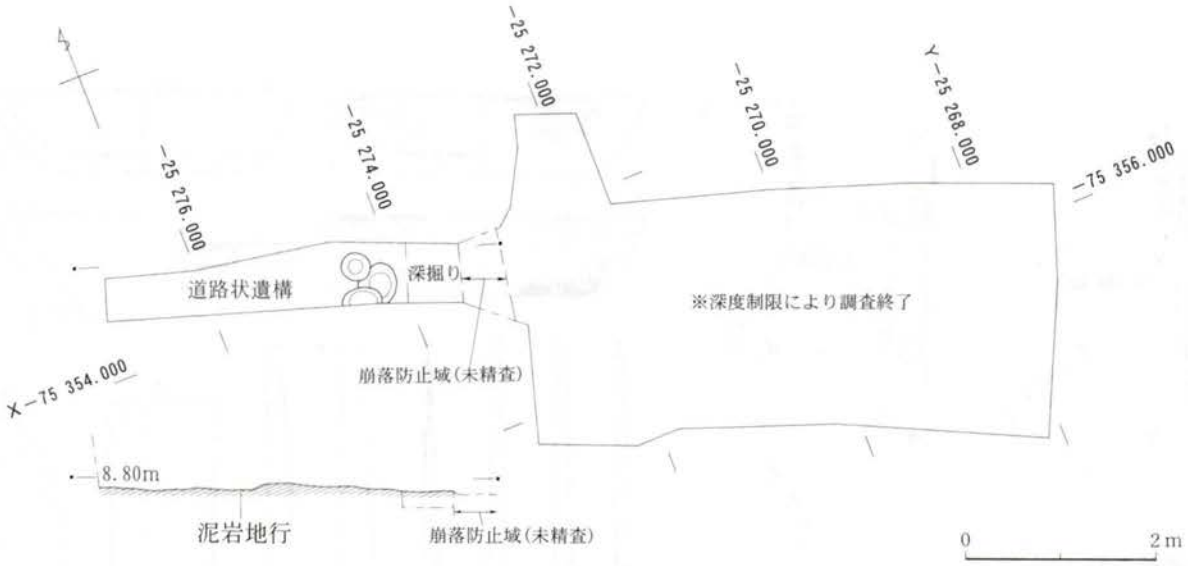


図29　7面遺構全図

事項：東西の両側がともに約20㎝落ち込んでいるが側溝かどうかは不明

土坑4（図27）

位　置：X−75 356.500〜−75 358.500　Y−25 267.500〜−25 269.000　**規　模**：南北径146㎝以上×深さ22㎝（底面高8.56m）　**平面形**：（円形）　**断面形**：Ⅲ形　**出土遺物（図27）**：連歯下駄（10）　**特記事項**：充填土は6面上の腐食土と明灰褐色粘質土が混在する

溝5(図28)

位　置：X−75 355.000〜−75 355.500　Y−25 268.000〜−25 269.000　**規　模**：幅約120㎝×深さ約20㎝(底面高8.67m)　**断面形**：Ⅲ形　**流下方向**：不明　**残存部材**：束柱（縦横×高さ、単位㎝）10×9×30以上　側板（高さ×横×厚み）　8×134×2（上面一部炭素付着）、等　主軸方位：N−2.5°−W　**重複関係**：土坑4に切られる　**出土遺物**：土師器ⅢR種（1〜3）・土師器ⅢR種極小型（4）・常滑片口鉢Ⅱ類（5）・箸状木製品（6〜9）・ヘラ状木製品（10）・棒状木製品（11）・部材（12）・不明木製品（13）・草履芯（14〜19）・不明木製品（20）・骨製笄（21）　**特記事項**：調査区東側にある、浅い南北溝。充填土は上層が腐食土で、下層は炭化物で色調が黒色化した粘性の強い土がしめる。溝の東側には側板の一部と束柱を含んだ柱穴を検出した。軸方位は上層溝2・3・4と一致する。出土遺物には木製品が多い。やはり、より上層と同様に日常品と推測されるものが大部分を占める。これは、本調査地点において各時期を通じて認められる様相といえる。推定される年代は、土師器Ⅲはより上層の5面と同種の様相を呈し、常滑窯製品は赤羽・中野編年の6b型式とされることから、13世紀後葉と推測できる。

8．7面

調査区内は深度制限に達したため、層序は不明ながら、試掘坑内の道路状遺構のみ検出した。標高は約8.70m。

検出遺構：道路状遺構・ピット3基

道路状遺構(図29)

位　置：X−75 352.500〜−75 355.000　Y−25 273.500〜−25 277.500　**規　模**：東西3.8m以上　**路面高**：海抜8.68〜8.74m　**特記事項**：試掘坑内全体で検出されたが、上層と同質の地行のため、道路状と

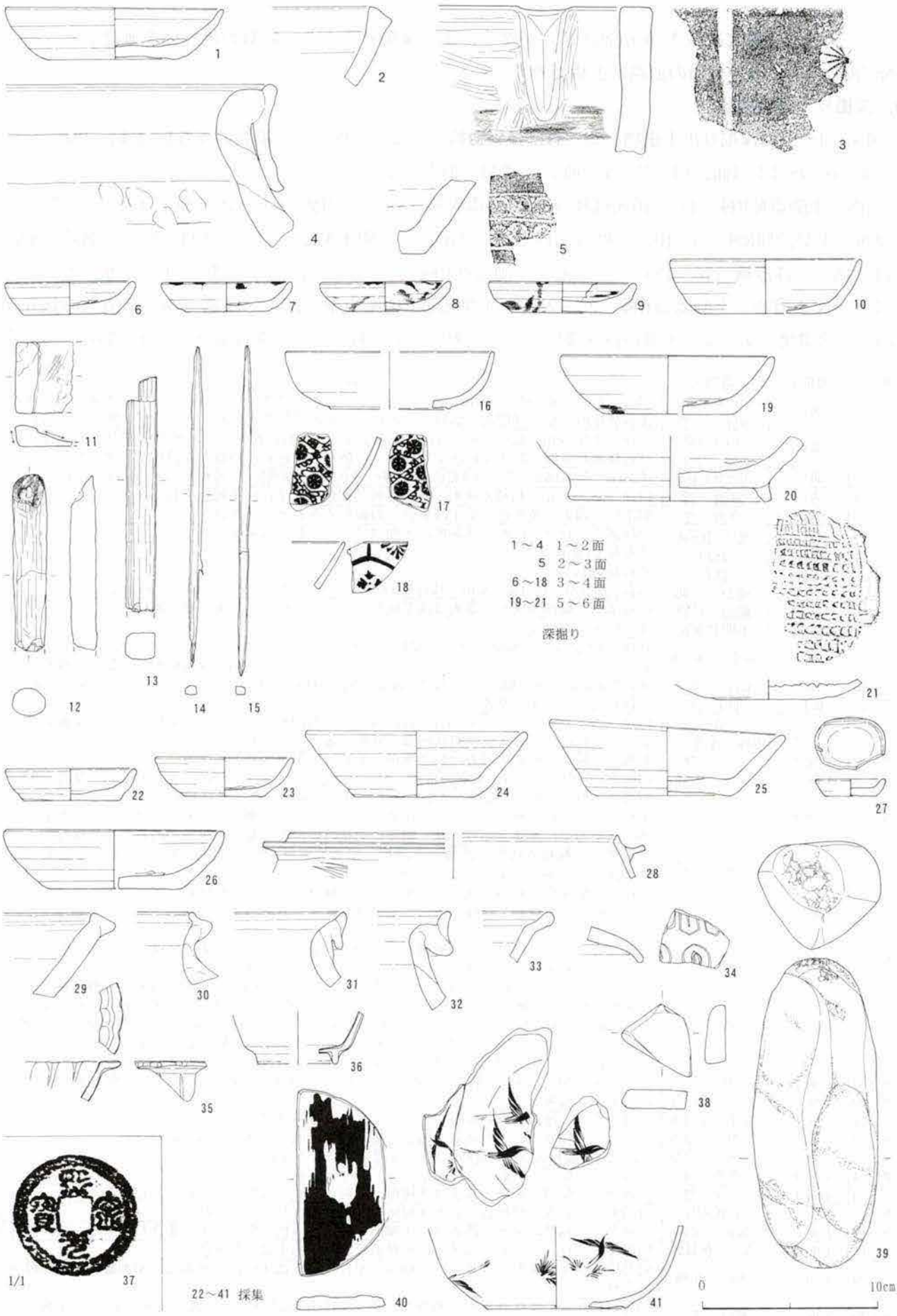


図30　深掘り・採集遺物

した。遺構内の柱穴は深さ10cm弱ほどしかなく、また深掘り下より、同質の地行面を確認した（確認高8.48m）。おそらく下層の道路状遺構だろう。

9. 深掘り・採集遺物

図30 - 1～21は深掘り出土遺物、22～41は採集遺物である。深掘り出土遺物のうち1～4は1～2面、5は2～3面、6～18は3～4面、19～21は5～6面出土遺物に相当する。

1～2面：土師器皿R種（1）・備前擂鉢（2）・瓦器火鉢（3）・常滑甕（4）　2～3面：瓦器火鉢（5）　3～4面：土師器皿R種（6～10）・砥石（11－仕上げ砥）・不明木製品（12）・部材（13）・箸状木製品（14・15）・漆器椀（16～18）　5～6面：土師器皿R種（19）・常滑片口鉢Ⅰ類（20）・瀬戸おろし皿（21）　採集遺物：土師器皿R種（22～26）・土師器皿R種極小型（27）・顎鍋（28）常滑片口鉢Ⅱ類（29）・常滑甕（30～32）・瀬戸折縁深皿（33）・瀬戸瓶子（34）・竜泉窯青磁蓮弁文坏（35）・竜泉窯

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
7	1	溝1	土師器皿 R種　小型	口径（7.1）cm　底径4.5cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で雲母・白色粒・白色針状物質・砂粒・赤色粒子・黒色粒子含む
7	2	溝1	土師器皿 R種　小型	口径（9·9）cm　底径（6.0）cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で黒雲母・白色粒・白色針状物質・赤色粒子・黒色粒子含む
7	3	溝1	円盤型土製品	径2.1cm　厚さ0.4cm　胎土は淡橙色で白色粒・赤色粒子・黒色粒子・砂粒含む　土師器皿片を転用か
7	4	溝1	常滑　甕	口径（53.8）cm　輪積み成形　器表は暗茶褐色　胎土は灰茶褐色、長石を含む
7	5	溝1	常滑　甕	胴部片　器表は茶褐色　胎土は灰色　斜線組み合わせの叩き目
7	6	溝1	瀬戸　折縁鉢	口縁部片　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬けがけ　胎土は黄灰色
7	7	溝1	鉄釘	残存長3.35cm
7	8	溝1	鉄釘	残存長4.2cm
7	9	溝1	砥石　中砥	残存長7.2cm　残存幅6.4cm　残存厚3.8cm　淡灰茶色～紫灰色　伊予　砥面は二面
7	10	南小溝	備前　擂鉢	口縁部片　輪積み成形　器表は淡茶灰色　胎土は灰橙色　八条一組の櫛目
7	11	南小溝	不明鉄製品	径3.2cm　厚さ0.4cm
7	12	土坑1	常滑片口鉢Ⅰ類	底径（12.6）cm　輪積みロクロ成形　外面下部回転ヘラ削り　貼付け高台　内底面使用痕　胎土は淡灰褐色で長石・砂粒含む
7	13	土坑2	砥石　中砥	残存長4.4cm　残存幅3.8cm　厚さ1.8cm　明灰緑色に茶色の斑が入る　伊予　砥面は三面
7	14	p.4	聖宋元寶	初鋳1101年　北宋　篆書
8	1	1面上	土師器皿 R種　小型	口径（7.8）cm　底径（5.6）cm 器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・砂粒・赤色粒子含む
8	2	1面上	常滑　甕	胴部片　輪積み成形　器表は暗赤紫色　胎芯は灰黒色で長石を含む
8	3	1面下	瓦器　火鉢	口縁部片　厚さ2.25cm　輪積み成形　胎土は灰色で白色粒子・小石・黒雲母含む　菊花文押印
8	4	1面下	瓦器　火鉢	胴部片　厚さ1.8cm　輪積み成形　器表は桃色～灰色　胎土は灰桃色で白色粒子・小石・赤色粒子・白色針状物質含む　口縁部下に二条の沈線が廻り、それらにはさまれ小型菊花文押印、その下に連珠文貼り付け　胴部に菊花の周囲を八輪の小菊花が取り巻く文様押印
8	5	1面下	瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　内側ヘラ調整　器表は灰色　胎土は灰白色で白色粒子・砂粒含む　口縁部下に二条の沈線はさまれ小型菊花文押印
8	6	1面下	瓦器　火鉢	口縁部～胴部片　輪積み成形　内側ナデ、外側磨き　器表は暗灰色　胎土は淡灰色で白色粒子・砂粒・礫を含む　口縁部下に二条の沈線はさまれ小型菊花文押印、その下と胴部下位に連珠文貼り付け
8	7	1面下	瓦器　火鉢	脚部部片　底部に貼り付け　外側は横方向ヘラ調整後磨き　器表は灰桃色～灰色　胎土は灰桃色で白色粒子・砂粒・礫・赤色粒子を含み、4の胎土に似る
8	8	1面下	瓦器　火鉢	鍔外径（49.0）cm　底径（33.5）cm　鍔上面までの高さ9.3cm　輪積み成形　外側は横方向ヘラ調整後磨き、内側ナデ　器表は灰黒色　胎土は灰桃色で白色粒子・砂粒・礫・赤色粒子を含む　口縁下に鍔を付け、その上面に1条の沈線をはさんで外側に菊花文、内側に雲渦？文押印を巡らし、上から外斜め方向に穿孔　胴部下位には花菱文・菊花文を二段に巡らす 器壁上部は失われるが、この破損部分で指頭痕が確認でき、貼り付け部分で破損したことが推測できる。
8	9	1面下	軒平瓦	厚さ1.6cm　凹面は砂目　胎土は灰橙色、白色粒子・赤色粒子・砂・小石含む　瓦当文様は唐草文
8	10	1面下	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　胎土は灰褐色
8	11	1面下	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色　胎土は暗茶褐色
8	12	1面下	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗灰橙色　胎土は淡灰橙色、長石含む
8	13	1面下	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗茶褐色　胎土は暗茶褐色、長石含む　二次焼成を受ける
8	14	1面下	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗褐色　胎土は灰色、長石含む
8	15	1面下	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は茶褐色～淡褐色　胎土は黒褐色、長石含む
8	16	1面下	磨耗陶片	常滑転用　表面は暗褐色　胎土は短灰褐色、長石含む　四面磨耗
8	17	1面下	備前　擂鉢	口縁部片　輪積み成形　器表は暗灰褐色　胎土は灰色で黒色粒子・礫含む　六本一組の櫛目
8	18	1面下	瀬戸　折縁鉢	口縁部片　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬けがけ　胎土は淡茶灰色
8	19	1面下	瀬戸　花瓶	肩部片　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬けがけ　胎土は灰白色　外面は釉が剥離　胴部に線刻の文様あり
8	20	1面下	瀬戸　香炉	口径(11.6)cm　ロクロ成形　袴腰型　暗緑褐色灰釉漬けがけ　胎土は黄灰色でキメ細かい　頸部下に貼り付けの文様剥落痕あり

表1　出土遺物観察表（1）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
8	21	1面下	坩堝	口縁部片　表面は黒褐色　胎土は灰色
8	22	1面下	祥符元寶	初鋳1009年　北宋　楷書
8	23	1面下	滑石鍋　転用品	長さ4.6cm　幅3.3ｃｍ　厚さ0.9ｃｍ　暗灰銀色　断面磨耗　鑿状工具痕・穿孔残る
8	24	1面下	砥石　中砥	残存長6.5cm　残存幅3.8cm　厚さ2.4cm　灰茶色に赤色の斑が入る　天草　砥面は三面
8	25	1面下	砥石　仕上げ砥	残存長4.6cm　幅3.3cm　厚さ1.3cm　鳴滝　淡黄褐色　砥面は二面　切り出し痕あり
8	26	1面下	硯石材	残存長9.0cm　幅1.8cm　厚さ0.9cm　黒灰色　粘板岩　三面は滑らかに加工　製品の一部か転用品か不明
9	1	2a・b面上	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.6cm　底径4.1cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・砂粒含む
9	2	2a・b面上	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.5）cm　底径4.2cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・砂粒含む
9	3	2a・b面上	土師器Ⅲ R種　大型	口径（13.5）cm　底径（7.6）cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子含む　二次焼成を受ける
9	4	2a・b面上	常滑片口鉢Ⅰ類	底部片　輪積みロクロ成形　外面下部回転ヘラ削り　貼付け高台　内底面使用痕　胎土は灰褐色で長石・礫含む
9	5	2a・b面上	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗茶褐色　胎土は淡灰褐色　長石含む
9	6	2a・b面上	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は赤茶褐色　胎土は黒灰褐色　長石含む
9	7	2面泥岩層	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.0cm　底径3.6cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・白色粒・土丹粒を含む　口縁部に油煤付着
9	8	2面泥岩層	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.5cm　底径5.2cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・砂粒・土丹粒を含む
9	9	建物1	土師器Ⅲ	口径7.2cm　底径4.0cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・砂粒・土丹粒を含む
9	10	建物1	R種　小型 瓦質製品	器表面淡橙色、内側の一部黒色　胎土は灰色でやや硬質　外側に菊花・花菱などの押印と沈線 内側ヘラ削り　風炉または香炉か
11	1	溝2	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.0）cm　底径3.9cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒・土丹粒含む
11	2	溝2	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.8cm　底径4.4cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒・土丹粒含む
11	3	溝2	土師器Ⅲ R種　小型	口径8.1cm　底径4.5cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・砂粒・土丹粒含む
11	4	溝2	土師器Ⅲ R種　小型	口径8.6cm　底径5.9cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒・土丹粒含む
11	5	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径（10.9）cm　底径6.2cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒・土丹粒含む
11	6	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径（10.9）cm　底径6.2cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒・土丹粒含む
11	7	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径11.8cm　底径6.7cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒・土丹粒含む
11	8	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.5cm　底径8.0cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒含む
11	9	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.9cm　底径7.5cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
11	10	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.3cm　底径7.0cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
11	11	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.3cm　底径6.7cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・白色粒・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
11	12	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径14.0cm　底径7.5cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で白色針状物質・白色粒・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
11	13	溝2	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.6cm　底径6.9cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・赤色粒子・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
11	14	溝2	円盤型土製品	径3.1cm　厚さ0.7cm　中央に穿孔　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒含む 土師器Ⅲを転用
11	15	溝2	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　胎土器表ともに灰色、長石・礫を含む
11	16	溝2	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表暗茶褐色　胎土は暗茶灰色で長石含む
11	17	溝2	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表暗茶褐色　胎土は黒褐色で長石含む
11	18	溝2	常滑片口鉢Ⅱ類	器高12.6cm　輪積みロクロ成形　器表茶褐色　胎土は灰黒色で長石含む　気孔・降灰あり　内底面使用痕
11	19	溝2	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は淡茶褐色　胎土は灰茶褐色　長石含む　降灰あり
11	20	溝2	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗茶褐色　胎土は暗灰色　長石含む　外側剥離
11	21	溝2	常滑　壺	口径（19.0cm）　輪積みロクロ成形　器表は灰色　胎土は暗灰色　長石含む　二次焼成を受ける
11	22	溝2	瀬戸　入れ子	口径7.0cm　底径4.2cm　器高2.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部渦巻き状工具痕 胎土は黄灰色　口縁部に降灰
11	23	溝2	瀬戸　鉢	口径（15.4）cm　ロクロ成形　胎土は灰白色　灰釉漬けがけ
11	24	溝2	鉄釘	残存長5.2cm　幅0.65cm　厚さ0.5cm
11	25	溝2	砥石　中砥	長さ23.5cm　幅5.4cm　厚さ4.9cm　緑灰色　上野　砥面は四面
11	26	溝2	円盤型木製品	残存長17.0cm　残存幅4.5cm　厚さ0.5cm　柾目材
11	27	溝2	漆製品	長さ4.4cm　幅2.75cm　厚さ1.75cm　側面に黒漆が残り下半分に両側から抉りを入れる　上面は粗い断面　脚部か

表2　出土遺物観察表（2）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
11	28	溝2	漆器　椀	胴部片　内外面黒漆塗り　外側に朱漆で笹などの植物文を手描き
11	29	落込み1	土師器Ⅲ R種　中型	口径（11.0）cm　底径（7.4）cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕 胎土は暗橙色で雲母・白色針状物質・白色粒含む
11	30	落込み1	土師器Ⅲ R種　大型	口径12.6cm　底径7.2cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
11	31	落込み1	土師器Ⅲ R種　大型	口径13.6cm　底径7.8cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
11	32	落込み1	土師器Ⅲ R種　極小型	口径（3.6）cm　底径（3.2）cm　器高0.75cm　回転ロクロ　内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒含む
11	33	落込み1	箸状木製品	長さ19.15cm　幅0.55cm　厚さ0.45cm　両口
11	34	落込み1	箸状木製品	残存長17.5cm　幅0.65cm　厚さ0.5cm　両口
11	35	落込み1	箸状木製品	長さ21.2cm　幅0.7cm　厚さ0.55cm　両口
11	36	落込み1	円盤型木製品	残存長さ15.5cm　残存幅4.3cm　厚さ0.7cm　柾目材
14	1	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.0）cm　底径4.8cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・土丹粒含む
14	2	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.4）cm　底径4.7cm　器高2.35cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤少量付着
14	3	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.3cm　底径5.0cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒含む　口縁部に油煤少量付着　二次焼成受ける
14	4	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
14	5	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.5cm　底径5.1cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・土丹粒・砂粒含む
14	6	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.7cm　底径5.0cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
14	7	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　大型	口径11.0cm　底径6.4cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰褐色で雲母・白色針状物質・赤色粒子含む
14	8	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　大型	口径11.9cm　底径6.8cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は暗淡橙色で雲母・白色針状物質・多量の土丹粒・砂粒含む
14	9	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　極小型	口径4.3cm　底径2.7cm　器高0.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒含む
14	10	竪穴遺構1	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表・胎土は灰褐色で長石・礫含む
14	11	竪穴遺構1	常滑片口鉢Ⅱ類	底部片　輪積みロクロ成形　器表は灰褐色　胎土は黒褐色～赤褐色で長石含む
14	12	竪穴遺構1	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗赤紫色　胎土は灰黒色で長石含む
14	13	竪穴遺構1	鉄釘	長さ6.5cm　幅0.45cm　厚さ0.65cm
14	14	竪穴遺構1	鉄釘	長さ7.0cm　幅0.5cm　厚さ0.55cm
14	15	竪穴遺構1	鉄釘	長さ7.0cm
14	16	竪穴遺構1	鉄火箸	長さ21.65cm　幅0.5cm　厚さ0.5cm　身部の断面は丸で柄の部分は四角
14	17	竪穴遺構1	砥石　仕上げ砥	残存長3.7cm　幅3.8cm　厚さ1.2cm　黄白色　鳴滝　砥面は二面
14	18	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ19.2m　幅0.7cm　厚さ0.7cm　両口
14	19	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ19.1m　幅0.65cm　厚さ0.5cm　両口
14	20	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ18.3cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　両口
14	21	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ22.0cm　幅0.65cm　厚さ0.4cm　両口
14	22	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ18.6cm　幅0.7cm　厚さ0.55cm　両口
14	23	竪穴遺構1	棒状木製品	残存長24.6cm　幅1.05cm　厚さ0.8cm　一端が炭化
14	24	竪穴遺構1	棒状木製品	残存長14.35cm　幅1.0cm　厚さ0.85cm　身の部分は断面が四角、先端は丸く削られている
14	25	竪穴遺構1	不明木製品	長さ11.4cm　幅1.65cm　厚さ0.7cm　扁平な角棒状で一端は丸く削り込まれている　柾目材
14	26	竪穴遺構1	木製組み物 部材	長さ11.8cm　幅0.9cm　厚さ0.95cm　断面正方形の角材に幅0.5、、深さ0.4、の切込みを2箇所、その中にそれぞれ釘孔　図20の10と同一部材　図20の8・9の板とともに棚状製品を成すと思われる
14	27	竪穴遺構1	部材	長さ18.1cm　幅4.2cm　厚さ2.3cm　鉄釘1本遺存　表裏面とも傷多数あり
14	28	竪穴遺構1	漆器　椀	胴部片　内外面黒漆塗りに朱漆で松・州浜と見られる情景文を手描き
14	29	竪穴遺構1	漆器　Ⅲ	口径9.4cm　底径6.3cm　器高1.1cm　無高台　内外面黒漆塗り　内面全体に朱漆で瓜・籠目の構成文を手描き
14	30	竪穴遺構1	漆器　Ⅲ	口径9.7cm　底径8.0cm　器高1.3cm　無高台　内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で州浜・松の情景文を手描き
14	31	竪穴遺構1	漆器　椀	底径（7.0）cm　輪高台　内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で手描き（ぶん回しで円を描き内側を七宝繋で埋める）
15	32	竪穴遺構1	木製組み物 部材	
16	33	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径5.8cm　底径4.4cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	34	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.5cm　底径4.6cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	35	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.2cm　底径4.3cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子含む　口縁部に油煤付着
16	36	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.5）cm　底径4.4cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
16	37	竪穴遺構1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.2cm　底径4.3cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒含む

表3　出土遺物観察表（3）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
16	38	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
16	39	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.8cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	40	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径6.9cm　底径5.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
16	41	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は黄茶褐色で雲母・白色針状物質・白色粒・砂粒含む　二次焼成を受け黒く変色
16	42	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径5.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	43	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径4.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・黒色粒・白色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	44	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で極め細かく、雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・白色粒・砂粒含む
16	45	竪穴遺構1	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径4.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	46	竪穴遺構1	土師器皿 R種　中型	口径10.7cm　底径6.6cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒・赤色粒子・白色粒・多量の砂粒含む
16	47	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径11.6cm　底径6.8cm　器高3.45cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で雲母・白色針状物質・白色粒・土丹粒・砂粒含む
16	48	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径7.5cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は暗淡橙色で雲母・白色針状物質・白色粒含む
16	49	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径6.7cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で黒雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・土丹粒含む　口縁部に油煤付着
16	50	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径（13.0）cm　底径8.0cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
16	51	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.7cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
16	52	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径7.6cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は暗橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
16	53	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径13.45cm　底径7.3cm　器高3.45cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・白色針状物質・白色粒・赤色粒子・砂粒含む
16	54	竪穴遺構1	土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径7.9cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は暗淡橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
16	55	竪穴遺構1	白色系土師器皿 R種　大型	底径4.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　胎土は灰白色
16	56	竪穴遺構1	白色系土師器皿 R種　大型	底径4.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　胎土は灰白色
17	57	竪穴遺構1	常滑片口鉢Ⅰ類	底径（12.8）cm　輪積みロクロ成形　外面下部回転ヘラ削り　貼付け高台　内底面使用痕 胎土は灰色で長石・小石含む　二次焼成を受ける
17	58	竪穴遺構1	常滑　壺	口径（10.6）cm　輪積みロクロ成形　器表は暗茶褐色　胎土は黒褐色で長石含む
17	59	竪穴遺構1	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗褐色　胎土は暗灰褐色で長石含む　降灰あり
17	60	竪穴遺構1	常滑　甕	底径（41.0）cm　輪積み成形　器表は暗灰褐色　胎土は暗灰褐色で長石含む
17	61	竪穴遺構1	磨耗陶片	長さ7.6ｃｍ　幅10.1cm　厚さ1.1cm　常滑甕転用　器表は淡褐色　胎土は暗灰褐色で長石含む
17	62	竪穴遺構1	瀬戸　おろし皿	口径14.6cm　底径6.8cm　器高3.2cm　ロクロ成形　底部糸きり　灰釉ハケ塗り 胎土は黄灰色　片口一箇所
17	63	竪穴遺構1	鉄釘	長さ9.7ｃｍ　幅0.45cm　厚さ0.6cm
17	64	竪穴遺構1	鉄釘	長さ7.5ｃｍ　幅0.6cm　厚さ0.75cm
17	65	竪穴遺構1	鉄製　刀子	残存長11.3ｃｍ　幅2.2cm　厚さ0.4cm
17	66	竪穴遺構1	元豊通寶	初鋳1078年　北宋　行書
17	67	竪穴遺構1	嘉祐通寶	初鋳1056年　北宋　楷書
17	68	竪穴遺構1	砥石　中砥	残存長7.0cm　幅3.0cm　厚さ1.4cm　淡灰色　砥面は四面
17	69	竪穴遺構1	砥石　仕上げ砥	残存長8.9cm　幅3.4cm　厚さ0.7cm　淡緑灰色　砥面は二面　切り出し痕あり
17	70	竪穴遺構1	砥石　仕上げ砥	残存長6.7cm　幅4.0cm　厚さ0.8cm　淡緑灰色　砥面は二面　切り出し痕あり
17	71	竪穴遺構1	砥石　仕上げ砥	残存長4.4cm　幅3.0cm　厚さ0.9cm　淡緑灰色　鳴滝　砥面は一面　切り出し痕あり
17	72	竪穴遺構1	砥石　仕上げ砥	残存長5.0cm　幅3.6cm　厚さ0.9cm　淡緑灰色　鳴滝　砥面は二面　切り出し痕あり
17	73	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ17.0cm　幅0.8cm　厚さ0.6cm　両口
17	74	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ17.4cm　幅0.5cm　厚さ0.3cm　両口
17	75	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ17.3cm　幅0.6cm　厚さ0.35cm　両口
17	76	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ17.6cm　幅0.75cm　厚さ0.6cm　両口
17	77	竪穴遺構1	箸状木製品	残存長18.5cm　幅0.8cm　厚さ0.35cm　両口
17	78	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ18.4cm　幅0.75cm　厚さ0.5cm　両口
17	79	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ18.5cm　幅0.9cm　厚さ0.5cm　両口
17	80	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ18.85cm　幅0.8cm　厚さ0.5cm　両口
17	81	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ21.4cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
17	82	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ21.4cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口
17	83	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ21.7cm　幅0.8cm　厚さ0.35cm　両口
17	84	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ21.1cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　両口
17	85	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ21.2cm　幅0.7cm　厚さ0.5cm　両口

表4　出土遺物観察表（4）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
17	86	竪穴遺構1	箸状木製品	残存長21.7cm　幅0.85cm　厚さ0.6cm　両口
17	87	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ22.5cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　両口
17	88	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ22.9cm　幅0.7cm　厚さ0.55cm　両口
17	89	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ23.8cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
17	90	竪穴遺構1	箸状木製品	長さ25.9cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　両口
17	91	竪穴遺構1	棒状木製品	残存長18.0cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　先端炭化
17	92	竪穴遺構1	棒状木製品	残存長22.2cm　幅1.2cm　厚さ0.9cm　全体に削りが施され、両端が細い
17	93	竪穴遺構1	棒状木製品	長さ33.5cm　幅0.85cm　厚さ0.8cm　一端が炭化？
17	94	竪穴遺構1	棒状木製品	長さ33.4cm　幅1.05cm　厚さ0.7cm　一端が炭化？
17	95	竪穴遺構1	棒状木製品	長さ33.5cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　一端が炭化？
18	96	竪穴遺構1	刀形	長さ51.7cm　幅2.1cm　厚さ0.8cm　一端を丸みを付けて斜めに成形　板目材
18	97	竪穴遺構1	扇骨	長さ15.8cm　幅1.0cm　厚さ0.3cm　板目材　端に小孔貫通
18	98	竪穴遺構1	ヘラ状木製品	長さ24.2cm　幅3.15cm　厚さ5.55cm　一端を丸く成形　中央に小孔1貫通　板目材　黒い汚れ付着
18	99	竪穴遺構1	ヘラ状木製品	長さ18.85cm　幅0.95cm　厚さ0.7cm　柾目材　一端を斜めに削る
18	100	竪穴遺構1	ヘラ状木製品	長さ14.8cm　幅1.2cm　厚さ0.6cm　断面蒲鉾型に成形　先端は薄く削がれる　柾目材
18	101	竪穴遺構1	ヘラ状木製品	長さ13.7cm　幅0.95cm　厚さ0.6cm　一端は薄く削がれ直線的に切断、もう一端は幅狭く削られる
18	102	竪穴遺構1	不明木製品	長さ8.8cm　幅2.6cm　厚さ1.5cm　深さ0.8cmほどの方形のホゾを穿つ　底面及び両側面は中高に削り調整　柾目材　舟形か
18	103	竪穴遺構1	不明木製品	長さ18.5cm　幅5.2cm　厚さ1.2cm　一箇所径2.0～2.5cmの円形にくりぬかれる　板目材
18	104	竪穴遺構1	不明木製品	長さ16.1cm　幅2.9cm　厚さ1.1cm　先端は刀子状に削り　両側面は面取りされ、粗い削り込みが一箇所　柾目材
18	105	竪穴遺構1	折敷	長さ17.0cm　残存幅11.0cm　厚さ0.2cm　経木　直線的に角を落とす　片中央に0.2cmほどの小孔3箇所
18	106	竪穴遺構1	円盤型木製品	残存長8.6cm　残存幅3.3cm　厚さ0.6cm　柾目材
18	107	竪穴遺構1	漆器　椀	胴部片　内外面黒漆塗りに朱漆で菊の葉・花を手描き
18	108	竪穴遺構1	漆器　皿	口径（9.0）cm　底径（5.6）cm　残高1.6cm　輪高台　内面赤茶漆塗り無文　外面黒漆塗りに朱漆で桐・笹を手描き
18	109	竪穴遺構1	漆器　椀	口径（15.0）cm　底径（8.0）cm　器高（5.0）cm　輪高台　内外面黒漆塗りに朱漆で楓を手描き
18	110	竪穴遺構1	漆器　椀	口径（12.6）cm　底径7.2cm　残高3.7cm　輪高台　内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で楓を手描き
18	111	溝3	土師器Ⅲ R種　小型	口径（7.4）cm　底径（4.0）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・砂粒含む
18	112	溝3	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.5cm　底径4.4cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
18	113	溝3	土師器Ⅲ R種　小型	口径（8.2）cm　底径（4.0）cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は灰橙色で雲母・白色針状物質・黒色粒・白色粒・砂粒含む
18	114	溝3	瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　器表は灰黒色　胎土は淡灰橙色で白色粒子・雲母含む
18	115	溝3	常滑片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　胎土は暗灰褐色で長石・礫含む
18	116	溝3	箸状木製品	長さ17.55cm　幅0.7cm　厚さ0.55cm　両口　一端炭化
18	117	溝3	箸状木製品	長さ17.8cm　幅0.85cm　厚さ0.5cm　両口
18	118	溝3	漆器　皿 土師器Ⅲ	口径9.0cm　底径7.0cm　器高1.05cm　無高台 内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で州浜などの情景文を手描き
18	119	溝3	R種　小型 土師器Ⅲ	口径（7.0）cm　底径4.0cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・白色粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
18	120	溝3	R種　小型 土師器Ⅲ	口径7.4cm　底径4.4cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で雲母・黒色粒・白色粒・砂粒・土丹粒含む
18	121	溝3	R種　小型 土師器Ⅲ	口径8.0cm　底径5.0cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
18	122	溝3	R種　小型 土師器Ⅲ	口径7.4cm　底径4.0cm　器高2.45cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・白色粒・土丹粒・砂粒含む　口縁部に油煤付着
18	123	溝3	R種　中型 土師器Ⅲ	口径11.2cm　底径5.6cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・白色粒・土丹粒・砂粒含む
18	124	溝3	R種　中型 土師器Ⅲ	口径10.8cm　底径5.9cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は暗橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・赤色粒子含む　二次焼成を受ける
18	125	溝3	R種　大型 土師器Ⅲ	口径13.3cm　底径6.6cm　器高4.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・白色粒・土丹粒・赤色粒子含む
18	126	溝3	R種　小型 土師器Ⅲ	口径（7.6）cm　底径4.4cm　器高2.25cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・赤色粒子・砂粒含む
18	127	溝3	R種　大型	口径11.9cm　底径6.24.5cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む　外側に火を受ける
18	128	溝3	瀬戸　折縁鉢	口縁部片　ロクロ成形　浅黄色の灰釉漬けがけ　胎土は淡茶色
18	129	溝3	円盤型木製品	残存長14.05cm　残存幅4.7cm　厚さ0.8cm　柾目材
18	130	溝3	木製　部材	長さ58.0cm　幅6.1cm　厚さ6.0cm
19	1	据甕1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.6cm　底径4.6cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	2	据甕1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.7cm　底径4.3cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒色粒・黒雲母・土丹粒・砂粒含む
19	3	据甕1	土師器Ⅲ R種　小型	口径7.7cm　底径4.7cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒色粒・土丹粒・砂粒含む

表5　出土遺物観察表（5）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
19	4	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高2.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
19	5	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径4.25cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子含む
19	6	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.6cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	7	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径4.9cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・黒雲母・黒色粒・土丹粒含む
19	8	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.3cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
19	9	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.5cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒含む
19	10	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.3cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒含む
19	11	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	12	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径4.3cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡灰橙色で白色針状物質・黒雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
19	13	据甕1	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.4cm　器高1.85cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒含む
19	14	据甕1	土師器皿 R種　中型	口径10.7cm　底径5.7cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	15	据甕1	土師器皿 R種　中型	口径10.6cm　底径5.8cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	16	据甕1	土師器皿 R種　中型	口径10.9cm　底径6.4cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	17	据甕1	土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.9cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒雲母・黒色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
19	18	据甕1	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は灰茶褐色　胎土は灰褐色で長石・雲母・気孔含む　降灰あり
19	19	据甕1	常滑　甕	底径19.2cm　輪積み成形　器表は灰茶褐色　胎土は橙褐色で長石・礫・気孔含む 内底面降灰あり　外底面砂目
20	1	3面	土師器皿 R種　小型	口径12.4cm　底径7.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・礫・砂粒含む　内外面とも灰黒色の物質付着
20	2	3面	磨耗陶片	長さ6.2cm　幅5.35cm　厚さ1.25cm　叩き目を有する常滑甕片を転用　胎土は灰橙色　側面全体が磨耗
20	3	3面	木製　工具柄	長さ17.3cm　径1.65～1.6cm　粗い削りにより円柱上を成す　中心をやや外れて径0.5㎝の鉄遺存　錐か
20	4	3面	木製部材	残存長31.4cm　幅2.6cm　厚さ1.7cm　片面に等間隔（3cm）で幅2㎝、深さ0.4㎝の溝を刻む 溝の底に鉄釘2箇所、釘孔1箇所残る　柾目材　蔀の格子を構成する部材と思われる
20	5	道路状遺構	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は赤茶褐色　胎土は黒灰褐色で長石含む
20	6	道路状遺構	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底径（6.0）cm　ロクロ成形　外面に複弁の連弁文 素地は淡灰色、黒色微粒子含む　　釉薬は緑青色で透明　畳付けのみ露胎"
20	7	道路状遺構	不明木製品	長さ8.5cm　幅4.3cm　厚さ0.85cm　一端を両面からU字型に削る　板目材
20	8	道路状遺構	ヘラ状木製品	長さ16.0cm　幅1.3cm　厚さ0.8cm　断面楕円形、一端が尖る
20	9	道路状遺構	ヘラ状木製品	長さ15.6cm　幅1.4cm　厚さ0.45cm　一端は斜めに切断、反対側は刃状に薄く削る
20	10	道路状遺構	角棒状木製品	長さ16.3cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm
20	11	道路状遺構	箸状木製品	長さ21.75cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　両口
20	12	P.24	箸状木製品	長さ18.4cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
20	13	P.25	瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　内外面ヘラ磨き　外側に菊花文押印　胎土は淡灰橙色で小石含む
22	1	竪穴遺構2	土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径8.0cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒・赤色粒子・小礫含む
22	2	竪穴遺構2	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗赤紫色　胎土は灰黒色で長石含む　降灰あり
22	3	竪穴遺構2	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗赤紫色　胎土は灰黒色　降灰あり
22	4	竪穴遺構2	白色系土師器皿 T種　大型	口縁部片　胎土は灰白色
22	5	竪穴遺構2	瀬戸　入れ子	底径3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ、降灰あり　底部周辺を故意に打ち欠いた可能性あり　胎土は淡灰色色粒・赤色粒子・土丹粒・砂粒含む
22	6	竪穴遺構2	箸状木製品	長さ20.0cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm　両口
22	7	竪穴遺構2	ヘラ状木製品	残存長19.9cm　幅1.05cm　厚さ1.0cm　断面四角形の棒状の材の両端を削りにより尖らせる
22	8	竪穴遺構2	木製組み物 部材	長さ9.35cm　幅8.1cm　厚さ0.6cm　正方形に近い板目材の四隅に1.0cm×0.5cm前後の切込みが入る　切込みの内側に上下方向に小孔貫通、側面にそれぞれ釘孔状小孔
22	9	竪穴遺構2	木製組み物 部材	長さ9.5cm　幅8.5cm　厚さ0.7cm　8とほぼ同型の部材　片面に半円形に炭化した部分がある
22	10	竪穴遺構2	木製組み物 部材	長さ11.95m　幅0.95cm　厚さ0.8cm　断面正方形の角材に0.5cm×0.4cm前後の切込みを2箇所、その底にそれぞれ木釘残る　切込みの内側に小孔2箇所貫通　図14の26と同一部材　図20の8・9の板とともに棚状製品を成すと思われる
22	11	溝4	土師器皿 R種　小型	口径7.0cm　底径3.9cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒含む　口縁部に油煤付着

表6　出土遺物観察表（6）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
22	12	溝4	土師器皿 R種　小型	口径(7.4)cm　底径(4.4)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒含む
22	13	溝4	土師器皿 R種　中型	口径11.0cm　底径6.2cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
22	14	溝4	土師器皿 R種　大型	口径(12.4) cm　底径(6.4)cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒・土丹粒・砂粒含む
22	15	溝4	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗茶褐色　胎土は黒褐色で長石含む
22	16	溝4	瓦器　火鉢	口縁部片　輪積み成形　内外面ヘラ磨き　器表面灰黒色　胎土は灰色で小石含む
22	17	溝4	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗褐色　胎土は暗褐色で長石含む
22	18	溝4	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗褐色　胎土は暗褐色で長石含む
22	19	溝4	箸状木製品	長さ19.0cm　幅0.75m　厚さ0.6cm　両口
22	20	溝4	箸状木製品	長さ18.9cm　幅0.8cm　厚さ0.55cm　両口
22	21	溝4	ヘラ状木製品	長さ22.5cm　幅0.9cm　厚さ0.3cm　両端が斜めに尖り、一方は薄く削られる
22	22	溝4	土師器皿 R種　小型	口径8.2cm　底径5.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・砂粒含む
22	23	溝4	箸状木製品	長さ19.8cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　両口
22	24	溝4	箸状木製品	長さ16.6cm　幅0.9cm　厚さ0.55cm　両口
22	25	溝4	箸状木製品	長さ25.4cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
22	26	溝4	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.3cm　器高2.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は淡灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む
22	27	溝4	硯	長さ11.1cm　幅6.85cm　厚さ1.7cm　長方硯　内側は四葉をなす　海部深さ0.6cm　灰黒色粘板岩　海部、陸部、外側面に墨付着
23	1	4面	土師器皿 R種　小型	口径(7.85)cm　底径(5.4)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰黒色で白色針状物質・雲母含む　二次焼成を受ける
23	2	4面	瀬戸　折縁鉢	口径(19.0)cm　底径(9.8)cm　器高4.35cm　ロクロ成形　釉は灰緑色の灰釉で内面は厚く掛かり、外面はハケ塗り　胎土は灰色で黒色粒含む　高台内は露胎で卸目が付く　内底面の周りと中央付近に櫛掻の沈線
23	3	4面	瀬戸底おろし目皿	底部辺　ロクロ成形　底部糸きり　灰釉ハケ塗り　胎土は淡灰褐色で白色粒・礫・気泡含む
23	4	4面	亀山系陶器　甕	胴部片　厚さ0.8cm　胎土は灰白色で白色粒子・黒色粒子含み軟質　胎芯は灰色　器表面は灰黒色で外側は格子叩き目、内側はヘラナデ
23	5	4面	砥石　中砥	長さ5.8cm　幅5.4cm　厚さ4.8cm　橙灰色に赤褐色の筋が入る　天草　砥面は六面
23	6	4面	砥石　仕上砥	残存長3.8cm　残存幅3.9cm　厚さ1.4cm　肌色　砥面は二面　切出し痕あり
23	7	4面	円盤型木製品	径5.7～6.4cm　厚さ1.1cm　やや楕円をなし、中央に0.5cmの孔貫通　縁を斜めに削る　板目材　紡輪か
23	8	道路状遺構	瀬戸　おろし皿	口縁部片　ロクロ成形　灰釉ハケ塗り　胎土は黄灰色
23	9	道路状遺構	箸状木製品	長さ19.55cm　幅0.55cm　厚さ0.5cm　両口
23	10	道路状遺構	ヘラ状木製品	残存長27.6cm　幅1.3cm　厚さ0.7cm　削りで先端を尖らせる　両端が尖る可能性もある
23	11	道路状遺構	部材	長さ47.5cm　幅8.2cm　厚さ4.8cm　一端に3.3×3.9cmの切込みが入る
24	1	落込み2	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径(5.0)cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子含む
24	2	落込み2	土師器皿 R種　中型	口径10.5cm　底径6.2cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・白色粒含む
24	3	落込み2	土師器皿 R種　大型	口径(12.2)cm　底径(8.0)cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む
24	4	落込み2	土師器皿 R種　大型	口径(12.2)cm　底径7.2cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙褐色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・小礫含む
24	5	落込み2	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗緑灰色、降灰あり　胎土は灰黒色で長石含む
24	6	落込み2	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗赤紫色　胎土は灰黒色で長石含む　二次焼成を受ける
24	7	落込み2	瀬戸　おろし皿	口縁部片　ロクロ成形　灰釉ハケ塗り　胎土は黄灰色
24	8	落込み2	漆器　椀	底径 (7.6)cm　無高台　内外面黒漆塗り
24	9	落込み2	円盤型木製品	残存長29.15cm　残存幅7.7cm　厚さ1.4cm　粗い柾目材
26	1	泥岩地行層	土師器皿 R種　小型	口径7.25cm　底径5.2cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む
26	2	泥岩地行層	箸状木製品	長さ27.7cm　幅0.9cm　厚さ0.85cm　一端は細く削り、一端は斜めに切断　真魚箸または櫛の可能性がある
26	3	泥岩地行層	箸状木製品	長さ19.0cm　幅0.45cm　厚さ0.6cm　両口
26	4	泥岩地行層	箸状木製品	長さ19.8cm　幅0.8cm　厚さ0.4cm　両口
26	5	泥岩地行層	箸状木製品	長さ19.1cm　幅0.8cm　厚さ0.55cm　両口
26	6	泥岩地行層	箸状木製品	残存長18.3cm　幅0.85m　厚さ0.7cm　両口
26	7	泥岩地行層	草履　芯	長さ18.6ｃｍ　残存幅8.6cm　厚さ0.35cm　植物圧痕僅かに残る
26	8	泥岩地行層	草履　芯	長さ23.7ｃｍ　幅10.45cm　厚さ0.3cm　植物圧痕僅かに残る
26	9	泥岩地行層	草履　芯	長さ23.6ｃｍ　幅10.4cm　厚さ0.4cm　植物圧痕僅かに残る
26	10	泥岩地行層	漆器　椀	胴部片　内外面黒漆塗りに朱漆で手描き竹笹文
26	11	5面上	土師器皿 R種　小型	口径(8.6)cm　底径(5.2)cm　器高1.85m　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒・小礫含む　口縁部・外側面に油煤少量付着
26	12	5面上	土師器皿 R種　大型	口径(13.9)cm　底径(8.4)cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・赤色粒子含む
26	13	5面上	土師器皿 R種　大型	口径(13.7)cm　底径(8.4)cm　器高3.1m　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・赤色粒子・雲母含む
26	14	5面上	瀬戸　おろし皿	口縁部片　ロクロ成形　灰釉ハケ塗り　胎土は灰色

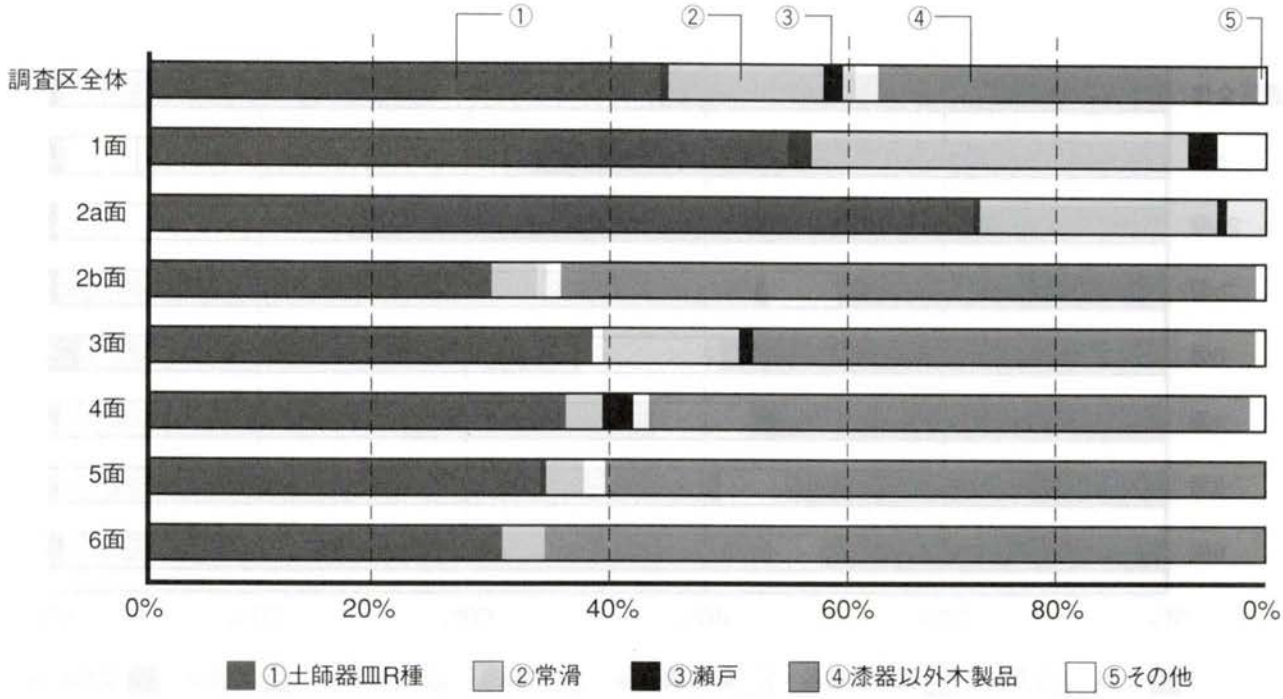
表7　出土遺物観察表（7）

図	No.	遺構名	遺物名	観　察
26	15	炭層	土師器皿 R種　小型	口径(6.9)cm　底径3.7cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・白色粒子・小礫含む　口縁部に油煤付着
26	16	炭層	土師器皿 R種　小型	口径(7.3)cm　底径5.0cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・砂粒含む
26	17	炭層	土師器皿 R種　大型	口径11.7cm　底径7.6cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・砂粒・小礫含む
26	18	炭層	折敷	長さ18.9cm　残存幅7.3cm　厚さ0.25cm　径0.3cmの孔２箇所貫通
26	19	炭層	漆器　皿	底径（7.6）cm　無高台　内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で亀甲の中に花菱を配する文様を手描き
26	20	炭層	漆器　皿	口径（9.2）cm　底径（7.6）cm　器高1.2cm　無高台　内外面黒漆塗り　内底面に朱漆で亀甲の中に花菱を配する文様を手描き　接合は出来なかったが、19と同一個体と思われる
26	21	道路状遺構	木製　柄	長さ10.9ｃｍ　幅2.5cm　厚さ0.6cm　板目材を面取りして丁寧に成形　丁字状にやや広がった柄元に割目を入れそれを木釘2本が貫く　薄い板状の物をはさんで用いる柄の部分と思われる
26	22	道路状遺構	ヘラ状木製品	長さ19.4cm　幅1.6cm　厚さ0.6cm　先端は丸みを帯びた輪郭で薄く削る、末はやや細く絞る
26	23	p.26	土師器皿 R種　大型	口径11.85cm　底径7.5cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・雲母・小礫含む
27	1	6面	土師器皿 R種　小型	口径（7.4）cm　底径4.6cm　器高1.7cm　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は灰橙色で白色針状物質・白色粒含む　口縁部に油煤少量付着
27	2	6面	土師器皿 R種　中型	口径10.9cm　底径6.45cm　器高3.0m　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・赤色粒子・白色粒子・雲母・砂粒含む
27	3	6面	土師器皿 R種　大型	口径(12.3)cm　底径8.2cm　器高3.35m　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・白色粒子・雲母・小礫含む　口縁部の一部に油煤付着
27	4	6面	漆器　椀	口径（14.4）cm　底径7.2cm　器高5.5cm　輪高台　内面朱漆塗り、無文　外面は黒漆塗りで、朱漆で亀甲の中に花菱を配する文様を手描きする
27	5	6面	漆器　椀	底径7.8cm　輪高台　内外面とも黒漆塗り、無文　高台内は木地露出
27	6	6面	ヘラ状木製品	長さ20.2cm　幅0.95cm　厚さ0.65cm　一端を削りより尖らせる
27	7	道路状遺構 東側落込み	箸状木製品	長さ22.5cm　幅0.65cm　厚さ0.6cm　両口
27	8	道路状遺構 東側落込み	箸状木製品	長さ22.0cm　幅0.8cm　厚さ0.65cm　両口
27	9	道路状遺構 東側落込み	箸状木製品	長さ22.2cm　幅0.6cm　厚さ0.55cm　両口
27	10	土坑4	連歯下駄	長さ22.4cm　幅9.8cm　高さ5.8cm　柾目材　歯の表面が炭化
28	1	溝5	土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径8.0cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・赤色粒子・雲母・小礫・砂粒含む　口縁部に油煤付着
28	2	溝5	土師器皿 R種　大型	口径(12.0)cm　底径7.5cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙褐色で白色針状物質・赤色粒子・雲母・小礫・砂粒含む
28	3	溝5	土師器皿 R種　大型	口径(12.7)cm　底径(8.2)cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・礫含む　内外面とも火を受け斑に黒色を呈す
28	4	溝5	土師器皿 R種　極小型	口径(5.0)cm　底径(4.2)cm　器高0.95cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・白色粒子含む　内折れ型
28	5	溝5	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表・胎土は茶褐色、胎芯は暗灰褐色で長石・石英・雲母含む　油煤付着
28	6	溝5	箸状木製品	長さ18.2cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm　両口
28	7	溝5	箸状木製品	長さ19.8cm　幅0.7cm　厚さ0.35cm　両口
28	8	溝5	箸状木製品	長さ20.7cm　幅0.7cm　厚さ0.45cm　両口
28	9	溝5	箸状木製品	長さ19.7cm　幅0.6cm　厚さ0.4cm　両口
28	10	溝5	ヘラ状木製品	長さ13.35cm　幅1.25cm　厚さ0.9cm　断面かまぼこ型に削り、先端は斜めに削ぎ、一端は細く尖る
28	11	溝5	棒状木製品	長さ13.9cm　幅1.05cm　厚さ0.45cm　断面四角形　一端ををやや細く成形する　柾目材
28	12	溝5	部材	長さ9.0cm　幅4.3cm　厚さ0.7cm　板目材　短辺の側面中央に楔(木釘)2本残存　箱状の製品の一部か
28	13	溝5	不明木製品	残存長さ9.3ｃｍ　残存幅4.3cm　厚さ0.7cm　径0.3cmの小孔1箇所貫通
28	14	溝5	草履　芯	長さ23.2cm　残存幅3.1cm　厚さ0.45cm
28	15	溝5	草履　芯	長さ24.0cm　残存幅5.55cm　厚さ0.3cm　植物圧痕残る
28	16	溝5	草履　芯	長さ23.65ｃｍ　残存幅5.7cm　厚さ0.3cm　植物圧痕僅かに残る
28	17	溝5	草履　芯	長さ23.6ｃｍ　残存幅5.6cm　厚さ0.4cm　植物圧痕僅かに残る
28	18	溝5	草履　芯	長さ23.65ｃｍ　残存幅5.2cm　厚さ0.35cm　植物圧痕僅かに残る
28	19	溝5	草履　芯	長さ23.4ｃｍ　残存幅5.15cm　厚さ0.4cm
28	20	溝5	不明木製品	残存長さ17.9ｃｍ　残存幅4.0cm　厚さ0.7cm　柾目材　下膨れの楕円形を成すか
28	21	溝5	骨製品　笄	長さ15.75cm　幅0.9cm　厚さ0.3cm　片面中央に溝状窪みを持ち頂部は直線的に切断、中央にV字の切り込み全体を滑らかに研磨
30	1	深掘り	土師器皿 R種　大型	口径12.5cm　底径6.8cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は橙色で白色針状物質・黒色粒子・土丹粒・砂粒含む
30	2	深掘り	備前　擂鉢	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は茶褐色、胎土は暗赤茶褐色で硬質　口縁部と内側に降灰あり
30	3	深掘り	瓦器　火鉢	口縁部～胴部片　輪積み成形　輪花型　内外面ヘラ磨き　外側に菊花文押印　胎土は淡灰桃色で長石・白色針状物質・雲母含む
30	4	深掘り	常滑　甕	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表・胎土は黄灰茶褐色で長石含む
30	5	深掘り	瓦器　火鉢	底部片　輪積み成形　外面ヘラ磨き　外側に三条の沈線の間に小型菊花文押印と連珠を巡らす　胎土は灰桃色で長石・白色針状物質含む

表8　出土遺物観察表（8）

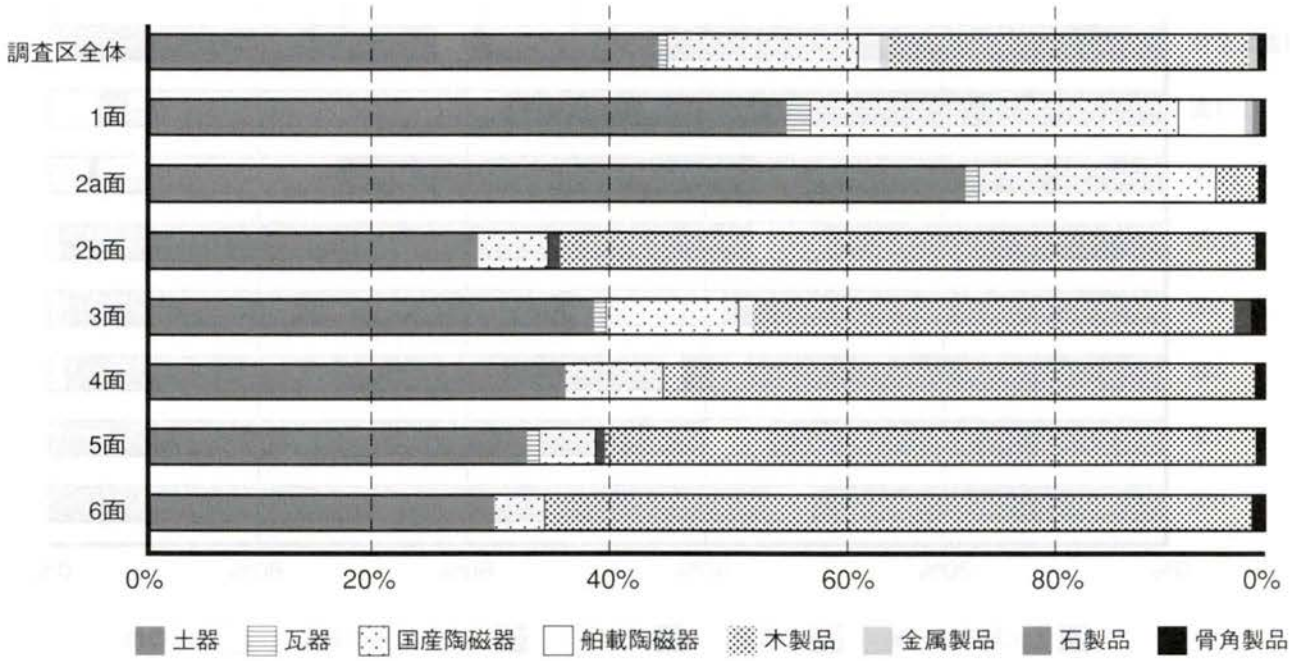
図	No.	遺構名	遺物名	観　察
30	6	深掘り	土師器皿 R種　小型	口径(7.3)cm　底径5.3cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰褐色で白色針状物質・白色粒・雲母・砂粒・礫含む
30	7	深掘り	土師器皿 R種　小型	口径(7.4)cm　底径4.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む　口縁部に油煤付着
30	8	深掘り	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径4.7cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む　内外面とも油煤付着
30	9	深掘り	土師器皿 R種　小型	口径(8.3)cm　底径(5.8)cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰褐色で白色針状物質・雲母・白色粒含む　火を受け黒く変色
30	10	深掘り	土師器皿 R種　中型	口径10.9cm　底径7.2cm　器高3.15cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で白色粒子・雲母・赤色粒子含む
30	11	深掘り	砥石　仕上げ砥	長さ4.1cm　残存幅3.35cm　厚さ1.25cm　淡灰色　鳴滝　砥面は2面　切り出し痕あり　再加工品か
30	12	深掘り	不明木製品	残存長10.2cm　径1.65～1.95cm　一端は斜めに切断され中央に深さ3cmほどの小孔　表面は滑らか　約半分が炭化する
30	13	深掘り	部材	長さ13.5cm　幅1.7cm　厚さ1.5cm　断面四角形の棒状で、二つの角を落とし面取り　一端は1.5cmの深さで段状に切り込み
30	14	深掘り	箸状木製品	長さ18.5cm　幅0.7cm　厚さ0.55cm　両口
30	15	深掘り	箸状木製品	長さ19.05cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　両口
30	16	深掘り	漆器　椀	口径（12.0）cm　底径（6.8）cm　残存器高3.3cm　輪高台　内外面黒漆塗り
30	17	深掘り	漆器　椀	胴部片　内外面黒漆塗りに朱漆で鐶に撫子を配したスタンプ印
30	18	深掘り	漆器　椀	口縁部片　内面朱漆塗り　外面は黒漆塗りに朱漆で亀甲の中に花菱を配する文様を手描き 接合は出来なかったが、図25の4と同一個体と思われる
30	19	深掘り	土師器皿 R種　大型	口径(12.2)cm　底径(7.6)cm　器高3.35cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・白色粒子含む
30	20	深掘り	常滑片口鉢Ⅰ類	底径（11.7）cm　輪積みロクロ成形　外面下部回転ヘラ削り　貼付け高台　内底面使用痕 胎土は淡灰色　降灰あり
30	21	深掘り	瀬戸　おろし皿	底径（6.0）cm　ロクロ成形　底部糸切り　胎土は黄灰色　灰釉ハケ塗り
30	22	採集遺物	土師器皿 R種　小型	口径(7.6)cm　底径(5.4)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒子・砂粒含む
30	23	採集遺物	土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径(4.4)cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は淡橙色で白色針状物質・黒雲母・黒色粒子・土丹粒・砂粒含む
30	24	採集遺物	土師器皿 R種　大型	口径12.8cm　底径6.7cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で白色針状物質・黒雲母・黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・砂粒含む
30	25	採集遺物	土師器皿 R種　大型	口径13.6cm　底径7.5cm　器高4.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒子・土丹粒・砂粒含む
30	26	採集遺物	土師器皿 R種　大型	口径(12.4)cm　底径(7.8)cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は灰橙色で白色針状物質・雲母・赤色粒子・砂粒含む
30	27	採集遺物	土師器皿 R種　極小型	口径(4.0)cm　底径2.8cm　器高1.0cm　底部糸切り　内底部ナデ　耳皿風に側面をつぶす 胎土は淡橙色で白色針状物質・雲母・黒色粒子・砂粒含む
30	28	採集遺物	鍔鍋	口径(18.8)cm　鍔径(22.0)cm　鍔部貼り付け　胴部外側ササラ状工具掻きナデ　胎土は肌色で雲母・長石含む
30	29	採集遺物	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積みロクロ成形　器表は暗紫褐色　胎土は黒灰褐色で長石含む
30	30	採集遺物	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は灰緑色自然釉が厚く掛かる　胎土は淡灰褐色で長石含む
30	31	採集遺物	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表・胎土は暗褐色で長石含む
30	32	採集遺物	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　器表は暗橙色　胎土は灰橙色で長石・黒色粒含む
30	33	採集遺物	瀬戸　折縁鉢	口縁部片　ロクロ成形　釉は灰緑色の灰釉で内面は厚く掛かり、外面はハケ塗り　胎土は灰色
30	34	採集遺物	瀬戸　瓶子	肩部片　輪積みロクロ成形　胎土は灰白色　外側は鉄釉が掛かる　剣頭文・唐草文刻印
30	35	採集遺物	竜泉窯青磁 蓮弁文坏	口縁部～胴部片　ロクロ成形　口縁部を水平に外に折り返し外縁に輪花状に刻みを入れ、折り返し中央に不規則な輪花状削り　内面は幅広の連弁文を配し、外面は縦に沈線が入る　素地は淡灰色で黒色粒子含む　釉薬は灰緑色で透明
30	36	採集遺物	竜泉窯青磁 折腰鉢	底径（4.6）cm　ロクロ成形　素地は灰色、黒色微粒子含む　釉薬は灰青色で不透明　畳付けのみ露胎
30	37	採集遺物	熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
30	38	採集遺物	磨耗陶片	常滑甕胴部片転用　胎土灰褐色　灰緑色の自然釉掛かる　六面が磨耗
30	39	採集遺物	石	長さ18.1cm　幅7.0cm　厚さ6.1cm　4箇所に凹みあり　叩き石か
30	40	採集遺物	円盤型木製品	径10.9cm　厚さ0.8cm　粗い柾目材　柾目材　片面に漆状黒色物質付着
30	41	採集遺物	漆器　椀	底径8.0cm　残存器高4.7cm　輪高台　内外面黒漆塗りに朱漆で鶴と松の小枝を手描き

表9　出土遺物観察表（9）



	1面		2a面		2b面		3面		4面		5面		6面		調査区全体	
土師器皿R種	576	57.14%	329	73.77%	686	30.80%	178	39.82%	92	37.40%	91	35.27%	78	31.84%	2702	45.79%
土師器皿T種	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	2	0.03%
白色系土師器皿	0	0.00%	0	0.00%	3	0.13%	1	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.08%
土器	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
瓦器	23	2.28%	4	0.90%	3	0.13%	3	0.67%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	43	0.73%
南部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
常滑	339	33.63%	93	20.85%	83	3.73%	49	10.96%	8	3.25%	9	3.49%	9	3.67%	808	13.69%
瀬戸	27	2.68%	4	0.90%	3	0.13%	5	1.12%	7	2.85%	5	1.94%	0	0.00%	72	1.22%
亀山	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
備前	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	5	0.08%
瓦	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
土製品	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
青磁竜泉窯	12	1.19%	0	0.00%	1	0.04%	2	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	27	0.46%
青磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
青白磁	5	0.50%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	9	0.15%
白磁	8	0.79%	0	0.00%	1	0.04%	1	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	16	0.27%
褐釉	3	0.30%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.05%
天目釉	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
泉州窯	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
鉄製品	2	0.20%	1	0.22%	12	0.54%	1	0.22%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	17	0.29%
銭	2	0.20%	0	0.00%	2	0.09%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	5	0.08%
漆器	0	0.00%	2	0.45%	17	0.76%	1	0.22%	1	0.41%	3	1.16%	1	0.41%	29	0.49%
漆器以外木製品	0	0.00%	12	2.69%	1409	63.27%	204	45.64%	134	54.47%	148	57.36%	156	63.67%	2123	35.98%
加工木材	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
石製品	7	0.69%	1	0.22%	7	0.31%	2	0.45%	3	1.22%	0	0.00%	0	0.00%	24	0.41%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	1	0.02%
総計	1008	100%	446	100%	2227	100%	447	100%	246	100%	258	100%	245	100%	5901	100%

表10　出土遺物計量表（1）



	1面		2a面		2b面		3面		4面		5面		6面		調査区全体	
土器	576	57.14%	329	73.77%	689	30.94%	179	40.04%	92	37.40%	91	35.27%	78	31.84%	2712	45.96%
瓦器	23	2.28%	4	0.90%	3	0.13%	3	0.67%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	43	0.73%
国産陶磁器	367	36.41%	97	21.75%	86	3.86%	54	12.08%	16	6.50%	14	5.43%	9	3.67%	887	15.03%
瓦	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
土製品	1	0.10%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.02%
舶載陶磁器	29	2.88%	0	0.00%	2	0.09%	3	0.67%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	58	0.98%
金属製品	4	0.40%	1	0.22%	14	0.63%	1	0.22%	0	0.00%	1	0.39%	0	0.00%	22	0.37%
木製品	0	0.00%	14	3.14%	1426	64.03%	205	45.86%	135	54.88%	151	58.53%	157	64.08%	2152	36.47%
石製品	7	0.69%	1	0.22%	7	0.31%	2	0.45%	3	1.22%	0	0.00%	0	0.00%	24	0.41%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	1	0.02%
総計	1008	100%	446	100%	2227	100%	447	100%	246	100%	258	100%	245	100%	5901	100%

表11　出土遺物計量表（2）

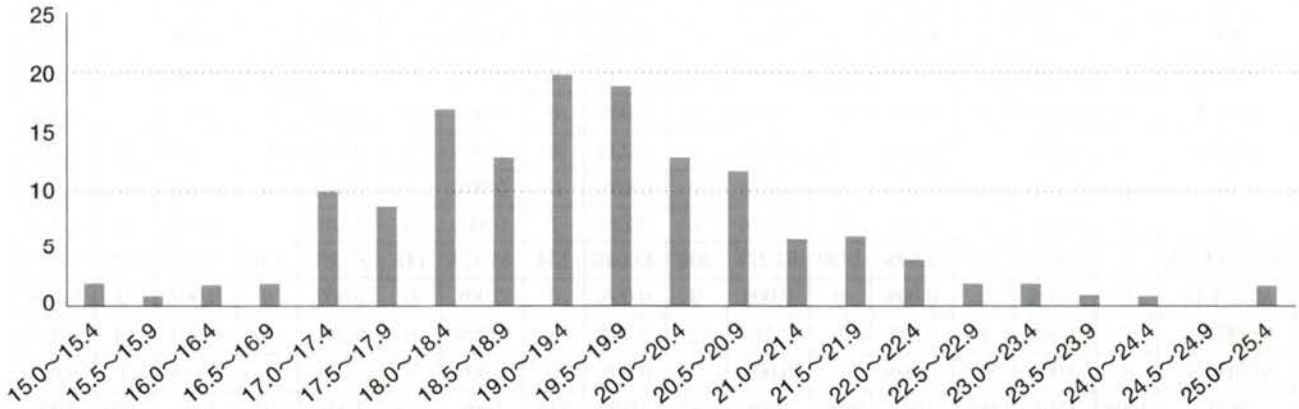


表12　完形箸状木製品寸法分布

第3節　自然遺物

採集された自然遺物は、動物遺存体と貝類、および種子類を中心としたが植物遺存体がある。また、竪穴遺構2の埋土をサンプリングし、それにフィルター透過装置を用い遺物選別を行った。竪穴遺構2以外の自然遺物は調査中に肉眼で確認したもののみ採集である。

1．動物遺存体

出土した動物骨を図31に示した。これらの他にも骨類と見られるものは出土しているが、大部分は細かな破片であり、提示できるものはない。なお可能な限り、部位が判明するものには部位名を、種別が判明したものには種別名を記した。肢骨の場合は前後や左右、胴骨の場合は順序などの同定について、不安が残るものは言及しなかった。種別についても同様である。

1はウマ（*Equus caballus*）の前脚中節骨である。2a・b面上からの出土。2は陸棲哺乳類の大腿骨であ

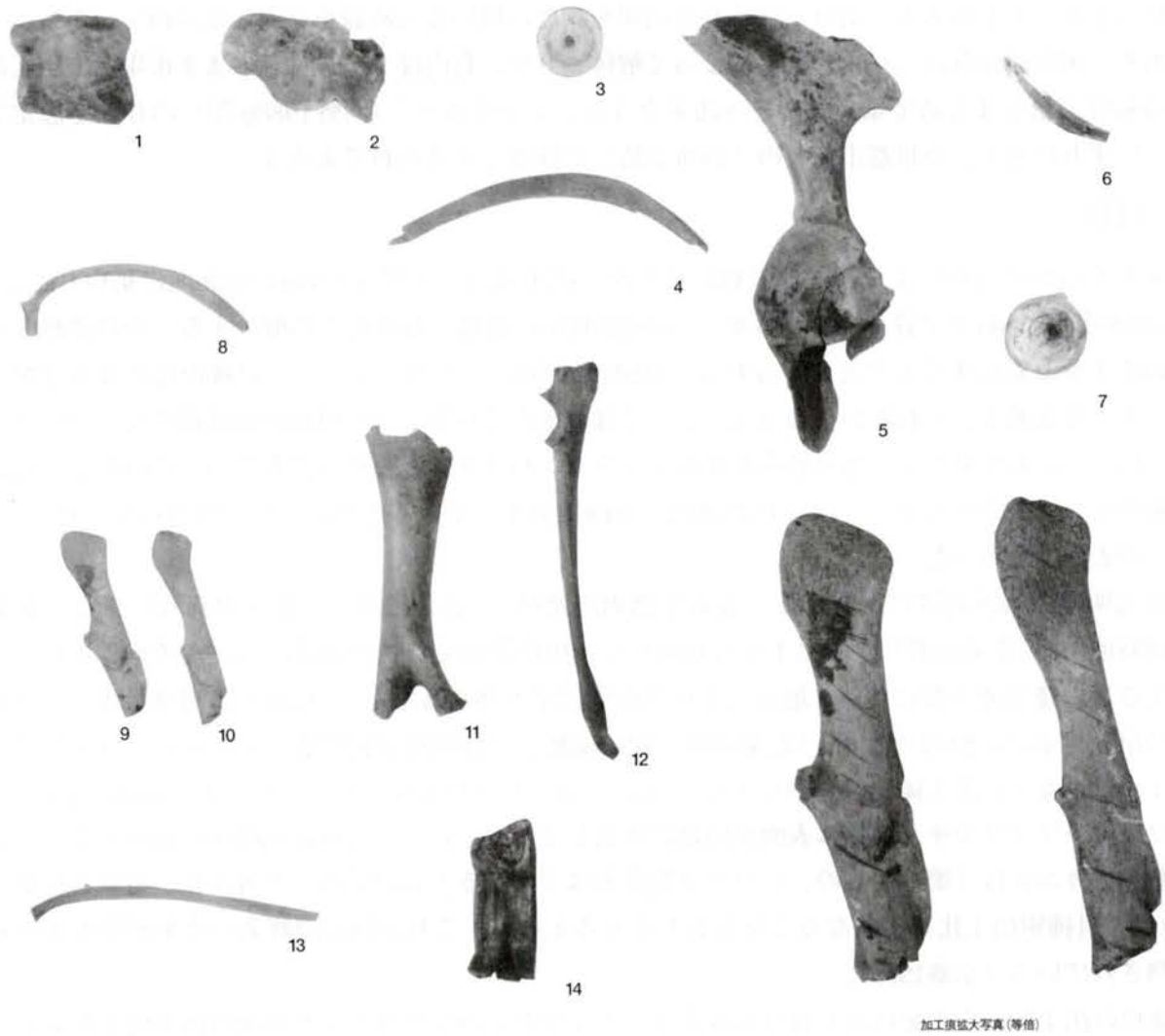


図31　出土動物骨

る。溝2からの出土。3から5は溝3からの出土である。3はメジロサメ（*Family Carcharhiniae*）の椎体である。4は陸棲哺乳類の肋骨。5はウマの寛骨で、坐骨の一部が欠損している。6と7は竪穴遺構1からの出土である。6はイノシシ（*Sus scrofa*）の下顎切歯である。7はメジロザメの椎体である。8は陸棲中小型哺乳類の肋骨である。竪穴遺構2から出土。

9から12は3面構成土中から出土。9と10は陸棲中型哺乳類の胸椎である。ともに同種の解体痕が認められる。おそらくは同一個体であろう。11と12はイヌ（*Canis familiaris*）の骨格と考えられるが同一個体かは不明である。11は左上腕骨、12は左尺骨である。13は中小型哺乳類の肋骨である。6面上から出土。14はウマの上顎臼歯で、歯冠高は48 である。溝5から出土。

中世都市鎌倉における、動物の解体や骨格製品の製作といった職能活動は、おもに由比ガ浜を中心とする海浜地区で行われていたと推測されている（宗臺1994・馬淵1998ほか）。馬淵は、この地区において、禁忌に関わる行為に従事していた階層を統括していたのは、忍性以来の極楽寺であると推測している（馬淵1998ほか）。解体された動物遺体の多くは、食用と骨格製品や皮革製品の作成に用いられたのであろう。それらのほかに、出土する動物遺体には、その後利用されない遺骸、埋葬や遺棄されたものがある。

本地点では埋葬や遺棄と推測できる出土例は見当たらない。大部分は客土中に含まれてもたらされたものであろう。これらの中で、解体痕が残る胸椎の2点が注目される（図31－9・10）。骨格製品作成のための解体痕ではなく、肉を削ぎ落とすための痕跡と観察できる。動物の解体作業が近隣で行われていたというより、むしろ大方に切り分けられた肉塊を調理に用いるため適当な大きさに細分したものと考えられる。河野眞知郎は「…専門業者によって解体されて、食肉部分は骨付きのまま市場へ、加工部分はある程度の量をまとめて細工師などへ渡すような、システム…」（河野1988p.73）の存在を想定している。いずれにせよ、中世都市鎌倉の“台所事情”を推測させる資料であろう。

2. 貝類

出土した貝類の分類および集計は表12に示した。出土量は、大部分が4面から2b面に集中しており、特に3面が多い。第4章で詳しく触れるが、この第3面から遺構と遺物ともに増大する。その遺跡変遷に貝類の出土量も対応するものと考えられる。貝種の内容をグラフ1に示した。貝種の比率は各時期を通して、大きな変動がみられない。よって、ここでは本地点で採集された貝類の種別比率を一つのグラフにまとめた。それを見ると、湾外砂底群集のチョウセンハマグリとキサゴ類が多い。その他では内湾泥底群集のアカニシがやや多い。二枚貝類は同一層内で出土しているものについて貝合わせを行ったが、合致したものは無かった。

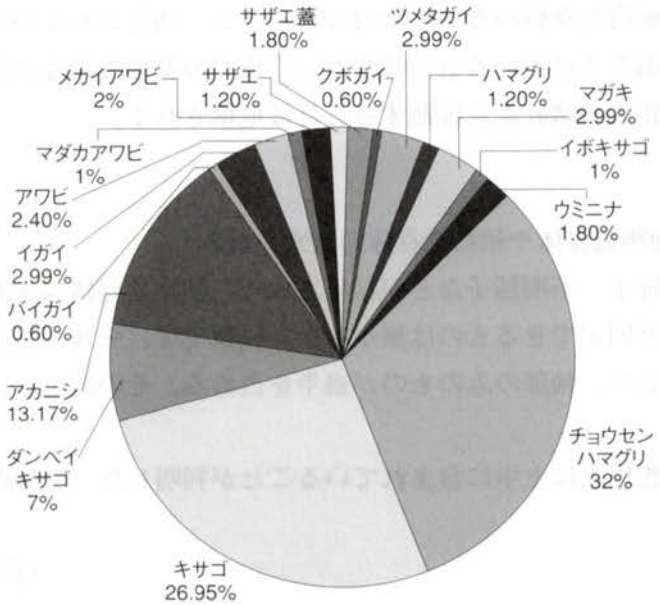
宗臺秀明は、海浜地区に所在する「長谷小路周辺遺跡」（宗臺1994）と都市中枢域にある「北条時房・顕時邸跡」（宗臺1997）から出土した貝類から、中世鎌倉での貝の消費について考察している。それによると、鎌倉遺跡群において地点により貝種別比率が異なるとし、「長谷小路周辺遺跡」ではアカニシの出土比率が圧倒的であり、「北条時房・顕時邸跡」では湾外砂底群集のチョウセンハマグリやダンベイキサゴなどの出土傾向が高いとする。アカニシは外唇と反対側の体層に焼かれた痕跡が確認でき、チョウセンハマグリやキサゴ類は表面が白色に変色しているという。これは調理法に起因するものと考えられ、アカニシは「焼く」もの、ハマグリ類などは「茹でる」ものであった可能性が指摘される。先の2地点で貝種別出土比率が異なることと合わせて考えると、これが貝の消費者の食事形態を示すものと推測されている（宗臺1999）。

本地点の出土傾向を上記に照し合せてみると、チョウセンハマグリやキサゴ類の出土比率があわせて

遺構名	帰属層(面)	内湾砂底群集					湾外砂底群集			内湾泥底群集	
		ツメタガイ	ハマグリ	マガキ	イボキサゴ	ウミニナ	チョウセンハマグリ	キサゴ	ダンベイキサゴ	アカニシ	バイガイ
表採			1								
溝2裏込土	2a面			3							
竪穴建物1	2b面			1			14	3	1	12	
3面下	3面				1		7	12	5	5	
竪穴建物2		1					7	1			
溝4		3					7		1	2	
4面下	4面			1		1	5	20	3		1
5面下	5面	1	1				5	4		2	
6面直上	6面						1	1			
溝5								8			1
6面下						1		2			
7面下	7面					1		2			
合計（種別）		5	2	5	1	3	53	45	11	22	1
		16					109			23	

遺構名	帰属層(面)	岩底群集							合計	
		イガイ	アワビ	マダカアワビ	メカイアワビ	サザエ	サザエ蓋	クボガイ		
表採			1						2	2
溝2裏込土	2a面								3	3
竪穴建物1	2b面	1			3				35	35
3面下	3面				1		34			62
竪穴建物2			1						10	
溝4						2	2	1	18	
4面下	4面	1	1						33	33
5面下	5面								13	13
6面直上	6面		1						3	16
溝5				1					10	
6面下									3	
7面下	7面								3	3
合計（種別）		5	4	1	3	2	3	1	167	
		19								

表13　貝類遺存体分類表



グラフ1　貝類出土比率

66%を占め、「北条時房・顕時邸跡」に類似する様相を見せる。しかし、第4章で述べるが、本地点の遺構・遺物から推測できる当時の状況は、都市中枢域と同種とは考えられず、庶民居住区である、いわゆる「町屋」と考えられる。また別の「長谷小路周辺遺跡」（宗臺2002）でも、海浜地区にもかかわらず、チョウセンハマグリが40%を占めている地点も見られる。ちなみに、この地点の報告書では遺跡地で消費された他に、干し貝に加工して売られていた可能性が指摘されている（p.267・p.278）。

遺構名	帰属層（面）	クルミ科		スベリヒユ科		
		クルミ属オニグルミ	クルミ属ヒメグルミ	サクラ属ウメ	サクラ属モモ	トチ
2a・b面下	2a面		1			
竪穴建物1	2b面	1	1	1	5	
3面直上	3面			1		
溝4	3面	1	1		2	
3面下	3面				2	1
落ち込み2	4面	1				
4面下	4面			6	1	
溝5	6面		1			

表14　植物遺存体分類表

本地点を含め、鎌倉遺跡群出土の貝類を概観すると、出土傾向は遺跡地の様相を単純に反映するものではないと考えられる。とくにハマグリ類のように「茹でる（煮る）」調理法を用いていたと考えられる貝類については、加工場所と商品として移動した後の消費場所が異なることも推測される。さらに、流通以前に「茹でる」などの第一次的加工がされていたならば「殻付き」で商品とされていたのか「剥き身」で流通していたのかなど、問題・疑問は多い。今後は、流通・消費形態と出土状況をあわせ考察していかなければならないだろう。

3．植物遺存体

植物遺存体は、調査中に肉眼で確認されたもののみ採集したため、ここで提示するものは定量的ではないことをあらかじめ断っておく。

植物遺体の集計を表11に示した。採集された植物遺体は多くない。後述するフィルター透過装置を用いて遺物選別を行った竪穴建物2埋土からも植物遺存体の採集は少ないことから、もとよりこの地点において、植物遺存体の遺存状況は良好ではないと推測できる。

確認された植物遺存体は、クルミやモモなどが大多数を占める。「千葉地遺跡」でも同種の出土状況である（手塚1982）。報告書中では「胡桃、桃、栗が多く、当時の嗜好をあらわしているもの…」(p.252) とされているが、実際には遺存しない植物性食料の方が圧倒的であろうし、刊行されている鎌倉遺跡群の発掘調査報告書でも、植物遺存体を取り上げているものは少ない。資料の蓄積も少ない現在では、消費されていたことは予想されるが、中世人の嗜好をも推測することは危惧される。

4．竪穴遺構2出土遺物

竪穴遺構2埋土から、土中に含まれる微細な動物遺存体や植物遺存体の選別を試みた。

その結果、植物遺存体では、モモ種子、ウリ種子、不明種子などが採集された。動物遺存体は大部分が魚類であり鱗と骨格が採集されたが、種別など同定できるものは無かった。貝類では、キサゴ類が多く出土している。そのほとんどが白く変色しており、軸部のみのものが過半を占める。その他では、緑泥片岩片が採集された。

しかし、小型の植物種子や魚骨、鱗などは予想以上に土中に含まれていることが判明した。今後の資料の蓄積が期待される。

（鈴木）

第4章　まとめと考察

第1節　遺跡の変遷と時期区分

本調査地点では7枚の生活面が検出され、おおむね13世紀後葉から14世紀中頃にいたる様相が明らかとなった（図31）。これらは3時期に大別することができる。13世紀後葉を中心とした5面と6面および7面を第Ⅰ期、14世紀前葉と推測できる2a・b面と3面を第Ⅱ期、14世紀中葉を中心とした1面を第Ⅲ期とする。4面については、後述する前Ⅱ期という時期設定をした。

これらは、遺構変遷の画期に対応する。各期について、以下に述べる。

第Ⅰ期―7・6・5面

当期は、試掘坑内で検出された、道路状遺構を中心とした町割りが形成される。この町割りは後の第Ⅱ期まで踏襲される。年代は13世紀後葉と考えられる。

7面は、すでに制限深度に達していたため調査区内での調査は終了しており、試掘坑内のみの遺構検出である。試掘坑内のほぼ全域で道路状遺構が検出された。出土遺物は、調査面積が少ないこともあり、いずれも小片で図示しうるものはない。

6面では、7面から引き続き試掘坑内で道路状遺構が検出され、それと軸を共にする溝が調査区東側で検出された。少なくとも、6面時点でこの道路を軸とした町割りが形成されていたことが窺える。そのほかの遺構は数基の柱穴が検出されたが、建物は調査区外へ延びるものと考えられ、当時の様相は判然としない。出土遺物には、地下水が豊富であったため、多くの木製品がある。それらは箸状木製品やヘラ状木製品、草履芯などの日常品が大部分を占める。

5面では、同じく試掘坑内から道路状遺構が検出された。前代に比べやや縮小された観があるが、道路西側が調査区外に延びるため、道路そのものが西に移動したのかもしれない。いずれにせよ判然としない。出土遺物は、6面に比べると、やや増加する。内容は6面時と同様に、箸状木製品や草履芯、折敷や漆器椀など日常消費物と考えられる木製品が主体である。

第Ⅰ期を概観すると、道路状遺構以外には、顕著に性格を推測しうる遺構は見られない。遺物も次代第Ⅱ期と比べると少量である。木製品に代表される生活用具と考えられる遺物が主体であることから、いわゆる「町屋」と考えるのが妥当であろう。明瞭な版築面の検出されなかったこともその要素の一つといえるかもしれない。本調査で確認した13世紀後葉と推測しうる生活面より、この後も踏襲されることとなる、道路状遺構が確認されたことは注目される。

第Ⅱ期―4面（前Ⅱ期）・3面・2b面・2a面

全体として、14世紀前葉の年代が推測できる。

4面は、前Ⅱ期といえる位置付けが可能である。遺構は、試掘坑内に道路状遺構と調査区東側に溝（落ち込み2）が検出されたが、その他に目立った検出遺構はない。様相は第Ⅰ期と同種といえる。しかしながら落ち込み2から出土した遺物の年代観は、14世紀前葉を推測させるものであり、第Ⅱ期に類似した様相を示す。土層断面図を見るとこの落ち込み2の上層には3面構築層となる泥岩版築層が厚く堆積する（図5土層№37）。つまり、この落ち込み2は3面造成時に埋められたものと理解でき、落ち込み2の出土遺物は4面廃絶時の出土遺物であると共に、3面造成時の年代を推測させるものと推定できる。4面造成時期を明確に推測しえない現状では廃絶時期を根拠に、3面造成に伴うものと理解し、前Ⅱ期を設定した。

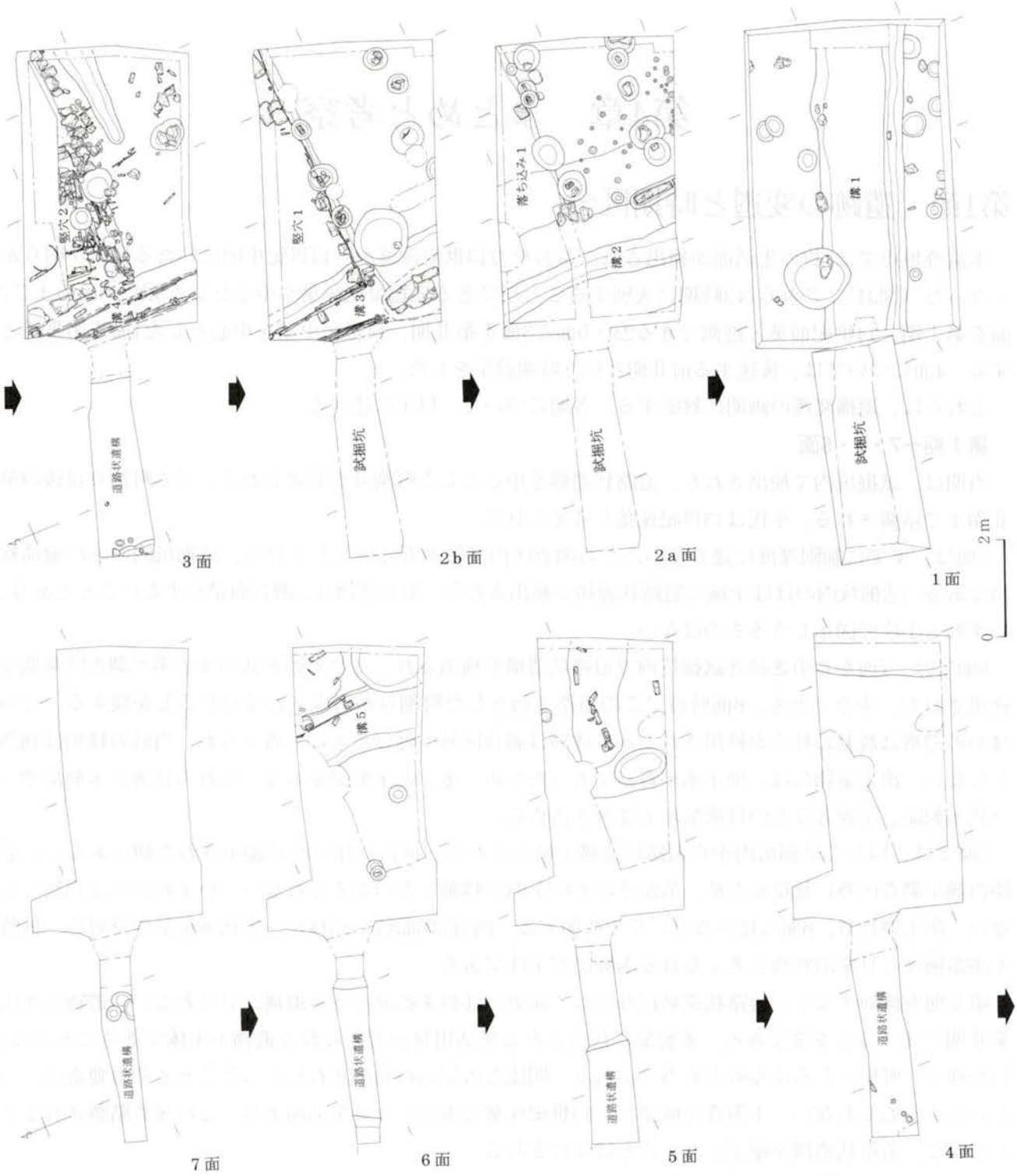


図32　遺構変遷図

3面は、それまでの様相と比べると、格段に活発な人的活動が想定される。これまでと同様に試掘坑内で道路状遺構が検出され、それにともなう東側側溝と考えられる護岸がなされた溝（溝4）も検出された。そして溝4に併設するように、竪穴遺構2が造営される。竪穴遺構2はその検出状況から建物と推測できるが、大部分がより上層から掘り込まれた遺構によって壊されているため、詳細は不明である。ともかく、この構築物の造営とほぼ同時期に道路側溝が設けられ、この頃に区画の再整備が行われていたという推測が可能である。出土遺物は、前代から引き続き日常品と考えられるものが多く出土している。しかし、出土量・種類は増え、特に陶磁器類の出土傾向が高くなる。

2b面は、3面の遺構配置を踏襲しており、顕著な変化は認められない。前期より踏襲されている道路

状遺構も試掘坑内土層観察で確認されている。竪穴遺構1は建物と想定しうる構築物であり、下層の竪穴遺構2が建替えられたものと推測できる。また、その竪穴遺構1のすぐ脇、溝3と接するように据甕が埋設されている。前章では備蓄施設の可能性を指摘したが、この遺構配置で備蓄施設とするにはやや危惧されるところである。根拠は乏しいが、あるいは埋納遺構の可能性も示しておきたい。なお、竪穴遺構2を壊すかたちで掘立柱建物（建物3）が造られているため、2b面は少なくとも二時期を想定する必要がある。

2a面は、前述のとおり、2b面と同一層位で確認されており、遺物からも時期差は認められない。道路状遺構は土層断面で確認され、前代から踏襲された道路側溝もほぼ同位置で検出されている。2b面の建物3の建替えと考えられる建物1と建物2が検出されている。依然として、道路と軸が共通する。出土遺物の特徴としては、2a・b面共通して国産陶磁器の増加が注目される。

第Ⅱ期は、本遺跡地で確認された各層のうち、最盛期にあったことは遺物量の増加と種類の豊富さに象徴される。建物に関しても、頻繁に建替えがおこなわれたことが看取できる。第Ⅰ期と比べるとその内容の差異は顕著に認められ、ここに画期を求めることができる。しかしながら、発展とは別にその性格を見ると前代と同種の「町屋」と考えられる。つまり、第Ⅰ期から第Ⅱ期の変遷は内容こそ豊かになるとはいえ、その本質に変化はみられない。

また、第Ⅱ期をさらに細分すると、少なくとも五時期が推定できる。すなわち、第3面と2a面の二つの竪穴遺構を主体とする二時期と2a・b面で検出された掘立柱建物の三回の建替え、五時期である。第Ⅱ期の年代は14世紀前葉と推測され、三十年程度かあるいはそれよりも短い期間に、これだけ多くの建物変遷が認められる。こういった状況にも中世都市鎌倉の発展と繁栄の一側面が窺われるのではないだろうか。

第Ⅲ期ー1面

第Ⅲ期は、検出された層位では1面のみである。14世紀中葉と考える。

1面は、それまで引き継がれてきた道路状遺構は確認されない。それに代わり、調査区ほぼ中央に東西方向の溝が検出された。前代までとは軸を異にし、この軸が近世あるいは現代まで通ずる可能性があることは前述した通りである。出土遺物は多くが出土しているが、下層から堀上げられたと推測されるものも多く含まれることから、前代に比べると減少傾向にあるといえよう。当該期の遺跡地の様相は不鮮明であるといわざるをえないが、前代からの連続性は認められず、ここに画期を求めることができる。

（鈴木）

第2節 遺構の主軸方位と性格

1．遺構主軸方位

本調査地点の遺構軸線は、記述のとおり、若宮大路の規制を受けていない。このことの意味について図2に示した近辺の事例を参照しながら、若干の考察を加えたい。なお現況の若宮大路の主軸はN－27°－Eである。

事例ー地点5（小町ー丁目198番6）の3面南北溝6は、若宮大路から西方約115mの位置にある。方位はN－31°－Eと若干の差異が認められるが若宮大路とほぼ平行している。溝の規模も大路側溝とほぼ同規格で、土塁を含め防塁的な施設を兼ね備えた、有力な武家屋敷が存在していたものと想像できる。ただし3面以降の1·2面（推定年代14世紀中葉）になると側溝と土塁遺構は姿を消して地割りに大きな変化が現れている。

地点2（雪ノ下一丁目200番3）は窟小路から南方約100mに位置する。溝と道路(路地)が交差する区域で、検出された溝はいずれも窟小路に直交もしくは平行しているといっていい。これらの溝の推定年代は13世紀後半～14世紀前葉となる。いずれも若宮大路の影響はみうけられない。また本地点も同じく窟小路に直交した溝（道路側溝）をもち、推定年代も符合する。

地点3（雪ノ下一丁目210番ほか）でも多数検出した遺構の中に、南北溝11（N－1.5°－E）などが窟堂に直交する。ただ窟小路は窟堂近辺から寿福寺にかけ26°ほど西南西方向に屈折しはじめる。主要建物の軸方位がN－4～9°－Wと若干西に傾いているのは、窟小路の軸線の変化に少なからず影響をうけている可能性がある。また旧扇ヶ谷川と想定できる護岸跡のある蛇行した溝1を検出したが、流路は現河川から大きく逸れている。

地点6（小町二丁目36番6）は現在の地割りと同じく面前の東西道にほぼ沿って遺構が検出されている。

（鍛治屋）

遺構主軸方位の意味

本地点や地点2・3の遺構主軸が示すのは、窟小路の方位規制であろう。この小路は第一章で述べたとおり、源頼朝入部以前から存在していたと考えられる。さらにいえば、12世紀第3四半期から中葉の頃なら、現寿福寺の場所にあった義朝の「鎌倉の楯」に真直ぐに向かう道でもあった。本地点の主軸は、その当時からの窟小路の方位規制が鎌倉時代になってもなお消えることがなかったことを示している。頼朝による道路直線化、あるいは三代執権北条泰時による街並改変事業が「鎌倉中」に貫徹しなかったのかもしれない。

現在、この一帯の主軸方位は若宮大路にほぼ平行している。とすれば、少なくとも14世紀中葉頃までは窟小路に直交・平行していたものが、いつしか変化していたことになる。それがいつのことか、調査のかぎりではうかがえなかった。しかし、江戸時代末期の『鶴岡八幡宮領并往還谷々小道分間図』や明治15年の『迅速測図』にはこの一帯の小道はほとんど描かれていないので、おそらくそれ以降の街並整備であらたに区画が設けられる際、若宮大路軸線に倣ったと考える。この一帯の街割りはいま、窟小路に近いところでは小路に直交し、少し離れると若宮大路に平行するようになっている。それはおそらく、明治以降の街路再整備の際、若宮大路に平行させたあらたな小路を、従来の小路に接続した結果である。

（この項馬淵）

2．本地点遺構の性格について

本地点の主要遺構は道路状遺構とその側溝とされる溝2～4、側溝に隣接する竪穴遺構1·2（落ち込み1も同じ）、掘立て柱建物1～3となる。鎌倉市内遺跡の調査例から同様の遺構を抽出し、本地点の遺構の性格と遺跡全体の環境を探っていきたい。

道路状遺構と側溝

事例1：千葉地遺跡(御成町15-5番・図1－90地点)の3～5面の東西道路と側溝が、調査地点のそれによく似ている。道路は貝混じりの破砕泥岩地行で、幅約4.5～5m、方位N－84～88°－E。杭柱と側板で組まれた溝は幅60～80cm（木枠間）、深さ50～80cmほどでほぼ本地点の2～3面（推定年代14世紀前葉）の溝3·4と同規模である。特に5面の溝では側板留めとして凝灰質砂岩の切石列が裏込め内に埋設されており、本地点溝4と同工法であることに疑いはない。また千葉地遺跡では1号「方形竪穴建築址」（竪穴建物）・板敷遺構1なども見つかっている。これらは木組みの溝（「南北溝Ⅰ－a」）に隣接しているが、本地点の遺構配置と共通している。3～5面の年代は13世紀中ほど～14世紀の前半と考えられている。武家屋敷というよりも、基壇状遺構の検出や多量の仏華瓶、硯等の出土からみて、寺院関連址の可能性も

ある。報告者は中心施設よりはずれた一般的な生活区域ではないかと推測している(手塚ほか1982)。

事例2：諏訪東遺跡（御成町806番5ほか・図1－92地点）第2期の溝4・5なども道路側溝でないが、構造的に同類といえる。溝4は4期に分かれ裏込めは石垣状に組まれている。

事例3：千葉地東遺跡（御成町12－18・図1－44地点）では旧河川跡（護岸遺構を含む）とそれにつながる溝が多くみつかっている。とくに3面の16号溝は木枠の残存状況が本地点溝3・4と非常によく似ている。しかし道路側溝ではなく、掘立柱建物に付随する排水溝のようでもある。近くには木組みを含んだ竪穴遺構などもみつかっている。これらが検出された3～6面の推定年代は13世紀第2四半期～14世紀第3四半期とされる。また本遺跡の17地点（小町二丁目12番15）の第2面の木組み溝は幅23cm、深さ25cmと小さいが、構造的には同類であり、先の3地点（雪ノ下一丁目210番ほか）の上層面（推定年代14世紀中葉）溝3も道路側溝ではないが屋地内に設けられた排水施設と考えてよいのではないか。ほかに北条時房時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目273番ロ・図1－58地点）・本遺跡（小町一丁目325番イ外）・蔵屋敷東遺跡（御成町822番2）などで検出された木組みの小溝などもこれに該当するものといえる。

事例4：先の2地点 (雪ノ下一丁目200番3)の道路を伴った第3B面溝4a・第3A面溝7bなどは当地点溝3·4と同類と判断できる。3面の推定年代は13世紀後半～14世紀前葉。

事例5：当遺跡（小町二丁目5番8・図1－16地点）の3面では若宮大路とほぼ並行する南北道路状遺構とT字に交差する東西道路状遺構と側溝（溝1・南北道路東縁）が見つかっている。南北道路は東西約2.5m、溝1は幅約40cm、深さ約14cmで杭と横板が残存し、13世紀後葉に廃絶したと推測できる。

事例6：当遺跡（御成町868番地点）のⅢ期（推定年代13世紀中頃～後半）でも、南北道路と側溝(溝5)、直交する溝7が同規模の木組み溝としてより良好な残存状況で検出されている。Ⅱ期（推定年代14世前半～中頃）には掘立柱建物の付帯施設らしき溝1・11も検出している。

事例7：当遺跡 (小町一丁目116番4－第2次－・図1－34地点)では最大幅6mの南北道路がⅡ期にかけ検出されており、道路には木組み側溝（溝4～7）が付随する。木枠幅は50cm前後、深さは70cm程度である。道路の方位はN－37°－Eで、若宮大路よりやや東に傾いている。その北の延長上にある33地点(小町一丁目116番）では同じ道路らしき版築面と溝がかかっているが、さらにその北28地点（小町二丁目63番3）では道路らしき遺構はみつかっていない。報告者は南北道路を境として東は武家屋敷、西側は武家・商人などの混在地と推定している（手塚1999)。この南北道は若宮大路から150mほど西方にある。

事例8：国道134号線（長谷小路）北沿いにある。当遺跡（由比ヶ浜一丁目128番7）の中層（推定年代13世紀後半～14世紀初頭）から側溝（木組みは残存せず）をともなった道路状遺構が検出されている。泥岩塊を幅5m30cmに敷き詰めて構築されている。

事例9：当遺跡（御成町788番3・図1－91点）の2·3面（推定年代13世紀後葉～14世紀初頭）では道路遺構と側溝、それらと十字形に断交する木組み溝が検出された。

事例10：今小路西遺跡第5次調査（御成小学校内）では南街区とよばれる商人・職人の居住地域を囲むように道路が張り巡らされていて、報告者は鎌倉後期～南北朝にかけて存在したものと推測している(鎌倉中期～後期の可能性もある)。本地点の道路と同じく何度も貼り増しされている。4～5.5mの道路幅をもつ。

事例11：今小路西遺跡（扇ヶ谷一丁目131番1・図1－52地点）は上下層で今大路の側溝（2・3）が確認されている。木枠が残る側溝3（推定年代13世紀後半～14世紀）は幅・深さともに60cm前後の箱型で、束柱と側板を組み合わせている。溝上部に梁の横木が残存している。中世の今大路の道幅は特定できていないが、側溝3の規模から推察すれば5～10m弱と、現在とさほど変化がないのかもしれない。

事例12：市街中心部より東方に位置する、妙法寺近くの名越ヶ谷遺跡（大町四丁目1901番他16）か

ら検出された2面遺構（推定年代13世紀後半～14世紀中頃）では、先の地点91と同じく道路遺構を横断する木組みの溝1がみつかっている。道路は玉砂利で固められ、3m弱の幅で側溝と柵列をともなっている。溝1は木組み幅が約20cm、深さ70cmで両端が泥岩塊で埋められていた。全長9.6mでそれ以上延長されていた痕跡はない。このような途絶した溝は地点90千葉地遺跡の2面（推定年代14世紀中ほど）の南北溝Ⅰ-a、本遺跡35地点（小町一丁目106番1他－第1次－）・1面（推定年代14世紀第1四半期～第2四半期）の溝9などでもみつかっている。また溝9では網代塀の基部が並行して検出されており、建物の付帯施設と認識できる。また本地点の2b面（推定年代14世紀前葉）溝3も凝灰質砂岩塊により流路が遮断されているが、これらと同類の施設かどうか検討が必要である。

竪穴遺構・建物

竪穴建物に関しては鎌倉市内各遺跡で数多くの事例報告がなされており、諸氏の論考がある。ここでは本地点の竪穴遺構1・2の構造的特徴をあげ、同種遺構の代表例と比較してみる。

まず竪穴遺構1·2の特徴を項目化すると、

1. 長さ4.7m以上（竪穴1）・3.1m以上（竪穴2）、深さ6、70cm程度（竪穴1·2とも）の規模を有する。
2. ほぼ垂直に掘り込まれ、壁の内側に板（側板・羽目板）が残存する（竪穴1）。
3. 壁板の内側に沿って多数の礎石（土台石）が置かれ柱穴もある（竪穴1·2）。
4. 壁板の内と外から板留めの杭が打ち込まれている（竪穴1）。
5. 充填土は脆弱で堅牢な床面が確認できず、多数の木製品などを含む（竪穴1·2）。
6. 内部に底のない曲物（竪穴1·2いずれのものか不明）、傍に据甕（竪穴1と同時期）がある。底面近くでは網代が残る（竪穴2）。
7. 道路状遺構とその側溝に隣設され、軸も倣う（竪穴1·2：N－87～89.5°－E）。
8. 推定年代：14世紀前葉（前節参照）。

となる。そこで各項目について検証してみると、まず1はいわゆる竪穴建物に一般的な規模といえる。2～4の基礎工法については様々な類型があるが、土台角材や凝灰岩切石列を底面に配した形態とは異なったものである。また遺構内には柱穴や礎板・礎石などがあり、杭柱はあくまでも壁板を固定するためで、側溝の木組み工法をそのまま転用したものといえよう。

事例13：諏訪東遺跡（御成町806番5ほか・図1－92地点）では、第1期（推定年代14世紀後半～15世紀前半）「第1号方形竪穴建築址」（竪穴建物）・第3期（推定年代13世紀後葉～14世紀前半）「第3号方形竪穴建築址」が似ている。1号は曲物が二つ埋設されておりその一つは底板がなく、本竪穴遺構と同じである。これを宗臺秀明は貯蔵庫ではなく沈殿坑と考えている（宗臺1994）。1号の東側からは柄杓付曲物が出土している。3号は規模的に小さいが、土台石の散乱状況が似ている。また「わら」や「細割り板」が床上に敷かれていた点にも留意する必要がある。

事例14：千葉地東遺跡（御成町12－18・図1－44地点）の第2面（推定年代14世紀第4四半期～15世紀第2四半期）内2号方形竪穴状遺構については時期差があるものの、注目すべきは突っ張り材のようなものが方形枠外にのびており、隣接する河川護岸裏込めと共有しているのではないかと推測できる。この点について報告書は詳述していないが、本竪穴と側溝との関係に類似するのではないか。ほかに5面（推定年代13世紀第4四半期）の7号方形竪穴状遺構も同様であると推測する。

事例15：先の5地点（小町一丁目198番6）の第4面（報告書による推定年代13世紀後半）の建物6は、土台角材を持たず横板を杭で留めている。傍の木組み遺構は調査区際での検出のため全貌は不明だが、木組みの溝とすれば本地点の遺構配置と非常に近い。

事例16：道路と側溝の事例にあげた千葉地遺跡（御成町15-5番・図1－90地点）2面の「1号方形竪穴

建築址」はホゾ穴のあいた土台木があるため構造的には異なる。5面（報告者の推定年代は13世紀中ほど）の2号は同類と判断する。また蔵屋敷東遺跡（御成町822番2）第1面の「方形竪穴建築址」も詳細は不明だが、図面上ではよく似ている。

また本地点の掘立柱建物は、鎌倉市内遺跡のほぼ全域で検出される主要遺構であり事例は非常に多い。留意しなければならないのは、竪穴遺構と部分的に同じ構造をもちあわせたものであり、馬淵和雄はこれを「板囲い建物」、斎木秀雄は「板壁掘立柱建物」と称している。この遺構の共通した構造を要約すると、

1. 掘立ての柱穴の建物枠と地中から立ち上がった板壁が組み合わさって検出される
2. 囲炉裏や土間状遺構をもつ
3. 板囲い施設の連接性がみられる

などとなる。

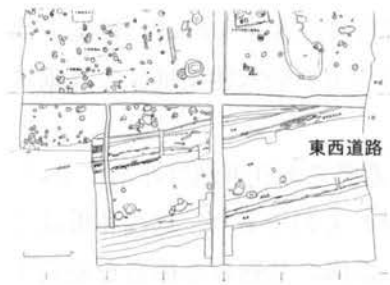
これらを含め、多様な竪穴遺構と溝と道路（路地を含め幅5m前後内）は、事例からみてもわかるように同じ地点内に共存していることが多い。町屋の形成は竪穴遺構を主体として考慮しなければならない。はやくに建保三年（1215）7月15日、鎌倉幕府は商人の数を規制する法令を出した。したがってこの頃にはもう「鎌倉中」に町びとの住宅は多かったとみたい。そして、鎌倉が都市として機能しなくなる15世紀前半頃まで続いたのではないか。

3．まとめ

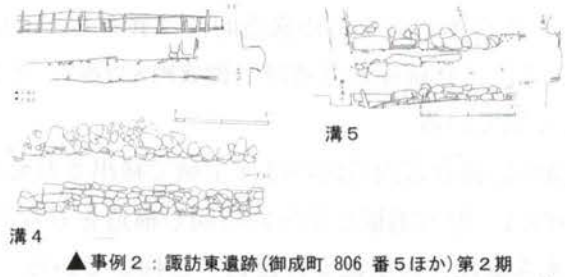
寿福寺の地はかつて源義朝の「鎌倉之楯」であり、眼前にのびる窟小路は六浦道へと続く主要幹線道であったとされる（馬淵1994）。義朝のいたのは天養（12世紀中葉)のころであり、その頃の窟小路周辺には義朝の郎従などが居を構えていた可能性が高い。窟堂も平安期には建っていたとされる。義朝の死後、一旦は廃れた可能性があるが、頼朝入府(1180)後の窟小路や六浦道沿いには多くの御家人の屋敷が建ち並んだ。文治三年(1187)、頼朝は梶原景時に課して鎌倉中の道路を作らせたとある。その翌年、『吾妻鏡』によると窟堂下が罹災した時、御家人や民屋が多数焼亡した。また承久二年(1220)、正嘉二年(1258)にも同様の記事がある。12世紀末～13世紀中頃(鎌倉前・中期)までの窟堂近辺は武家屋敷と民屋が混在していたのであろう。

嘉禄元年(1225)宇津宮辻子御所の移転に伴い、丈尺制が用いられた。これは京都・奈良の家地の制にならったもので、これにより屋敷の単位が戸主でよばれ、若宮大路を中心とした都市整備に拍車がかかった。

仁治元年(1240)に幕府は鎌倉中を保々に分け、奉行人をつけて取り締まっている。その内容の中みは、町々辻々での売買、小路を狭くすることが含まれている。また寛元三年(1245)幕府は保々の奉行人に命じて、道を作ること、 小屋を路に出すこと、町屋を作ってだんだん路を狭くすること、小屋を溝の上に造りかけること、夜歩きをすることなどについて五箇条の禁制を出した。幕府による丈尺制での都市化が進む一方、禁制が出るほど勝手に道を造り変え、小屋を建てていたのである。小町一丁目309番5地点遺跡(図1－50)では、道路が時期によって移動し、その道路上に井戸や竪穴などが掘り込まれており、禁制の内実を窺わせている。宝治二年(1248)幕府は評定衆町野倫長を奉行として鎌倉中の商人の数を定める。建長三年(1251)には特殊な商業地域を特定した。またこのとき牛を小路につなぐことを禁じ、小路を掃除すべきことを定めている。小路周辺は何度も禁制が出ていながらかなり無法地帯となっていたらしい。元来鎌倉の地は幕府の直轄領のほかは社寺や御家人の領地だったはずである。このような“小路”がどこを示すのか明確ではないが、事例で挙げたような町屋でみつかる道路遺構が“小路”といえ



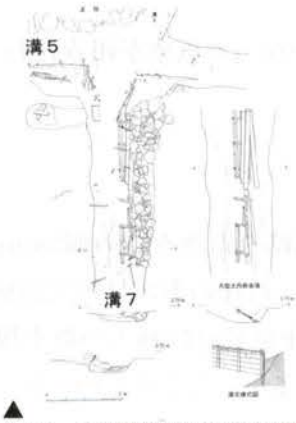
▲事例１：千葉地遺跡（御成町 15−5）第５面



▲事例２：諏訪東遺跡（御成町 806 番５ほか）第２期

▲事例３：千葉地東遺跡（御成町 12−18）３面

▲事例５：本遺跡（小町二丁目５番８）３面



▲事例６：本遺跡（御成町 868 番）Ⅲ期

▲事例７：本遺跡（小町一丁目 116 番４）南北道路と側溝

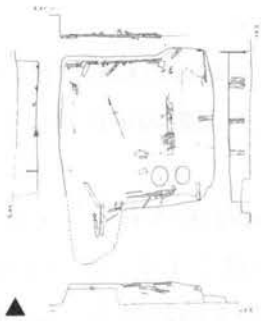
▼事例８：本遺跡（由比ヶ浜一丁目 128 番７）

▲事例９：本遺跡（御成町 788 番３）３面

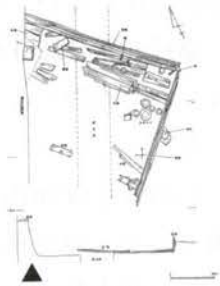
▲事例 10：今小路西遺跡第５次調査（御成小学校内）

▲事例 11：今小路西遺跡（扇ヶ谷一丁目 131 番１）

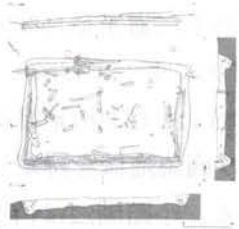
▲事例 12：名越ヶ谷遺跡（大町四丁目 1901 番他 16）２面



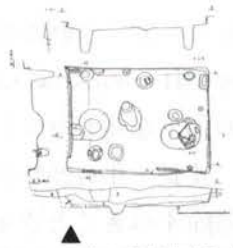
▲事例 13：諏訪東遺跡（御成町 806 番５ほか）第１期第１号方形竪穴建築址



▲事例 15：本遺跡（小町一丁目 198 番６）第４面建物６



▲事例 14：千葉地東遺跡（御成町 12−18）第２面第２号方形竪穴状遺構



▲事例 16：千葉地遺跡（御成町 15−5）５面２号方形竪穴建築址

図33　類似遺構事例

る可能性もあろう。

文永元年(1264)のころから鎌倉には地奉行というものがあった。これまでの保の奉行と違い北条氏得宗の被官が直々に鎌倉中の物価や小町屋の統制などを行っている。これは御家人や社寺の領地および従属者には関さず、いわば地下人や雑人のみを支配するということになる。また弘長元年(1261)の「新御式目」の中には鎌倉中の橋の修理を行い、在家の前を掃除させるなどあり、地奉行(評定衆後藤元政・得宗被官小野沢光漣)がこれにあたっている。執権泰時は仁治元年(1240)に巨福呂坂を切り開き、翌年には朝比奈の切通しを開通させたとされる。忍性が開いたとされる極楽寺の切通しは、建長四年(1252)～永仁六年(1298)の間に開通したらしい。

馬淵も指摘しているとおり、市内の発掘調査で本格的な整地地行面があらわれはじめるのは鎌倉中期以降となり、「溝による地割りの改変など権力による街並みの統御」(馬淵1994)がおこなわれたものと想定できる。

本地点の道路状遺構と側溝、その事例が検出された推定年代は13世紀中・後期～14世紀前期が多く、その構造も統一されている。つまり鎌倉中期から後期にかけ、切通しや橋を含めた大規模な公共整備事業がおこなわれた、その一環として、本地点や事例の道路と側溝なども整備されていったとみたい。今後はその技術系譜をどこに求めるかが大きな課題となろう。

(鍛治屋)

引用・参考文献（本報全体に共通）　※（）内地点番号はすべて図1内の調査地点を示す

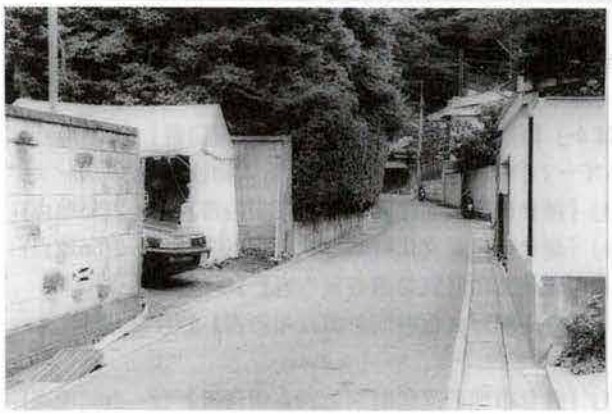
秋山哲雄1999　「鎌倉中心部の形成とその構造」『中世都市研究6　都市研究の方法』新人物往来社
石井進　『鎌倉武士の実像』
石井進1989　「都市としての鎌倉」「鎌倉武士たちの屋敷」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
宇田川政宏1980　「鶴岡八幡宮旧境内遺跡」『鎌倉考古1』(82地点)
小川裕久ほか1984『蔵屋敷遺跡』(42地点)
奥富敬之1999　『鎌倉史跡事典』新人物往来社
鎌倉市史編纂委員会1959　『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
小野正敏編2001　『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
金子浩昌1994　「鎌倉市永福寺跡（二階堂地区）出土の動物遺存体―井戸址出土の動物遺体について―」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10―1
河野眞知郎1982　「小町一丁目75番1号地点」『鎌倉考古学研究所研究報告第1集』(41地点)
河野眞知郎1983　「中世鎌倉遺跡に見られる貝について」『鎌倉考古』』17
河野眞知郎1988　「中世鎌倉動物誌―都市遺跡出土の動物遺体と関連遺物からの予報―」『歴史と民俗』』3
河野眞知郎1989　「武家屋敷の構造」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
菊川英政1989　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目395番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5(71地点)
菊川英政1989　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目432番2」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5(74地点)
菊川英政1990　「若宮大路周辺遺跡群　扇ヶ谷一丁目74番8外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6(31地点)
菊川英政1994　「若宮大路周辺遺跡群　扇ヶ谷一丁目74番9ほか」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』10―2(30地点)
菊川英政1996　「鶴岡八幡宮旧境内遺跡　雪ノ下二丁目75番16」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12―2(86地点)
菊川英政 1997　「若宮大路周辺遺跡群　御成町788番3外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13―1(91地点)
菊川英政ほか1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　扇ヶ谷一丁目74番8・10地点』(31地点)
熊谷洋一ほか1993「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目354番12」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9―3(79地点)
小林重子ほか1997「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目361番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13―2(77地点)
小林重子ほか2000「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目198番6」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16―1(5地点)
斎木秀雄1982　「小町二丁目65番21号地点」『鎌倉考古学研究所研究報告第1集』(40地点)
斎木秀雄1983　『小町一丁目309番5地点発掘調査報告書』(50地点)
斎木秀雄1983　『鶴岡八幡宮旧境内発掘調査報告書　研修道場用地発掘調査報告書』(85地点)

斎木秀雄1985　『諏訪東遺跡』諏訪東遺跡調査会(92地点)
斎木秀雄1987　『御成町228－2他地点遺跡』(45地点)
斎木秀雄1987　『鶴岡八幡宮旧境内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(88・89地点)
斎木秀雄1991　『「板壁掘立柱建物」の提唱』『中世都市研究』第1号　中世都市研究会
斎木秀雄1993　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目63番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』9―3(28地点)
斎木秀雄1994　「方形竪穴建築址の編年試案」『由比ヶ浜4－6－9地点発掘調査報告書』
由比ヶ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団
斎木秀雄ほか1999『鎌倉遺跡調査会調査報告第12集　北条時房・顕時邸跡7』(60地点)
佐藤仁彦ほか1996「宇津宮辻子幕府跡　小町二丁目389番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12―1(81地点)
汐見一夫ほか1999「若宮大路周辺遺跡群　御成町123番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15―1(43地点)
汐見一夫ほか2003「華光院跡やぐら群　扇ヶ谷二丁目191番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19(51地点)
下中邦彦編1984　『日本歴史地名大系14神奈川県の地名　鎌倉市』平凡社
宗臺秀明1991　「方形竪穴建築址の理解にむけて－中世の大壁造建物について－」
『中世都市研究』第1号　中世都市研究会
宗臺秀明ほか1994『長谷小路周辺遺跡　由比ガ浜三丁目228・229番外（』226）
―中世前期の地割を伴う工芸職人居住地の調査―』長谷小路周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明ほか1997『北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番地点』(57地点)
宗臺秀明ほか1998「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目272番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14―1(57地点)
宗臺秀明ほか1999「雪ノ下一丁目265番3地点」『東国考古学研究所調査研究報告第24集　北条時房・顕時邸跡』(53地点)
宗臺秀明1999　「中世鎌倉の貝類採取と消費」『東国歴史考古学研究所紀要』第1集
宗臺秀明ほか2002『長谷小路周辺遺跡（』236）由比ガ浜三丁目1262番2、1251番1・2地点
―弥生中期～平安時代葬送地から中世方形竪穴建物群地域へ―』東国歴史考古学研究所
宗臺秀明ほか2003「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目200番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19(2地点)
高柳光寿1959　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館
滝澤晶子2003　『名越ヶ谷遺跡発掘調査報告書（医療法人財団額田記念会老健ぬかだ建設に伴う発掘調査）
有限会社博通
瀬田哲夫1991　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目369番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7(67地点)
瀬田哲夫1993　「中世都市鎌倉における建物遺構に関する一考察」
『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書―第2分冊―』佐助ヶ谷追跡発掘調査団
瀬田哲夫ほか1999「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番イ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15―1(60地点)
田代郁夫ほか1989「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目39番6ほか」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5(6地点)
田代郁夫1990　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目280番2」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6(11地点)
田代郁夫ほか1991「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目269番6ほか」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』7(12地点)
田畑佐和子1991　「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第1回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』(76地点)
玉林美男1986　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目374番4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2(63地点)
玉林美男1987　「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)　雪ノ下一丁目419番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3(69地点)
継実1993　「宇津宮辻子幕府跡の調査」『第3回鎌倉市遺跡調査・研究発表会』(80地点)
土屋浩美ほか1998「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)　雪ノ下一丁目370番1」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14―1(66地点)
手塚直樹ほか1982『千葉地遺跡　鎌倉市御成町15－5番地所在』(90地点)
手塚直樹ほか1989『小町一丁目120番－1地点遺跡』(32地点)
手塚直樹ほか1999『若宮大路周辺遺跡群　小町一丁目106番1ほか地点－第1次　小町一丁目116番4他地点
－第2次』(34・35地点)
波部忠重・小菅貞男 1967
「貝」『標準原色図1鑑全集』第3巻　保育社
中田英ほか1986　「千葉地東遺跡」『神奈川県埋蔵文化財センター調査報告10』(44地点)
日本福祉大学知多半島総合研究所1994
『シンポジウム「中世常滑焼をおって」大会資料集』
野本賢二2000　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目402番5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』17―1(10地点)
貫達人・川副武胤1980

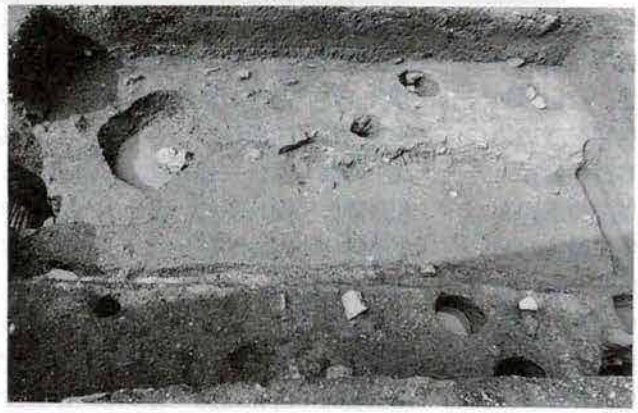
『鎌倉市廃寺事典』有燐堂
服部実喜1983　『裏八幡西谷遺跡』(87地点)
原廣志1988　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目273番ロ」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』4(58地点)
原廣志1988　『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目274番2地点発掘調査報告書』(61地点)
原廣志ほか1989　『北条時房・顕時邸跡　鎌倉市雪ノ下一丁目271番－1地点発掘調査報告書』(54地点)
原廣志ほか1990　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目265番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6(53地点)
原廣志ほか1996　『宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書　小町二丁目361番1』(77地点)
原廣志1998　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目28番3・5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14—2(14地点)
原廣志ほか1998　「北条小町邸跡(泰時・時頼邸)　雪ノ下一丁目369番1」
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14—2(68地点)
福田誠1994　『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町一丁目67番2地点』(39地点)
福田誠ほか1998　『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町2丁目5番8地点』(16地点)
福田誠ほか1999　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目5番8」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15—1(16地点)
松尾宣方1983　「小町二丁目281番所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報Ⅰ』(13地点)
松尾宣方1983　「二の鳥居西遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』(36地点)
松尾宣方1983　「小町一丁目65番10～12所在遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』(37地点)
松尾宣方1983　「藤内定員邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報』(49地点)
松尾宣方1985　『鶴岡八幡宮旧境内発掘調査報告書　鎌倉国宝館収蔵庫建設に伴う緊急調査』(84地点)
松島義章1989　「貝からみた古環境の変遷—特に縄文時代を中心として—」
『新しい研究法は考古学に何をもたらしたか』
馬淵和雄1985　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目372番7」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』1(64地点)
馬淵和雄1985　『北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目371番－1地点発掘調査報告書』(65地点)
馬淵和雄1986　「若宮大路周辺遺跡群　小町一丁目116番」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』2(33地点)
馬淵和雄1987　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目233番9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3(59地点)
馬淵和雄1989　「若宮大路周辺遺跡群　小町二丁目12番18」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5(19地点)
馬淵和雄1989　「今小路西遺跡　扇ヶ谷一丁目131番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』5(52地点)
馬淵和雄1989　「若宮大路—都市の基軸を掘るー」『よみがえる中世3　武士の都鎌倉』平凡社
馬淵和雄1990　「若宮大路周辺遺跡群　雪ノ下一丁目210番ほか」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』6(3地点)
馬淵和雄1994　「武士の都　鎌倉—その成立と構想をめぐってー」『中世の風景を読む2』新人物往来社
馬淵和雄2000　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16—2(55地点)
馬淵和雄2000　「北条時房・顕時邸跡　雪ノ下一丁目271番4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』16—2(56地点)
馬淵和雄2002　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目400番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18—2(73地点)
馬淵和雄2003　「北条小町邸跡　雪ノ下一丁目401番5ほか」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』19(72地点)
馬淵和雄ほか1985　『小町二丁目345番－2地点遺跡』(46地点)
馬淵和雄ほか1996　「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目377番7」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12—2(62地点)
宮田眞ほか1983　『鶴岡八幡宮旧境内発掘調査報告書　直会殿用地発掘調査報告書』(83地点)
宮田眞1996　『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　小町一丁目321番1』(47地点)
宮田眞1998　『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書　鎌倉市小町2丁目283番6他2筆』(23地点)
諸星真澄ほか2000　『北条小町邸跡(泰時・時頼邸)　雪ノ下一丁目367番1、368番1』(70地点)
安田元久編1990　『鎌倉・室町人名辞典』新人物往来社
山本信夫2000　「大宰府条坊跡ⅰ—陶磁器分類編—」『太宰府市の文化財第49集』太宰府市教育委員会

図版 1

1. 調査地点鳥瞰（上が北）



2　調査地点近景（南から）調査地区は左奥



3　1面　全景（南から）

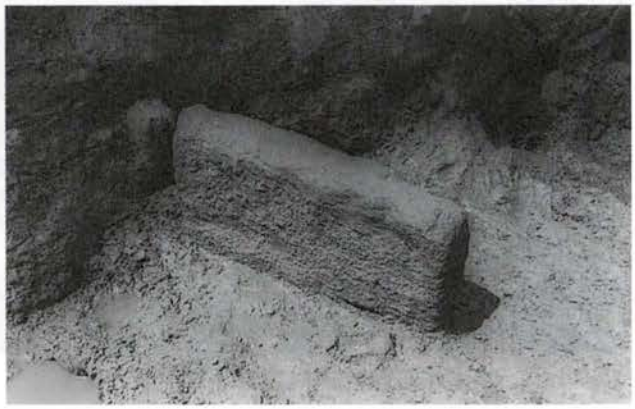
4　1面全景（東から）

5　1面　土坑1（南から）

1　2a面上　全景（南から）

2　2a面　全景（東から）

3　2a面溝２・落ち込み１（北から）



4　2a面　溝２東岸砂岩切石（北東から）

5　2b面　全景（東から）

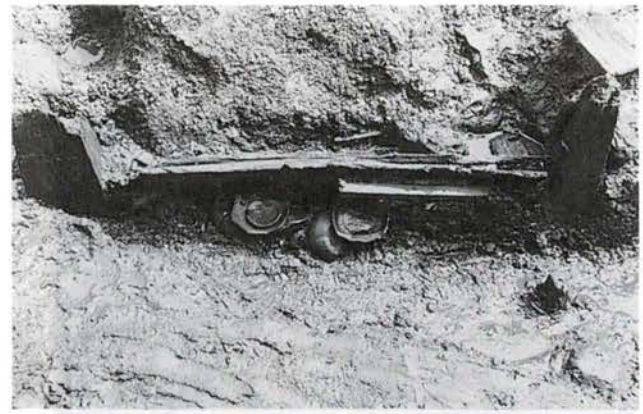
6　2b面上　全景（南から）

図版 3

1　2b面 竪穴遺構1（西から）手前は溝3

2　2b面　竪穴遺構１・溝３（北から）

3　2b面　手前から竪穴遺構溝1・溝3（東から）

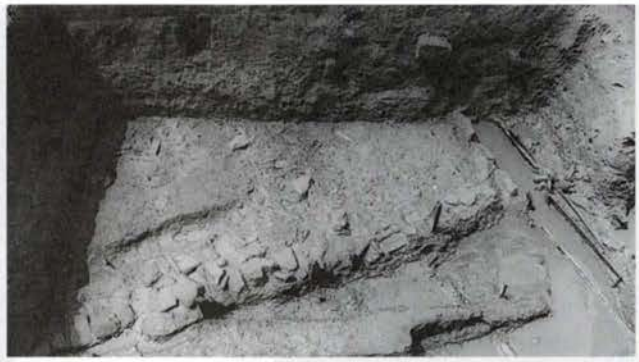


4　2b面　竪穴遺構１　南側束材・測板と土師器（北から）

5　2b面　据甕１（西から）

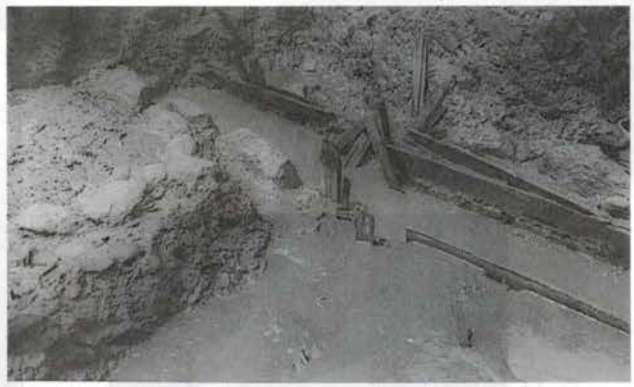
6　2b面　溝3（北から）

1　3面上　全景（南から）

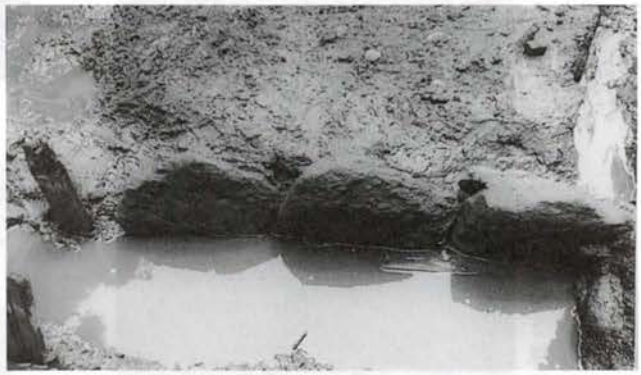


2　右：3面全景（南から）

3　3面　全景（東から）



4　右：3面溝4（北東から）



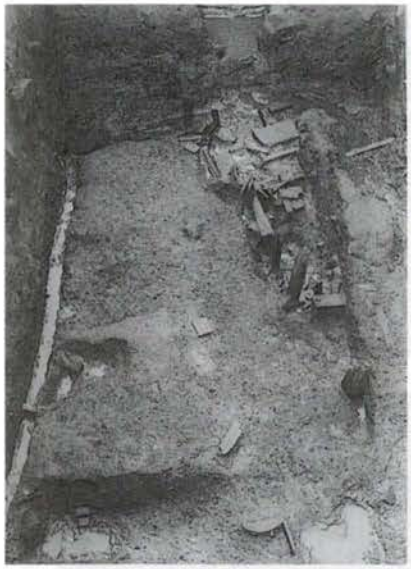
5　3面溝4東岸裏込め部（西から）

6　3面　道路状遺構（東から）

9　3～4面　道路状遺構（東から）

8　4面　道路状遺構（東から）

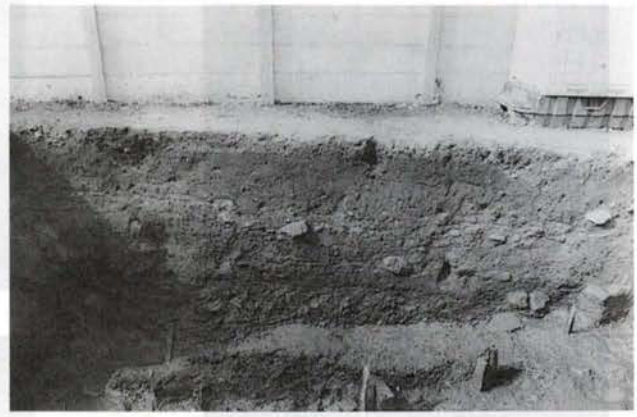
図版5



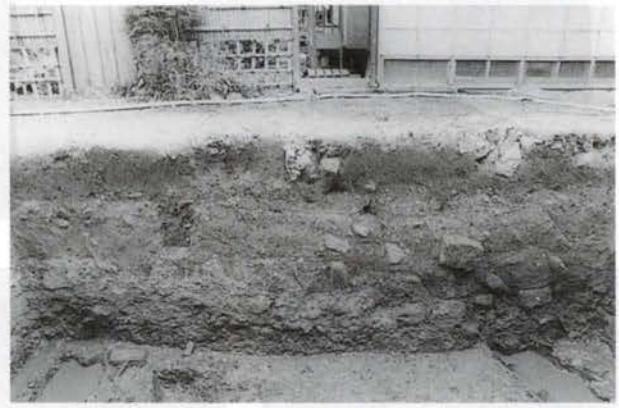
1　右：3面竪穴以降左：4面（東から）

2　上：3面　竪穴遺構2　下：4面上（南から）

3　手前下は溝5・右上は3面　竪穴遺構2残存部　6面　全景（東から）

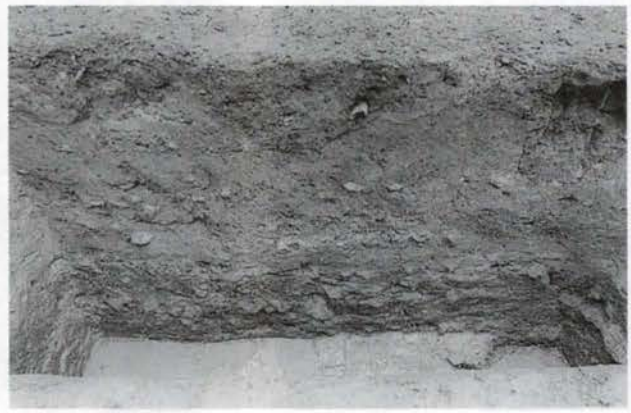


5　調査区北壁土層断面

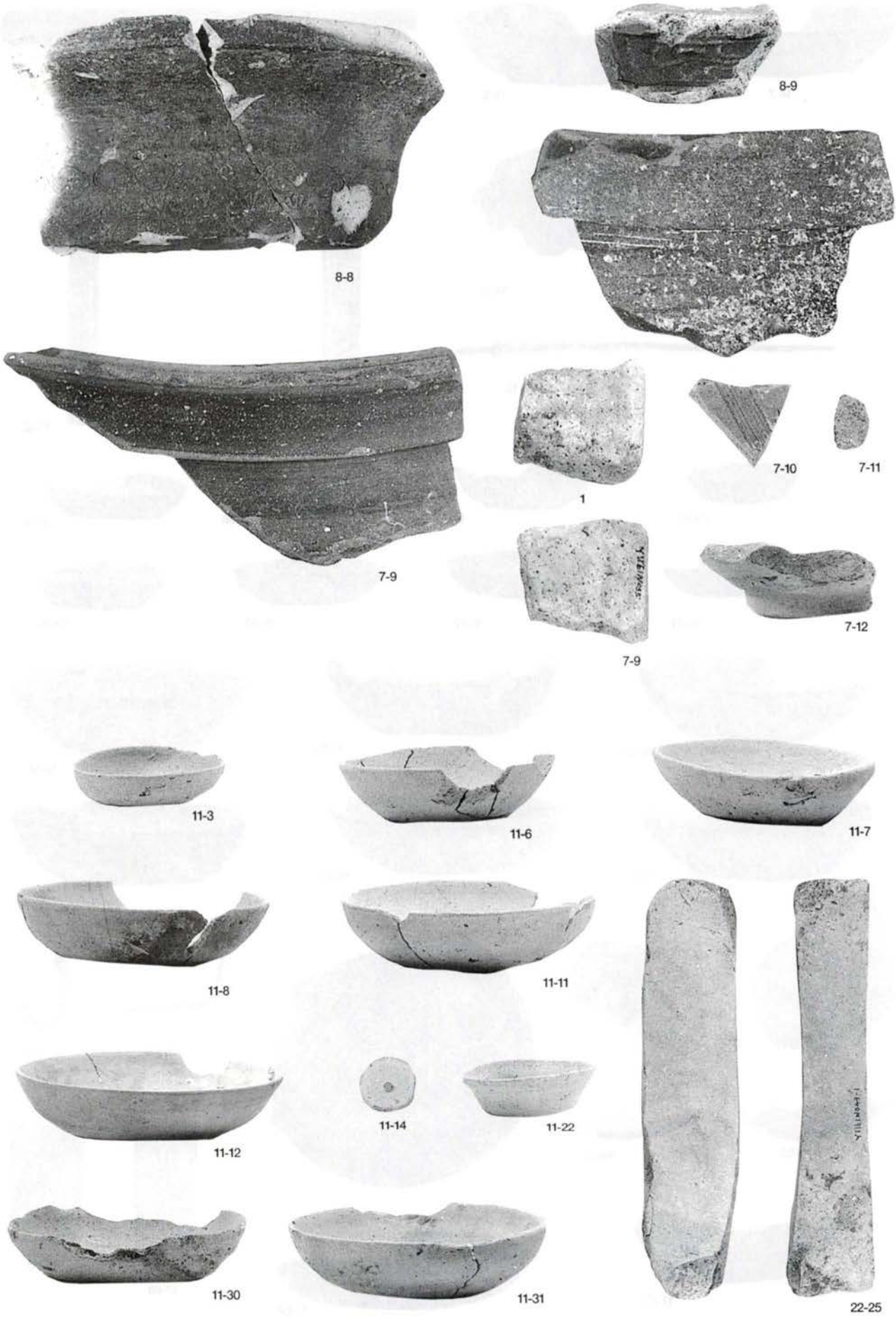


6　調査区　南壁土層断面

4　6面　道路状遺構（東から）



7　試掘坑（道路状遺構）北壁土層断面


8-9
8-8
7-9
1
7-10
7-11
7-9
7-12
11-3
11-6
11-7
11-8
11-11
11-12
11-14
11-22
11-30
11-31
22-25

図版 7

14-7

14-8

15-32

14-13

14-31

14-16

16-33

16-35

16-36

16-38

16-39

16-42

16-45

16-46

16-47

16-49

16-51

16-52

16-53

16-54

17-63

17-64

16-55

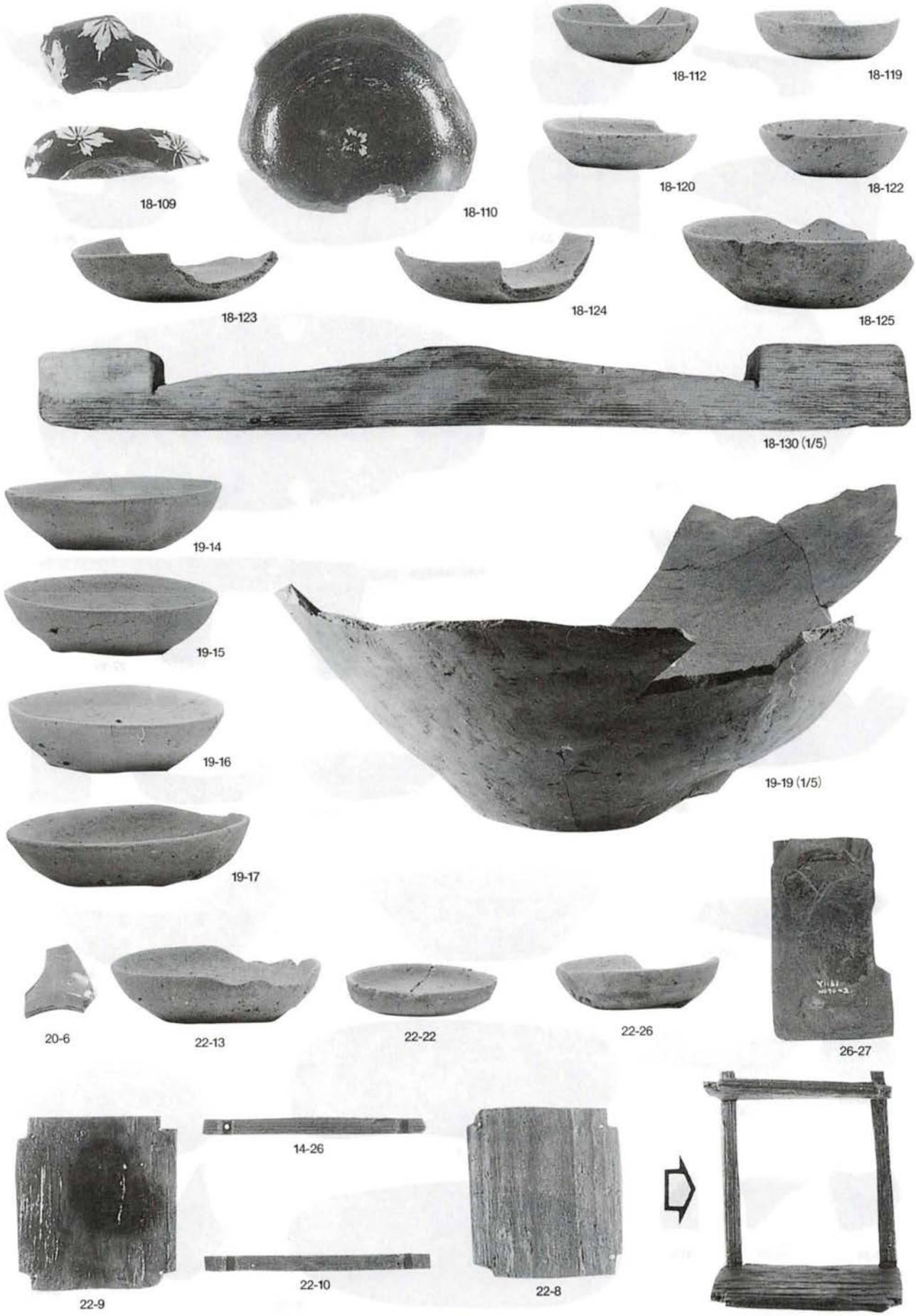
16-56

17-69

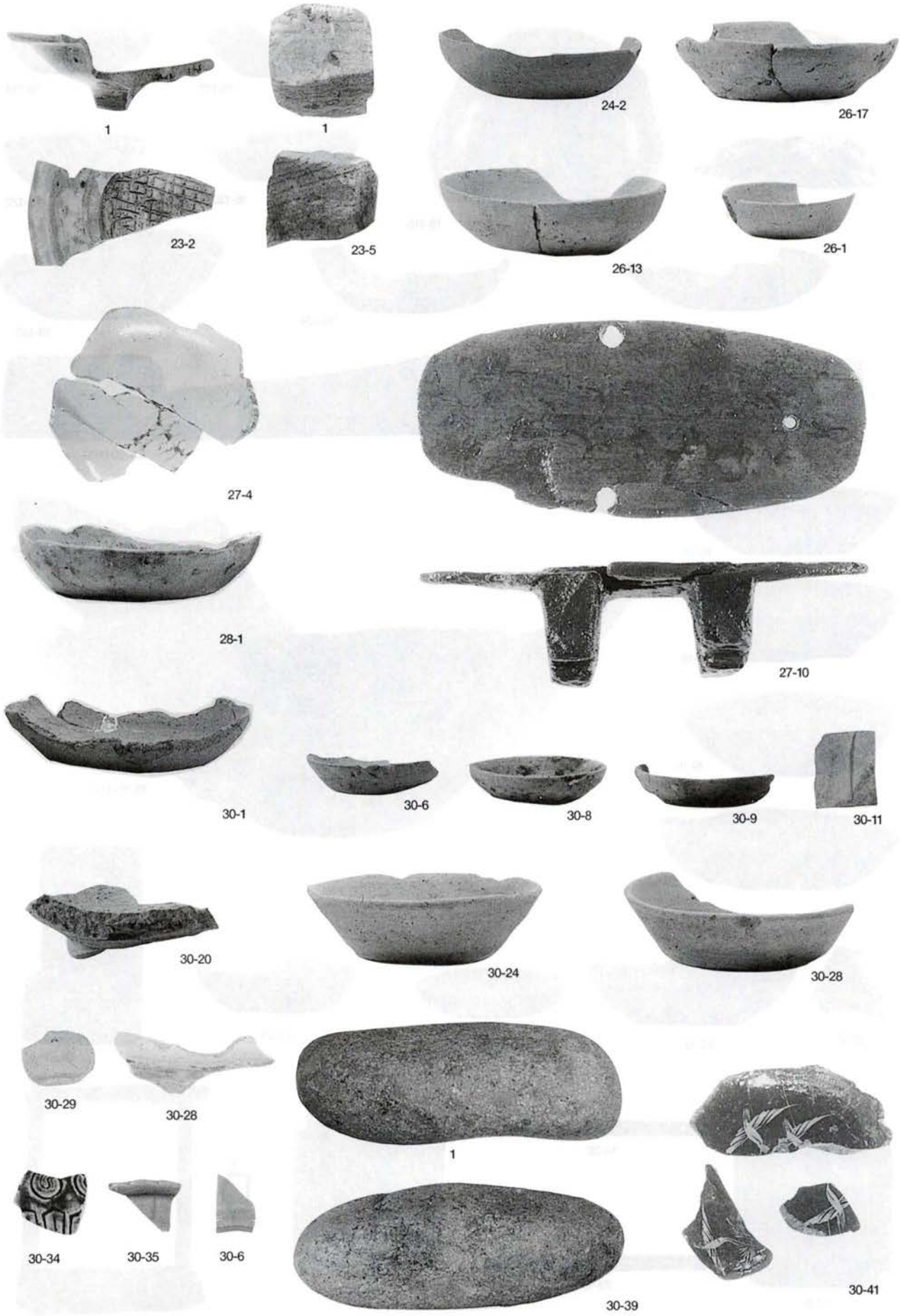
17-70

17-57

17-62


18-109
18-110
18-112
18-119
18-120
18-122
18-123
18-124
18-125
18-130 (1/5)
19-14
19-15
19-16
19-17
19-19 (1/5)
20-6
22-13
22-22
22-26
26-27
14-26
22-9
22-10
22-8

図版 9


1
1
24-2
26-17
23-2
23-5
26-13
26-1
27-4
28-1
27-10
30-1
30-6
30-8
30-9
30-11
30-20
30-24
30-28
30-29
30-28
1
30-34
30-35
30-6
30-39
30-41

浄妙寺旧境内遺跡（No.408）

浄明寺三丁目101番13地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市浄明寺３丁目101番13地点における個人専用住宅の建築に伴って実施された、浄妙寺旧境内遺跡（神奈川県遺跡台帳鎌倉市』408）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成15年6月10日から同年7月9日鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
3. 発掘調査の体制は以下の通りである。
   主任調査員　　齋木秀雄
   調査員　　根本睦子、長澤保崇、
   作業員　　（社）鎌倉市シルバー人材センター
4. 出土品整理作業の体制は以下の通りである。
   主任調査員　　降矢順子、齋木秀雄
   調査員　　八木沼ひとみ、小野笑美、
5. 本報に使用した写真の内、現地調査写真を齋木と根本が、遺物写真を瀬田哲夫が撮影した。
6. 発掘調査資料（記録図面、写真、出土遺物）は、鎌倉市教育委員会が一括して保管している。

目　次

本文目次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境……257
第2章　調査の経過と堆積土層……260
第3章　検出された遺構と遺物……261
　第1節　1面上の遺構と遺物……261
　第2節　1面の遺構と遺物……264
　第3節　2面の遺構と遺物……269
第4章　まとめ……271

挿図目次

図1. 調査地点と周辺の遺跡……258
図2. 調査区設定図……259
図3. 土層堆積図……259
図4. 1面上遺構全体図……261
図5. 1面上遺構……262
図6. 1面上遺構出土遺物……262
図7. 1面上出土遺物……263
図8. 1面遺構全体図……264
図9. 1面遺構（1）……265
図10. 1面遺構（2）……265
図11. 1面遺構出土遺物（1）……266
図12. 1面遺構出土遺物（2）……267
図13. 1面出土遺物……267
図14. 2面遺構全体図……268
図15. 2面遺構……269
図16. 2面遺構出土遺物……270
図17. 2面出土遺物……270
図18. 隣接地との合成図（2面）……271

写 真 図 版 目 次

PL1. 1. 1面上遺構90東から 2. 1面上遺構102・109南から 3. 1面上遺構104・107南から 4. 1面上全景南から
5. 1面遺構127かわらけ出土状況西から 6. 1面上全景東から ……277
PL2. 1 1面遺構1・7・12西から 2. 1面遺構24遺物出土状況西から 3. 1面遺構24・27ピット群北から
4. 1面遺構14かわらけ（アップ）東から 5. 1面遺構25東から 6. 1面遺構15（溝）北から ……278
PL3. 1. 1面全景西から 2. 1面礎石出土状況北から 3. 1面遺構127検出状況東から 4. 1面遺構27東から 5. 1面遺構130東から 6. 1面遺構131土丹出土状況北から ……279
PL4. 1. 1面遺構138東から 2. 1面全景西から 3. 2面遺構31東から 4. 2面遺構33a・b南東から 5. 2面遺構44東から 6. 2面遺構42・43東から ……280
PL5. 1. 2面遺構52南から 2. 2面遺構56 柱痕 東から 3. 2面遺構64 礎板 西から
4. 2面遺構89北から 5. 2面全景西から 6. 2面遺構89 柄杓出土状況北から ……281
PL6. 1. 2面遺構131北から 2. 2面遺構159検出状況北から 3. 2面遺構179検出状況北から
4. 2面遺構159かわらけ出土状況北から 5. 2面遺構169かわらけ出土状況北から 6. 2面全景 ……282
PL7. 出土遺物 ……283
PL8. 出土遺物 ……284

第1章　遺跡の位置と歴史的環境

本遺跡は鎌倉市街地の北東部、滑川中流域の右岸に位置し、北側は大蔵山、南側は衣張山丘陵がせまり、その谷間を滑川が蛇行しながら西に流れ、旧六浦路といわれる県道金沢・鎌倉線に面したところ、浄明寺三丁目101番13に所在する。標高16.0mである。

本調査地点付近に存在する寺院等としてはは東西に通る六浦路、浄妙寺、杉本寺、報国寺などがあり、また延福寺、大休寺、公方屋敷などの旧跡も所在する。六浦路は鎌倉から朝比奈切り通しを越えて六浦（東京湾に面する湾）を結び、中世における幹線道路で『吾妻鏡』には、北条泰時によって仁治元年（1240）に道路の敷設が決められ、翌年に着工されたことがうかがえる。浄妙寺は支谷のほぼ中矢に位置する禅宗寺院である。浄妙寺はもともと極楽寺と称し、足利義兼が文治四年（1188）開創したと伝えられるが（開山；退耕行勇）13世紀中頃に禅宗に改宗し、寺名も浄妙寺に改められた。中興開基は足利尊氏の父貞氏によって整備され、鎌倉五山の五位に列せられる。現在では丘陵を背にした谷戸内のみを寺域としているが、住時にはその全面の平地部分も擁した広い範囲を占め、諸堂宇や多くの塔頭などによって伽羅が形成されていた。調査地点は旧境内の一角に相当すると考えられる街道に面したところであり、本来の寺地とは性格が異なっていた可能性も考えられる。杉本寺は鎌倉時代以前より存在していた古刹で、行基の開山と伝えられる。天台宗である。観音霊場坂東三十三ヵ所の第一番札所として有名である。境内付近のやぐら群の調査が行われている。また背後の丘陵には杉本城という中世城郭が存在する。報国寺は建武元年（1334）開創と伝えられる。寺地は宅間ヶ谷にあり、臨済宗である。境内などの発掘調査が行われている。

本調査地点周辺で実施されている発掘調査を記す。（図1）

地点1杉本寺周辺遺跡群（二階堂912番1外地点）では中世の有力御家人の屋敷跡と思われる遺構群や弥生時代の遺物などが検出されている。弥生時代の遺構は未調査なので詳細は不明である。また弥生時代（中期後半～古墳時代前期）の集落は現地点より6～700m西方の南面利側右岸周辺（大倉幕府周辺の西側付近）に形成されている。地点2浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺三丁目6番3外地点）は、遺構として明確にとらえられるものはなく、わずかに浅いピットが検出されたのみである。出土遺物としては、弥生時代中期後半宮ノ台期～後期久ヶ原期土器が検出されている。

滑川流域では現段階で最も上流での出土地点になる。地点3は、浄明寺字旧境内遺跡（浄妙寺字向小路90番地1地点）では13世紀前半～15世紀前半に伴う両側に側溝を伴う道路状遺構が検出されている。地点4浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺三丁目151番1外地点）

地点5（浄明寺字稲荷小路129番2地点）は旧境内東側の塔頭群があった地点と指定され、14世紀後半～15世紀の掘立柱建物跡・井戸址・土壙・溝・柱穴などが検出されている。地点6浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺三丁目115番2地点）は4枚の生活面が検出され、3面については建物跡と塀、多数のピットが検出され居住空間が調査区全体に広がっている状況が確認されている。13世紀後半～14世紀初頭の様相がうかがえる。地点7浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺字向小路90番1地点）は「六浦路」の側溝と思われる溝や武家屋敷に関連すると考えられる遺構・遺物を検出している。

地点8公方屋敷（浄明寺三丁目143番2地点）では、関東公方足利市の屋敷と伝えられる公方屋敷跡にあたるが、13世紀前葉から15世紀前葉にかけての3期にわたる変遷が捉えられる。また多くの遺構・道路・側溝・遺物・井戸・かわらけ溜りなどが検出されている。地点9公方屋敷跡（浄明寺三丁目151番1外地点）では「六浦路」の軸線を意識していると思われる2棟の建物跡などが検出されている。遺跡の

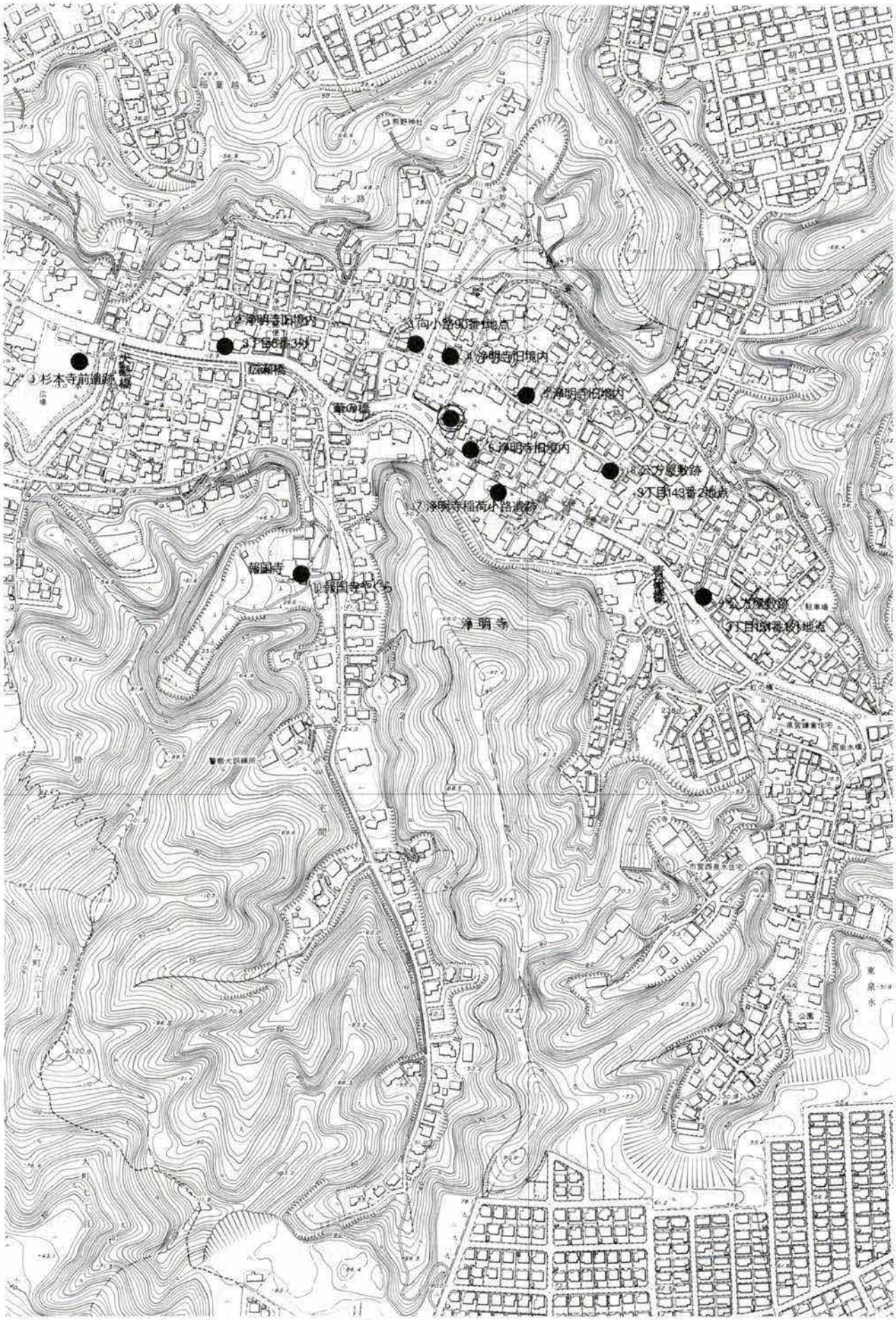


図1　調査地点と周辺の遺跡

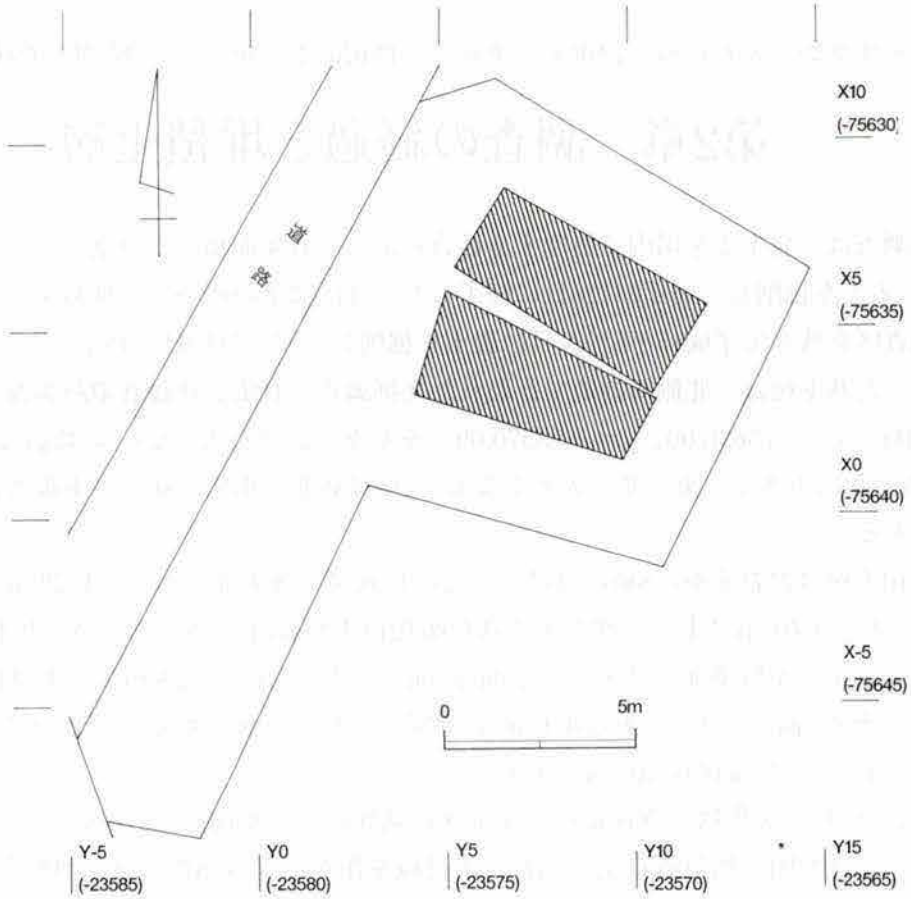
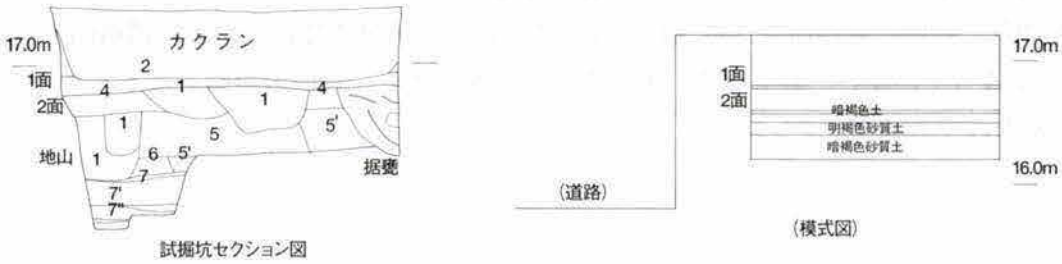


図2　調査区設定図



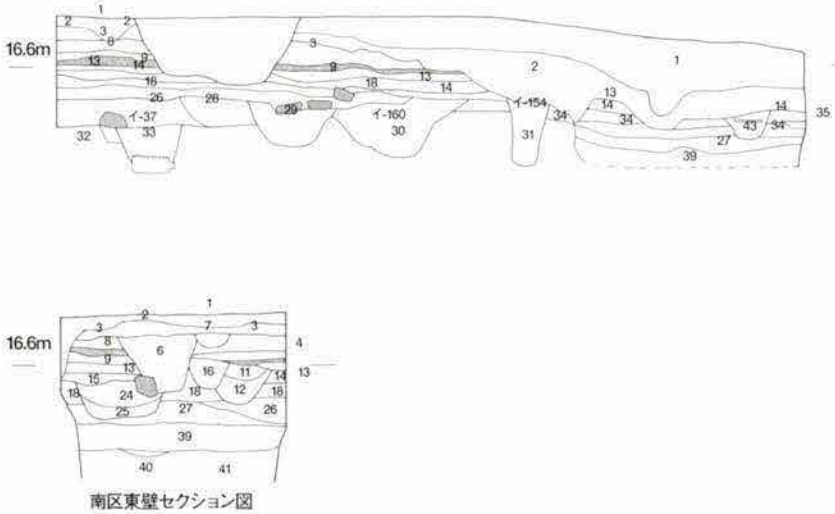


図3　土層堆積図

年代観は13世紀中葉頃と思われる。13世紀中葉から15世紀前半にかけての3時期の遺構を検出した。

第2章　調査の経過と堆積土層

本地点の発掘調査は、発生土を場内で処理する都合もあって対象面積を二分割して行った。Ⅰ区は平成15年6月10日に表土を掘削し、同年6月26日に終了した。Ⅱ区はその南側に、埋め戻し土の崩落を防ぐため若干の未調査区を残して平成15年6月27日に表土を掘削し、同年7月9日に終了した。

調査で使用した基準軸は、北側隣接地で行われた発掘調査（有限会社鎌倉遺跡調査会・2002）で使用したx-5・y-10杭（x＝－75635.00、y＝－23570.00）を基準に設定した。x・yの数値はこの杭を基準に、1m間隔に、西と南に小さく、東と北で大きくなる。y軸は真北を指す。従って本報告書中で使用している北は真北である。

本地点の堆積土層はおおまかに8層に分けた。（図3模式図）地表面レベルは17,20mで西側の路面より約1,40m高い。表土下40cmに土丹小塊を多く含む暗褐色土が4cm～10cmの厚さに堆積していた。この層を、不明瞭ではあるが版築面と認定し、上面を1面とした。1面の下20cmには土丹粒を多く含む明褐色土があり、これを2面とした。2面は中世地山を削平した後の薄い版築と思われる。1面のレベルは16,80m前後、2面のレベルは16,60m前後である。

2面の下には土丹粒、炭化物、遺物細片を少量含む粘性の強い暗褐色土（6層）、土丹粒と炭化物を少量含み白色粒子を含む明茶褐色砂質土（7層）、土丹粒を僅かに含み粘性の強い明褐色粘質土（8層）が堆積している。6層は所謂中世地山に類似するが部分的に堆積が確認されただけであり、様相は明かではない。従って、本地点の明確な地山は7層になる。6層から8層の上面レベルは16,50m、16,40m、16,20mを測り、西側の道路面レベル（15,80m）より高い。本地点では、中世の遺構面・包含層は30cm～40cmしか残っていない。おそらく、本地点の宅地を造成し、西側の道路を造るときに大きな削平工事が行われたのであろう。

第3章　検出された遺構と遺物

調査では薄い包含層を挟んで2枚の生活面（遺構確認面）を確認した。また、上層の生活面には明らかに「近世耕作土」と思われる覆土の遺構も確認されていたため、これらをまとめて1面上遺構群とし、上層を1面遺構群、下層を2面遺構群とした。各生活面には版築された痕跡は認められなかった。

以下、各面の遺構について説明を加えるが本書で使用する「鎌倉石」、「土丹」はそれぞれ砂質凝灰岩切石、破砕泥岩の地域用語である。また、底面レベルは海抜数値、主軸方向は真北からの計測値を示している。

第1節　1面上の遺構と遺物

近世耕作土を覆土に充満する溝状土坑と幾つかの土坑が確認できた。土坑の覆土は明確な耕作土ではなく、1面遺構群に含まれる可能性も残るが切り合い関係で本面に含めた。

遺構3

Ⅰ区の中央よりやや西側で南北方向に検出された溝状土坑である。北側は撹乱3に壊され、Ⅱ区では確認できなかった。土坑11に一部を壊されている。断面形は箱形で、上面幅48cm、底面幅26cm、深さ11cm、底面レベル16.25mを測る。主軸方向は真北から31度東に振れている。図示できる出土遺物は無い。

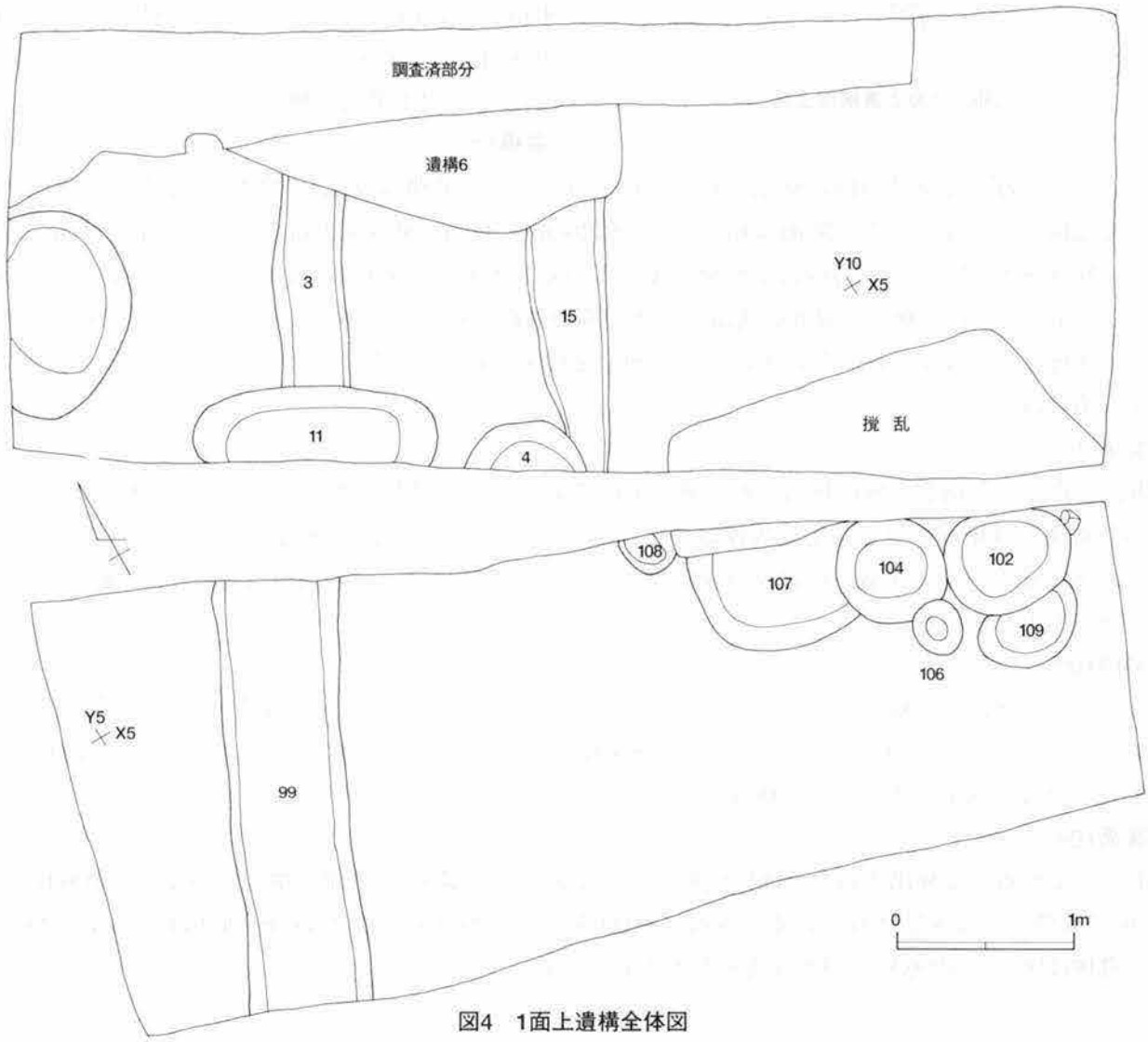


図4　1面上遺構全体図

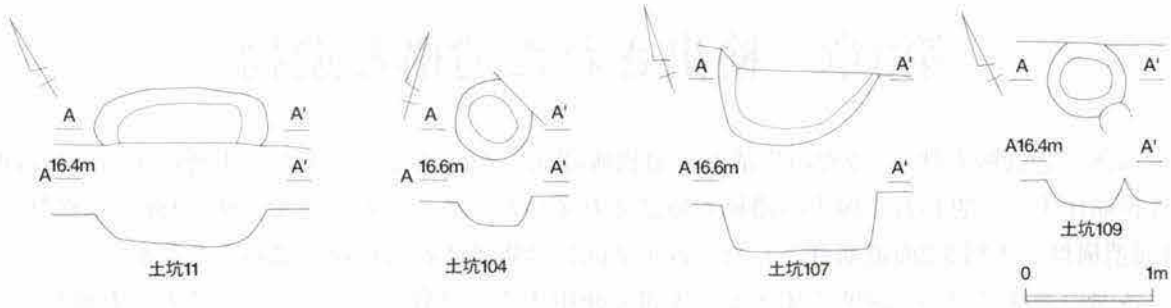


図5　1面上の遺構

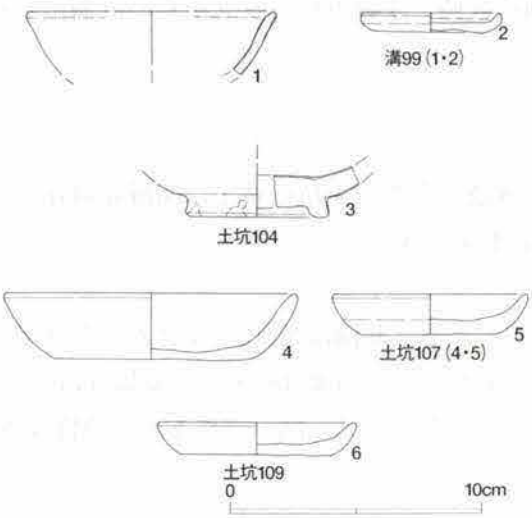


図6　1面上遺構出土物

遺構6

Ⅰ区のほぼ中央南壁際で検出された土坑である。調査区外南に延び、遺構15を壊している。平面形はほぼ円形と思われ、確認規模は南北27cm、東西72cm、深さ11cm、底面レベル16.25mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構11

Ⅱ区の西よりの南壁際で検出された土坑である。調査区外南に延び、遺構3を壊している。平面形は東西に長い楕円形を呈し、確認規模は南北42cm、東西143cm、深さ20cm、底面レベル16.33mを測る。図示できる出土遺物は無い。

遺構15

Ⅰ区の中央部分で南北方向に検出された溝状土坑である。北側は撹乱3に壊され、南壁際で細くなりⅡ区では確認できなかった。断面は箱形で上面幅26cm～56cm、底面幅20cm～37cm、深さ11cm、底面レベル16.30mを測る。主軸方向は30度東に振れている。本遺構と遺構3はほぼ平行に掘られ、遺構間距離は106cm～115cmを測る。両者が通路の側溝で間が通路の可能性も考えられるが、Ⅱ区で検出されないため明確にできなかった。この場合、遺構99も連続する溝状土坑として捉える必要がある。図示できる出土遺物はない。

遺構99

Ⅱ区の西よりで南北方向に検出された溝状土坑である。南は調査区外に延び、北のⅠ区では検出されない。断面形は箱形を呈し、確認規模は長さ2.45m、上面幅70cm前後、底面幅55cm、深さ7cm、底面レベル16.19mを測る。主軸方向は28度東に振れている。遺物は図6－1の白磁口兀皿と2の極小のコースター皿が出土している。

遺構102

Ⅱ区の北東隅近くで検出された土坑である。上面を削平されているためか遺存状況は良くない。遺構104、109に一部を壊されている。平面形は楕円形で長径54cm、短径34cm、深さ4cm、底面レベル16.27mを測る。図示できる出土遺物は無い。

遺構104

Ⅱ区の北壁近くで検出された平面楕円形の土坑である。遺構107の東側を壊しているが、遺構102と遺構106に東側の一部を壊されている。規模は長径65cm、短径64cm、深さ30cm、底面レベル16.13mを測る。遺物は図6－3の竜泉窯鎬連弁文碗が出土している。

遺構106

Ⅱ区北東部分で検出されたピット状の小土坑である。北西部で遺構104の一部を壊している。平面形は円形で、規模は長径30cm、短径27cm、深さ15cm、底面レベル16.30mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構107

Ⅱ区の北壁際で検出された楕円形の土坑である。北側を攪乱2に壊され、東を遺構104に壊されている。確認規模は長径80cm、短径60cm、深さ39cm、底面レベル16.04mを測る。遺物は図6-4、5のかわらけが図示できた。4は大皿、5は小皿である。

遺構108

Ⅱ区の北壁際で検出されたピット状の小土坑である。調査区外北に延び、東を攪乱2に壊されているため平面形は不明。確認規模は長径25cm、短径20cm、深さ8cm、底面レベル16.31mを測る。遺物は図11-28の手づくねかわらけ小皿が図示できた。

遺構109

Ⅱ区の北東部で検出された土坑である。北側で遺構102を壊している。平面形は楕円形で確認規模は長径55cm、短径32cm、深さ30cm、底面レベル16.13mを測る。遺物は図6-6のかわらけ小皿が図示できた。

1面上出土遺物

遺構確認中に出土した遺物のうち実測のできた7点を図7に示した。7は常滑片口鉢Ⅰ類、8は土器質鉢形手焙り口縁から胴部、9から12はかわらけ皿小で、12はコースター皿である。13は常滑甕片の外周を磨った「磨り常滑」である。

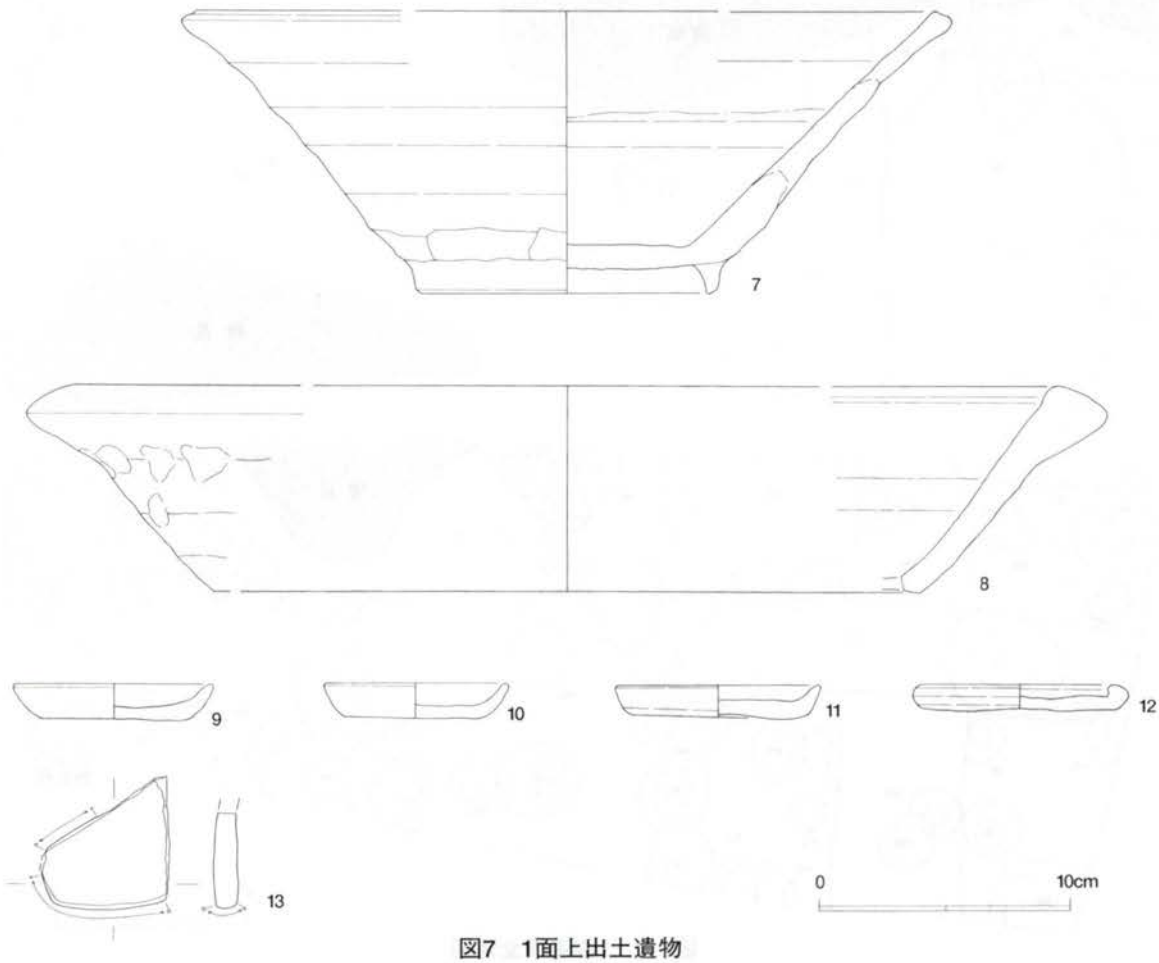


図7　1面上出土遺物

第2節　1面の遺構と遺物

1面では削平の激しいⅠ区の東半分を除き、多くの土坑や柱穴が検出できた。溝乃至溝状土坑は1面上遺構群とは方向が異なり、東西方向となっている。1面上遺構群確認面とのレベル差は僅かである。

遺構14

Ⅰ区の西壁際で検出された、かわらけを多く出土した（かわらけ溜り?）土坑である。調査区外に延びるが、平面形は楕円形と思われる。遺構56、67を壊している。確認規模は長径87cm、短径50cm、深さ30cm、底面レベル15.84mを測る。

遺物は図11-14～27の14点が図示できた。14は龍泉窯青磁折縁鉢口縁部、15は瀬戸入子、16は常滑片口鉢口縁から底部、17は常滑甕胴部片である。18から21はかわらけ皿小である。うち20、21は灯明皿、22～25はかわらけ皿大、うち24,25は灯明皿に使用したものである。

遺構18

Ⅰ区の西側で検出された土坑である。遺構25を壊しているが攪乱、遺構3、24に大部分を壊されているため、平面形はつかめない。確認規模は南北55cm、東西38cm、深さ9cm、底面レベル16.27mを測る。図16-37はかわらけ大皿で遺構18の出土。

遺構25

Ⅰ区の西側で検出された比較的大きな土坑である。遺構3、10、13、27に壊されている。平面形は楕円形を呈し、確認規模は長径103cm、短径85cm、深さ24cm、底面レベル16.06mを測る。図示できる出土

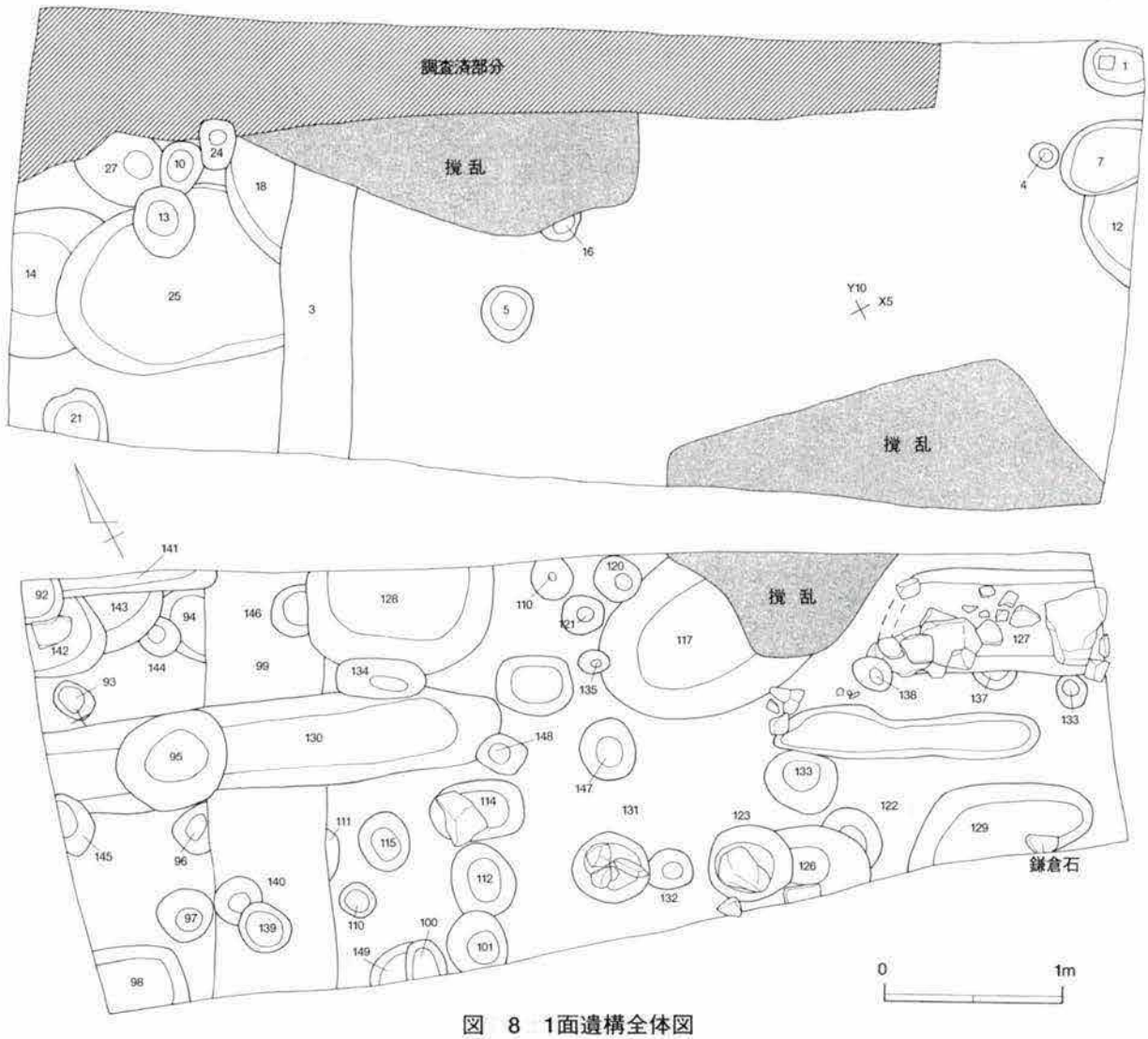


図　8　1面遺構全体図

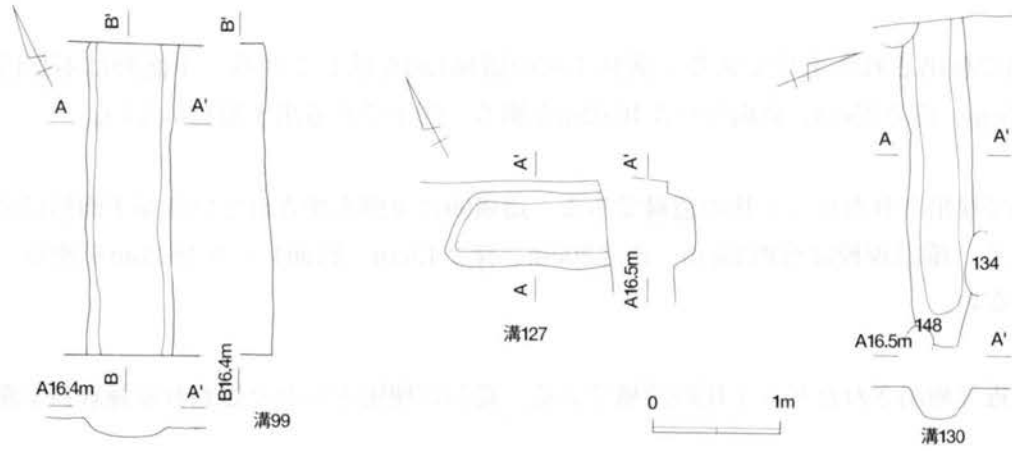


図9　1面遺構（1）

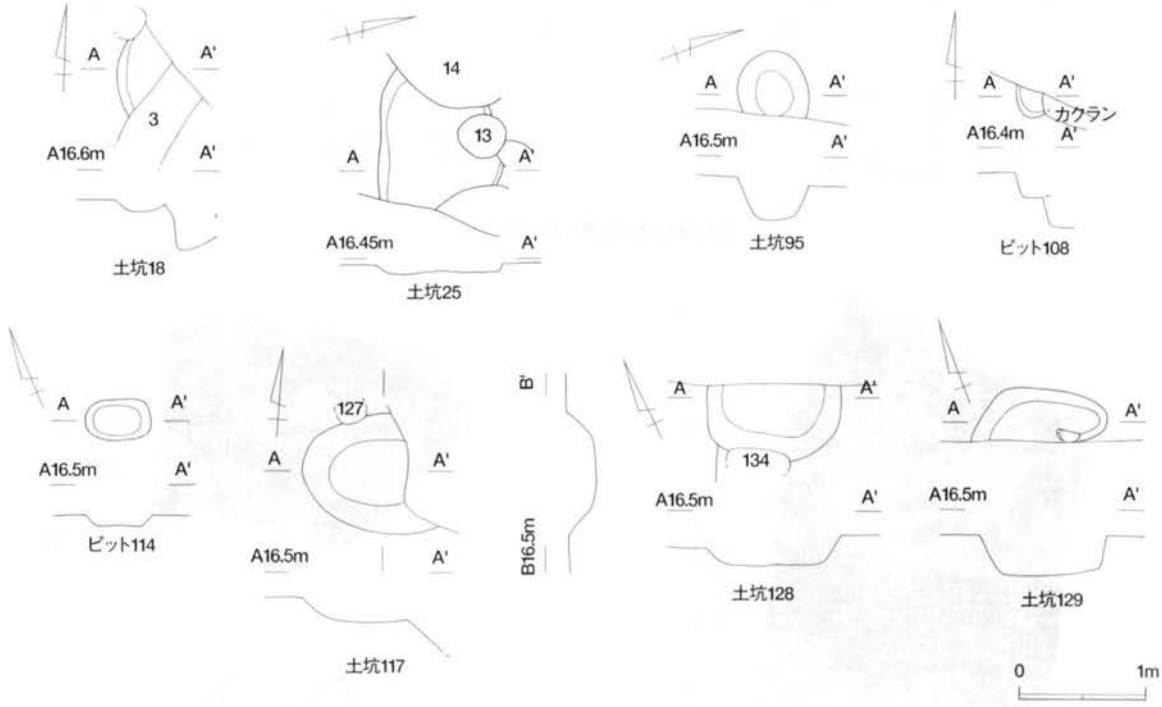


図10　1面遺構（2）

遺物はない。

遺構92

Ⅱ区の西側隅で検出されたピット状の遺構である。調査区外北西に延びているため前体形はは掴めないが、遺構141、142を壊している。確認規模は東西25cm、南北25cm、深さ9cm、底面レベル16.32mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構93

Ⅱ区の北西部で検出されたピット状の遺構である。平面形は楕円形を呈し、確認規模は長径27cm、短径20cm、深さ9cm、底面レベル16.30mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構94

Ⅱ区の北西部で検出された土坑である。遺構99、141、143、144に部分的に壊されているため全体形は正確に掴めないが、楕円形であったと思われる。確認規模は東西40cm、南北33cm、深さ8cm、底面レベル16.33mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構95

Ⅱ区の西側で検出された土坑である。溝状土坑の遺構130を壊している。平面形は不整円形で長径58cm、短径55cm、深さ25cm、底面レベル16.02mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構96

Ⅱ区の西側で検出されたピット状の遺構である。遺構99に東側を壊されているが平面形は楕円形であったと思われる。確認規模は東西25cm、南北20cm、深さ13cm、底面レベル16.26mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構114

Ⅱ区の中央付近で検出されたピット状の遺構である。礎石に使用されたと思われる鎌倉石が覆土上部で

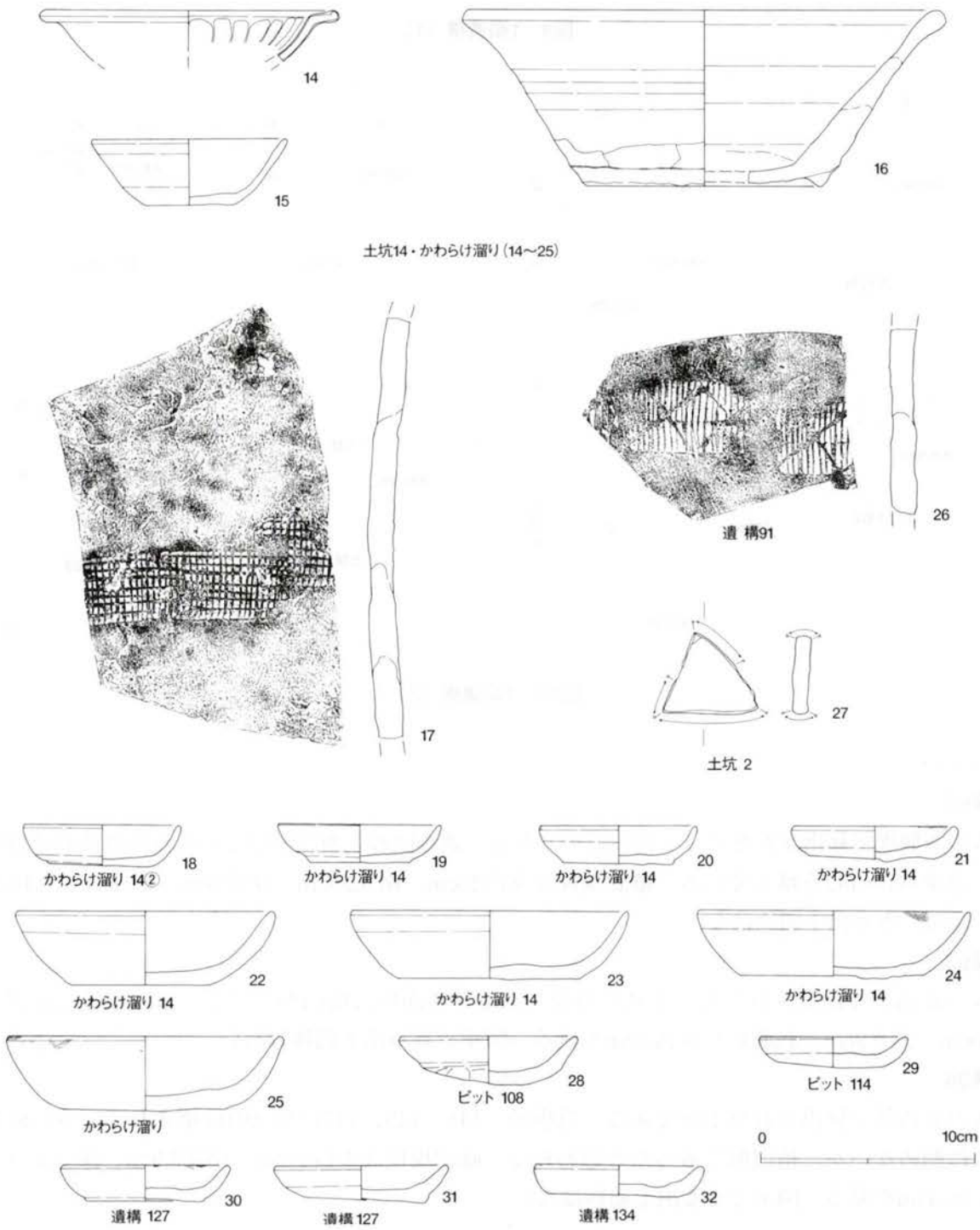


図11　1面遺構出土遺物（1）

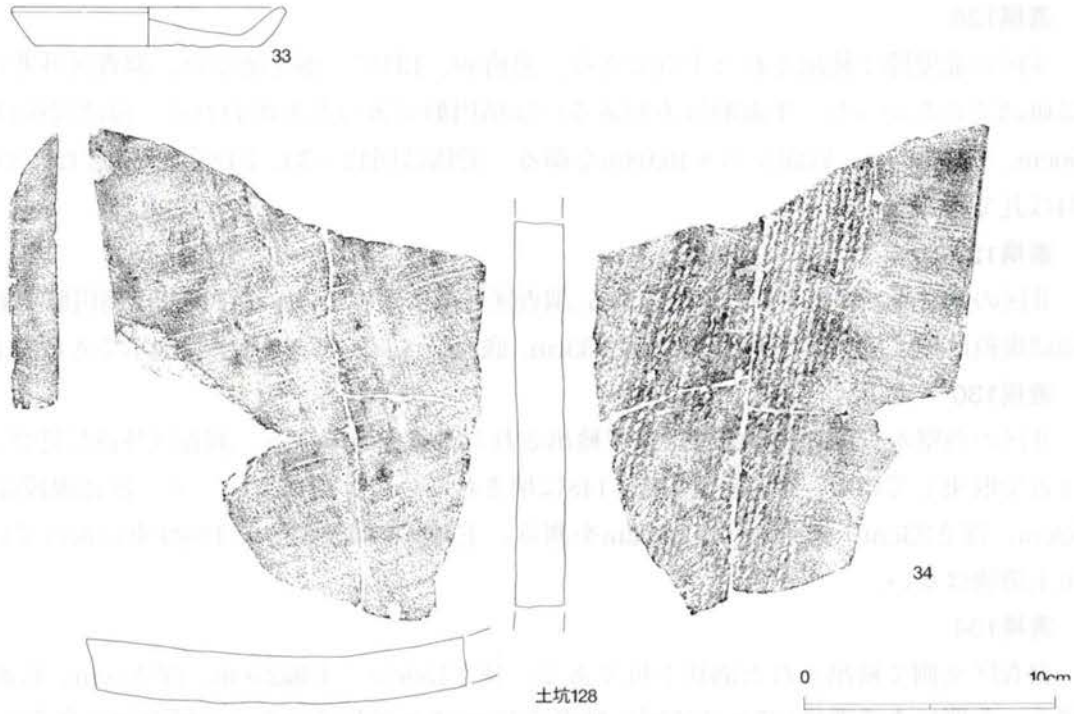


図12　1面遺構出土遺物（2）

図13　1面出土遺物

確認されている。平面形は楕円形で、確認規模は長径54cm、短径34cm、深さ4cm、底面レベル16.20mを測る。遺物は図11-29のかわらけ小皿が図示できた。

遺構117

Ⅱ区の東側で検出された土坑である。遺構127、135に一部を、攪乱に東側を大きく壊されているため、全体形は掴めないが、楕円形を呈していたと思われる。確認規模は東西85cm、南北95cm、深さ20cm、底面レベル16.10mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構127

Ⅱ区の北東隅で検出された東西方向の溝状土坑である。調査区外東に延びている。遺構133、137を壊しているが、遺構138にほんの一部を壊されている。覆土内には多くの土丹塊が投棄された状態で確認されているが、性格などを確定することは出来なかったが、築地等の基礎遺構を考えたいところである。断面形は　を呈し、確認規模は長さ125cm、上幅60cm、深さ16cm、底面レベル16.14mを測る。主軸方向は真北から118度東に振れている。

遺物は図11-30、31のかわらけ皿が図示できた。31は灯明皿として使用されている。

遺構128

Ⅱ区の北壁際で検出された土坑である。遺構99、134に一部を壊され、調査区外北に延びるがⅠ区では確認できなかった。平面形は方形あるいは楕円形であったと思われる。確認規模は東西92cm、南北60cm、深さ36cm、底面レベル16.08mを測る。遺物は図12－33、34が図示できた。33はかわらけ中皿、34は瓦である。

遺構129

Ⅱ区の南壁際で検出された土坑である。調査区外南に延びているが平面形は楕円形であったと思われる。確認規模は長径105cm、短径40cm、深さ33cm、底面レベル15.27mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構130

Ⅱ区の西壁から調査区中央付近まで検出された溝状土坑である。調査区外西に延び、東は調査区中央付近で収束している。遺構95、134、148に壊されている。断面形は　で、確認規模は長さ260m、上幅52cm、深さ23cm、底面レベル16.02mを測る。主軸方向は真北から120度東に振れている。図示できる出土遺物はない。

遺構134

調査区東側で検出された溝状土坑である。長さ150cm、上幅25cm、深さ4cm、底面レベル16.30mを測る。北側にある遺構127とほぼ同じ軸線で25cmほど離れている。主軸方向は真北から120度東に振れている。遺物は図11-32のかわらけ小皿が図示できた。灯明皿として使用している。

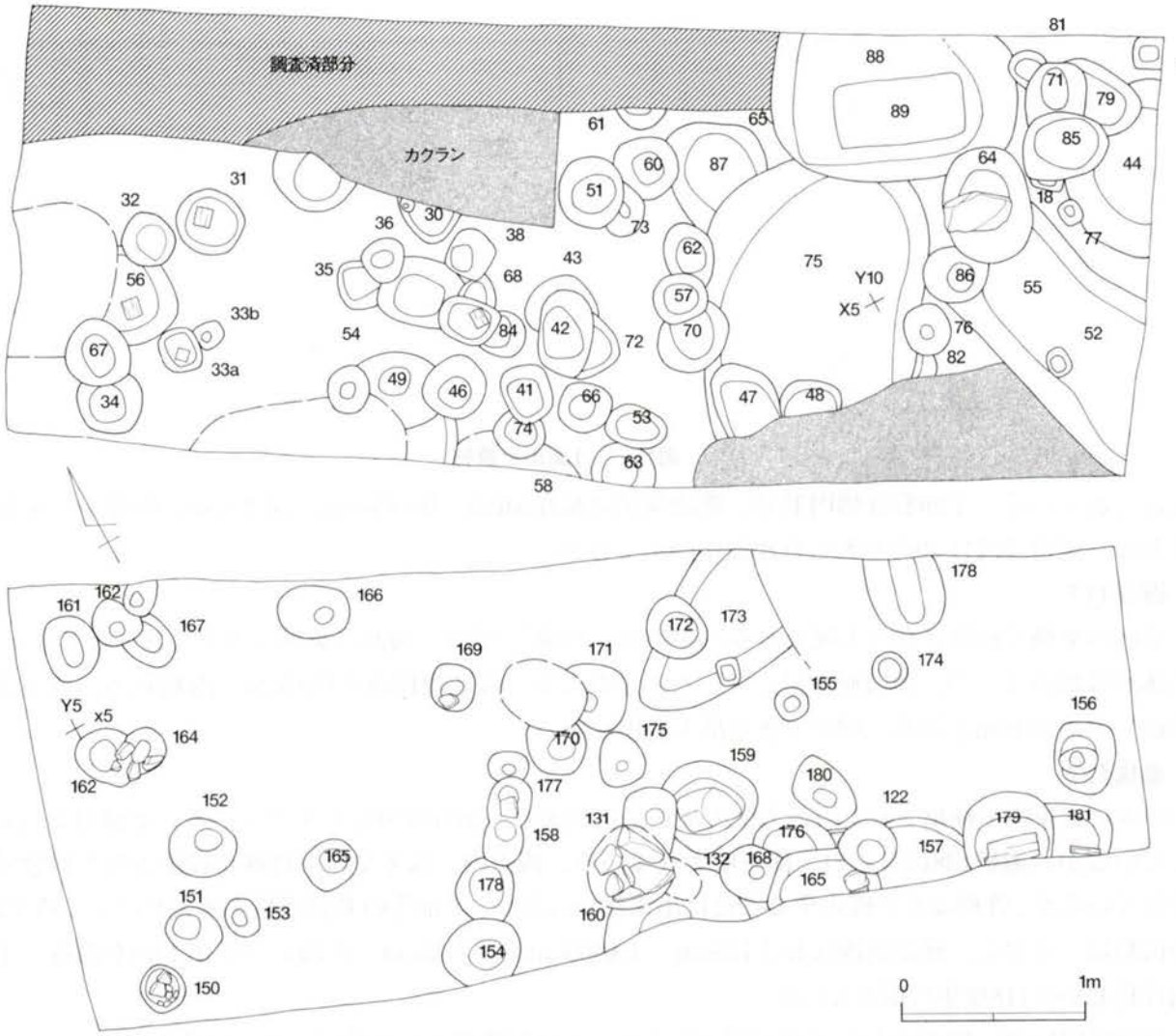


図14　2面遺構全体図

1面遺構出土遺物（図11-1～32）

26は遺構91の出土。常滑甕胴部片。27の研磨常滑片は遺構2（土坑）の出土。

1面出土遺物

35は常滑甕の口縁部から頸部、36は手づくねかわらけ小皿である。

第3節　2面の遺構と遺物

2面では、Ⅱ区で検出遺構がやや少ないが、調査区全体で柱穴などが密度濃く検出されている。溝状土坑らしき遺構は1基見られるが上層とは方向が異なり、不確かである。

遺構39

Ⅰ区の中央よりやや西側で検出された土坑である。遺構35、78を壊しているものの、遺構36、40、68

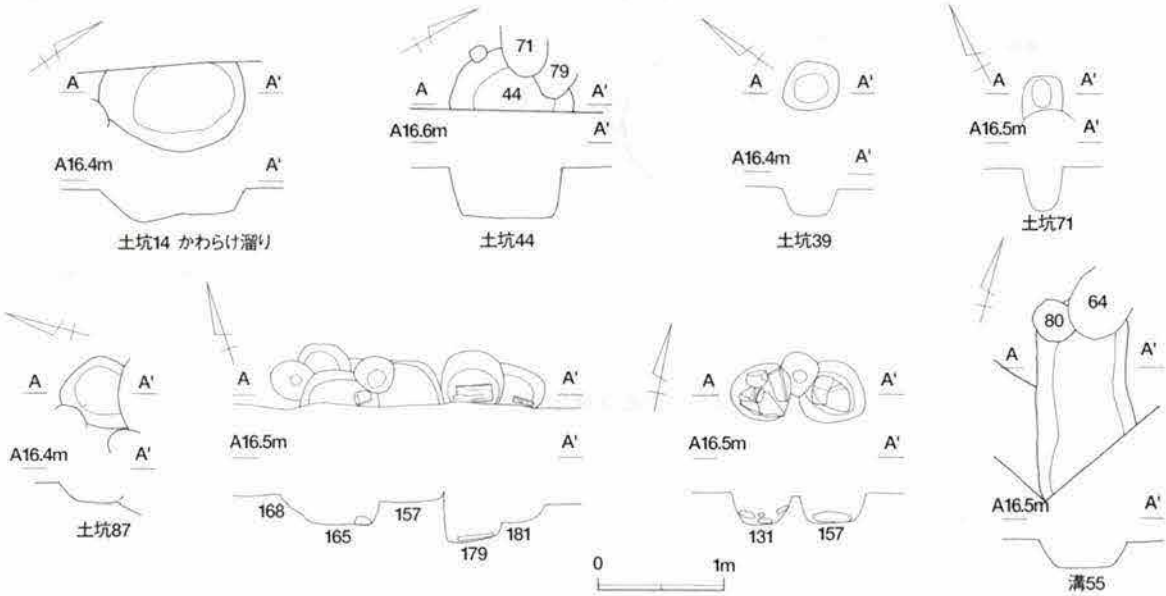


図15　2面遺構

に壊されている。確認規模は長径35cm、短径40cm、深さ20cm、底面レベル16.11mを測る。遺物は図16-38に図示したかわらけ小皿が出土している。灯明皿に使用されている。

遺構44

Ⅰ区の東壁近くで検出された土坑である。調査区外の北に延びるため全体形は掴めないが、ほぼ円形を呈していたと考えられる。遺構71、77、78、79、85に壊されている。確認規模は長径100cm、短径50cm、深さ37cm、底面レベル16.01mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構55

Ⅰ区の南東隅で検出された細長い土坑である。調査区外南東に延びるため全体形は掴めないが溝状土坑の可能性がある。遺構64、80に北端を壊されている。断面形は逆台形を呈し、確認規模は長さ110cm、幅70～95cm、深さ10.5cm、底面レベル16.11mを測る。図示できる出土遺物はない。

遺構71

Ⅰ区の東側で検出された土坑である。遺構79、81を壊しているが遺構85に壊されている。平面形は楕円形で、確認規模は長径34cm、短径34cm、深さ32cm、底面レベル15.98mを測る。遺物は図16-39に図示したかわらけ小皿が出土している。

遺構87

Ⅰ区の北壁近くで検出された土坑である。遺構60、62に部分的に、遺構75に南側を大きく壊されてい

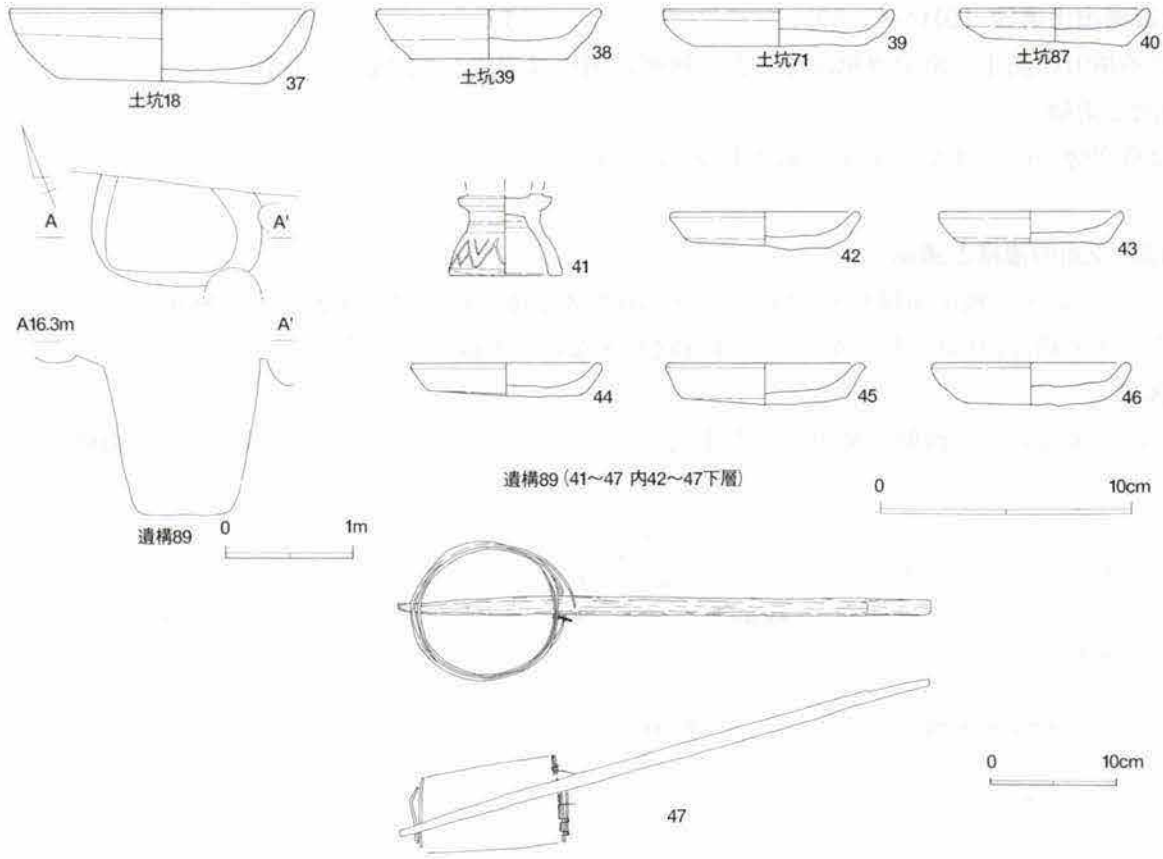


図16　2面遺構出土遺物

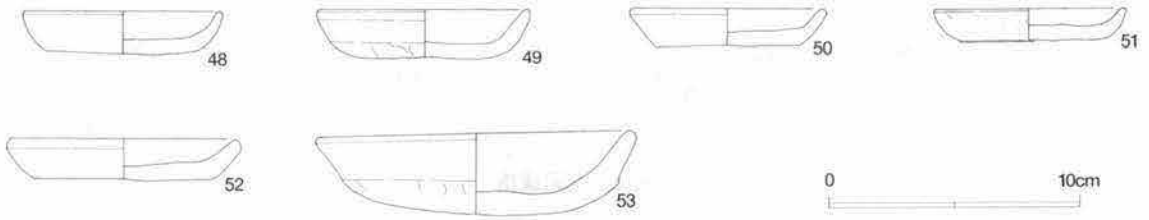


図17　2面出土遺物

るが平面形は楕円形であったと思われる。確認規模は長径50cm、短径60cm、深さ14cm、底面レベル16.13mを測る。遺物は図16-40に図示したかわらけ小皿が出土している。

遺構89

Ⅰ区東側の北壁際で検出された深い土坑であるが、形状などから木組みを伴わない井戸の可能性が高い。民間調査範囲に北側の上部が部分的に含まれているが、本調査で底面まで調査したのでここに含めた。底部は北壁近くのため完全には確認できなかった。確認規模は東西138cm、南北80cm、深さ167cm、底面レベル15.0mを測る。底面は方形で一辺70cm前後と思われる。

遺物は図16-41～47が図示できた。41は青白磁小形瓶の高台部と思われる、42～46はかわらけ小皿である。47は曲げ物を使用した柄付柄杓であるが、曲げ物の底板は失われている。全長25cm、曲げ物径25cm、曲げ物の深さ10cmを測る。

2面出土遺物

2面調査中に出土した遺物を図17-48～53に図示した。すべてかわらけ皿で、49は手捏ね小皿、51は灯明皿、53は手捏ね大皿で灯明皿として使用している。

第4章　まとめ

本調査では、調査面積が狭くまた近世以降の削平が激しかった事もあって検出された遺構群の性格を明確にする事はできなかった。従ってここでは調査結果を基に、周辺地域との関係や検出遺構の年代などについて若干のまとめを行う事にする。

1　周辺地域との関係

本地点の調査では、地表面が海抜17.20m前後、中世地山が海抜16.60m前後で検出されている。調査地点西側の道路面が海抜16.0m前後であるから、数値では道路を作る際にすでに中世の地山を削っていることになる。それを裏付けるように本地点の北に接する民間調査区（註）では地山上で検出された井戸が道路によって大きく削り取られていることが確認されている。両地点の遺構全体図（2面）では南側に現在の金沢道に平行する溝状土坑が見られ、やや境界の様相が感じられる。しかし、北側では中穴

図18　隣接地との合成図（2面）

の数が多く、建物を復元することが困難である。また、仮に建物を復元できたとしても大きな建物になる可能性は低い。

これらの事から調査地点周辺の旧地形等を考えると、本地点の2軒西側の薬局辺りから東側一帯が浄妙寺門前より小高い土地であり、すでに中世生活面のほとんどは削平されているものの、密度濃く生活が営まれていた可能性が高い。浄妙寺との関係は明確にできなかったが、今後の調査結果の蓄積が期待される。

2　検出遺構の年代

検出された1面上から2面までの遺構覆土・確認面から出土した遺物には、図示できない破片ではあるが14世紀に含まれる常滑甕口縁部が少量含まれている。中国製の磁器類では蓮弁文青磁碗や口兀白磁皿がほとんどで折り縁皿が少量含まれている。瀬戸製品は極めて少なく、小片で折り縁深皿や壺類が少量見られるだけで、図示できたのは入子だけである。かわらけは、最下層の2面には京都系の手づくねかわらけが比較的多く含まれているが、1面では器肉が薄く精良な胎土の一群が多い。これらの口径は7.5cm前後と小型である。

これらの遺物から年代を考えると、1面上で確認したいくつかの遺構がおそらく14世紀に構築されているが、1面の遺構と1面上の遺構のほとんどは13世紀後半から14世紀前半頃に属すると考えられる。最下層の2面は13世紀前半の遺構を中心としているが、幾つかは明確な出土遺物は無いものの13世紀後半に含まれるであろう。

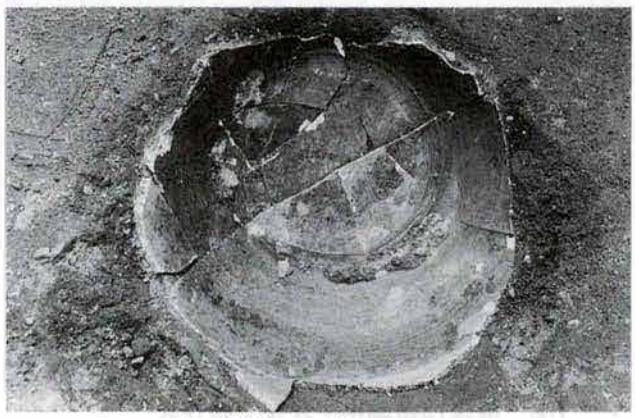
本地点の開発は13世紀前半に行われたと言えるが、出土遺物の量や遺構の規模などから屋敷地ではなく町家的な空間であったと考えたい。

図版番号	図版No.	層位	遺構名	種　別	口径	底径	器高	備　考
6	1	1上	溝99	白磁　口兀皿	(9.8)	-	-	
6	2	1上	溝99	内折れかわらけ	5.4	4.4	0.7	
6	3	1上	土坑104	龍泉窯系青磁碗	-	(5.4)	-	
6	4	1上	土坑107	かわらけ	11.5	7.7	2.6	
6	5	1上	土坑107	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.6	
6	6	1上	土坑109	かわらけ	(7.7)	(6.0)	1.3	
7	7	1上	1面上	常滑片　口鉢	(29.4)	11.4	11.2	Ⅰ類
7	8	1上	1面上	土器質鉢形手焙り	(38.6)	(28.0)	8.2	
7	9	1上	1面上	かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.5	
7	10	1上	1面上	かわらけ	7.2	5.4	1.5	
7	11	1上	1面上	かわらけ	8.0	6.3	1.2	
7	12	1上	1面上	内折れかわらけ	7.6	7.8	1.0	
7	13	1上	土坑2	磨常滑	-	-	-	
11	14	1	土坑14	龍泉窯系折縁鉢	(13.4)	-	-	
11	15	1	土坑14	瀬戸　入子	(9.1)	4.0	3.2	
11	16	1	土坑14	常滑　片口鉢	(22.0)	(11.0)	8.3	Ⅰ類
11	17	1	土坑14	常滑　甕	-	-	-	格子叩きの押印
11	18	1	土坑14	かわらけ	7.2	4.7	1.9	
11	19	1	土坑14	かわらけ	7.5	4.6	1.9	
11	20	1	土坑14	かわらけ	7.2	5.1	1.8	スス付着
11	21	1	土坑14	かわらけ	7.6	5.8	1.5	スス付着
11	22	1	土坑14	かわらけ	11.8	6.4	3.5	
11	23	1	土坑14	かわらけ	12.8	8.4	3.2	
11	24	1	土坑14	かわらけ	12.6	8.5	3.1	スス付着
11	25	1	土坑14	かわらけ	12.7	7.6	3.5	灯明皿
11	26	1	遺構91	常滑　甕	-	-	-	
11	27	1	遺構2	磨常滑	-	-	-	
11	28	1	ピット108	かわらけ	8.2	(6.8)	2.2	手づくね
11	29	1	ピット114	かわらけ	6.8	4.8	1.4	
11	30	1	溝127	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.6	スス付着
11	31	1	溝127	かわらけ	8.0	5.6	1.6	
11	32	1	溝134	かわらけ	7.8	6.2	1.4	スス付着
12	33	1	土坑128	かわらけ	(10.8)	9.0	1.55	
12	34	1	土坑128	瓦	(21.0)	(15.0)	2.0	
13	35	1	1面	常滑　甕	(45.2)	-	-	
13	36	1	1面	かわらけ	9.3	-	1.9	手づくね
16	37	2	土坑18	かわらけ	12.0	8.2	2.9	
16	38	2	土坑39	かわらけ	(8.0)	6.2	2.0	スス付着
16	39	2	土坑71	かわらけ	9.0	6.9	1.5	
16	40	2	土坑87	かわらけ	7.4	5.6	1.35	
16	41	2	土坑89	青白磁小瓶	-	4.4	-	
16	42	2	土坑89下層	かわらけ	7.4	5.3	1.3	
16	43	2	土坑89下層	かわらけ	7.2	5.6	1.2	
16	44	2	土坑89下層	かわらけ	7.4	5.4	1.3	
16	45	2	土坑89下層	かわらけ	7.7	6.5	1.7	
16	46	2	土坑89下層	かわらけ	7.6	5.0	1.7	
17	48	2	2面	かわらけ	(7.7)	5.9	1.7	
17	49	2	2面	かわらけ	8.3	7.5	1.9	手づくね
17	50	2	土坑89下層	かわらけ	7.6	5.7	1.5	
17	51	2	2面	かわらけ	7.5	5.8	1.4	スス付着
17	52	2	土坑89下層	かわらけ	(9.0)	(7.0)	1.6	
17	53	2	2面	かわらけ	12.4	-	3.2	手づくね、スス付着

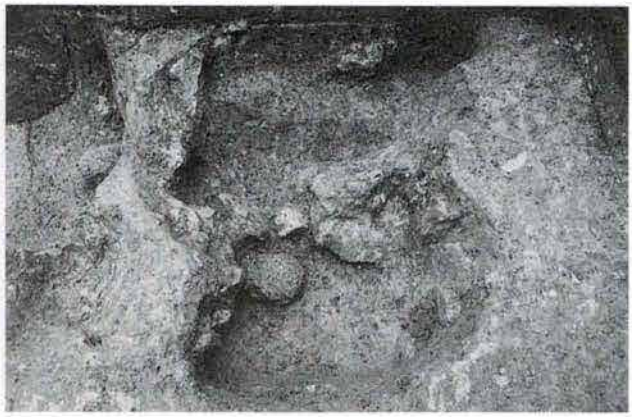
遺構No.	遺構名	面	長径×短径×深さ（cm）			海抜	平面形態	備　考
1	柱穴	1上	35	28	61	16.43	楕円形	
3	溝状	1上	(65)	(35)	11	16.25	長方形	
5	ピット	1上	3.0	28	10	16.30	円形	
6	土坑	1上	55	(40)	11	16.26	楕円形	
7	土坑	1上	(48)	36	4	16.43	楕円形	
9	ピット	1	20	20	14	16.20	円形	
10	ピット	1	30	23	9.0	16.24	楕円形	
11	土坑	1上	(57)	(43)	20	16.33	楕円形	
12	土坑	1上	(65)	(30)	12	16.38	楕円形	7より古
13	土坑	1上	42	32	13	16.23	楕円形	2.20より古
14	かわらけ溜まり	1上	87	(50)	30	15.84	楕円形	
15	溝状	1上	56	25～45	11	16.30	長方形	
16	ピット	1上	120	(8)	9	16.30	円形	
18	土坑	1上	(55)	(38)	9	16.27	不明	3より古
20	ピット	1上	30	25	18	16.00	楕円形	13.22.27より新
21	土坑	1上	(30)	40	16	16.00	楕円形	
22	土坑	1	30	18	8	16.08	楕円形	20より古
24	ピット	1上	30	23	23	16.04	楕円形	
25	土坑	1上	(103)	85	24	16.06	楕円形	13より古
27	土坑	1上	(40)	(34)	10	16.06	円形	13·22より古
29	土坑	2	47	(33)	22	15.98	楕円形	
30	ピット	2	(35)	(18)	11	16.00	楕円形	
31	柱穴	2	38	38	13.5	16.04	円形	柱痕あり
32	柱穴	2	35	32	15.5	16.00	円形	
33	柱穴	2	27	20	11.5	16.04	楕円形	
34	ピット	2	37	35	16	15.90	円形	
35	ピット	2	25	(23)	15	15.98	円形	36·39より古
36	ピット	2	25	23	10	16.05	円形	35·39より古
37	ピット	2	30	(23)	12	16.09	円形	
38	ピット	2	28	28	14	16.08	円形	39·68より新
39	土坑	2	48	40	20	16.11	楕円形	礎板あり
40	柱穴	2	34	25	20	16.03	楕円形	39·68より新
41	柱穴	2	32	28	17.5	16.05	楕円形	礎板あり、74より新
42	ピット	2	48	28	29	16.05	楕円形	43·72より新
43	ピット	2	40	(35)	13	16.12	ほぼ円形	42より古、72より新
44	土坑	2	100	(50)	37	16.01	ほぼ円形	71·79より新
45	ピット	2	17	(15)	33	16.05	隅丸方形	
46	土坑	2	(78)	(60)	5	16.20	楕円形	48·98より新、11より古
47	ピット	2	50	35	18	16.12	楕円形	75より新
48	ピット	2	(20)	30	21	16.12	不明	75より新、47より古
49	ピット	2	20	17	23.5	16.06	円形	
51	ピット	2	40	40	26	15.59	円形	
52	ピット	2	12	14	2	16.10	隅丸方形	
53	ピット	2	35	23	7	16.20	楕円形	63·66より新
54	ピット	2	28	25	20	16.02	ほぼ円形	
55	土坑	2	(110)	70～95	10.5	16.11	長方形	80より新、64より古
56	ピット	2	45	(35)	13	16.02	楕円形	
57	ピット	2	30	28	7	16.21	ほぼ円形	75より新
58	土坑	2	(72)	(18)	16	16.08	楕円形	74より新、46より古

59	ピット	2	20	20	4	16.14	円形	
60	ピット	2	(30)	25	10	16.17	円形	59·73より古
61	ピット	2	(27)	(13)	13	16.14	不明	
62	ピット	2	(30)	27	10	16.17	楕円形	75より新、57より古
64	柱穴	2	65	50	27	16.00	楕円形	礎石あり、55·80より新
65	ピット	2	(40)	(18)	35	15.96	不明	89より新
66	ピット	2	30	26	21	16·09	円形	
67	ピット	2	40	35	27	16.03	楕円形	34より古
70	ピット	2	42	40	11	16.16	ほぼ円形	75より新、57より古
71	土坑	2	50	35	32	15.98	楕円形	4·79より古
73	ピット	2	(25)	(15)	23	16.05	不明	60より新、51より古
75	土坑	2	(142)	120	21	16.09	長方形	47·48·57·70より古
76	ピット	2	35	35	30	16.02	円形	75より新
80	ピット	2	(35)	32	21	16.09	円形	64より古
81	ピット	2	20	(15)	23	16·10	円形	55·75より新
82	ピット	2	(15)	(15)	19	16.15	不明	75·76より新
84	ピット	2	25	(20)	18	16·16	円形	
85	ピット	2	46	35	21	16·09	楕円形	
87	土坑	2	(50)	60	27	16.00	楕円形	
89	井戸	2	138	(80)	-	-	円形	
92	ピット	1	(25)	(25)	9	16.32	不明	
93	ピット	1	27	20	9	16.30	楕円形	
94	ピット	1	(40)	(33)	8	16.33	楕円形	
95	土坑	1	(58)	55	25	16.02	楕円形	
96	ピット	1	(25)	(20)	13	16.26	楕円形	
97	ピット	1	32	30	17.7	16.23	ほぼ円形	
98	土坑	1	(50)	(40)	16	16.07	隅丸方形	
99	溝	1上	(24.5)	58	7	16.19		
100	ピット	1	(28)	(21)	7	16.22	楕円形	
101	ピット	1	(35)	32	16	16.13	楕円形	
102	土坑	1上	70	55	18	-	楕円形	
104	土坑	1上	65	(64)	9	16.31	円形	
106	ピット	1上	30	27	15	16.30	楕円形	
107	土坑	1上	(80)	(60)	39	16.04	楕円形	
108	ピット	1上	(25)	(20)	8	16.31	不明	
109	土坑	1上	55	(32)	20	16.24	楕円形	
110	ピット	1上	20	20	15	16.14	円形	
111	ピット	1上	(26)	(6)	-	-	不明	
112	ピット	1	(40)	37	8	16.19	楕円形	101より古
114	土坑	1	54	34	4	16.20	楕円形	
115	ピット	1	32	30	8	16.18	ほぼ円形	
117	土坑	1	(85)	95	20	16.10	楕円形	
119	ピット	1	25	(23)	46	15.85	円形	
120	ピット	1	(28)	25	51	15.80	楕円形	
121	ピット	1	25	25	47.5	15.83	円形	
122	ピット	1	37	36	30	16.02	円形	
123	柱穴	1	48	47	20.5	16.10	円形	礎石・柱痕あり
126	土坑	1	(80)	(40)	32.5	15.98	楕円形	鎌倉石あり
127	溝状	1	(125)	60	16	16.14	長方形	
128	土坑	1	(92)	(60)	36	16.08	楕円形	
129	土坑	1	(105)	(40)	32.5	15.97	楕円形	
130	溝状	1	260	52	23	16.02	楕円形	

131	土坑	1	46	40	20.5	16.06	長方形	鎌倉石敷きつめ
132	ピット	1	(25)	25	24	16.04	円形	
133	ピット	1	20	15	34.5	15.96	楕円形	
134	溝状	1	150	25	4	16.30	不整形	
136	土坑	1	50	35	26	15.91	楕円形	
137	ピット	1	(25)	(15)	10	16.19	不明	127より古
138	柱穴	1	25	24	39	15.91	円形	柱痕あり
139	ピット	1	30	30	10	16.03	円形	140より新
140	ピット	1	23	(20)	26.5	15.92	円形	
141	溝状	1	(110)	(13)	10	16.13	長方形	
142	土坑	1	(45)	(45)	17.5	16.07	不明	143より新、141より古
143	土坑	1	(40)	(38)	22	16.02	不明	141·142より古
144	ピット	1	(20)	20	21.5	16.02	ほぼ円形	143より古
145	ピット	1	35	(18)	14	16.05	不明	
146	ピット	1	28	(22)	20	16.10	円形	
147	ピット	1	36	32	23	16.04	ほぼ円形	
148	ピット	1	27	20	20	16.10	楕円形	
149	土坑	1	(45)	(20)	4	16.20	不明	
150	ピット	2	28	28	9	15.96	円形	土丹あり
151	ピット	2	33	27	18	15.85	ほぼ円形	
152	ピット	2	38	35	21.5	15.86	ほぼ円形	
153	ピット	2	30	30	28.5	15.80	円形	
154	ピット	2	45	35	40	15.82	楕円形	
155	ピット	2	18	18	5	16.55	円形	
156	ピット	2	45	35	13.5	16.01	楕円形	
157	土坑	2	(110)	(40)	3	16.15	楕円形	122·123·126·176より新
158	ピット	2	30	23	22	15.94	楕円形	
159	土坑	2	(45)	50	23	15.98	楕円形	土丹敷き
160	土坑	2	(95)	(30)	19.5	16.03	楕円形	123·131より古
161	ピット	2	37	30	10	16.00	楕円形	
162	ピット	2	(23)	28	17	15.93	ほぼ円形	
163	ピット	2	(23)	25	12	15.97	ほぼ円形	
164	ピット	2	38	23	10	15.89	楕円形	鎌倉石あり
166	ピット	2	40	30	19	15.86	楕円形	
167	ピット	2	(25)	25	12	16.00	楕円形	
169	ピット	2	26	26	17	15.96	円形	
170	ピット	2	(26)	33	27	15.87	円形	136より古
171	ピット	2	40	(20)	27	15.89	楕円形	136より古
172	ピット	2	38	32	19	15.98	ほぼ円形	173より新
173	土坑	2	(73)	(58)	8	16.09	長方形	172より古
174	ピット	2	20	20	10	15.89	円形	
175	ピット	2	30	25	23	15.98	楕円形	
176	土坑	2	(40)	(20)	10	16.11	楕円形	123·125より古
177	ピット	2	(23)	25	18.5	16.00	楕円形	礎板あり、158より古
178	土坑	2	(43)	40	26	15.92	長方形	
179	柱穴	2	(43)	50	36	15.83	円形	礎板あり
180	ピット	2	40	25	10	16.05	楕円形	
181	土坑	2	(32)	(30)	14	15.98	楕円形	179より古



1．1面上　　遺構90　東から

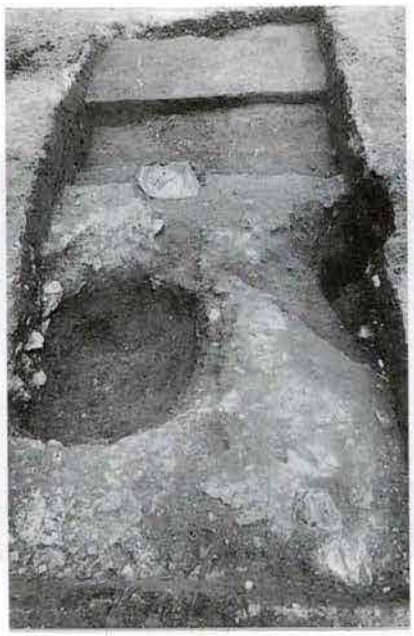


2．1面上遺構102・109　南から

3．1面上遺構104・107　南から

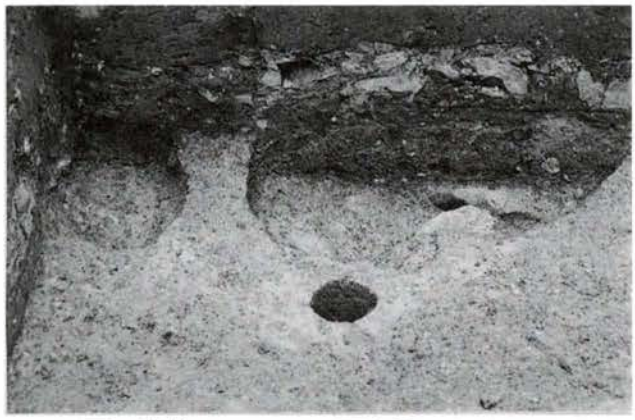
4．1面上　全景　南から

5．1面上　遺構127かわらけ出土状況　西から



6．1面上　全景　東から

図版 2



1．1面　遺構1・7・12　西から

2．1面　遺構14遺物出土状況　西から

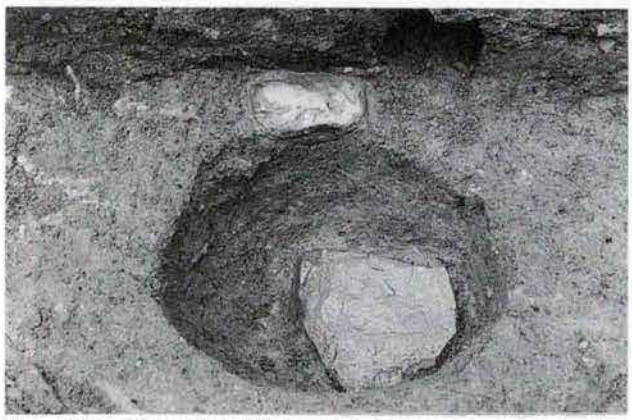
3．1面　遺構24・27ピット群　北から

4．1面　遺構14かわらけアップ・東から

5．1面　遺構25　東から

6．1面　遺構15（溝上層）北から

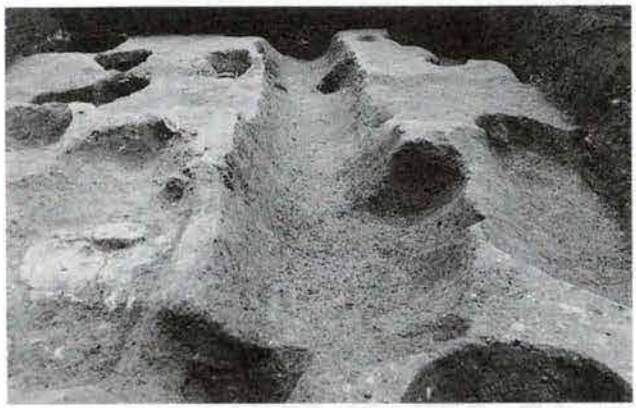
1．1面　全景　西から



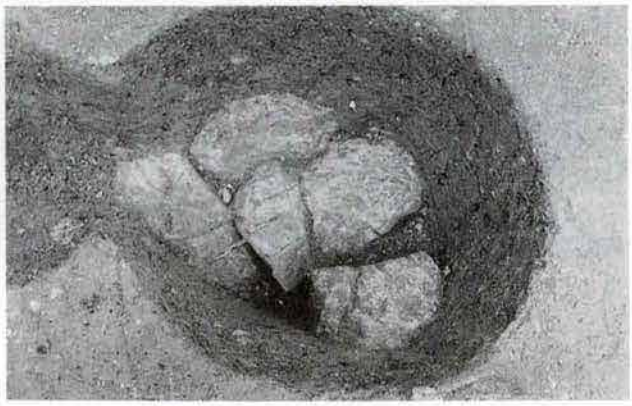
2．1面　礎石出土状況　北から

3．1面　遺構127検出状況　東から

4．1面　遺構27　東から



5．1面　遺構130　東から



6．1面　遺構131土丹出土状況　北から

図版 4

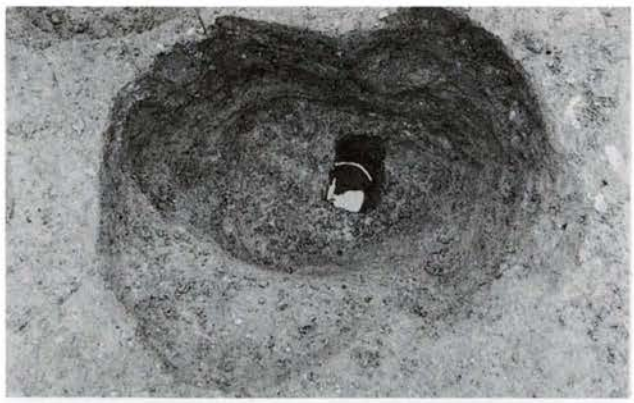
1．1面　遺構138　東から

2．1面　全景　西から

3．2面　遺構31　東から

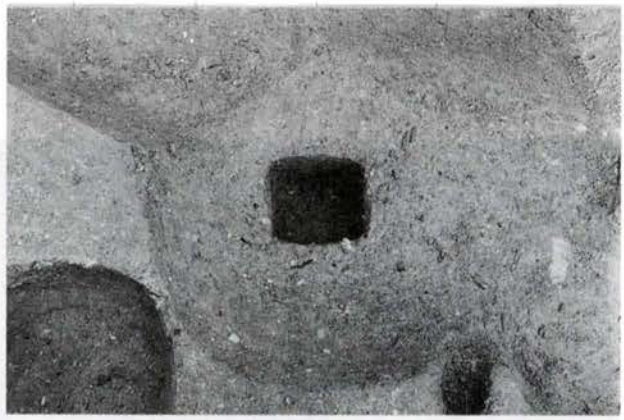
4．2面　遺構33a・b　南東から

5．2面　遺構44　東から

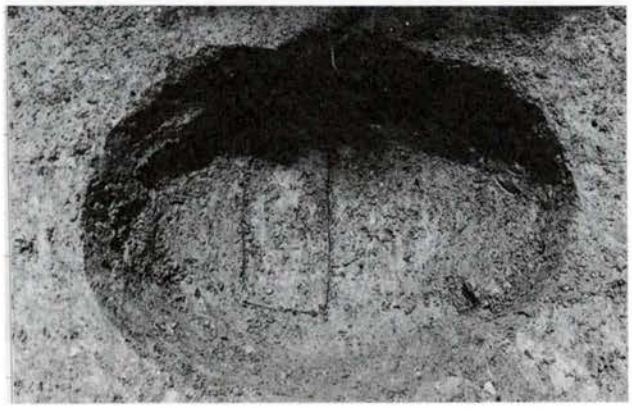


6．2面　遺構42・43　東から

1．　2面　遺構52　南から



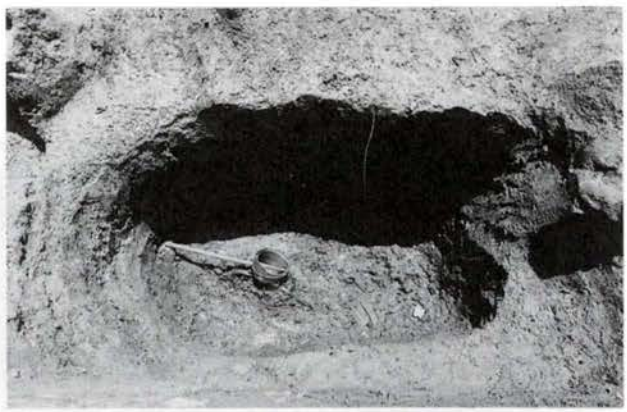
2．　2面　遺構56柱痕　東から



3．　2面　遺構64礎板　西から

4．　2面　遺構89　北から

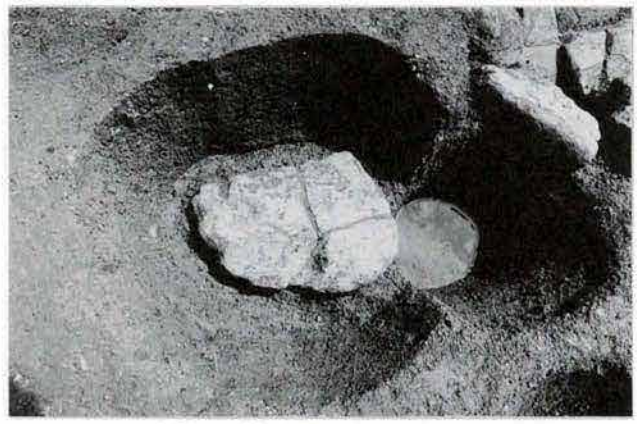
5．　2面　全景　西から



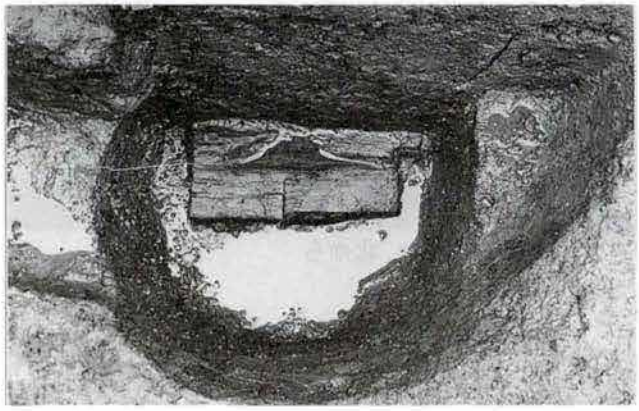
6．　2面　遺構89　柄杓出土状況　北から

図版 6

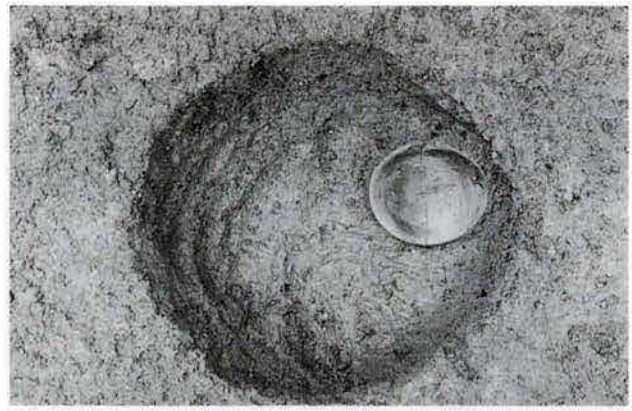
1．　2面　遺構131　北から



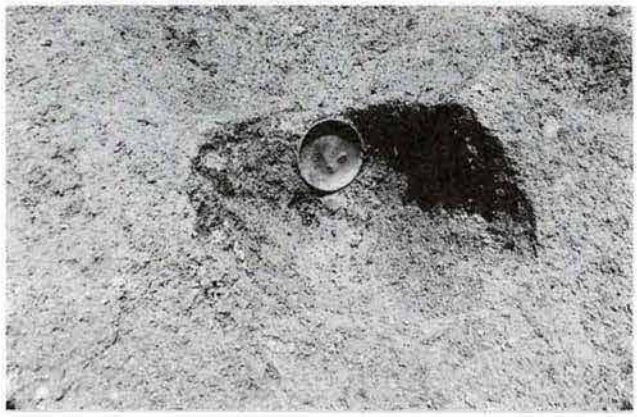
2．　2面　遺構159検出状況　北から



3．　2面　遺構179検出状況　北から



4．　2面　遺構159かわらけ出土状況　北から



5．　2面　遺構169かわらけ出土状況　北から

6．　2面　全景

▼ 溝 99

図6-1

図6-2

▼ 土坑 104

図6-3

▼ 土坑 107

図6-4

図6-5

▼ 土坑 109

図6-6

▼ 1 面 上

図7-7

図7-8

図7-9

図7-10

図7-11

図7-12

図7-13

▼かわらけ溜り 14

図11-14

図11-16

図11-15

図11-18

図11-20

図11-21

図11-22

図11-23

図11-24

図11-25

▼土坑2

図11-27

▼ピット108

図11-28

▼ピット114

図11-29

▼溝状127

図11-31

▼溝状134

図11-32

図版 8

▼土坑128

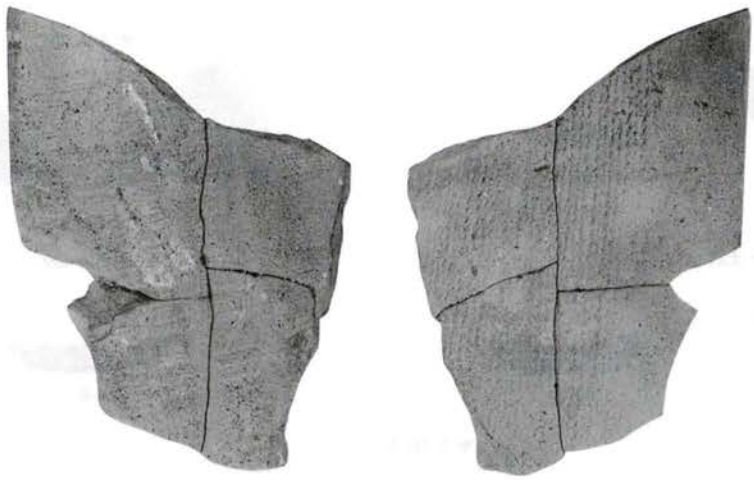


図12-34

図12-33

▼1 面

図13-35

図13-36

▼ 土坑 18

図16-37

▼土坑 39

図16-38

▼土坑 71

図16-39

▼土坑 87

図16-40

▼ 井戸89 下層

図16-41

図16-42

図16-44

図16-45

図16-46

▼2 面

図17-53

図17-49

図17-50

図17-51

図17-52

若宮大路周辺遺跡群（No.242）

由比ガ浜一丁目127番1地点

例　言

1. 本報は、若宮大路周辺遺跡群（No. 242）内に所在する鎌倉市由比ガ浜一丁目127番1地点における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、平成15年7月15日～同年8月6日にかけて、鎌倉市教育委員会が30㎡を対象面積として実施した。
3. 現地での調査体制は、以下の通りである。
   担　当　者　：鈴木啓介
   調　査　員　：田代郁夫, 浜野浩美, 伊丹まどか
   調査補助員　：岩崎卓治, 町井俊逸, 八重畑ちか子
   調査作業員　：安斉三男・佐藤美隆・浅香文保・川島仁司・牛嶋道夫・大戸迫猛（以上、社団法人鎌倉市シルバー人材センター）
4. 遺構図面合成・トレース、遺物実測・トレース、出土遺物写真撮影、版下作成、本文執筆の調査結果整理作業および報告文作成は、以下の人員で行った（現地での遺構写真撮影は伊丹まどかが行った）。
   主　任　：宗基秀明
   調査員　：宗基富貴子, 小泉衣理
5. 本文中に掲げた挿図は、基本的に遺構全測図を1/120、個別遺構図を1/60、出土遺物を1/3で示した。これ以外の縮尺を含めて、各挿図には縮尺率を示した。
7. ここに掲げた挿図、写真を含む発掘調査に関わる出土品等資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

本文目次

第１章　遺跡の位置 ……288
　第１節　遺跡の歴史地理的環境 ……288
　第２節　測量基準点の設置 ……291
　第３節　堆積土層と発見された遺構・生活面 ……291
第２章　発見された遺構と遺物 ……293
　第１節　第３面 ……293
　第２節　第２面 ……296
　第３節　第１面 ……301
第３章　まとめ ……305

挿図目次

1. 調査地点位置図 ……289
2. 調査区設定図 ……290
3. 第3面全測図 ……292
4. 竪穴住居跡 ……294
5. 竪穴住居跡１出土遺物 ……295
6. 中世面全測図 ……296
7. 方形竪穴建物２ ……296
8. 方形竪穴建物２裏込め出土遺物 ……297
9. 方形竪穴建物２出土遺物 ……297
10. 方形竪穴建物１ ……298
11. 方形竪穴建物１裏込め出土遺物 ……299
12. 方形竪穴建物１裏込め（旧土壙１）出土遺物 …299
13. 方形竪穴建物１出土遺物 ……299
14. 方形竪穴建物３ ……300
15. 方形竪穴建物３出土遺物 ……301
16. 第１面上出土遺物 ……302

表目次

1　遺物観察表（1）～（2） ……303,304

写真図版目次

1. a. 竪穴住居跡1　b. 同左土師器出土状況　c. 中世面全景　d. 方形竪穴建物2　e. 方形竪穴建物1　f. 方形竪穴建物3
g. 同左近景 ……306
2. 出土遺物（1）　土師器　かわらけ　白かわらけ　瓦　火鉢　土鍋 ……307
3. 出土遺物（2）　常滑　片口鉢　尾張型山茶碗　すり常滑 ……308
4. 出土遺物（3）　瀬戸　舶載磁器　骨製笄　砥石　硯 ……309

第1章　遺跡の位置

第1節　遺跡の歴史地理的環境

若宮大路周辺遺跡群は、鎌倉の若宮大路下馬以北の今小路と小町小路に挟まれた一帯を指す（神奈川県遺跡台帳番号　No. 242）。調査地点は、この遺跡群の南西隅、かつての大町大路と今小路の接する交差点の北東に位置する。交差点の北東角に現在は六地蔵が安置され、調査地点界隈を地元では六地蔵と称している。

『鎌倉市史』がかつての東海道であった可能性を示唆する大町大路周辺の発掘調査成果によれば、海浜砂丘列が下馬以西の大町大路付近を東西に広がっていたようである。古東海道もこの砂丘に沿って設定されたのかもしれない。ただし、調査地点周辺の砂丘または砂堆は、東西方向だけでなく南北にも広がっていた。

これまでの多くの発掘調査成果から調査地点の南西、若宮大路と大町大路が交わる下馬交差点の南東を流れる滑川に、西北西から流れ下る佐助川が大町大路を越えて流れ込む。さらに、北西から流れ下る扇ヶ谷川が、調査地点の南東で佐助川に合流して滑川に流れ込んでいたと思われる。このように調査地点一帯の若宮大路周辺遺跡群地域には、西北西または北西から流れる河川が砂丘に沿って延びる大町大路を横切っていた。この佐助川と扇ヶ谷川の沿岸にそって砂堆が大町大路の北側へと広がり、砂堆の北端は現在の御成小学校に発見された今小路西遺跡（御成小学校地点）の東端にまで延びている。この大町大路の北に延びる砂堆地域に調査地点は位置する。すなわち、調査地点は古東海道に隣接するうえ、北方へと延びる河岸微高地の砂堆上に立地していたことになる。

砂堆地域は、調査地点の位置する佐助川と扇ヶ谷川の河岸微高地の他に、大町大路南側に鎌倉湾に面した由比ヵ浜にかけて広がる。大町大路南方の砂堆は、滑川河口の西方に広がる海岸砂丘で少なくとも東西方向に延びる三列がある。この砂丘列と、佐助川および扇ヶ谷川の河岸砂堆は、大町大路と若宮大路の交差点、現在の下馬交差点付近にて接する。調査地点は、現在の文化財行政上では若宮大路の東方に広がる地域として若宮大路周辺遺跡群とされるが、調査地点は海浜砂丘帯から今小路西遺跡にかけての一連の砂堆地勢に位置するとしてよい。

調査地点周辺では、これまでに多くの地点で発掘調査が行われている。まず、砂堆の北端に発見された今小路西遺跡・御成小学校地点では、南北に延びる丘陵の山裾に東方の砂堆地域を見下ろすように奈良時代から平安時代前期ごろまでの相模国鎌倉郡の役所、鎌倉郡衙跡が発見されている。古東海道に近接する地点に当時の行政機関が位置していたことになる。そして中世面からは、八戸主を越える広さを持つ高級武家屋敷が2区画とその前面に広がる町家が発見された。町家は武家屋敷の東方に位置し、おそらくは現在の今小路に面するように展開していたと考えてよいだろう。街路に面して広がる町家とその奥に屋敷地が営まれる中世都市鎌倉の町並みの一端がよく示されている。また、調査地点と同じ若宮大路周辺遺跡群内の下馬交差点から100mほど北方の若宮大路の西側に面した鎌倉駅西口第２自転車駐車場地点（地点1）では、御家人が鎌倉出向時に寄宿した宿館が発見されている。このように調査地点の北側では屋敷地、町屋、宿館などの中世鎌倉の御家人や都市住民の生活を窺い知ることのできる調査成果が積み重ねられている。

中世鎌倉の様子を記した『吾妻鏡』に次の記事が見える。仁治二年十一月廿九日の条「未の尅、若宮大路の下馬橋の邊騒動す。これ三浦の一族と小山の輩と喧嘩あり。両方の縁者馳せ集りて群を成すが故なり。前武州はなはだ驚かしめたまふ。（中略）事の起りは、若狭前司泰村・能登守光村・四郎式部大

夫家村以下の兄弟親類、下馬橋西頬の好色の家において、酒宴乱舞の曾あり。結城大蔵権少輔朝廣・小山五郎左衛門尉長村・長沼左衛門尉時宗以下の一門、同じき東頬において、またこの興遊を催す。時に上野十郎 (結城)朝村かの座を起ち、遠笠懸のために由比の浦に向ふのところ、まづ追出し犬を射る。その箭誤りて三浦が會所の簾中に入る。朝村、雑色男をしてこの箭を乞はしむ。家村出し與ふべからざるの由主張し、これによつて過言に及ぶと云々。件の両家その好ありて、日来互ひに異心なし。今日の

図1 調査地点位置図

確執、天魔その性に入るかと云々」。佐助川もしくは扇ヶ谷川が若宮大路の「下馬」を横切る地点に橋が架けられて「下馬橋」と称せられていたのであろう。若宮大路と大町大路が交わる現在の下馬交差点付近である。そして、このあたりに「好色の家」が東西両側に軒を連ねていたことを『吾妻鏡』は示している。先の宿館のすぐ近くである点は、おもしろい。

他方、調査地点の南方に隣接する砂丘地域の調査では、次のような成果が得られている。大町大路から南方の砂丘帯は、行政上、長谷小路周辺遺跡と由比ガ浜中世集団墓地遺跡と設定されている。長谷小路周辺遺跡は、大町大路の六地蔵より西方域の長谷小路一帯を示している。由比ガ浜中世集団墓地は、昭和28年に発掘され、中世から近世の多くの遺骸を発見した東京大学人類学部の調査を契機として設定された由比ガ浜地域を指している。ともに砂丘地帯に立地する両遺跡の調査では、総じて同様の遺構群が発見されている。それは、「方形竪穴建物」と呼称されることのある半地下式の倉庫群が多数発見されることである。柱でなく壁で建物を支える構造の当該建物は、耐用年数が比較的短く建て替えが頻繁であったために、多数の建物跡が発掘で発見される。そしてそれらは緩やかな地割規制と敷地割りを踏襲して幾棟もが建ち並んでいた。由比ガ浜中世集団墓地遺跡内の由比ガ浜二丁目1034番1外地点（地点2）では、若宮大路の東に面して多くの半地下式倉庫が建ち並び、その裏側、東方には滑川の河岸に荷揚げ地も発見されている。鎌倉に舟で運ばれてきた搬入物が荷揚げされ、倉庫に納められた様子が窺わ

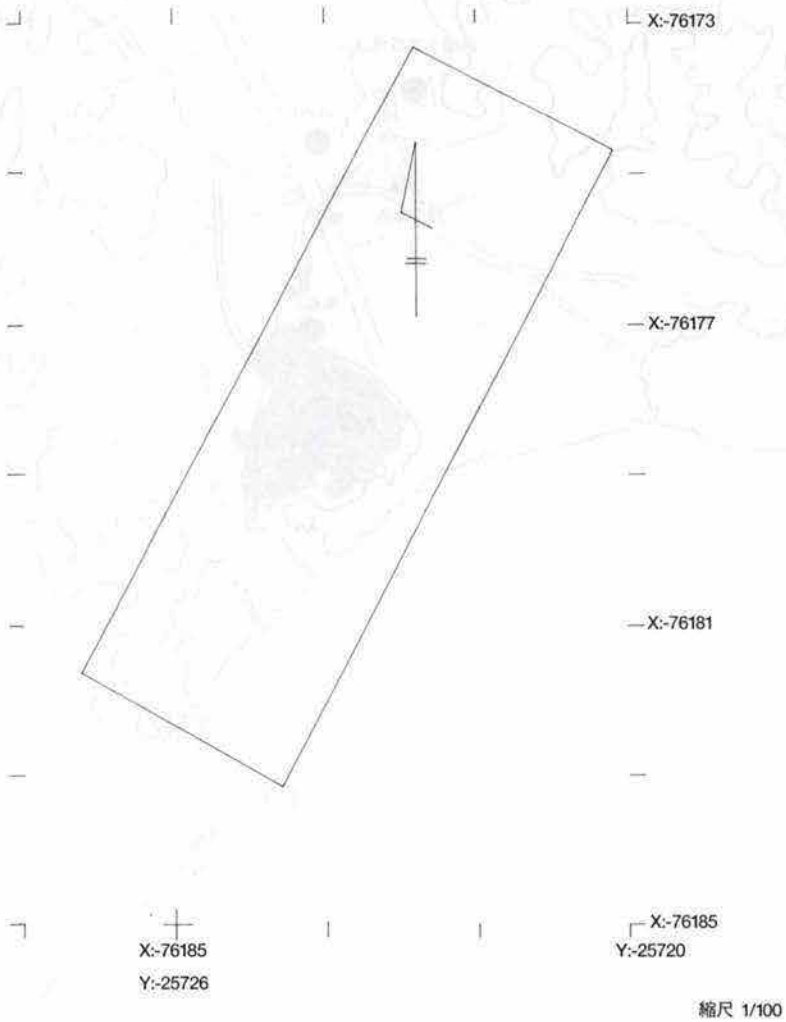


図2　調査区設定図

れる。この方形竪穴建物の多くは13世紀中ごろから営まれており、それ以前には掘立柱の建物が建てられる屋敷が存在したことも由比ガ浜4—6—9地点で確認されている。砂丘地帯は当初から倉庫ばかりが建ち並ぶ地域ではなかった。

また、砂丘地帯では由比ガ浜中世集団墓地の遺跡名に違わず、埋葬骨もしばしば発見される。埋葬骨には土壙を伴うものもあれば、体幹骨が遊離したもの、または遊離骨が集積された例もあって、当該地域をいわゆる葬送地としての認識を当時の人々が有していたことは確かである。しかし、墓地として一般生活から分離された地域ではなく、方形竪穴建物の建ち並ぶ間の空閑地に埋葬または打ち捨てられてもいたようである。方形竪穴建物の中には収納機能よりも工芸作業場として用いられた例も認められる。その工芸で利用された材料にウシ、ウマ、シカなどの獣骨が利用される場合が多く、動物の死骸と関わる作業が中心となって、ヒトの葬送とレヴェルは異なるものの「死」と結びついていた。

これまでの発掘調査事例の概要のみを記したが、今回の調査地点は砂堆地域に位置しながら、大町大路南方の方形竪穴建物の並び立つ地域と町屋および屋敷地が展開する市街地域との中間地に位置していたことが窺われる。

木村美代治　1993『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書－鎌倉駅西口第2自転車駐車場及び（仮称）鎌倉市在宅福祉サービスセンター建設に伴う発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団編集、鎌倉市教育委員会刊行

原　廣志他　1993「由比ガ浜中世集団墓地遺跡（由比ガ浜二丁目1034番1外地点）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9　平成4年度発掘調査報告』（第1分冊）

斉木秀雄他　1994『由比ガ浜4—6—9地点発掘調査報告書－大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団.

河野眞知郎他　1990『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』今小路西遺跡発掘調査団編、鎌倉市教育委員会刊行.

第2節　測量基準点の設置（図2）

発掘調査で発見された遺構を国土座標に位置づけるため、測量基準点を調査地点内に移動させ、それを用いて発見された遺構や調査範囲を随時記録した。調査地点に設けた基準点は、調査区外南方2mに打ち込んだ杭の上に設けた。設置した基準点の国土座標値は、次のとおりである。X＝－76185.0 Y＝－25726.0

第3節　堆積土層と発見された遺構・生活面（図3）

挿図3に今回の発掘調査で発見された最下層遺構面の遺構と、調査区四周の壁面に認められた土層堆積を示した。設定した調査区は、建物建築予定範囲と発掘調査にて発生する掘り上げ土の置き場を勘案して、南北9.5m、東西3.2mの矩形とした。調査区現地表海抜高は、8.6mを測り、南方にある砂丘の最高海抜高より2m程低い。

調査区設定後に現代の表土を取り除く作業を開始したが、思いの外、表土は厚く、浅いところで70㎝、深いところでは2mに及ぶ現地表土が堆積していた。表土堆積層の高低は、既設建物基礎の他に埋設管設置に起因する。

現地表土を取り除いたところ、中世に帰属する遺構の覆土がすぐさま現れ、またそれが調査区内のほぼ全域にわたって確認できた。既設建物建築の際に、中世以降の堆積土を全て掘り上げていたことになる。さらに、調査区四周の壁面での土層観察の結果、現地表土の一部は中世遺構の掘り込まれた中世生活面までをも掘り上げていたことを確認できた。このように本調査地区内の遺構遺存状況は良好とは言

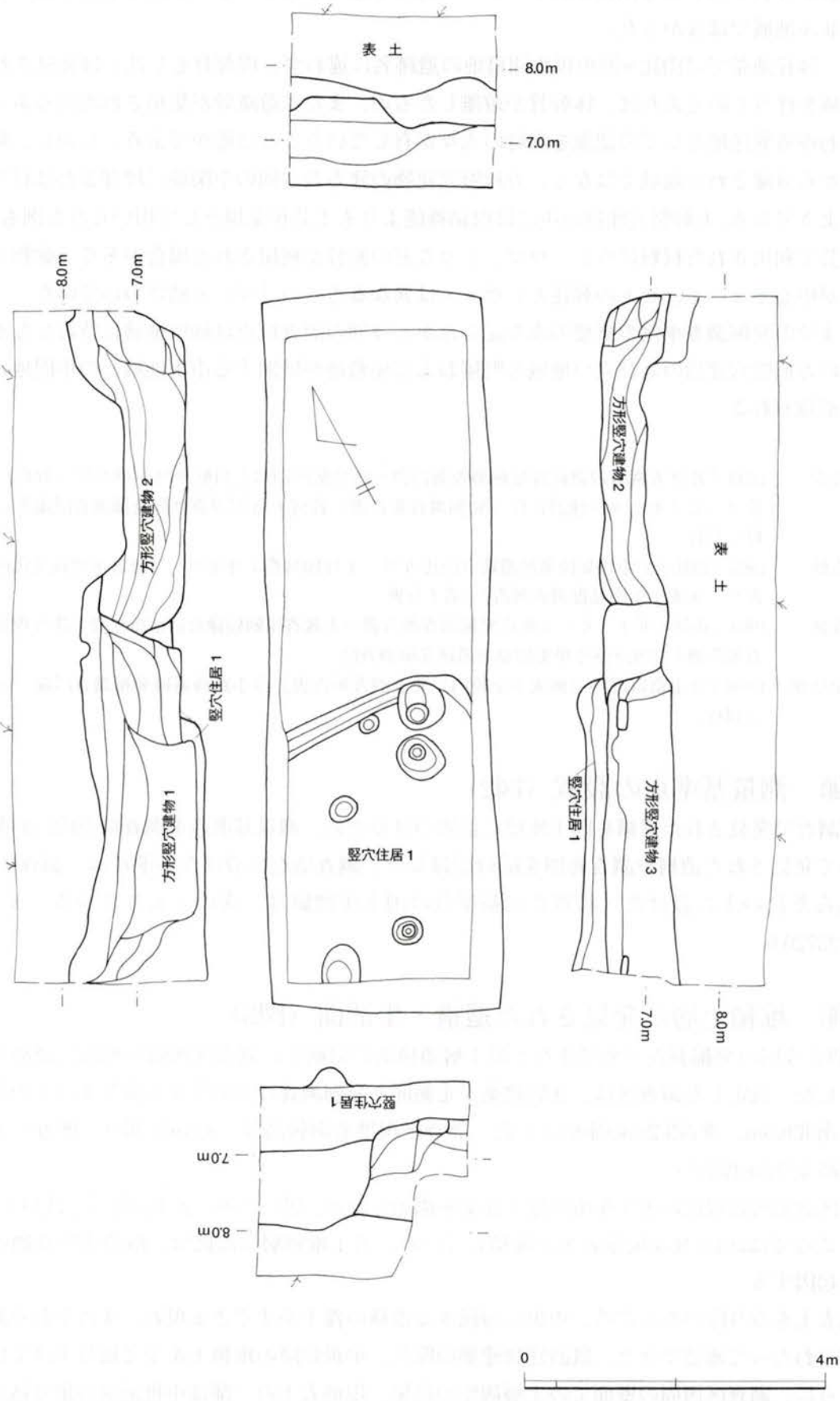

表土
8.0m
7.0m
方形竪穴建物2
方形竪穴建物1
竪穴住居1
竪穴住居1
方形竪穴建物2
方形竪穴建物3
竪穴住居1
表土
8.0m
7.0m
竪穴住居1
8.0m
7.0m
0
4m

図3　第3面全測図

えず、発見遺構の掘り込み面とその覆土確認は困難であった。そのため、現地での遺構認識を調査後の整理作業にて訂正せざるを得なかったことを明記しておく。なお、整理作業にて変更した遺構解釈と発掘調査時遺構認識の相違については、各遺構説明の項にて記す。

表土掘り上げ後に発見された遺構は、中世期の「方形竪穴建物」3棟である（方形竪穴建物1～3）。これらは互いに切り合いながらの新旧関係をもつが、調査区内の西方に一部残されていた中世期遺物包含層の上面と下層から掘り込まれていたことを確認した。調査区内には、2時期の生活面が存在したことになる。ただし、遺物包含層の上面に現地表土が堆積していることから、遺物包含層の上面が本来の生活面ではなく、さらに上方にあった生活面はすでに既存建物基礎および埋設管設置時に失われていることを確認しておきたい。

発見された3棟の方形竪穴建物の覆土を掘り上げた後、遺構底面および壁面に中世以前に遡る遺構覆土を認めた。遺構覆土の発見状況から、掘り込まれた遺構は竪穴住居跡が2棟であった。

都合3枚の生活面が今回の調査区内に確認され、それらから中世の方形竪穴建物とそれ以前の竪穴住居跡を発見した。調査地点北方に位置する今小路西遺跡（御成小学校地点）に発見された古代の郡衙と中世市街地との両時期を通じた関係を想定できる。

第２章　発見された遺構と遺物

以下には、調査によって発見された遺構と遺物を下層より順次報告する。最下層に発見された竪穴住居跡の第3面から既存建物基礎下に確認できた2枚の中世面の都合3枚の生活面に発見された遺構と遺物を生活面ごとに説明していく。

第１節　第３面

中世に属する遺構を掘り上げた後に、その底面に竪穴住居跡を発見した。調査区内は、中世遺構の掘り上げによって、ほとんどの自然堆積層と竪穴住居跡の覆土を失っていた。ここに説明する竪穴住居跡がどの層位、もしくは高さから掘り込まれたのか判然としない。調査の進展に伴って、順次調査区壁面に観察できる堆積土層の積み重なり方、層序を確認しつつ作業を進めたが、竪穴住居跡の掘り込み位置を確認できなかった。ただし、堆積土層の差異より次の土層を竪穴住居跡の覆土と想定した。

挿図4の調査区西壁の堆積土層図中の第1～8層、および第9層が竪穴住居跡の覆土と思われる。第5層を除いて、いずれも黒みを帯びた茶褐色の砂質土で、中世に帰属する粉砕泥岩粒子を交える黄褐色土と異なる。これらの土層は、これまでの鎌倉市内低地の発掘調査で弥生時代から古代にかけての生活面や遺構覆土と認識されているものである。こうした土質の経験的理解のもと、第1～第9層が中世以前の遺構覆土であり、これらの土を覆土する竪穴住居跡2棟が掘り込まれていたと理解した。

竪穴住居跡１

第1～8層を覆土する住居跡である。調査区の南半分に発見され、大方の覆土が中世遺構の掘り上げによって失われているが、住居の北東隅と北辺の限界を確認した。住居の規模は調査区内に確認できないが、南北軸で4m以上が残こっている。覆土の堆積状況から、住居は海抜8.94mから掘り込まれ、底面までの深さ83㎝を測る。掘り込み底面上には、泥岩細粒と黄褐色砂を交える茶褐色粘質土が床土として貼られている。床面上からは、土器の破片と柱穴が発見された。北東隅に位置するｐ1は柱穴で、直径55から60㎝の不正円形の掘り方内に直径19㎝で深さ51㎝の柱痕が残っている。ｐ1は隣接するｐ2の掘り直

しであろう。

貼り床を剥がした竪穴住居跡掘り方底面からは、柱痕を残すｐ3と6のほかにｐ4・5・7のピットが発見された。ｐ3は深さ37㎝、ｐ6は深さ31㎝を残す。他のピットの深さは、ｐ4が6㎝、ｐ5が60㎝、ｐ7が37㎝を測る。住居規模が不明なために、これらピットの住居内位置を把握できず、それぞれのピットの役割を断定できない。

住居内覆土のうち、第5層はカマド壁体の崩れと思われる。

図5―1～2は竪穴住居址1のｐ1より出土した。1は7世紀末～8世紀第1四半期頃の長胴甕である。体部外面は縦方向のヘラケズリ、体部内面は横方向のヘラナデの後、指頭によるナデあげ、大きく広がる口縁部はヨコナデにより調整される。なお、調整痕は明瞭に残る。2は7世紀末～8世紀第1四半期

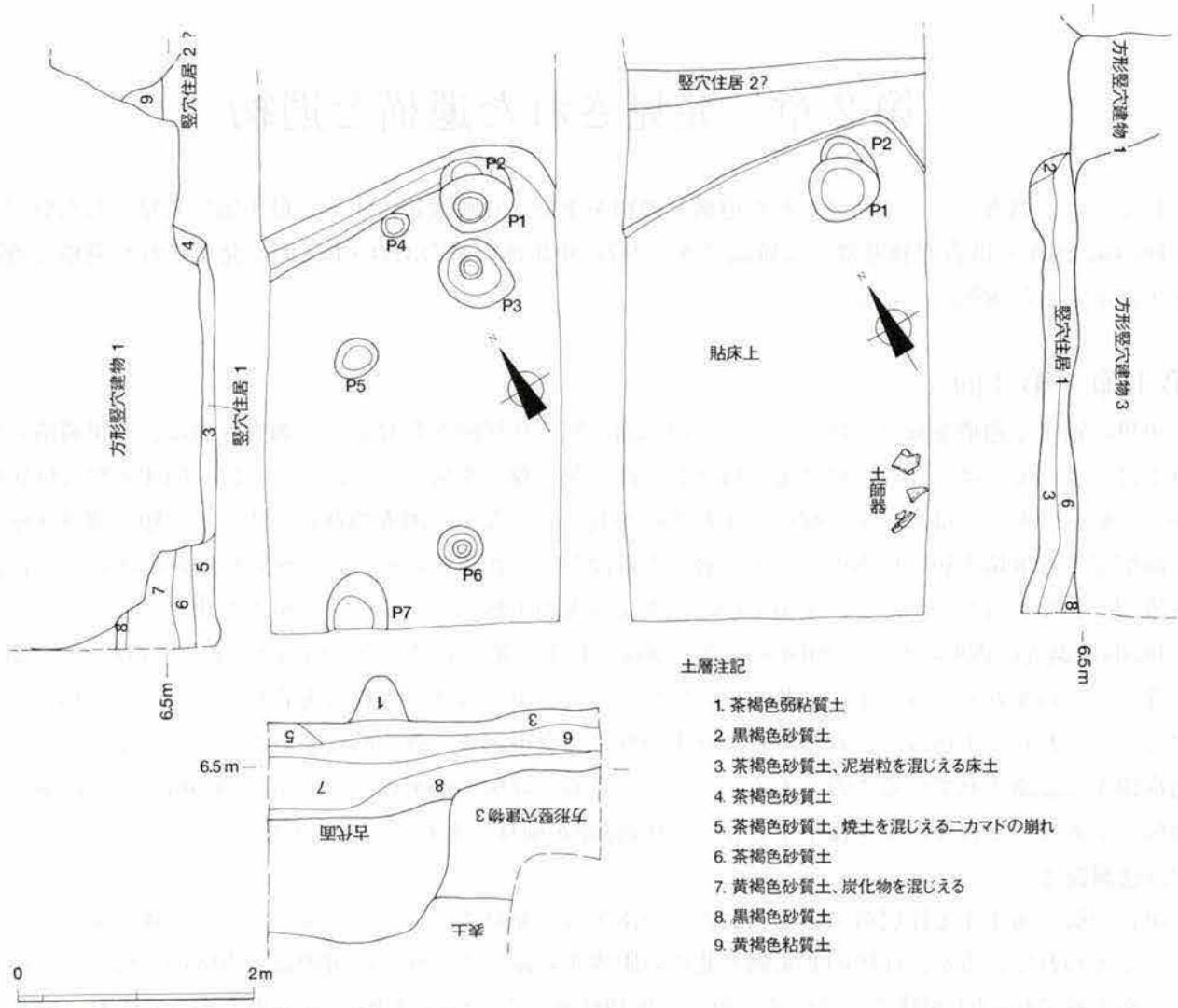


図4　竪穴住居跡

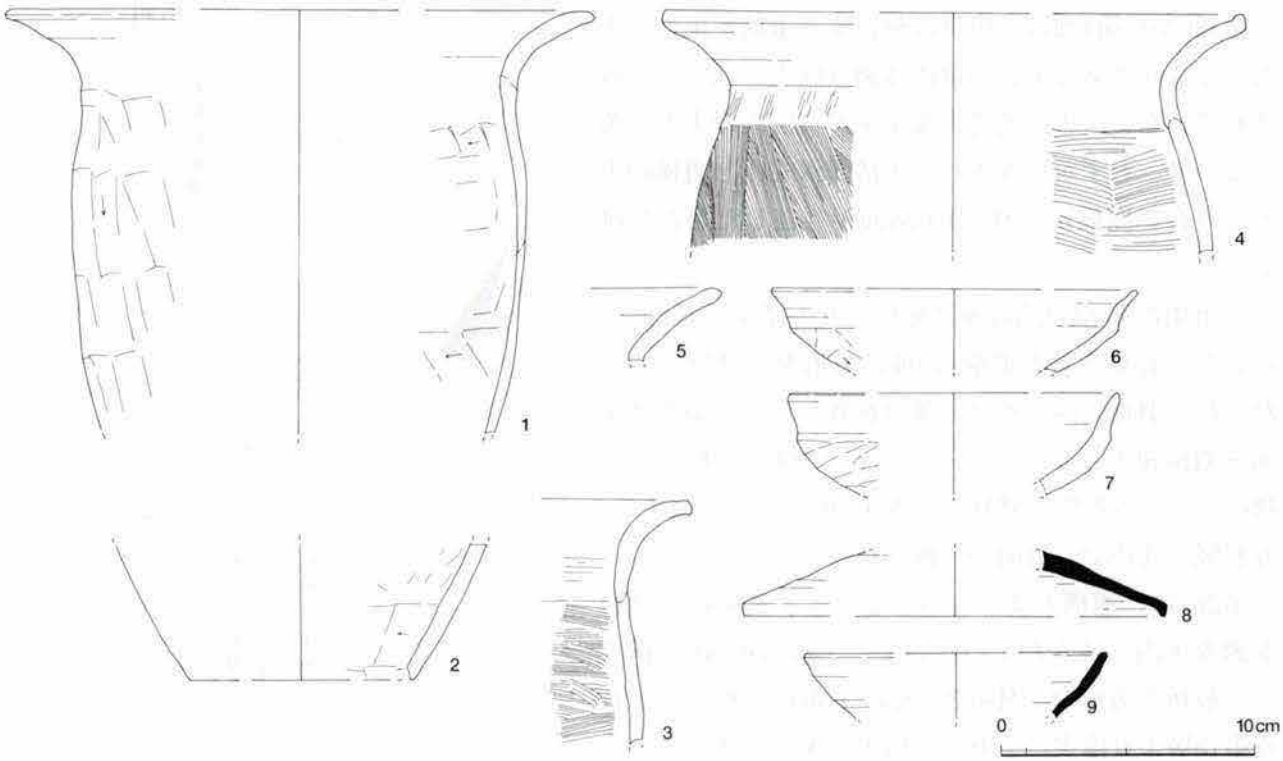


図5　第３面竪穴住居跡1出土遺物

頃の甑。体部外面に不明瞭な横方向のケズリ調整痕がわずかに残る。体部内面中位付近は指頭によるナデ、底部付近は横方向のヘラケズリにより調整される。3はｐ2より出土した７世紀末から８世紀第１四半期頃の長胴甕。体部外面上位より下方は縦方向のハケ、体部内面上位は横方向の粗いハケ、上位より下方は横方向のハケにより調整される。4はｐ3より出土した７世紀末から８世紀第１四半期頃の長胴甕。体部外面上位は縦方向の粗いハケ、上位より下方は縦方向のハケ、体部内面上位は粗いハケ、上位より下方は粗めの横方向のハケにより調整される。内外面ともに調整痕が明瞭に残る。5～9は竪穴住居址覆土中より出土した。5は７世紀末から８世紀第１四半期頃の長胴甕の口縁部片。6～7は８世紀前半までの土師坏である。いずれも体部外面中位付近から器壁を薄くしながら外方へ屈曲する。体部外面は縦あるいは横方向のヘラケズリにより調整されるが、6の調整痕は不明瞭である。

8は８世紀前半の須恵坏蓋、9は８世紀第１四半期の坏である。

竪穴住居跡２

中世遺構の掘り込みでほとんどが壊されて、幅25cmほどの床面が調査区の中央付近に東西に発見された。床面と認めた土層上面の海抜高は8.55mで、竪穴住居跡1の掘り込み位置からの高さが39cmしかない。竪穴住居跡の壁高としては浅すぎるきらいもあるが、中世以前の遺構覆土と思われる第9層の土質から何らかの中世以前の遺構と考えられる。さらに遺構底面が平坦で広域に及ぶことから竪穴住居跡とした。ただし、確証はない。

第２節　第２面

第2面から第1面は、中世に帰属する遺構が掘り込まれた生活面であるが、面自体は調査区内にほとんど残されていない。大型遺構の覆土が調査区内の大方を覆っていて、わずかに残された生活面構成土と遺構同土の切り合い関係から2枚の生活面が存在したことを確認した。

中世期の第2面と第1面に発見された遺構を挿図6に示した。発見された遺構は3棟の方形竪穴建物で、それぞれが調査区内にその一部分を残しつつ、調査区全面を遺構覆土としてしまっている。3棟の方形竪穴建物のうち、方形竪穴建物1と2が第2面から掘り込まれ、方形竪穴建物3が第1面から掘り込まれている。

第2面は、遺構の切り合いによって、実際の生活面が調査区内に残されていないが、上層の第1面を構成し、最新の方形竪穴建物3がその上面から掘り込まれる第15層より確実に下方の土層より掘り込まれている方形竪穴建物1・2の存在から第2面の存在を想定する。

方形竪穴建物２

調査区の北半分に発見された。南端を後述の方形竪穴建物1に壊され、北端と東西両方向が調査区外へと広がっている。確認できる掘り方の南北長は4.45mで、

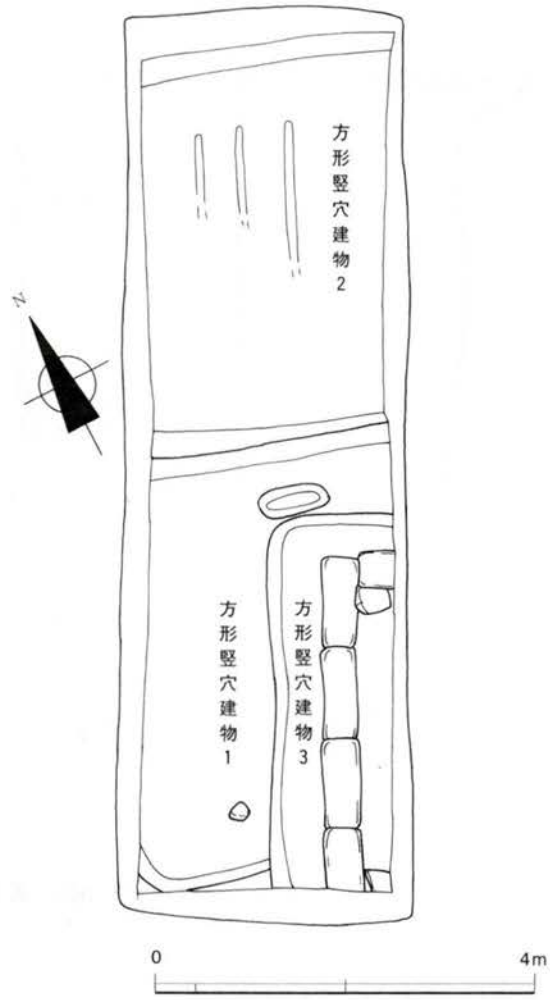


図6　中世面全測図

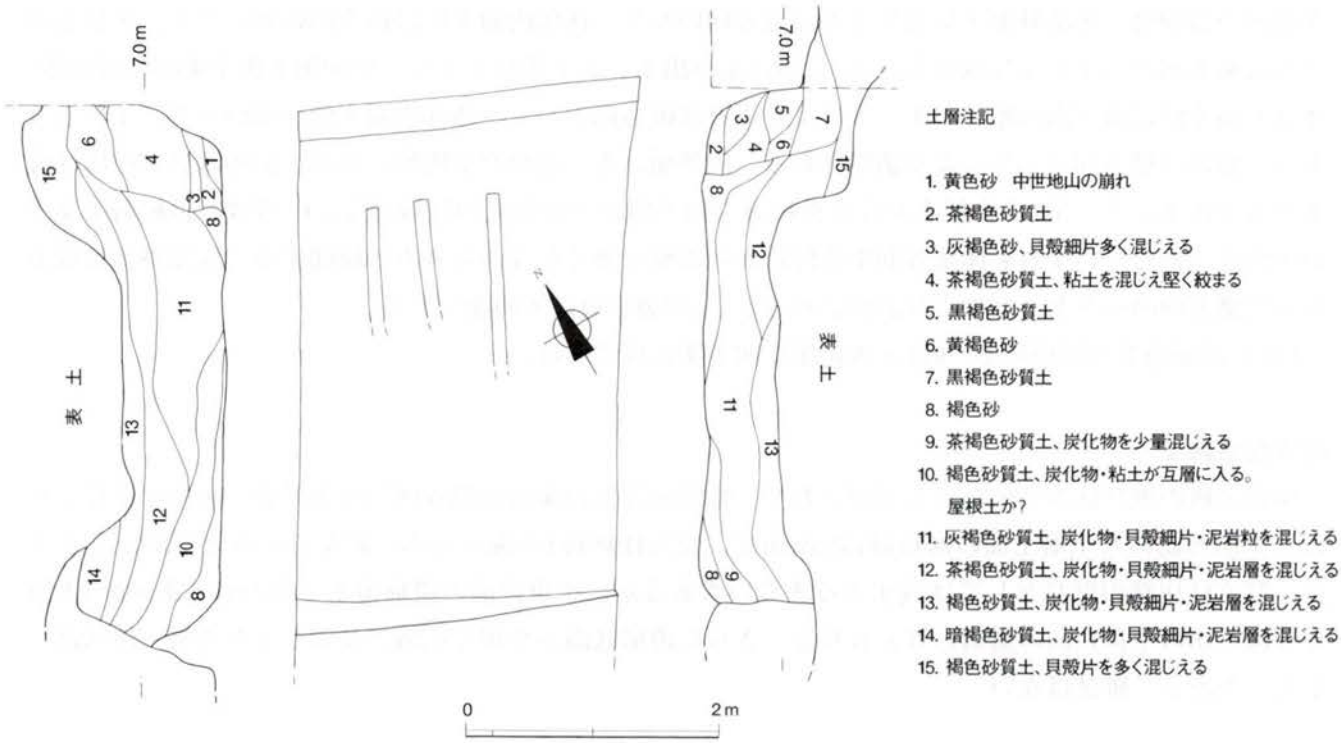


図7　方形竪穴建物２

北側に裏込め土を残している。想定掘り込み面から1m25cm下方の底面は、ほぼ平坦で調査区北壁から70cm南方に幅10cmの木材腐食痕跡が40cmの間隔を置いて南北に3本残されていた。木材腐食痕跡は、方形竪穴建物の床面を支える根太の痕跡と考えられる。

図8は方形竪穴建物2裏込めより出土した。

1はかわらけ。背高で、器壁はゆっくり開きながら立ち上がり、上位付近より強く外方へ屈曲する。

2は常滑甕の底部片。

3は青磁無文折縁鉢。破片の状態で被火し、内外面ともに釉表は荒れる。

図9—1～4は方形竪穴建物の床面直上より出土したかわらけである。いずれも混入物を多めに含む弱砂質胎土。背低気味で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がり、体部中位付近より外反する。

5～18は方形竪穴建物覆土中より出土した。

5～8はかわらけ。5は背低で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。6は背低気味で、器壁は大きく開きながら立ち上がる。7は手づくねかわらけ。混入物の少ない粉質胎土で、器壁は厚く、体部中位より下方の指頭痕は明瞭である。8は背高で、器壁は内弯気味に立ち上がるが、体部外面上位より外反する。

9～11は舶載陶磁器である。9は龍泉窯系青磁劃花文碗。底裏には焼成時の融着痕を残すが、磨って平らにするなどの調整は消費地で行われていない。また、使用による著しいキズが体部内面最下位から内底面にかけて残る。10は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗。体部内面に使

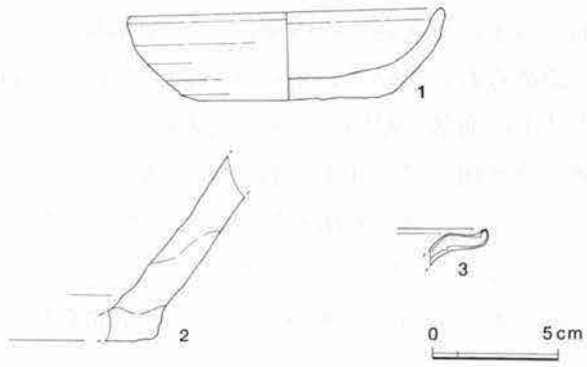


図8　方形竪穴建物2裏込め出土遺物

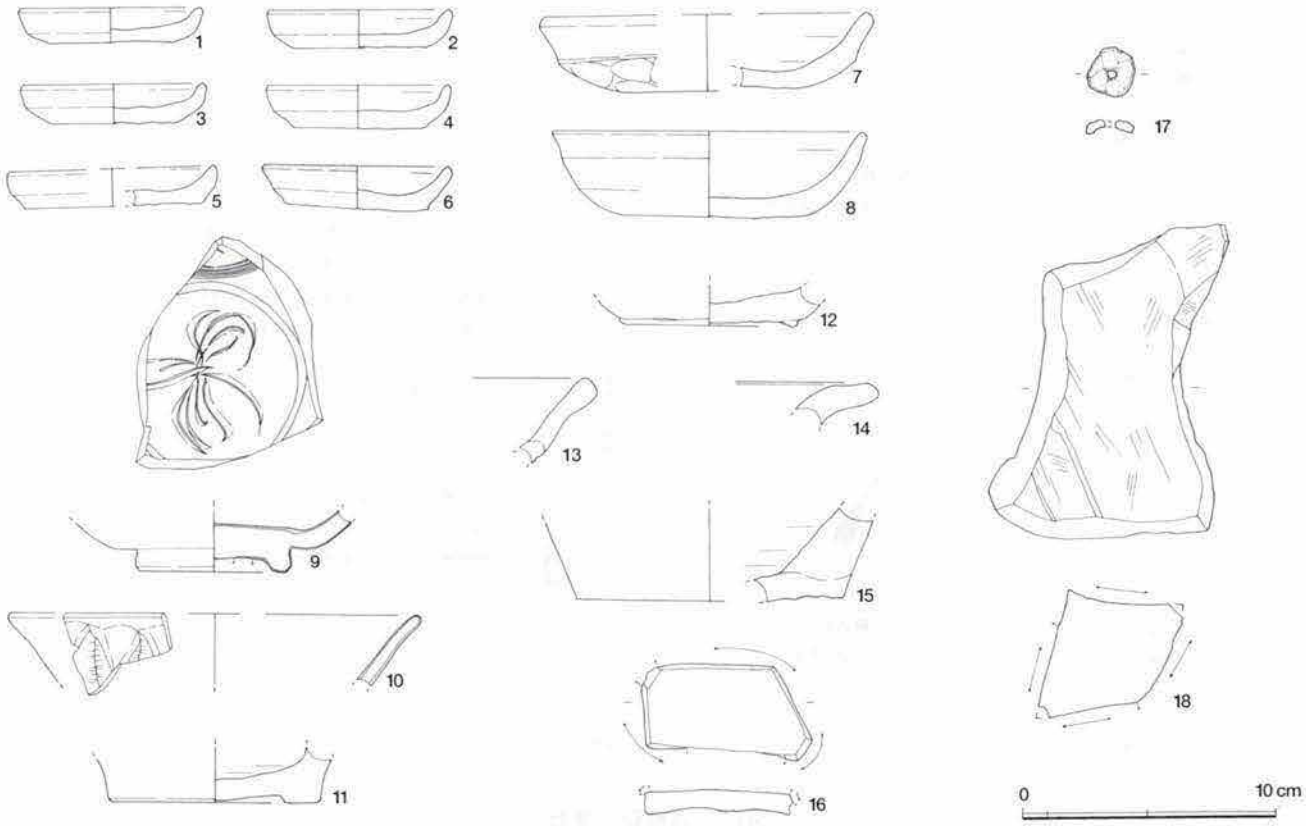


図9　第2面方形竪穴建物2出土遺物

用によるキズが残る。11は褐釉壺。削り出しによる高台畳付の一部に摩滅痕が残る。

12～16は常滑窯製品である。12は13世紀中頃の常滑山茶碗。高台は小さく、雑に貼り付けられる。使用による摩滅痕は遺存部に見られなかった。13は片口鉢Ⅰ類。小片のため、遺存部に摩滅痕などは確認できなかった。14は13世紀初頭の甕口縁部片。15は壺と思われる。16はすり常滑。甕破損後に転用されたものである。摩滅痕は破損断面すべてではなく、破損断面の上端、あるいは下端に見られる。

17は銅製の飾り金具か。著しい錆が付着して詳細は不明だが、平面形は四角形の可能性がある。また、断面形は山形を呈することから釘隠しと思われる。

18は黄味淡緑～紅味淡緑色砂岩製の荒砥。表裏、および左右側面に砥面を残すが、平滑に使用されていない。

方形竪穴建物１

方形竪穴建物2の南端を壊して調査区の南部に発見された。掘り方の南北壁と南西隅を確認したが、東西は調査区の外へと広がっている。掘り方上場の南北長は、4m60cmを測る。上場から1m10cm下方まで掘り込まれる裏込めの内側に、建物内部に当たる部分がさらに18cm深く掘り下げられている。南北両端に認められた裏込め内側の建物南北長は、2m42cmとかなり小さい。砂質土壌の調査地点における掘り上げ土の崩落が原因で、掘り方が広くなったと考えられる。

掘り方底面には、矩形や長方形の浅い落ち込みが4ヶ所に認められた。建物内部のものは根太跡の可能性もあるが、裏込め部分については不明である。また、建物内部の南端に砂質凝灰岩の粗い切石が斜めに少し浮いた状態で発見された。これが建物の土台を支えたものであるのか、不明である。

なお、掘り方南端の裏込め部は、現地調査時には土壙として認識していたため、本報告においては、

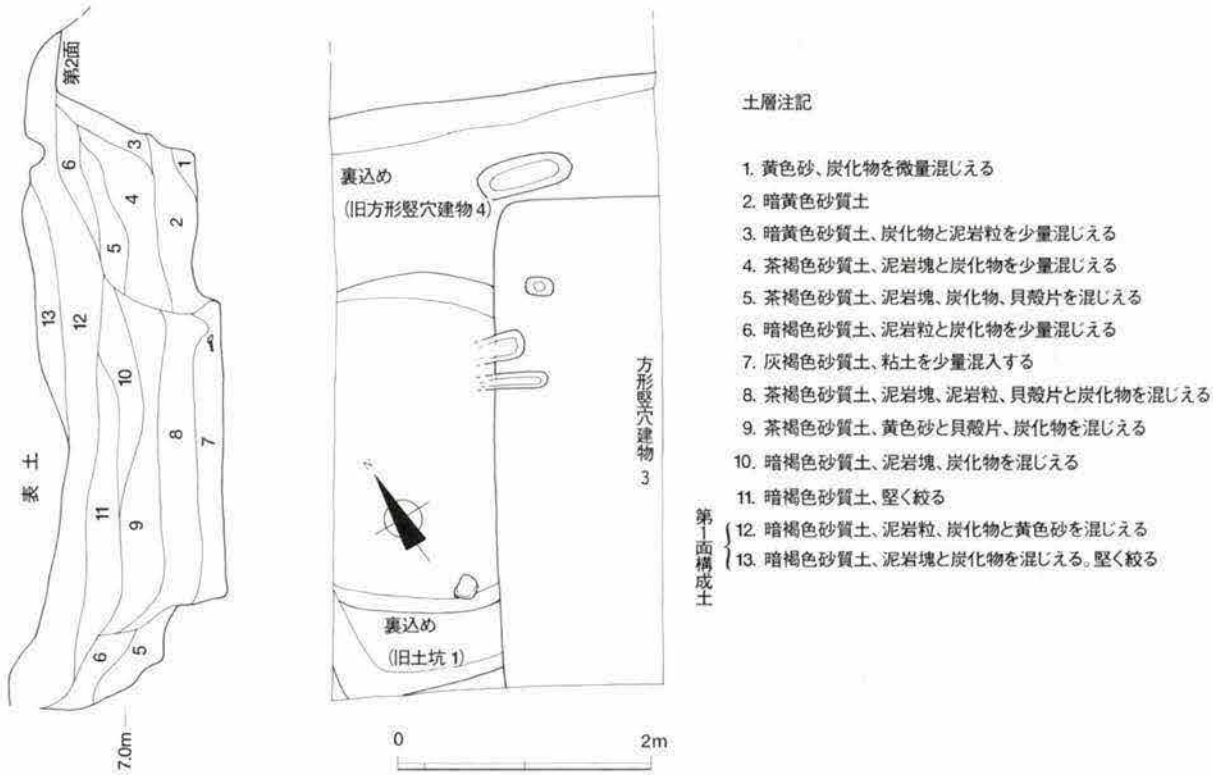


図10　方形竪穴建物１

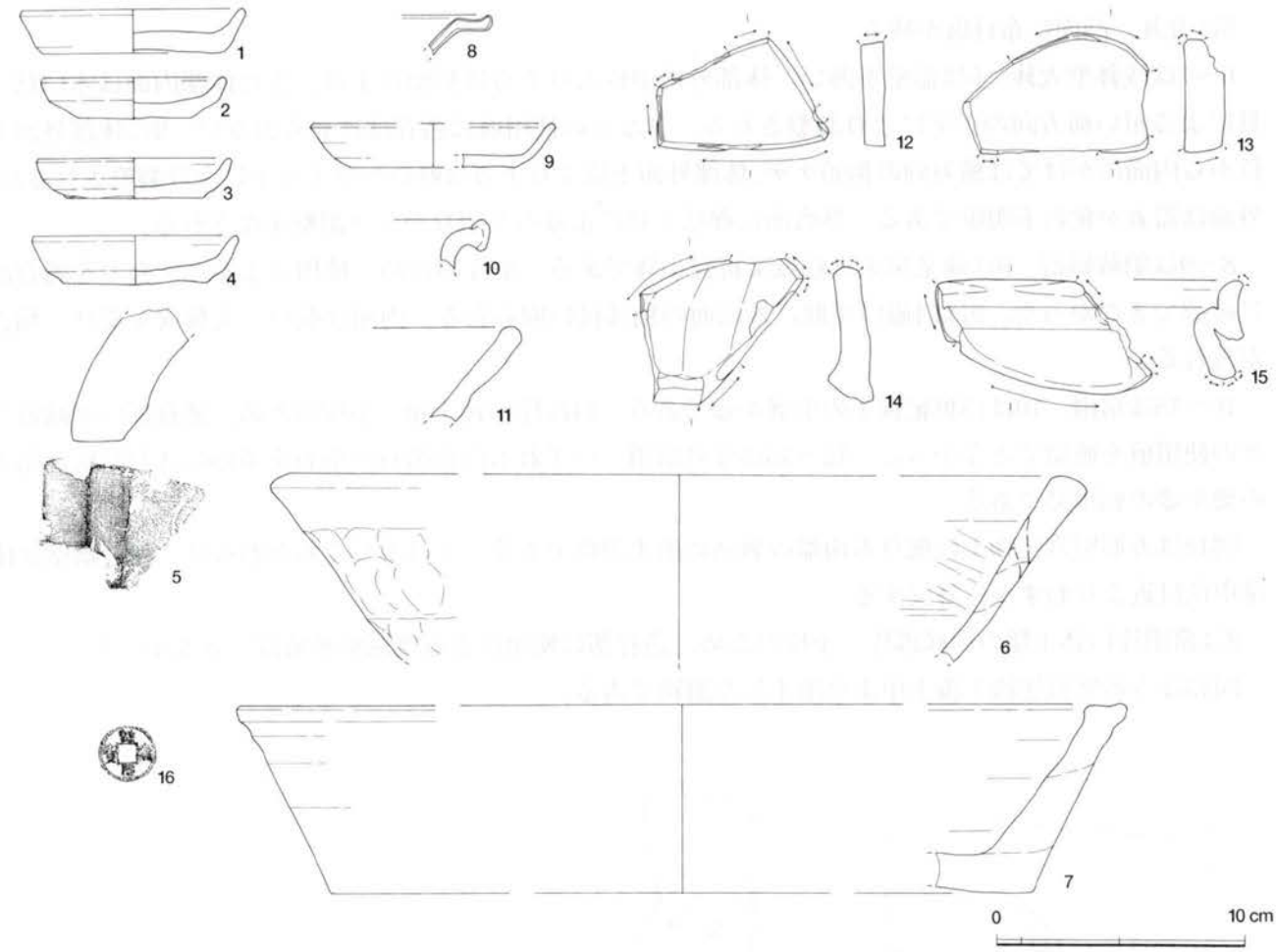


図11　第２面　方形竪穴建物１裏込め出土遺物

北部の裏込めと分けて出土遺物を掲げている。

図11は方形竪穴建物１の裏込めより出土した遺物である。

図11―1～4はかわらけ。1は背低で、内底面が広く、器壁は直立気味に立ち上がる。2～４は背低気味で、内底面が広く、薄い器壁は内弯しながら立ち上がり体部中位付近より外反する。

図12　第２面方形竪穴建物１裏込め（旧土壙１）出土遺物

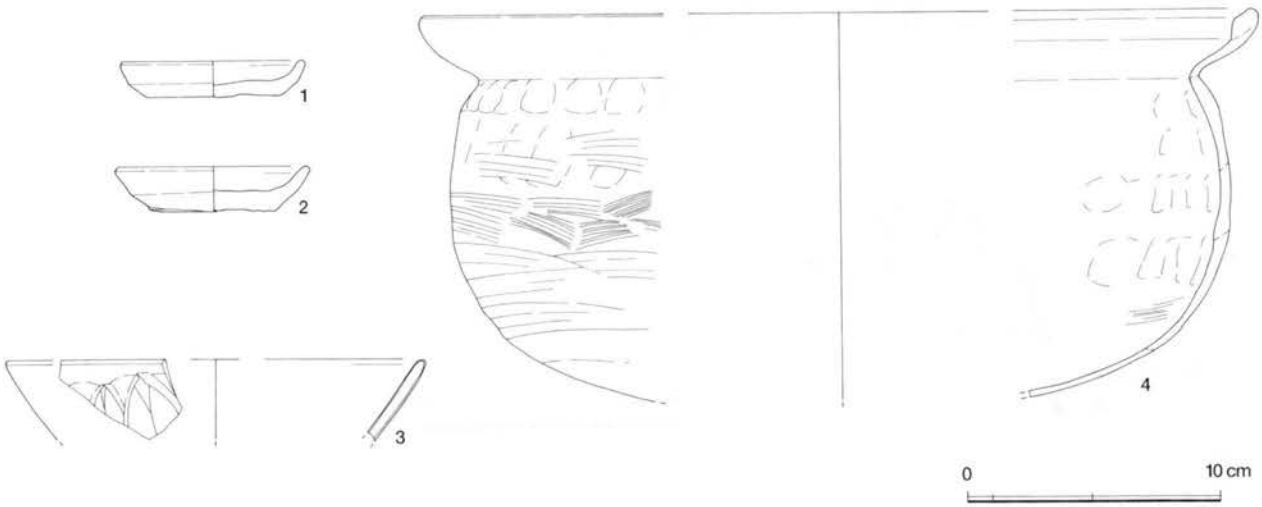


図13　方形竪穴建物１出土遺物

5は丸瓦。凸面に布目痕が残る。

6～7は浅鉢型火鉢。6は器壁が薄い。体部外面中位より下方は指頭により、また体部内面は木口状工具による粗い横方向のナデにより調整される。煤などの使用痕は遺存部に見られない。9は体部外面上位から内面にかけては横方向の指頭ナデ、体部外面上位より下方は軽いヘラミガキにより調整されるが、外面は器表が荒れ不明瞭である。外底面に櫛状工具によるヘラ切りかヘラ調整がなされる。

8～9は舶載磁器。8は龍泉窯系青磁無文折縁小鉢である。小片のため、使用によるキズなどを遺存部に確認できなかった。9は白磁口兀皿。外底面の釉は拭い取られる。内面は強い二次焼成を受け、釉表が荒れる。

10～15は常滑。10は13世紀後半の小甕か壺である。11は片口鉢Ⅰ類。小片のため、遺存部に摩滅痕などの使用痕を確認できなかった。12～15はすり常滑。いずれも白色微石～小石を多めに含む暗灰色胎土の甕か壺の転用品である。

図12は方形竪穴建物１の掘り方南端の裏込め出土遺物である。１は手づくねかわらけ。厚い器壁は体部中位付近よりわずかに外反する。

2は常滑片口鉢Ⅰ類の口縁部片。小片のため、遺存部に使用による摩滅痕を確認できなかった。

図13は方形竪穴建物１覆土中より出土した遺物である。

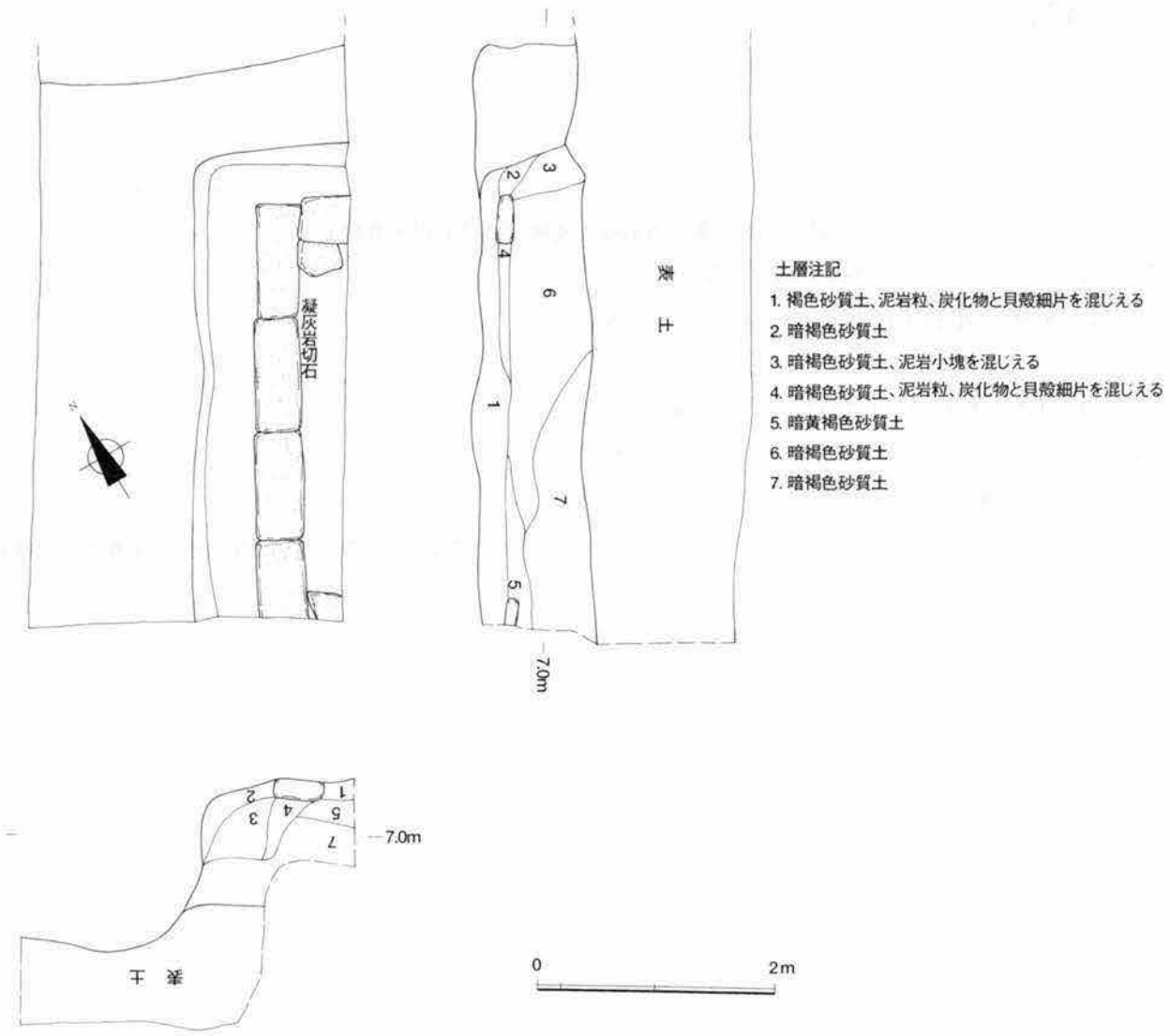


図14　方形竪穴建物３

1～2はかわらけ。いずれも背低で、体部中位より外反するが、1は器壁が薄く、混入物の少ない粉質胎土である。

3は青磁鎬蓮弁文碗。内外面ともに使用によるキズを著しく残す。

4は南伊勢系土鍋。体部外面中位付近より下方に使用による煤が付着している。

第3節　第1面

本来の生活面構成土上面は、現地表土堆積時にすでに失われている可能性が大である。しかし、明らかに第2面遺構の掘り込み面より上層の堆積土層から掘り込まれている遺構をここに掲げる。第1面の遺構が掘り込まれる土層は、泥岩粒子と炭化物に黄褐色砂を交える暗褐色砂質土である。

第1面から掘り込まれた遺構は、方形竪穴建物が1棟であった。

方形竪穴建物3

調査区の南西隅に発見された。調査区内には遺構の北西部のみが残されていたが、掘り込み内部に建物の基礎石列を発見した。基礎石は、長辺96㎝、短辺37から40㎝、厚さ13から17㎝を測る切石である。基礎切石は、長方形の掘り方内部の四周と大引の下に設置されていたと考えられる。

調査できた掘り方規模は、南北4.34m、東西1.45mで、西と北のそれぞれ掘り方上場から60㎝と40㎝内側までを裏込めとし、それより内部に基礎石を設置する。基礎石の設置に当たっては、掘り方底面に土を入れて切石の上面を揃えている。この基礎石の上に土台が設置される。また、調査区南東隅に厚さ9㎝の切石が顔をのぞかせているが、これは建物四周の基礎石の梁方向に横断する石列の一部で、土台と直交する大引を載せたと思われる。

図15―1～3は裏込めより出土した。1は青磁鎬蓮弁文碗。内外面ともに使用によるわずかなキズが残る。2は白磁口兀皿。小片のため、使用痕などを確認できなかった。

3は釘。

4～15は覆土中より出土した。4は手づくね、5～6は糸切りかわらけである。4は平底で、器壁は口縁部付近より外反する。5は背低気味で、器壁はやや内弯気味に立ち上がる。6は背低気味で、器壁は内弯しながら立ち上がり、口縁部付近より外反する。

7は13世紀末の瀬戸灰釉底卸目皿。強い二次焼成により口縁部周辺の釉は剥落し、内面の釉が泡立つ。

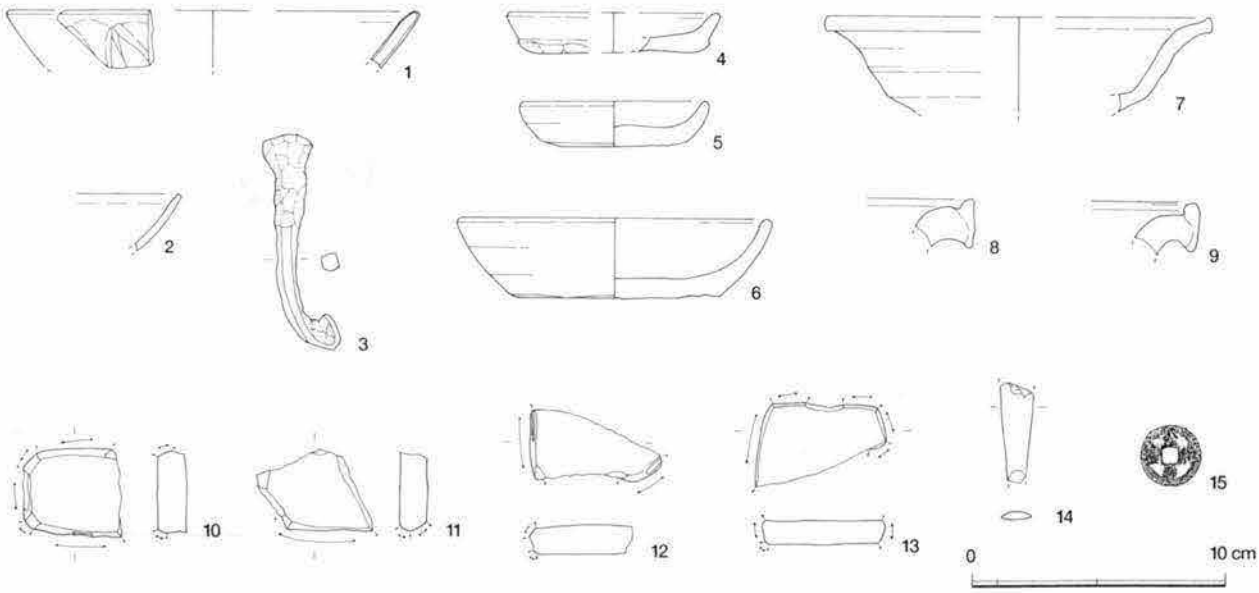


図15　方形竪穴建物3出土物

8～9は13世紀後半の常滑甕。10～13はいずれも白色微石～小石を多めに含む暗灰色胎土の甕か壺の転用品である。破損面端部を使用している。
14は笄。15は銭。錆による腐食が著しく、銭種を判別できなかった。

第１面上出土遺物（図16）

図16―1は８世紀前半までの土師坏。器壁はとても薄く、体部外面中位付近から外方へ屈曲する。

2は白かわらけ。体部外面上位より下方は指頭による押さえで調整され、調整痕が明瞭に残る。3～9はかわらけ。3は背低で、器壁は大きく、直線的に開き、口縁部付近よりわずかに外反する。4は背低気味で、内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がる。5～7は背高気味、あるいは背高で、器壁は内弯気味に立ち上がり、体部中位より外反する。8は中型、9は大型である。いずれも混入物の少ない橙色弱粉質胎土で、器壁は薄く、碗型を呈する。いわゆる「薄手丸深」型である。

10～17は常滑窯製品。10～11は片口鉢Ⅰ類。いずれも使用によるごくわずかな摩滅痕が残る。12は片口鉢Ⅱ類。小片のため、遺存部に使用痕などを確認できなかった。13は13世紀初頭の、14は13世紀後半の甕。15～17はすり常滑。いずれも白色微石～小石を多めに含む粗い灰色胎土の甕か壺を転用している。15と17は破損断面端部を使用している。

18は998年初鋳の「咸平元寶」、19は1023年初鋳の「天聖元寶」と思われる。

20は笄。21は暗灰紫色を呈する赤間硯。「リク」に使用痕ではない細いキズが多く残る。

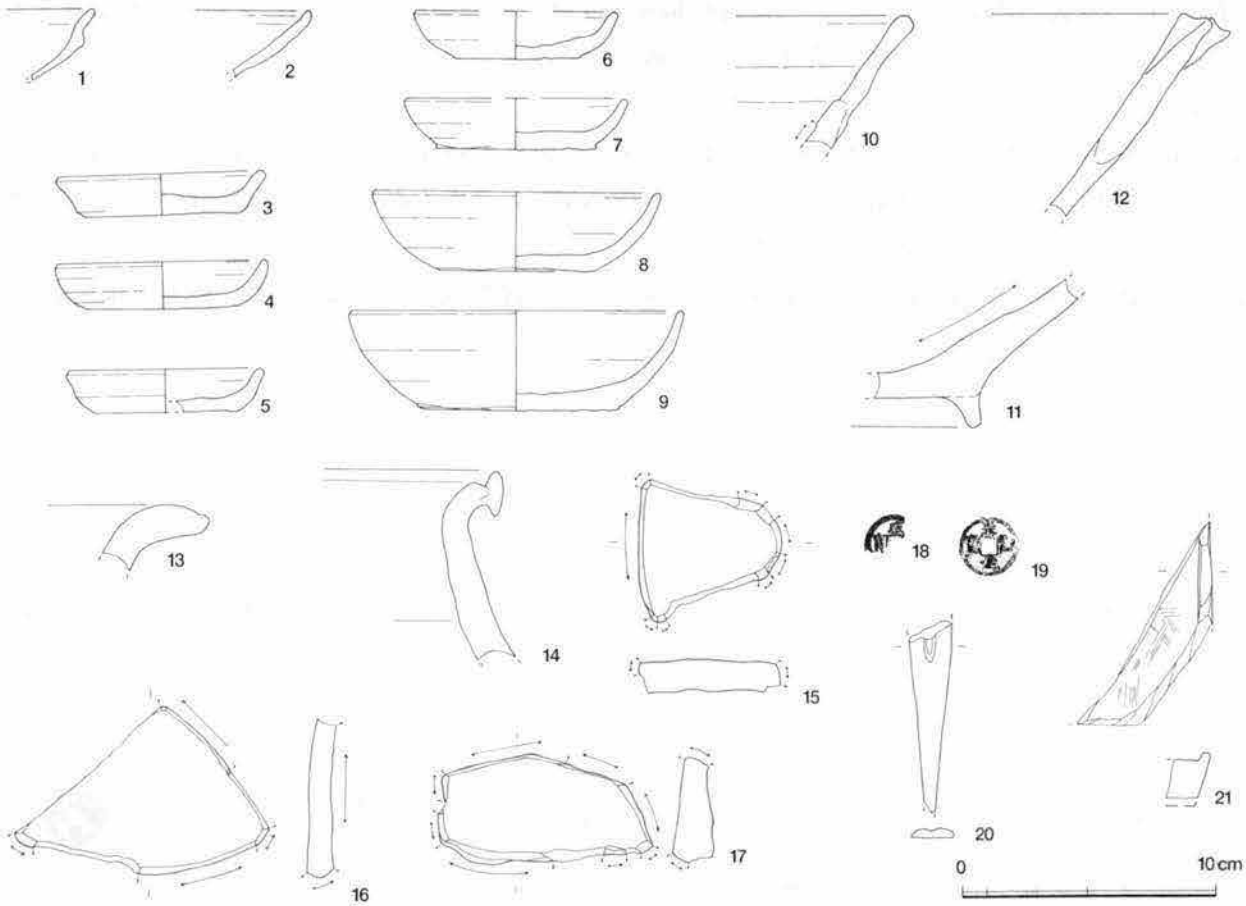


図16　第1面上出土遺物

表1　遺物観察表（1）

挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
5	1	竪穴住居跡１ピット１	長胴甕	(23.4)			胎土は白色砂、黒色微砂を含む橙色粉質土　焼成良好
5	2	竪穴住居跡１ピット１	甑		(9.0)		胎土は黒色、および白色微砂と多量の泥粒を多く含む淡肌色粉質土
5	3	竪穴住居跡１ピット２	長胴甕				胎土は白色砂、金雲母片を含むザラついた橙色粉質土　焼成良好
5	4	竪穴住居跡１ピット３	長胴甕	(23.4)			胎土は白色砂、金雲母片を含む橙色粉質土　焼成良好
5	5	竪穴住居跡１	長胴甕				胎土は白色微砂と多量の金雲母片を含む明橙色粉質緻密土　焼成良好
5	6	竪穴住居跡１	坏	(14.7)			胎土は黒色微砂、白針を含む明橙色粉質緻密土　焼成良好
5	7	竪穴住居跡１	坏	(13.1)			胎土は白色粗砂を多く含む淡黄色土　焼成良好
5	8	竪穴住居跡１	坏蓋	(16.8)			胎土は白色砂を含む淡灰色土　焼成良好
5	9	竪穴住居跡１	坏	(12.2)			胎土は黒色砂、白色微砂を含む暗灰色土　焼成良好
8	1	方形竪穴建物2裏込め	かわらけ	(12.3)	7.1	3.55	胎土は黒色微砂、白粒、白針、雲母片を多めに含む暗橙色弱砂質土
8	2	方形竪穴建物2裏込め	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰～黄灰色土
8	3	方形竪穴建物2裏込め	青磁折縁鉢				素地は白色粘質緻密土　釉は草緑色を呈する
9	1	方形竪穴建物２床面直上	かわらけ	(7.0)	(5.0)	1.4	胎土は黒色微砂、白粒、白針を多めに含む暗橙色弱砂質土
9	2	方形竪穴建物２床面直上	かわらけ	7.5	(5.1)	1.5	胎土は黒色微砂、白粒、白針を多めに含む暗橙色弱砂質土
9	3	方形竪穴建物２床面直上	かわらけ	(7.1)	(5.0)	1.5	胎土は黒色微砂、白粒、白針を多めに含む暗肌色弱砂質土
9	4	方形竪穴建物２床面直上	かわらけ	(7.1)	(5.1)	1.7	胎土は黒色微砂、白粒、白針を多めに含む暗橙色弱砂質土
9	5	方形竪穴建物２	かわらけ	(8.1)	(7.0)	1.5	胎土は黒色微砂、白粒、白針、雲母片を多めに含む暗肌色弱砂質土
9	6	方形竪穴建物２	かわらけ	7.3	5.6	1.7	胎土は黒色微砂、白針、白粒を多めに含む淡橙色弱砂質土
9	7	方形竪穴建物２	手づくねかわらけ	(12.8)	(6.8)	3.0	胎土は黒色微砂、白粒、雲母片を少量含む暗肌色粉質土
9	8	方形竪穴建物２	かわらけ	12.2	7.5	3.0	胎土は黒色微砂、白粒、白針、雲母片を多めに含む橙色弱砂質土
9	9	方形竪穴建物２	青磁劃花文碗		6.2		素地は黄味明灰色粘質緻密土　釉はオリーブ色
9	10	方形竪穴建物２	青磁鎬蓮弁文碗	(16.2)			素地は明灰色粘質緻密土　釉は草緑色を呈する
9	11	方形竪穴建物２	褐釉壺		(8.5)		胎土は灰～暗灰色弱粘質土　遺存部は露胎
9	12	方形竪穴建物２	常滑山茶碗		(7.1)		胎土は白色微粒～微石を多めに含む粗い灰色土
9	13	方形竪穴建物２	常滑片口鉢Ｉ類				胎土は白色微粒を少量含む灰色土
9	14	方形竪穴建物２	常滑甕				胎土は白色微粒を少量含む暗灰色緻密土
9	15	方形竪穴建物２	常滑壺		(10.6)		胎土は白色微粒を多めに含む灰～黄灰色弱粘質緻密土
9	16	方形竪穴建物２	すり常滑	長3.4　幅6.6　厚0.9			胎土は白色微粒～微石を多めに含む暗灰色土
9	17	方形竪穴建物２	銅製飾り金具？	径1.9　厚0.3			
9	18	方形竪穴建物２	荒砥	長12.2　幅8.9　厚47.9			黄味淡緑～紅味淡緑色を呈する
11	1	方形竪穴建物1裏込め	かわらけ	(8.8)	(7.4)	1.75	胎土は黒色微砂、白粒を多く含む橙色砂質土
11	2	方形竪穴建物1裏込め	かわらけ	7.3	(4.5)	1.6	胎土は黒色微砂、白針、白粒を多く含む淡橙色弱砂質土
11	3	方形竪穴建物1裏込め	かわらけ	(7.7)	(5.4)	1.6	胎土は黒色微砂、白粒、白針を含む橙色弱砂質土
11	4	方形竪穴建物1裏込め	かわらけ	(8.1)	(5.8)	2.0	胎土は黒色微砂、白粒、雲母片を含む暗橙色弱砂質土
11	5	方形竪穴建物1裏込め	丸瓦				胎土は白色砂をわずかに含む灰白色粉質緻密土　焼成良好
11	6	方形竪穴建物1裏込め	浅鉢形火鉢	(31.0)			胎土は白色微粒と泥粒を多く含む淡黄色粉質土
11	7	方形竪穴建物1裏込め	浅鉢形火鉢	(36.4)	(28.5)	7.7	胎土は白色微砂と白色泥粒を多く含む淡紅色土　焼成良好
11	8	方形竪穴建物1裏込め	青磁折縁小鉢				素地は明灰色粘質緻密土　釉は草緑色を呈する
11	9	方形竪穴建物1裏込め	白磁口兀皿	(9.7)	(6.6)	1.8	素地は白色弱粘質緻密土　釉は緑味乳白色を呈する
11	10	方形竪穴建物1裏込め	常滑小甕か壺				胎土は白色微石をわずかに含む明灰色土
11	11	方形竪穴建物1裏込め	常滑片口鉢Ｉ類				胎土は白色微粒～微石を多く含む粗い灰～紅色土
11	12	方形竪穴建物1裏込め	すり常滑	長4.4　幅6.8　厚0.9			胎土は白色微粒～微石を多めに含む粗めの灰～暗灰色土
11	13	方形竪穴建物1裏込め	すり常滑	長4.7　幅7.4　厚1.6			胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰色土
11	14	方形竪穴建物1裏込め	すり常滑	長5.6　幅6.2　厚1.7			胎土は白色微粒～微石を多めに含む暗灰色緻密土

表1　遺物観察表（2）

挿図番号		出土地	種別	口径	底径	器高	備考
11	15	方形竪穴建物1裏込め	すり常滑	長4.4	幅7.6	厚1.0	胎土は白色微石～小石を多く含む粗めの灰色土
11	16	方形竪穴建物1裏込め	銭				「熙寧元寳」
12	1	方形竪穴建物1裏込め	手づくねかわらけ	(11.6)	(5.4)	3.25	胎土は黒色微砂、白針、白粒を少量含む橙色弱粉質土
12	2	方形竪穴建物1裏込め	常滑片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微粒～微石を多く含む粗い灰色土
13	1	方形竪穴建物1	かわらけ	(7.1)	(5.2)	1.45	胎土は黒色微砂、雲母片、白針を少量含む淡肌～淡茶色弱粉質土
13	2	方形竪穴建物1	かわらけ	7.4	5.1	1.75	胎土は黒色微砂、白粒、白針、雲母片を多く含む橙色弱砂質土
13	3	方形竪穴建物1	青磁鎬蓮弁文碗	(16.5)			素地は明灰色弱粘質緻密土　釉は淡草緑色を呈する
13	4	方形竪穴建物1	南伊勢系土鍋	(33.6)			胎土は黒色砂と金雲母を多量に含む灰色土
15	1	方形竪穴建物３裏込め	青磁鎬蓮弁文碗	(16.2)			素地は灰色弱粘質緻密土　釉は暗草緑色を呈する
15	2	方形竪穴建物３裏込め	白磁口兀皿				素地は白色弱粘質緻密土　釉は緑味乳白色を呈する
15	3	方形竪穴建物３裏込め	釘	長8.7　径0.7			
15	4	方形竪穴建物３	手づくねかわらけ	(8.2)	(6.3)	1.6	胎土は黒色微砂、白粒、白針を多めに含む橙色弱砂質土
15	5	方形竪穴建物３	かわらけ	(7.2)	(5.6)	1.8	胎土は黒色微砂、白粒、白針を含む淡橙色弱砂質土
15	6	方形竪穴建物３	かわらけ	12.2	8.4	3.2	胎土は黒色微砂、白粒、雲母片、白針を多めに含む淡橙色弱砂質土
15	7	方形竪穴建物３	瀬戸灰釉底卸目皿	(15.2)			胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は半透明の黄緑～緑色を呈する
15	8	方形竪穴建物３	常滑甕				胎土は白色微粒～小石を多めに含む灰色土
15	9	方形竪穴建物３	常滑甕				胎土は白色微石を多く含む粗い暗灰～灰色土
15	10	方形竪穴建物３	すり常滑	長3.5	幅3.9	厚1.2	胎土は白色微粒～小石を多く含む粗めの暗灰色土
15	11	方形竪穴建物３	すり常滑	長3.2	幅3.7	厚1.1	胎土は白色微石～小石を多めに含む暗橙～暗灰色土
15	12	方形竪穴建物３	すり常滑	長2.8	幅5.2	厚1.2	胎土は白色微石を多く含む粗めの暗灰色土
15	13	方形竪穴建物３	すり常滑	長3.2	幅5.1	厚1.0	胎土は白色微粒～小石を多めに含む粗い暗橙～灰色土
15	14	方形竪穴建物３	笄	遺存長4.1	幅1.3	厚0.3	
15	15	方形竪穴建物３	銭				銭種不明
16	1	第１面上	坏				胎土は黒色微砂金雲母片を含む淡橙色粉質土　焼成良好
16	2	第１面上	白かわらけ				胎土は紅味白色粉質緻密土
16	3	第１面上	かわらけ	(8.0)	(6.2)	1.7	胎土は黒色微砂、白粒、白針、雲母片を多く含む橙色弱砂質土
16	4	第１面上	かわらけ	(8.3)	(6.1)	1.85	胎土は黒色微砂、白針、白粒を少量含む淡橙色弱粉質土
16	5	第１面上	かわらけ	(7.5)	(5.8)	1.7	胎土は黒色微砂、雲母片、白針を多めに含む淡肌～淡茶色弱砂質土
16	6	第１面上	かわらけ	(7.7)	4.8	1.9	胎土は黒色微砂、白針、白粒、雲母片を含む淡橙色弱粉質土
16	7	第１面上	かわらけ	(8.6)	(6.4)	2.1	胎土は黒色微砂、白針、白粒を多めに含む淡橙色弱砂質土
16	8	第１面上	かわらけ	11.3	6.3	3.2	胎土は黒色微砂、白粒、雲母片を少量含む橙色弱粉質土
16	9	第１面上	かわらけ	(13.1)	(7.2)	4.0	胎土は黒色微砂、白針、雲母片を少量含む橙色弱粉質土
16	10	第１面上	常滑片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰色土
16	12	第１面上	常滑片口鉢Ⅰ類				胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い灰色土
16	11	第１面上	常滑片口鉢Ⅱ類				胎土は白色微粒～小石を多めに含む粗めの暗灰色土
16	13	第１面上	常滑甕				胎土は白色微粒を少量含む灰色緻密土
16	14	第１面上	常滑甕				胎土は白色微粒～微石を多めに含む粗めの灰色土
16	15	第１面上	すり常滑	長5.7	幅5.7	厚1.2	胎土は白色微石～小石を多めに含む粗めの灰色土
16	16	第１面上	すり常滑	長6.9	幅10.1	厚1.0	胎土は白色微粒～小石を多く含む粗い暗灰色土
16	17	第１面上	すり常滑	長4.3	幅8.5	厚1.5	胎土は白色微粒～小石を多めに含む粗めの灰色土
16	18	第１面上	銭				「咸□□寳」
16	19	第１面上	銭				「天聖元寳」
16	20	第１面上	笄	遺存長7.8	幅1.7	厚0.3	
16	21	第１面上	赤間硯	長8.2	幅2.6	厚2.0	暗灰紫色を呈する

第3章　まとめ

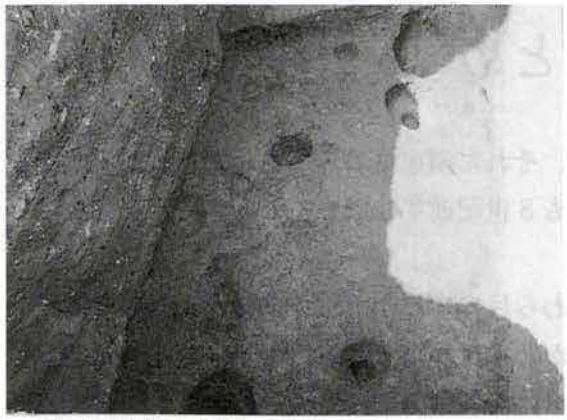
第3面の竪穴住居跡から出土した遺物は土師長胴甕と坏、それに須恵器の坏であった。長胴甕は7世紀末から8世紀第1四半期、土師器と須恵器の坏はいずれも8世紀前半に収まることから、第3面は8世紀初頭と考えられる。

第2面では、破片も含めて底部を確認できた手づくねかわらけの多くが、混入物の多い弱砂質胎土の平底であった。また、方形竪穴建物3裏込めから手づくねかわらけが出土していたが、覆土中より出土した大型糸切りかわらけは背高で碗型を呈し、小型かわらけは背低気味で内底面が広いものが多く見られる。このことから第2面は、13世紀後半頃と考えられる。

糸切りかわらけでは、1面上出土遺物に大型の「薄手丸深」型かわらけが見られるが、同様のものはいずれの面の遺構からも出土していない。ただし、第1面方形竪穴建物3より出土したかわらけ細破片の中に中型かわらけを確認していることから、第1面は14世紀初頭頃と考えられる。第2面と第1面には年代的に大きな隔たりはないものと思われる。

狭小な調査区であったが、調査前に予想された古代と中世の遺構を発見できた。調査区内に完全な形をとどめた遺構はなかったが、古代以来の人々の生活痕跡が周密に残されていた。それは調査地点に古代から引き続く人々の生活のあったことを示すもので、近隣の御成小学校地点での調査成果を鑑みれば、当該地点の歴史的重要性を確認できた。今後とも狭小であろうとも地道な調査によってのみ都市遺跡の全体像を復元できることを明記してまとめに代えたい。

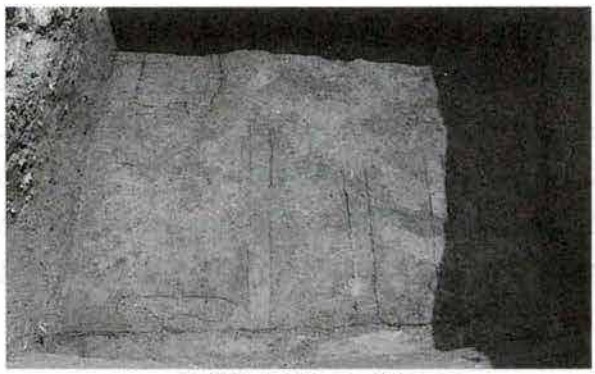
図版1



a．竪穴住居1（南から）

b．同左　土師器出土状況

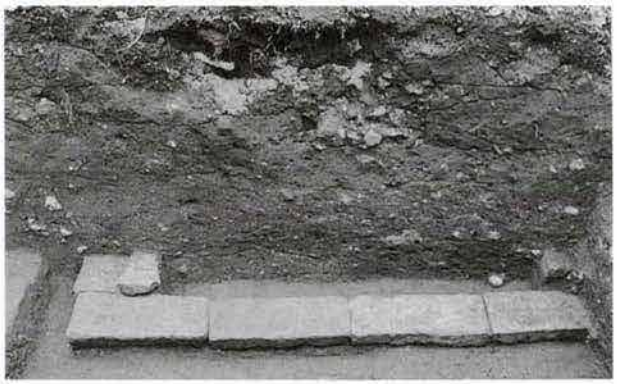
c．中世面全景（北から）



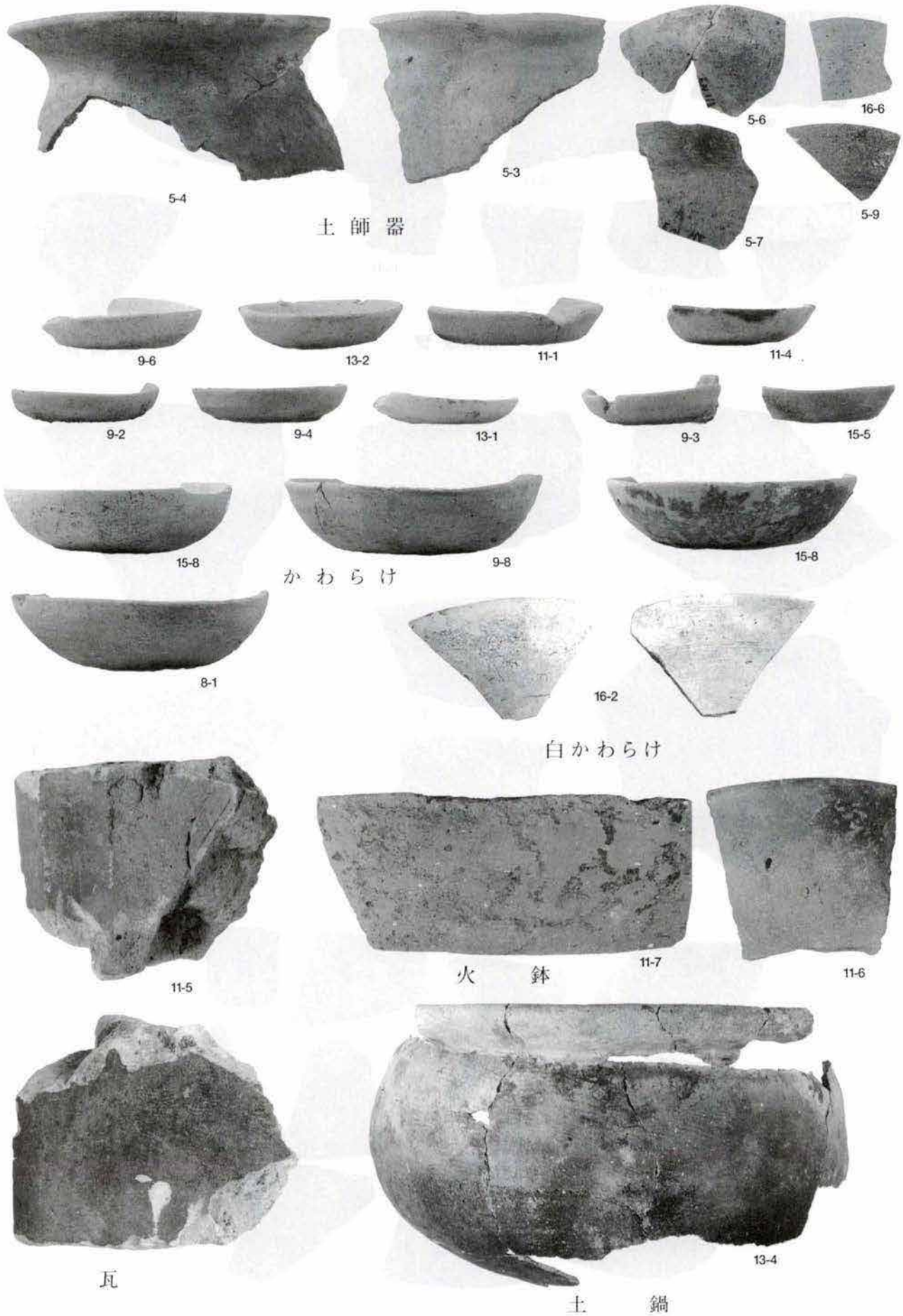
d．方形竪穴建物2（北から）

e．方形竪穴建物1（北から）

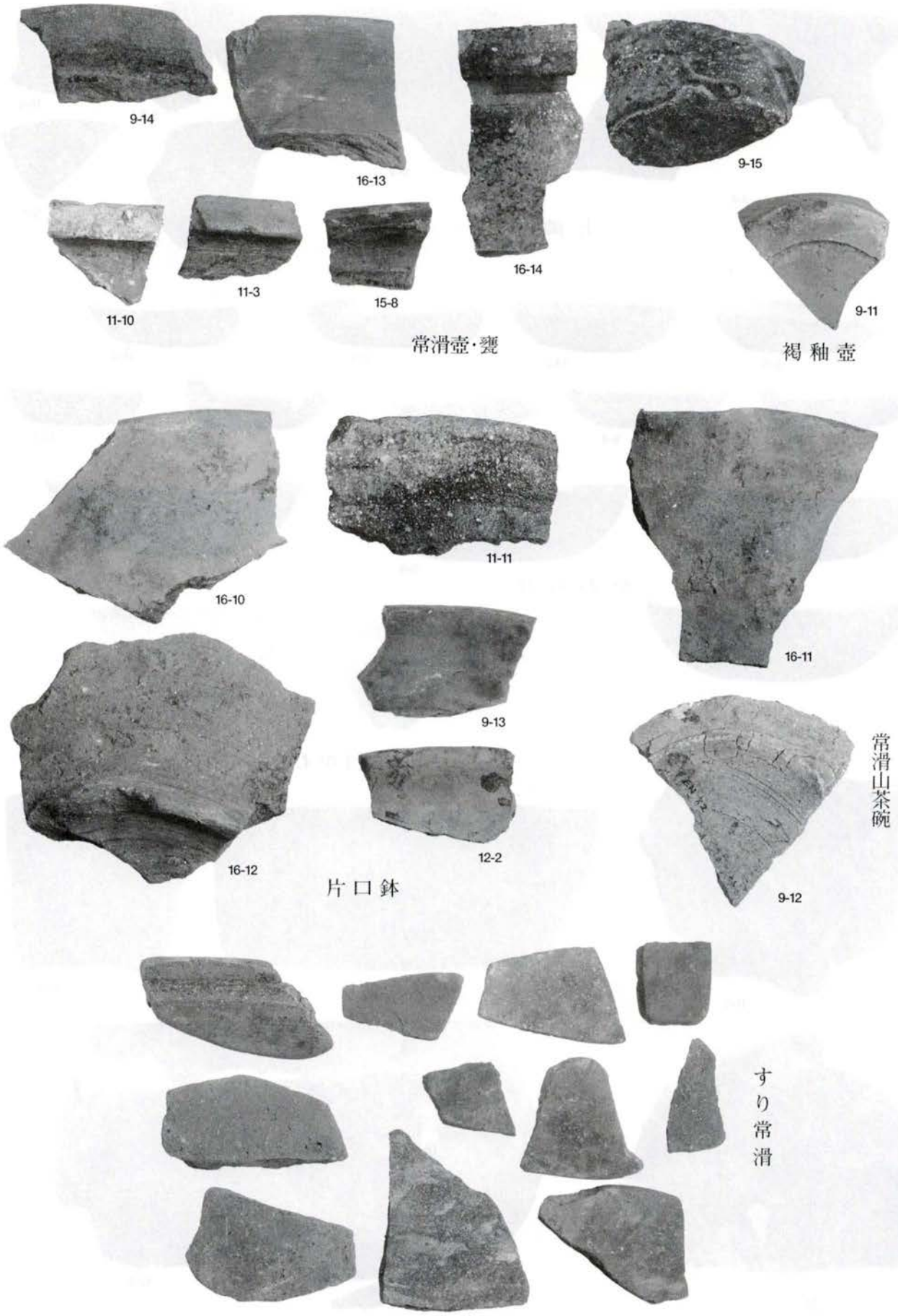
f．方形竪穴建物3（南から）

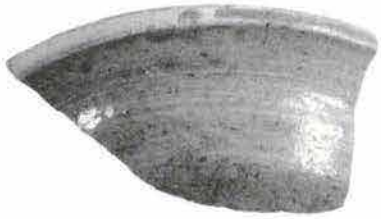


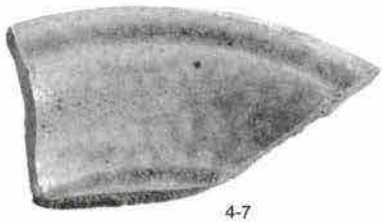
g．同左近景（西から）


5-4
5-3
5-6
16-6
5-7
5-9
土師器
9-6
13-2
11-1
11-4
9-2
9-4
13-1
9-3
15-5
15-8
9-8
15-8
かわらけ
8-1
16-2
白かわらけ
11-5
11-7
11-6
火鉢
瓦
13-4
土鍋

図版 3

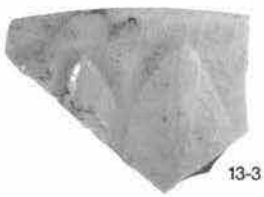

9-14
16-13
16-14
9-15
11-10
11-3
15-8
9-11
常滑壺・甕
褐釉壺
16-10
11-11
16-11
9-13
16-12
12-2
9-12
常滑山茶碗
片口鉢
すり常滑





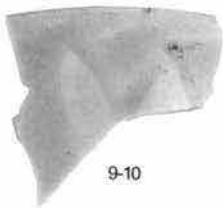
4-7

瀬　戸



13-3

15-1



9-10

9-9

11-8

8-3

船載磁器

15-2

11-9

16-20

15-14

骨　製　品

9-18

砥　石

16-21

硯

下馬周辺遺跡（No.200）

大町二丁目975番6地点

例　言

1. 本書は、下馬周辺遺跡。（鎌倉市大町二丁目975番6地点）における個人住宅の建築に伴う埋蔵文化財の調査発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査は以下のとおり実施された。
   下馬周辺遺跡
   調査期間　　平成15年10月7日～同年10月17日
   調査面積　　25㎡
   調査の主体　鎌倉市教育委員会
   調査担当　　森孝子
   調査補助員　安達澄代　坂倉美恵子　渡邊美佐子
   調査協力者　株式会社　鎌倉日本土木
4. 本書の遺構·遺物の縮尺は次の通りである。
   遺構図　1／80・1/100（遺構図の水糸高は海抜高を示す。）
   遺物実測図　1／3·1／6
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
   釉の限界線　　使用痕の範囲
   調整の変化点　加工痕の範囲
6. 本書の執筆・編集は森が行なった。
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
   遺構図版　森孝子
   遺物図版　河内令子
   遺構写真　森孝子
   遺物写真　森孝子
8. 発掘調査及び出土品整理にあたっては、以下の諸氏·機関に御教示・御協力を賜った。
   鎌倉考古学研究所　株式会社 博通
9. 発掘調査における出土遺物・図面・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。資料整理の際の略記号は下馬である。
10. 発掘調査に際して多大な御協力を頂いた建築主に深く感謝の意を表する。

目　　次

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 ……314
第２章　調査経過・グリッド配置・基本層序 ……317
第３章　検出遺構と出土遺物 ……319
第４章　まとめ ……332

挿 図 目 次

図1　本調査地点と周辺遺跡 ……315
図2　遺跡の位置 ……316
図3　グリッド配置図 ……317
図4　基本層序 ……318
図5　1面遺構配置図 ……319
図6　溝３ ……320
図7　土壙１ ……320
図8　土壙1出土遺物 ……320
図9　2面遺構配置図 ……321
図10　溝5 ……321
図11溝5出土遺物 ……322
図12　方形竪穴建築址1・2 ……322
図13　方形竪穴建築址1・2出土遺物 ……323
図14　土壙２・３ ……323
図15　土壙２・3出土遺物 ……324
図16　3面遺構配置図 ……325
図17　溝１．２．４ ……326
図18　溝2出土遺物 ……326
図19　土壙４ ……326
図20　中世面出土遺物(1) ……327
図21　中世面出土遺物(2) ……328
図22　表土層出土遺物 ……329
図23　表土層・中世層出土古代遺物 ……330

図 版 目 次

図版１　A．全景　(北から) ……333
　　B．溝１・５　(東から) ……333
図版２　A．全景　(南から) ……334
　　B．方形竪穴建築址１　(東から) ……334
図版3　A．方形竪穴建築址２　(南西から) ……335
　　B．土壙４　(南から) ……335
図版4　出土遺物(1) ……336
図版5　出土遺物(2) ……337

第1章　遺跡の位置と歴史的環境

本報する地点は、鎌倉市大町二丁目975番6(図1-1地点)に所在し、下馬周辺遺跡内に位置する。図1で示したように小道を挟んだ西側（斜め斜線の範囲内）は下馬周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳NO.200)、東側（ドットで示した範囲内）は米町遺跡(同NO.245)である。

下馬周辺遺跡は、若宮大路を東限とし、現在の下馬四つ角と、名越方向に向かう道筋(県道鎌倉・葉山線)が交叉する南側の地域で、ほぼ500m四方の範囲である。また、米町遺跡は、下馬周辺遺跡の北東側に位置しており、東西700m、南北は横須賀線を南限とする200mの範囲である。

本地点は若宮大路と県道鎌倉・葉山線が交叉する下馬四つ角を東(名越)方向に200m進み、最初の路地を右折して、50m南下した場所で、下馬周辺遺跡内では東端に位置している。現状は宅地となっている。

調査地点は、鎌倉時代の基幹である若宮大路はから西方向に200mという至近距離に所在する。また、遺跡地の北側を東西方向に走る県道鎌倉・葉山線は、鎌倉時代の大町大路といわれており、さらに、律令時代は東海道の道筋の可能性があるともいわれ、古代から鎌倉時代を通しての重要な幹線道路であったと考えられている。このような環境の下にあり、遺跡地近辺が当該期には非常に繁華な様相であったことは想像に難くない。

また、本遺跡地が東隣する米町遺跡の「米町」とは、鎌倉時代に裁許を受けた商業地域の名称の一つである。鎌倉幕府は、商業地域を限定するため2回法令を出している。

建長三年十二月三日の条―鎌倉中小町屋之事被定置處々―
大町　小町　米町　亀谷辻　和賀江　大倉辻　氣和飛坂山上

文永二年三月五日の条―町御免所の事―
一所大町　一所小町　一所魚町　一所穀町　一所武蔵大路下　一所須地賀江橋　一所大倉辻

とあり、二度の法令の中、共に、米町、及び穀町(米町？)の名前を見ることが出来る。鎌倉時代には、遺跡地周辺は繁華な商業地域となっていたのであろう。

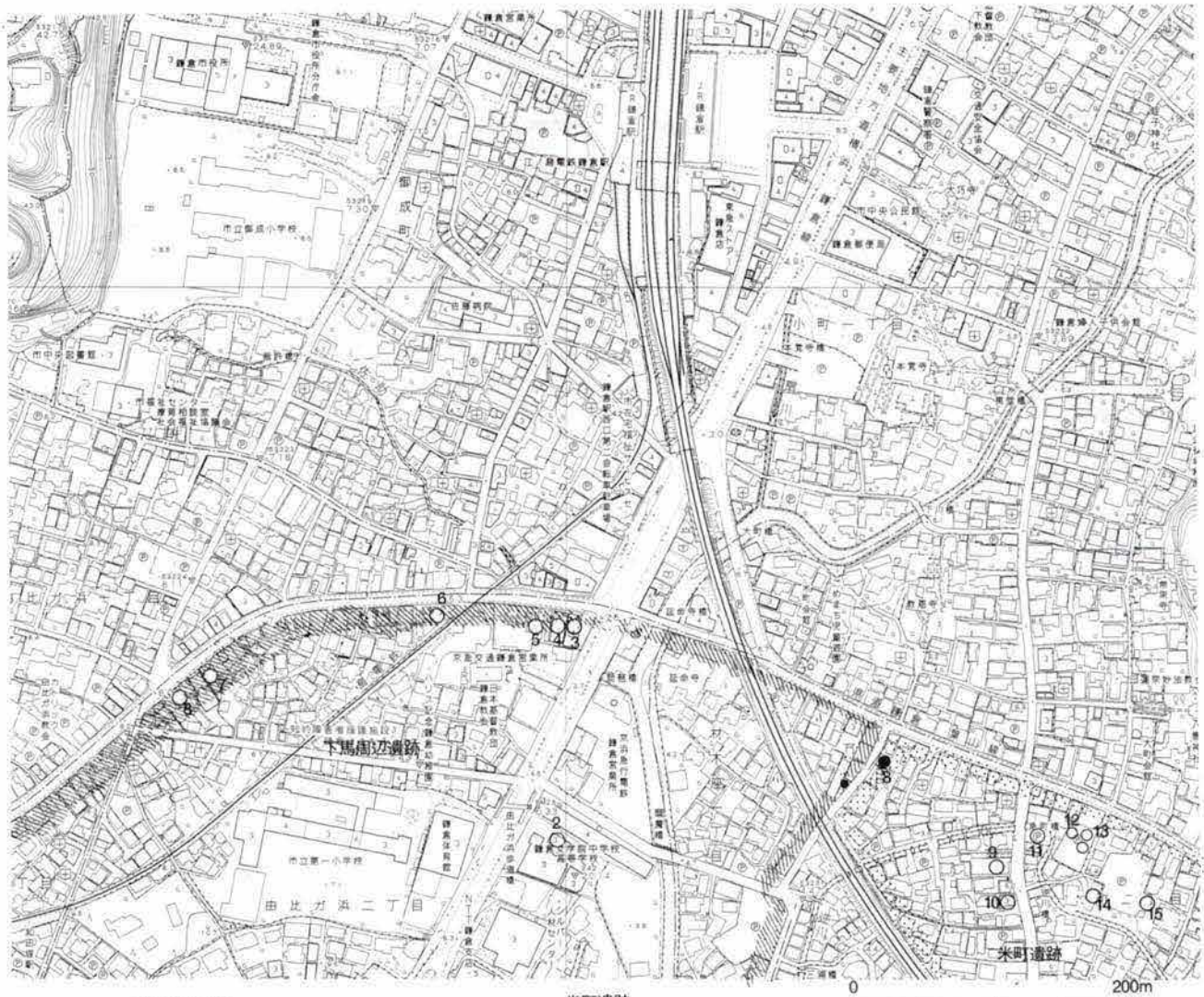
図1に示した範囲内で過去に発掘調査が実施されたのは、14地点である。

下馬周辺遺跡・2地点では13世紀前半～14世紀中葉頃に比定される遺構群が検出された。活況を呈した時期は14世紀前葉を中心とした時期で、当該期の規制を帯びた街区の様相が確認された。6地点は13世紀後半～14世紀末の年代に比定され、柵列による区画、及び区画の内側と外側の住み分けの様相が確認されている。

米町遺跡・13地点からは強固な版築面が検出され、これが道路遺構である可能性を指摘し、車大路、又は古い東海道の可能性があると報告している。15地点からは12世紀第4四半期～13世紀後半の遺構群が検出され、13世紀前半までの武士居住区の様相、また、13世紀前半以降から13世紀後半までの職能活動の様相が確認されている。

また、本遺跡地南方に位置する材木座町屋遺跡内の材木座一丁目910地点では、中世遺構群下に、律令期の遺構群が検出されている。本遺跡地からは160m南方という至近距離にあり、本調査地点において

も律令期の遺構群が存在する可能性が指摘出来、注目される点である。



下馬周辺遺跡

1.本調査地点

2.由比ヶ浜二丁目1011番1地点

3. 〃 〃2番2地点

4. 〃 〃2番10地点

5. 〃 〃2番12地点

6. 〃 〃18番12地点

7. 〃 〃107番1地点

8. 〃 〃106番6、7外地点

米町遺跡

8.大町二丁目992番7他1筆（本報告）

9.大町二丁目933番地点

10. 〃 〃931番地点

11. 〃 〃2308番1地点

12. 〃 〃2313番地点

13. 〃 〃2312番4・10地点

14. 〃 〃2315番ほか地点

15. 〃 〃2324番1・2地点

図1　本調査地点と周辺遺跡

図2　遺跡の位置

引用・参考文献

黒板勝美　1995　吾妻鏡第4　吉川弘文館

大河内勉　1998　「下馬周辺遺跡発掘調査報告書」　下馬周辺遺跡発掘調査団

宗臺秀明他　1992「下馬周辺遺跡」下馬周辺遺跡発掘調査団

降矢順子　2000「米町遺跡」鎌倉市米町遺跡発掘調査団

馬淵和雄他2004「米町遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(1冊分)

第2章　調査経過・グリッド配置・基本層序

調査地点は鎌倉市大町二丁目975番6に位置し、下馬周辺遺跡(県遺跡番号NO.200)内に所在する。平成15年7月1～2日にかけての確認調査の結果、遺跡の存在が確認されたため、本調査を実施することとなり、平成15年10月8日～17日にかけて発掘調査が行われた。

今回の調査は個人住宅建設のための事前の発掘調査であり、調査面積は25㎡、調査における掘削深度は現地表下120㎝までである。

調査経過

平成15年10月8日T・P及び撹乱の掘り上げ。遺構面の検出。

10月9日　中世遺構(土壙1・方形竪穴建築址1)の掘り上げ開始。レベル原点移動(海抜6.4m)。

10月10日　土壙1・方形竪穴建築址1完掘→写真撮影→平面図作成。

10月11日　トラバース(DOIU087～089を使用)で調査区を国土座標に合成する。
溝5掘り上げ、直下(2面)の溝1を確認。

10月14日　土壙2・3(現地表下120㎝まで掘り下げ)、P－1・2・4完掘、溝2(2面)を確認し、掘り上げる。

10月15日　調査区北側の調査、溝3、P－3、方形竪穴建築址2(1面)、溝4、土壙4(2面)、P－4・5掘り上げ開始。

10月16日　調査区北側の遺構群完掘。

10月17日　全景撮影、平面図作成、西壁セクション作成。調査終了。器材撤収。出土遺物は整理用コンテナに3箱。

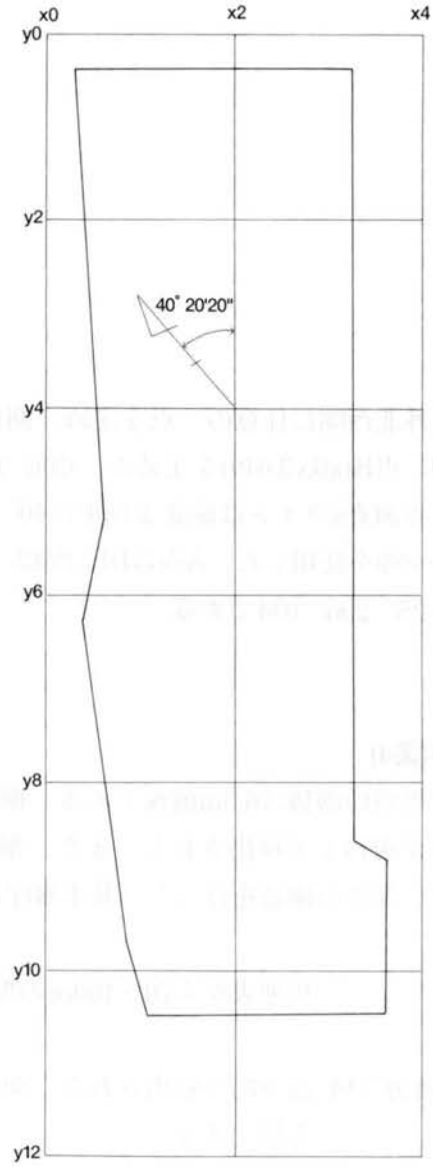


図3　グリッド配置図

グリッド配置と国土座標の合成(図2・3)

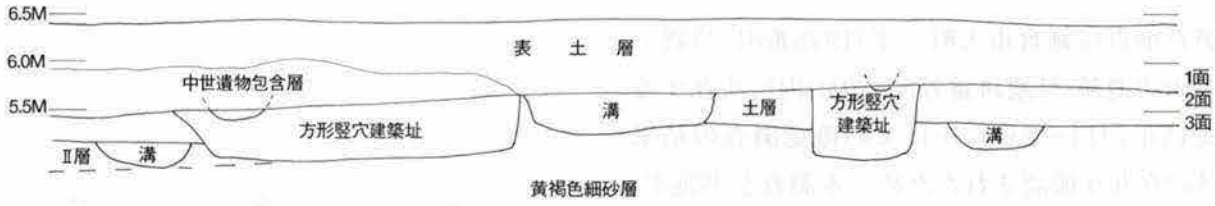


図4　基本層序

調査区外北西隅に任意の一点を定め、測量の原点A(x0、y0)とし、調査区北壁とほぼ平行になるように南側に点B(x0,y3.649)を定めた。南北方向をyライン、東西方向をxラインとして測量の基準点とした。本調査xラインは磁北より東に40°20′20″である。また、国土座標と合成するためにDOIU087～089を使用した。A点は国土座標ではX－76　354　086、Y－25　298　828、B点はX－76　356　425、Y－25　296　034である。

基本層序(図4)

本調査地点の海抜は6.5m前後である。掘削限界(現地表下120㎝)内で、本調査地点からは中世の3時期の遺構群が重複して検出された。また、掘削深度120㎝以上の深さを持つ遺構に関しては、トレンチ調査により、深さの確認を行った。基本層序は以下のとおりである。

表土層　　現地表から70～100㎝の厚さを持つ。現代の盛土、及び建物の基礎杭、塵穴等である。

中世遺物包含層　部分的に検出された。30～60㎝の堆積を持つ。茶褐色砂質土層で、ややしまりをもった層である。

Ⅰ層　　茶褐色砂質土層で1面構成土である。かわらけ砕片、炭化物を若干含み、比較的しまりをもつ層である。

Ⅱ層　　黒茶褐色砂質土層で調査区南側地区における2面構成土である。混入物を含まず、しまりは良好である。

黄褐色細砂層　古代遺構面の基盤層である。調査区北側からは、この面上に中世3面の遺構が検出された。

第3章　検出遺構と出土遺物

今回の調査では中世期の3時期の遺構群が検出された。遺構群は重複して存在していた。調査区壁の土層、及び遺構の切合い関係から、新旧を確定し、3時期の遺構群を確認した。新しい遺構群から、1面、2面、3面と名称をつけた。また、北側では3面レベルで古代基盤層が検出され、この面上に中世遺構群が展開する。また、この層は、南東方向に傾斜してゆく様相が調査区内南東隅に設定したトレンチ内にて確認された。遺物は整理箱で3箱出土した。木製品は出土しなかったが、それ以外の出土傾向は器種、及び組成共に、鎌倉市街地のほかの遺跡地と同様である。以下、各遺構と遺物の説明をする。

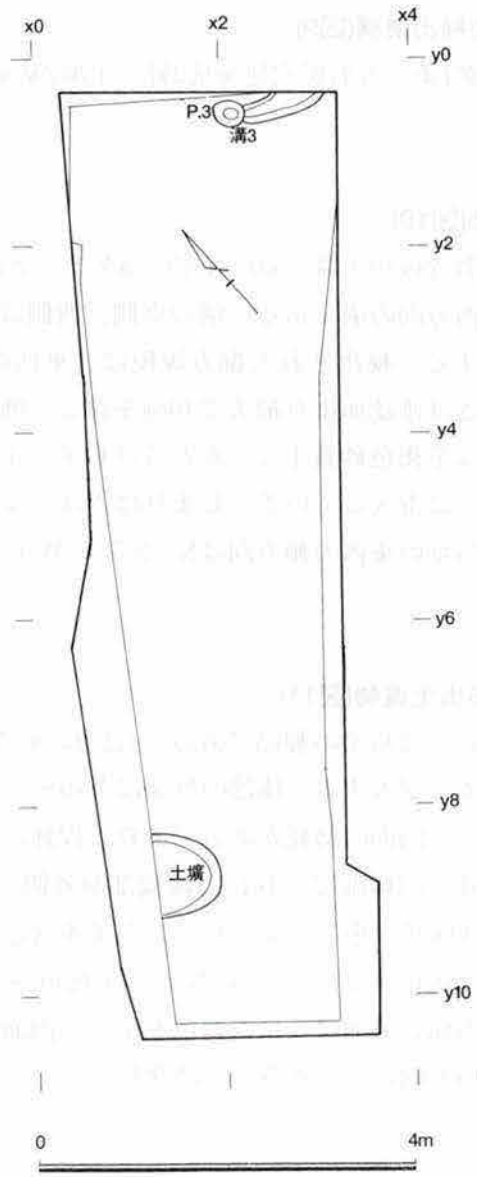


図5　1面遺構配置図

1面検出遺構(図5)

1面で検出されたのは溝1条、土壙1基、ピット1口である。

溝3(図6)

調査区北部、x2～3·y0グリッド内に、海抜5.7mで検出された東西方向の溝である。2面方形竪穴建築址2の上層に検出された。検出規模は東西の長さ1.8m、幅25～30㎝、深さは確認面より10㎝前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。溝の西側は調査区内で止まり、東側は調査区外北東方向に延びる様相である。溝の覆土は灰茶色砂質土層で、土丹粒子を全体的に含み、しまりはさほどない。当址の東西の軸方向はN－60°—Wである。

また、溝3に西接してP－3が検出された。掘方規模は直径30㎝、深さは36㎝である。覆土は黒茶色砂質土で、土丹粒子、黄褐色砂を含み、しまりはない。

土壙1(図7)

調査区南部、x1·y8グリッド内に、海抜5.5mで、遺構の東半が検出された。当址は2面方形竪穴建築址1の上層に検出された。検出規模は、長軸90cm、短軸65㎝、深さは確認面より20㎝前後を測る。覆土は炭が厚く堆積しており、しまりは全くない。

土壙1出土遺物(図8)

1は鉄製品、釘である。

2面検出遺構(図9)

溝1条、方形竪穴建築址2軒、土壙2基が検出された。

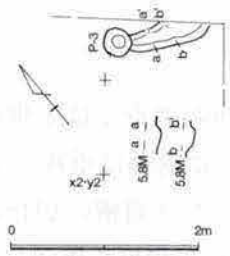


図6　溝3

溝5(図10)

調査区中央部、x0～3·y3～5グリッド内に、海抜5.7mで検出された東西方向の溝である。溝の東側、西側は共に調査区外に延びる様相を呈する。検出された掘方規模は、東西の長さ245㎝、幅180～200㎝、深さは確認面より最大で40㎝を測る。断面の形状は逆台形に近い。覆土は茶褐色砂質土で、かわらけ粒子、土丹粒子、炭化物粒子を全体に均一に混入している。しまりはさほどなく、粘性はない。

当址の東西の軸方向はN－57°－Wを示す。

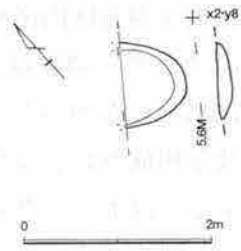


図7　土壙1

溝5出土遺物(図11)

1～3は常滑の製品である。1は甕の底部である。1の復元底径は15.8㎝を測る。胎土は灰色で長石粒子を多く混入する。体部の外面は茶褐色～燈色、内面は茶褐色を呈する。遺存部分全体に降灰している。また、内面の磨耗が顕著であり、捏鉢に転用して使用した可能性がある。2、3は鉢の口縁部で、共に口縁端部が外側に押し拡がったタイプである。2の胎土は灰味焦茶色で、長石粒子、石英を含む。体部は内面が灰味焦茶色、外面が焦茶味灰色を呈する。3の胎土は茶褐色を呈し、微小な長石粒子が混入する。体部内面、外面は共に茶褐色を呈し、内面全体に降灰している。外面の口縁直下は横方向のナデが強いため窪む。

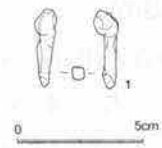


図8　土壙1出土遺物

方形竪穴建築址1(図12)

調査区南部、x0～2·y5～9グリッド内に、海抜5.6mで、当址の東半が検出された。検出規模は南北3.6m、東西1.5m、深さは確認面より58㎝を測る。床面は平坦で、壁は北壁、南壁共に、やや外反して立ち上がる。覆土は、多量の炭化物が混入し、全体的に黒ずんだ茶褐色砂質土層である。また、かわらけ粒子、土丹粒子を均一に含み、しまりはさほどなく、粘性はない。

東西の軸方向はN－58°—Wを示す。

方形竪穴建築址2(図12)

調査区北部、x1～3·y0～1グリッド内で、海抜5.8mで検出された。当址の北壁、及び南壁は調査区外にある。検出規模は南北1·8m、東西1.25m、深さは確認面より80cmを測る。床面は平坦で、壁は直立して立ち上がる。覆土は黒茶色砂質土層で、古代面の黄褐色細砂がブロック状に混入している。下層は灰が粘土化したネチャ層で火災を受けた痕跡である。土層断面から裏込めが確認でき、また立て板の痕跡も確認された。東西の軸方向はN－60°—Wを示す。

方形竪穴建築址1出土遺物(図13－1～2)

1は轆轤成形のかわらけの小皿である。復元口径8cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針、赤茶色粒子を含む。体部中央部に弱い稜線が見られる。

2は砥石である。鳴滝産の仕上げ砥である。

方形竪穴建築址2出土遺物(図13－3～15)

3～6は轆轤成形のかわらけである。3は大皿、4、5は中皿、6は小皿で三器型が出土した。大皿の復元口径は13.2cm、底径7.7cm、器高3.7cmを測る薄手丸深タイプである。胎土は淡燈色を呈し、白針、白色軟礫、赤茶色粒子を含む、キメ細かい精良土である。中皿の復元口径は11cm、底径6cm、器高3.3cm、3cmを測り、4が若干高めであるが、ほぼ同形態の薄手丸深タイプである。胎土は肌色系で、白針、白色軟礫を多く含む。小皿の復元口径は7.5cm、底径4cm、器高1.9cmを測る。体部は底部から開いて立ち上がり、央央部あたりから直立気味に立ち上がる。

7は高麗青磁の梅瓶の肩部である。胎土は暗灰色を呈し、堅緻である。釉調は不透明な緑青色、光沢はない。器表は気孔が多く、また、粗く貫入する。再火を受け、器表は肌荒れしている。

8、9は瀬戸の皿の底部である。8の復元底径は14.5cmを測る。胎土は灰色、釉調は黒緑色を呈する。底部の内面に4条の波状模様を線刻で同心円状に意匠している。底部外面には施釉されない。9の復元底径は9cm

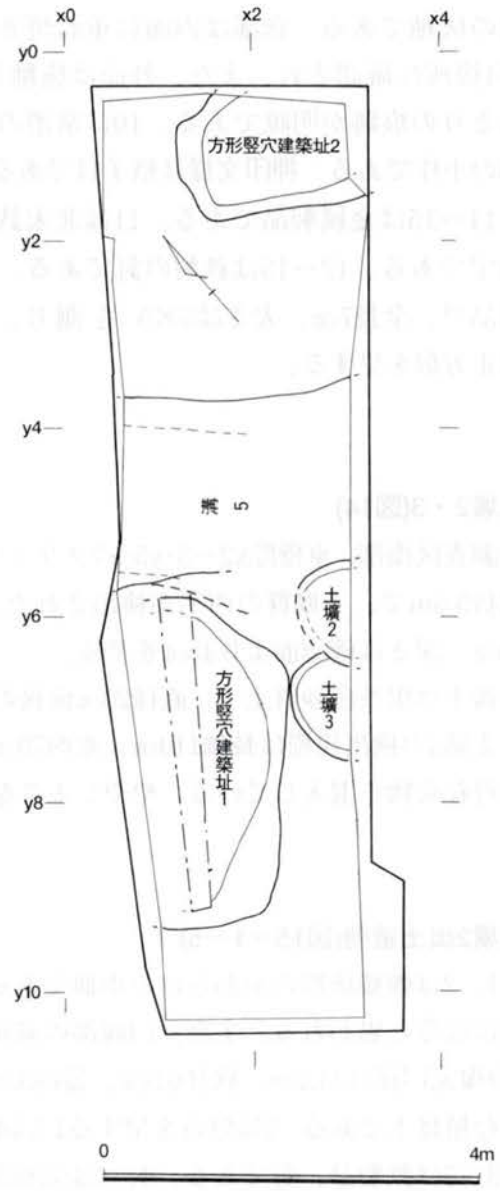


図9　2面遺構配置図

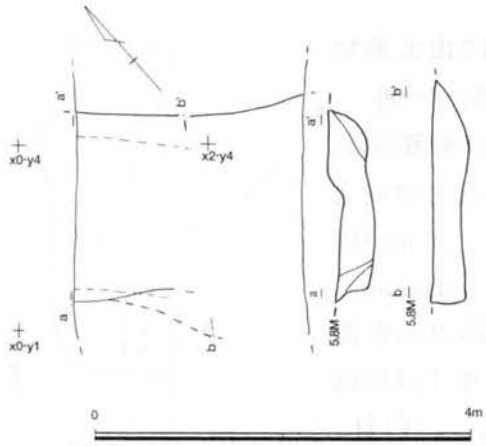


図10　溝5

を測る。胎土は白褐色を呈し、釉調は淡い灰緑色の灰釉である。底部は内面に重ね焼きの痕跡が1箇所に確認され、また、外面は施釉されず、糸きりの痕跡が明瞭である。10は常滑の甕の体部の小片である。押印文様は格子目である。

11～15は金属製品である。11は北宋銭、祥符通宝である。12～15は鉄製の釘である。12は完形品で、全長7㎝、太さは5×5 を測り、断面形は正方形を呈する。

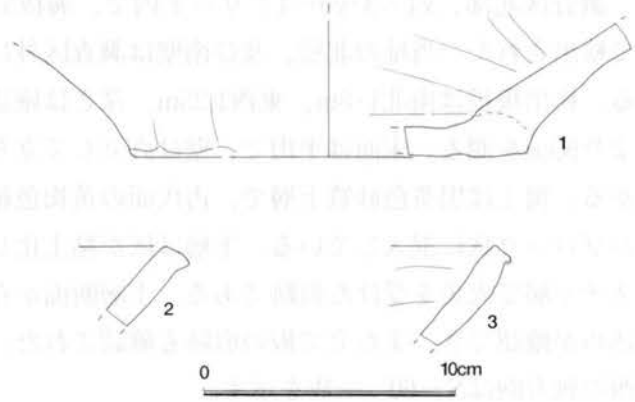


図11　溝5　出土遺物

土壙2・3(図14)

調査区南部、東壁際x2～3·y5～7グリッド内に、海抜5.5mで、土壙群の西半が検出された。土壙2が土壙3を切る。土壙2の検出規模は長軸115㎝、短軸60㎝、深さは確認面より45㎝を測る。

覆土は黒茶色砂質土で、直径20㎝前後の土丹塊が多量に混入している。

土壙3の検出規模は長軸110㎝、東西70㎝、深さは確認面より10㎝前後を測る。覆土は黒茶色砂質土で土丹粒炭物を混入している。ややしまりを有する。

土壙2出土遺物(図15－1～5)

1、2は轆轤成形のかわらけの中皿である。2は口縁部が破損しているが、立ち上がりから想定して中皿になると思われる。また、口縁部の破損は人為的に加工したものであり意図したものと推定される。1の復元口径は11.2㎝、底径6.5㎝、器高3㎝を測る。胎土は灰色味肌色を呈し、白針、雲母、黒色粒子を含む精良土である。2は燈色を呈する1と同質の胎土である。共に、底部内面に強い指なでの痕跡がある。

3～5は鉄製品、釘である。3、4は完形品で、全長5.8㎝、太さ6 四方、7 四方を測り、断面形は方形である。5は錆で膨張した状態で原形は不明である。

土壙3出土遺物(図15－6～9)

6は轆轤成形のかわらけの大皿で、復元口径14㎝、底径9㎝、器高3.9㎝を測る。胎土は燈色を呈し、白針、白色軟礫、赤茶

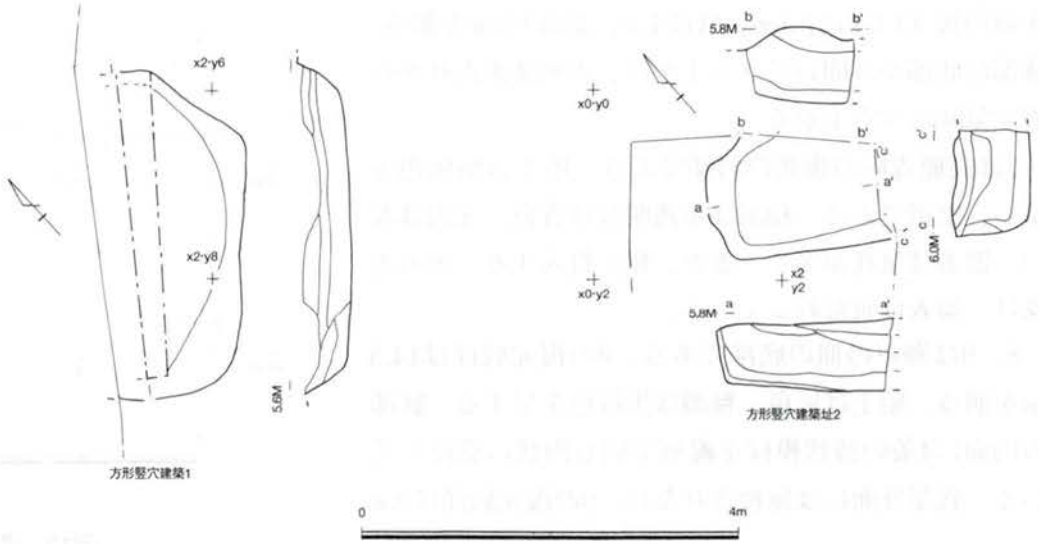


図12　方形竪穴建築址1・2

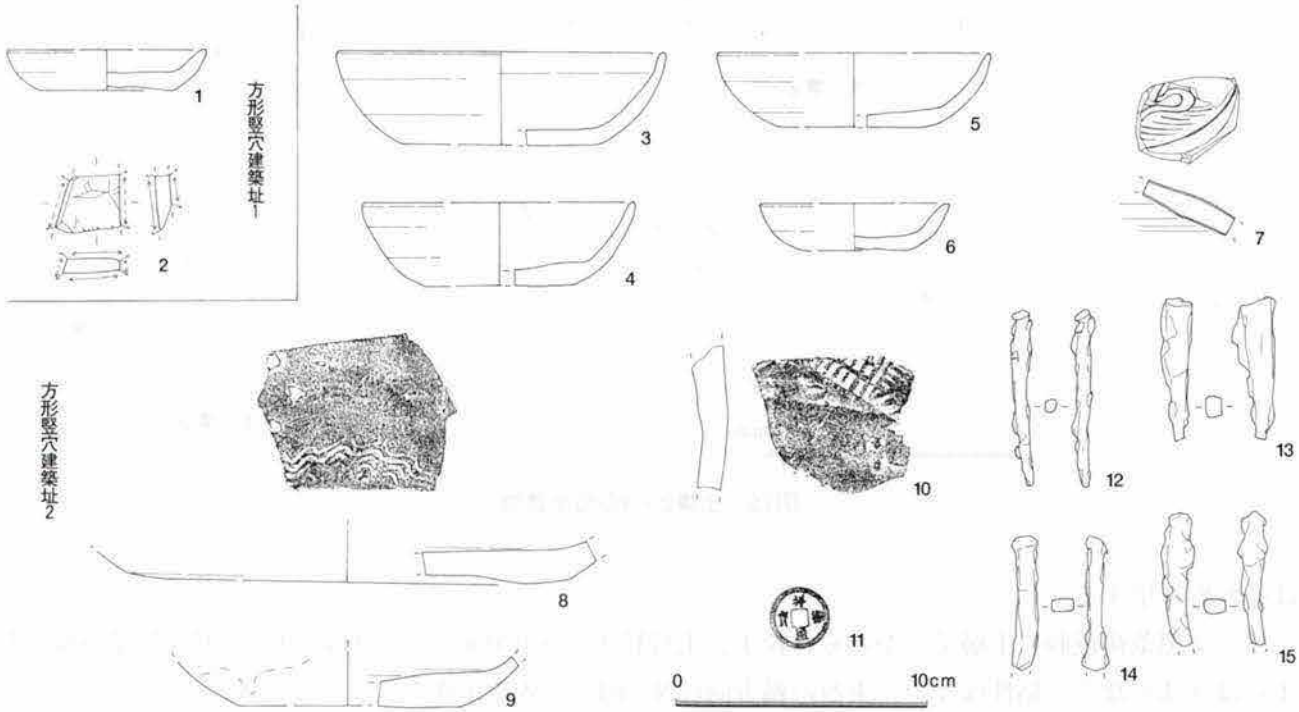


図13　方形竪穴建築址1・2出土遺物

色粒子を含み、若干、粗い。全般的に薄手で、側壁は中央部に若干膨らみを有しつつ、口縁部に向かって外反して立ち上がる。

7は瓦質鉢型手焙りの小片である。口縁部は鉤型を呈する。胎土は燈色、長石、雲母、白色粒子を含む軟質な胎土である。全体に炭化物が付着しているが口唇端部には認められない。

8は砥石である。流紋岩質粗粒凝灰岩で、天草産の中砥である。

9は鉄製品、釘の断片である。遺存した断面は7×9mmの長方形である。

3面検出遺構(図16)

3面からは溝3条、土壙1基、ピット4口が検出された。

溝1(図17)

調査区中央部、x0～3·y3～5グリッド内で、海抜5.3mで検出された調査区を貫通する東西方向の溝である。検出規模は長さ2.4m、幅1.6m、深さは最大で確認面より30cmを測る。断面の形状

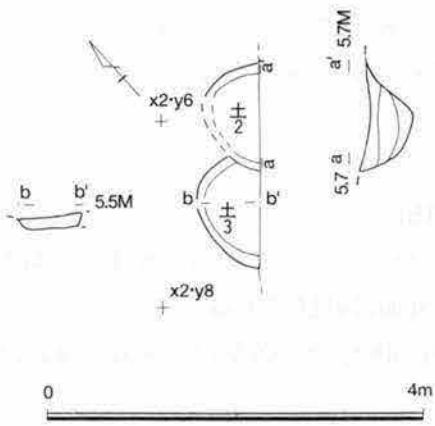


図14　土壙2・3

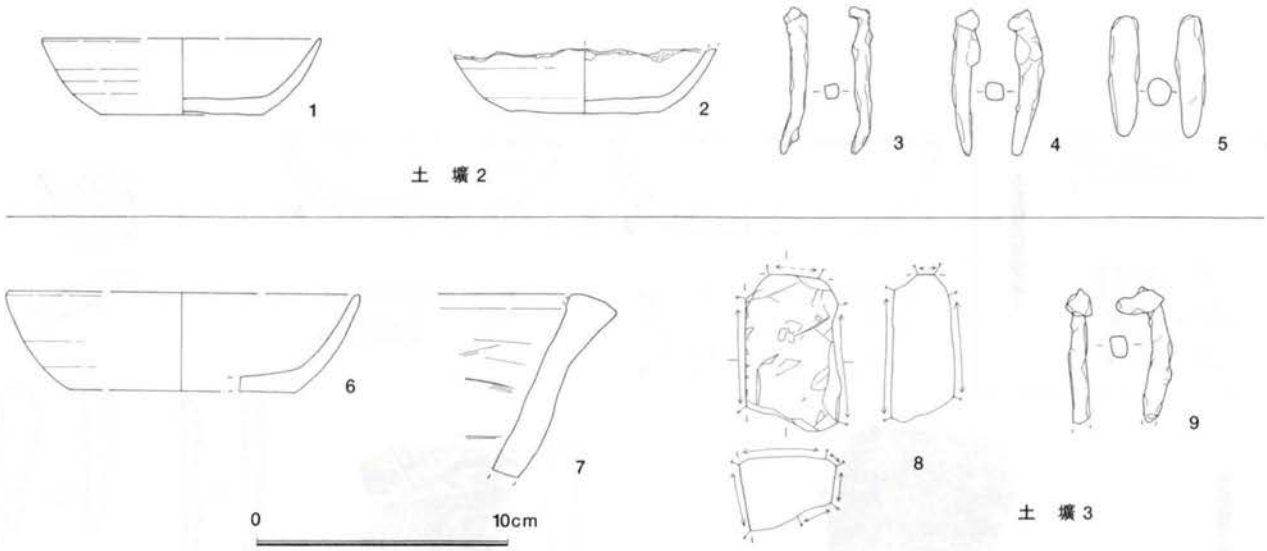


図15　土壙2・3の出土遺物

は逆台形を呈する。

覆土は黒茶褐色砂質土層で、かわらけ粒子、土丹粒子、炭化物粒子を全体に均一に混入している。しまりはさほどなく、粘性はない。東西の軸方向はN－63°—Wを示す。

溝2(図17)

調査区南部、x1～2·y8～10グリッド内で、海抜5.3mで検出された南北方向の溝である。北側は方形竪穴建築址1に切られ、南側は調査区外に延びる。当址の検出規模は東西1·5m、幅1m、深さは確認面より20㎝前後を測る。断面の形状は逆台形を呈する。覆土は黒茶色砂質土層で、土丹粒子をまんべんなく含み、しまりはさほどない。南北の軸方向はN－35°—Eである。

溝4(図17)

調査区北部、x1·y1～2グリッド内に、海抜5.4mで検出された南北方向の溝である。古代基盤層上に検出された。南端は土壙4と切り合い関係を持ち、また、北端は方形竪穴建築址2に切られる。検出規模は南北1m、幅20～25㎝、深さは確認面より10㎝前後を測る。断面形はU字形を呈する。当址の覆土は茶色砂質土層で、混入物はなく、しまりはさほどない。

南北の軸方向はN－62°—Eである。

溝2出土遺物(図18)

1は常滑の鉢、底部の小片である。胎土は灰味燈色を呈し、長石、小石を含む。内面は非常に磨耗しており、また、外面は砂底である。

2は鉄製品、釘の断片で、頭部辺である。確認出来た太さは6×6　で、断面形は方形である。

土壙4(図10)

調査区北部、x1～2·y2～3グリッドに、海抜5.3mで検出された。溝4と同様に古代基盤層上に検出さ

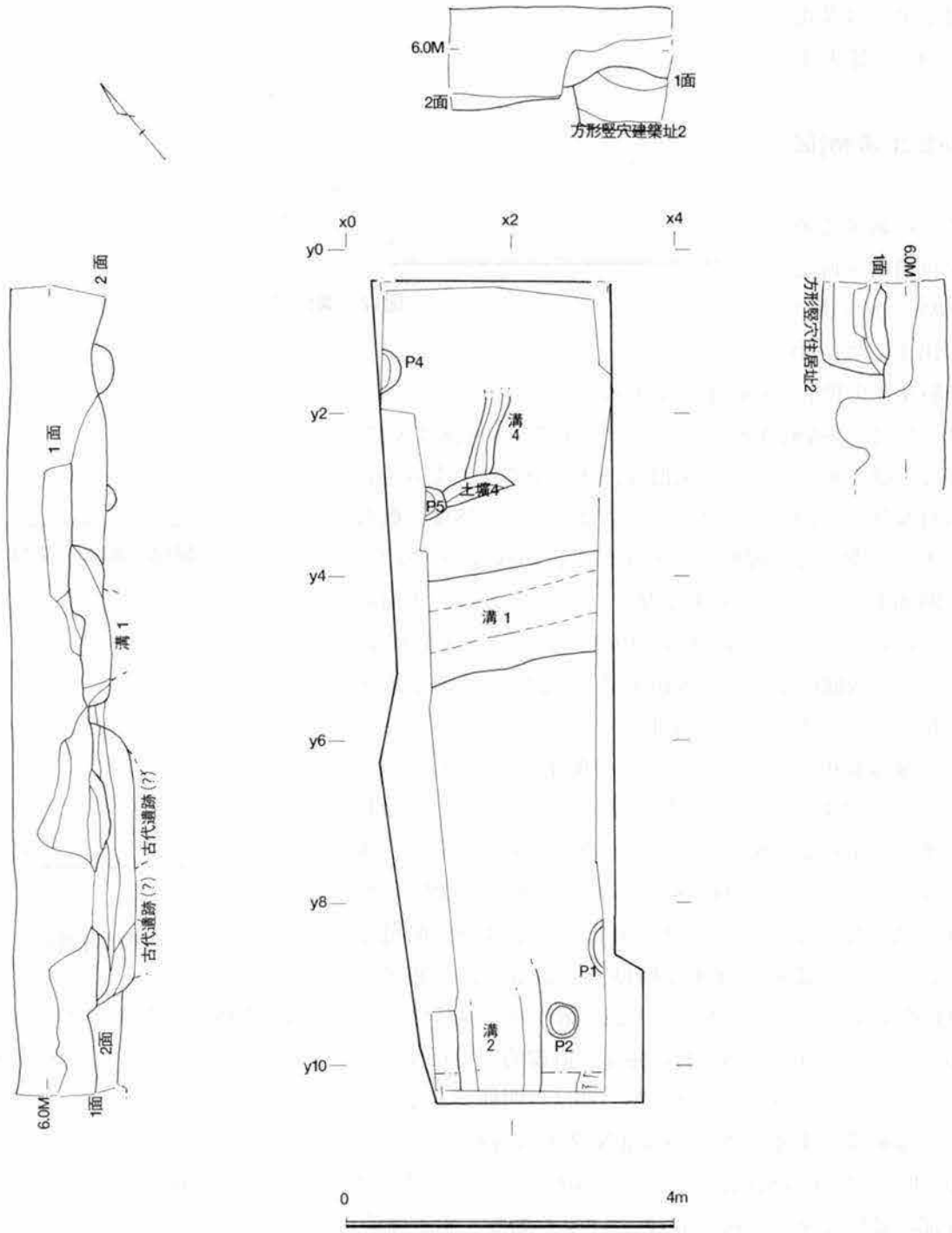


図16　2面遺構配置図

れた。西端はP-5に切られている。検出規模は東西90cm、南北30cm、深さは確認面より30cmを測る。南壁は底部から垂直に立ち上がり、北壁は外反して直線的に立ち上がる。断面の形状は三日月形を呈する。覆土は黒色粘質土層で、黄褐色砂を若干混入し、しまりはさほどない。

P−1・2・4・5(図16)

海抜5.3mで検出された。概ね直径50cm前後の円形を呈し、深さは確認面より10〜30cmである。覆土

は黒茶褐色砂質土で、覆土中には黄褐色砂が多く混入する。

中世面出土遺物(図20～21)

ここに掲載する遺物は中世遺構を確認するために掘り下げた時に出土した、中世包含層及び中世層からのものである。

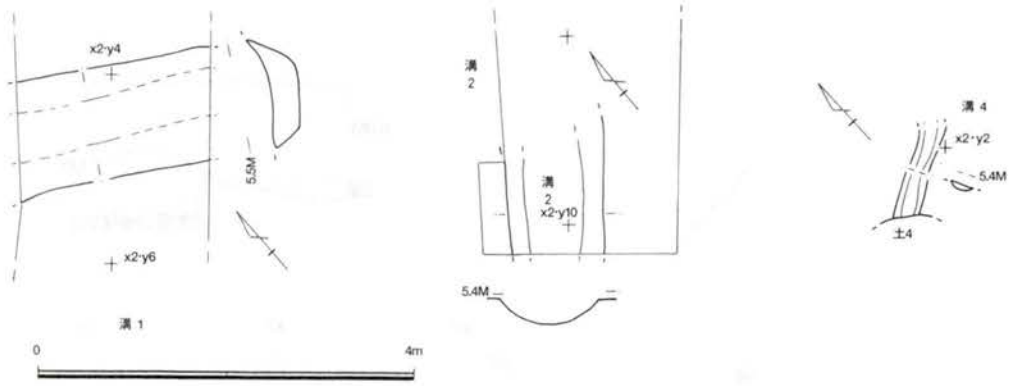


図17　溝1・2・4

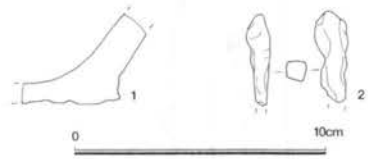


図18　溝2出土遺物

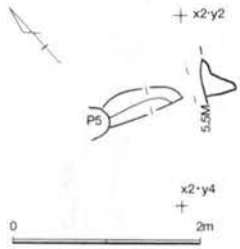


図19　土壙4

図20－1～25は轆轤成形のかわらけである。1～18は大皿、19～25は小皿である。1、2の大皿は、体部中央部に丸みを持ち、口唇端部が内向する薄手タイプである。3～18は、概ね体部が大きく開いて直線的に立ち上がり、口縁部が端反り、また、断面形が逆台形を呈する厚手タイプである。大皿の復元口径は12～14.5㎝、底径6.8～10㎝、器高3～4㎝を測る。薄手タイプの大皿の胎土は、燈色を呈し、白針、赤茶色粒子を含む精良土である。また、厚手タイプの胎土は3、15～17が燈色、他は肌色系である。燈色系の胎土には白針、雲母、赤茶色粒子が含まれ、また、肌色系の胎土には白針、雲母、白色軟礫が含まれる。焼成は両タイプ共に良好である。小皿の口径は、6.8～9.5㎝、底径3.8～6.5㎝、2～2.4㎝を測る。19は口径、底径比の小さいタイプである。胎土は淡い肌色系で、白針、雲母、微砂を交える精良土である。20は肌色系で、白針を交える精良土である。大皿の薄手タイプに伴う。21～25は大皿の厚手タイプに伴う。21、22、25は体部に丸みを持ち、23、24は体部が直線的に外反すタイプである。胎土は22、23は肌色系で、21燈色系である。2、3、14、17、18、23、25は灯明皿である。

26～30は磁器である。26～29は龍泉窯系の青磁である。26は劃花文碗の口縁部である。復元口径は14.7㎝を測る。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。不透明な灰味緑色釉が施釉されており、光沢はない。27は底部の破片である。復元底径は3.8㎝を測る。胎土は淡青灰色を呈し、堅緻である。釉調は灰味緑褐色、光沢は良好である。高台畳付は施釉されない。器表の内外面は細かく、密に貫入する。28は碗の口縁部の破片である。復元口径は14.2㎝を測る。胎土は暗灰色、釉調は不透明な灰緑色で、光沢はない。口唇端部が端反る器型である。器表内外面は細かく貫入する。29は双魚文鉢の底部である。復元底径は5.8㎝を測る。胎土は淡青灰色を呈し堅緻である。釉調は不透明な灰緑色、光沢は若干ある。高台内のみ露胎である。30は白磁の口兀皿である。復元口径は11.9㎝、底径7㎝、器高3㎝を測る。胎土は白色を呈し、釉調は灰白色、光沢は良好である。

31～35は瀬戸である。31～34は灰釉の折縁皿で、31～33は深皿の口縁部、34は底部である。31の復元口径は26.2㎝を測る。胎土は白褐色を呈する。釉は透明度が高い淡い灰黄緑色を呈し、光沢は良好である。器表には内外面共に、微細な貫入が密である。32の復元口径は28.7㎝を測る。胎土は灰色を呈する。

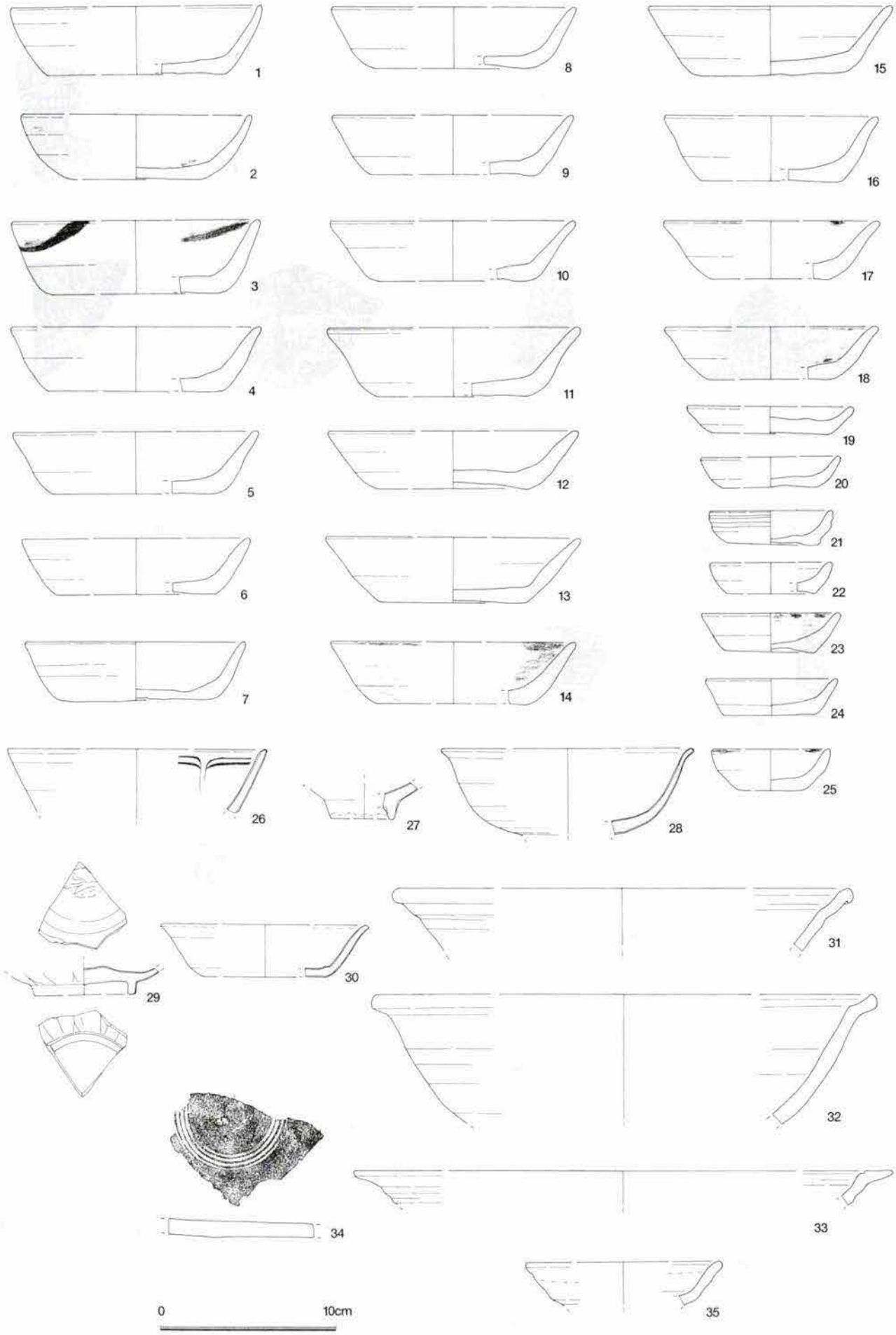


図20　中世面出土遺物(1)

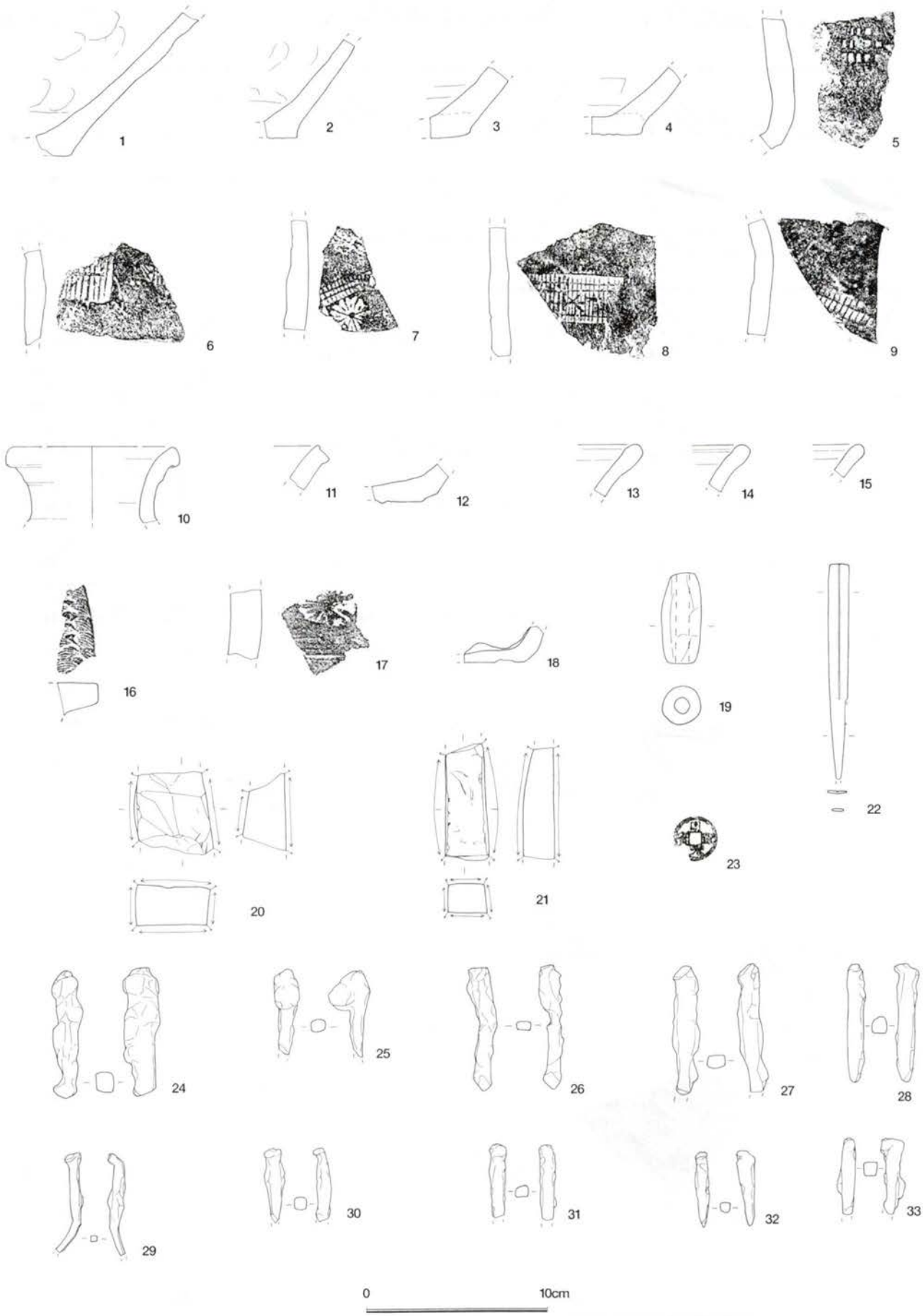

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
10cm

図21　2面出土遺物(2)

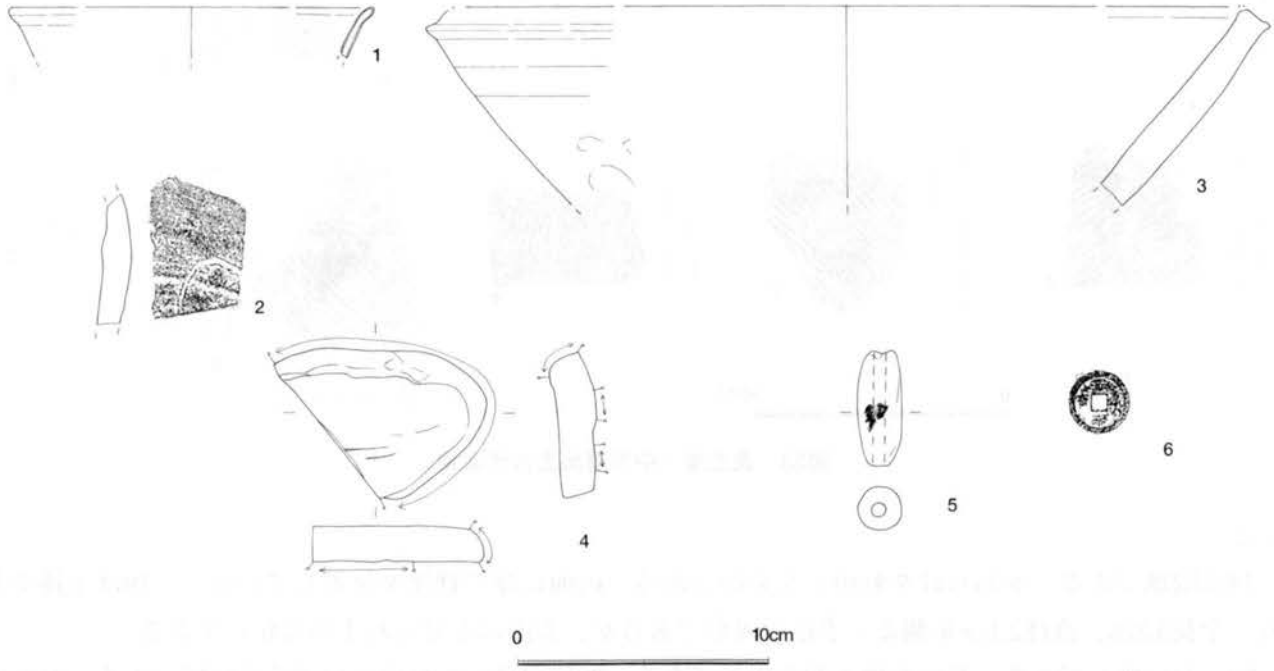


図22　表土層出土遺物

釉は全面的に剥離しているが、一部に不透明な灰白色釉が遺存している。体部内面、及び口縁緑色である。微細で密な貫入が観察される。34は32と胎土、釉調が同様であり同一個体の可能性がある。底面内部中央に条線で3個の同心円を印刻している。35は黒釉の縁釉小皿である。復元口径は11㎝を測る。胎土は白灰色を呈する。釉調は茶味黒色で、光沢は良好である。

図21－1～12は常滑である。1～9は甕で、1～4は底部、5～9は体部の押印文の拓影である。底部は全て砂底である。1の胎土は燈色を呈し、長石粒子を混入する。体部内外面共に焦茶色を呈する。体部外面は箆状の工具、またはササラ状の工具による縦方向のなで調整、また、内面は工具、指頭による横なで調整である。2の胎土は黒灰色を呈し、1～1.5㎝大の長石を含む。体部内面は黒灰色、外面は暗紫褐色で、外面には全体に薄く降灰する。体部内面は指頭と工具による横なで調整、外面は箆状工具による斜め方向のなで調整である。3の胎土は暗灰色を呈し、1cm大の長石、小石を含む。体部は内外面共に茶燈色を呈する。内面は若干摩滅しており、捏鉢に転用した可能性がある。4の胎土は燈色を呈し、長石、黒色粒子、雲母、淡燈色軟礫を混入する。体部は箆状工具によるなで調整がなされており、内面は横方向、外面は縦方向の調整である。また、体部外面には部分的に煤が付着している。10は壷の口縁部である。復元口径は9.5㎝を測る。胎土は灰色を呈し、黒色粒子を混入する。体部内外面共に暗赤褐色を呈し、口縁部のみに降灰している。11、12は鉢の破片である。11は口縁部、12は底部である。共に胎土は、灰色を呈し、長石粒子を混入し、器表は灰色である。12の内面には厚く降灰している。

13～15は山茶碗窯系捏鉢の口縁部の破片である。13の胎土は灰色を呈し、長石、黒色粒子を含み粗い。口唇端部は丸く収まる。14の胎土は灰色を呈し、長石、若干の小石を含み比較的精良である。口唇端部は若干角張る。15の胎土は暗灰色を呈し、長石、黒色粒子を含み硬質で精良である。口唇端部は丸く収まる。

16は瓦質製品で、風呂の鍔であろうと思われる。胎土は白桃色を呈し、長石粒子、赤茶色粒子を含む。器表は淡燈色を呈し、表面には草花文を線刻しており、また、裏面は横方向の磨きがなされている。

17は瓦質手焙りの体部の破片である。胎土は灰色を呈し、1～5 大の長石、黒色粒子を含み粗い。体部は外面が灰味燈色を呈し、菊花のプタンプ文が1つ押捺されている。内面には炭化物が厚く付着して

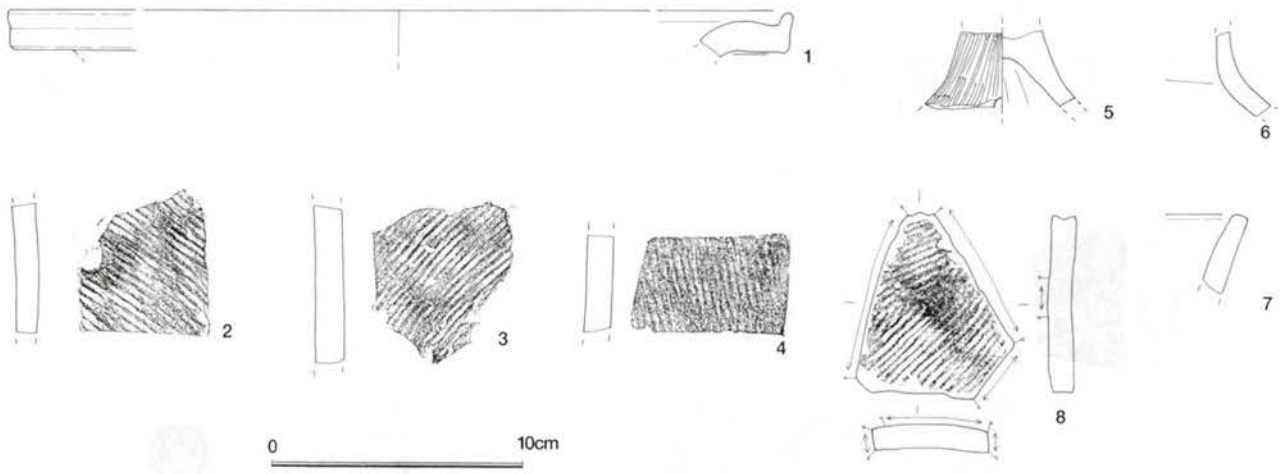


図23　表土層・中世層出土古代遺物

いる。

18は取瓶である。かわらけを転用したものである。内面に厚く鉄滓が付着している。　19は土錘である。全長5.2㎝、直径2.1㎝を測る。手捻り成形であるが、表面はなでられ丁寧な作りである。

20、21は砥石である。共に産地不明の中砥である。20は白色～小豆色を呈する凝灰岩である。21は灰黒色を呈し、砂岩に近い。

22は骨製品、笄である。先端部が若干欠損しているが、ほぼ完形品で11.9㎝の長さを遺存している。基部巾は2.1㎝、全体に厚さ1mmと薄い作りである。中央部の溝は長さ7.5㎝、幅0.5mm、深さ0.5mmを測り、線状を呈する。

23～33は金属製品である。23は開元通宝(南唐)である。24～33は鉄製品、釘である。26、28、32は完形で出土した。26は全長6.8㎝、太さは8×4mm、28は全長5.6㎝、太さ8×9mm、32は全長4.3㎝、太さ6×6mmである。

表土層出土遺物(図22)

1は龍泉窯系青磁の碗の口縁部である。復元口径は14.5㎝を測る。胎土は暗灰色、釉調は不透明な灰緑色で、光沢はない。口唇端部が端反る器型である。器表内外面は細かく貫入する。図20－28と形状、胎土が一致しており、同一個体の可能性がある。

2、3は常滑である。2は甕の体部で、体部外面に印刻された窯印を拓影したものである。3は鉢である。復元口径は33.4㎝を測る。胎土は暗灰色を呈し、1～3 の長石を多く混入する。体部外面は暗赤褐色、内面は暗紫褐色を呈する。また、内面に厚く降灰している。

4は研磨痕のある陶片である。渥美の肩部付近の破片である。

5は土錘である。全長4.6㎝、直径1.8㎝を測る。表面は丁寧になでられている。

6は銭、寛永通宝である。

表土層・中世層出土古代遺物(図23)

1～4は須恵器である。1は壷の口縁部である。復元口径は31.2㎝を測る。胎土は褐灰色を呈し、黒色粒子、白色粒子を含む。2～4は甕の胴部の破片である。

5～7は土師器である。5は器台、または高杯の脚部であると思われる。胎土は淡燈色を呈し、黒色粒

子、雲母、白色粒子を混入する。外面はヘラミガキ、内面はナデ成形である。2孔が確認された。6は壷の頚部である。胎土は灰味の肌色を呈し、雲母、白色粒子を含む。外面はヘラミガキ、内面はナデ成形である。赤彩を施した痕跡が一部に観察される。7は甕の口縁部である。胎土は暗燈色を呈し、黒色の胎芯を残す。胎土には雲母、白色粒子を交え粗い。

8は研磨の痕跡のある陶片である。須恵器甕の胴部の破片である。

第4章　まとめ

今回の調査では、中世期の3時期の遺構群が検出された。遺構群は層序的に検出出来ず、重複して検出され、また、各時期の遺構からの出土遺物も少なく、遺構群の各々の年代は明確には出来なかったが、全般的な出土遺物の様相から当遺跡地は14世紀中頃～15世紀前半に比定されると想定される。以下、各時期の様相を述べ、若干の考察を加えまとめとする。

中世3面

検出された溝1(東西溝)と、溝2(南北溝)は直交関係にあり、検出規模は僅かではあったが、様相から、地割溝と思われる。本遺跡地内では溝の北東地域に遺構群が展開しており、商業地区・町屋の一端が検出されたと考えられる。

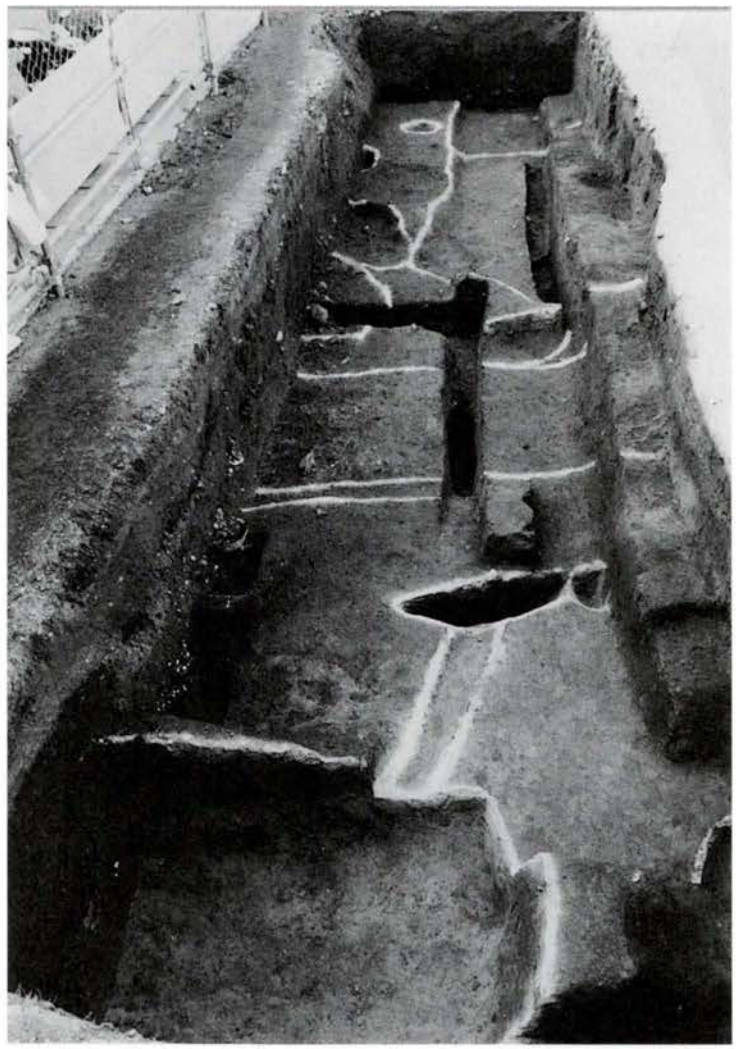
中世2面

溝1は、溝5に作り変えが成されるが、軸方向、規模共に前時期とさほど変化はない。南北溝は埋められ、その地域は建造物をつくる空間へと変化する。南北溝を移動して、建物の造成地区としており、全般的に土地利用の方法になんらかの変化があったと想定される。しかし、検出遺構は方形竪穴建築址、土壙等であることから、この地域は依然として、町屋地域のままであったであろうと想定される。また、方形竪穴建築址2の覆土から高麗青磁の梅瓶の小片が出土している。高麗青磁は当時高級な調度品(威信財)として輸入されたものであり、本調査地点のような町屋地区にはそぐわないものである。恐らく、方形竪穴建築址2を廃棄する際の埋土のなかに混入していたものと思われ、この地域の持ち物ではないと考えられる。

中世1面

構築物はなく、土壙、または小規模な溝だけの閑散とした空間へと変化する。調査区北部の凡そ半分が、撹乱を受けており、或いは遺構の存在の可能性は否定出来ないが、この時期のこの地域は、生活域の裏手であったと思われる。

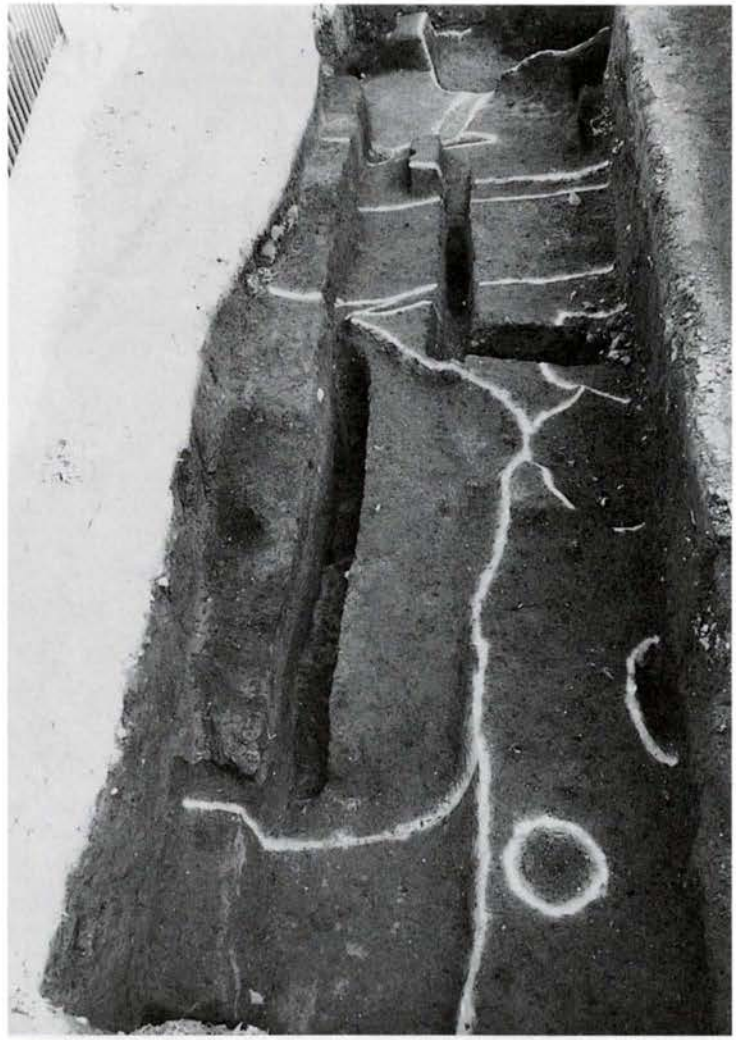
今回の発掘調査は小規模ながら、町屋地区の一角の様相、また、若干の土地利用の変化が見て取れたと思われる。検出された中世遺構群は、近辺の調査で確認された黄褐色細砂をベースとした古代層を大きく掘り抜いて構築されていた。今回は発掘調査の深さに制限があったため、古代面の調査はできなかったが、第1章で述べたとおり、当遺跡地の近辺に律令期の遺跡が確認されており、また、本遺跡地内からも古代の遺物が確認されており、おそらく、当遺跡地付近においても、当該期、またはそれ以前の遺跡が存在するであろうと想像する。



◀A・全景（北から）

▼溝　1・5（東から）

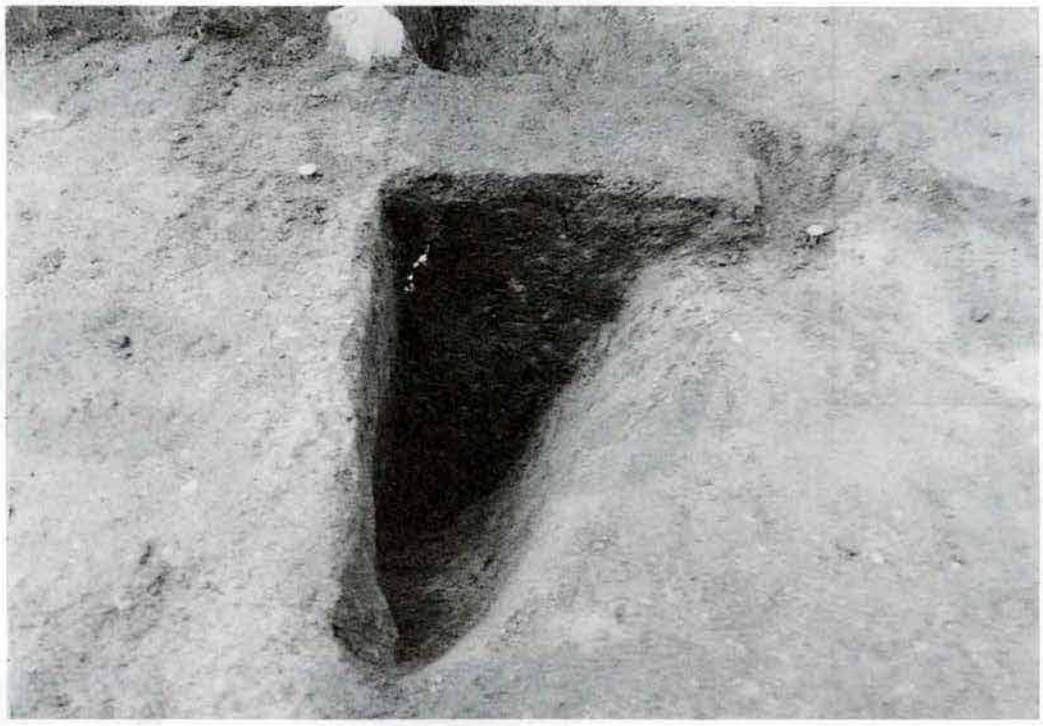
図版 2



◀A・全景（南から）

◀B・方形竪穴建築址1（東から）

▲A. 方形竪穴建物址2（南西から）



▲B.　土壙4（南から）

図版 4

溝 5

11-3

土壙 2

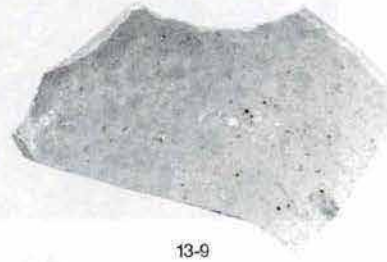
15-1

15-2

13-3

13-8

13-4



13-9

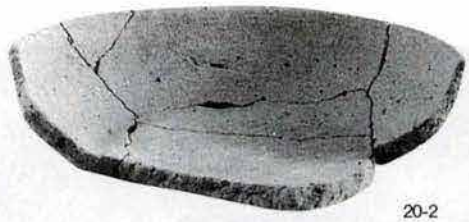
13-7

方形竪穴建築址 2

土壙 3

15-7

中世面 (1)

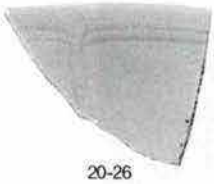


20-2

20-21

20-5

20-23



20-26

20-15

20-24

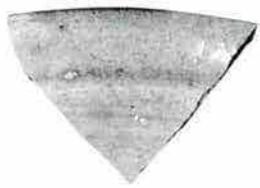
20-27

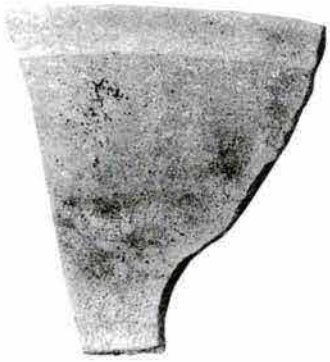
出土遺物（1）

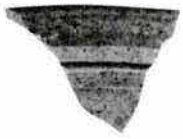
20-28

20-29

20-30


20-31


20-32


20-33

20-34

20-35

中世面 (2)

21-10

21-11

21-14

21-16

21-19

21-22

表土層

22-3

22-5

古代遺物

23-5

23-6

出土遺物 (2)

永福寺跡（鎌倉市No.61）

ようふくじあと

二階堂字亀ヶ渕247番13地点

例　言

1．本報文は、永福寺跡（鎌倉市№ 61）内、鎌倉市二階堂字亀ヶ渕 247 番 13 地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告である。
2．発掘調査は、個人専用住宅の建設に先立ち平成 15 年 9 月 10 日から 10 月 14 日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は 42.25 ㎡。
3．調査体制は以下の通り。
　調　査　員　汐見 一夫　小泉 衣理　鍛治屋 勝二
　調査補助員　沖元 道　吉田 智哉
　調査協力者　小俣 勉　牛嶋 道夫　倉澤 六郎　渡邊 輝彦
4．本報文の整理作業は汐見・小泉が行なった。原稿執筆は第 1 章第 2 節・第 2 章・第 3 章の遺構を汐見が、第 1 章第 1 節・第 3 章の遺物を小泉が、第 4 章は両名討議の上汐見が文責を負い全体の編集を行なった。又、本報文に使用した写真は遺構を汐見・鍛治屋が、遺物を小泉が撮影した。
5．発掘調査から本報文作成に至るまでに、以下の機関から御教示と御協力を賜った。
　㈱鎌倉市シルバー人材センター　㈲鎌倉遺跡調査会　㈱博通　東国歴史考古学研究所　鎌倉考古学研究所
6．本報文に関わる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

本 文 目 次

第 1 章　環境と立地
　第 1 節　遺跡の範囲と調査地点 ……342
　第 2 節　周辺の調査地点 ……342
第 2 章　調査の概要
　第 1 節　調査に至る経緯及び調査の経過 ……345
　第 2 節　堆積土層 ……346
第 3 章　遺構と遺物
　第 1 節　4 面の遺構と出土遺物 ……348
　第 2 節　3 面の遺構と出土遺物 ……349
　第 3 節　2 面の遺構と出土遺物 ……351
　第 4 節　1 面の遺構と出土遺物 ……356
第 4 章　調査成果 ……360

挿図目次

図1　永福寺跡の範囲と調査地点 ……343
図2　調査地周辺図 ……344
図3　グリッド配置と堆積土層 ……345
図4　4面全測図 ……347
図5　4面遺構内出土遺物 ……348
図6　3面全測図 ……349
図7　3面遺構内・3面構成土出土遺物 ……350
図8　2面全測図 ……352
図9　2面建物5・建物6 ……353
図10　2面遺構内・2面構成土出土遺物 ……355
図11　1面全測図 ……357
図12　1面遺構内・1面構成土出土遺物 ……358
図13　採集遺物 ……359
表1　出土遺物計測表（1） ……361
表2　出土遺物計測表（2） ……362
表3　出土遺物計測表（3） ……363
表4　出土遺物計測表（4） ……364
表5　出土遺物破片数表 ……364

写真図版目次

図版1
1．1面全景（南から） ……365
2．1面北半（南東から） ……365
3．1面土坑7堆積土層（北西から） ……365
4．1面土坑7（北から） ……365

図版2
1．2面全景（南から） ……366
2．2面南半土丹地業（部分・南から） …366
3．2・3面E－2付近（東から） ……366
4．2～3面炭層上遺物出土状況（北東から） 366
5．2面遺物出土状況（北から） ……366
6．2～3面炭層（東から） ……366

図版3
1．2・3面柱穴列と建物（南から） ……367
2．同　上（北から） ……367
3．同　上（東から） ……367

図版3
4．3面柱穴列2（西から） ……367
5．3面柱穴列2・2面建物と溝（東から） …367
6．2面建物北側柱穴と溝（西から） ……367
7．3面土坑12下層堆積土層（北西から） …367

図版4
1．4面全景（南から） ……368
2．4面全景（東から） ……368
3．4面ピット404（東から） ……368
4．4面ピット402（東から） ……368
5．西壁堆積土層（北東から） ……368
6．同左・北端部分（東から） ……368
7．北壁堆積土層（南から） ……368
8．東壁堆積土層（北西から） ……368

図版5　出土遺物1 ……369
図版6　出土遺物2 ……370

第１章　環境と立地

第１節　遺跡の範囲と調査地点

本調査地点は鎌倉市二階堂字亀ヶ淵247番13地点に所在し、ＪＲ鎌倉駅から直線距離で北東に約２ｋｍ、国指定史跡「永福寺跡」中心部から北へ約300ｍに位置している。遺跡台帳では太平山をも内包する永福寺跡（No. 61）内に含まれ（図１）、南西縁で小河川が合流する地点に在る。

史跡永福寺跡は源頼朝が建立した三大寺院（鶴岡八幡宮・勝長寿院・永福寺）の一つで、寺域は旧字四ッ石・三堂・西ヶ谷・亀ヶ淵の広い範囲に及んだ。文治５年（1189）奥州藤原一族征伐の際に、平泉中尊寺二階大堂大長寿院の荘厳な精舎を模して、奥州合戦で死んだ義経・泰衡を始め多くの将兵を鎮魂し、三有の苦果を救うために建立したと伝えられるが、東国を制した頼朝の威勢を誇示する意図も含まれていると思われる。永福寺は二階堂と呼ばれ、現在もこの地域の地名となっている。

文治５年（1189）12月に事始めを行い、建久３年（1192）に二階堂が、そして相次いで阿弥陀堂、薬師堂が完成し、建久５年（1194）には境内の伽藍がほぼ揃ったと考えられる。字名でみると四ッ石は総門跡、三堂は二階大堂・薬師堂・阿弥陀堂跡および苑池、西ヶ谷・亀ヶ淵周辺には僧坊または寺関係の建物があったとされる。火災に因り何度か焼失と再建を繰返しながら鎌倉及び室町幕府に保護されて寺勢を保ち続け、毎年行われる吉書始めに勝長寿院と交代で記されていたが、応永12年（1405）の火災で焼失以降は吉書始めに書かれなくなる。享徳３年（1454）頃成立した『鎌倉年中行事』には「正月十一日　近代永福寺回禄以降、吉書始めに書かれなくなった」と記されている事から、15世紀前半までは存在し、火災で焼失した後に再建されず廃寺になったと考えられる。

本調査地点周辺の亀ヶ淵は、共に滑川の支流であり北から流下する杉ノ川と、天台山および六国峠を源とする二階堂川の侵食でできた二つの開折谷、杉ヶ谷と獅子舞の分岐点にあたる。杉ヶ谷は南東に開口し、現況の平地部分は奥行350m程で比高差は約22m、獅子舞谷はほぼ西に開口し平地奥行250m程で約15mの比高差がある。それぞれの谷戸には小さな支谷がいくつかあり、これら谷戸・小支谷には鎌倉から室町期に永福寺の僧坊等が建ち並んでいたという。金沢文庫等に残る文献の記載からは、永福寺周辺にあった杉ヶ谷坊・真言院・石井御坊・亀ヶ淵坊・松本坊などの僧坊の名前を見出すことができるが、各坊の位置は未だ特定されていない。

第２節　周辺の調査地点

永福寺跡（No. 61）内ではこれまでに４地点で調査されている（図１・２）。地点１（二階堂字杉ヶ谷452番３）は宅地造成に先立つ丘陵斜面の調査で、掘立柱建物・土坑・溝・井戸・火葬址等や山腹にはやぐらが発見されている。掘立柱建物は14世紀代に建てられた後、15世紀代には埋め立てられて火葬を行う場となっている。地点２（二階堂字獅子舞613番４外）は共同住宅建設に先立つ調査で、２時期の生活面が発見されている。１面では掘立柱建物・礎石列・柱穴列・貯蔵穴群・井戸、２面では建物跡・井戸・山裾を巡る排水溝等が発見されている。遺構検出の際に確認された岩盤の最高位は11.5m前後で、各面に大きな年代差はなく13世紀後半とされ、出土遺物には銅製如来像や永福寺叩き目のある平瓦等がある。地点３（二階堂字杉ヶ谷520番１外）は個人住宅造成に先立つ調査で、13世紀代の流路と３時期の生活面に石垣・道路・礎石建物・掘立柱建物・溝・柵列・井戸・荼毘遺構等が発見されている。これらの遺構群から、14世紀前半～15世紀前半までの間に山裾を切り開いて道路を整備し石垣を積み、礎石建物や掘立柱建物、井戸・溝・庭などの居住空間が整えられたと考えられている。その後、建

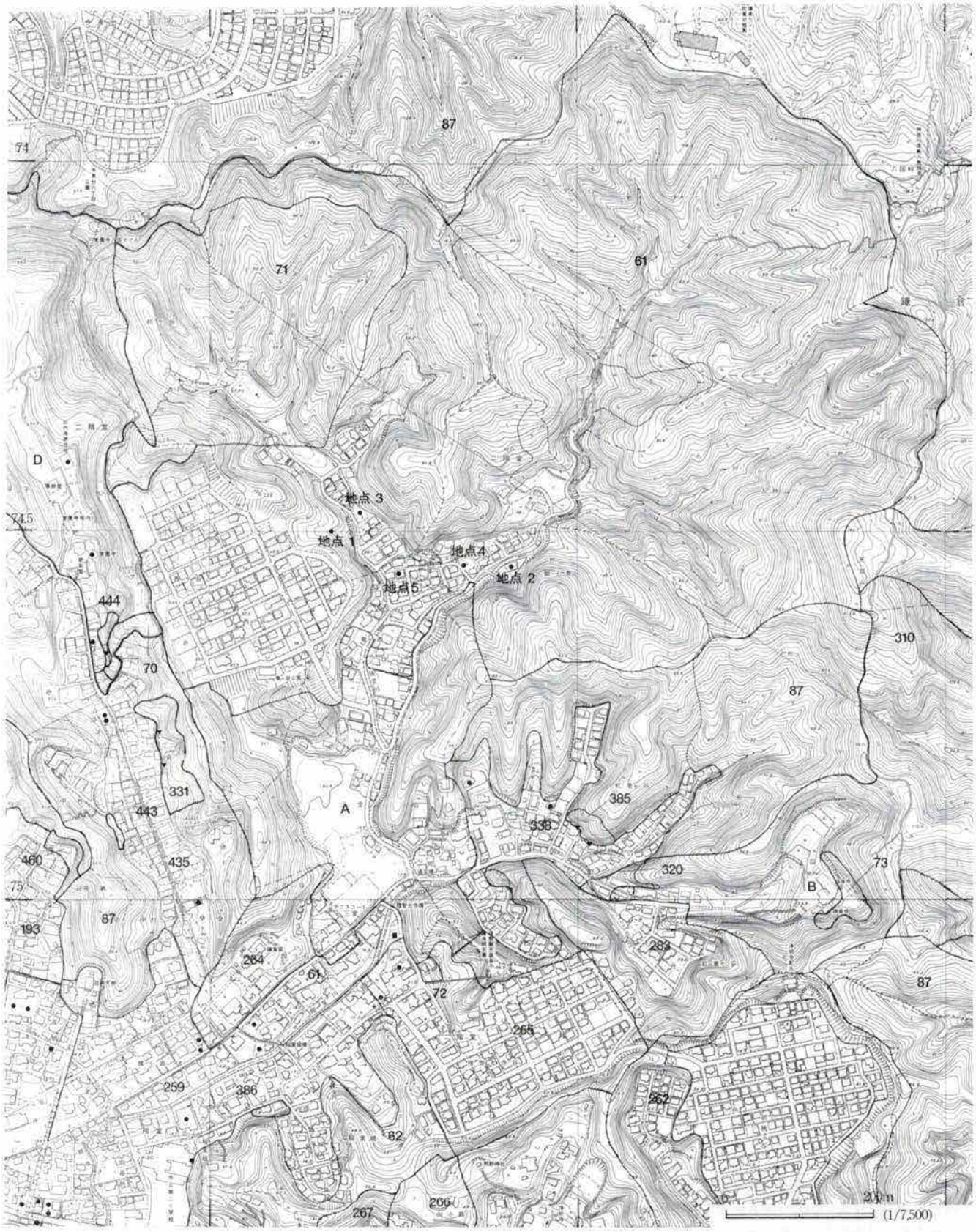


図1　遺跡の範囲と調査地点

61.永福寺跡　62.杉本城跡　70.平子やぐら群　71.百八やぐら群　72.理智光寺跡やぐら群　73.瑞泉寺境内やぐら群　87.鎌倉城
193.大倉幕府北遺跡　259.横小路周辺遺跡　262.大楽寺跡　264.東光寺跡　265.理智光寺跡　266.大安寺跡　267.延福寺跡　283.永安寺跡
310.朝比奈砦　320.瑞泉寺遺跡　331.会下山西やぐら群　338.瑞泉寺周辺遺跡　385.瑞泉寺周辺遺跡内やぐら
386.杉本城内やぐら　435.覚園寺旧境内遺跡　443.天王寺跡やぐら　444.覚園寺総門跡東やぐら　455.紅葉ヶ谷やぐら群　460.大倉幕府北やぐら群
A.国史跡永福寺　B.国史跡瑞泉寺境内　C.国史跡浄明寺境内　D.国史跡覚園寺境内

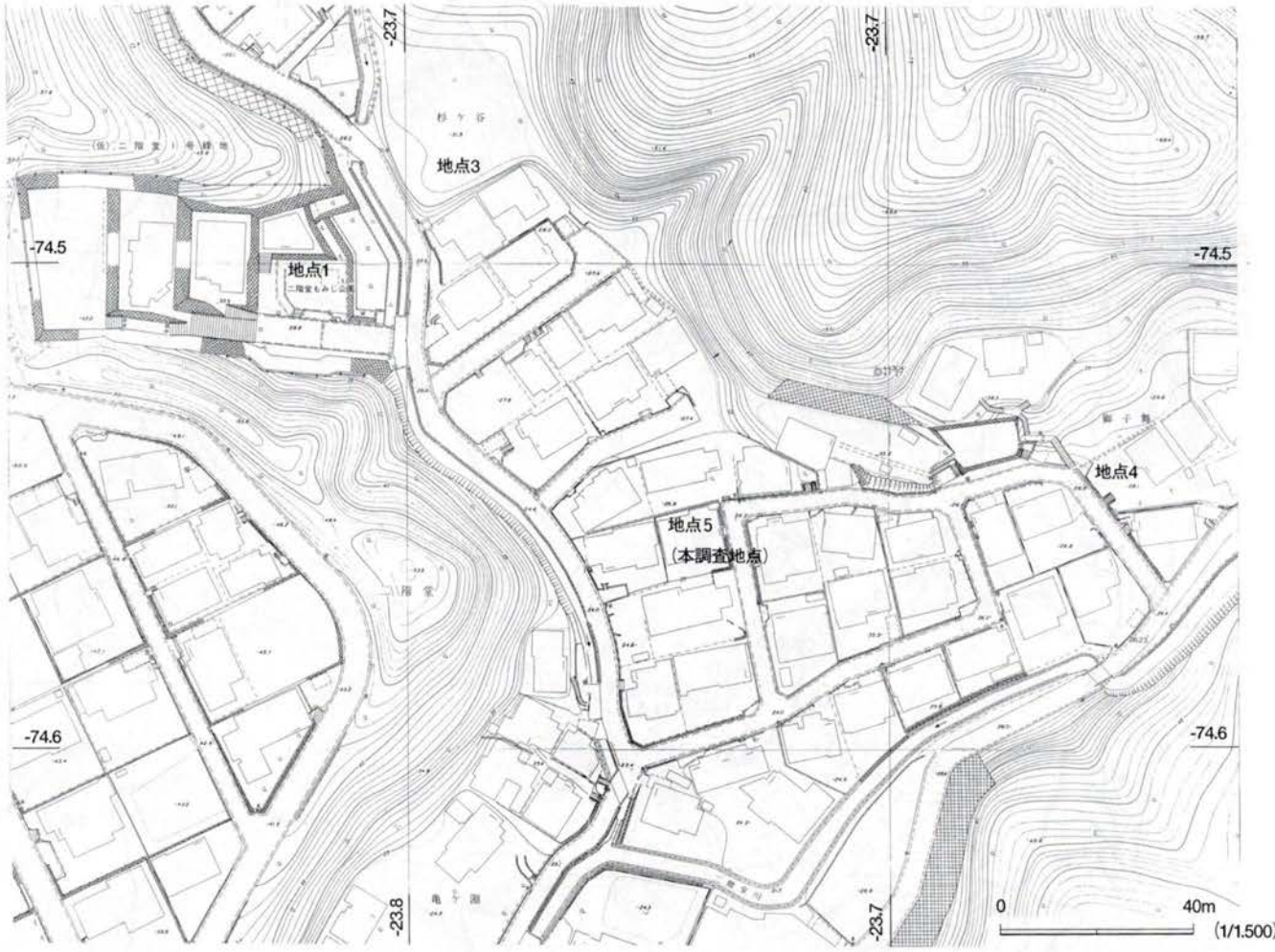


図2　調査地周辺図

物他が廃絶後は短期間に盛土し地点１と同様に茶毘を行う様になり、永福寺や僧坊との関連を推定している。遺物は銅製品六器・三枚打の弓の他、岩盤掘抜の井戸中から大量の獣骨（鹿・野兎・猫・鼠等）が出土している。地点４（二階堂字獅子舞603番１地点）は個人住宅建設に先立つ調査で、３時期の生活面に横桟支柱型井戸・礎石・溝等が発見し、井戸掘り方内の海抜26.6m前後で岩盤を確認している。各生活面にに時期差は殆ど無く14世紀前葉で、遺構群の組合わせを地点３と照応し、谷戸内の永福寺僧坊跡の一端と推定されている。

【引用・参考文献】
赤星直忠　1959『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
上本進二　2000「鎌倉・逗子の地形発達史と遺跡形成」『神奈川県逗子市桟敷戸遺跡発掘調査報告書』
東国歴史考古学研究所調査研究報告第 26 集　227 ～ 246 頁　東国歴史考古学研究所
鎌倉市史編纂委員会　1979『鎌倉市史　史料編　第三』吉川弘文館
鎌倉市教育委員会編　1990『としよりのはなし』鎌倉市文化財資料第７集 . 鎌倉市教育委員会
白井永二編　1976『鎌倉事典』東京堂出版
高柳光寿・貫達人　1959『鎌倉市史　社寺編』吉川弘文館
高柳光寿　『鎌倉市史　総説編』　1959 年　吉川弘文館
貫達人・川副武胤　1980　『鎌倉廃寺事典』　有隣堂
「神奈川県の地名」『日本歴史地名体系 14』　平凡社
「浄土庭園と寺院　永福寺創建 800 年記念シンポジウム記録集」　1997 年　鎌倉市教育委員会
『吾妻鏡』「新訂増補国史大系＜普及版＞」　1932 年　吉川弘文館

第２章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯及び調査の経過

本調査は、個人専用住宅の建設で鋼管杭打ちを伴う基礎工事を実施しているのが確認され、急遽確認調査を実施し諸協議を経て実施された。調査区の設定には、残土を敷地内で処理する必要から調査に由って生じる残土量を鑑み、且つ北及び西側隣地から安全な後退距離を確保する必要があった。敷地内の概ね東半は鋼管杭の数が多い上に間隔も狭く、部分的ではあるが確認調査で堆積土層と出土遺物は記録及び採集していることから、概ね東半を残土置場として調査対象外とした。調査区は建設予定範囲内西半で、堆積土層を観察する必要と安全を考慮し鋼管杭内法に設定されたが、調査区中央付近に最低３本は調査区内に露出する事となった。

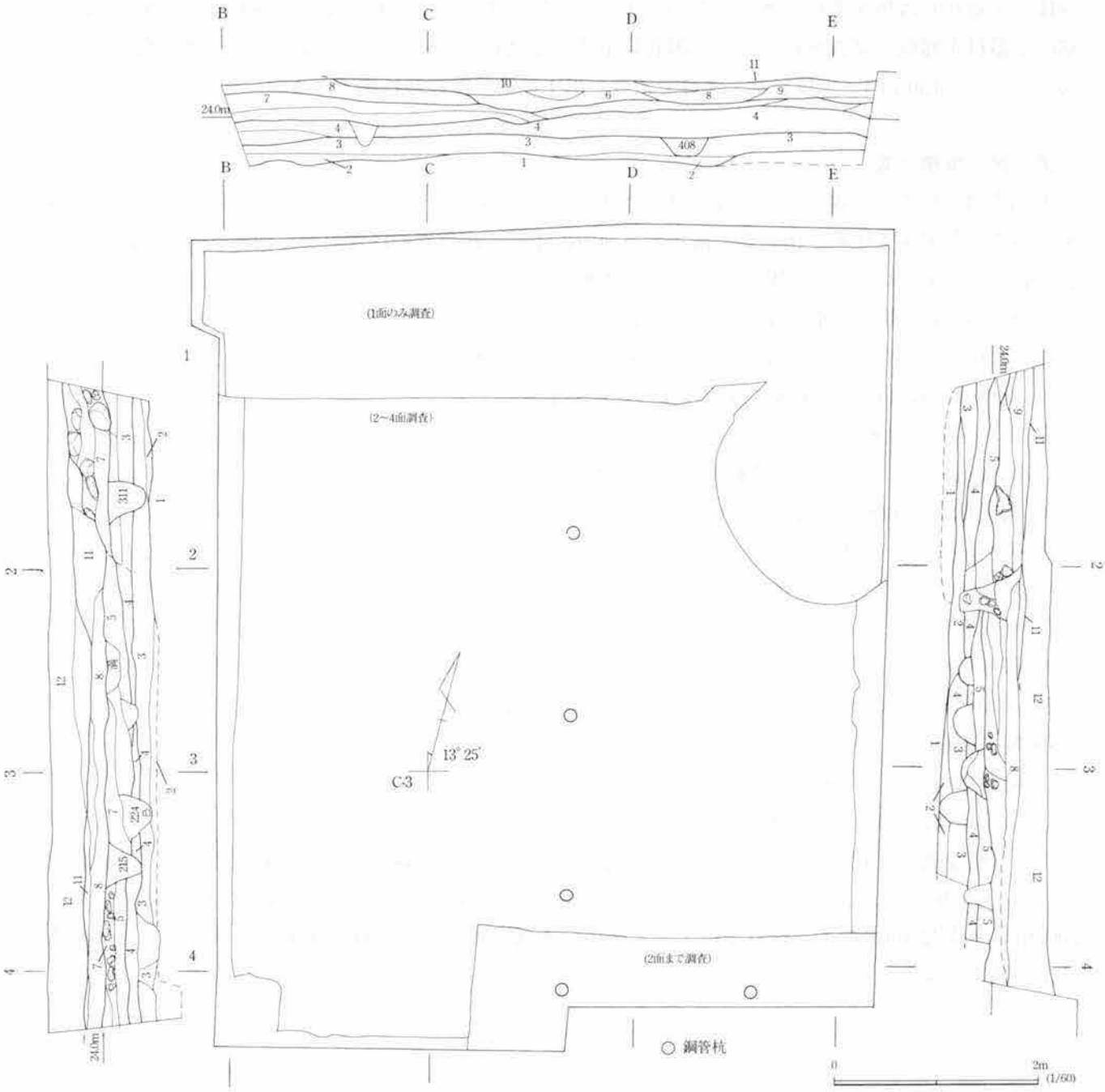


図３　グリッド配置と堆積土層

調査では確認調査の結果から、調査区の北側で現況地表下約20cm、南側では約40cmまで表土掘削を行い調査を開始した。調査開始にあたり調査対象敷地を囲む様に方眼グリッドを設定し、調査区の北西隅から２ｍ間隔で東へアルファベット（Ａ～）を、南へ算用数字（１～）を付した。調査区内に現れるのはＢ～Ｅ－１～４である。Ｃ－３を基本として、本調査地の緯度は北緯35度19分39秒、東経134度34度20秒、南北軸は磁北より13度25度00秒西に振れている。尚、基準高は史跡永福寺調査時のレベル原点から移動した。

表土掘削の際に調査区北端では客土が酷く泥濘み足場が悪い為、数㎝下位の１面に相当する中世地業土上まで客土を除去し調査対象範囲とし、以降の掘り下げから後退距離を採る事とした。２面以降は北側に残土処理用通路を兼ねて後退距離を採り、調査区壁の法面を留意しながら順次遺構面の掘下げと精査、発見した遺構の検出と記録保存を進め、10月初旬には４面全景写真等の記録保存を終了した。その後、下層の堆積土層の把握を試みたが湧水が著しい上に残土山も限界に達し、確認調査の際に観察した同様の土層からは出土遺物が無かった為、更なるトレンチ調査の必要はないと判断し、関係各方面に連絡の上器材を撤収し調査を終了した。調査終了時点で発見し記録した遺構は、建物遺構に関わるものを含めてピット130余口・土坑18基・溝等であり、出土遺物は整理箱13箱である。

第２節　堆積土層

本調査地点付近は、現況では宅地化されて多少の傾斜はあるものの24.5m前後を測るが、旧地形は北東に舌上に張出す支尾根と南と西に流下する河川に由り、自然地形は北東から南西への傾斜地と考えられ、確認調査及び本調査の成果からはこの傾斜地を平坦に克服して生活面を築いている。堆積土層には、平地空間の拡幅に拠る山腹を崩したものであろうか、多量の土丹が利用されている。以下、調査区壁に共通の堆積土層について下層から記し、各土層No.は本報文中でそのまま使用する。

1. 淡青灰色砂質粘土。全体に疎らに土丹粒を微量含む。
2. １～３層への漸移層。
3. 黒褐色粘土。僅かに土丹微粒を含む。４面構成土。
4. 褐色粘土。全体に土丹微粒を少量含む。３面構成土。
5. 褐色粘質土。土丹粒・褐鉄・炭を含む。
6. 炭層。２～３面間に堆積。かわらけ粒多量に含む。
7. 灰褐色粘質土と土丹粒乃至土丹塊の混合層。２面地業土。
8. 茶褐色粘質土。土丹粒乃至拳大土丹・炭化物・かわらけ粒を多量に含む。
9. 茶褐色粘質土。８層と類似、土丹少なく炭化物多量に含む。
10. 暗茶褐色粘質土と土丹粒の混合層。１面地業土。
11. 暗茶褐色粘質土。10層と類似、土丹粒が密で褐鉄を混交する。
12. 近世以降の堆積土。

上記は確認調査で観察した堆積土層と、層序・レベル・土層の様相共に殆ど同様であり、確認調査の際には、３層から手捏ねかわらけが１点出土（図13－106）しているものの、１層は現況地表下約200cmの海抜22.5m前後まで掘り下げても、層中に不規則部分的に砂礫や腐植土が混入するものの遺物は全く出土しなかった。

第3章　遺構と遺物

本章では発見した遺構と遺物について、調査順とは逆に下層4面から記述する。前章でも触れた様に、調査時には、2面と3面の遺構把握に迷った上に4層上面で上層の掘り損いの遺構を多数発見する等の不手際もあり、整理作業時に各遺構の帰属を再整合している。為に調査時には遺物が出土した遺構にのみ番号を付したが、整理作業において調査時に把握し得なかった柱穴列や建物が推定されるに及び、遺構の記載に不便が生じる事となった。本報告では、土坑・溝については調査時に付した番号をいくつかの欠番があるがそのまま使用し、ピット番号は建物や柱穴列等遺構に係わるか遺物が出土したものを下

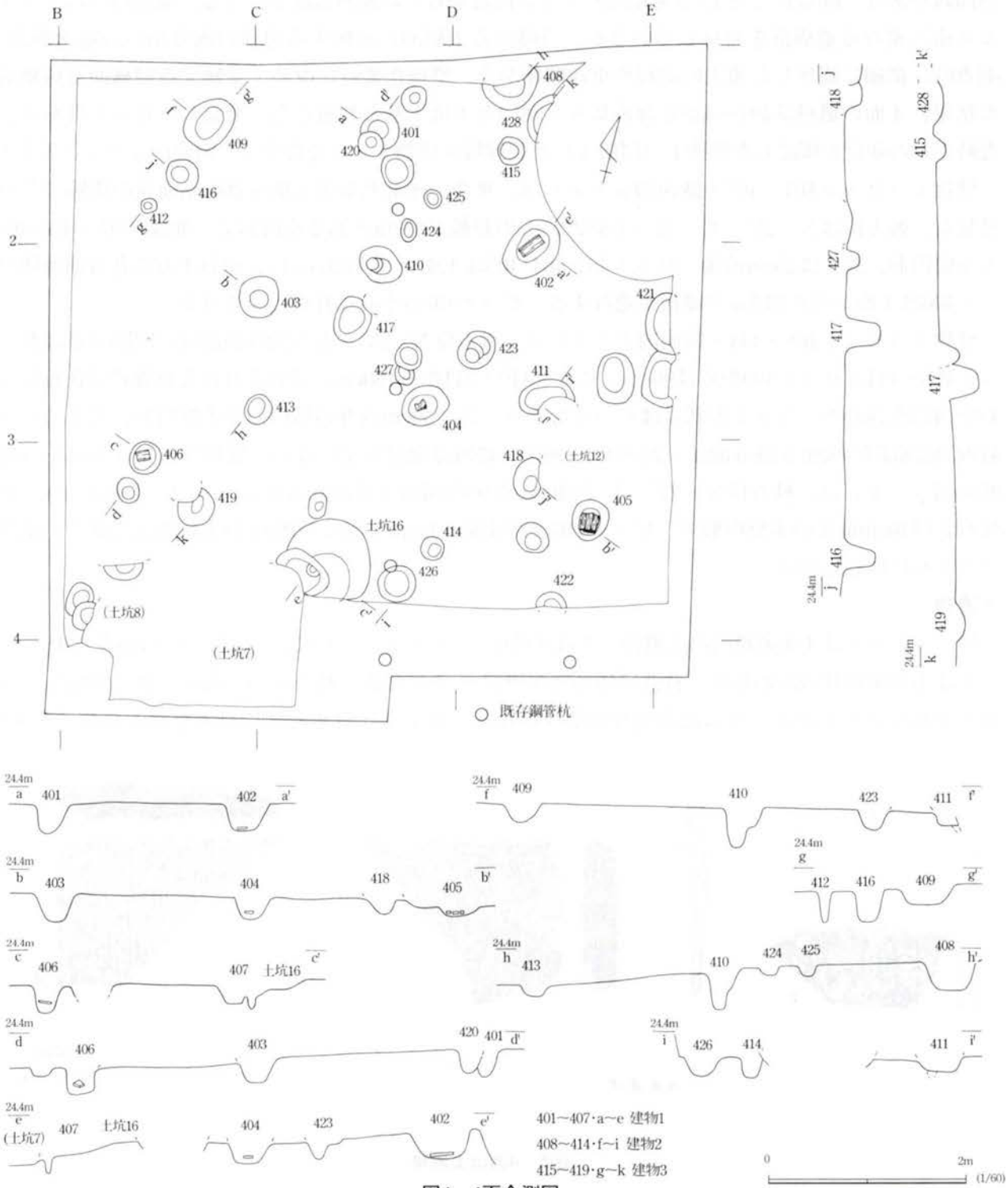


図4　4面全測図

層から全て付し直している。又、本報文の挿図中では柱穴・ピットはその番号のみを記し、断面図は各遺構面毎にアルファベット小文字（ａ～）を付し、基準高は海抜（ｍ）で顕している。出土遺物は、各面の遺構内遺物について述べた後に各層位出土の遺構外遺物について下層から触れる。図示した遺物の法量等計測値は報文末表１～４の出土遺物観察表に纏め、全体の出土量は報文末表５出土遺物破片数表に示している。破片数は、指先大の極小破片を除いた接合前の出土単純破片数である。

第１節　４面の遺構と遺物

・遺構

図４は４面の全測図。４面とした３層上面は調査区の北東で海抜23.85ｍ、南西で海抜23.60ｍと自然傾斜があり、概ねＢ-２とＥ-３を結んだライン付近からその傾斜は顕著になる。調査時には３ラインより南に密なる遺構群を発見しているが、当時から上層面に帰属する遺構の掘り損いの疑念があり、調査時に微細に観察した覆土の記録や重複関係から、整理作業時に改めて帰属する遺構面を再検討した結果、４面の遺構は401～428を含めピット38口と土坑１基と判断した。発見したピット群から、調査時にその並びを確認した建物１（図版４）と整理時に建物２・３を推定し、断面図ａ～ｋに示した。

建物１（ピット401～407・断面図ａ～ｅ）は、東西・南北共最大２間を200cm前後の間隔で７口を発見し、軸方位はＮ―22°―Ｅ。ピット402と407の長軸が60cmを測る楕円形で、他は径30～45cm内外の不整円形、深さは25cm前後、ピット402･404･405は上面レベル23.6ｍに、傾斜下方に在る南西隅のピット406は上面レベル23.5ｍで礎板が遺存する。ピット407の小孔は柱痕であろうか。

建物２（ピット408～414・断面図ｆ～ｉ）は、軸方位Ｎ―27°―Ｅで220cm前後の間隔で結ばれるピット408～411とピット409からは90cm、ピット410・411から180cm、それぞれ南北軸線状に在るピット412～413を含めた。ピット形状はばらつきがあり、30～50cm内外の楕円乃至不整円形、深さはピット410の最深部が40cmを測る他は、25～30cm前後、礎板は発見していない。建物３（ピット415～419・断面図ｊ・ｋ）は、軸方位Ｎ―27°―Ｅで240cm前後の間隔で結ばれるピット５口から推定している。何れも径40cm前後の不整円形で、ピット416･417は深さ35cmを測るが他の３口は20cmに満ず、建物柱穴とするには心許ない。

・遺物

図５－１～４は４面遺構内出土遺物。１は土坑6、２～３はピット422、４はピット408より出土。

１は小型糸切り底かわらけ。背低で体部外面中位～下位付近に稜をもつ。器壁は稜で屈曲し、外に開きながら立ち上がる。２は常滑窯甕胴部片の拓影。格子文に対角線状に斜線を組み合わせた文様。

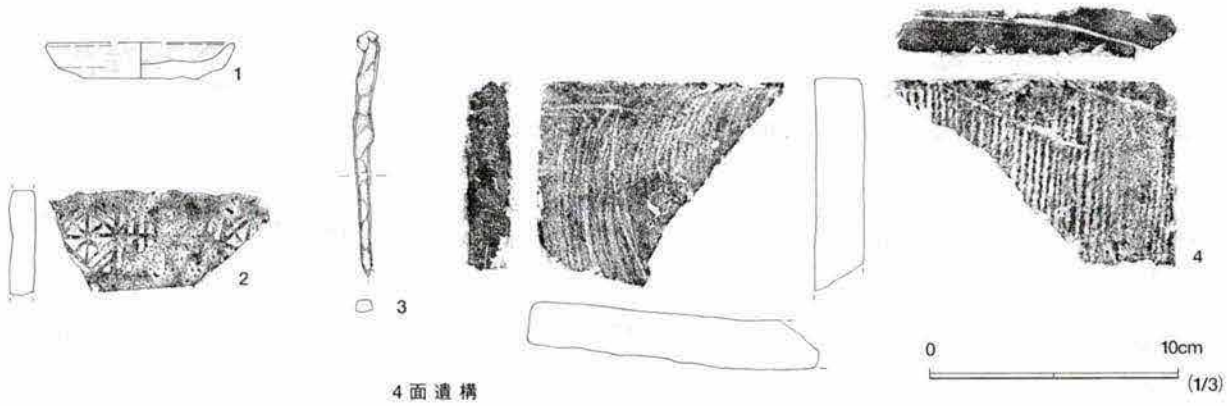


図5　4面出土遺物

第２節　３面の遺構と遺物

・遺構

図６は３面の全測図。３面とした４層上面は、東から西への傾斜は７層の盛土整地でほぼ克服し概ね南北方向の緩傾斜であり、調査区北側で海抜24.00ｍ、南側で海抜23.75ｍ前後で、発見した遺構群の軸方向もほぼこの緩傾斜に沿っている。３面に帰属する遺構は301～341を含めピット51口と土坑５基と判断し、調査時に確認した柱穴列１に加え柱穴列２と建物を推定している。調査区北側東半炭層は３面よりも層序として上位にはなるが、図版２の如く多くの遺物が出土していることもあり範囲を図示している。

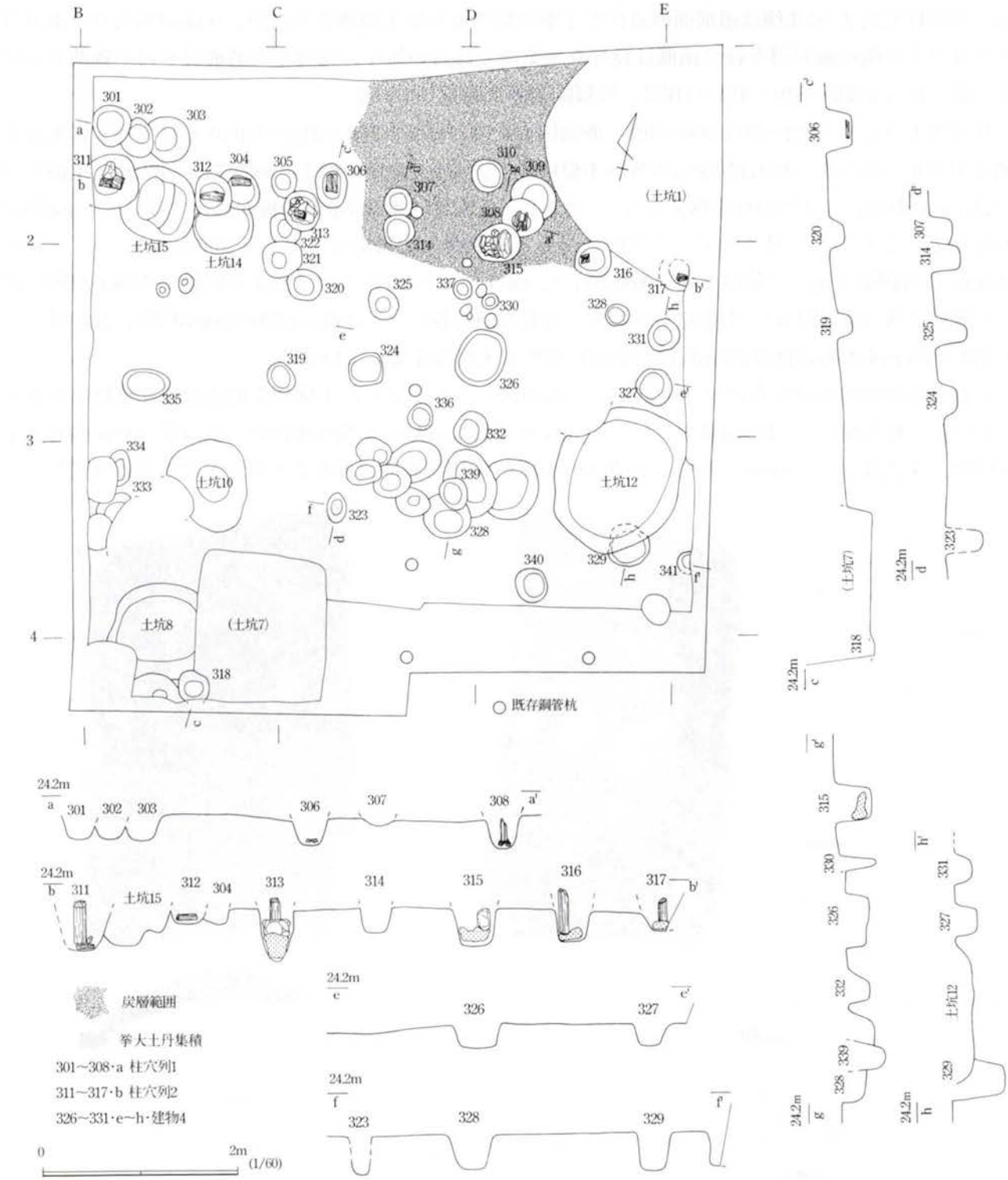


図6　3面全測図

柱穴列２（ピット311～317・断面図ｂ）は、ほぼ磁北に直交する東西方向に100cm間隔で調査区内に７口を東西列状に発見した。ピット311は径50cmの円形、ピット312より東は径30～40cm内外の不整円形、深さは柱下の造作に拠り一定しない。ピット311は上面レベル23.6ｍの礎板上に３×4.5寸角の柱が、ピット312は浅く、上面レベル23.9ｍで礎板が遺存する。ピット313は覆土下半に充填した拳大土丹上にピット径とほぼ同じ大きさの土丹塊を上面レベル23.8ｍで据え、３×２寸角の柱の支えとしている。ピット315は、覆土下方西半に拳大土丹が上面レベル23.7ｍで一部窪める様に充填し、ピット内東半は窪みに建てた柱を支えていたが如く土丹塊が据えられている。ピット316・317には、ピット313・315程顕著ではないが底面に上面レベルそれぞれ23.7ｍ・23.8ｍに土丹を敷き、2.5～３寸角の柱を据えている。この柱穴列２の北側は遺構面の造作が丁寧で整然とし出土遺物も多いが、４面の名残りであろう２～３ライン間の緩傾斜を経た南側は良好な地業面とは言い難く、発見した遺構群も何か雑然としいる。尚、ピット307～310・314～316は、炭層除去後に確認している。

柱穴列１（ピット301～303･306～308・断面図ａ）は、ピット308と315の新旧から柱穴列２に先行し軸はやや北に振れる。概ね径40cm内外の不整円形で、深さは307が極浅いが他は20～30cm。上面レベル23.7ｍの礎板に３寸角の柱を据えたピット308と、上面レベル23.7ｍの礎板が遺存するピット306間は200cmで、さらに西に延すとピット302がある。遺構群の配置から、ピット306からＮ－４°－Ｅで110cm 前後間隔で南へと延びる列（断面図ｃ）、或はピット307からほぼ磁北と同軸で間隔不規則乍南へと延びる列（断面図ｄ）も推定している。南北方向の各ピットは概ね径20～30cm内外、深さはピット323が40cmを測るが他は30cm以内、底面に礎板や土丹は発見していない。

これら柱穴列の南及び東のピット群から、断面図ｅ～ｈに示した土坑12を取込む様な建物４を推定している。柱穴列２とほぼ同軸で、ピット 326 の長軸は 50cm を測り楕円形、他は径 40cm 内外の不整円形、深さは 25 ～ 40c m。各ピット間は約 180cm 間隔で底面は何れも平坦だが礎板等は発見してい

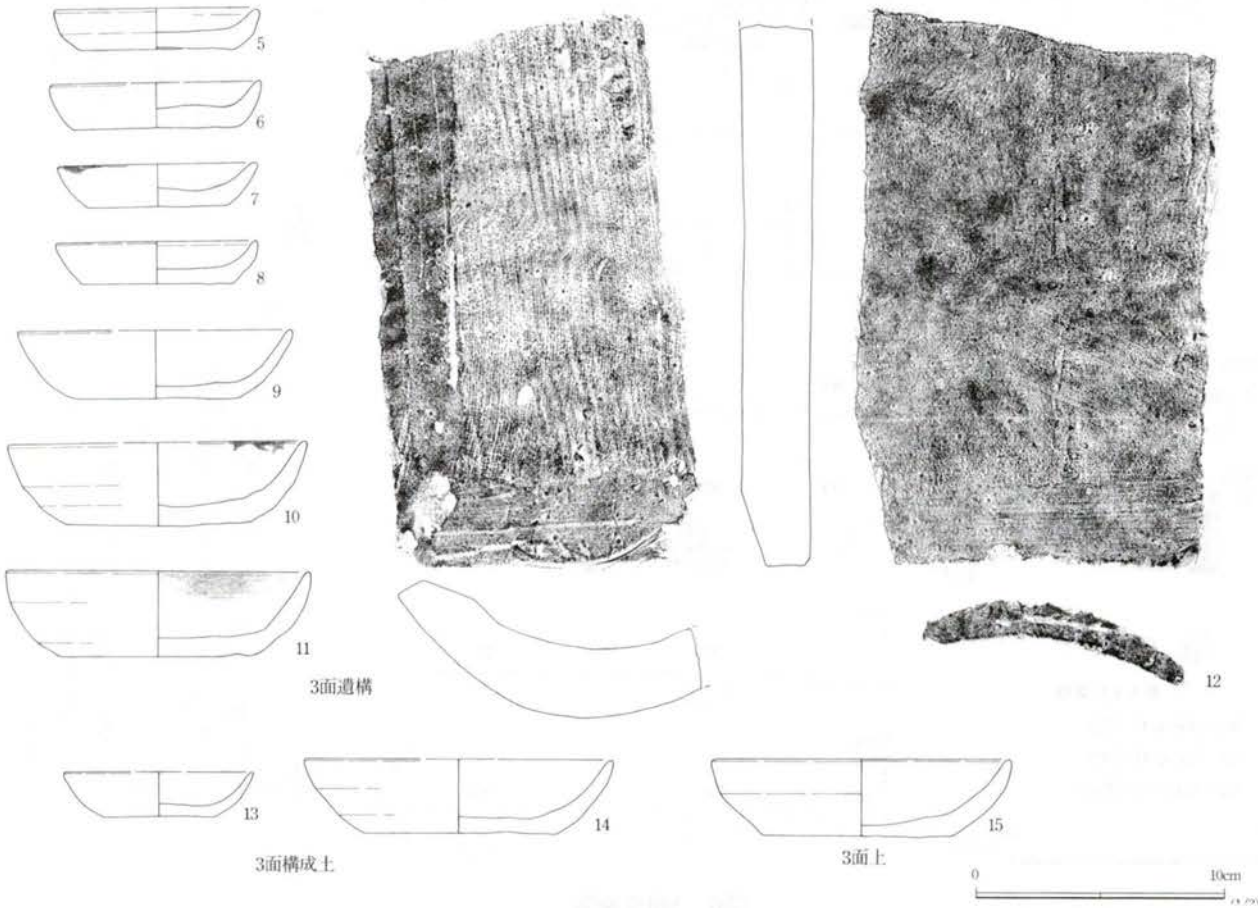


図7　3面出土遺物

ない。ピット326・327からそれぞれ北に50cmに在り相互の間隔が180cmのピット330と331、ピット326・328間の約90cmに在るピット332も建物４に含めている。又、ピット328・329の中間で南に50cmに在るピット340、建物の北西側を囲む様なピット336～338も建物に係わる柱穴の可能性はある。

・遺物

図７－５～12は３面遺構内出土遺物。５はピット306、６はピット332、７はピット327、８はピット331、９～10は土坑15、11はピット326、12は土坑12より出土。５～８は小型糸切り底かわらけ。概ね背低から背低気味で口径・底径の比が小さく、側面観が箱型を呈する器壁の厚いものと内底面が広く、体部外面中位から下位付近に稜をもち、器壁は内弯気味もしくは開きながら立ち上がるものとにわかれる。９は中型糸きり底かわらけ。背高気味で薄い器壁は開きながら立ち上がる。10～11は大型糸切り底かわらけ。背高気味で内底面が広く、内弯気味に丸味をもちながら立ち上がる。７、９～10は煤が付着することから灯明皿として使用。12は女瓦。凹面は布目痕、凸面はヘラナデ痕が残る。また凹面側縁と広端縁は幅広にヘラ削り調整。

図７－13～14は３面構成土出土遺物。概ね図３の４層レベルの遺物をここに含めた。13は小型糸切り底かわらけ。背高気味で、薄い器壁は開きながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。14は大型糸切り底かわらけ。背低で内底面が広く、器壁は内弯気味に立ち上がる。

図７－15は３面上出土遺物の大型糸切り底かわらけ。背低気味で、器壁は開きながら立ち上がり、体部外面中位付近の稜からわずかに内弯する。

第３節　２面の遺構と遺物

・遺構

図８は２面の全測図。３面の遺構軸と配置を概ね踏襲し乍も、２面では大幅な造作が加えられ、調査区ほぼ中央を横断する溝を境に北側と南側に区分けされた様な土丹地業面が拡がり、整然とした遺構配置となる。北側の地業面は海抜24.2ｍ、２ラインの南で土丹地業の限界が24.0ｍ、南側の土丹地業は多少の凹凸はあるが24.0ｍとこれまでの緩傾斜は克服されている。２面に帰属する遺構は、上記土丹地業面、溝１条、201～229を含めてピット32口、土坑１基である。

北側土丹地業は破砕土丹に拠り薄いが堅く整地し、調査区北東端ではさらに30～50cmの土丹塊を積上げ（断面図ｅ）、ほぼ同範囲を囲む様に軸方向を一にしてピットと鎌倉石を発見している（断面図ｂ・ｆ）。調査時には、この積上げた土丹塊の基底を追って掘進める内に、誤って土丹地業を剥がしてしまった。又、Ｃ－Ｄ間より東では慎重に土丹地業面上面の拡がりを精査したものの、上層の削平に因るのか土丹地業面は発見できず、下層の炭層が露出したのをそのまま範囲として図示している。土丹地業の限界には遺構が希薄な帯状の空閑地があり、南側の土丹地業とを画す様に溝１を発見した。上幅30～50cmで深さ25cm前後の断面逆台形、底面はほぼ平坦で木組等の痕跡は無い。後述する建物５の柱穴よりは新しく、建物６の柱穴との新旧は曖昧で埋没は殆ど時期差が無いと思われ、建物６に関わるものかもしれない。

南側の土丹地業は、人頭大乃至拳大土丹と破砕土丹を混交して下層の緩傾斜を埋める様に整地している。僅かながらＣ～Ｄ－３～４の中心付近が高く、周囲に向って土丹の密度とレベルは低くなり、調査区南東端の一角と西端は地業が粗く不明瞭。この土丹地業の周囲で発見したピット19口から、新旧の建物２棟を建物５・６とした。現地調査では、溝と重複して新旧の柱穴列（断面図ｇ・ｌ）と、土丹地業上に調査区外にある掘立柱建物の北端（断面図ｍ）と観ていたが、下層の調査で本来２面に帰属するべき遺構を多数発見し、整理時に検討の結果図９の様に判断している。

建物５（ピット2111～217・断面図ｇ～ｋ）は、調査時に溝１より古いピット列として確認していた211～214と、それぞれから南へ約２ｍに在る215～217を含めている。211～213は100cm前後間隔、213～214は約200cm、215～216は約100cmで213に対応するものは１面土坑７に因り恐らくは失われている。各ピットは214が一回り大きいが他は径概ね40cm内外、211･213･215には上面レベル23.6ｍ前後で礎板が遺存する。214は２枚の木っ端で礎板を安定させた上に３寸角の柱を据えている。216と217は建物柱穴にしてはやや心許ない事等から、溝１に先行し、敷地利用の変化から３面柱穴列２を南へずらした柱穴列と、その他のピットと現地調査の際の観察に帰結した方が無理は無いかも知れない。

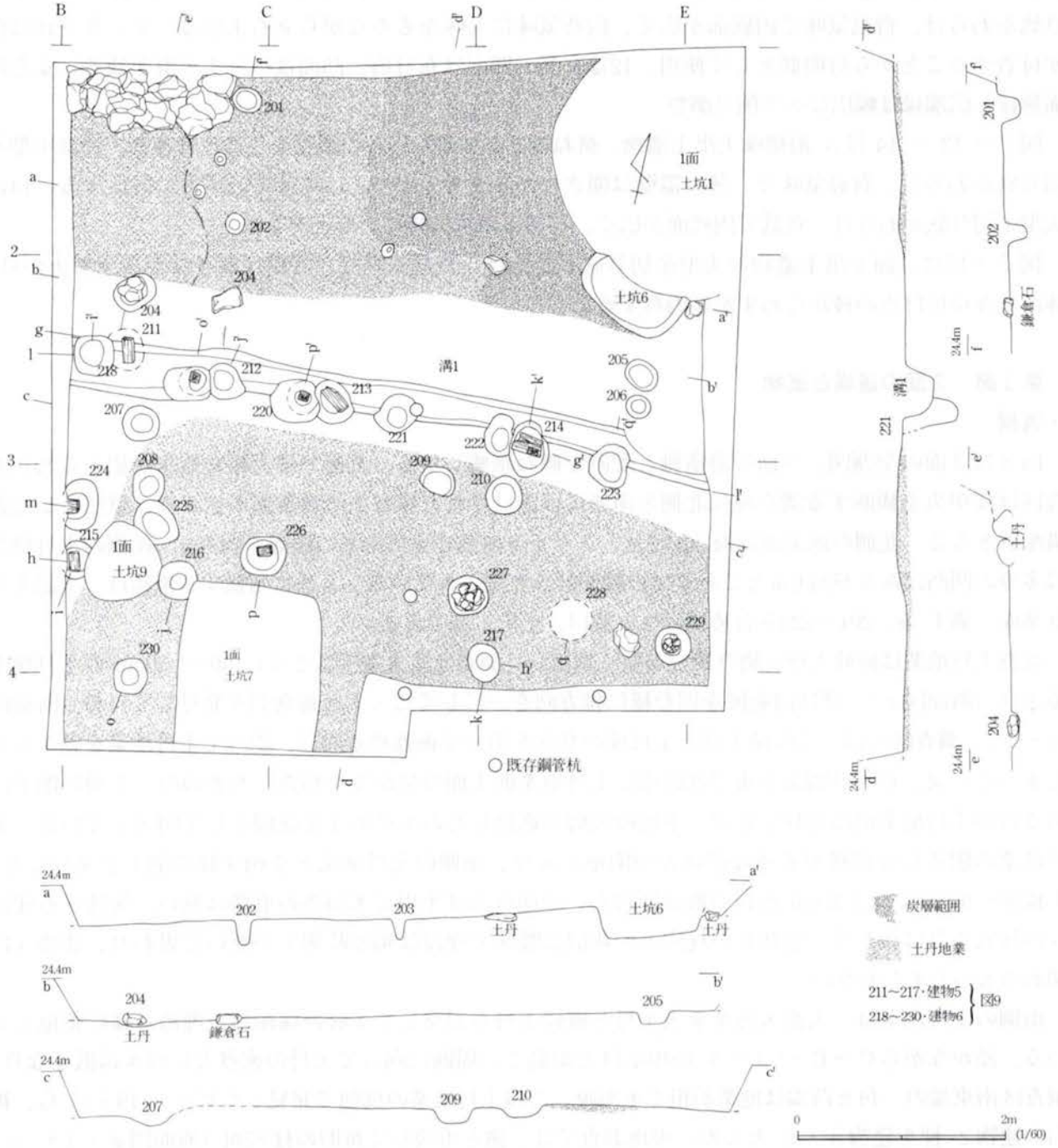


図8　2面全測図

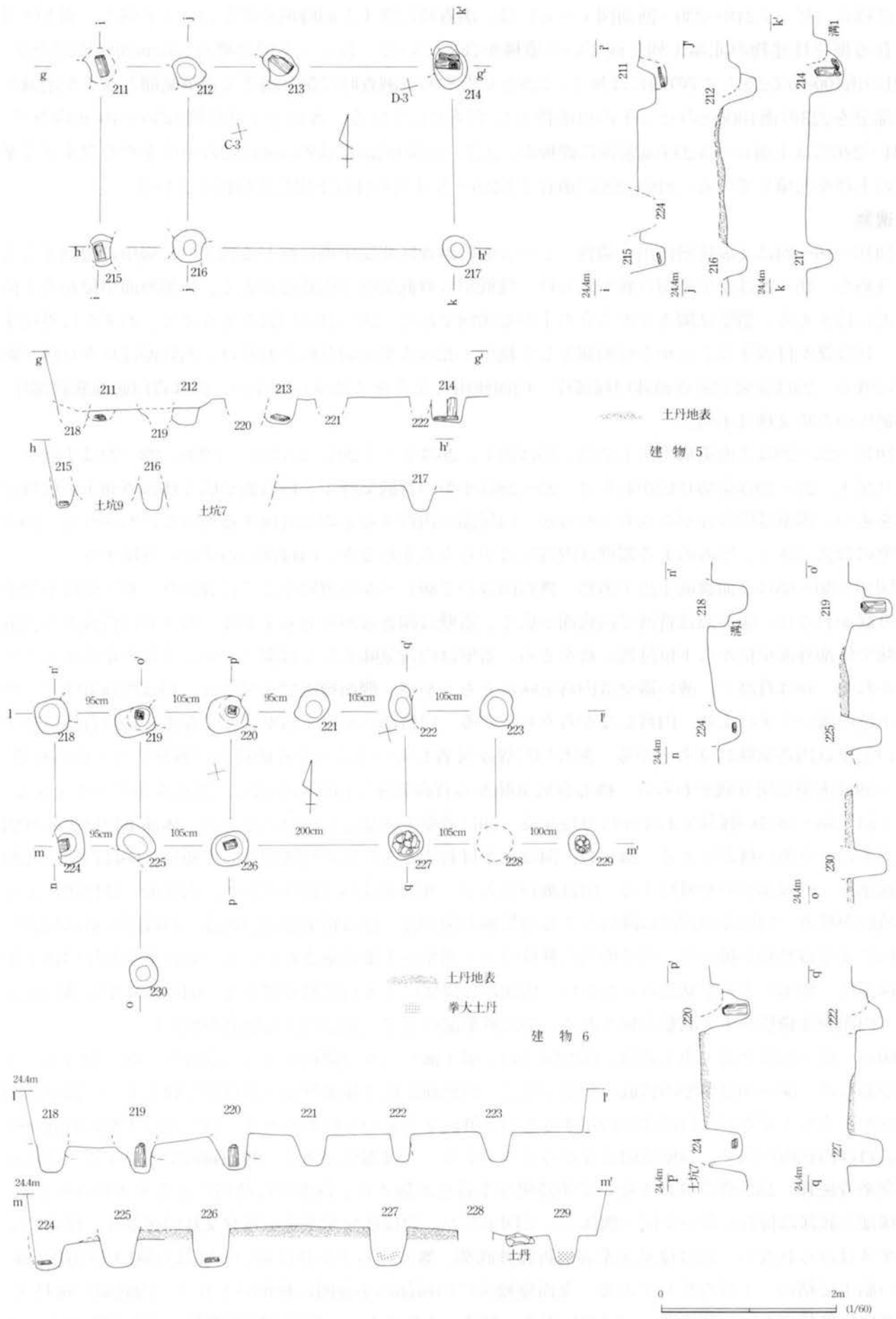

土丹地表
建 物 5
土坑9
土坑7
95cm
105cm
200cm
100cm
土丹地表
拳大土丹
建 物 6
土丹
0
2m
(1/60)

図9　建物5・建物6

建物6（ピット218～230・断面図ｌ～ｑ）は、調査時に溝１と同時期か新しいピット列と、調査区外に在る掘立柱建物の北端１列と観ていた遺構を含めている。各ピット間は概ね100cm前後間隔だが、221の南100cmで226と227の間には無く、228としたものは調査時に掘り過ぎて遺構範囲と深さが消滅した部分を223の南100cmのピットの可能性として図示している。各ピットは径概ね30～40cm内外で、224・226には上面レベル23.6ｍ前後に礎板が、227・229の底面には23.5ｍ付近の中央をやや窪ませて拳大の土丹を充填している。219・220に遺存する2.5～３寸角の柱は下場に直接据えている。

・遺物

図10－16～24は２面炭層内出土遺物。２～３面の調査区北端中央に拡がる図３の６層中の遺物をここに含めた。16～21は小型糸切り底かわらけ。背低から背低気味で内底面が広く、体部外面中位から下位付近に稜をもち、器壁は開きながら立ち上がる傾向である。20～21は口唇を尖らせて、わずかに外反する。16は煤が付着することから灯明皿として使用。22は大型糸切り底かわらけ。内底面はロクロ痕が顕著に残る。23は龍泉窯系青磁鉢口縁部片。内面使用によるキズはみられない。24は青白磁梅瓶底部片。小破片のため文様は不明。

図10－25～29は２面遺構内出土遺物。25は溝１、26はピット205、27はピット206、28～29は土坑６より出土。25～29は糸切り底かわらけ。25～28は小型の背低気味で、内底面が広く体部外面下位付近に稜をもつ。器壁は開きながら立ち上がるが、口縁部で内弯するものと外反するものとにわかれる。29は大型の背低気味で、厚みのある器壁は内弯しながら立ち上がるが、口縁部でわずかに外反する。

図10－30～65は２面構成土出土遺物。概ね図３の７層レベルの遺物をここに含めた。30～50は小型糸切り底かわらけ。30～33は背低で内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。34～47は背低から背低気味で体部外面中位から下位付近に稜をもち、器壁は内弯気味もしくは開きながら立ち上がるものとにわかれる。48は背高で、薄い器壁は内弯気味に立ち上がり、側面観碗型を呈する。49は背高気味で、体部下位の強いナデにより、内弯しながら立ち上がる。口唇部にかけて器壁は厚くなる。50は背低気味で薄い器壁は内弯気味に立ち上がる。割れ口に煤が付着していることから破損後に被熱したと思われる。51～59は大型糸切り底かわらけ。概ね背低気味から背高気味で内底面が広く、開きながら立ち上がる。51・54・56・58は口縁部でわずかに外反する。59は器壁・底部ともに厚みがあり、体部下位付近の外周のナデにより強い稜ができる。34・47・54は煤が付着することから灯明皿として使用。60は白磁口兀皿口縁部片。口縁部がやや外反する。61は瀬戸窯入子。外底面はヘラ削り成形で、内底面には使用による摩滅痕が残る。口縁部周辺には降灰による自然釉が掛かる。62は常滑窯壺口縁部。口縁部～肩部周辺に降灰による自然釉が掛かり、内外面共に横位のナデ調整が丁寧に施されている。63は常滑窯片口鉢Ⅰ類口縁部片。使用による摩滅はみられない。内面には降灰による自然釉が掛かる。64は浅鉢型火鉢口縁部片。内面胴部横位のナデ調整が施される。65は鉄製品の刀子。錆びによる腐食が激しい。

図10－66～79は２面上出土遺物。概ね図３の７層上面レベルの遺物をここに含めた。66～72は糸切り底かわらけ。66～70は小型の背低～背低気味で、内底面が広く体部外面下位付近に稜をもつ。器壁は開きながら立ち上がるが、口縁部で内弯するものと外反するものとにわかれる。71～72は大型の背低気味で、71は内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。72は器壁が薄く、側面観碗型を呈する。73は龍泉窯系青磁鉢。高台畳み付けを除いて不透明な水青色が施され、内面には使用によるキズがみられる。口縁部と底部は接合しないが同一個体として図示した。74は龍泉窯系青磁蓮弁文鉢口縁部片。使用によるキズはみられない。75は龍泉窯系青磁折腰鉢底部。腰の立ち上がりは鈍い。76は白磁口兀印花文碗。薄い胎土で精巧・上質な作りである。全面施釉後に口縁部の小範囲に釉削りを行う。内底面に梅月文、胴部に牡丹草文ないし花葉文、口縁部に雷文の型捺しが施される。77は環状銅製品。環状銅版の２ヶ所

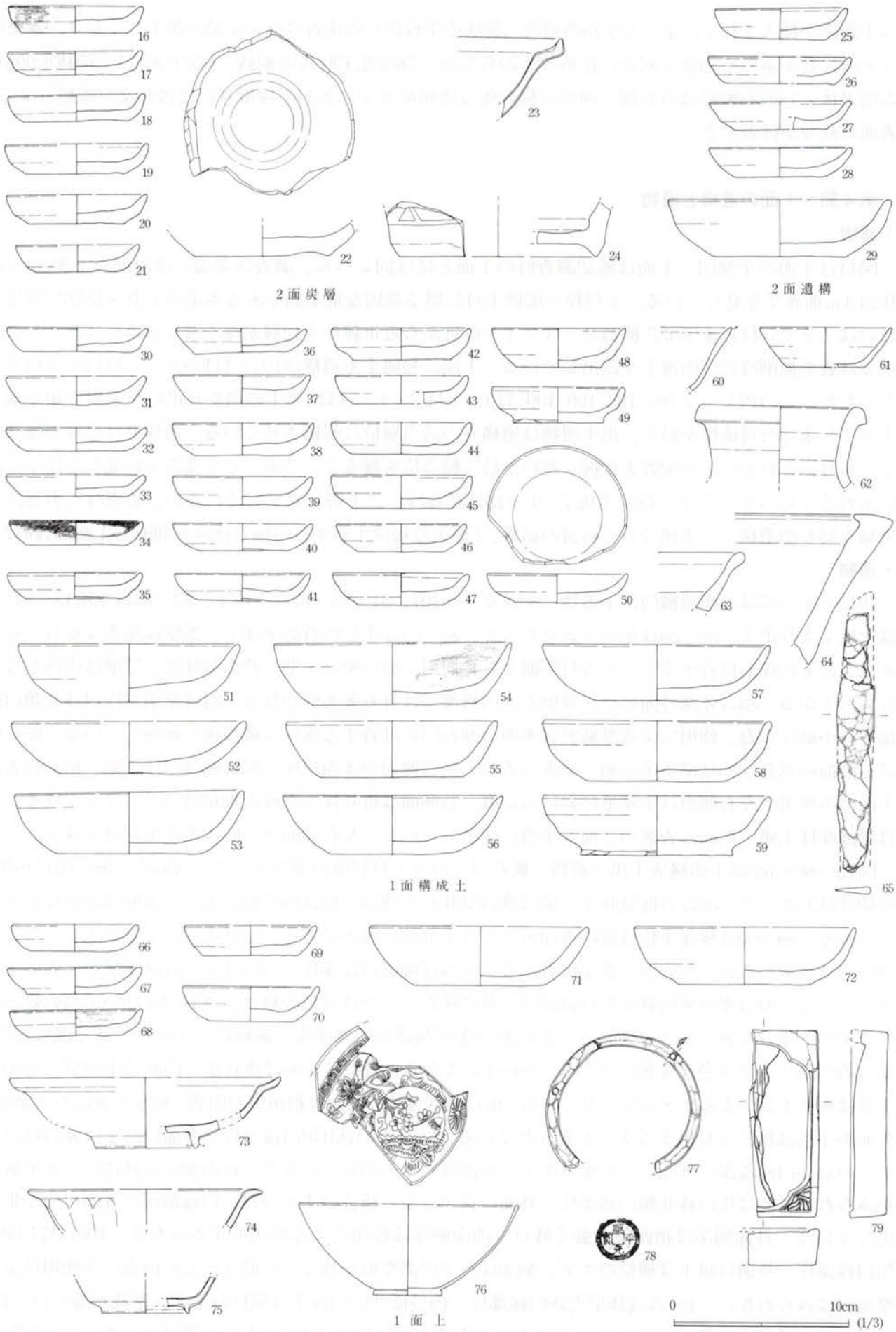


図10　2面出土遺物

に小銅鋲が挿入されている。今小路西遺跡（御成小学校内）の南谷３面に完品が出土しており、本来は３ヶ所に孔があり小銅鋲で何かに留めるものらしい。78は北宋時代の銅銭。「咸平元寶」で初鋳年998年の楷書体。79の石製品は方形硯。硯面は胸の張る唐研彫りで、雲形の縁取りには波頭文を線彫りする。表面に鉄分が付着する。

第４節　１面の遺構と遺物

・遺構

図11は１面の全測図。１面は確認調査時の１面とほぼ同レベル、調査区北端では現地表下20cmの海抜24.4ｍ前後で発見している。土丹粒と破砕土丹に拠る強固な地業面である本来の１面を良好に発見したのは２ライン付近までで、概ね２～３ライン付近から近世耕作土12層が深く潜り込み、３ラインより南では表土掘削時に２面覆土が露出している。１面に帰属する遺構は101～111のピット11口と土坑８基としたが、この内ピット101･103･105･109･110、土坑２･３･５は地業土の微かな違いを遺構の如く掘り上げてしまった可能性が高く、出土遺物は遺構外の該当層位に帰属させている。遺構群は希薄で雑然としており、これといった配置も把握し難いが敢て軸方位を観ると、２面とそう変らず磁北から僅かに西に振れるぐらいであろう。尚、土坑７･９～13は調査時には下層で発見しているが、整理時に調査区壁堆積土層や他遺構との重複等から検討の結果、２面より層位上層からの掘り込みと判断し１面に含めた。

・遺物

図12－80～87は１面遺構内出土遺物。80はピット107、81・85～87は土坑１、82～83は土坑13、84は土坑７より出土。80～83は糸切り底かわらけ。80～81は小型の背低気味で、器壁は開きながら立ち上がる。ともに煤が付着することから灯明皿として使用。82～83は大型の背高気味で、器壁は内弯しながら立ち上がる。83は体部外面にロクロ痕が、口唇部には打ち欠き痕が残る。84は常滑窯片口鉢Ⅱ類口縁部片。小破片の為、使用による摩滅痕は不明。割れ口に付着する煤から破損後に被熱している。85～87は石製品の砥石。85は伊予産中砥。砥面は表裏・左右側面の４面使用。86は鳴滝産仕上砥。砥面は表の１面のみ使用。左右側面は生産地における鋸痕、右側面は折り採った際の堆積時の「カワ」が残る。87は鳴滝産仕上砥。砥面は表裏の２面を平滑に使用している。左右側面と小口は生産地鋸痕が残る。

図12－88～103は１面構成土出土遺物。概ね図３の９～11層中の遺物をここに含めた。88～91は小型糸切り底かわらけ。88は背低気味で、他は背高気味から背高。88は内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。89～90は体部下位付近の外周のナデにより強い稜ができる。92は底径９ｃｍ以上をもつ超大型糸切り底かわらけ。内底面に煤が付着する。93は緑釉盤口縁部片。口縁部が玉縁状を呈し、表面が銀化している。94は瀬戸窯灰釉底卸目皿底部。黄色味がかった淡緑色の釉は、外底面を除いて高台畳み付けまでハケ塗りで薄く施されている。95は瀬戸窯灰釉卸皿口縁部片。施釉はハケ塗りで薄く淡灰緑色、部分的に茶～こげ茶色に変色している。96～100は常滑窯諸製品。96は甕底部。内面は指頭痕、外面胴下部は板状工具によるナデが施されている。97は甕底部片。内面は指頭痕が顕著。胴部外面はハケ調整、外面胴下部は板状工具によるナデが施されている。98は片口鉢II類口縁部片。外面口縁下は強い横位のナデの為、口縁端部が外面にやや張り出し、胴部はハケの調整痕が残る。内面胴部は使用による摩滅痕がみられる。99は片口鉢Ⅱ類口縁部片。外面口縁下は強い横位のナデの為、口縁端部が外面にやや張り出している。外面胴部は指頭痕が強く残り、内面胴部は使用による摩滅痕がみられる。100は片口鉢II類口縁部片。外面口縁下は横位のナデ、胴部はハケの調整痕が残る。小破片のため内面には使用による摩滅痕はみられない。101は浅鉢型火鉢口縁部片。内外面共に口縁下は横位のナデ、摩耗が激しい。102は滑石鍋口縁部片。摩耗が激しく、成形時の工具痕は不明瞭で口縁部は丸味を帯びている。103は男瓦。

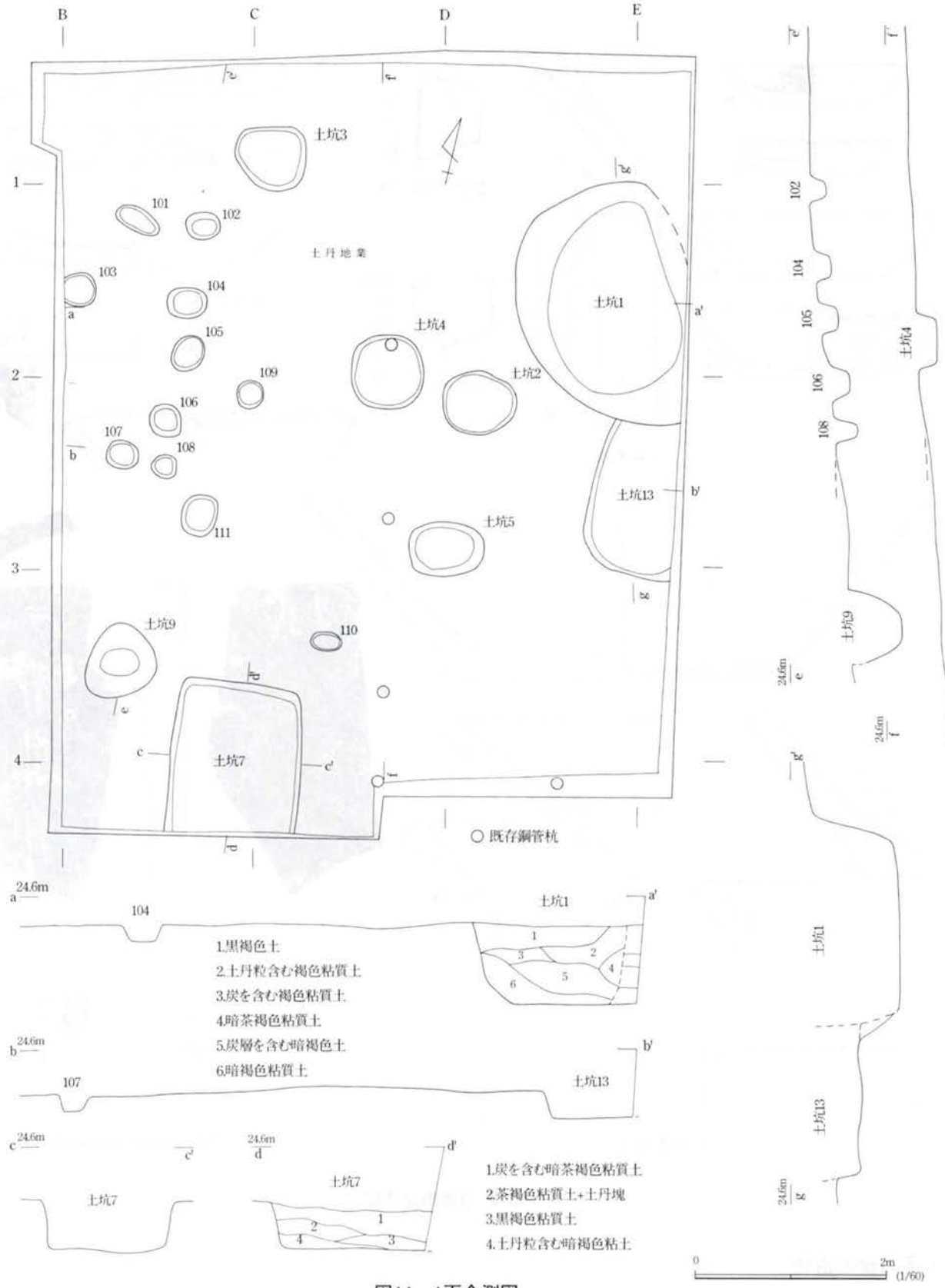


図11　1面全測図

凸面はヘラ削りとナデ調整、凹面は布目痕が残る。凹面端部はヘラ削り調整。

図12－104～105は1面上出土遺物。1面の遺構群精査時に出土した遺物をここに含めた。104は龍泉窯系青磁鎬蓮弁文碗口縁部片。体部内面に使用によるキズがみられる。105は青白磁印花文小皿口縁部片。内面には雷文と花文が配されている。おそらく内底面にも具象的な文様があっただろうと思われる。

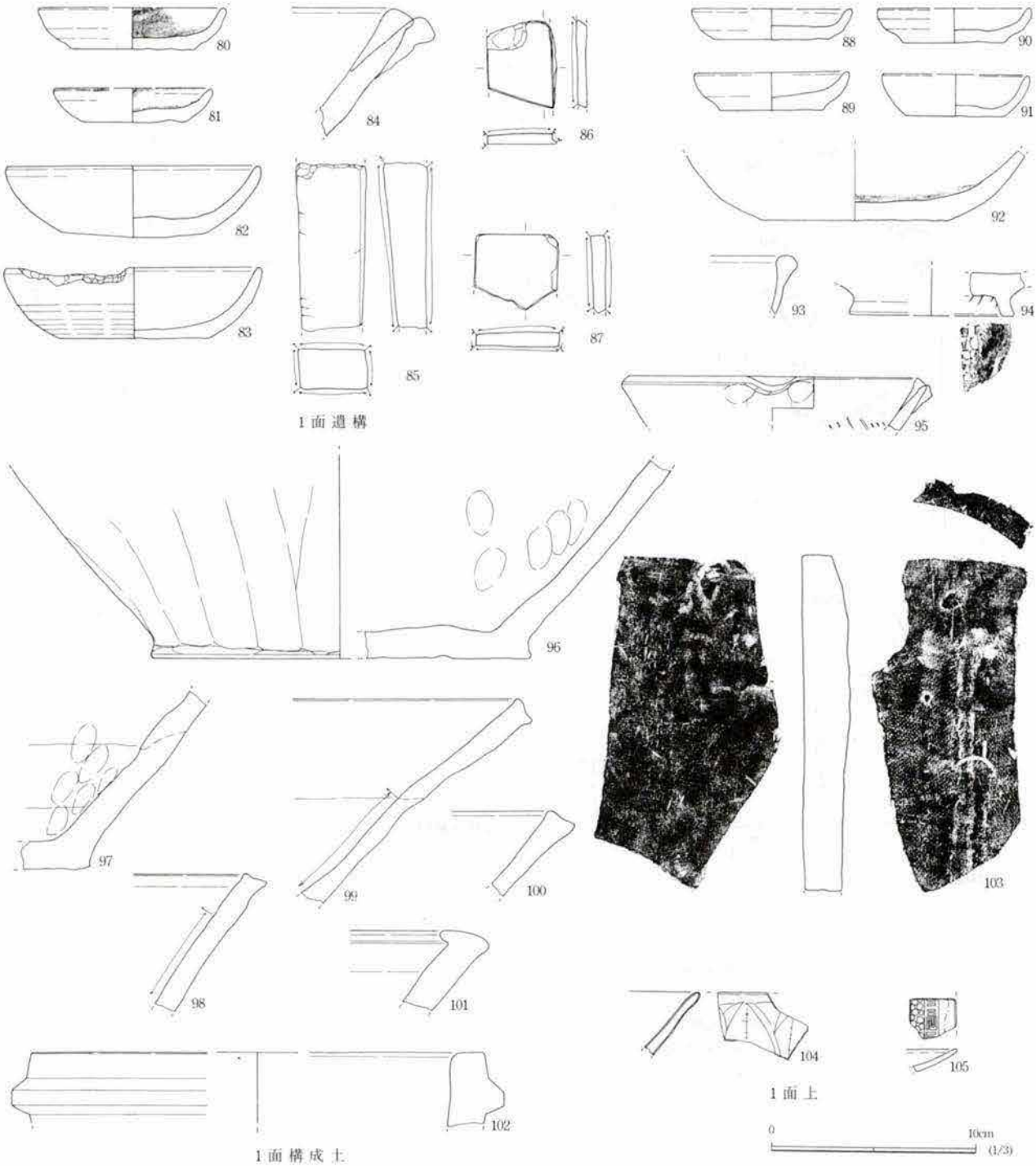


図12　1面出土遺物

・その他の遺物

図13－106～109は確認調査時の出土遺物。106は大型手捏ね底かわらけ。図3の3層相当出土。平底状で、口縁部下付近にナデ調整が施される。107は常滑窯甕口縁部片。断面T字状になる口縁形態を呈し、自然釉が厚く掛かる。108は鳴滝産仕上砥。砥面は表の1面で、裏面は摩耗しているが未使用と思われる。左右側面と小口は生産地鋸痕が残る。109は女瓦。凸面は砂目格子文叩き痕が残る。

図13－110～115は採集出土遺物。表土掘削時や帰属不明の遺物をここに含めた。110～112は糸切り底かわらけ。110は背低気味の小型で器壁が厚く、直線的に開きながら立ち上がる。111～112は背低気

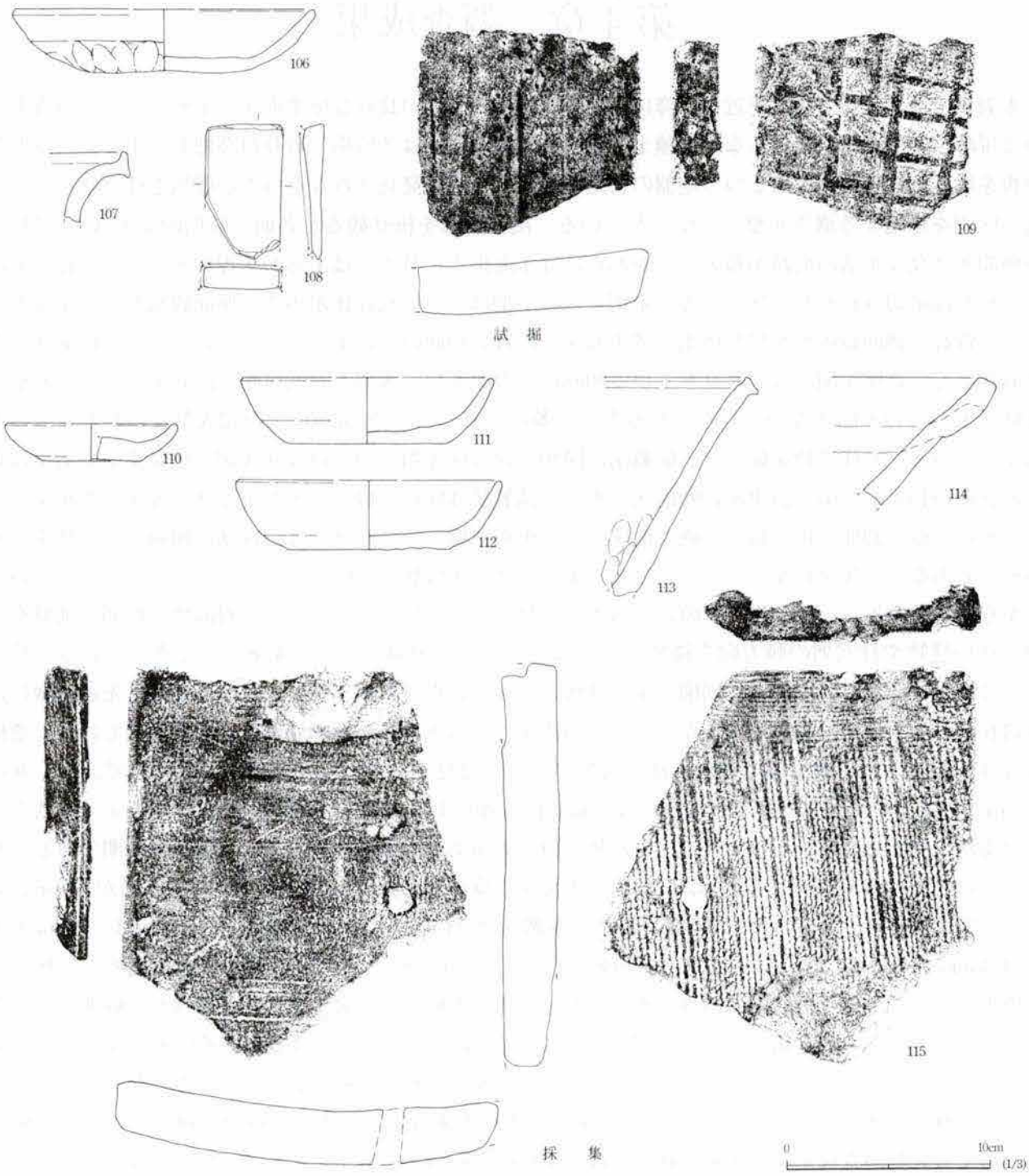


図13 採集遺物

味で内底面が広く、器壁は開きながら立ち上がる。113は常滑窯片口鉢II類口縁部片。体部内面下部には指頭痕が顕著に残り、使用による摩滅痕はみられない。体部が直線的に立ち上がり、口唇部に沈線が巡る。114は常滑窯片口鉢II類口縁部片。体部内面下部には使用による摩滅痕がみられる。口縁部はふくらみをもたせて内弯させている。115は女瓦。凹面は糸切痕にナデ調整、側面はヘラ削りで面取りしたあとにナデ調整を加えており側面角が丸く仕上げられている。凸面は縄目叩き痕が残る。凹凸面ともハナレ砂と思われる粗い砂粒が多く付着している。穿孔あり。

第４章　調査成果

本調査では、１面の南半が近世以降に削平されているものの良好な地業面を、下層では確認調査を含めて現時点では遺物が出土しない堆積土を発見した。その間は３時期に亘り自然地形に由る斜面地形を山腹を崩した土丹塊で克服しつつ地盤の安定を図り、井戸は発見されなかったが礎板を伴う建物や柱穴列、区画を示唆する溝等が整然と配されている。出土遺物を併せ観ると各面の時期的な差は殆ど無く、短期間乍活発な生活の痕跡が窺える。かわらけは４面出土に若干ではあるが手捏ねかわらけが在るものの、殆どは糸切り底かわらけである。糸切り底の小型は、口径底径比が小さく側面観箱型を呈するものから、背高で側面観碗型を呈し所謂「薄手丸深」に近い傾向のものまで出土しているが、背低気味で内底面が広く、器壁が開きながら立ち上がる傾向のものが多い。大型も背低気味で内底面が広く、器壁が丸味をもつものや開きながら立ち上がるものが多い一方で、口径15cm以上の超大型といわれるものも出土している。共伴遺物を観ると、舶載品は図10－76は椀Ⅹ類、口兀皿は皿Ⅸ類、龍泉窯系磁器類はⅢ類とＦ期の13世紀中頃～14世紀初頭前後、瀬戸窯諸製品は底卸目皿や入子が生産地で後期の生産がないことから、他の卸皿と併せ観ても概ね前期後半～中期全般、常滑窯甕では口縁部の側面がＴ字状を呈するものもあるが、Ｎ字状を呈する第６型式～第８型式の年代観のものが多く出土している。これらのことから、本調査地点では13世紀末頃に１層上面を整地して土地の利用が始り、斜面地と軟弱な地盤を克服に伴い建物や柱穴列の軸方向を微妙に変えながら14世紀中頃までには廃絶したと考えられる。地点１・３で発見されている様な、同期の生活址埋立て後に荼毘所の如く利用された否かは、先述の様に近世耕作土の削平があり確認できなかった。本調査地点から西に約90mで地点４が調査されている。遺構面は３面調査され、第１章で触れた様に大型の井戸が発見されているが遺構密度は希薄であり、海抜26.6mで岩盤面を確認している。遺物には永福寺Ⅰ・Ⅱ期の瓦や13世紀中頃のかわらけが図示・記載されているが、明記された各面の年代には差が無く14世紀前葉で本調査地点の年代とほぼ同時期である。参考までに地点４の調査時地表面は28.2mで、報文から算出した各面の海抜レベルは第１面が27.4m、第２面が27.2ｍ前後、第３面が27.0m弱であり、本調査地点の図３の調査区北壁での各面のレベルは１面が24.35m、２面が24.2m、３面が24.0m前後、４面が23.8m前後、１層が最高位23.7mを測る。１層を中世地山として、地点４の岩盤に相当するとすれば、本調査地点の４面を除き出土遺物が同時期という各面のレベル差は何れも３ｍになる。直線距離で90mで比高差３ｍはかなり差がある印象を受けるが、北に山肌が迫り南と西に河川が流下する地形を考えると或は違和感の無い数字なのかもしれない。第１章で述べた様に、永福寺跡（No．61）内での調査事例は本調査地点で未だ５地点に過ぎず、本調査成果を含めても発掘調査成果から文献に観る永福寺僧坊の位置特定には未だ至らず、併せて今後の調査成果に依らざるを得ない。

【引用・参考文献】
神奈川県教育委員会　1989　「鎌倉市No.126　永福寺跡（No.61）」『神奈川県埋蔵文化財調査報告31』．神奈川県教育委員会．1988年調査．地点１．
菊川英政　1998　『永福寺跡.二階堂字獅子舞613番４外地点』．永福寺跡発掘調査団．1990年調査．地点２．
福田誠・菊川泉　1994　「永福寺跡（No.61）　二階堂字杉ケ谷520番１外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊　急調査報告書』10（第１分冊）．鎌倉市教育委員会．1992年調査．地点３．
福田誠･菊川泉･神山晶子　1997　「永福寺跡（No.61）　二階堂字獅子舞603番１地点」『鎌倉市埋蔵文　化財緊急調査報告書』13（第１分冊）．鎌倉市教育委員会．1995年調査．地点４．
本調査地点．2003年調査．地点５．
菊川泉　1992　「二階堂杉ヶ谷出土の弓について」『鎌倉考古』23．　鎌倉考古学研究所
赤羽一郎・中野晴久　1994　『中世常滑焼をおって』　日本福祉大学知多半島総合研究所
山本信夫　2000　「太宰府条坊跡ＸＶ－磁器分類編－」『太宰府市の文化財』第49集　太宰府市教育委員会

表1　出土遺物計測表（1）

図版番号	種別	計測値/単位:cm（ ）=復元値［ ］=残存値			備考（胎土・色調・成形等）
図5-1	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.5)	底径 4.6	器高 1.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる赤褐色弱粉質土 外底面にスノコ痕　全体的に煤が付着
-2	常滑窯 甕胴部拓影	口径 —	底径 —	器高 —	格子文と対角線状に斜線を組み合わせた文様
-3	金属製品 鉄　釘	長さ [9.9]	幅　[0.65]	厚さ [0.5]	
-4	女　瓦	長さ —	幅　—	厚さ 1.9	胎土は白色・黒色微砂を混じえる灰色粉質土　器表は黒色を呈する
図7-5	土　器 かわらけ·糸	口径 8.2	底径 (7.4)	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土
-6	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.3)	底径 (6.5)	器高 1.8	胎土は多量の黒色微砂、雲母を混じえる濃肌色弱粉質土 全体的に表面が摩耗している為、外底面のスノコ痕不明
-7	土　器 かわらけ·糸	長さ (7.8)	幅　(5.6)	厚さ 1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土　表面が摩耗し外底面のスノコ痕不明　口唇部に煤、内外表面共に鉄分が付着
-8	土　器 かわらけ·糸	口径 7.8	底径 6.0	器高 1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-9	土　器 かわらけ·糸	口径 (11.0)	底径 (6.0)	器高 2.7	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる濃肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　全体的に表面が摩耗
-10	土　器 かわらけ·糸	口径 (11.8)	底径 (7.2)	器高 3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　口唇部に煤、内外面に鉄分が付着
-11	土　器 かわらけ·糸	口径 12.2	底径 7.6	器高 3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部付近に煤が付着
-12	女　瓦	長さ —	幅　—	厚さ 2.85	胎土は白色小石・砂を混じえる茶色土
-13	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.3)	底径 (4.4)	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 内面やや剥ぜている
-14	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.2)	底径 (7.4)	器高 3.0	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱砂質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が付着
-15	土　器 かわらけ·糸	口径 11.7	底径 7.0	器高 3.1	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
図10-16	土　器 かわらけ·糸	口径 7.5	底径 5.9	器高 1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部付近に煤、外面に鉄分が付着
-17	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.6)	底径 5.4	器高 1.3	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　　全体的に表面が摩耗
-18	土　器 かわらけ·糸	口径 7.6	底径 5.8	器高 1.5	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土 外底面にスノコ痕
-19	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.2)	底径 (5.8)	器高 1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
-20	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.5)	底径 (5.6)	器高 1.6	外底面にスノコ痕 胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土
-21	土　器 かわらけ·糸	口径 6.9	底径 4.6	器高 1.5	外底面にスノコ痕 胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる橙色弱粉質土
-22	土　器 かわらけ·糸	口径 —	底径 7.6	器高 —	内底面にロクロ痕が残る 素地は黒色微砂を混じえる灰白色粘質緻密土
-23	舶載品 龍泉窯系青磁鉢	口径 —	底径 —	器高 —	釉は不透明な灰緑色を呈する 大きな貫入が入る
-24	舶載品 青白磁梅瓶	口径 —	底径 (11.2)	器高 —	素地は黒色微砂を混じえる灰白色弱粘質緻密土 釉は不透明な淡水色を呈する　貫入が入る
-25	土　器 かわらけ·糸	口径 7.4	底径 5.2	器高 1.5~1.8	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉～砂質土 外底面にスノコ痕　全体的に表面が剥ぜている
-26	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.0)	底径 (6.2)	器高 1.5	胎土は黒色微砂と雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　内外表面に鉄分が付着
-27	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.0)	底径 (5.2)	器高 1.6	胎土は黒色微砂と雲母、白針を混じえる濃肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　内外表面に鉄分が付着
-28	土　器 かわらけ·糸	口径 8.0	底径 5.1	器高 1.7	胎土は黒色微砂と雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　外面に薄く煤が付着
-29	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.6)	底径 (7.6)	器高 3.2	胎土は黒色微砂と雲母、白針を混じえる淡肌色粉質土
-30	土　器 かわらけ·糸	口径 8.0	底径 6.1	器高 1.4	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が付着
-31	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.6)	底径 6.4	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面の中心に強い指頭による圧痕あり
-32	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.9)	底径 (5.6)	器高 1.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-33	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.6)	底径 (5.8)	器高 1.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面に不明瞭なスノコ痕あり

表2　出土遺物計測表（2）

図版番号	種別	計測値/単位:cm（ ）=復元値［ ］=残存値			備考（胎土・色調・成形等）
-34	土　器 かわらけ·糸	口径 7.5	底径 5.6	器高 1.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が、全体的に煤が付着
-35	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.4)	底径 (5.6)	器高 1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針、土丹粒を混じえる淡肌色弱粉質土 外面に鉄分が付着
-36	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.3)	底径 5.4	器高1.25~1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-37	土　器 かわらけ·糸	口径 7.7	底径 5.6	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-38	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.1)	底径 (5.2)	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土
-39	土　器 かわらけ·糸	口径 9.1	底径 4.6	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデがやや強い
-40	土　器 かわらけ·糸	口径 9.9	底径 5.0	器高 1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　二次焼成の為変色している箇所有り
-41	土　器 かわらけ·糸	口径 7.6	底径 5.1	器高 1.55	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　外面に鉄分が付着
-42	土　器 かわらけ·糸	口径 7.7	底径 (5.6)	器高 1.35	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉～砂質土 外底面にスノコ痕
-43	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.5)	底径 (5.4)	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-44	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.8)	底径 (5.6)	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　外面に鉄分が付着
-45	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.2)	底径 (7.0)	器高 3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内外面に鉄分が付着
-46	土　器 かわらけ·糸	口径 (6.3)	底径 5.0	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内外面に鉄分が付着
-47	土　器 かわらけ·糸	口径 7.6	底径 4.8	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土　外底面にスノコ痕　内外面に鉄分が付着　割れ口の煤から破損後に火を受けている
-48	土　器 かわらけ·糸	口径 7.5	底径 4.8	器高 2.3	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる橙色弱粉質土 外底面のスノコ痕はナデのため不明瞭　内面に鉄分が付着
-49	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.4)	底径 5.0	器高 2.0	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が付着
-50	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.7)	底径 (4.8)	器高 1.65	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉～砂質土 全体的に表面が摩耗　割れ口の煤から破損後に火を受けている
-51	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.5)	底径 (8.0)	器高 3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-52	土　器 かわらけ·糸	口径 (13.2)	底径 (7.0)	器高 3.0	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が付着
-53	土　器 かわらけ·糸	口径 12.9	底径 8.0	器高 3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-54	土　器 かわらけ·糸	口径 13.4	底径 (9.0)	器高 3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる暗肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内外面に鉄分と煤が付着
-55	土　器 かわらけ·糸	口径 (11.9)	底径 (8.0)	器高 3.2	胎土は多量の黒色微砂と雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内面に鉄分が付着
-56	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.9)	底径 (5.6)	器高 1.85	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-57	土　器 かわらけ·糸	口径 (13.0)	底径 (7.0)	器高 3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-58	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.8)	底径 (8.0)	器高 3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデがやや強い
-59	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.8)	底径 (8.6)	器高 3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 内底面は指頭によるナデが強い
-60	舶載品 白磁口兀皿	口径 —	底径 —	器高 —	素地は黒色微砂を混じえる灰白色粘質緻密土 釉は不透明な灰白色を呈する
-61	瀬戸窯 入　子	口径 (7.4)	底径 (4.4)	器高 2.3	胎土は明灰色弱粘質緻密土　前期後半～中期の製品
-62	常滑窯 壺	口径 (9.0)	底径 —	器高 —	胎土は白・黒色微砂を混じえる茶色土　器表は暗茶褐色を呈する 口縁部～肩部周辺に降灰による自然釉が掛かる　第9型式の製品？
-63	常滑窯 片口鉢Ⅰ類	口径 (15.4)	底径 —	器高 —	胎土は器表共に白・黒色微砂を混じえる灰色土を呈する 口縁部～体部内面にかけて降灰による自然釉が掛かる　第5型式の製品
-64	浅鉢型火鉢	口径 (15.4)	底径 —	器高 —	胎土は黒色小石・白色砂を混じえる灰白色土　器表は灰黒色を呈する。表面に鉄分が付着する
-65	金属製品 刀　子	長さ [14.6]	幅　[2.1]	厚さ [0.4]	
-66	土器 かわらけ·糸	口径 (7.0)	底径 (5.0)	器高 1.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　表面に鉄分が付着"

表3　出土遺物計測表（3）

図版番号	種別	計測値/単位:cm（ ）=復元値［ ］=残存値			備考（胎土・色調・成形等）
-67	土　器 かわらけ·糸	口径 7.5	底径 5.6	器高 1.5	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデがやや強い
-68	土　器 かわらけ·糸	口径 7.4	底径 5.4	器高 1.5	胎土は多量の黒色微砂と雲母、白針を混じえる濃肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　口唇部と内面に煤が、内外表面共に鉄分が付着
-69	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.4)	底径 (5.4)	器高 1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-70	土　器 かわらけ·糸	口径 7.6	底径 4.9	器高 2.0	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデが強い
-71	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.6)	底径 (7.2)	器高 3.4	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　外表面に鉄分が付着
-72	土　器 かわらけ·糸	口径 (13.2)	底径 (7.6)	器高 3.3	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　外表面に鉄分が付着
-73	舶載品 龍泉窯系青磁鉢	口径 —	底径 —	器高 —	素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は不透明な水青色を呈する
-74	舶載品 龍泉窯系青磁鉢	口径 (12.4)	底径 —	器高 —	素地は灰味白色粘質緻密土 釉は不透明な草緑色を呈する　大きな貫入が入る
-75	舶載品 龍泉窯系青磁鉢	口径 —	底径 (5.0)	器高 —	素地は灰味白色粘質緻密土 釉は不透明な水青色を呈する　大きな貫入が入る
-76	舶載品 白磁口兀碗	口径 (12.4)	底径 3.9	器高 5.2	素地は白色粘質緻密土　釉は乳白色を呈する
-77	銅製品 環状不明品	口径 —	底径 —	器高 —	
-78	銅　銭 北宋・咸平元寶	径　2.5			初鋳年998年　楷書
-79	石製品 方形硯	長さ 17.7	幅　[4.0]	厚さ [1.9]	黒色粘板岩若王子石か？
図12-80	土　器 かわらけ·糸	口径 (9.0)	底径 (6.0)	器高 2.0	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡橙色弱粉質土 外底面にスノコ痕　全体的に煤が付着"
-81	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.6)	底径 (4.8)	器高 1.6	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉質土 外底面にスノコ痕　口唇部と内底面に煤が付着"
-82	土　器 かわらけ·糸	口径 12.2	底径 7.0	器高 3.45	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱砂質土 外底面にスノコ痕　"
-83	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.4)	底径 (7.2)	器高 3.5	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる橙色弱粉質土 外表面にロクロ痕が残る　"
-84	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色小石、微砂を多く混じえる暗肌色土　器表は明茶色を呈する 第6a型式の製品"
-85	石製品 伊予産中砥	長さ [8.1]	幅　[3.2]	厚さ [1.95]	白色味強石目の詰まった黄色で質感あり
-86	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ [4.2]	幅　[3.3]	厚さ [0.5]	淡黄色～淡珈色系で質感あり
-87	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ [8.1]	幅　[3.9]	厚さ [0.6]	淡灰黄色で質感あり　やや軟質
-88	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.6)	底径 (5.4)	器高 1.5	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕
-89	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.4)	底径 (5.0)	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡橙色弱粉～砂質土 外底面にスノコ痕　内底面はナデが強く、摩耗
-90	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.4)	底径 (5.0)	器高 1.7	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる淡肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕
-91	土　器 かわらけ·糸	口径 (7.0)	底径 (4.8)	器高 2.0	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデが強い"
-92	土　器 かわらけ·糸	口径 —	底径 9.2	器高 —	胎土は多量の黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱砂質土 外底面にスノコ痕　内底面に煤が、内外表面共に鉄分が付着　"
-93	舶載品 緑釉盤	口径 —	底径 —	器高 —	
-94	瀬戸窯 灰釉底卸皿	口径 —	底径 (8.0)	器高 —	胎土は明灰色弱粘質緻密土　釉は黄色味がかった淡緑色 前期後半～中期の製品
-95	瀬戸窯 灰釉卸皿	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は黄色粉質弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色　中期の製品
-96	常滑窯 甕	口径 —	底径 (18.6)	器高 —	胎土は器表と共に白色・黒色微砂を混じえる灰色土を呈する
-97	常滑窯 甕	口径 —	底径 —	器高 —	
-98	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色砂を混じえる灰黒色土　器表は暗赤褐色を呈する 体部内面に鉄分が付着する　第8型式の製品
-99	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色小石、白・黒色微砂を混じえる灰色土　器表は暗茶色を呈する　体部内面に鉄分が付着する　第8型式の製品

表4　出土遺物計測表（4）

図版番号	種別	計測値/単位:cm（ ）=復元値［ ］=残存値			備考（胎土・色調・成形等）
-100	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色小石や粗砂を混じえる暗橙色土で胎芯は灰黒色 器表は茶色～暗茶褐色を呈する　第7～8型式の製品"
-101	土器質 浅鉢型火鉢	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は黒色砂と白色砂を混じえる灰白色土　器表は灰黒色を呈する
-102	石製品 滑石鍋	口径 —	底径 —	器高 —	小片の復元の為、口径に不安あり
-103	男　瓦	長さ —	幅　—	厚さ 2.25	胎土は白色・黒色微砂を混じえた灰色土　器表は黒色を呈する
-104	舶載品 青磁鎬蓮弁文碗	口径 —	底径 —	器高 —	素地は灰白色弱粘質緻密土　釉は不透明で濁った灰味水青色を呈する
-105	舶載品 青白磁小皿	口径 —	底径 —	器高 —	素地は白色弱粘質緻密土　釉は透明な薄い水色を呈する
図13-106	土器 かわらけ·手	口径 (14.6)	底径 (13.2)	器高 3.1	胎土は黒色微砂、多量の雲母、白針を混じえる淡茶色弱粉～粉質土 外底面に煤が付着
-107	常滑窯 甕	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色微砂・黒色小石を混じえる明灰色土　器表は暗灰緑色を呈する　全体的にかけて自然釉が厚くかかる　第6a型式の製品
-108	石製品 鳴滝産仕上砥	長さ [6.5]	幅　[3.6]	厚さ [1.0]	淡黄色で質感あり　やや軟質
-109	女　瓦	長さ —	幅　—	厚さ 2.6	胎土は白色小石・砂、黒色微砂を混じえる灰黄色～淡紅色土
-110	土　器 かわらけ·糸	口径 (8.2)	底径 (4.8)	器高 1.8	胎土は黒色微砂、雲母を混じえる淡肌色弱粉質土　外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデが強く、全体的に摩耗している
-111	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.2)	底径 (7.6)	器高 3.2	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデが強い
-112	土　器 かわらけ·糸	口径 (12.8)	底径 (8.0)	器高 3.4	胎土は黒色微砂、雲母、白針を混じえる肌色弱粉質土 外底面にスノコ痕　内底面は指頭によるナデが強い
-113	常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土・器表共に白色小石と黒色微砂を混じえる茶褐色土 胎芯は黒灰色を呈する　第6b～7型式の製品"
-114	"常滑窯 片口鉢Ⅱ類	口径 —	底径 —	器高 —	胎土は白色小石・粗砂を混じえる黒灰色土　器表は茶色土を呈する 口縁部～内面にかけて自然釉がかかる　第10型式の製品""胎土は
-115	女　瓦	長さ —	幅　—	厚さ 2.65	白色・黒色微砂・雲母を混じえる灰色粉質土 器表は灰黒色を呈する

表5　出土遺物破片数表

遺物／層位	かわらけ		舶載品	国内産陶器類			火鉢	瓦	石製品		金属製品			計	%
	糸切り	手捏ね		山茶碗	瀬戸	常滑			滑石	砥石	銅銭	鉄製品	銅製品		
4面遺構	10	21	2			1		3				1		38	1.2
3面遺構	177	2	1	2		8		3						193	6.2
3面構成土	35	18				3		2						58	1.8
3面上	1													1	0.0
2面炭層	206		3	1	1	13		1			1			226	7.2
2面遺構	187					12		1						200	6.4
2面構成土	554		14	3	2	34	1	7	1		1	2		619	19.7
2面上	407		16			27		7			1		1	459	14.6
1面遺構	229		2	1	3	5		9		3				252	8.0
1面構成土	748		12		9	70	6	32	1					878	28.0
1面上	55		3		3	5		4						70	2.2
試掘·採集	110	4	1			18		10		1				144	4.6
計	2719	45	54	7	18	196	7	79	2	4	3	3	1	3138	100.0
%	86.6	1.4	1.7	0.2	0.6	6.2	0.2	2.5	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	100.0	

1.　1面全景（南から）

2.　1面北（南半東から）

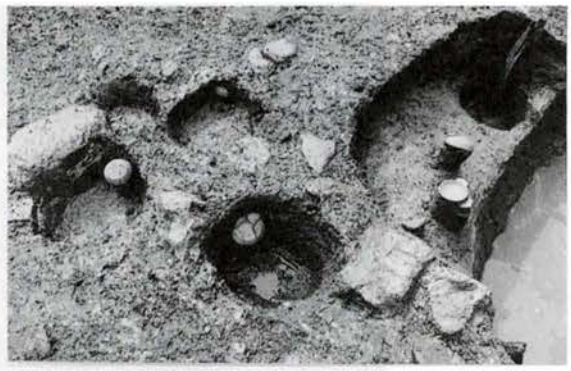
3.　1面土坑7堆積土層（北西から）

4.　1面土坑（北から）

図版 2

1.　2面全景（南から）

2.　2面南半土丹地業（部分・南から）

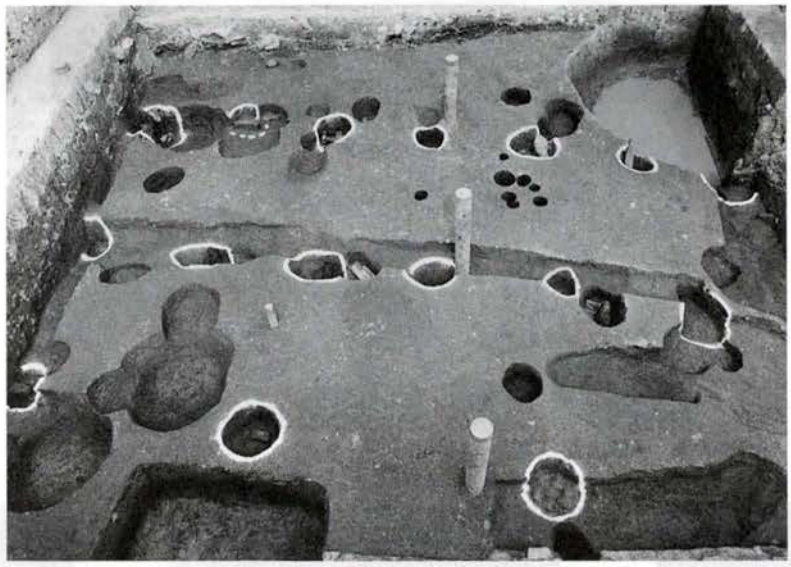


3.　2・3面E-2付近（東から）

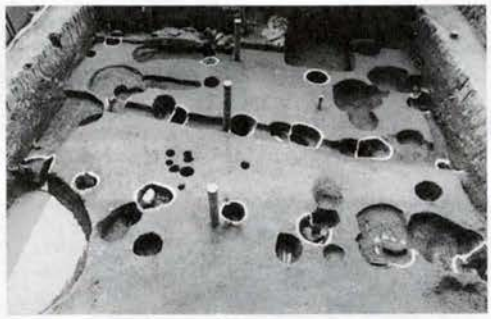
4.　2～3面炭層上遺物出土状況（北東から）

5.　2面遺物出土状況（北から）

6.　2～3面炭層（東から）



1.　2・3面柱穴列と建物（南から）

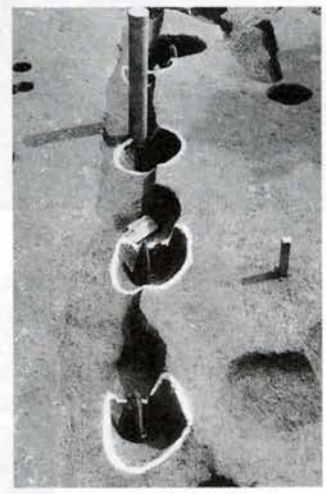


2.　同　上（北から）

3.　同　上（東から）

4.　3面柱穴列2（西から）

5.同　左・2面建物と溝（東から）



6.2面建物北側柱穴と溝（西から）

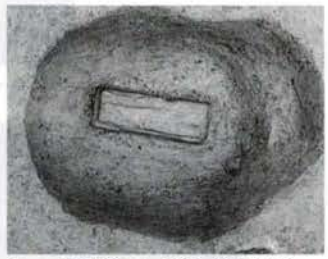
7.　3面土坑12下層堆積土層（北西から）

図版 4

1.　4面全景（南から）

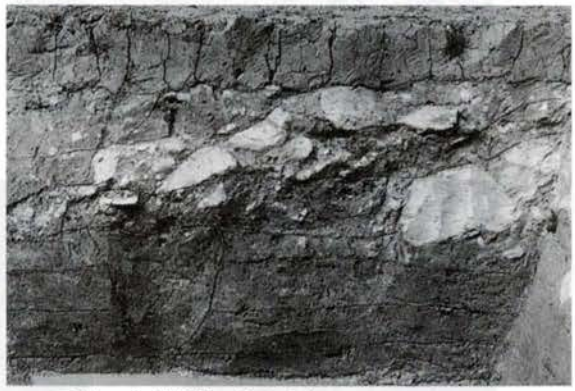
3.　4面ピット404（東から）

2.　4面全景（東から）



4.　4面ピット402（東から）

5.　西壁堆積土層（北東から）



6.　同左・北端部分（東から）

7.　北壁堆積土層（南から）

8.　東壁堆積土層（北西から）

13

16

18

25

28

30

22

31

33

35

36

37

39

42

48

70

90

91

9

11

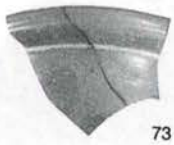
53

56

82

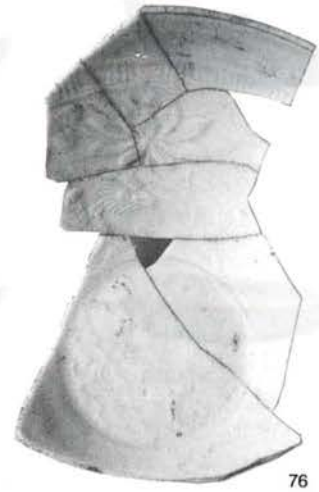
83

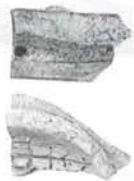
図版 6


73

104

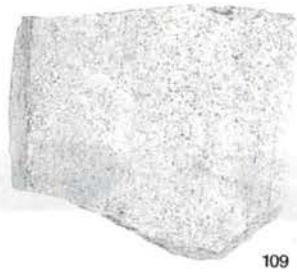
105

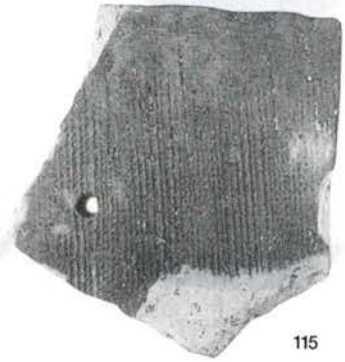

76


94

95

117


109


115

3

77

79

78

80

82

85

米町遺跡（No.245）

大町二丁目992番7外地点

例　言

1. 本書は、鎌倉市大町二丁目992番7外における自己用店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
   調査期間は平成15年12月1日～同年12月26日にかけて実施され、調査対象面積は35㎡である。出土遺物に関しては鎌倉市教育委員会がこれを保管している。
3. 調査団編成は以下のとおりである。
   調査の主体　鎌倉市教育委員会
   調査担当者　滝澤晶子（日本考古学協会会員）
   調　査　員　宮田眞
   調査補助員　安達澄代
   調査協力者　藤枝正義・荻野勲・牛嶋道夫・秋田公佑（以上、社団法人鎌倉市ｼﾙﾊﾞｰ人材ｾﾝﾀｰ）
4. 本書の遺構･遺物の縮尺は次の通りである。
   遺構図　1／40（遺構図の水糸高は海抜高を示す。）
   遺物実測図　1／3･1／6
5. 遺物実測図には次の記号が使用されている。
   釉の限界線 —·—·—·—·　使用痕の範囲 ⊢———⊣
   調整の変化点 ————　加工痕の範囲 ⊢— — —⊣
6. 本書の執筆・編集は以下のものが行なった。
   第1～3章　森孝子　第4章　滝澤晶子
7. 本書の図版作成及び写真撮影は次の者が分担した。
   遺構図版　滝澤晶子・渡辺美佐子
   遺物図版　河内令子
   遺構写真　滝澤晶子
   遺物写真　滝澤晶子
8. また、発掘調査に際して多大な御協力を頂いた施主に深く感謝の意を表する。

目　　次

本 文 目 次

第1章　遺跡の位置と歴史的環境 ……374
第2章　調査経過・ｸﾞﾘｯﾄﾞ配置・基本土層 ……376
第3章　検出遺構と出土遺物 ……378
第4章　まとめ ……391

図 版 目 次

図1　遺跡の位置 ……375
図2　ｸﾞﾘｯﾄﾞ配置図 ……376
図3　基本層序 ……377
図4　1面遺構配置図 ……378
図5　溝1・2 ……379
図6　溝1出土遺物 ……379
図7　1面出土遺物 ……379
図8　表土層出土遺物 ……379
図9　2面遺構配置図 ……380
図10　方形竪穴建築址1 ……381
図11　方形竪穴建築址1出土遺物 ……382
図12　方形竪穴建築址2・3 ……383
図13　方形竪穴建築址2出土遺物（1） ……384
図14　方形竪穴建築址2出土遺物（2） ……386
図15　方形竪穴建築址3出土遺物 ……387
図16　土坑1～3・5 ……388
図17　土坑1～3出土遺物 ……389
図18　2面出土遺物 ……390

写 真 目 次

図版1　A.溝1・2(北西から) ……392
　　B.方形竪穴建築址1・土坑1・2(南から) ……392
図版2　A.方形竪穴建築址2・3・土坑6・7（南西から） ……393
　　B.同上（西から） ……393
図版3　出土遺物（1） ……394
図版4　出土遺物（2） ……395

第1章　遺跡の位置と歴史的環境

本報する地点は、鎌倉市大町二丁目992番7外に所在し、米町遺跡(神奈川県遺跡台帳NO.245)内に位置する。小道を挟んで西側は下馬周辺遺跡である。

米町遺跡は、下馬周辺遺跡の北東側に位置しており、東西700m、南北は横須賀線を南限とする200mの範囲である。

本地点は若宮大路と県道鎌倉・葉山線が交叉する下馬四つ角を東(名越)方向に約200m進み、最初の路地を右折して、約20m南下した左側の場所で、米町遺跡の西端に位置する。現状は宅地である。

調査地点は、鎌倉時代の基幹である若宮大路から西方向に200mに所在する。また、両遺跡地の北側を東西方向に走る県道鎌倉・葉山線は、鎌倉時代の大町大路といわれており、さらに、律令時代は東海道の道筋の可能性があるともいわれ、古代から鎌倉時代を通しての重要な幹線道路であったと考えられている。このような環境下にあり、遺跡地近辺は当該期には非常に繁華な様相であったことは想像に難くない。

また、本地点の所在する米町遺跡の「米町」とは、鎌倉時代に裁許を受けた商業地域の名称の一つである。鎌倉幕府は、商業地域を限定するため2回法令を出している。

建長三年十二月三日の条―鎌倉中小町屋之事被定置處々―
大町　小町　米町　龜谷辻　和賀江　大倉辻　氣和飛坂山上

文永二年三月五日の条―町御免所の事―
一所大町　一所小町　一所魚町　一所穀町　一所武藏大路下　一所須地賀江橋　一所大倉辻

とあり、二度の法令の中、共に、米町、及び穀町(米町？)の名前が見られる。鎌倉時代には、遺跡地周辺は繁華な商業地域となっていたのであろう。

図1に示した範囲内で過去に発掘調査が実施されたのは、11地点である。6地点からは強固な版築面が検出され、これが道路遺構である可能性を指摘し、車大路、又は古い東海道の可能性があると報告している。8地点からは12世紀第4四半期～13世紀後半の遺構群が検出され、13世紀前半までの武士居住区の様相、また、13世紀前半以降から13世紀後半まで活動の様相が確認されている。

また、本遺跡地南方に位置する材木座町屋遺跡内の材木座一丁目910地点では、中世遺構群下に、律令期の遺構群が検出されている。本遺跡地からは160m南方にあり、本調査地点においても律令期の遺構群が存在する可能性が指摘出来、注目される点である。

0　200m
(1:2500)

米町遺跡

1.本調査地点
2.大町二丁目933番ほか地点
3.大町二丁目931番1地点
4.大町二丁目2308番1地点
5.大町二丁目2313番15地点
6.大町二丁目2312番4・10地点
7.大町二丁目2315番ほか地点
8.大町二丁目2314番1ほか地点
9.大町二丁目2338番1地点
10.大町二丁目2411番2地点
11.大町二丁目2404番の一部地点

下馬周辺遺跡

12.大町二丁目975番6地点

図1　遺跡の位置

引用・参考文献

黒板勝美　1995　吾妻鏡第4　吉川弘文館
大河内勉　1998　「下馬周辺遺跡発掘調査報告書」　下馬周辺遺跡発掘調査団
宗臺秀明他　1992「下馬周辺遺跡」下馬周辺遺跡発掘調査団
降矢順子　2000「米町遺跡」鎌倉市米町遺跡発掘調査団
馬淵和雄他　2004「米町遺跡」鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20(1冊分)

第2章　調査経過・グリッド配置・基本層序

調査経過

本調査地点は鎌倉市大町二丁目992番7外に所在する。調査は平成15年12月1日～26日にかけて実施された。調査面積は35㎡である。便宜上、調査区を東西に2分し、東側をⅠ区、西側をⅡ区として調査を実施した。なお、掘削限界の深度は200㎝である。

12月2日　重機による表土掘削
12月3日　器材搬入
12月4日　Ⅰ区より調査開始。シルバー人材センターの4名が本日より参加。
12月5日　方形竪穴建築址1・土坑1・溝1・2検出。
12月6日　レベル原点移動(遺跡地の海抜：6.689m)。
12月9日　溝1・2・土壙2平面測量。
12月10日　国土座標の移動・測量のためのグリッド設定。
12月11日　Ⅰ区土坑群掘り上げ。
12月12日　1区全景・平面測量・南壁セクション実測。
12月13日　土坑5掘り上げ。
12月15日　Ⅱ区調査開始。方形竪穴建築址2・3検出。
12月16日　Ⅱ区遺構精査。
12月18日　土坑6・7検出。
12月24日　Ⅱ区全景。
12月25日　Ⅱ区平面測量。
12月26日　調査終了。器材撤収。

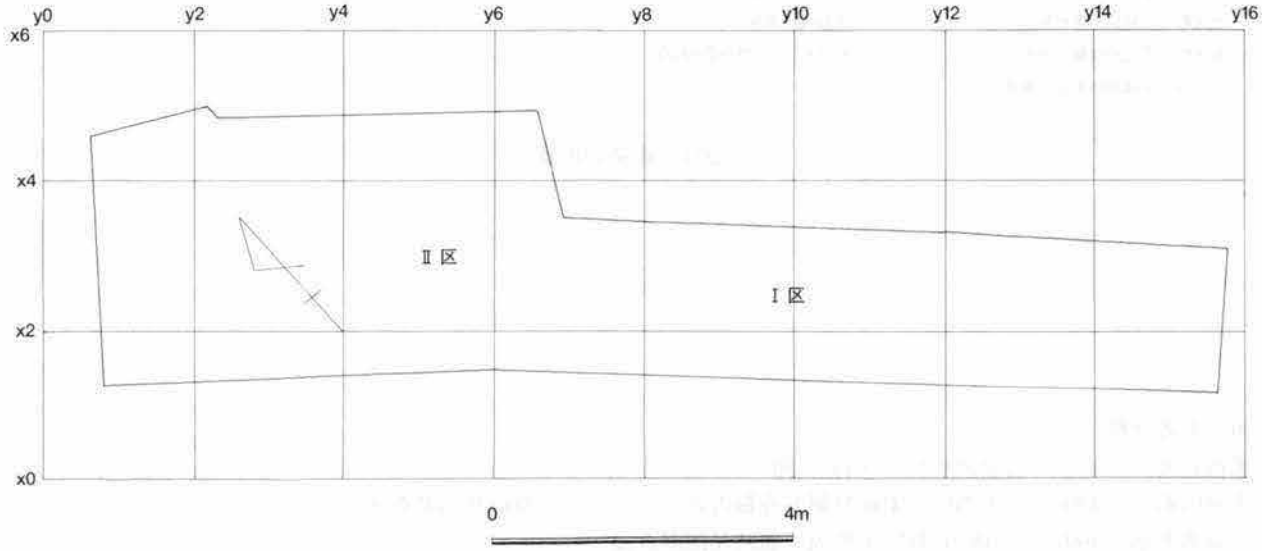


図2　グリッド配置図

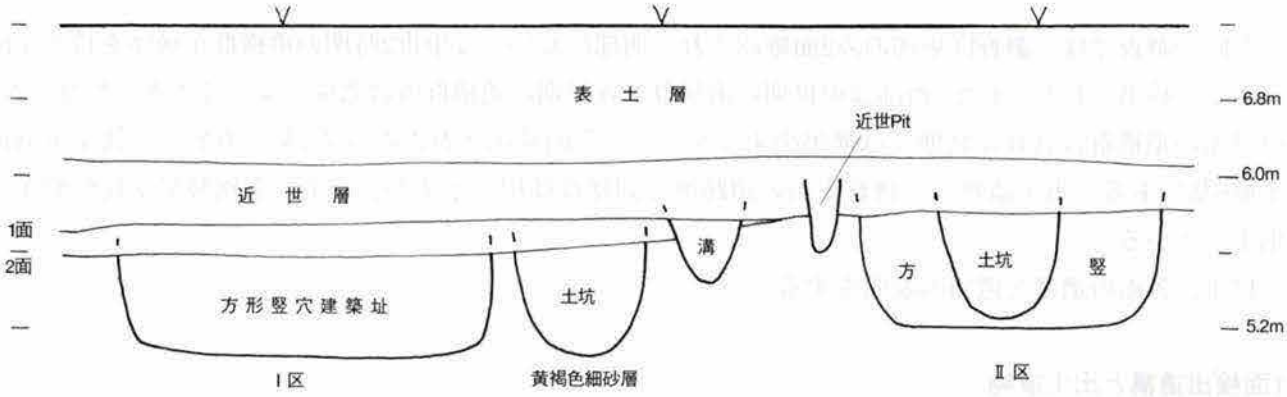


図3　基本層序

グリッド設定（図2）

グリッドは調査区全体をカバーするように設定した。南北方向をx軸、東西方向をy軸とし、南から北へ、西から東へと数値が増える。また、グリッドの名称は北西隅とした。

北はx軸から132°37′40″東に傾く。また、本来の方位と異なるが、便宜上x軸を南北、y軸を東西と呼び報告する。

国土座標（エリア9）との関係はグリッド(x2,y0)＝国土座標(−76341.240m,−25274.761m)である。

基本層序(図3)

本調査地点からは一部同一面上に、中世期の2時期の遺構群が検出された。遺構面は海抜5.6〜5.8m前後である。

以下、層序は以下のとおりである。

表土層　　現代の塵孔、基礎杭、盛土等の層である。80cm前後の堆積である。

近世層　　暗褐色砂質土層で、0.5〜1.0cmの土丹粒子を含み、粘性はなく、しまる。

黄褐色細砂層　中世遺構群が検出された層である。近辺の遺跡からは、古代の遺構群の検出されている。

第3章　検出遺構と出土遺物

今回の調査では、調査区東部のみ2面確認され、西部においては中世2時期の遺構群が層序を持たず同一面上に検出された。また、西部は中世期の遺構群が近世期の遺構群或は造成によって大きく撹乱され、中世期の遺構群は良好な状態では検出出来なかった。今回検出されたのは溝2条、方形竪穴建築址3軒、土壙6基である。出土遺物は、鎌倉市街の遺跡地と同様な様相を示すが、常滑・金属製品が比較的多く出土している。

以下、各面の遺構と遺物の説明をする。

1面検出遺構と出土遺物

1面検出遺構(図4)

1面は東部、Ⅰ区調査区の一部分でのみで、海抜5.7m前後で検出された。検出されたのは溝2条である。

溝1・2（図5）

Ⅰ区調査区、x2～4・y6～13に海抜5.8m～5.4mで検出された2条の南北溝である。溝1が溝2を切る。溝1の西端は後世の撹乱を受けており、北肩の大半は調査区外北に在る。検出された掘方規模は東西400㎝、溝幅22㎝～34㎝、深さは確認面より8㎝～14㎝を測る。底部は西から東に緩く傾斜しており、比高差は25㎝を測る。

溝2は東端が後世の撹乱にあい、西端は調査区外北西方向へと続く様相を呈する。検出された掘方規模は東西の長さ400㎝、溝幅40㎝、深さは確認面より6㎝～13㎝を測る。底部は西から東へ緩く傾斜して

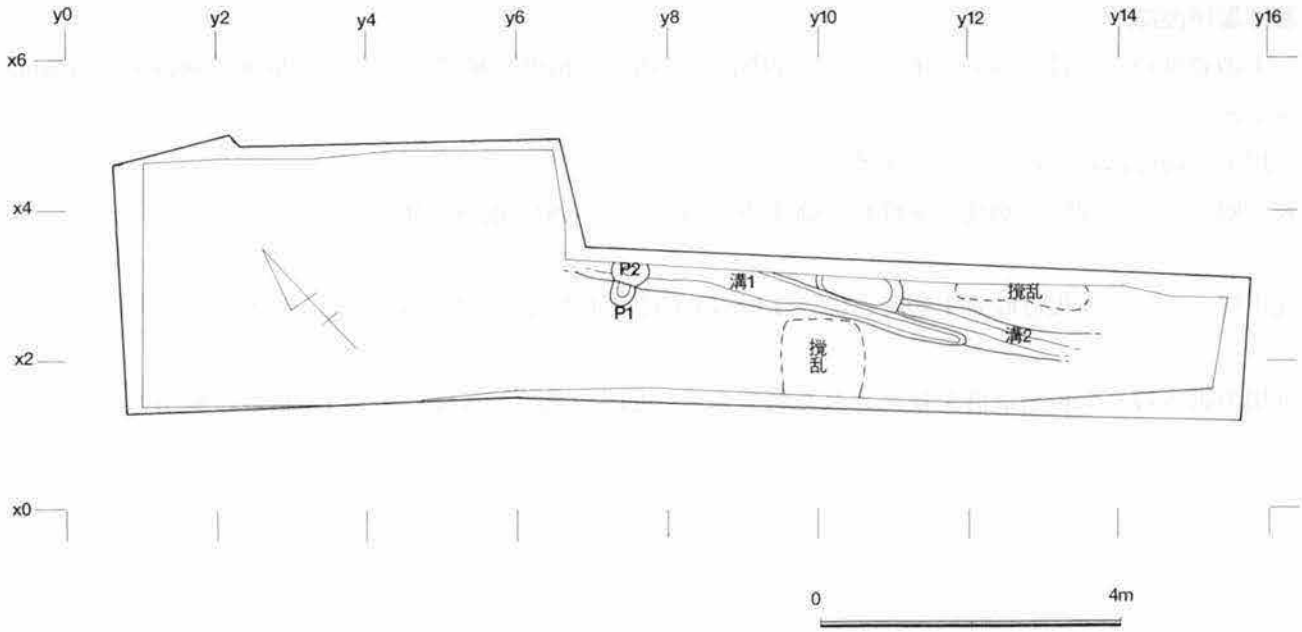


図4　1面遺構配置図

おり、比高差は18cmを測る。

溝1・2の覆土は共に暗褐色砂質土層で、小土丹粒子・少量の炭化物を含み、比較的しまりはある。

この溝群の東西軸方向はN−35°−Wである。

図5　溝1・2

溝1出土遺物(図6)

1はかわらけを転用した取瓶で、口縁部の小片である。内面に鉄滓が付着している。

図6　溝1出土遺物

1面出土遺物(図7)

1は轆轤成形のかわらけの小皿である。復元口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.1cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針・赤茶色粒子・黒色微粒子を含む。薄手の皿状で、体部中央部に明瞭な稜線を有する。

2は山茶碗窯系捏鉢の口縁部の小片である。胎土は茶味灰色を呈し、長石粒子を含む。口縁部は肥厚し、口唇中央部は凹む。

3は手づくね成形の白かわらけである。復元口径8.8cmを測る。胎土は白褐色を呈し、4 四方の赤茶色塊を混入するキメ細かい精良土である。器表は非常になめらかである。

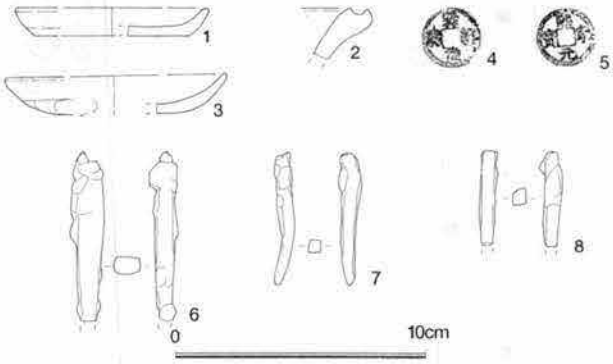


図7　1面出土遺物

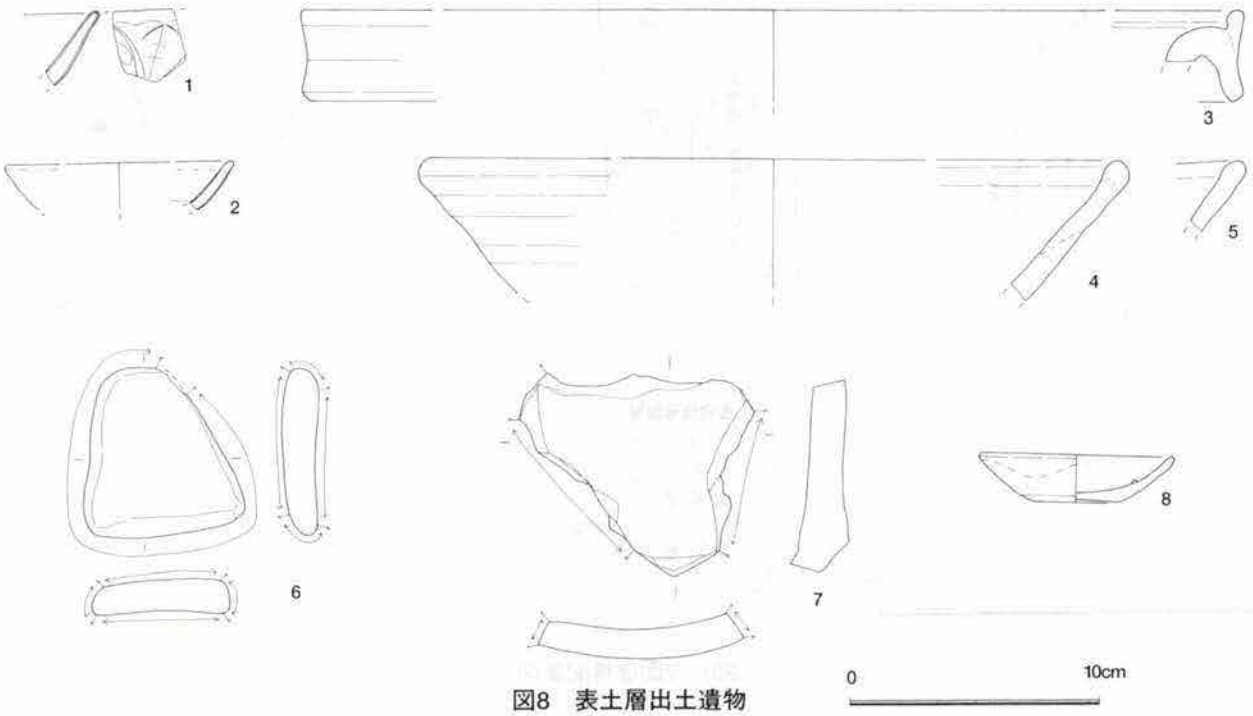


図8　表土層出土遺物

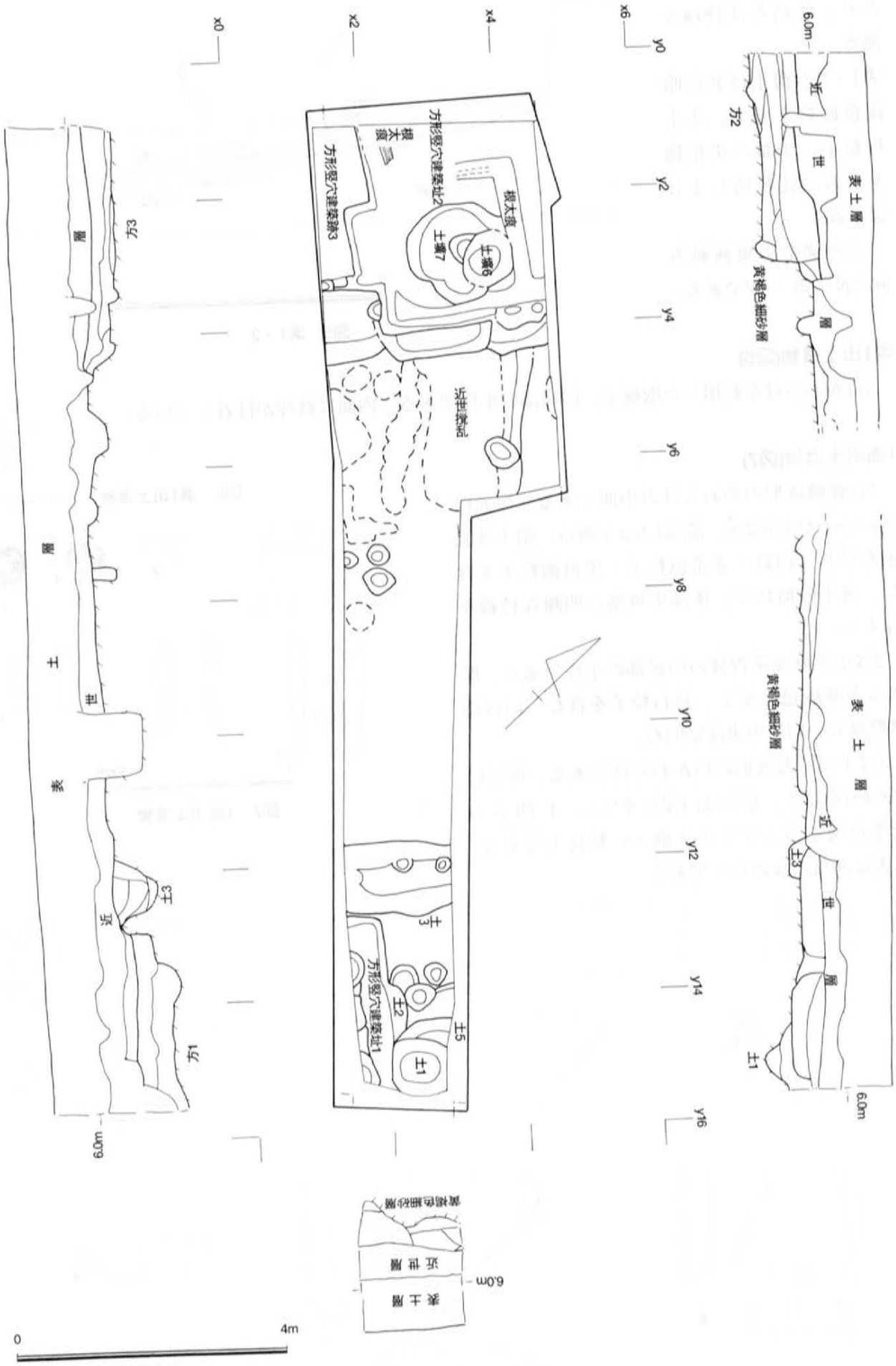

表土層
近世層
黄褐色細砂層
方2
6.0m
x0
x2
x4
x6
y0
y2
y4
y6
y8
y10
y12
y14
y16
方形竪穴建築址2
方形竪穴建築跡3
方形竪穴建築址1
根太痕
土壙6
土壙7
近世遺構
土1
土2
土3
土5
方3
方1
0
4m

図9　2面遺構配置図

4～8は金属製品である。4・5は北宋銭である。4は景祐元寶、5は熙寧元寶である。6～8は鉄製品、釘である。7は完形品で長さ5.4㎝、太さは5㎝×5㎝、断面の平面形は正方形である。

表土層出土遺物(図8)

1・2は磁器である。1は龍泉窯系青磁、鎬蓮弁文碗の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、釉は半透明な淡褐緑色である。器表は両面共に粗く貫入する。2は白磁、口兀皿である。復元口径9㎝を測る。胎土は白色を呈し、黒色微粒子を混入する。釉調は灰白色で、器表に気孔が若干観察される。

3は常滑の甕の口縁部である。復元口径は37.6㎝、縁帯幅は3.6㎝を測る。胎土は暗灰色を呈し、長石粒子・黒色微粒子を含む。器表は茶褐色を呈し、内面のみ降灰している。

4・5は山茶碗窯系捏鉢の口縁部である。4の復元口径は28.4㎝を測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子・小石を混入する。口縁部は若干内傾し、軽く降灰を受ける。5は小片である。胎土は灰色を呈し、長石微粒子を含む。内面に軽く降灰が観察される。

6・7は研磨痕のある常滑片である。6は鉢の口縁部の破片で、全面が研磨されている。7は底部片で、断面の2辺に微かな研磨の痕跡が観察される。

8は近世の瀬戸、灰釉灯明皿受けである。口径7.8㎝、底径3.5㎝、器高1.8㎝を測る。胎土は白褐色、釉調は淡黄色である。内面にのみ施釉されており、器表の貫入は密、かつ微細である。重ね焼の痕跡が内面に3個、外面に1個観察される。

2面検出遺構と出土遺物

2面検出遺構(図9)

2面はⅠ・Ⅱ区で検出され、海抜5.5m～5.7m前後に方形竪穴建築址3軒、土坑6基が検出された。

方形竪穴建築址1(図10)

Ⅰ区調査区、x2・y12～15グリッド内に海抜5.5mで検出された。当址の南側の大半は調査区外南に延び、東壁の肩は調査区外東に在る。また、北壁の肩の一部は土壙2と切りあう。

検出された掘方規模は東西250㎝、南北50㎝を測る。深さは最大で確認面より34㎝を測る。壁はほぼ直立して立ち上がり、床面は平坦である。床面にはピット状の落ち込みがあり、1口が確認された。西端のP－6は直径50㎝の半円形を呈し、深さは41㎝を測る。

覆土は暗褐色粘質土層で、1㎝～5㎝大の土丹塊・炭化物・貝殻片・遺物を含み、比較的しまる。ピット状の落ち込み状の覆土は明黄褐色砂層で、貝殻片を多く含み、しまりは悪い。

当址の東西の軸方向はN－48°－Wである。

また、方形竪穴建築址構築以前の落ち込みが1ヶ所床面下から検出され、手づくねかわらけが出土したが、その大半が調査区外のため詳細は不明である。

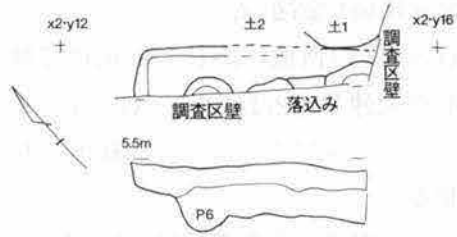


図10　方形竪穴建築址1

方形竪穴建築址1出土遺物(図11)

1～4は轆轤成形のかわらけで、1は大皿、2～4は小皿である。1の復元口径は13.5㎝、底径8.6㎝、器高3.1

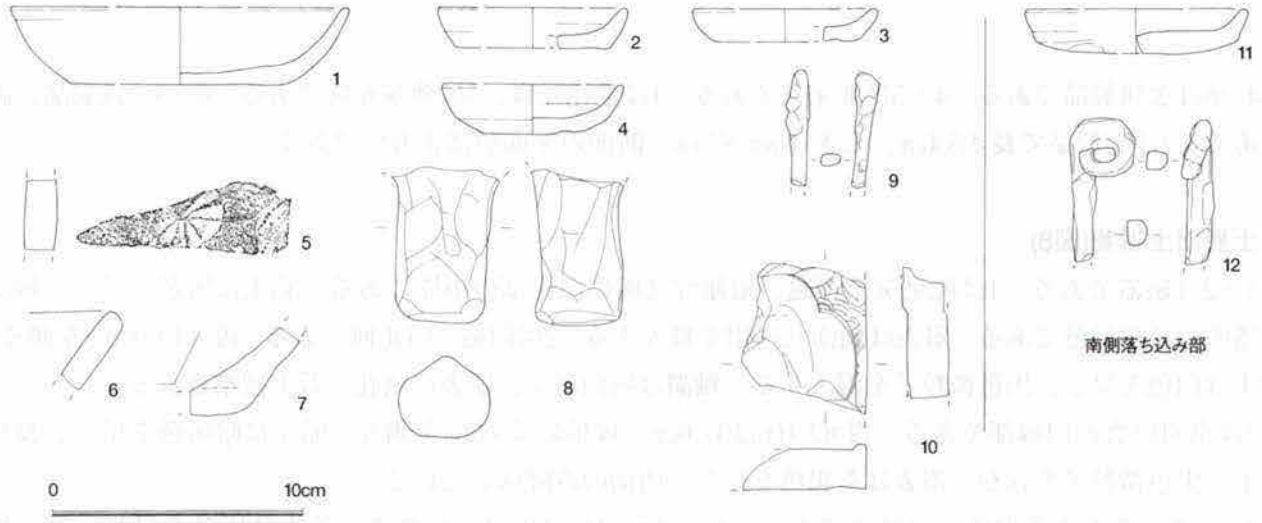


図11　方形竪穴建築址1出土遺物

cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針・白色粒子・赤茶色粒子・微砂を混えキメの細かい精良土である。薄手で、皿状の器型である。小皿の復元口径は7.3cm～7.5cm、底径4cm～6cm、器高1.3cm～2cmを測る。胎土は2・3が肌色系、4が燈色系である。胎土には、白針・雲母・白色粒子・赤茶色粒子・微砂が含まれ、4は微砂の混入が多く粗い。概ね体部に稜を持たず、2・3は皿型、4は碗型である。

5～7は常滑である。5は甕の体部の破片である。胎土は桃色を呈し、長石粒を含み、若干粘性を持つ。菊花の押印文の残片が見られる。6・7は鉢の小片である。6は口縁部である。胎土は赤燈色を呈し、長石粒子を含み、暗灰色の胎芯を残す。器表は両面共に赤燈色である。7は底部である。胎土は黒色を呈し、長石微粒子を含む。器表は赤紫色を呈し、内面に降灰している。体部は内面、外面共に篦状工具による横方向のナデ成形である。底部外面は砂底である。

8はかわらけ質の手焙りの脚部である。長さ6.1cm、太さ3.6cm×2.7cmである。断面は楕円形を呈する。胎土は肌色を呈し、白針・雲母・白色微粒子を含み粉質である。手捻り成形である。

9は鉄製品、釘の断片である。

10は石製品、硯の海部の断片である。海部は四葉になると思われ、その周囲には線刻の青海波文様を意匠している。

11・12は方形竪穴建築址の床面の南側に検出された落ち込み部から出土した遺物である。この落ち込みは出土遺物から見ても方形竪穴建築址1構築以前のものといえる。

11は手づくね成形のかわらけの小皿である。復元口径は9cm、器高1.8cmを測る。胎土は肌色系を呈し、白針・白色粒子・微砂を混える。体部の稜は弱い。

12は鉄製品、掛け金具の頭部である。太さは10cm×8cm前後である。

方形竪穴建築址2(図12)

調査区「区の西側に海抜5.8m前後で検出された。方形竪穴建築址2が方形竪穴建築址3を切る。

方形竪穴建築址2はx2～5・y0～4グリッド内に拡がる。当址の北側、及び西側は調査区外に拡がる。張り出し部と主屋部からなる。検出された掘方規模は南北290cm、東西350cm、深さは確認面より34～63cmを測る。

床面は平坦で、中央部分に2基の土坑6・土坑7が検出された。土坑6の掘方規模は直径80cmを測り、平面形は不整円形を呈する。深さは床面より最大で53cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、1cm大の土丹塊・貝殻細片を多く含む。若干の炭化物も含み、しまりはよい。土坑7の掘方規模は長軸148cm、短軸140cmを測り、平面形はほぼ円形に近い。深さは床面より26cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、1cm～5cm大

の土丹塊・炭化物・貝殻細片を含み、粘性があり、しまりは良好である。土坑6は方形竪穴建築址2覆土中に検出され、方形竪穴建築址2埋没後、2面時期より新しく作られたものである。土坑7は土坑6に切られ、底部付近のみ検出されたが、方形竪穴建築址の床面に作られたようで、用途・目的は、検出状況からは不明である。

また、床面から炭化した根太木痕が検出された。幅15cm～35cmで、床面四周を周る様相で、土台が火災にあった痕跡とも考えられる。

当址は南側に張り出しを有する。東西130cm、南北40cmを測る。出入口の可能性も考慮される。また、東側にはテラス状の広がる段差を持つ。検出規模は南北240cm、東西40cmを測る。床面との比高差は24cmを測る。

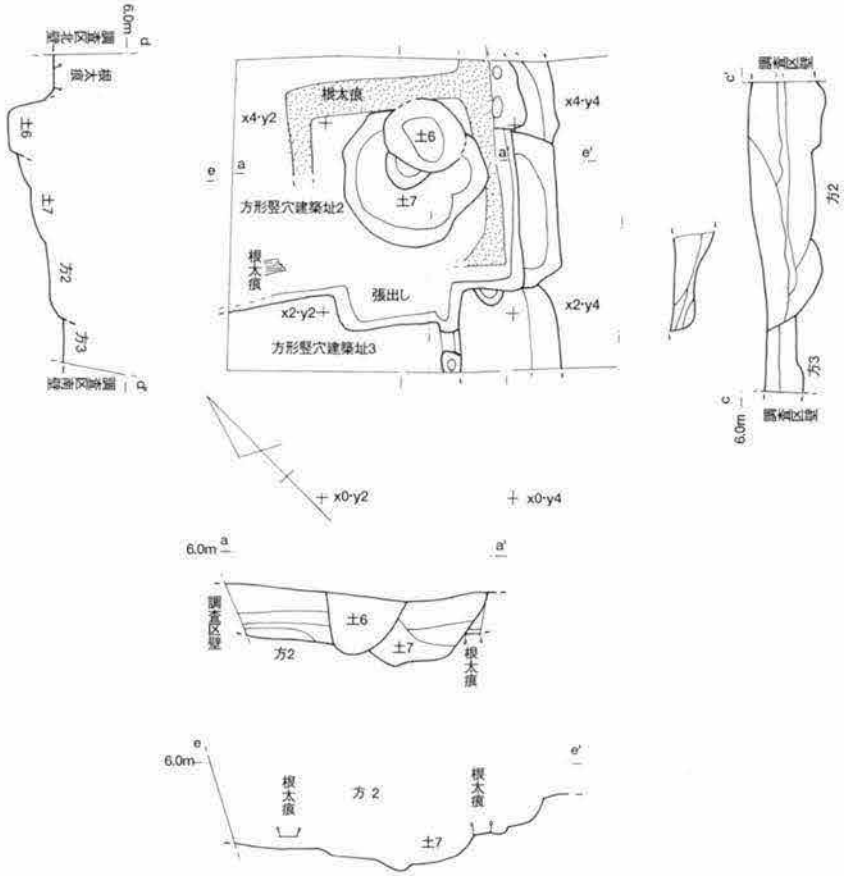


図12　方形竪穴建築址２・３・土壙６・７

覆土は暗褐色粘質土で、炭化物が多く、5cm大の土丹塊。貝殻細片・遺物を含みしまりがある。東西の軸方向はN－49°－Wである

方形竪穴建築址3(図12)

x2・y1～4グリッドで検出された。遺存部分は東西350cm、南北は86cmで、深さは確認面より35cm～45cmを測る。方形竪穴建築址2同様東側に、床面より12cm高いテラス状の広がりを持つ。北部は方形竪穴建築址2に切られ、南・西部は調査区外のため、その全様は不明である。

覆土は上層が暗褐色粘質土で、土丹粒子・貝殻細片・かわらけ細片・炭化物を含み、しまりはさほどない。下層は茶褐色砂質土で、炭化物・貝殻細片を含みしまりをもつ。
東西の軸方向はN－49°－Wである。

方形竪穴建築址2出土遺物(図13～14)

図13・図14－1～34は方形竪穴建築址2覆土上層から出土した遺物である。

図13－1・2は轆轤成形のかわらけの小皿である。1は口径7.6cm、底径5.1cm、器高1.6cm、2は口径7.4cm、底径5.1cm、器高1.4cmを測る。1の胎土は淡燈色を呈し、白針・雲母・白色粒子を含み粉質である。2は赤燈色を呈し、白針・雲母・赤茶色粒子・微砂を交える。共に皿型の形状である。

図13－3～5は磁器である。3は体部外面に蓮弁を配する龍泉窯系青磁の折縁鉢である。復元口径は

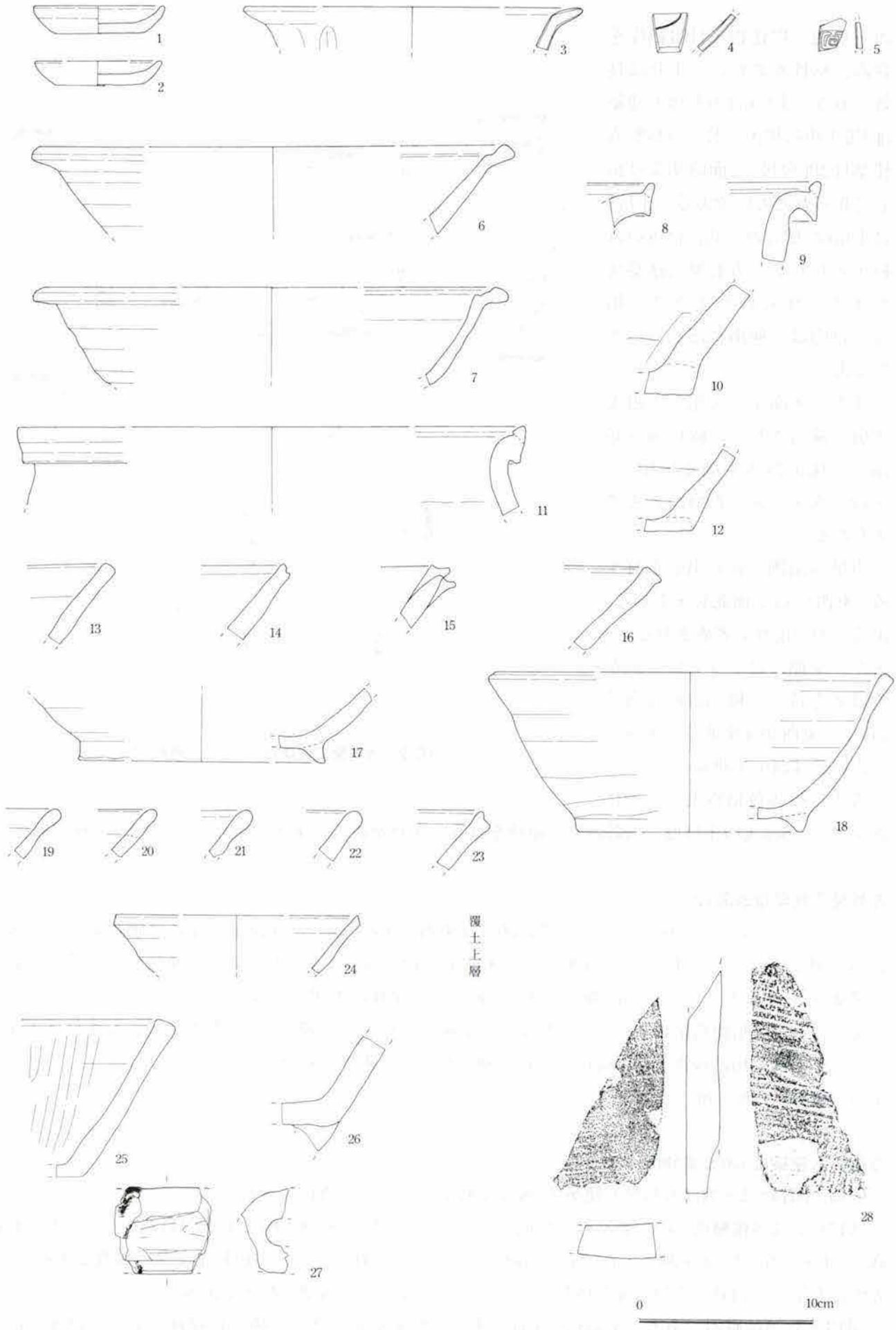


図13　方形竪穴建築址2 出土遺物（1）

18.6cmを測る。胎土は白色、釉調は灰味の青緑色である。厚く施釉されており、光沢は良好である。内外面共に器表は粗く貫入する。4・5は白磁の碗の小片である。4は体部の破片である。胎土は白色、釉調は灰味白色を呈する。内面に箆状施文具で片彫りしている。5は口縁部付近の小片である。胎土は白色、釉調は光沢の良好な緑味の白色を呈する。文様は雷文の印花で、一部分が遺存している。

図13－6・7は瀬戸、灰釉折縁深皿である。6の復元口径は28cmを測る。胎土は白褐色を呈し、釉調は光沢の劣る黄味灰緑色である。全面に刷毛塗りで薄く均一に施釉されているが、体部外面は斑である。器表には小さい気孔が多く観察される。7の復元口径は27.6cmを測る。胎土は灰白色を呈し、釉調は光沢の良好な灰緑色である。器表は細かく密に貫入している。

図13－8～16は常滑である。8～10は甕、11・12は壺、13～16は鉢である。8・9は口縁部である。8の胎土は灰黒色を呈し、長石微粒子を含む。内面は黒色、外面は暗紫褐色を呈し、内面に薄く降灰している。縁帯幅は1.9cmを測り、縁帯の下端は若干下がり気味である。中野編年5型式である。9の胎土は黒色を呈し、長石粒子を多く含む。器表は茶褐色を呈し、口縁内部のみ降灰している。縁帯幅2.2cmを測る。中野編年6a型式である。10の胎土は灰燈色を呈し、長石微粒子・黒色粒子を含む。内面は灰色、外面は褐味灰色である。11は広口壺の口縁部である。復元口径29.4cm、縁帯幅2cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子・黒色粒子を含む。口縁部から体部外面に厚く降灰している。12は鳶口壺の底部の小片である。胎土は灰黒色を呈し、長石粒子を含む。器表は全体にはじけており、様相は明瞭ではないが、体部は暗赤褐色を呈し、内面に降灰している痕跡が観察される。13～16は鉢の口縁部の小片である。13の胎土は燈味桃色を呈し、長石粒子・小石を混入する。体部内面、外面共に灰燈色である。14の胎土は暗黒色を呈し、長石粒子・小石を含む。器表は内外面共に暗紫褐色である。15は片口の部位である。胎土は灰黒色を呈し、長石粒子を含み、中央部に暗燈色の胎芯を残す。内面は茶褐色、外面は赤紫色を呈する。外面にはササラ状の工具で縦方向に成形した痕跡が観察される。16の胎土は褐味黒色を呈し、長石粒子・小石を含む。内面は茶色、外面は暗紫褐色を呈する。口唇端部は12 と広く、平坦である。

図13－17～23は山茶碗窯系捏鉢である。17は底部である。復元底径は14cmを測る。胎土は燈色を呈し、長石・白色軟礫・小石を含む。付け高台で、高台端部は外側に開く。底部内面は磨耗しており、使用痕が観察される。18は一個体が復元された。復元口径は23.2cm、底径13.2cm、器高9.2cmを測る。胎土は灰色を呈し、長石粒子・小石を混入する。内面全体に薄く降灰している。付け高台で、直立気味に貼り付ける。口唇端部は四角く収め、外面底部脇は回転箆削り調整である。19～23は口縁部の小片である。19の胎土は褐味灰色を呈し、長石粒子・黒色粒子を含む。口唇端部～内面に薄く降灰している。20の胎土は白灰色を呈し、長石粒子を多く含み粗い。21の胎土は暗灰色を呈し、長石微粒子を含み、比較的キメ細かい。22・23の胎土は白褐色を呈し、長石粒子を含む。焼成不良である。23の口唇端部は成形不良のためか、段差を持ち、外側が低くなる形状である。

図13－24は山茶碗の口縁部である。復元口径は14.2cmを測る。胎土は暗灰色を呈し、長石粒子を含む。器肉はほぼ均一で、体部の立ち上がりは直線的である。口唇端部は角型を呈し、口縁部外面に降灰を受ける。

図13－25・26は瓦質手焙りである。25は輪花型。小片であるが、口縁から底部まで遺存していた。器高は9.1cmを測る。胎土は灰色を呈し、小石・砂粒を含む。体部両面共に、縦方向の磨きがなされている。体部内面の上半分には煤が付着している。26は脚が付く。胎土は灰色を呈し微砂を混え、粉質である。器表はほぼ全面が剥離しており、様相は掴み難いが、若干遺存している器表の様相から、外面に縦方向の磨きの痕跡が確認され、内面は煤が全体に付着している。

図13－27は鞴の羽口の断片である。残長5.5cm、最大径7.7cmを測る。胎土は肌色を呈し、白色粒子を

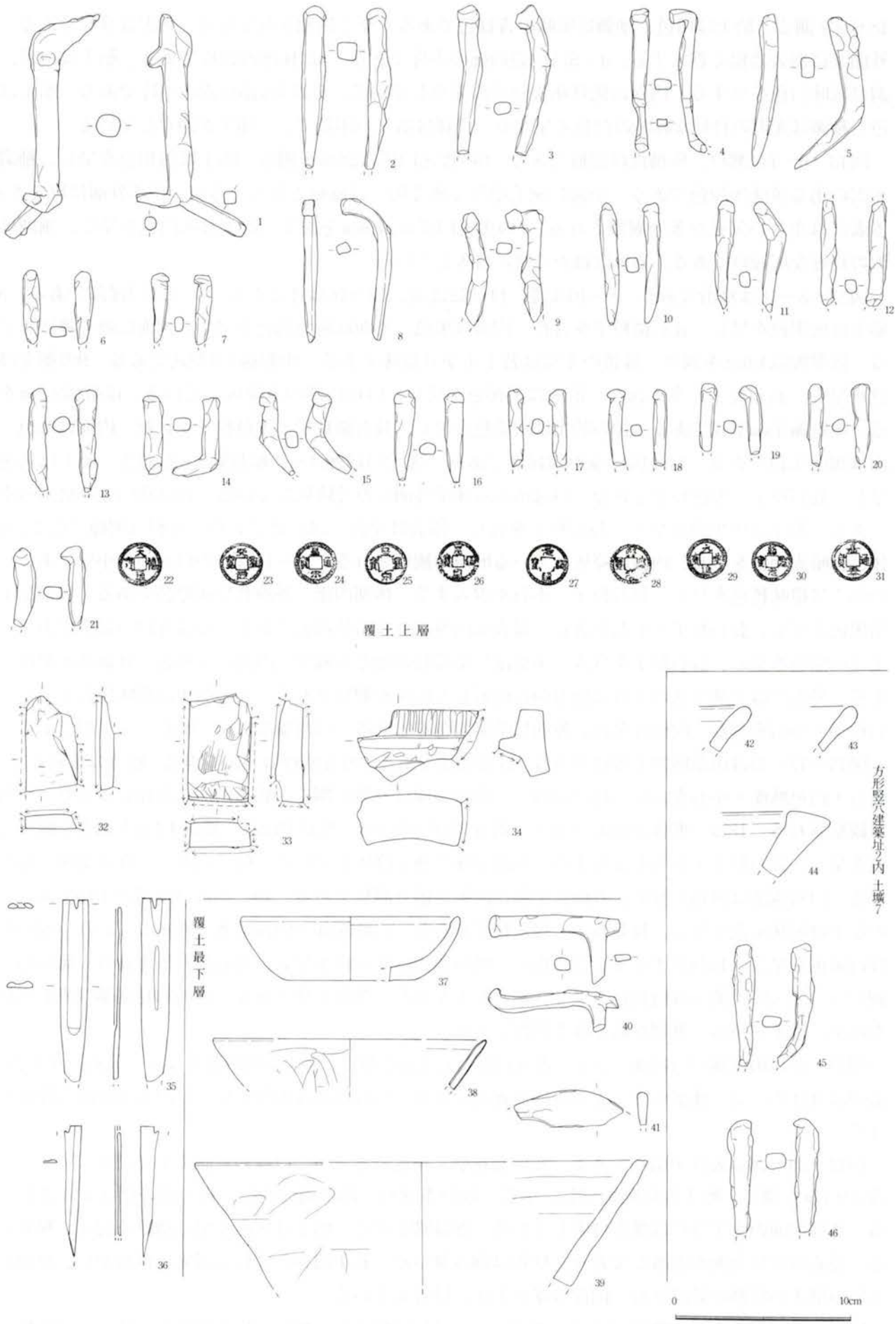


図14　方形竪穴建築址2　出土遺物（2）

含むキメ細かい精良土である。

図13－28は瓦である。厚さは2cmを測る。胎土は暗灰色で、長石粒子を含み硬質である。凸面は布目痕、および、それを篦ナデした痕跡、凹面は細い縄目と、それを篦ナデした痕跡が観察される。

図14—1～31は金属製品である。1～21は鉄製品である。1は錆により膨張した状態の掛金である。図の上端は止め金具の頭部が付いたままの状態で錆びたと思われる。掛金の全長は11cmを測る。2～21は釘である。5・8・10・14は完形品である。22～31は銅銭である。22～30は北宋銭、31は南宋銭である。22は天禧通寶、23は天聖元寶、24～26は皇宋通寶、27は天佑通寶、28は熙寧元寶、29は元豊通寶、30は紹聖元寶、31は嘉泰通寶である。

図14—32～34は石製品である。32・33は砥石である。共に赤褐色を呈する鳴滝産の仕上げ砥である。32は片面が剥離しており、砥面は1面である。残長5.3cm、残厚8cm、巾2.9cmを測る。33の砥面は表裏の2面である。残長5.7cm、厚さ1.5cm、巾3.4cmである。34は滑石鍋の口縁部を小片に切り取った製品であり、2.6cm×6cmを測る。

図14—35・36は骨製品、笄である。共に白褐色の生地に茶褐色の斑点のある材料で製作されており、表面は非常に滑らかである。共に頭頂部に孔を有する基部が遺存している。35の残長は10.3cm、巾1.5cm、厚さは2cm～4cmを測る。裏面にも成形痕がみられ、初作の失敗の痕跡とも考えられる。36は巾、長さ共に半分が遺存した断片である。残長7.7cm、最大残巾1cmを測る。

図14—37～39は覆土最下層から出土した遺物である。

37は轆轤成形のかわらけの大皿である。復元口径は12.6cm、底径7cm、器高3.7cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針・白色軟礫・微砂を含む。焼成は概ね良好である。体部は丸味を持って立ち上がり、口唇端部も若干内傾している。

図14—38は磁器である。龍泉窯系の青磁で、鎬蓮弁文碗の口縁部である。胎土は青味の灰色を呈し、堅緻である。釉調は淡い灰緑色で、光沢は良好である。

図14—39は常滑の鉢の口縁部である。復元口径は26cmを測る。胎土は灰黒色を呈し、長石粒子・石英粒子を含む。体部外面は篦状工具による横方向のナデ成形をし、その上からササラ状工具で縦方向の調整を行う。内面に厚く降灰している。

図14—40・41は金属製品で、共に鉄製品である。40はL字状を呈する。図の下部には木質の柄があった痕跡がみられる。工具の類かとも思われる。全長7.4cm、柄部は3cmを測る。41は火打金の断片である。残長6cm、巾3cmである。

方形竪穴建築址2内土坑7出土遺物(図14－42～46)

42・43は山茶碗窯系捏鉢の口縁部の小片である。42の胎土は赤味茶灰色を呈し、長石粒子を混入し、比較的キメが細かい。灰黒色の胎芯を残す。43の胎土は灰色を呈し、3cm大の長石粒子を含む。内面に薄く降灰している。

44は瓦質鉢型手焙りの口縁部の小

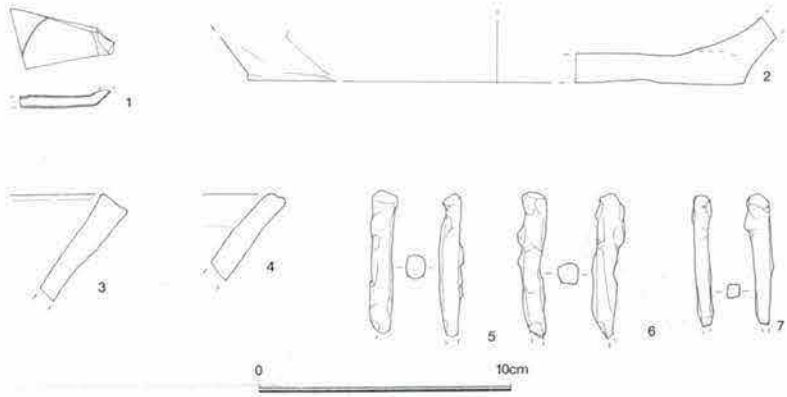


図15　方形竪穴建築址3出土遺物

片である。胎土は淡い肌色を呈し、雲母・白色粒子を含み粗い。灰黒色の胎芯を残し、硬く焼締まる。口唇部は鉤型である。

45・46は金属製品、鉄製釘の断片である。

方形竪穴建築址3出土遺物(図15)

1は磁器で、白磁の皿の底部である。胎土は灰色、釉調は光沢の良い灰白色を呈する。底部内面に篦状工具で片彫りをしている。

2・3は常滑である。2は甕の底部である。復元底径は20cmを測る。胎土は暗灰を呈し、長石粒子・小石を含む。外面は暗灰燈色、内面は茶色を呈する。底部の内面全体に薄く降灰している。3は鉢の口縁部の小片である。胎土は茶黒色を呈し、長石粒子・小石を混入する。口縁部は肥厚し、器表は暗赤褐色を呈する。

4は山茶碗窯系捏鉢の口縁部の小片である。胎土は灰色を呈し、長石粒子・石英粒子を含み、比較的精良である。口唇中央部に1条の凹線が巡る。内面には薄く降灰している。

5～7は金属製品、鉄製釘の断片である。

土坑1(図16)

x3・y8～9グリッド内に海抜5.2mで検出された。上部は後代に削平されている。当址の北側及び東側は調査区外にある。検出された掘方規模は南北80cm、東西90cmを測り、平面形は隅丸方形になると想定される。底部は中央に位置し、平坦である。深さは確認面より最大で28cmを測る。覆土は暗褐色粘質土で、炭化物・貝殻細片を含み、上層は粘性が強く、概ねしまりはある。

土坑2(図15)

x2・y13グリッド内に海抜5.1mで検出された。上部は後代に削平されている。方形竪穴建築址1、及び土坑1と切り合うため、一部のみが検出された。検出された掘方規模は南北36cm、東西90cm、深さは確認面より17cmを測る。

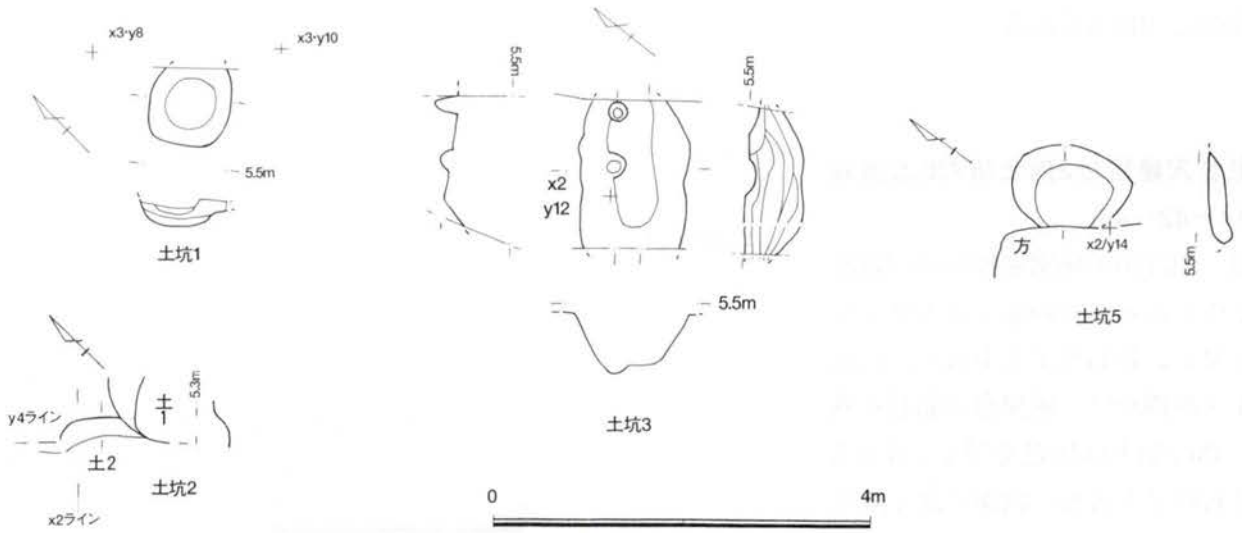


図16　土坑1～3・5

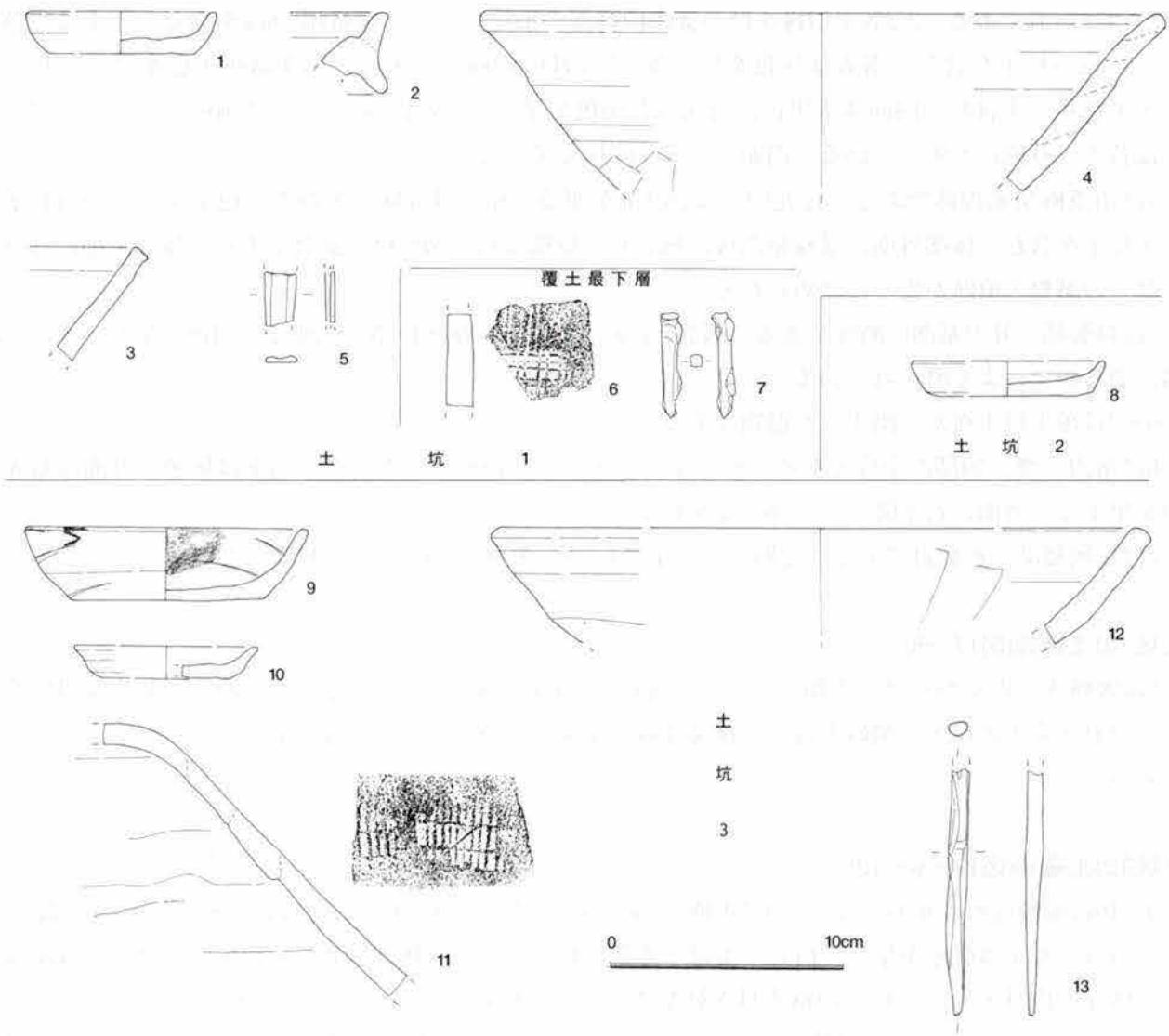


図17　土坑1～3出土遺物

土坑3(図16)

x2～3・y11～12グリッド内に海抜5.5mで検出された。この遺構の南北の両端は調査区外に延びる様相を呈する。検出された掘方規模は南北156cm、東西120cm、深さは確認面より最大で70cmを測る。底部西側にはピット状の落ち込みが2口確認された。掘方規模は25cm前後の円形で、深さは底部より25cm、10cmを測り、一定ではない。覆土は暗褐色粘質土で、炭化物を多く含み、若干のかわらけ片、小土丹を含み、粘性を持ち、比較的しまる。最下層は灰褐色砂質土である。

土坑5(図16)

x2～3・y13～14グリッド内に海抜5.4mで検出された。上層にはピット群があり、その直下に検出された。南側を方形竪穴建築址1と切りあう。検出された掘方規模は南北88cm、東西128cm、深さは確認面より20cmを測る。覆土は暗黄褐色砂質土層で、白褐色砂をブロック状に含みしまりをもつ。

土坑1出土遺物(図17－1～7)

1は轆轤成形のかわらけの小皿である。復元口径は8.2cm、底径6.4cm、器高1.8cmを測る。胎土は燈色

を呈し、白針・微砂・雲母を含む。体部中央に明瞭な稜線を有する。

2・3は常滑である。2はN字口縁を持つ甕の口縁部の小片である。縁帯幅3.6cmを測る。胎土は燈色を呈し、長石粒子を含む。器表は灰色を呈する。3は鉢の口縁部である。胎土は暗灰色を呈し、長石粒子・黒色粒子を含む。内面は茶黒色、外面は茶褐色を呈する。器肉は均一で、8cm前後と薄く、口唇端部は若干、外側に拡張している。内面には薄く降灰している。

4は山茶碗窯系捏鉢である。復元口径は29.4cmを測る。胎土は赤味を帯びた灰色を呈し、長石粒子・黒色粒子を含む。体部外面には輪積み後に施された轆轤成形の調整痕が顕著である。体部下部には回転篦削りの調整の痕跡が僅かに認められる。

5は骨製品、笄の基部の断片である。残長2.1cm、巾1.3cm、厚さ1～3 を測る。白色を呈し、表面は非常に滑らかで、よく磨かれている。

6・7は覆土最下層から出土した遺物である。

6は常滑の甕、胴部の小片である。胎土は灰色を呈し、長石粒子を含む。内面は灰色、外面は暗赤褐色を呈する。外面に若干降灰し、押印文を有する。

7は金属製品、鉄製釘である。完形品で、全長4.6cm、太さは5cm×5cmを測る。

土坑2出土遺物(図17－8)

8は轆轤成形のかわらけの小皿である。復元口径8.3cm、底径6cm、器高1.5cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針・赤茶色粒子・微砂を含む。体部は直立気味に立ち上がり、口径と底径の比率の小さいタイプである。

土坑3出土遺物(図17－9～12)

9・10は轆轤成形のかわらけで、9は大皿、10は小皿である。9の復元口径は12.3cm、底径8cm、器高3.1cmを測る。胎土は肌色を呈し、白針・雲母・赤茶色粒子を含む。体部は底部脇がすぼまり、口縁部は開く。体部の内外面共に、粘土の継ぎ目が観察される。灯明皿である。小皿の復元口径は7.9cm、底径5.6cm、器高1.5cmを測る。胎土は燈色を呈し、白針・雲母・赤茶色粒子・微砂を含む。大皿と同様に腰がすぼまり、口縁部は開くが、口唇端部は若干、端反る。

11・12は常滑である。11は甕の破片で、肩～胴部にかけての部位である。胎土は淡燈色を呈し、長石粒子を含む。体部の内面は茶灰色、外面は暗赤褐色を呈し、器表に厚く降灰し、押印文を有する。12は鉢である。復元口径は28.2cmを測る。胎土は淡燈色を呈し、長石粒子・石英粒子・黒色粒子を含み、軟質である。内面は茶褐色、外面は暗赤褐色を呈する。口縁部は角張るが、両端部に面取りが施されており、丸く感じられる。内面に軽く降灰を受ける。

13は骨製品である。形状から、笄の未完成品で、先端部のみが成形された状態であると思われる。素材は茶灰色を呈し、表面は滑らかである。残長10.5cm、太さは5cm×8cmである。

2面出土遺物(図18)

1は龍泉窯系の青磁劃花文碗で、口縁部の小片である。胎土は白灰色を呈し、黒色粒子を含む。釉調は光沢のある緑味灰褐色を呈する。体部外面は粗く貫入する。2は鉄製品、釘である。

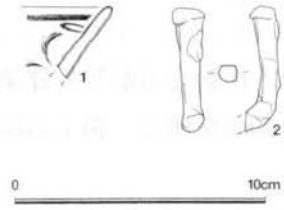


図18　2面出土遺物

第4章　まとめ

今回の調査では中世層上層は近世以降に削平・撹乱されていたものの、中世2時期の遺構群が確認された。

第2面

2面は13世紀後半～14世紀初頭にかけての方形竪穴建築址を中心とした遺構群が検出された。現在調査区西際側を通っている道路が鎌倉時代からあったものかどうかは不明だが、調査地点の北側に東西方向に走る県道鎌倉・葉山線は鎌倉時代、大町大路と呼ばれ、古くは古東海道の道筋であったといわれ、律令期から現在に至るまで鎌倉から名越を経て逗子・横須賀方面に抜ける基幹道路として重要な役割を果たしている。さて、本調査区はこの大町大路から程近い場所に位置するわけだが、検出された遺構群の軸線方向は大町大路とは一致しない。どちらかといえば西側を南北方向に通る道路に並行するわけだが、この道路も先に触れたように鎌倉時代からあったものかどうかは不明な上、調査区を越した南ですぐに西方向に若干曲がっていて直線ではない。しかし、今回同緊急報告書内に掲載されている同じ道路斜向かいの下馬周辺遺跡（鎌倉市大町二丁目975番6地点）の遺構群の軸線方向がその角度を変えた道路にほぼ平行している事から、この道路が当時から規模の大小はあれ、ここに存在し、地割に何らかの影響を与えていた可能性はある。

第1面

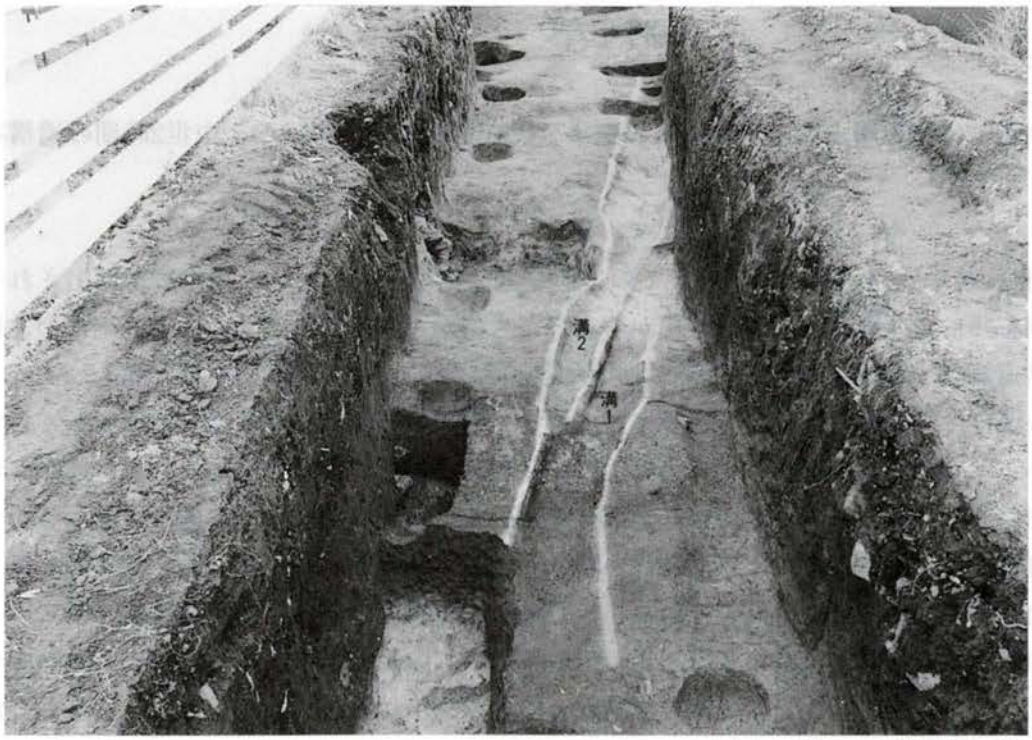
1面は調査区東部に検出された。時期は14世紀前半～中頃であろう。遺構は溝2条である。1面は近世以後に削平され、遺構は本来の深さや幅などの形状を保っていない。ただし、2面に見られた方形竪穴建築址などの大型の遺構は検出されず、上層が撹乱された事を考慮しても、土地利用の様相の変化が見受けられる。溝2条は2面検出の遺構群の軸線方向を踏襲していず、遺構の密度も疎である。

また、第1章に記した様に周辺遺跡からは古代の遺構や遺物が出土しているが、当調査区においては遺構および遺物は検出されなかった。

今回の調査では調査区の面積や形状等の制約があったため新たな発見はなかったものの、鎌倉時代の当地の利用法が、方形竪穴建築址が検出されたこと等、この「米町」という商業或は町屋の地域であることと矛盾のない結果が得られた。また、調査区西際側を通る道路の存在の可能性が僅かながら指摘できた事は発見といえよう。今後、周辺調査によりさらなる明確な資料が発見される事を期待している。

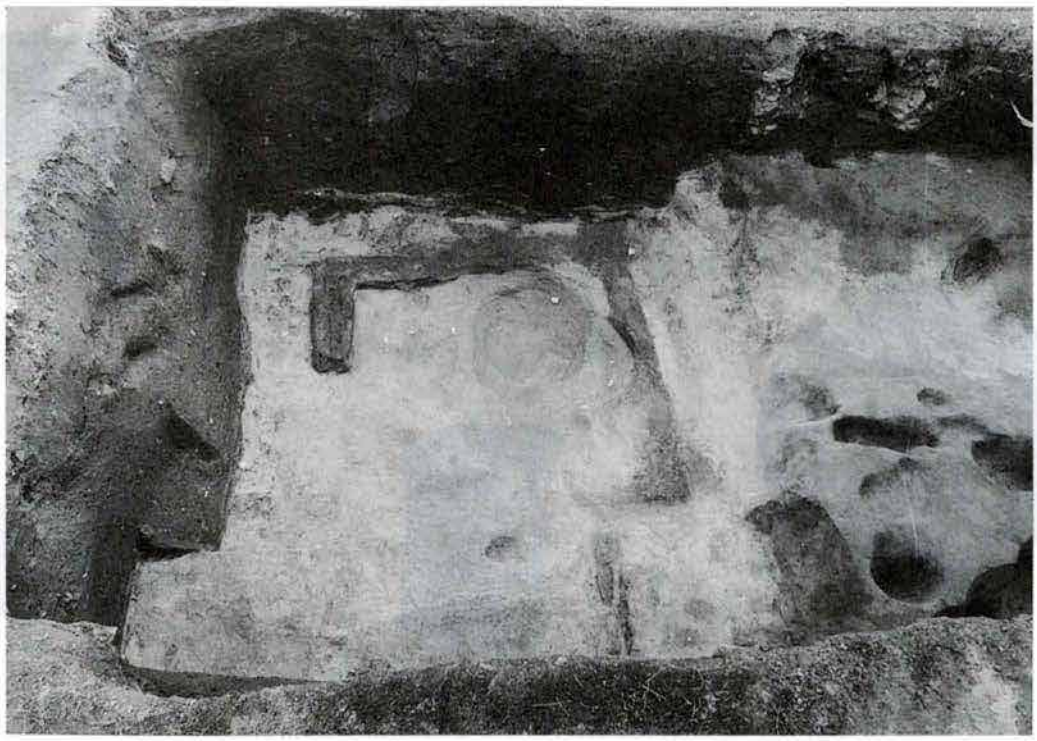
参考文献
『鎌倉事典』白井永二編　平成4年5月10日発行　東京堂出版

図版1

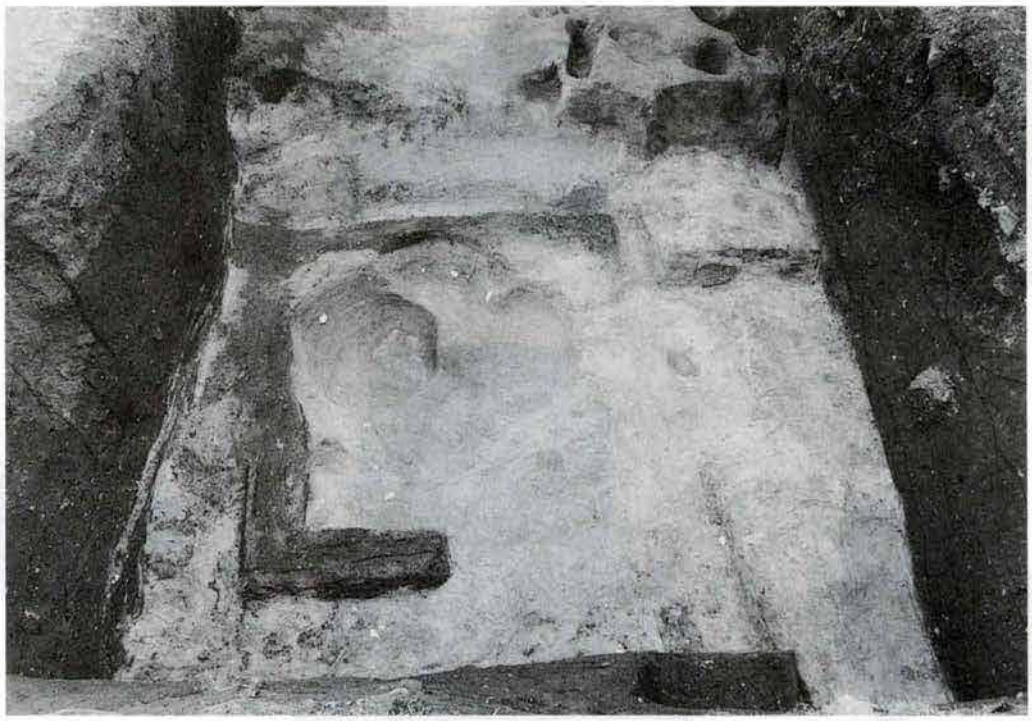


▲A.　溝1・2（北西から）

▲B.　方形竪穴建築址1　土坑1・2（南から）

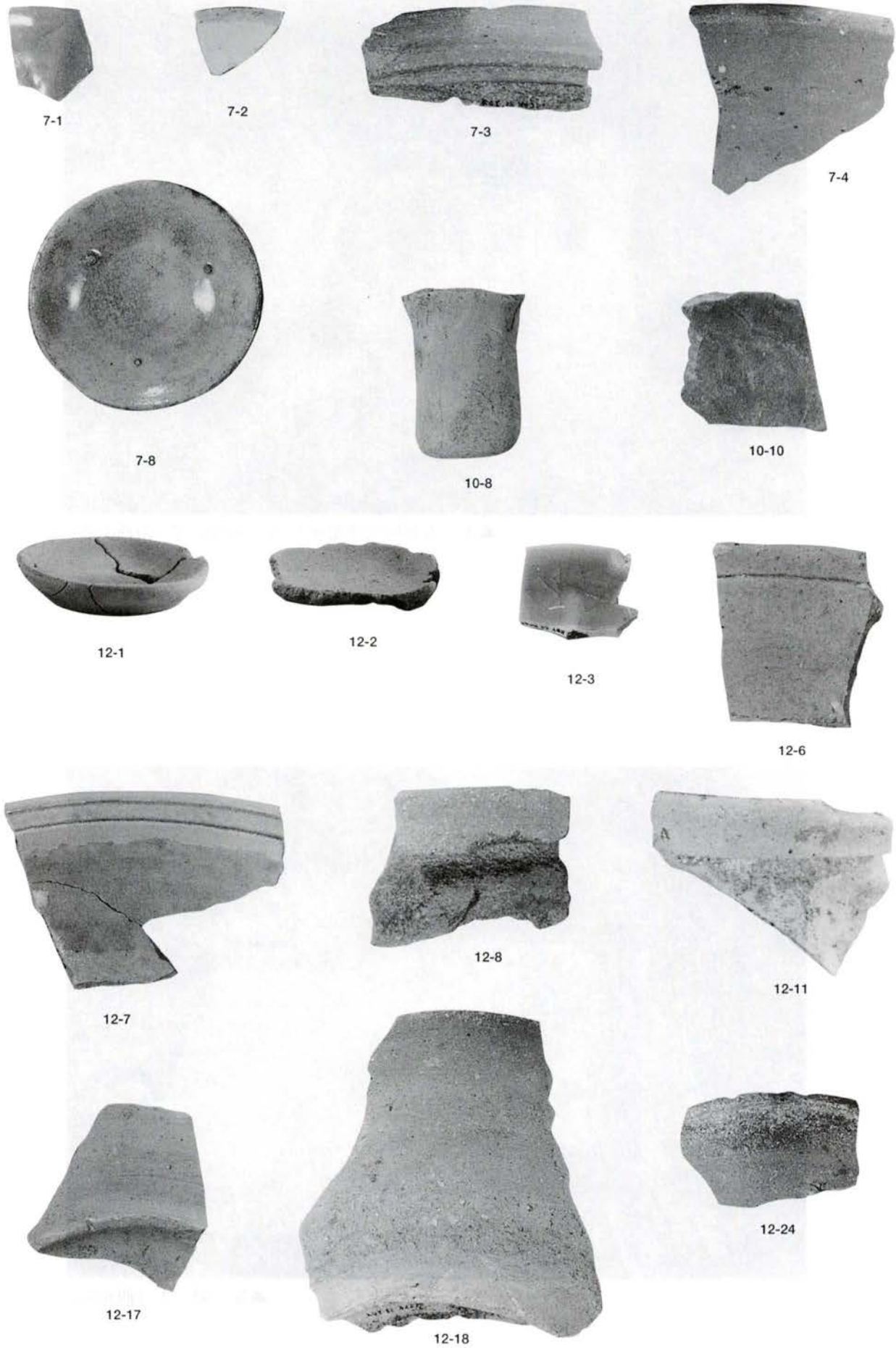


▲A.　方形竪穴建築址2・3　土坑6・7（南西から）



▲B.　同　上（西から）

図版 3


7-1
7-2
7-3
7-4
7-8
10-8
10-10
12-1
12-2
12-3
12-6
12-7
12-8
12-11
12-17
12-18
12-24

出土遺物（1）

12-27

13-35

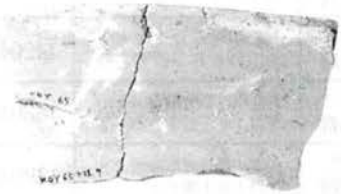
13-36

13-38

最下層

13-39

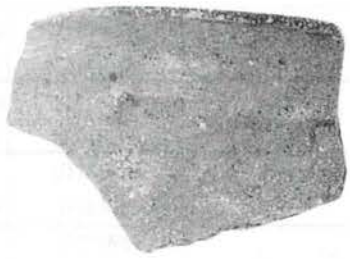
16-4


13-44

16-9

16-13

16-8


16-12

17-1

出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成１７年度調査報告
巻次	２２（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	原廣志・宇都洋平／馬淵和雄・鍛冶屋勝二／熊谷満／福田誠・鈴木絵美／馬淵和雄・鍛冶屋勝二・鈴木弘太／降矢順子・斉木秀雄／宗臺秀明／森孝子／汐見一夫・小泉衣理／滝澤晶子・森孝子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市極楽寺三丁目３５８番外	14204	291	35°30′41″	139°52′86″	20021202～20030206	75.88	個人専用住宅（地下室）
にしのだいいせき 西ノ台遺跡	神奈川県鎌倉市台字西ノ台１５９５番外	14204	378	35°33′63″	139°53′90″	20030411～20030502	35.15	個人専用住宅
くぼうやしきあと 公方屋敷跡	神奈川県鎌倉市浄明寺四丁目２７３番	14204	268	35°31′68″	139°57′73″	20021202～20030206	73.13	個人専用住宅（杭基礎構造）
こうみょうじきゅうけいだいいせい 光明寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目８５５番２１外	14204	316	35°29′97″	139°55′66″	20030430～20030705	77.00	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目１６１番３３の一部	14204	242	35°32′3″	139°55′53″	20030501～20030630	24.00	個人専用住宅（杭基礎構造）
じょうみょうじきゅうけいだいいせい 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市浄明寺三丁目１０１番１３	14204	408	35°31′78″	139°57′42″	20030509～20030611	40.00	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市由比ガ浜一丁目１２７番１	14204	242	35°31′29″	139°55′4″	20030610～20030709	30.00	個人専用住宅
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市大町二丁目９７５番６	14204	200	35°31′13″	139°55′50″	20030715～20030806	25.00	個人専用住宅
ようふうくじあと 永福寺跡	神奈川県鎌倉市二階堂字亀ヶ渕２４７番１３	14204	61	35°31′66″	139°55′26″	20030910～20031014	42.55	個人専用住宅
こめまちいせき 米町遺跡	神奈川県鎌倉市大町二丁目９２２番７外	14204	245	35°31′13″	139°55′53″	20030809～20030922	42.55	個人専用住宅

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	土壙、溝跡、柱穴等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、金属製品等	
にしのだいいせき 西ノ台遺跡	郡市	鎌倉時代～室町時代	土壙等		
くぼうやしきあと 公方屋敷跡	郡市	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物跡、礎石建物,溝跡、柱穴等	かわらけ、国産陶器、金属製品、石製品	
こうみょうじきゅうけいだいいせい 光明寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	網代壁建物跡、道路跡、土壙等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品吉備系・瀬戸内系土器	碇石の出土
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	郡市	古代～中世前期	竪穴住居跡、方形竪穴建築址等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器等	
じょうみょうじきゅうけいだいいせい 浄妙寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	土壙、柱穴、溝跡、井戸跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品金属製品、石製品	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	郡市	室町時代～江戸時代	土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	郡市	鎌倉時代～室町時代	道路状遺構、柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品金属製品、石製品	
ようふうくじあと 永福寺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物跡、土壙、	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品	
こめまちいせき 米町遺跡	郡市	鎌倉時代～室町時代	道路状遺構、柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品金属製品、石製品	

報　告　書　抄　録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成１７年度調査報告
巻次	２２（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	原廣志・宇都洋平／馬淵和雄・鍛冶屋勝二／熊谷満／福田誠・鈴木絵美／馬淵和雄・鍛冶屋勝二・鈴木弘太／降矢順子・斉木秀雄／宗臺秀明／森孝子／汐見一夫・小泉衣理／滝澤晶子・森孝子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市極楽寺三丁目３５８番外	14204	291	35°30′41″	139°52′86″	20021202～20030206	75.88	個人専用住宅（地下室）
にしのだいいせき 西ノ台遺跡	神奈川県鎌倉市台字西ノ台１５９５番外	14204	378	35°33′63″	139°53′90″	20030411～20030502	35.15	個人専用住宅
くぼうやしきあと 公方屋敷跡	神奈川県鎌倉市浄明寺四丁目２７３番	14204	268	35°31′68″	139°57′73″	20021202～20030206	73.13	個人専用住宅（杭基礎構造）
こうみょうじきゅうけいだいいせい 光明寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市材木座六丁目８５５番２１外	14204	316	35°29′97″	139°55′66″	20030430～20030705	77.00	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市雪ノ下一丁目１６１番３３の一部	14204	242	35°32′3″	139°55′53″	20030501～20030630	24.00	個人専用住宅（杭基礎構造）
じょうみょうじきゅうけいだいいせい 浄妙寺旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市浄明寺三丁目１０１番１３	14204	408	35°31′78″	139°57′42″	20030509～20030611	40.00	個人専用住宅（地盤の柱状改良）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市由比ガ浜一丁目１２７番１	14204	242	35°31′29″	139°55′4″	20030610～20030709	30.00	個人専用住宅
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	神奈川県鎌倉市大町二丁目１９７５番６	14204	200	35°31′13″	139°55′50″	20030715～20030806	25.00	個人専用住宅
ようふくじあと 永福寺跡	* 神奈川県鎌倉市二階堂字~~亀ヶ洲~~亀ケ洲２４７番１３	14204	61	35°31′66″	139°55′26″	20030910～20031014	42.55	個人専用住宅
こめまちいせき 米町遺跡	* 神奈川県鎌倉市大町二丁目~~二二~~九九二番７外	14204	245	35°31′13″	139°55′53″	20030809～20030922	* ~~42.55~~ 35.00	個人専用住宅

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ごくらくじきゅうけいだいいせき 極楽寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	土壙、溝跡、柱穴等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、金属製品等	
にしのだいいせき 西ノ台遺跡	* ~~郡市~~ 都市	鎌倉時代～室町時代	土壙等		
くぼうやしきあと 公方屋敷跡	* ~~郡市~~ 都市	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物跡、礎石建物,溝跡、柱穴等	かわらけ、国産陶器、金属製品、石製品	
こうみょうじきゅうけいだいいせい 光明寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	網代壁建物跡、道路跡、土壙等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品 吉備系・瀬戸内系土器	礎石の出土
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	* ~~郡市~~ 都市	古代～中世前期	竪穴住居跡、方形竪穴建築址等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器等	
じょうみょうじきゅうけいだいいせい 浄妙寺旧境内遺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	土壙、柱穴、溝跡、井戸跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品 金属製品、石製品	
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	* ~~郡市~~ 都市	室町時代～江戸時代	土壙、柱穴等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品	
げばしゅうへんいせき 下馬周辺遺跡	* ~~郡市~~ 都市	鎌倉時代～室町時代	道路状遺構、柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品 金属製品、石製品	
ようふくじあと 永福寺跡	社寺	鎌倉時代～室町時代	掘立柱建物跡、土壙、	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、石製品	
こめまちいせき 米町遺跡	* ~~郡市~~ 都市	鎌倉時代～室町時代	道路状遺構、柱穴、土壙、溝跡等	かわらけ、国産陶器、舶載陶磁器、木製品 金属製品、石製品	

＊令和6年1月12日報告書本文の内容に訂正(鎌倉市教育委員会)

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　22
平成17年度　発掘調査報告（第２分冊）

発行日　平成18年３月31日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　有限会社 駒瀬印刷所